

そで が う ら し じ ょ う づ け や ま い せ き や え む た い せ き
袖ヶ浦市定使山遺跡・八重門田遺跡
し み ず が わ だ い い せ き
清水川台遺跡(2)

— 袖ヶ浦市の森工業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —





航空写真〈八重門田遺跡〉(北から)



航空写真〈清水川台遺跡(2)〉(南西から)



黒曜石 原産地 分析石器



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、袖ヶ浦市の森工業団地整備事業に伴って実施した袖ヶ浦市定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡（2）の発掘調査報告書です。今回の調査では、特に八重門田遺跡の古墳時代中期の集落から石製模造品を製作する際に生じる滑石剥片や未成品が多量に出土し、製作工房の存在が明らかになりました。周辺の調査事例と合わせ、当地域の集落の様相を知る上で貴重な成果を得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成30年3月

千葉県教育委員会
文化財課長 萩原 恭一

凡 例

- 1 本書は、千葉県商工労働部企業立地課による袖ヶ浦椎の森工業団地整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を取録したものである。

定使山遺跡 袖ヶ浦市代宿字定使山 463 ほか (遺跡コード 229-040)
八重門田遺跡 袖ヶ浦市久保田代宿入会地字木ノ根坂台 11-1-5 ほか (遺跡コード 229-041)
清水川台遺跡 (2) 袖ヶ浦市久保田代宿入会地字二ツ池台 9-1 ほか (遺跡コード 229-017)
- 3 今回の発掘調査及び報告書作成に至る整理作業は、平成 25 年度から千葉県商工労働部企業立地課の依頼を受け千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。年度ごとの調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者は、第 1 章第 1 節に記した。
- 4 本書の執筆は、第 1 章と第 2 章の縄文時代以降について牧 武尊、第 2 章～第 4 章の旧石器時代について落合章雄、第 3 章と第 4 章の縄文時代について安井健一、第 3 章の古墳時代以降について黒沢 崇、第 4 章の古墳時代以降について金丸 誠が主に担当した。また、第 3 章第 5 節の SM-001 出土の人骨の分析及び原稿執筆については渡辺 新氏に、附章の黒曜石産地分析については (株) パレオ・ラボに委託した。
- 5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、袖ヶ浦市教育委員会、千葉県商工労働部企業立地課、上守秀明、千葉南菜子、石井友菜ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 6 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第 1 図 袖ヶ浦市発行 袖ヶ浦市地形図 No.9・10・14・15 1/2,500 平成 5 年を編集
第 2 図 参謀本部陸軍部測量局作成 迅速測図「上村」を編集
第 4 図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「姉崎」平成 22 年を編集
- 7 本書で使用した地図の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位は全て座標北である。
- 8 土器の観察表に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖 2007 年版」に基づいている。
- 9 図版 1 の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和 45 年撮影のものを使用した。
- 10 遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンなどの用例は以下のとおりである。挿図中の「K」は攪乱の略である。また、赤彩された土器については実測図にその範囲を赤で示し、胎土に繊維が含まれる土器片には断面図に●を付けた。



山砂・粘土



焼土



黒色処理



須恵器断面



硬化面範囲

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 事業の経緯と調査概要	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	6
第2章 定使山遺跡	13
第1節 調査の概要	13
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	17
第3節 縄文時代以降の遺構と遺物	34
第3章 八重門田遺跡	38
第1節 調査の概要	38
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	44
第3節 縄文時代の遺構と遺物	87
第4節 古墳時代以降の遺構と遺物	105
第5節 SM-001 出土人骨所見	177
第4章 清水川台遺跡（2）	197
第1節 調査の概要	197
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	200
第3節 縄文時代以降の遺構と遺物	323
第5章 総括	356
第1節 旧石器時代	356
第2節 縄文時代	358
第3節 古墳時代以降	360
附章 八重門田遺跡および清水川台遺跡（2）出土の黒曜石製石器の産地推定	368
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 事業範囲と調査対象遺跡	2	第30図 第1ブロック遺物 (2)	47
第2図 周辺地形図 (迅速測図)	5	第31図 第2ブロック分布	48
第3図 立川ローム層堆積状況	7	第32図 第2ブロック遺物 (1)	49
第4図 周辺の遺跡	9	第33図 第2ブロック遺物 (2)	50
		第34図 第3ブロック分布 (1)	51
定使山遺跡		第35図 第3ブロック分布 (2)	52
第5図 上層トレンチ配置及び遺構分布	14	第36図 第3ブロック遺物 (1)	53
第6図 下層グリッド配置及び拡張範囲	15	第37図 第3ブロック遺物 (2)	54
第7図 旧石器ブロック分布図	16	第38図 第4ブロック遺物	55
第8図 第1ブロック分布	18	第39図 第4ブロック分布	57
第9図 第1ブロック遺物 (1)	19	第40図 第5ブロック遺物	58
第10図 第1ブロック遺物 (2)	20	第41図 第5ブロック分布	59
第11図 第1ブロック遺物 (3)	21	第42図 第6ブロック分布 (1)	60
第12図 第1ブロック遺物 (4)	22	第43図 第6ブロック分布 (2)	61
第13図 第1ブロック遺物 (5)	23	第44図 第6ブロック遺物 (1)	62
第14図 第2ブロック分布	25	第45図 第6ブロック遺物 (2)	63
第15図 第2ブロック遺物 (1)	26	第46図 第6ブロック遺物 (3)	64
第16図 第2ブロック遺物 (2)	27	第47図 第6ブロック遺物 (4)	65
第17図 第3ブロック分布	29	第48図 第6ブロック遺物 (5)	66
第18図 第3ブロック遺物 (1)	30	第49図 第6ブロック遺物 (6)	67
第19図 第3ブロック遺物 (2)	31	第50図 第7ブロック分布 (1)	70
第20図 単独出土遺物	32	第51図 第7ブロック分布 (2)	71
第21図 SK-001・002・004	35	第52図 第7ブロック遺物 (1)	72
第22図 SK-005	36	第53図 第7ブロック遺物 (2)	73
第23図 SX-001	36	第54図 第7ブロック遺物 (3)	74
第24図 遺構外出土遺物	37	第55図 第7ブロック遺物 (4)	75
		第56図 第7ブロック遺物 (5)	76
		第57図 第8ブロック分布	81
八重門田遺跡		第58図 第8ブロック遺物	82
第25図 上層トレンチ配置・本調査範囲及び 遺構分布	39	第59図 第9ブロック遺物	82
第26図 下層グリッド配置及び拡張範囲	40	第60図 第9ブロック分布	83
第27図 旧石器時代ブロック分布図	43	第61図 第10ブロック分布	84
第28図 第1ブロック分布	45	第62図 第10ブロック遺物	85
第29図 第1ブロック遺物 (1)	46	第63図 単独出土遺物	85

第 64 図	炉穴 (1).....	88	第 101 図	SI-008	133
第 65 図	炉穴 (2).....	90	第 102 図	SI-009 (1)	134
第 66 図	陥穴 (1).....	92	第 103 図	SI-009 (2)	135
第 67 図	陥穴 (2).....	94	第 104 図	SI-010 (1)	136
第 68 図	陥穴 (3).....	96	第 105 図	SI-010 (2)	137
第 69 図	その他の土坑 (1).....	97	第 106 図	SI-010 (3)	138
第 70 図	その他の土坑 (2).....	98	第 107 図	SI-011	139
第 71 図	草創期遺物	100	第 108 図	SI-012	140
第 72 図	グリッド等出土縄文土器	102	第 109 図	SI-013	141
第 73 図	グリッド等出土縄文時代石器	104	第 110 図	SI-014	142
第 74 図	SI-001	105	第 111 図	SI-015	143
第 75 図	SI-002 (1)	106	第 112 図	SI-016	144
第 76 図	SI-002 (2)	107	第 113 図	SI-017	145
第 77 図	SI-002 (3)	108	第 114 図	SI-018	146
第 78 図	SI-002 (4)	109	第 115 図	SI-019 (1)	147
第 79 図	SI-002 (5)	110	第 116 図	SI-019 (2)	148
第 80 図	SI-003 (1)	111	第 117 図	SI-021 (1)	149
第 81 図	SI-003 (2)	112	第 118 図	SI-021 (2)	150
第 82 図	SI-003 (3)	113	第 119 図	SI-022	151
第 83 図	SI-003 (4)	114	第 120 図	SI-023	152
第 84 図	SI-004 (1)	116	第 121 図	SI-024	153
第 85 図	SI-004 (2)	117	第 122 図	SI-025	154
第 86 図	SI-004 (3)	118	第 123 図	SI-026 (1)	155
第 87 図	SI-004 (4)	119	第 124 図	SI-026 (2)	156
第 88 図	SI-004 (5)	120	第 125 図	SI-027	157
第 89 図	SI-004 (6)	121	第 126 図	SI-028	158
第 90 図	SI-005 (1)	122	第 127 図	SI-029	159
第 91 図	SI-005 (2)	123	第 128 図	SI-030 (1)	161
第 92 図	SI-005 (3)	124	第 129 図	SI-030 (2)	162
第 93 図	SI-005 (4)	125	第 130 図	SI-031	163
第 94 図	SI-005 (5)	126	第 131 図	SI-032 (1)	164
第 95 図	SI-006	127	第 132 図	SI-032 (2)	165
第 96 図	SI-007 (1)	128	第 133 図	SI-033	166
第 97 図	SI-007 (2)	129	第 134 図	SI-034	167
第 98 図	SI-007 (3)	130	第 135 図	SZ-001	168
第 99 図	SI-007 (4)	131	第 136 図	SH-001	169
第 100 図	SI-007 (5)	132	第 137 図	方形・円形区画墓 (1)	170

第138図	方形・円形区画墓(2)……………	172	第167図	第8ブロック遺物(2)……………	225
第139図	方形・円形区画墓(3)……………	173	第168図	第8ブロック遺物(3)……………	226
第140図	SM-001……………	175	第169図	第8ブロック遺物(4)……………	227
第141図	SM-001出土遺物……………	176	第170図	第9ブロック遺物……………	231
第142図	遺構外出土遺物……………	176	第171図	第9ブロック分布……………	232
第143図	埋葬状態復元図……………	177	第172図	第10ブロック分布……………	236
本文図版a	SM-001出土人骨 頭骨……………	180	第173図	第10ブロック遺物(1)……………	237
本文図版b	SM-001出土人骨 体幹骨・上肢骨…	181	第174図	第10ブロック遺物(2)……………	238
本文図版c	SM-001出土人骨 下肢骨……………	182	第175図	第11ブロック分布(1)……………	239
本文図版d	SM-001出土人骨 観察所見(1) ……	183	第176図	第11ブロック分布(2)……………	240
本文図版e	SM-001出土人骨 観察所見(2) ……	184	第177図	第11ブロック分布(3)……………	241
			第178図	第11ブロック遺物(1)……………	242
			第179図	第11ブロック遺物(2)……………	243
			第180図	第11ブロック遺物(3)……………	244
			第181図	第11ブロック遺物(4)……………	245
			第182図	第11ブロック遺物(5)……………	246
			第183図	第11ブロック遺物(6)……………	247
			第184図	第11ブロック遺物(7)……………	248
			第185図	第11ブロック遺物(8)……………	249
			第186図	第11ブロック遺物(9)……………	250
			第187図	第11ブロック遺物(10)……………	251
			第188図	第11ブロック遺物(11)……………	252
			第189図	第11ブロック遺物(12)……………	253
			第190図	第11ブロック遺物(13)……………	254
			第191図	第11ブロック遺物(14)……………	255
			第192図	第11ブロック遺物(15)……………	256
			第193図	第11ブロック遺物(16)……………	257
			第194図	第11ブロック遺物(17)……………	258
			第195図	第11ブロック遺物(18)……………	259
			第196図	第11ブロック遺物(19)……………	260
			第197図	第11ブロック遺物(20)……………	261
			第198図	第11ブロック遺物(21)……………	262
			第199図	第11ブロック遺物(22)……………	263
			第200図	第11ブロック遺物(23)……………	264
			第201図	第11ブロック遺物(24)……………	265
			第202図	第11ブロック遺物(25)……………	266
			第203図	第11ブロック遺物(26)……………	267
清水川台遺跡(2)					
第144図	上層トレンチ配置・本調査範囲及び遺構 分布……………	198			
第145図	下層グリッド配置及び拡張範囲……………	199			
第146図	旧石器ブロック分布図……………	201			
第147図	第1ブロック分布……………	202			
第148図	第1ブロック遺物……………	203			
第149図	第2ブロック分布……………	205			
第150図	第2ブロック遺物(1)……………	206			
第151図	第2ブロック遺物(2)……………	207			
第152図	第3ブロック分布……………	209			
第153図	第3ブロック遺物(1)……………	210			
第154図	第3ブロック遺物(2)……………	211			
第155図	第4ブロック分布……………	212			
第156図	第4ブロック遺物(1)……………	213			
第157図	第4ブロック遺物(2)……………	214			
第158図	第5ブロック分布……………	216			
第159図	第5ブロック遺物……………	217			
第160図	第6ブロック分布……………	218			
第161図	第6ブロック遺物……………	219			
第162図	第7ブロック分布……………	220			
第163図	第7ブロック遺物……………	221			
第164図	第8ブロック分布(1)……………	222			
第165図	第8ブロック分布(2)……………	223			
第166図	第8ブロック遺物(1)……………	224			

第204図	第11ブロック遺物 (27)……………	268	第243図	第25ブロック遺物 (2)……………	318
第205図	第11ブロック遺物 (28)……………	269	第244図	単独出土遺物 (1)……………	319
第206図	第11ブロック遺物 (29)……………	270	第245図	単独出土遺物 (2)……………	320
第207図	第12ブロック分布……………	273	第246図	SI-001……………	323
第208図	第12ブロック遺物……………	274	第247図	SI-002……………	325
第209図	第13ブロック分布……………	277	第248図	SI-003……………	327
第210図	第13ブロック遺物 (1)……………	278	第249図	SI-004 (1)……………	329
第211図	第13ブロック遺物 (2)……………	279	第250図	SI-004 (2)……………	330
第212図	第13ブロック遺物 (3)……………	280	第251図	SI-005……………	331
第213図	第14ブロック遺物……………	281	第252図	SM-001……………	333
第214図	第14ブロック分布……………	282	第253図	SS-001……………	335
第215図	第15ブロック遺物……………	285	第254図	SS-002……………	336
第216図	第15ブロック分布……………	286	第255図	SS-003……………	336
第217図	第16ブロック分布 (1)……………	288	第256図	SK-002 ~ 005a・b……………	338
第218図	第16ブロック分布 (2)……………	289	第257図	SK-006・007……………	339
第219図	第16ブロック遺物……………	290	第258図	SK-008a ~ c・009……………	340
第220図	第17ブロック分布……………	291	第259図	SK-010 ~ 014……………	341
第221図	第17ブロック遺物 (1)……………	292	第260図	SK-018 ~ 020……………	343
第222図	第17ブロック遺物 (2)……………	293	第261図	SK-021……………	344
第223図	第18ブロック分布……………	296	第262図	SD-001……………	345
第224図	第18ブロック遺物 (1)……………	297	第263図	グリッド等出土縄文土器 (1)……………	347
第225図	第18ブロック遺物 (2)……………	298	第264図	グリッド等出土縄文土器 (2)……………	349
第226図	第19ブロック遺物……………	298	第265図	グリッド等出土縄文土器 (3)……………	351
第227図	第19ブロック分布……………	299	第266図	グリッド等出土縄文土器 (4)……………	352
第228図	第20ブロック遺物……………	300	第267図	グリッド等出土縄文時代石器……………	352
第229図	第20ブロック分布……………	301	第268図	グリッド出土土師器・鉄滓……………	352
第230図	第21ブロック分布……………	303			
第231図	第21ブロック遺物 (1)……………	304	総 括		
第232図	第21ブロック遺物 (2)……………	305	第269図	事業地内上層遺構の分布……………	361
第233図	第22ブロック遺物……………	306	第270図	石製模造品製作関連遺物出土遺構等 の分布……………	362
第234図	第22ブロック分布……………	307	第271図	白玉製作工程 (復元案)……………	363
第235図	第23ブロック分布……………	309	第272図	工程別出土位置 (1)……………	364
第236図	第23ブロック遺物 (1)……………	310	第273図	工程別出土位置 (2)……………	365
第237図	第23ブロック遺物 (2)……………	311			
第238図	第23ブロック遺物 (3)……………	312	附 章		
第239図	第24ブロック分布……………	313	第274図	黒曜石産地分布図 (東日本)……………	368
第240図	第24ブロック遺物……………	314	第275図	黒曜石産地推定判別図 (1)……………	373
第241図	第25ブロック分布……………	315	第276図	黒曜石産地推定判別図 (2)……………	373
第242図	第25ブロック遺物 (1)……………	316			

図版目次

- 巻頭図版1 航空写真
巻頭図版2 黒曜石原産地分析石器
巻頭図版3 古墳時代石製品製作関連遺物
- 図版1 航空写真 (S=約 1/10,000)
- 定使山遺跡**
図版2 調査前、第1ブロック
図版3 第2・3ブロック
図版4 2z-13・17、3y-15、SK-001・002・004・005
図版5 SX-001
図版6 旧石器時代出土遺物 (1)
図版7 旧石器時代出土遺物 (2)
図版8 旧石器時代出土遺物 (3)
図版9 旧石器時代出土遺物 (4)
図版10 旧石器時代出土遺物 (5)
図版11 旧石器・縄文時代出土遺物
- 八重門田遺跡**
図版12 遺跡遠景、調査前、確認調査
図版13 17r-05・18t-50、第1～5ブロック
図版14 第6～10ブロック、14t-87・21y-00
図版15 SI-001・002
図版16 SI-003・004
図版17 SI-005・006
図版18 SI-006～008
図版19 SI-009・010
図版20 SI-011・012
図版21 SI-013～015
図版22 SI-015～017
図版23 SI-018・019・021
図版24 SI-021～023
図版25 SI-024～026
- 図版26 SI-026～028
図版27 SI-029・030
図版28 SI-030～032
図版29 SI-032～034
図版30 SS-001・005
図版31 SS-002～004
図版32 SK-001～007
図版33 SK-008～014・016・017
図版34 SK-018～023、SH-001
図版35 SM-001
図版36 旧石器時代出土遺物 (1)
図版37 旧石器時代出土遺物 (2)
図版38 旧石器時代出土遺物 (3)
図版39 旧石器時代出土遺物 (4)
図版40 旧石器時代出土遺物 (5)
図版41 旧石器時代出土遺物 (6)
図版42 旧石器時代出土遺物 (7)
図版43 旧石器時代出土遺物 (8)
図版44 旧石器時代出土遺物 (9)
図版45 縄文時代出土遺物 (1)
図版46 縄文時代出土遺物 (2)
図版47 古墳時代以降出土土器 (1)
図版48 古墳時代以降出土土器 (2)
図版49 古墳時代以降出土土器 (3)
図版50 古墳時代以降出土土器 (4)
図版51 古墳時代以降出土土器 (5)
図版52 古墳時代以降出土土器 (6)
図版53 古墳時代以降出土土器 (7)
図版54 古墳時代以降出土土製品・石製品 (1)
図版55 古墳時代以降出土土製品・石製品 (2)
図版56 古墳時代以降出土土製品・石製品 (3)
図版57 古墳時代以降出土土製品・石製品 (4)
図版58 古墳時代以降出土土金属製品他

清水川台遺跡（2）

- 図版 59 調査前
図版 60 第1～5ブロック
図版 61 第6・14～18ブロック
図版 62 第19～21・23・25ブロック
図版 63 上層確認調査状況
図版 64 SI-001・002、SS-002・003、SK-014
図版 65 SI-002
図版 66 SI-002・003
図版 67 SI-004
図版 68 SI-004・005、SM-001
図版 69 SM-001、SS-001
図版 70 SS-001・002
図版 71 SS-002・003、SK-002
図版 72 SK-003～007
図版 73 SK-008～014
図版 74 SK-014・018～021、SD-001
図版 75 旧石器時代出土遺物（1）
図版 76 旧石器時代出土遺物（2）
図版 77 旧石器時代出土遺物（3）
図版 78 旧石器時代出土遺物（4）
図版 79 旧石器時代出土遺物（5）
図版 80 旧石器時代出土遺物（6）
図版 81 旧石器時代出土遺物（7）
図版 82 旧石器時代出土遺物（8）
図版 83 旧石器時代出土遺物（9）
図版 84 旧石器時代出土遺物（10）
図版 85 旧石器時代出土遺物（11）
図版 86 旧石器時代出土遺物（12）
図版 87 旧石器時代出土遺物（13）
図版 88 旧石器時代出土遺物（14）
図版 89 旧石器時代出土遺物（15）

- 図版 90 旧石器時代出土遺物（16）
図版 91 旧石器時代出土遺物（17）
図版 92 旧石器時代出土遺物（18）
図版 93 旧石器時代出土遺物（19）
図版 94 旧石器時代出土遺物（20）
図版 95 旧石器時代出土遺物（21）
図版 96 旧石器時代出土遺物（22）
図版 97 旧石器時代出土遺物（23）
図版 98 旧石器時代出土遺物（24）
図版 99 旧石器時代出土遺物（25）
図版 100 旧石器時代出土遺物（26）
図版 101 旧石器時代出土遺物（27）
図版 102 旧石器時代出土遺物（28）
図版 103 旧石器時代出土遺物（29）
図版 104 旧石器時代出土遺物（30）
図版 105 旧石器時代出土遺物（31）
図版 106 旧石器時代出土遺物（32）
図版 107 旧石器時代出土遺物（33）
図版 108 旧石器時代出土遺物（34）
図版 109 縄文時代出土遺物（1）
図版 110 縄文時代出土遺物（2）
図版 111 古墳時代以降出土遺物（1）
図版 112 古墳時代以降出土遺物（2）

目 次

<p>大使山遺跡</p> <p>第1表 遺構一覧表……………13</p> <p>第2表 第1ブロック属性表……………24</p> <p>第3表 第2ブロック属性表……………28</p> <p>第4表 第3ブロック属性表……………28</p> <p>第5表 単独出土石器属性表……………33</p> <p>第6表 石器組成表……………33</p>	<p>第30表 第8ブロック属性表……………228</p> <p>第31表 第9ブロック属性表……………233</p> <p>第32表 第10ブロック属性表……………235</p> <p>第33表 第11ブロック属性表……………271</p> <p>第34表 第12ブロック属性表……………275</p> <p>第35表 第13ブロック属性表……………276</p> <p>第36表 第14ブロック属性表……………283</p> <p>第37表 第15ブロック属性表……………284</p> <p>第38表 第16ブロック属性表……………287</p> <p>第39表 第17ブロック属性表……………294</p> <p>第40表 第18ブロック属性表……………295</p> <p>第41表 第19ブロック属性表……………298</p> <p>第42表 第20ブロック属性表……………302</p> <p>第43表 第21ブロック属性表……………302</p> <p>第44表 第22ブロック属性表……………306</p> <p>第45表 第23ブロック属性表……………308</p> <p>第46表 第24ブロック属性表……………314</p> <p>第47表 第25ブロック属性表……………317</p> <p>第48表 単独出土石器属性表……………318</p> <p>第49表 石器組成表……………321</p> <p>第50表 石器観察表……………353</p>
<p>八重門田遺跡</p> <p>第7表 遺構一覧表……………41</p> <p>第8表 第1ブロック属性表……………44</p> <p>第9表 第2ブロック属性表……………50</p> <p>第10表 第3ブロック属性表……………54</p> <p>第11表 第4ブロック属性表……………56</p> <p>第12表 第5ブロック属性表……………56</p> <p>第13表 第6ブロック属性表……………67</p> <p>第14表 第7ブロック属性表……………77</p> <p>第15表 第8ブロック属性表……………82</p> <p>第16表 第9ブロック属性表……………82</p> <p>第17表 第10ブロック属性表……………86</p> <p>第18表 単独出土石器属性表……………86</p> <p>第19表 石器組成表……………86</p> <p>第20表 石器観察表……………185</p> <p>第21表 銭貨一覧表……………196</p>	<p>第30表 第8ブロック属性表……………228</p> <p>第31表 第9ブロック属性表……………233</p> <p>第32表 第10ブロック属性表……………235</p> <p>第33表 第11ブロック属性表……………271</p> <p>第34表 第12ブロック属性表……………275</p> <p>第35表 第13ブロック属性表……………276</p> <p>第36表 第14ブロック属性表……………283</p> <p>第37表 第15ブロック属性表……………284</p> <p>第38表 第16ブロック属性表……………287</p> <p>第39表 第17ブロック属性表……………294</p> <p>第40表 第18ブロック属性表……………295</p> <p>第41表 第19ブロック属性表……………298</p> <p>第42表 第20ブロック属性表……………302</p> <p>第43表 第21ブロック属性表……………302</p> <p>第44表 第22ブロック属性表……………306</p> <p>第45表 第23ブロック属性表……………308</p> <p>第46表 第24ブロック属性表……………314</p> <p>第47表 第25ブロック属性表……………317</p> <p>第48表 単独出土石器属性表……………318</p> <p>第49表 石器組成表……………321</p> <p>第50表 石器観察表……………353</p>
<p>清水川台遺跡（2）</p> <p>第22表 遺構一覧表……………197</p> <p>第23表 第1ブロック属性表……………200</p> <p>第24表 第2ブロック属性表……………204</p> <p>第25表 第3ブロック属性表……………208</p> <p>第26表 第4ブロック属性表……………214</p> <p>第27表 第5ブロック属性表……………215</p> <p>第28表 第6ブロック属性表……………215</p> <p>第29表 第7ブロック属性表……………219</p>	<p>総 括</p> <p>第51表 縄文時代遺構一覧表……………358</p> <p>第52表 石製模造品関連遺物点数と割合……………366</p>
<p>附 章</p> <p>第53表 分析対象となる黒曜石製石器……………369</p> <p>第54表 東日本黒曜石産地の判別群……………370</p> <p>第55表 測定値および産地推定結果……………371</p> <p>第56表 出土位置・器種別の黒曜石産地……………372</p>	

第1章 はじめに

第1節 事業の経緯と調査概要（第1図）

千葉県企業庁では地域産業の振興を図るため袖ヶ浦市久保田周辺（総面積 937,200㎡）に袖ヶ浦椎の森工業団地の建設を計画した。この計画の実施に先立って、平成5年3月に当事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会に提出された。千葉県教育委員会では現地踏査等の結果を踏まえ、平成5年5月に事業地内には埋蔵文化財の包蔵地3か所（面積 237,000㎡）が存在する旨の回答を行った。この回答に基づき、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県企業庁・千葉県教育委員会、袖ヶ浦市教育委員会の関係諸機関による協議を行った結果、事業の性格上、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなった。

1期地区事業地内については千葉県企業庁の委託を受け、平成7年度に清水川台遺跡（17,000㎡）を財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施した。その後、平成12・13年度に上大城遺跡（31,000㎡）、平成13年度に八重門田遺跡（57,600㎡）を財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を実施した。1期地区の発掘調査成果については、千葉県企業庁からの委託を受け、財団法人君津都市文化財センターが全ての整理作業を実施し、平成17年1月に発掘調査報告書¹¹⁾を刊行した。

その後、2期地区の事業については一時中断していたが、社会状況や国の経済政策などを背景に、企業による新たな工場建設などの設備投資への動きが加速し、工場誘致に係る地域間の競争が激しくなることが予想され、事業の再開が検討された。袖ヶ浦椎の森工業団地は、アクアラインの料金引下げや首都圏中央連絡自動車道の整備による交通アクセスの良さをはじめ、1期地区において既に企業が立地していることなどインフラ・雇用確保の点に優れ、高い経済効果が見込まれることから、平成24年3月に2期地区整備計画が決定された。

2期地区事業の実施に当たり、事業を引き継いだ千葉県商工労働部企業立地課と千葉県教育委員会で事業地内に所在する3か所の遺跡に関する「埋蔵文化財の取扱いについて」の協議を行い、緑地帯などによる現状保存区域以外については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県商工労働部企業立地課の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成25年度に定使山遺跡²⁾（6,000㎡）と八重門田遺跡（34,300㎡）を実施し、平成26年度は前年度から継続して八重門田遺跡（35,870㎡）と清水川台遺跡（2）（50,270㎡）の発掘調査を実施した。なお、八重門田遺跡については、造成計画が確定したことから、調査対象面積を1,570㎡追加し35,870㎡として実施することとした。整理作業は平成26～29年度にかけて、発掘調査が終了した3遺跡（定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡（2））を対象に実施し、平成29年度に発掘調査報告書を刊行する運びとなった。

各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は以下のとおりである。

平成25年度 教育振興部文化財課長 湯浅京子 発掘調査班長 蜂屋孝之

（発掘）定使山遺跡 調査期間 平成25年10月3日～平成25年12月25日

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信

調査対象面積 6,000㎡ 確認調査面積 上層 675㎡ 下層 378㎡

本調査面積 下層 392㎡



第1図 事業範囲と調査対象遺跡

八重門田遺跡

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信 田井知二 小林信一

調査対象面積 34,300㎡ 確認調査面積 上層 3,520㎡

平成 26 年度 教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

(発掘) 八重門田遺跡 調査期間 平成 26 年 6 月 2 日～平成 27 年 1 月 30 日

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信 香取正彦 田井知二

調査対象面積 35,870㎡ 確認調査面積 下層 944㎡

本調査面積 上層 11,100㎡ 下層 1,100㎡

清水川台遺跡(2) 調査期間 平成 26 年 6 月 2 日～平成 27 年 3 月 18 日

担当者 主任上席文化財主事 加藤正信 香取正彦 田井知二

調査対象面積 50,270㎡ 確認調査面積 上層 6,132㎡ 下層 1,298㎡

本調査面積 上層 4,500㎡ 下層 1,930㎡

(整理) 定使山遺跡・八重門田遺跡

作業内容 水洗注記

平成 27 年度 教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 蜂屋孝之

(整理) 定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡(2)

担当者 主任上席文化財主事 田島新 上席文化財主事 高梨友子

文化財主事 牧武尊

作業内容 記録整理・水洗注記・分類・接合・復元・実測・トレースの一部

平成 28 年度 教育振興部文化財課長 永沼律朗 発掘調査班長 田井知二

(整理) 八重門田遺跡・清水川台遺跡(2)

担当者 主任上席文化財主事 金丸誠 田島新

上席文化財主事 黒沢崇 文化財主事 牧武尊

作業内容 分類・接合・復元・実測・トレース・拓本・挿図・原稿執筆の一部

平成 29 年度 教育振興部文化財課長 萩原基一 発掘調査班長 山田貴久

(整理) 定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡(2)

担当者 主任上席文化財主事 金丸誠 落合章雄 安井健一

上席文化財主事 黒沢崇

作業内容 実測・挿図・原稿執筆の一部・編集・校正・取納・刊行

発掘調査に当たっては、2期地区事業地内の3遺跡(定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡(2))の調査区全体を覆うように公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッドの基準は1期事業地内遺跡の一つである清水川台遺跡の設定を踏襲した。日本測地系(第IX座標系)に基づく数値で、X=61,140、Y=18,140を起点とし、40m×40mの方眼網を設定し大グリッドとした。名称は北から南へ1・2・3…、西から東へA・B・C…となるが、Aより西に調査区がある定使山遺跡と八重門田遺跡については、東(起点)から西へz・y・x…と小文字でさかのぼるように表記することとした。大グリッドは更に4m×4mの小グリッドに100分割し、北西隅を00、南東隅を99とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて18C-67や20x-51などと呼称した。

上層の確認調査は重機を使用し、調査対象面積の10%を目安に、地形に合わせて2m幅の確認トレンチを設定した。遺構が複数検出され、遺構の広がりや想定される地点を本調査範囲とした。本調査は、重機で表土を除去した後に実施した。下層の確認調査は、まず調査対象面積の2%を目安に2m×2mの確認グリッドを設定した。石器が出土した場合は、調査対象面積の4%を超えない範囲で、出土地点の周辺に確認グリッドを追加し、又は確認グリッドを拡張し石器の広がりを捉えて本調査範囲とした。本調査は、重機で表土から石器が出土した層位に影響を及ぼさない深さまでローム層を除去した後に実施した。

遺構は、堅穴住居跡はSI、土坑はSK、溝はSD、古墳・塚はSM、方形・円形区画墓はSSの記号を付し、種類記号ごとに3桁の通し番号と合わせてSI-001のように遺構番号として表記した。遺物は各遺構に通し番号を付け、旧石器時代の遺物や帰属遺構が不明なものについては小グリッド単位で取り上げた。

整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物の種別・器種分類を行ってから接合・復元作業を実施し、実測・拓本作業を行った。出土遺物の写真撮影はデジタルカメラで行った。発掘調査で作成した図面・写真などの記録整理の後、挿図・写真図版原図を作成し、挿図の一部及び写真図版については、それらをもとにデジタル編集によるトレースや写真補正等を行い、挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行となった。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

報告書作成に当たり、発掘調査時に付けた遺構番号は原則として変更していない。整理段階で遺構と判断できなかったものについては欠番とし、各遺跡の遺構一覧で参照できるようにした。なお、遺跡ごとの調査概要は以下のとおりである。

定使山遺跡 台地の北端部に位置する。立地する地形は西に向かって緩やかに傾斜している。平成25年度に6,000㎡の上層・下層確認調査と下層本調査を実施した。下層は6か所から石器が出土し、3か所の石器集中地点の本調査(392㎡)を実施した。上層は縄文時代の陥穴4基、近世以降と考えられる土手1条が検出されたが、遺構の広がりは認められず、確認調査で終了した。遺構外から縄文土器や土師器、近世銭貨が出土したが、遺構と遺物の数量は周辺の遺跡と比較して極めて少ない。

八重門田遺跡 台地の南西部に位置する。北側の浜宿川に開析された小支谷と南側の久保田川流域に広がる低地に挟まれた標高48mの台地平坦面に立地し、東側は清水川台遺跡(2)と隣接する。平成25年度に塚の調査を含めた上層確認調査(対象面積34,300㎡)を実施し、翌年度に調査対象面積を35,870㎡に変更して上層本調査、下層の確認・本調査を行った。下層は9か所の石器集中地点の本調査(1,100㎡)を実施した。上層は台地の北側や南端を除く部分で古墳時代を中心とする集落跡が検出され、11,100㎡について本調査を行った。主な遺構は縄文時代の土坑、古墳時代中期の堅穴住居跡、奈良・平安時代の方形・円形区画墓である。古墳時代中期の堅穴住居跡から滑石模造品を製作した際の剥片類が多量に出土したことが特筆される。

清水川台遺跡(2) 台地の南東部に位置する。台地西側は小支谷による開析を受け、北西側に延びる小さな舌状台地を作り出している。平成26年度に調査対象面積50,270㎡に対して確認調査から本調査まで実施した。下層は1,930㎡について本調査を実施した。石器集中出土地点は台地の縁辺部に多く分布し、Ⅲ層～Ⅴ層を中心とする文化層とⅦ層～Ⅸ層を中心とする文化層に大別できる。上層は4,500㎡について本調査を実施した。縄文時代の土坑・陥穴・炉穴9基、古墳時代中期の堅穴住居跡3軒、円墳1基、奈良時代の堅穴住居跡2軒、方形区画墓3基、古代以降の土坑11基、溝1条を検出した。



第2図 周辺地形図 (迅速測図)

第2節 遺跡の位置と歴史的環境³⁾ (第2～4図)

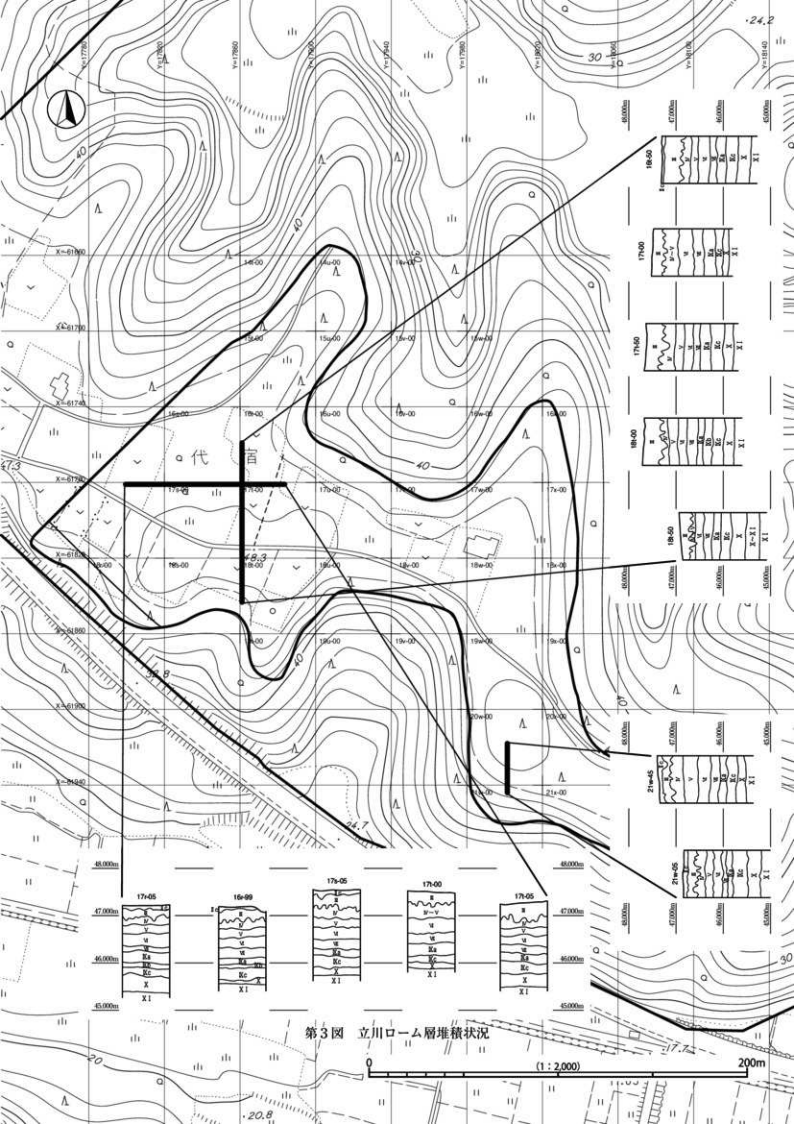
定使山遺跡、八重門田遺跡及び清水川台遺跡(2)の3遺跡は、千葉県袖ヶ浦市代宿から久保田代宿入会地に所在する。袖ヶ浦市は千葉県の東京湾沿岸のほぼ中央部、茨城県南部から広がる下総台地の南縁部に位置し、東部は市原市、西部は木更津市と接する。3遺跡のある台地は、北を養老川、南を小櫃川によって開析された袖ヶ浦台地と呼称される。小櫃川下流域には沖積地が形成され、肥沃な低地として機能し、袖ヶ浦台地に遺跡が密集した要因の一つとされる。3遺跡は海岸線から約2.5kmの距離にある袖ヶ浦台地のほぼ中央、北側の浜宿川に開析された小支谷と南側の久保田川流域に広がる低地に挟まれた樹枝状の台地平坦面に位置する。

また、この付近の段丘面は下末吉面に比定でき、第3図は八重門田遺跡の立川ローム層堆積状況を表したものである。痩せ尾根状台地の平坦部である17r大グリッドから17t大グリッド付近を、東西及び南北に縦断した、また調査区南東側の狭小部を南北に縦断するように、下層確認調査時の土層データを配置している。遺跡の所在する台地の標高は47mから54mを測り、このためか下総台地における立川ローム層の標準土層に近い堆積状況を呈し、第1黒色帯(V層)や第2黒色帯下部の間層帯(IXb層)が確認できる地点が多く見受けられる。特に第1黒色帯については、Ⅲ層ソフトローム層の下端からⅥ層上面までの層厚が0.4mと概して厚めであるため、上位層のⅣ層との色調の違いが明確ではないが、ほぼ調査区全域で確認されている。第2黒色帯上部(Ⅷ層)から下部(IXc層)については、上部黒色帯のⅧ層は確認できないが、下部間層帯であるIXb層は調査区西側17r大グリッド付近に展開する平坦部及び18t-00グリッド付近の最高標高地点で分層可能な堆積状況を呈する。台地緩斜面部の堆積状況は平坦部と大差は認められないが、立川ローム層最下層のX層について色調による分層が困難となる。特に18t-50グリッド付近ではX層とXⅠ層の差異が把握できないため「X～XⅠ層」というような漸移層的な分層がなされている。同標高である21w-05付近のX層の層厚から既にXⅠ層であると判断される。またソフトローム層直下の層について、八重門田遺跡の記録から把握できないが、後述する清水川台遺跡第18ブロック付近の西に向かい傾斜する緩斜面部では、谷部に近づく程第2黒色帯上部以上の分層が困難となっている。

1期地区を含めると袖ヶ浦市の森工業団地建設に関連する遺跡は定使山遺跡、八重門田遺跡、清水川台遺跡、上大城遺跡の4遺跡となる。定使山遺跡を除いた3遺跡については、今回の調査地区以外での調査事例があるので、以下に調査成果の概略を説明していきたい。

八重門田遺跡

今回の調査区の北西側に隣接する地区について、平成13～14年度に1期地区の調査として財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を行い、旧石器時代～奈良・平安時代までの遺構が検出されている。旧石器時代はⅢ層～Ⅳ層とⅣ層～Ⅵ層、Ⅶ層～Ⅷ層を出土層位とする石器集中地点が9か所検出されている。縄文時代は早期の子母口式期と考えられる炉穴44基と陥穴を含む土坑41基が検出されている。弥生時代は後期の堅穴住居跡8軒、古墳時代は前期の堅穴住居跡が1軒検出されており、このうちの1軒の弥生時代後期の堅穴住居跡は、遺物の出土状況から古墳時代前期後半まで埋没していなかったとされている。また、古墳時代中期の可能性のある円墳2基が検出されている。奈良・平安時代は堅穴住居跡14軒と掘立柱建物跡1棟、鍛冶工房跡5基が検出され、8世紀後半～9世紀前半の集落とされている。また、方形区画墓3基と方形墳墓1基、土坑墓1基も検出されている。



第3図 立川口-1ム層堆積状況

(1 : 2,000)

200m

清水川台遺跡

遺跡の東側の地区について、昭和57年度に町道建設に伴う調査として財団法人君津郡市文化財センター、平成7年度に1期地区の調査として財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を行っている。遺構は旧石器時代のⅡ層～Ⅲ層とⅢ層～Ⅳ下層を主体とする石器集中地点7か所のほかに、縄文時代の陥穴、二重周溝を有する7世紀末の方墳、奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されている。奈良・平安時代の集落からは、鉄滓や羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。

上大城遺跡

平成2～4年度に市道建設に伴う調査と平成12～14年度に1期地区の調査として財団法人君津郡市文化財センターが発掘調査を行っている。平成2～4年度の調査では、縄文時代の炉穴・陥穴・土坑が20基、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡67軒、方形周溝墓6基、奈良・平安時代の竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡6棟などが検出されている。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布は、古墳時代前期の竪穴住居跡と方形周溝墓を中心とする北側と、弥生時代後期の竪穴住居跡を中心とする南側のグループの2か所に分かれ、南側のグループは八重門田遺跡と隣接している。平成12～14年度の調査では、旧石器時代(Ⅳ層～Ⅴ層)の石器集中地点12か所、縄文時代の陥穴と土坑27基、古墳時代前期の竪穴住居跡66軒、方形周溝墓2基、円墳1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡49軒、掘立柱建物跡17棟などが検出されている。特に、奈良・平安時代の遺構からは、瓦塔や香炉蓋などの仏教関連遺物や人面墨書土器や多文字墨書土器などが多数出土している。

次に、時代ごとに周辺の主な遺跡の様相について説明していきたい。

旧石器時代

清水川台遺跡と小さな谷を挟んで東に隣接する豆作台遺跡〈1〉では、Ⅲ層～Ⅴ層にかけて約1,700点の石器が出土している。袖ヶ浦台地の北部縁辺に位置する上笠上谷遺跡〈2〉では、Ⅳ層とⅦ層を主体とした石器集中地点が5か所検出され、Ⅳ層中からは被熱した小円礫群や角錐状石器、刃部磨製石器などが多数出土している。礫の石材はチャートが過半数を占め、礫以外では安山岩が多く出土している。南側の久保田川を挟んだ向いの台地縁辺にある美生遺跡〈3〉では、Ⅲ層～Ⅶ層にかけて石器集中地点が検出され、メノウが石材の9割を占める地点も確認されている。また、黒曜石を石材とするⅢ層とⅣ層主体の石器集中地点6か所が検出され、Ⅲ層上部から細石刃と石核が出土している。美生遺跡の東側に続く堂庭山B遺跡〈4〉では、石器集中地点が13か所検出され、そのうち8か所はⅥ層より上層を主体とする。また、美生遺跡・堂庭山B遺跡の南側に位置する台山遺跡〈5〉では、Ⅴ層で旧石器の環状ブロックが検出されている。

縄文時代

定使山遺跡ほか3遺跡の所在する台地上は、早期の条痕文土器～前期後半の諸磯式や浮島・興津式までの時期の遺跡が主体である。上大城遺跡では炉穴や陥穴、豆作台遺跡〈1〉では早期後半の炉穴群や諸磯・浮島式期の環状の集落が検出されている。久保田川を挟んだ南側の台地でも類似した様相で、美生遺跡〈3〉・神田遺跡〈6〉・子清水遺跡〈7〉では早期後半の炉穴や土坑、正源戸B遺跡〈8〉では早期の炉穴や諸磯a～b式期の竪穴住居跡が検出されている。浮戸川を臨む台地に形成された三ツ作貝塚〈9〉では、早期末の茅山上層式の土器が出土している。早期後半期以前では、袖ヶ浦台地西端部の山王台遺跡から草創期の隆線文土器や有舌尖頭器などが出土しており、南東部の打越岱遺跡〈10〉では、早期の燃糸



第4図 周辺の遺跡

文土器が出土した堅穴住居跡が検出されている。中期の遺跡としては、小櫃川を挟んだ南側の台地上に大竹遺跡群や滝ノ口向台遺跡があり、期中葉（勝坂式・阿玉台式・中峠式）～後葉（加曾利E式）の遺構が検出されている。後期の遺跡としては、三ツ作貝塚（9）に隣接する根形台遺跡群（11）で後期の称名寺式～堀之内式の堅穴住居跡が検出されている。そのほかには、袖ヶ浦台地の南西部に位置する山野貝塚や称名寺式期主体で柄鏡形住居跡が検出された伊丹山遺跡がある。

弥生時代

八重門田遺跡や清水川台遺跡では弥生時代後期の小規模集落が見られるが、拠点的な集落としては美生遺跡（3）があり、中期と後期の堅穴住居跡と方形周溝墓が多数検出されている。小櫃川下流域の沖積地を臨む根形台遺跡群（11）では、方形周溝墓で構成される墓域を含む南北約160m、東西約140mの環濠集落が検出されている。その南東側には集落が後期～古墳時代前期まで継続する文脇遺跡（12）があり、地域の拠点的な集落であったと考えられる。その北部には後期の堅穴住居跡が3軒検出された打越岱遺跡（10）があり、拠点の周縁集落と思われる。小櫃川左岸の台地上には大竹遺跡群があり、中期の小規模集落と方形周溝墓からなる大きな墓域が検出されている。

古墳時代

上大城遺跡は前期の堅穴住居跡が主体の集落跡であるが、前期中葉から方形周溝墓や円墳が造られるなど居住域から墓域へと変化が見られる。椎津川右岸の台地には古墳が多く分布し、袖ヶ浦台地北端の東京湾を臨む台地上にある姉崎古墳群（13）には、前期～中期を中心に100m規模の前方後円墳などが築造されている。その中の釈迦山古墳は墳丘長93mで、出土した遺物から前期後半と考えられている。姉崎二子塚古墳は墳丘長114mで埴輪が廻り、豊富な副葬品を有する中期前半の首長墓である。富士見塚古墳は墳丘径25mの中期後半の円墳で、遺存状態が良好な胡録金具が出土している。後期以降は前方後方墳である六孫王原古墳などが築かれている。六孫王原古墳と同じ台地上にある六孫王原遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする集落遺跡であり、椎津川を挟んだ西側には中期後半から拠点集落として形成された椎津茶ノ木遺跡（14）がある。久保田川以南の台地上には、集落遺跡の美生遺跡（3）・子者清水遺跡（7）・台山遺跡（5）・根形台遺跡群（11）・山王辺田遺跡（15）などがあり、前期の神田遺跡（6）の古墳群や山王辺田遺跡（15）の2号墳、山野古墳（16）など、集落に近接して古墳が築造されている。小櫃川左岸の大竹遺跡群は前期～中期の拠点集落であり、近接して古墳も多数築造され、集落からは重圏文鏡が出土していることなどから、当該地域における権力者の存在がうかがえる。その南東側に位置する文脇遺跡（12）は、中期の堅穴住居跡や古墳が検出されている。中期末の白玉を中心とした滑石模造品の製作工房があり、堅穴住居跡からは工作ビットが検出され、未成品や剥片類以外に石製の工作台と砥石が出土している。周辺で石製模造品の製作工房の可能性のある遺跡としては、台山遺跡（5）や宮ノ台遺跡（17）が挙げられる。やや離れるが海岸寄りの西ノ谷下遺跡は、弥生後期～古墳時代前期を主体とする集落遺跡であるが、古墳時代中期の堅穴住居跡が2軒検出され、石製模造品（剣形・円板・白玉）の未成品や剥片などが大量に出土しており、製作工房の可能性が高い。また、木更津市東谷遺跡とマミヤク遺跡は、滑石製模造品工房を有する集落として注目されている。

奈良・平安時代

八重門田遺跡と清水川台遺跡は堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構は少ないが、八重門田遺跡では鍛冶工房跡が検出され、清水川台遺跡では羽口や多量の鉄滓が出土するなど、いずれも製鉄に関連した遺跡

と考えられる。上大城遺跡は8世紀後半～10世紀前半まで継続する集落跡で、仏教関連遺物や多量の墨書土器などが出土している。南西側に位置する神田遺跡〈6〉は、8世紀末～9世紀後半にかけて堅穴住居跡7軒と掘立柱建物跡1棟からなる小規模集落である。小瀬川下流域の沖積地を臨む袖ヶ浦台地周縁部には、根形台遺跡群〈11〉や念仏塚遺跡〈18〉がある。根形台遺跡群では8世紀～9世紀後半まで集落が継続し、青銅製帯飾具（鈍尾）が出土している。念仏塚遺跡では9世紀後半～10世紀前半の堅穴住居跡4軒が検出され、蛇紋岩製の帯飾具が出土している。浮戸川流域の低地には西原遺跡〈19〉があり、包含層から9世紀後半の須恵器・土師器・木製弓・呪符木簡などが出土している。南東側の文脇遺跡〈12〉は8世紀～10世紀前半まで継続する長期的集落である。海岸寄りには7世紀後半～9世紀後半まで継続する集落と墓域を含む雷塚遺跡があり、皇朝十二銭や「海上」と墨書された須恵器のほかに、平安時代の火葬墓から買地券と考えられる鉄板が出土している。

中・近世

八重門田遺跡には近世の塚が1基あるが、中・近世のまとまった資料は少ない。南西側に位置する神田遺跡〈6〉では、多数の石塔類を伴う中世墓域が検出されている。墓域の成立時期は、出土した板碑の紀年銘によって14世紀中頃とされ、以降17世紀まで継続している。墓域は4グループに分かれ、土豪層を中心とした複数氏族の墓域と推定されている。袖ヶ浦台地の南部に位置する山谷遺跡〈20〉では、中世まで遡ると考えられる東西に延びる道路跡（鎌倉街道）が検出されており、溝内から多量の中世陶磁器が出土し、市としての機能も想定されている。その西側にある根形台遺跡群〈11〉では、同じ道路跡（鎌倉街道）の一部と考えられる遺構が検出され、近世と考えられる塚も点在している。また、溝と土坑墓などが検出されており、溝の一部は中世居館の堀のほか、道路や荘の境界として機能していた可能性があるとされている。文脇遺跡〈12〉では多数の溝状遺構や道路状遺構、掘立柱建物跡、地下式坑、土坑墓などが検出され、12世紀後半～13世紀は南側、14世紀～16世紀後半は北側を中心として土地利用が行われ、屋敷地と耕作地及び墓地といった景観が想定されている。その中でも14世紀後半と考えられる土坑から約3万枚の銭貨が一括出土したことが特筆される。

注1) 2005「袖ヶ浦権の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書（第一分冊）清水川台遺跡Ⅱ（第二分冊）上大城遺跡Ⅱ（第三分冊）八重門田遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第188集

2) 定使山遺跡は当時の千葉県埋蔵文化財分布地図の遺跡台帳に記載されていた名称「定使山（ジョウキョウザン）遺跡」で発掘調査を行っていたため、その記録類については「定使山遺跡」と表記されている。しかし、整理事業段階において、遺跡が所在する住所の小字は「定使山」であり、袖ヶ浦市教育委員会とも協議した結果「定使山（ジョウヅケヤマ）遺跡」とすることが適切であると判断されたため、この度、遺跡台帳登録名を修正し、「定使山遺跡」として報告することとした。

3) 遺跡の調査成果については以下の文献を参照した。

1983 「清水川台遺跡発掘調査報告書」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第2集

1985 「境遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第8集

1985 「境No2遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第9集

1985 「西ノ窪遺跡」袖ヶ浦市教育委員会

1987 「念仏塚遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第23集

1989 「打越橋遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第41集

1989 「木更津市小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第44集

- 1990 『木更津市小浜遺跡群Ⅲ 浜ヶ谷古墳・西谷塚・浜清水遺跡・二十歩古墳・丸山塚・岡田塚古墳群』
財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第 47 集
- 1991 『上大城遺跡』『年報 No.9』財団法人君津都市文化財センター
- 1992 『美生遺跡群Ⅰ（第1地点）』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書71集
- 1992 『袖ヶ浦市文協遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第69集
- 1993 『台山遺跡』『千葉県文化財センター年報 No.18』財団法人千葉県文化財センター
- 1993 『美生遺跡群Ⅱ（第4・5・9地点）』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第93集
- 1994 『上大城遺跡発掘調査報告書』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第100集
- 1994 『美生遺跡群Ⅲ（第6・7地点）』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第95集
- 1995 『上笠上谷遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第99集
- 1995 『神田遺跡・神田古墳群』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第101集
- 1996 『袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 稲荷台遺跡・寒沢遺跡・西ノ谷下遺跡・根形台遺跡群』袖ヶ浦市教育委員会
- 1996 『袖ヶ浦市堂庭山B遺跡』財団法人千葉県文化財センター調査報告書第288集
- 1997 『市原市崎崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集
- 1997 『上笠上谷遺跡（2）』財団法人君津都市文化財センター第127集
- 1997 『西原遺跡』袖ヶ浦市教育委員会
- 1998 『山王台遺跡・下向山遺跡』袖ヶ浦市教育委員会 財団法人君津都市文化財センター
- 1998 『百々目木B・C・清水頭・清水沢遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第144集
- 1999 『袖ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世』袖ヶ浦市
- 1999 『豆作台遺跡Ⅰ』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第150集
- 2000 『市原市畑木小谷遺跡・権津茶ノ木遺跡（第2次）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第73集
- 2000 『上用瀬遺跡Ⅱ』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第165集
- 2000 『正源戸B遺跡・子者清水遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第161集
- 2001 『袖ヶ浦市史 通史編1 原始・古代・中世』袖ヶ浦市
- 2001 『根形台遺跡群Ⅰ』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第169集
- 2004 『木更津市中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅳ-東谷遺跡-』木更津市教育委員会
- 2005 『木更津市中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅴ-東谷遺跡-』木更津市教育委員会
- 2005 『袖ヶ浦市椎の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書 清水川台遺跡Ⅱ 八重門田遺跡 上大城遺跡Ⅱ』
財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第188集
- 2012 『豆作台遺跡Ⅱ』袖ヶ浦市教育委員会
- 2014 『豆作台遺跡Ⅲ』袖ヶ浦市教育委員会
- 2015 『市原市海保地区遺跡群Ⅱ 海保広作遺跡』市原市教育委員会
- 2017 『袖ヶ浦市文協遺跡』（中・近世編）千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第19集

第2章 定使山遺跡

第1節 調査の概要（第5～7図、第1表）

発掘調査は、平成25年10月3日～平成25年12月25日の期間に実施した。調査対象面積6,000㎡の約10%を対象として、調査区全域にほぼ均等に幅2mのトレンチを設定し、上層確認調査を行った。遺構確認面までは、重機と人力を併用して表土除去を行った。トレンチから出土した遺物は、その位置が明らかでないものをトレンチ一括で取り上げた。単独で確認された遺構は、その部分を中心にして確認トレンチを拡張し精査した。土手は、走行方向に直交するトレンチを5本設定して精査した。下層確認調査は、調査対象面積の約4%に相当するように2m×2mのグリッドを設定して行った。その結果、6か所で石器が出土し、そのうち3か所で広がりが見られたため、392㎡について本調査を実施した。その結果、ナイフ形石器、楔形石器、石刃を石器組成に含む石器集中の存在が明らかとなった。これらはいずれも第2黒色帯上部に所属するものである。

縄文時代以降の遺構は土坑4基と土手1基が検出された。土坑はいずれも縄文時代の陥穴であり、全て調査区の東側に分布している。遺構の時期は、遺物が出土しなかったため早期のTピットであるSK-002を除いて不明であるが、形状や周辺の遺跡の調査成果から早期に属する可能性が高い。近世以降の土手は調査区中央部で検出された。遺構外からは縄文時代早期と前期後葉の土器や、土師器、近世銭貨が出土している。遺跡内の遺構や遺物は同じ台地上に形成されたほかの3遺跡と比較して極めて少なく、縄文時代以降の人々の活動が希薄であった地域であると考えられる。

第1表 遺構一覧表

() 推定値

遺構	種類	位置	主軸方位	主軸長(m)	幅(m)	深さ(m)	時期	備考
SK-001	陥穴	2A-30	N-5°-E	1.85	1.85	1.07	縄文時代	径0.43×0.32、深さ0.4のピット
SK-002	陥穴	2A-40	N-13°-W	1.86	1.40	1.35	縄文時代	径0.25×0.23、深さ0.42のピット
SK-003								欠番
SK-004	陥穴	3z-00	N-21°-W	1.83	1.32	2.44	縄文時代	
SK-005	陥穴	2z-00	N-72°-W	1.83	1.03	2.10	縄文時代	
SK-006								欠番
SX-001	土手	2z-20～88 2y-39～3y-07	N-48°-W N-30°-E	8.13 (6.15)	1.5 0.61	1.10～1.60 0.60	近世以降	



第5図 上層トレンチ配置及び遺構分布



第6図 下層グリッド配置及び拡張範囲



第7図 旧石器ブロック分布図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

第1ブロック（第8～13図、第2表、図版2・6～8）

標高41mの台地平坦部に位置し、合計29点の石器により構成される。長軸13m、短軸2.2mの楕円形状に分布し、範囲の西側1y-88グリッド付近にやや集中する感があるが、全体的にまばらである。

石器の出土層位はⅣ層下部からⅨa層にかけて0.7mの比高差がみられるが、Ⅳ層付近に集中して出土している。

ナイフ形石器を含み、他は楔形石器、調整痕の認められる剥片、剥片類が組成中に含まれる。ナイフ形石器の素材剥片を含め、縦長剥片が大半を占める。

石器石材は珪質頁岩を主体とし、嶺岡産珪質頁岩、黒色頁岩、安山岩、黒色安山岩、チャートが使用される。

遺物

1から4はナイフ形石器である。いずれも縦長剥片を素材とし作出される。1は珪質頁岩製の剥片の打面側を先端部とし、調整は2側縁に対し腹面側からの剥離により行われ、素材剥片の打面は調整の際に除去される。無調整部位の側縁先端部には微細な剥落痕が認められる。2は安山岩製の剥片打面を基部とし、両側縁に対し腹面側からの剥離により調整が施される。3は珪質頁岩製の剥片打面を基部とし、両側縁に対し腹面側からの剥離により調整される。先端部が欠損する。4はチャート製の剥片打面を基部とし、打面付近の両側縁及び片側縁に微細な調整が認められる。

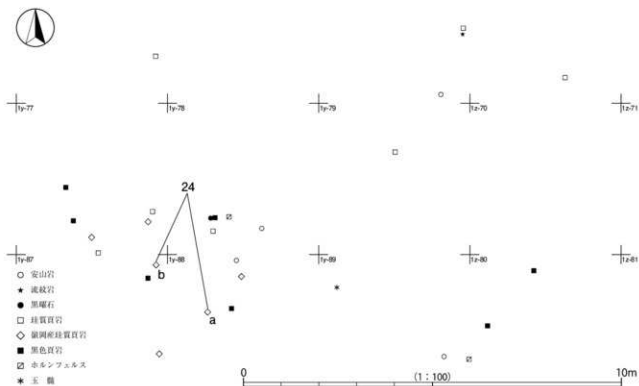
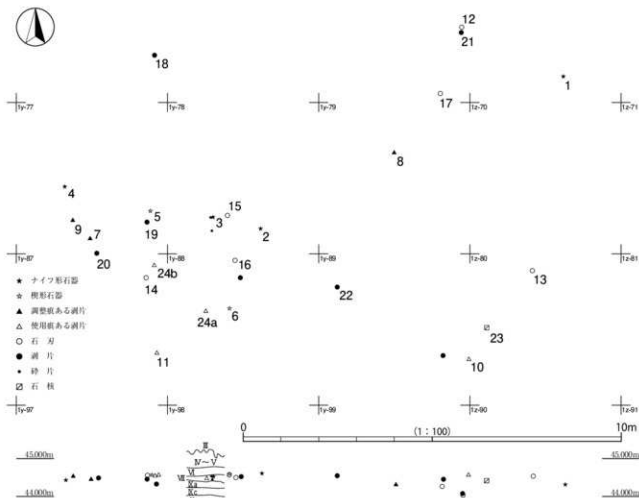
5・6は楔形石器である。5は珪質頁岩製の剥片末端部の背腹両面に微細な剥落痕が認められる。対となる打面側の剥落痕が明瞭ではないが、正面図左側縁側に剥片打面からの剥離が認められる。6は黒色頁岩製の縦長剥片を素材とし、打面部と末端部に背腹両面に対しての調整が施される。末端部の調整は密に行われているが、打面部の調整は背面側に顕著であり、主に打面の除去を目的として施される感がある。

7から9は調整痕の認められる剥片である。いずれも縦長剥片である。7は打面直下の片側縁及び対側の側縁に調整が施されるが、調整範囲は極めて限定的である。嶺岡産珪質頁岩製である。8は珪質頁岩製の剥片で、打面部から片側縁に対し密に調整が施される。打面部から側縁中位の調整は背面から施されるが側縁中位から末端部付近にかけては腹面側からの超瀬となる。また対側の側縁には微細な剥落痕が認められる。9は黒色頁岩製の剥片打面部を除去する調整が施され、腹面側にむかい打面を除去した後、背面側に密に調整を施す。

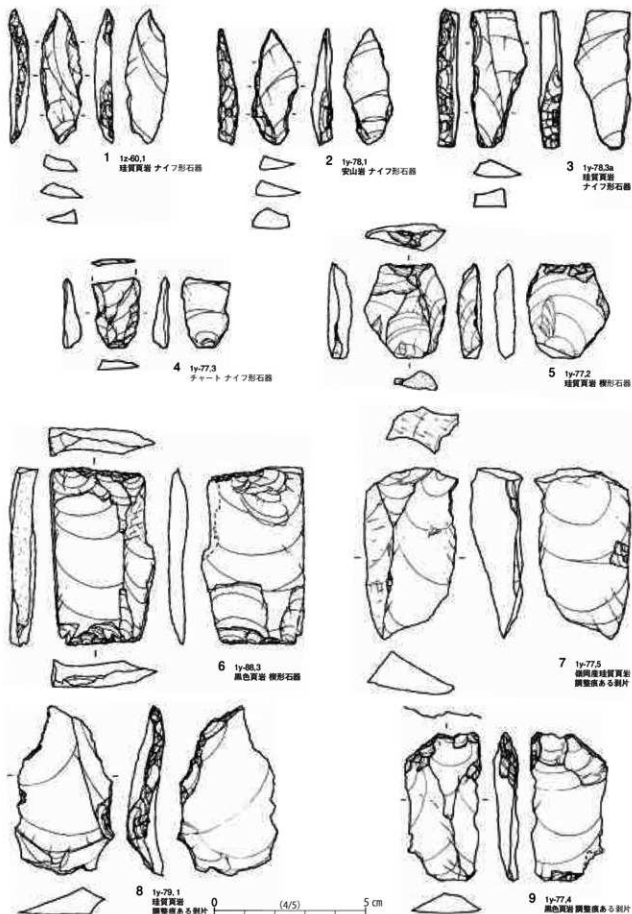
10・11は使用痕の認められる剥片である。いずれも大型の剥片で、10は縦長剥片の片側縁の腹面側に剥落痕が顕著に認められる。11は嶺岡産珪質頁岩製の横長剥片であり、ほぼ全周に微細な剥落痕が認められる。

12から17は石刃である。腹面の剥離方向と背面を構成する剥離の方向が一致するもの（13・14・16・17）や両者が正逆となるもの（12・15）が認められる。打面は単一打面であり、同一もしくは両極に打面を有する石核から連続的に剥片を作出する剥離技術が明瞭に窺える。

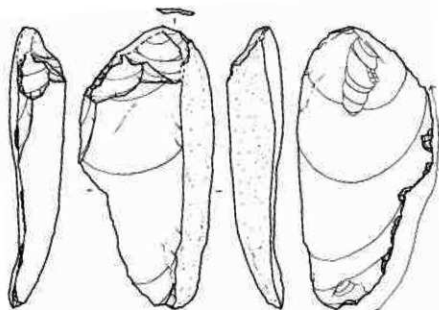
18から21は剥片である。18・19はやや横長の不定形剥片である。18の背面は同一方向からの剥離により構成され、石刃作出の剥片剥離時に作出された剥片であろう。19の背面は多方向からの剥離で構成されており、石核整形もしくは打面再生剥片の可能性が高い。20はチャート製の大型剥片である。縦長の形状で背面中央に明瞭な稜を有する。22は玉髓製、23は流紋岩製の小型の不定形剥片である。第1ブ



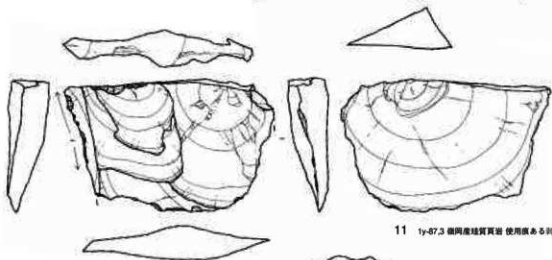
第8図 第1ブロック分布



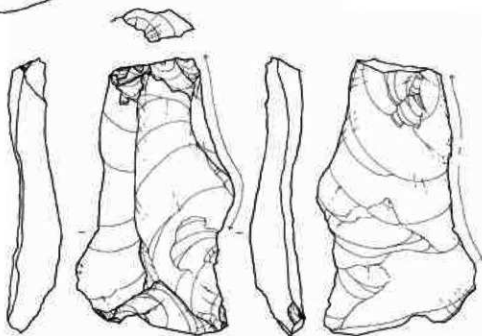
第9図 第1ブロック遺物(1)



10 1y-88.1
ホルンフェルス
使用痕ある剥片



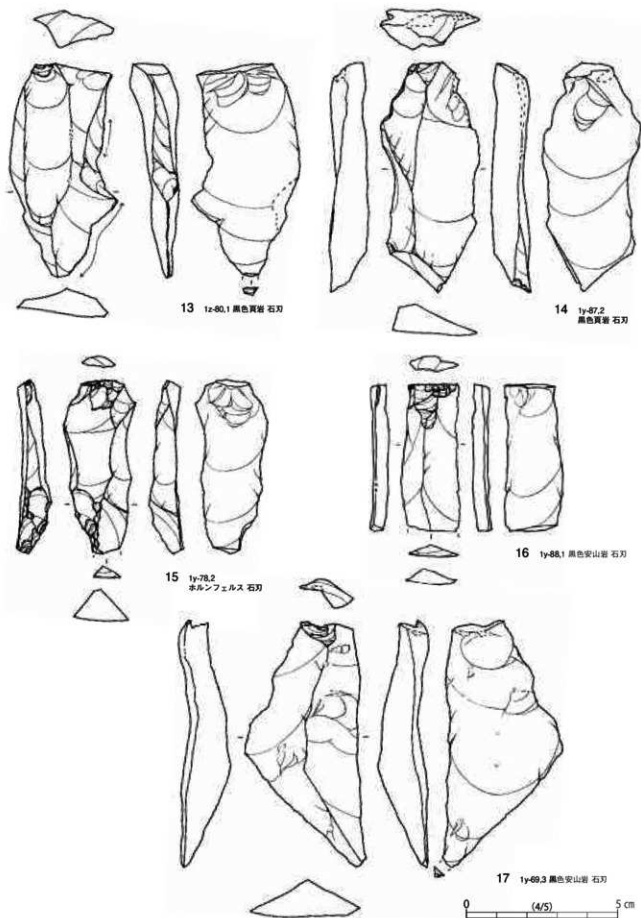
11 1y-87.3 燧石産地質質岩 使用痕ある剥片



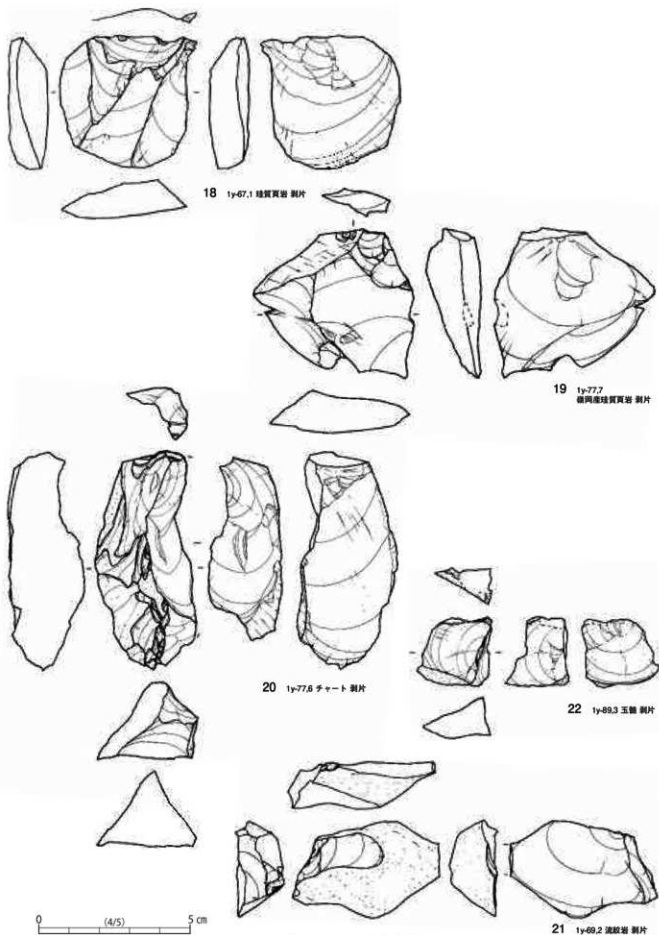
12 1y-68.1 燧石質岩 石刃



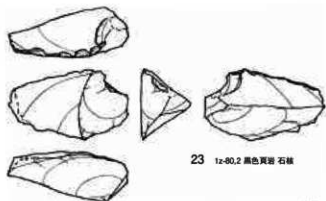
第10図 第1ブロック遺物(2)



第11図 第1ブロック遺物(3)

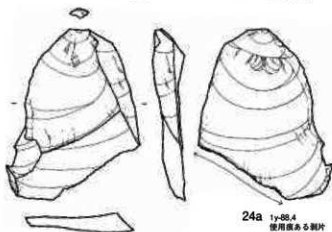
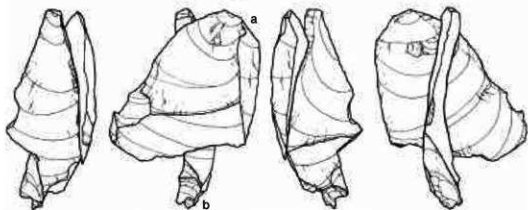


第12図 第1ブロック遺物(4)

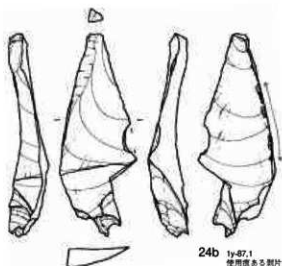


23 12-80.2 黒色頁岩 石鏃

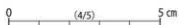
24 接合資料 縞網産種質頁岩



24a 12-88.4
使用痕ある割片



24b 12-87.1
使用痕ある割片



第13図 第1ブロック遺物(5)

ロックの石材組成の観点からは客体的な感がある。

23は黒色頁岩製の石核である。最終剥離面は正面図右側縁にみられる剥離であり、長さ2cm程の小型不定形剥片を作出して作業を終了している。

24は嶺岡産珪質頁岩製の剥片2点の接合資料である。両者とも打面の高さは同一であるが、24aの作出後、打点をほぼ90度右側に換え剥片剥離を行った工程で24bの剥片が作出される。

第2表 第1ブロック属性表

石核番号	剥片番号	剥片形状	剥片種類	石核	打面	接合	厚さ(mm)	縦径(mm)	横径(mm)	重量(g)	打面傾斜(°)	剥離面傾斜(°)	剥離面長さ(mm)	剥離面幅(mm)	剥離面面積(mm ²)	剥離面長さ(mm)	剥離面幅(mm)	剥離面面積(mm ²)	備考
23	1	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	19	42.0	44.7	12.7	27.7	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	2	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	12	21.0	22.1	19.1	43.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	3	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	23	49.3	53.2	21.0	43.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	4	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	17	31.3	26.7	26.1	29.9	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	5	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	8	22.2	27.1	21.0	21.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	6	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	22.0	22.0	22.1	11.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	7	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	9	49.3	25.1	42.1	43.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	8	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	9	46.9	46.1	26.1	26.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	9	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	26	71.2	33.1	25.1	27.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	10	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	19	31.3	32.0	17.0	20.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	11	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	27.0	12.1	4.1	11.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	12	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	12	26.2	25.1	19.1	12.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	13	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	13	45.0	17.0	11.1	4.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	14	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	17	47.1	21.1	21.1	4.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	15	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	43.0	19.1	11.1	4.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	16	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	4	55.0	32.0	11.0	11.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	17	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	39.0	45.0	21.1	12.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	18	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	14	72.0	32.1	12.1	24.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	19	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	44.0	39.0	12.1	21.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	20	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	14	49.3	19.1	13.1	4.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	21	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	36.0	39.0	4.1	2.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	22	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	4	27.0	19.1	4.1	11.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	23	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	26.0	24.0	19.1	11.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	24	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	19	45.0	44.0	17.0	44.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	25	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	25.0	12.0	1.0	4.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	26	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	22	22.1	21.1	20.1	4.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	27	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	43.0	13.1	1.0	1.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	28	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	21.0	21.1	12.0	12.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	29	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	11	21.0	21.1	12.0	12.0	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	
23	30	片断	頁岩製	黒色頁岩	側面	なし	23	22.2	26.1	12.1	19.1	40.0	10.0	10.0	100.0	10.0	10.0	100.0	

第2ブロック (第14～16図、第3表、図版3・4・9)

調査区の南西側、標高40m付近の台地肩部に位置する。合計13点の石器で構成され、直径3.2mの円形範囲内で分布を取束する。

石器の出土層位はⅦ層下部からⅧ層にかけてであり、比高差は0.3m程である。この中でもⅧ層上部に集中する感がある。

定型的な石器は認められず、使用痕のある剥片、剥片類で占められ、剥片2点と石核との接合資料が確認された。

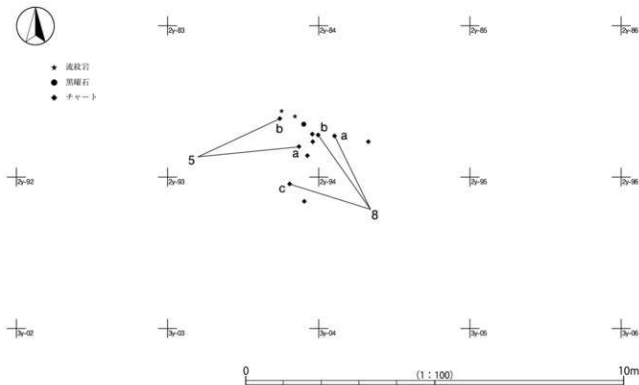
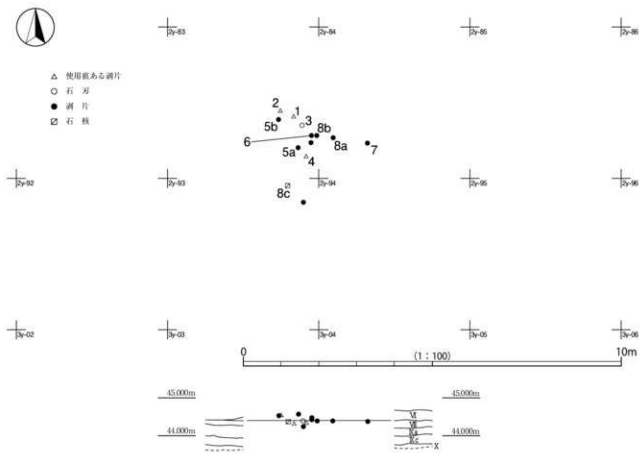
使用される石材はチャートを主体とし、流紋岩、黒曜石が認められるが、流紋岩については大型の使用痕の認められる剥片2点、黒曜石については1点のみの出土であり、石材の観点からは客体的である。

遺物

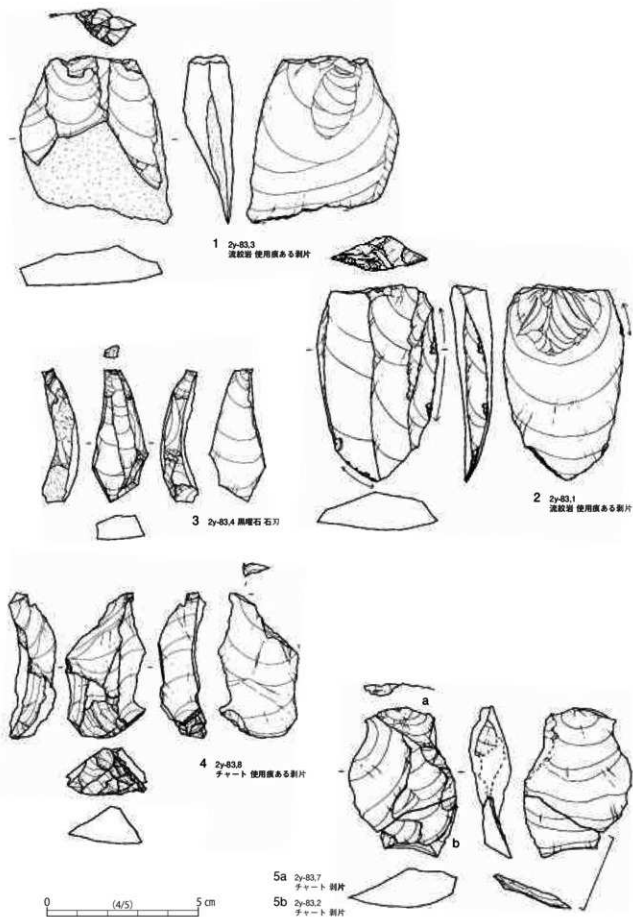
1・2は流紋岩製の使用痕の認められる剥片である。1は背面に原稜面が認められ、剥片末端部に微細な剥落痕が集中して認められる。2は大型の縦長剥片を素材とし、両側縁、末端部に微細な剥落痕が認められる。側縁の剥落痕は疎であるが、末端部の剥落痕は密であり、背腹両面に認められる。

3は黒曜石製の石刃である。末端部付近に最大幅をもつ形状であり、断面形状は直方体を呈する。両側面は主に背面側からの剥離が認められるが、背面は同一方向にある打面から連続して剥片剥離を行った剥離により構成される。

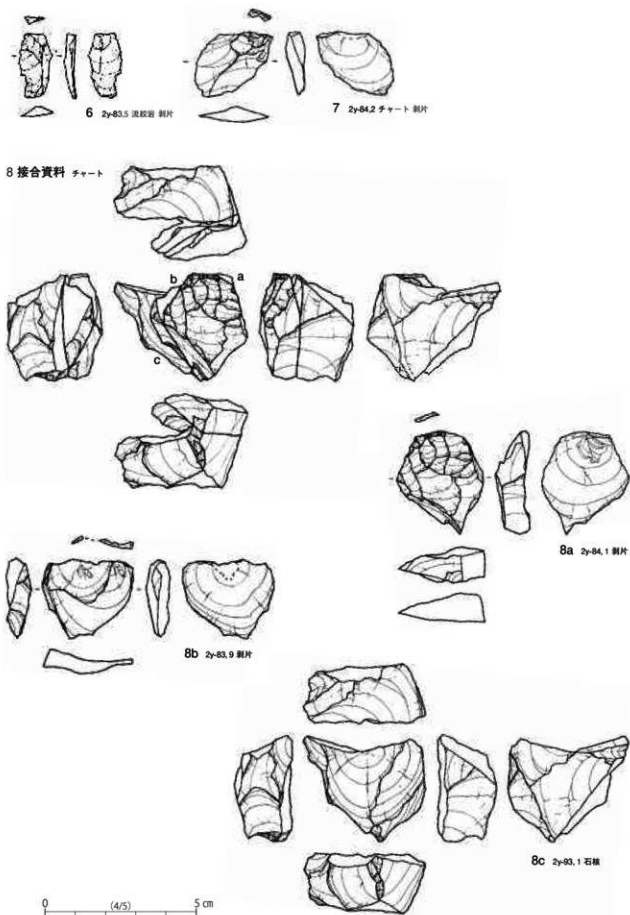
4はチャート製の使用痕の認められる剥片である。背面は多方向からの剥離により構成され、剥落痕の



第14図 第2ブロック分布



第15図 第2ブロック遺物(1)



第16図 第2ブロック遺物(2)

認められる部位は正面左側縁の一部にとどまる。

5はチャート製の縦長剥片である。剥片剥離の際に末端部付近から2分している。6は流紋岩製、7はチャート製の剥片である。いずれも小型であり、背面も多方向からの剥離により構成される。

8はチャート製の剥片2点、石核1点の接合資料である。8a・8bは剥片剥離作業の最終工程で同一打面から連続して作出されている。8cの石核は多方向からの剥離がみられ頻繁に打面を転移している事が理解できる。

第3表 第2ブロック属性表

大規模 コア 番号	小規模 コア 番号	調査 単位 区分	器 種	石 種	形状 番号	調査 単位 番号	標高 番号	標高 値 (m)	経緯度 番号	経緯度 値	重量 (g)	片面積 (cm ²)	片厚 (mm)	片厚率	打痕数	打痕率	備 考
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	流紋岩	調整痕	1	454	309	121	27.6	4512427	1073489	42.03				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	2	36	227.9	277	62	32.9	4512428	1073490	42.04			
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	3	519	271	161	27.1	4512473	1073711	34.26				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	4	434	184	114	44	4512474	1073716	41.73				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	4	211	117	41	47	4512467	1073717	34.40				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	1	20	211	420	42	4512467	1073718	49.42				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	2	54	464	144	117	113	4512468	1073719	45.90			
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	4	463	273	141	27.1	4512469	1073720	34.26				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	3	46	463	267	42	44	4512469	1073721	42.26			
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	3	54	211	262	114	47	4512469	1073722	41.73			
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	3	464	267	33	33	4512469	1073723	34.26				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	3	46	144	47	26.9	4512470	1073724	34.26				
第3表	15.49	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	3	172	171	43	17	4512469	1073725	34.26				

第3ブロック (第17～19図、第4表、図版4・10)

調査区の東側、標高41 m付近の台地平坦部に位置する。合計8点の石器で構成され、長軸4 m、短軸3 mの楕円形の範囲内で分布を収束する。分布状況は全体的に疎である。

石器の出土層位はⅣ層下部からⅥ層にかけてであり、比高差は0.3 m程である。この中でもⅥ層上部に集中する感がある。

定型的な石器は認められず、調整痕のある剥片、剥片類で占められ、ホルンフェルス製の敲石が組成に加わる。

剥片石器で使用される石材は嶺岡産珪質頁岩、流紋岩、凝灰岩、玉髓であるが、嶺岡産珪質頁岩以外は点数的に客体的である。

遺 物

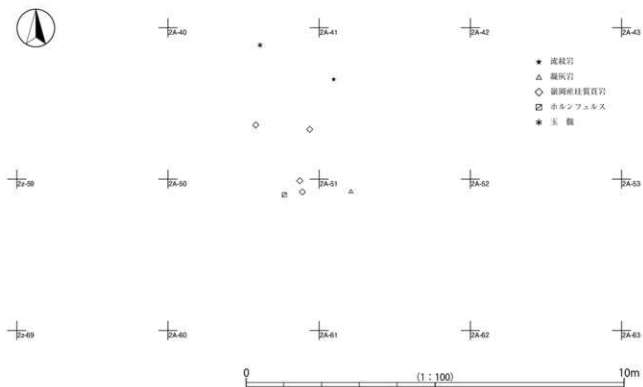
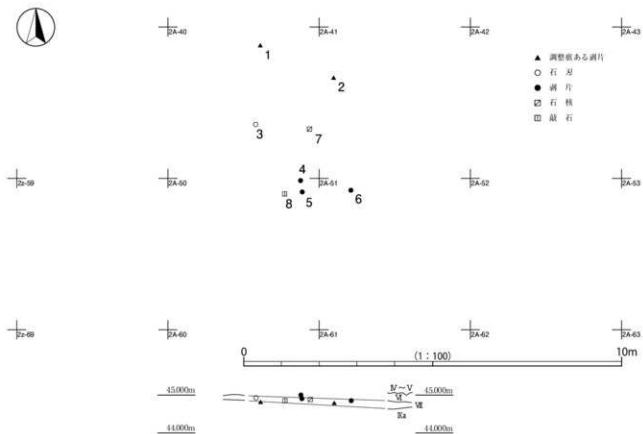
1は玉髓製、2は流紋岩製の調整痕の認められる剥片である。両者とも大型の縦長剥片であり、1は両側縁の背面側に、2は片側縁の腹面側に調整痕が認められる。

3は嶺岡産珪質頁岩製の石刃である。大きく単一打面を有し、背面は同方向からの剥離及び原稜面で構成される。

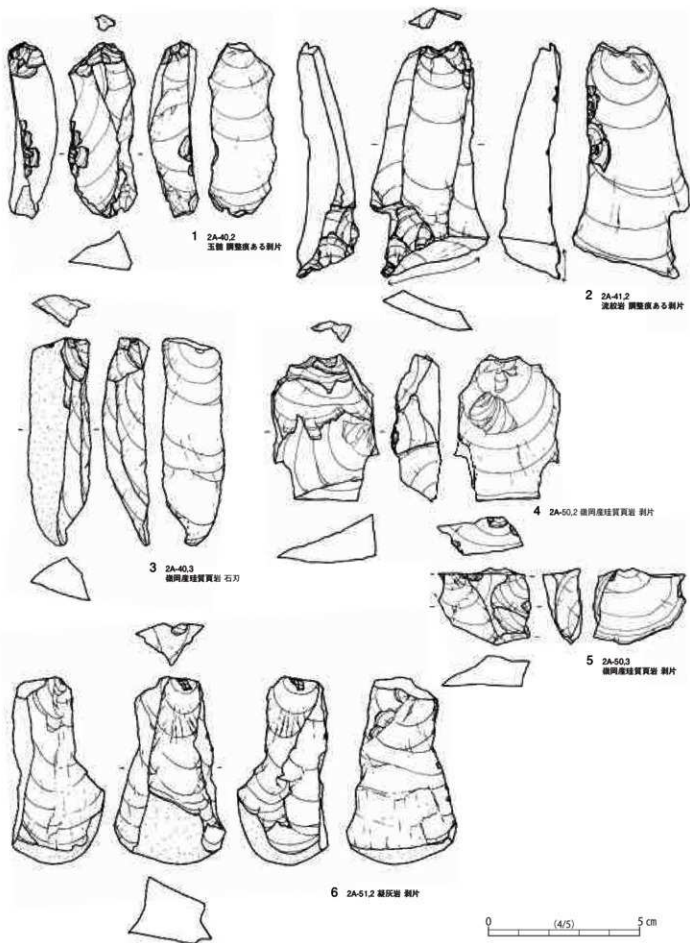
4・5は嶺岡産珪質頁岩製の大型の不定形剥片であり、背面は多方向からの剥離により構成される。6は凝灰岩製の大型の縦長剥片である。部厚な剥片であり、背面は同一方向にある打面から連続して作出された剥離により構成される。

第4表 第3ブロック属性表

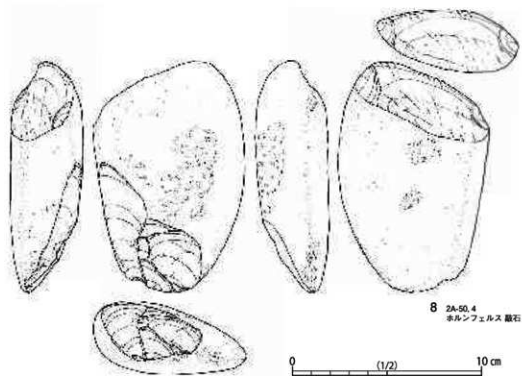
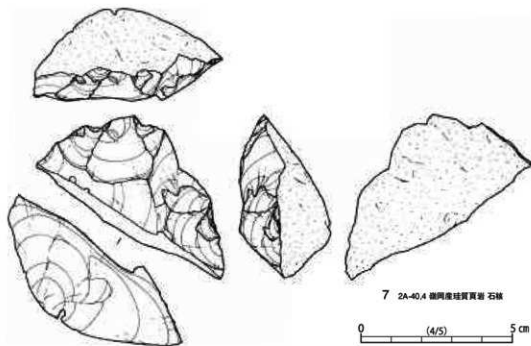
大規模 コア 番号	小規模 コア 番号	調査 単位 区分	器 種	石 種	形状 番号	調査 単位 番号	標高 番号	標高 値 (m)	経緯度 番号	経緯度 値	重量 (g)	片面積 (cm ²)	片厚 (mm)	片厚率	打痕数	打痕率	備 考
第4表	15.49	5	調整痕ある剥片	玉髓	調整痕	1	277	212	152	19.2	4512461	1073442	44.02				
第4表	15.49	5	調整痕ある剥片	流紋岩	調整痕	2	474	211	161	161	4512462	1073474	34.26				
第4表	15.49	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	3	519	419	361	41.1	4512463	1073714	44.02				
第4表	15.49	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	3	764	363	192	31.1	4512463	1073475	44.02				
第4表	15.50	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	4	464	267	121	26.7	4512463	1073477	42.04				
第4表	15.50	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	1	221	144	144	42	4512463	1073477	42.04				
第4表	15.50	5	調整痕ある剥片	チャート	調整痕	4	211	144	264	44.1	4512463	1073477	42.04				
第4表	15.51	5	調整痕ある剥片	凝灰岩	調整痕	4	414	363	294	34.3	4512463	1073480	34.26				



第17図 第3ブロック分布



第18図 第3ブロック遺物(1)

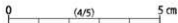
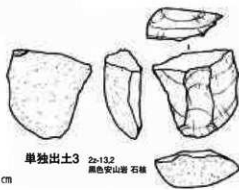
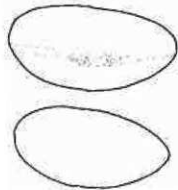
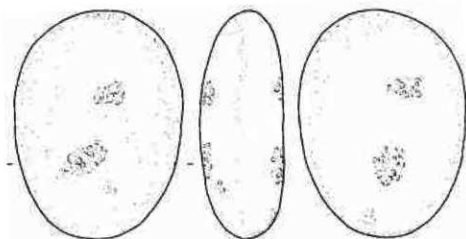
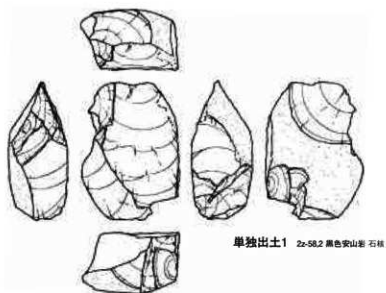


第19図 第3ブロック遺物(2)

7は嶺岡産珪質頁岩製の石核である。大型の剥片素材と考えられ、剥片剥離行程の初期段階に原礫面に加えられた打撃により2分している。剥片剥離は主に原礫面を打面とし、求芯的に行われている。

8はホルンフェルス製の敲石である。大型の転石を素材とし、素材端部には剥落痕が顕著に認められる。単独出土石器（第20図、第5表、図版11）

1は黑色安山岩製の石核である。剥片の作出は主に上部に設けられた打面から行われている。下部には



第20図 単独出土遺物

第3節 縄文時代以降の遺構と遺物

1 土坑 (第1表、第21・22図、図版4)

SK-001

調査範囲の東部2A-30グリッド周辺に位置する。南東にSK-002が隣接している。平面形は不整形円で、長軸方向はN-5°-Eである。規模は長軸1.85m、短軸1.85m、確認面からの深さは1.07mである。掘込みの傾斜は比較的緩やかであり、底面に不正円形で長軸43cm、短軸32cm、底面からの深さ40cmのビットがある。遺物は出土していないが、形状から縄文時代の陥穴と考えられる。

SK-002

調査範囲の東部2A-40グリッド周辺に位置する。北東にSK-001が隣接している。平面形は不整形楕円で、長軸方向はN-13°-Wである。規模は長軸1.86m、短軸1.40m、確認面からの深さは1.35mである。掘込みの傾斜は急で、底面は平坦である。底面の中央部に円形で径約24cm、底面からの深さ42cmのビットがある。遺物は出土していないが、形状から縄文時代の陥穴と考えられる。

SK-004

調査範囲の中央部3z-00グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、いわゆるTビットである。長軸方向はN-21°-Wである。規模は長軸1.83m、短軸1.32m、確認面からの深さは2.44mである。掘込みの傾斜は直線的で、短軸の壁面は底面までほとんど垂直である。遺物は出土していないが、形状から縄文時代の陥穴と考えられる。

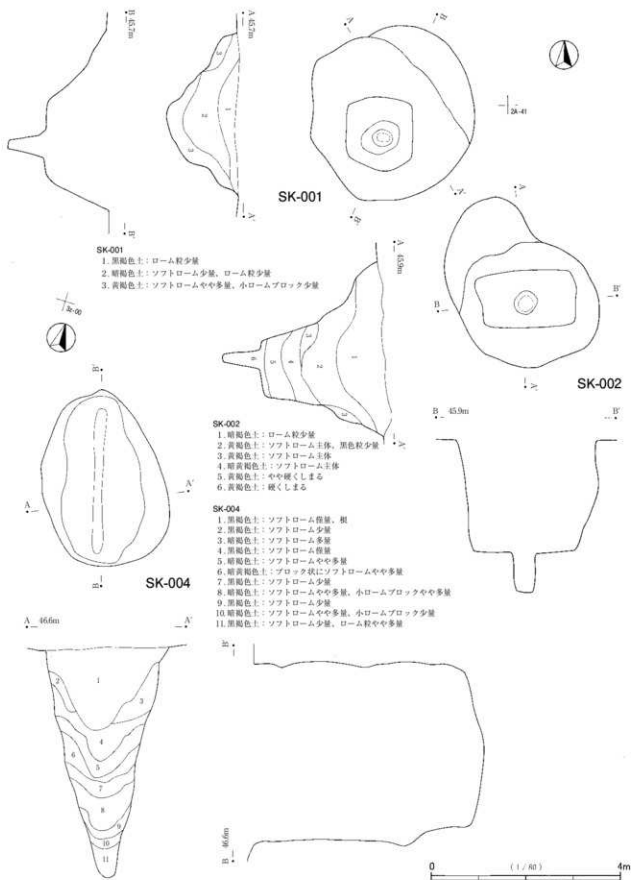
SK-005

調査範囲の中央部2z-00グリッドに位置する。平面形は不整形楕円で、長軸方向はN-72°-Wである。規模は長軸1.83m、短軸1.03m、確認面からの深さは2.10mである。掘込みの傾斜は、長軸・短軸ともに底面までほぼ垂直である。遺物は出土していないが、形状から縄文時代の陥穴と考えられる。

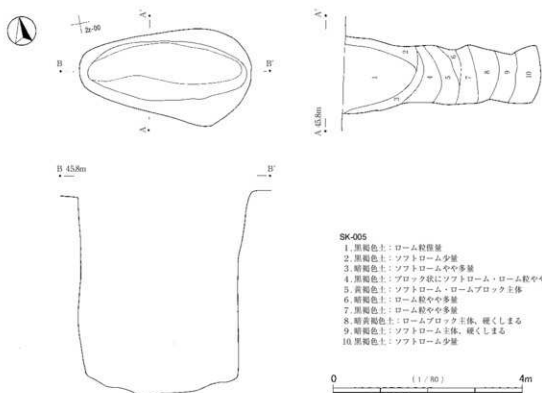
2 土手

SX-001 (第1表、第23図、図版5)

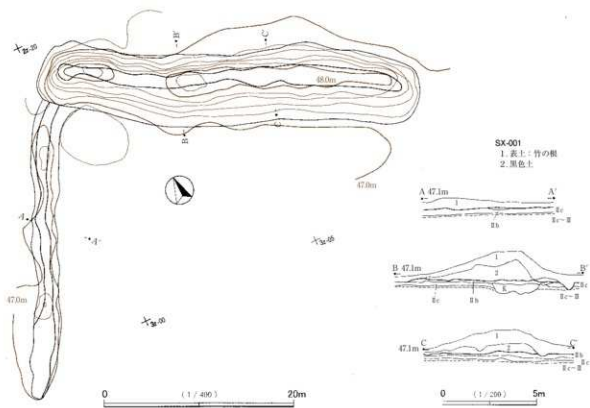
2z-20・21・30～33・40～46・52～58・63～69・76～79・88、2y-39・49・58・59・68・69・77・78・87・88・96・97、3y-06・07グリッドに位置する。平面形状は北西方向(N-48°-W)に走行するやや大形の土手と、北東方向(N-30°-E)に走行する小形の土手が「く」の字形につながっている。規模は、北西方向の土手は長さ8.13m、幅1.50m、高さ1.10m～1.60m、北東方向の土手は長さ6.15m、幅0.61m、高さ0.60mである。盛土は黒色土で、竹の根による攪乱が著しく、竹の根の有無で2層に区分した。近世以降の建物などに伴う土手である可能性がある。



第21図 SK-001・002・004



第22図 SK-005

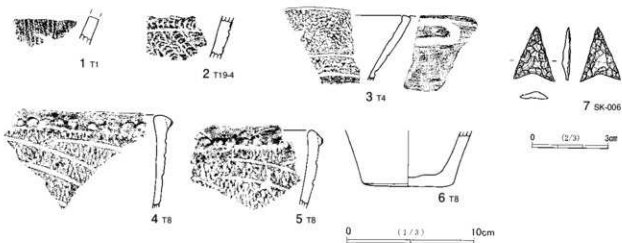


第23図 SX-001

3 遺構外出土遺物 (第24図、図版11)

遺構外からは縄文土器、土師器(甕・杯)、近世の銭貨(嘉慶通寶)が出土しているが、ほとんどが細片であり、図示することができたのは縄文土器だけである。

1は深鉢胴部破片で、外面にR熱糸文が縦位に施される。胎土は白色砂粒をやや多く含む、内面はやや摩耗している。熱糸文土器で夏鳥式の可能性が高い。2は深鉢胴部破片で、半截竹管による平行沈線が横位及び斜位に配され爪形文が充填されるが、横位と斜位では爪形文の原体が異なっている。胎土は砂粒を多く含むが粒子は細かい。前期後葉の諸磯b式である。3～5は後期中葉加曾利B式の深鉢口縁部破片である。3は口縁部がやや強く外傾し、口唇部は角頭状に整形され内側に稜を有する。外面はLR単節縄文を地文とし、尖頭状工具による横位の沈線文が施されて下部は磨り消されている。部分的にススが付着する。内面はミガキ調整され、丸棒状工具による横「U」字状のモチーフが描かれる。胎土は砂粒を多く含む、やや粒子が粗い。加曾利B1式の精製深鉢である。4・5は同一個体で、口縁部がほぼ直立し、口唇部直下に断面三角形で指頭による圧痕を有する紐線文が貼り付けられる。やや節の大きいLR単節縄文を地文とし、丸棒状工具による弧状の条線文が施される。内面は丁寧なミガキ調整が施される。胎土は白色砂粒をやや多く含む。加曾利B2式の粗製深鉢である。6は深鉢底部で、遺存度は約95%で、底径7.2cm、現存器高4.5cmである。外面は無文で横方向のケズリ調整が目立つ。胎土は4・5と類似し白色砂粒をやや多く含む。加曾利B式と推測される。7は頁岩製の石鎌である。凹基で、長さ21.5mm、幅15.7mm、最大厚3.6mm、重量0.7gである。なお、出土地点はSK-006となっているが、人為的な遺構ではないと判断した。



第24図 遺構外出土遺物

第3章 八重門田遺跡

第1節 調査の概要（第25図・26図、第7表）

八重門田遺跡^{注1)}は1期の工業団地造成事業区域内の遺跡範囲（57,600㎡）について、平成13年1月～平成14年3月まで財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を実施し、平成16年度に報告書が刊行されている。今回の2期の調査区²⁾は1期の調査区の南東に隣接する。台地は一続きであるが、ちょうど台地がくびれて細尾根状になった部分が1期との境となり、遺構が見られない部分である。

今回の発掘調査の期間は、上層確認調査が平成25年6月2日～平成26年3月24日、上層本調査及び下層の確認調査・本調査が平成26年6月2日～平成27年1月30日である。調査対象面積35,870㎡の約10%に当たる3,520㎡の確認トレンチを設定し、上層確認調査を行った。その結果、調査区の西部と南東部の台地平坦面が比較的広い部分で遺構が検出されたため、11,100㎡について本調査を行った。また、下層確認調査は944㎡の確認グリッドを設定して行った。そのうち10か所で旧石器の分布の広がりが見られたため、1,100㎡について本調査を実施した。

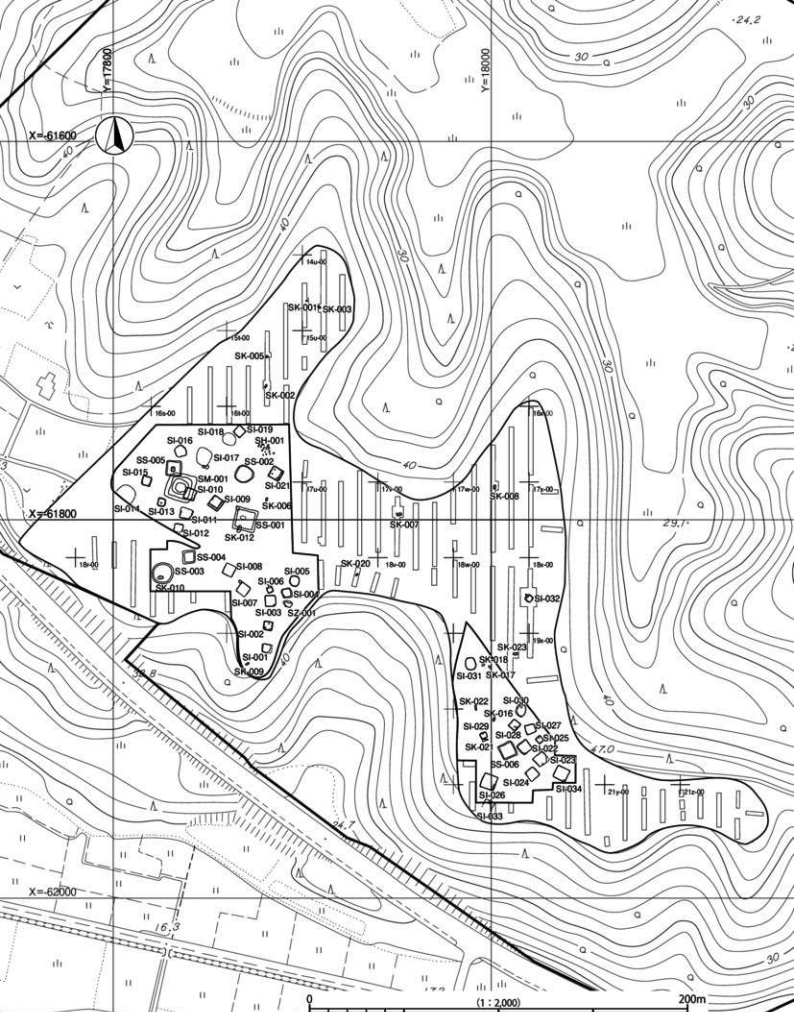
旧石器時代は10か所の石器集中地点の本調査（1,100㎡）を実施した。この結果、Ⅴ層からⅢ層までの幅広い時期差が認められた。これらは所属層により4文化層に分類可能である。

縄文時代の遺構は全て炉穴や陥穴、土坑であり、竪穴住居跡は検出されなかった。遺構の分布に傾向は見られず、台地全体に散漫に検出された。遺物の出土は少なく、早期後半の条痕文系の土器片が主体で、前期後半までの土器と石器が出土している。特に、表裏縄文土器や有舌尖頭器が5点出土するなど草創期の遺物が比較的まとまって出土している。

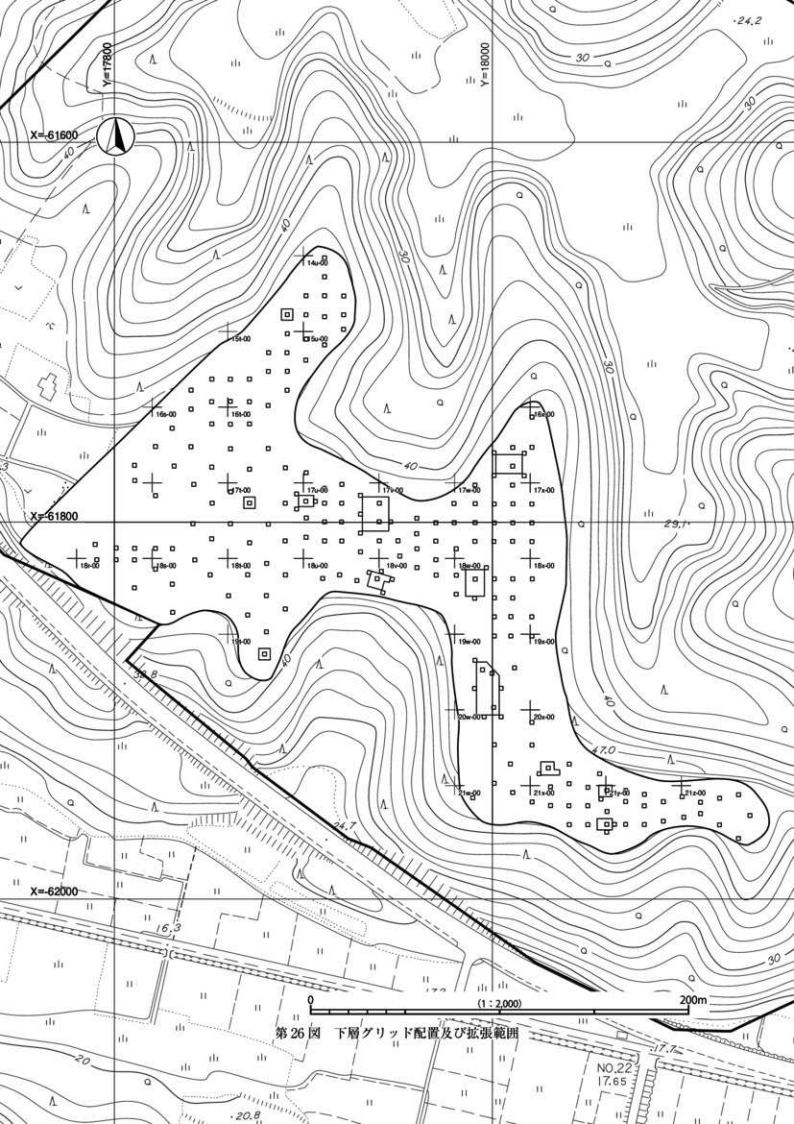
古墳時代以降の遺構は、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡33軒、ピット群1か所、遺物集中地点1か所、方形・円形区画墓6基、近世の塚1基である。これらの遺構は比較的平坦部が広い東側と西側に大きく分かれて分布し、台地中央から南側の縁辺部にかけて展開している。台地中央部は細尾根状となり、当該時期の遺構は見られない。本調査区西側では、白玉を主体とする石製模造品製作関連遺物を多量に出土した古墳時代中期の遺構がまとまって検出されている。

注1) 調査主体が異なるため今回報告する遺跡名に(2)は付していないが、年度をまたいでの調査となったため、事務処理上、平成26年度調査分の記録類には(2)が付いている。

2) 今回の調査区の南西側には事業範囲ではあるものの調査対象部分から外れている地点がある。これは工事が行われず、緑地として残す部分に当たるためである。



第 25 図 上層トレンチ配置・本調査範囲及び遺構分布



第26図 下層グリッド配置及び拡張範囲

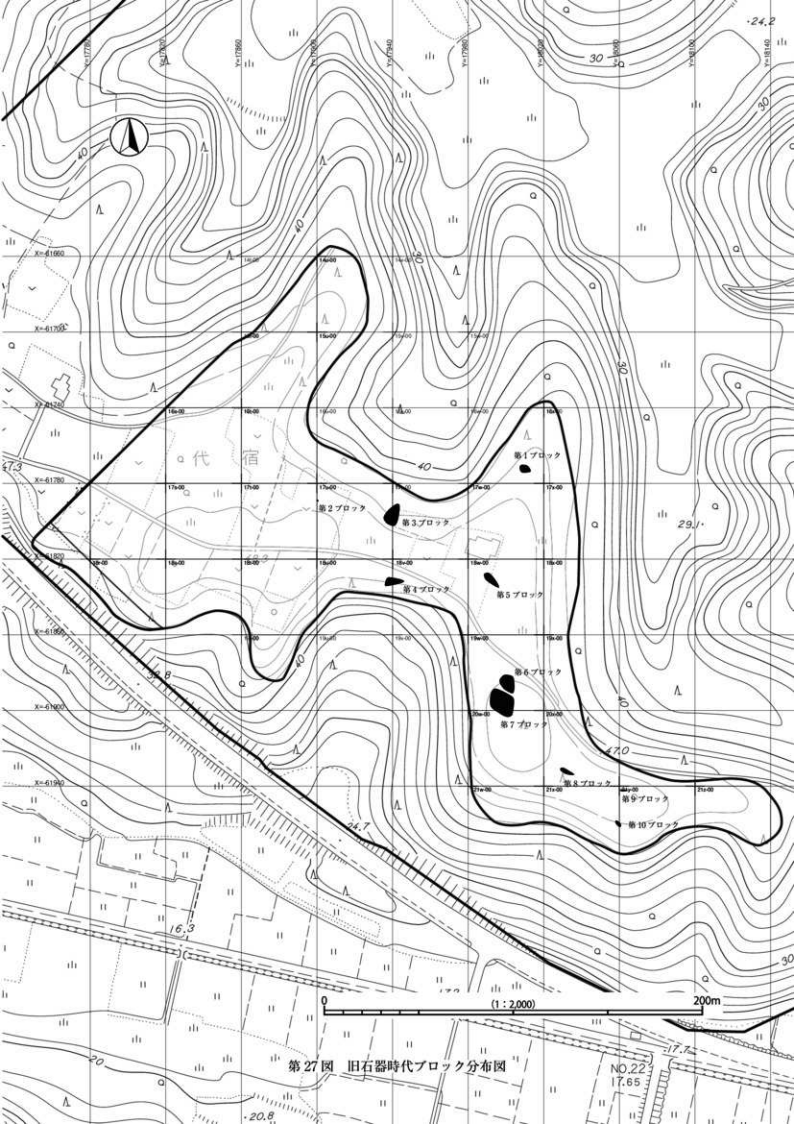
第7表 遺構一覧表

() 測定値 < > 現存値

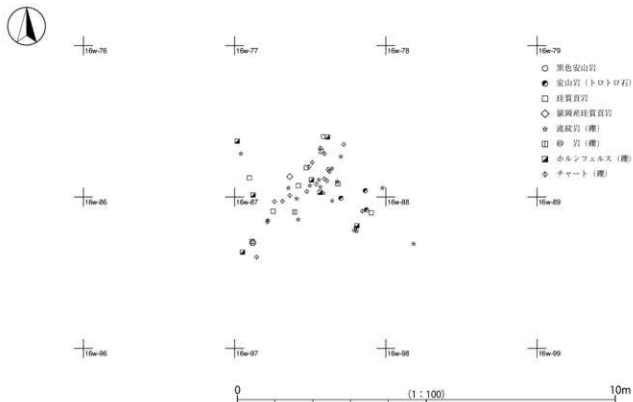
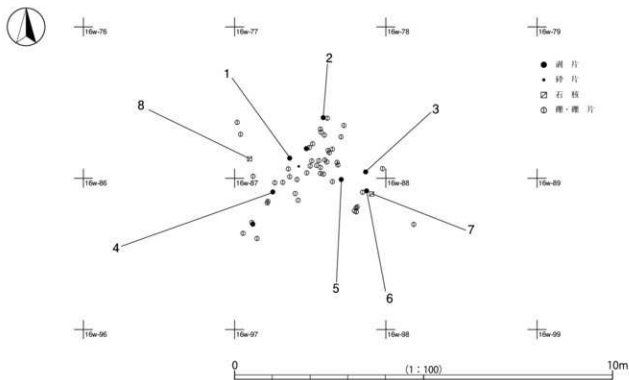
遺構No.	種類	位置	主軸方向	主軸長 (m)	幅 (m)	床面積 (㎡)	炉・カマド位置	貯蔵穴位置	壁溝	時期
SI-001	竪穴住居	19s-15	N-8°-E	4.16	(4.58)	(18.81)	北寄り	(無)	無	古墳時代中期
SI-002	竪穴住居	18s-95	N-8°-E	4.20	4.36	18.03	北寄り	入口右	全周	古墳時代中期
SI-003	竪穴住居	18s-56	N-S	5.52	5.22	25.87	北寄り	入口右	無	古墳時代中期
SI-004	竪穴住居	18s-47	N-14°-W	4.10	4.26	16.21	北寄り	入口左	無	古墳時代中期
SI-005	竪穴住居	18s-39	N-24°-E	5.00	4.72	19.98	北寄り	無	無	古墳時代中期
SI-006	竪穴住居	18s-45	N-18°-W	2.76	2.82	8.08	北壁 (カマド)	無	ほぼ全周	平安時代
SI-007	竪穴住居	18s-42	N-55°-W	5.62	5.58	30.55	西寄り	入口左	無	古墳時代中期
SI-008	竪穴住居	18s-10	N-27°-W	5.73	5.52	31.51	北寄り	入口右	無	古墳時代中期
SI-009	竪穴住居	17s-28	N-37°-E	6.28	6.27	39.55 (27.8)	北東寄り	入口右	全周	古墳時代中期
SI-010	竪穴住居	17s-15	N-71°-W	5.64	5.74	32.38	西寄り	入口左	全周	古墳時代中期
SI-011	竪穴住居	17s-44	N-72°-W	(5.28)	(5.94)	(30.87)	やや北寄り	無	無	古墳時代中期
SI-012	竪穴住居	17s-63	N-10°-E	<3.20>	4.31	-	(中央)	-	無	古墳時代前期
SI-013	竪穴住居	17s-21	N-10°-E	3.68	3.66	12.44	中央	無	無	古墳時代中期?
SI-014	竪穴住居	17r-16	(N-40°-E)	-	(10.0)	-	北東寄り	無	-	古墳時代前期~中期
SI-015	竪穴住居	16s-99	N-75°-W	4.62	4.56	20.68	西寄り	入口左	全周	古墳時代中期
SI-016	竪穴住居	16s-63	N-28°-W	5.72	5.62	27.42	北西寄り	入口右	無	古墳時代前期
SI-017	竪穴住居	16s-66	(N-28°-E)	(8.8)	(8.6)	(60.0)	無	無	無	古墳時代前期?
SI-018	竪穴住居	16s-40	N-70°-W	(7.1)	(6.4)	(36.5)	(中央)	無	無	古墳時代前期?
SI-019	竪穴住居	16s-31	N-46°-E	4.95	4.88	(20.55)	北東寄り	入口右	3/4	古墳時代中期
SI-020	欠番 (SI-001 ビット群)									
SI-021	竪穴住居	16s-86	N-30°-E	5.92	6.12	36.67	北東寄り	無	3/4	古墳時代中期
SI-022	竪穴住居	20s-49	N-43°-W	5.70	5.96	33.38	北西寄り	入口左	1/3	古墳時代中期
SI-023	竪穴住居	20s-61	N-50°-E	(6.3)	(5.9)	(36.64)	(北寄り)	入口右	無	古墳時代中期
SI-024	竪穴住居	20s-80	N-42°-W	5.60	5.76	30.60	北西寄り	無	無	古墳時代中期
SI-025	竪穴住居	20s-41	N-44°-W	3.14	2.92	8.85	北西寄り	無	1/2	古墳時代中期
SI-026	竪穴住居	20s-94	N-110°-E	7.42	7.42	54.00	東壁 (カマド)	カマド右	無	古墳時代中期
SI-027	竪穴住居	21s-30	N-72°-E	5.20	4.82	22.78	やや西寄り	炉・入口間	無	古墳時代中期
SI-028	竪穴住居	20s-34	N-45°-E	4.50	4.28	(19.11)	無	入口右	無	古墳時代前期
SI-029	竪穴住居	20s-33	N-25°-E	2.8	3.3	8.60	北壁 (カマド)	無	無	古墳時代後期
SI-030	竪穴住居	20s-08	N-8°-E	(5.82)	(4.66)	(23.23)	北寄り	入口右	無	古墳時代前期
SI-031	竪穴住居	19s-42	N-7°-W	6.24	5.20	27.81	北寄り	無	1/2	古墳時代前期
SI-032	竪穴住居	18s-59	N-50°-W	3.08	(3.1)	(8.98)	北西壁 (カマド)	無	1/2	奈良時代
SI-033	竪穴住居	21s-24	N-25°-E	(4.0)	(5.28)	-	北寄り	無	無	古墳時代中期
SI-034	竪穴住居	20s-84	N-24°-E	6.54	6.82	44.52	北寄り	入口右	無	古墳時代中期

() 推定値 < > 現存値

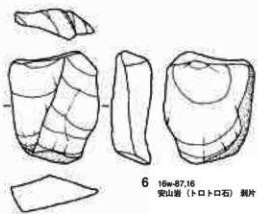
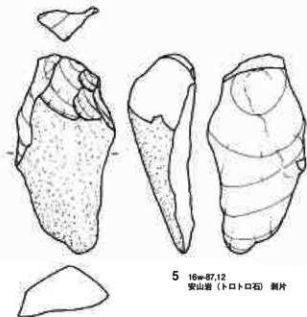
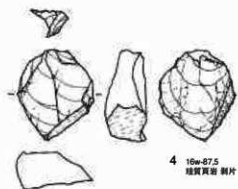
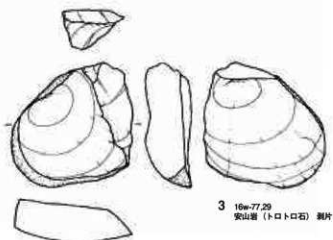
遺構No	種類	位置	主軸方向	長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	時期	備考
SK-001	土坑	14u-60	N-18°-E	0.94	0.82	0.38	縄文時代	
SK-002	土坑	15t-75	N-25°-E	1.97	1.04	0.55	縄文時代	
SK-003	陥穴	14u-61	N-51°-W	1.90	1.48	2.60	縄文時代	
SK-004	炉穴	17u-72	N-31°-W	1.42	0.82	0.60	縄文時代	
SK-005	土坑	15t-35	N-8°-E	1.37	1.30	0.60	縄文時代	
SK-006	土坑	17t-25	N-2°-W	1.60	0.82	0.52	縄文時代	
SK-007	陥穴	17v-42	N-99°-W	2.70	1.55	2.10	縄文時代	
SK-008	陥穴	17w-05	N-12°-E	2.25	1.33	2.63	縄文時代	
SK-009	炉穴	19t-42	N-65°-E	2.30	0.85	0.70	縄文時代	
SK-010A・B	陥穴	18s-21	N-66°-W	2.07	1.38	1.03	縄文時代	
SK-011	土坑	17t-81	N-105°-W	2.18	1.05	0.30	縄文時代	
SK-012	土坑	17t-61	N-23°-E	3.80	(1.98)	0.77	縄文時代	
SK-013	土坑	16s-86	N-25°-W	1.05	1.25	0.37	縄文時代	
SK-014	土坑	16s-87	N-68°-E	1.94	1.45	0.57	縄文時代	
SK-015	欠番 (SS-005の主体部)							
SK-016	炉穴	20w-15	N-162°-W	2.17	1.11	0.43	縄文時代	
SK-017	炉穴	19w-44	N-139°-E	1.62	0.81	0.20	縄文時代	
SK-018	土坑	19w-43	N-43°-E	1.40	0.95	0.35	縄文時代	
SK-019	土坑	18t-31	N-54°-W	(2.50)	1.42	0.35	縄文時代	
SK-020	陥穴	18u-27	N-52°-E	1.50	0.75	0.91	縄文時代	
SK-021A・B	炉穴	20w-44	N-75°-W	3.17	1.65	0.50	縄文時代	
SK-022	炉穴	19w-82	N-4°-W	2.58	0.83	0.44	縄文時代	
SK-023	陥穴	19w-28	N-88°-W	(2.79)	(1.45)	1.00	縄文時代	
遺構No	種類	位置	形状	南北範囲 (m)	東西範囲 (m)	深さ (m)	時期	備考
SZ-001	遺物集中地点	18t-68	(不整形)	3.30	4.70	0.44	古墳時代中期	滑石未成品等出土
SH-001	ピット群	16t-55	(ピット24基)	6.00	8.60	-	古墳時代	調査時はSI-020
遺構No	種類	位置	主軸方向	全長 (m)	台部長 (m)	周溝深さ (m)	時期	備考
SS-001	方形区画墓	17x-33	N-13°-E	11.60	10.00	0.56	奈良・平安時代	主体部あり
SS-002	円形区画墓	16t-82	-	9.92	9.08	0.28	奈良・平安時代	
SS-003	円形区画墓	18s-11	-	11.32	10.12	0.40	奈良・平安時代	
SS-004	方形区画墓	18s-04	N-2°-W	6.72	5.60	0.26	奈良・平安時代	
SS-005	方形区画墓	16s-82	N-5°-E	8.20	7.20	0.24	奈良・平安時代	主体部SK-015(調査時)あり
SS-006	方形区画墓	20w-57	N-24°-W	9.00	7.04	0.16	奈良・平安時代	
遺構No	種類	位置	主軸方向	全長 (m)	高さ (m)	周溝深さ (m)	時期	備考
SM-001	塚	17s-03	N-15°-E	13.50	2.60	-	近世	旧八重門田古墳



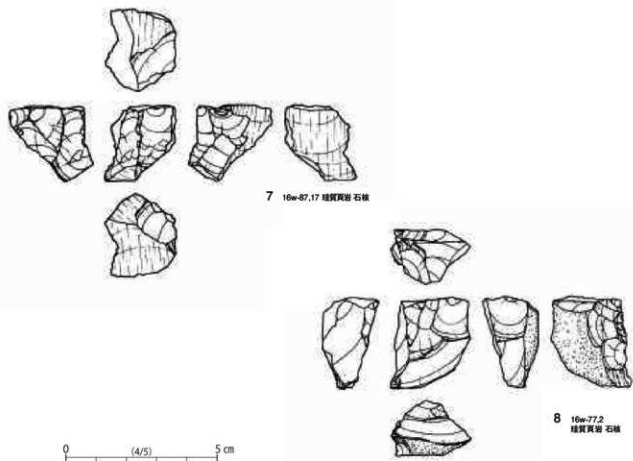
第27図 旧石器時代ブロック分布図



第28図 第1ブロック分布



第29図 第1ブロック遺物(1)



第30図 第1ブロック遺物(2)

第2ブロック(第31～33図、第9表、図版13・36・37)

調査区西側に広がる台地平坦部の中央、標高49m付近に所在する。

0.5mの範囲で集中がみられ、礫片1点が集中から4m程の距離をおき出土している。出土層位はⅢ層からⅤ層上面であるが、Ⅲ層下部に集中する感がある。

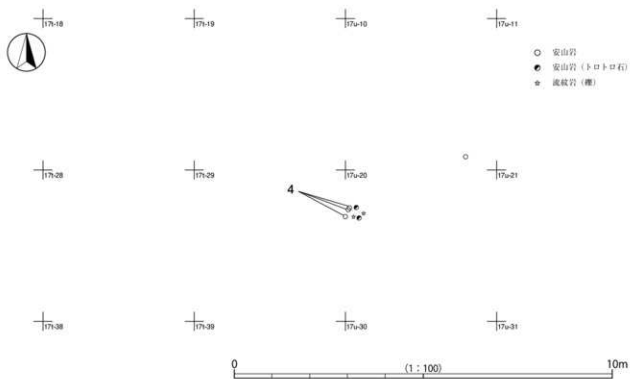
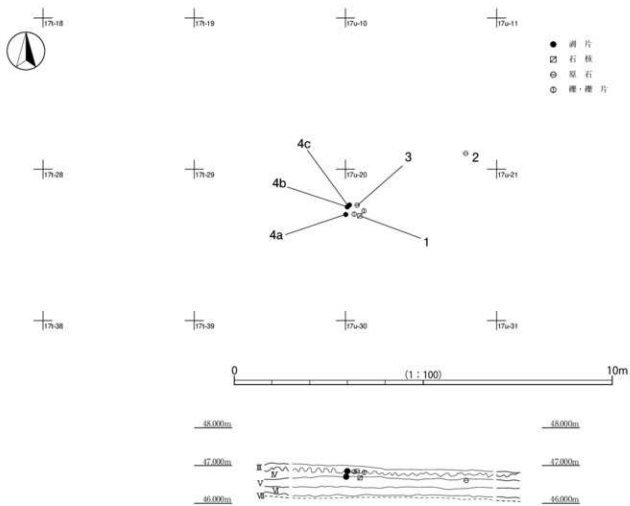
石器の出土点数は合計8点を数え、点数的に小規模なブロックといえる。定型的な石器は組成に含まれず剥片、石核、礫片で構成され、他に安山岩製の原石が2点出土する。

遺物

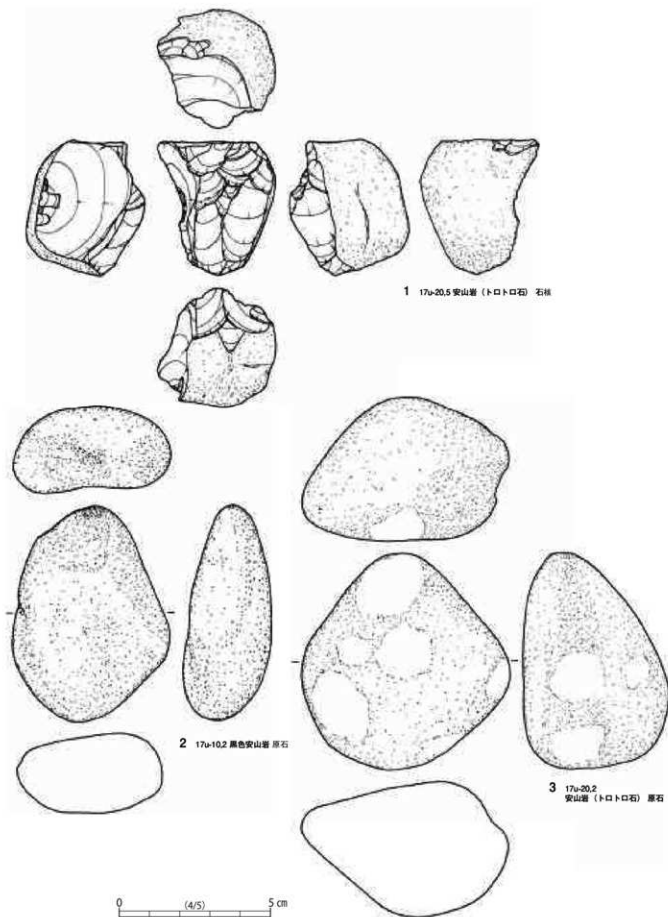
1は安山岩(トトロ石)製の石核である。6cmほどの原石から打面作出し剥片剥離を行った後、上面にみられる最終打面を作出、連続的に剥片剥離を行っている。

2は黒色安山岩製、3は安山岩(トトロ石)製の原石である。いずれも転石であり、敲打痕等の剥片剥離作業を意図した痕跡は認められない。

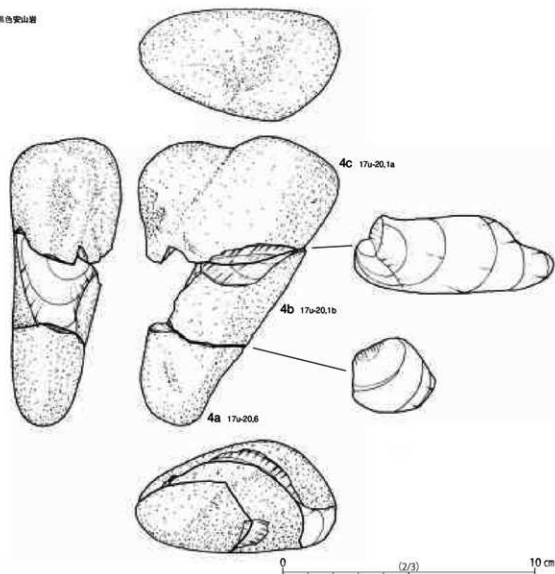
4は黒色安山岩製の接合資料である。三角形の転石を素材としている。側縁からの打撃により4a・4bと4cを打割し、打割面を打面として剥片剥離を行っているが、この際4aと4b間に混入する節理面で分離している。このためか以後の剥片剥離は行われていない。



第31図 第2ブロック分布



第32図 第2ブロック遺物(1)



第33図 第2ブロック遺物(2)

第9表 第2ブロック属性表

土層別	プロット	プロット	遺物	種別	形状	石種	重量	長さ	幅	厚さ	最大径	最大幅	最大厚	重量	土層別	土層別	土層別
遺物	17u-20	1	石核	剥片(1方向)			1	110	30	30	75	4770(2)	1700(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(2方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(1方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(2方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(1方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(2方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(1方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(2方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(1方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			
遺物	17u-20	1	石核	剥片(2方向)			1	75	30	20	170	410(2)	170(1)	4000			

第3ブロック(第34～37図、第10表、図版13・37・38)

調査区の中央部、南北両方向から進入する谷頭に挟まれた、標高46mの緩斜面部に位置する。

南北方向11m、東西方向6mの範囲で合計105点の石器が出土し、範囲の中央やや南寄り17u-48グリッドに集中区が認められる。出土層位はⅣ層からⅧ層にかけてであるが、北に向かい下る緩斜面部のため垂直分布に比高差がみられる。最も出土量の多い層はⅥ層に比定される。

定型の石器は認められず、剥片類、石核、礫で形成される。石材は多種であり、剥片石器は安山岩を主体とし流紋岩、チャート等が客地的に混在する。礫については流紋岩を主体に砂岩、ホルンフェルス、

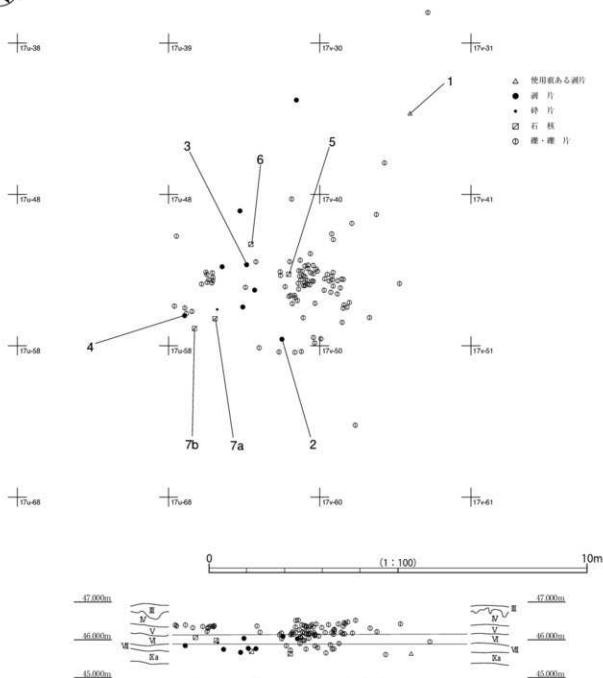
チャートが使用される。

遺物

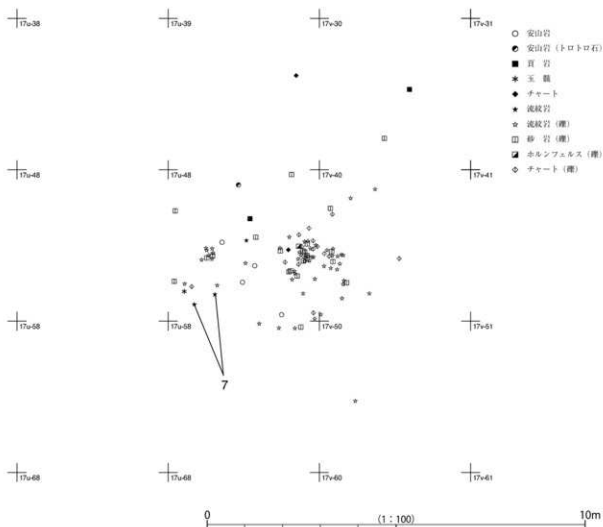
1は頁岩裂の使用痕の認められる剥片である。打面を広く設定し作出された縦長剥片であり、背面には明瞭な稜がみられる。ほぼ全周に微細な剥落痕が認められる。

2から4は剥片である。2は黒色安山岩裂、3は流紋岩裂の大型の不定形剥片であり、背面の大部分は原礫面で占められる。4は玉髓製の不定形剥片で、背面は多方向への剥離により構成される。

5・6は石核である。5はチャート製の小型の転石を素材とし、原礫面を削ぐような剥片剥離を行っている。6は頁岩裂で立方体形状を呈する。上下両端から剥片剥離が行われている。



第34図 第3ブロック分布(1)



第35図 第3ブロック分布(2)

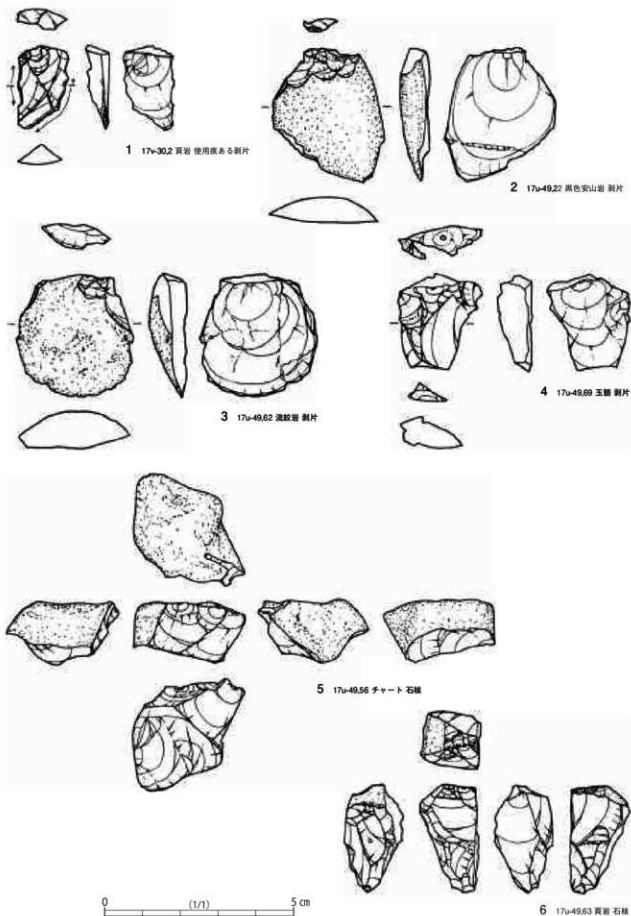
7は流紋岩製の接合資料である。石核2点の接合であり、剥片剥離時に2分したものである。大型で部厚な剥片を石核として利用し、主に腹面を打面とし剥片剥離を行っている。

第4ブロック (第38・39図、第11表、図版13・38)

調査区の中央部、南北両方向から進入する谷頭に挟まれた標高46mの緩斜面部に位置し、第3ブロックの南約40mの距離を置く。第3ブロックは北から進入する谷の谷頭に所在するのに対し、第4ブロックは南から進入する谷の谷頭に該当する。

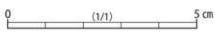
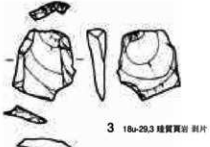
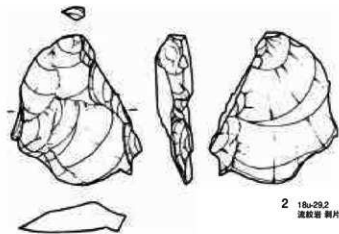
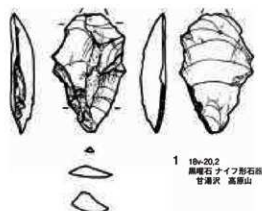
合計5点の小規模なブロックであり、出土層位はⅢ層からⅨa層に比定される。

黒曜石製のナイフ形石器を石器組成に含み、他は剥片、破片で構成される。使用される石材は黒曜石3点の他、流紋岩、珪質頁岩が1点ずつとなる。

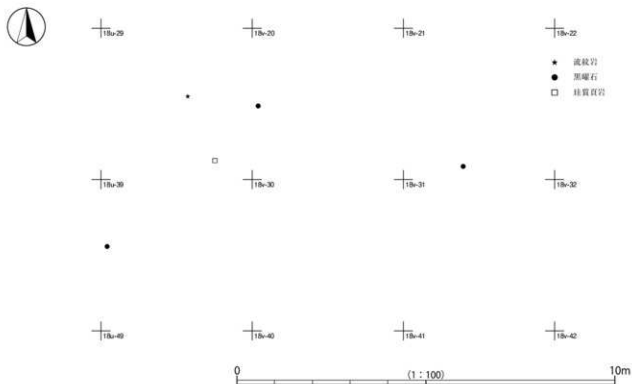
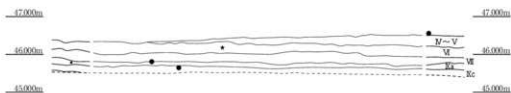
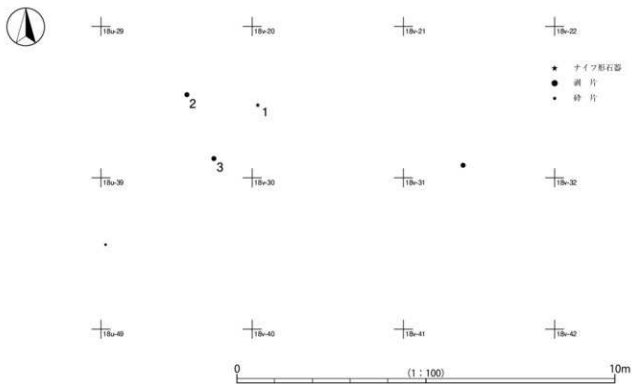


第36図 第3ブロック遺物(1)

10層	ブロック	ポイント	遺物 番号	種別	品名	寸法	材質	用途	調査 番号	発見 位置	出土 層	出土 位置	出土 時期	備考
YB	10-1	10	100	破片	燧石	-	-	-	100	4078-20	200207	4078		
YB	10-1	10	101	破片	燧石	-	-	-	101	4078-207	200210	4078		
YB	10-1	10	102	破片	燧石	-	-	-	102	4078-17	200211	4078		
YB	10-1	10	103	破片	燧石	-	-	-	103	4078-19	200212	4078		
YB	10-1	10	104	破片	燧石	-	-	-	104	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	105	破片	燧石	-	-	-	105	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	106	破片	燧石	-	-	-	106	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	107	破片	燧石	-	-	-	107	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	108	破片	燧石	-	-	-	108	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	109	破片	燧石	-	-	-	109	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	110	破片	燧石	-	-	-	110	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	111	破片	燧石	-	-	-	111	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	112	破片	燧石	-	-	-	112	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	113	破片	燧石	-	-	-	113	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	114	破片	燧石	-	-	-	114	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	115	破片	燧石	-	-	-	115	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	116	破片	燧石	-	-	-	116	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	117	破片	燧石	-	-	-	117	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	118	破片	燧石	-	-	-	118	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	119	破片	燧石	-	-	-	119	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	120	破片	燧石	-	-	-	120	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	121	破片	燧石	-	-	-	121	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	122	破片	燧石	-	-	-	122	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	123	破片	燧石	-	-	-	123	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	124	破片	燧石	-	-	-	124	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	125	破片	燧石	-	-	-	125	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	126	破片	燧石	-	-	-	126	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	127	破片	燧石	-	-	-	127	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	128	破片	燧石	-	-	-	128	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	129	破片	燧石	-	-	-	129	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	130	破片	燧石	-	-	-	130	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	131	破片	燧石	-	-	-	131	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	132	破片	燧石	-	-	-	132	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	133	破片	燧石	-	-	-	133	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	134	破片	燧石	-	-	-	134	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	135	破片	燧石	-	-	-	135	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	136	破片	燧石	-	-	-	136	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	137	破片	燧石	-	-	-	137	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	138	破片	燧石	-	-	-	138	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	139	破片	燧石	-	-	-	139	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	140	破片	燧石	-	-	-	140	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	141	破片	燧石	-	-	-	141	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	142	破片	燧石	-	-	-	142	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	143	破片	燧石	-	-	-	143	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	144	破片	燧石	-	-	-	144	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	145	破片	燧石	-	-	-	145	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	146	破片	燧石	-	-	-	146	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	147	破片	燧石	-	-	-	147	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	148	破片	燧石	-	-	-	148	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	149	破片	燧石	-	-	-	149	4078-24	200214	4078		
YB	10-1	10	150	破片	燧石	-	-	-	150	4078-24	200214	4078		



第38図 第4ブロック遺物



第39図 第4ブロック分布

2はチャート製の縦長剥片である。背面は原礫面で構成される。節理の混入が著しく、腹面の剥離痕は剥離方向の観察が容易ではない。

第6ブロック（第42～49図、第13表、図版14・39～41）

南東に向かい延伸する尾根状台地の平坦部、標高48m付近に所在する。

分布範囲は直径約10mを測り、この中で19w-65グリッド付近の剥片類を主体とした一群と、19w-75グリッド付近の礫を主体とした一群に集中が二分する。出土層位はⅢ層からⅤ層上部にかけてであり、特にⅣ層からⅤ層にかけて集中する感がある。

出土点数は合計237点を数え、石器組成はナイフ形石器、使用痕の認められる剥片、剥片類で構成され、礫を組成に含む。石材は剥片石器が珪質頁岩、玉髄を主体とし、黒曜石、安山岩系、流紋岩等が使用される。チャートは点数的に客体的である。礫は流紋岩が大半を占め、他に砂岩、チャート、閃緑岩が使用される。

遺物

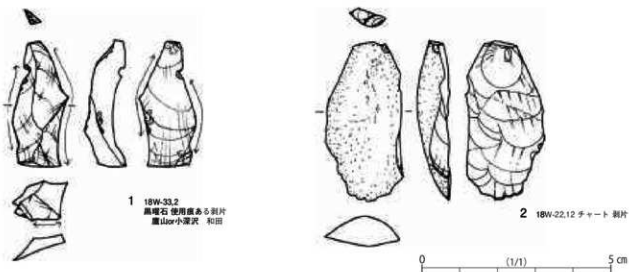
1・2は黒曜石製のナイフ形石器である。1は背面構成がほぼ原礫面の縦長剥片を素材とし、打面側を基部に設定している。調整はほぼ全周に及ぶ。2は部厚な不定形剥片を素材とし、調整は全周に及ぶ。先端部が欠損する。

3は黒曜石製の削器である。部厚な縦長剥片を素材としており、剥片末端部に腹面側からの急角度の調整を施している。

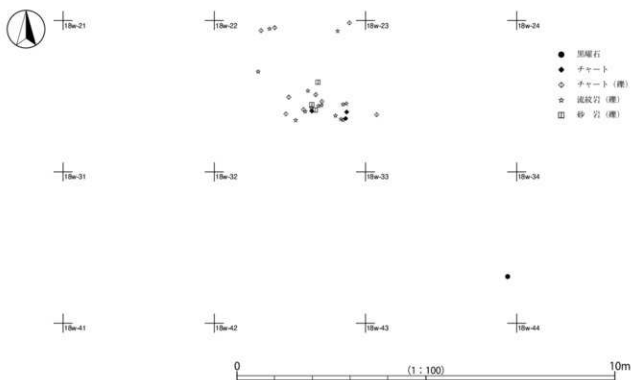
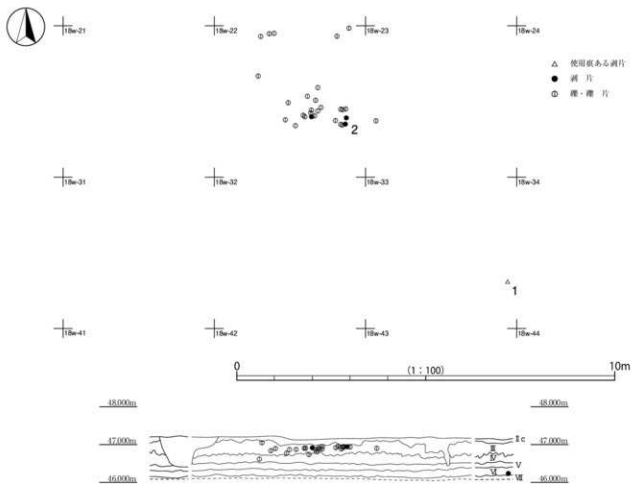
4は玉髄製の使用痕の認められる剥片である。背面が原礫面で構成される剥片を素材とし、剥離痕は片側縁のみに認められる。

5から22は剥片である。5から8は黒曜石製でいずれも不定形剥片である。5・6は打面を広く設定して作出されており、背面構成は多方向からの剥離である。9から16は珪質頁岩製で黒曜石製の剥片と同様に打面を広く設定して作出されているものが多い。背面構成は多方向からの剥離が多く見受けられるが、黒曜石製の剥片と比較して単純な構成となる。17から22は玉髄製で前述した2種と比較すると大型で部厚な個体が多い。

23から26は珪質頁岩製の剥片による接合資料である。23は2点、25は3点が接合し、いずれも同一打面から連続して作出されている。24・26は剥片剥離の際に二分したものである。27は玉髄製の接合資

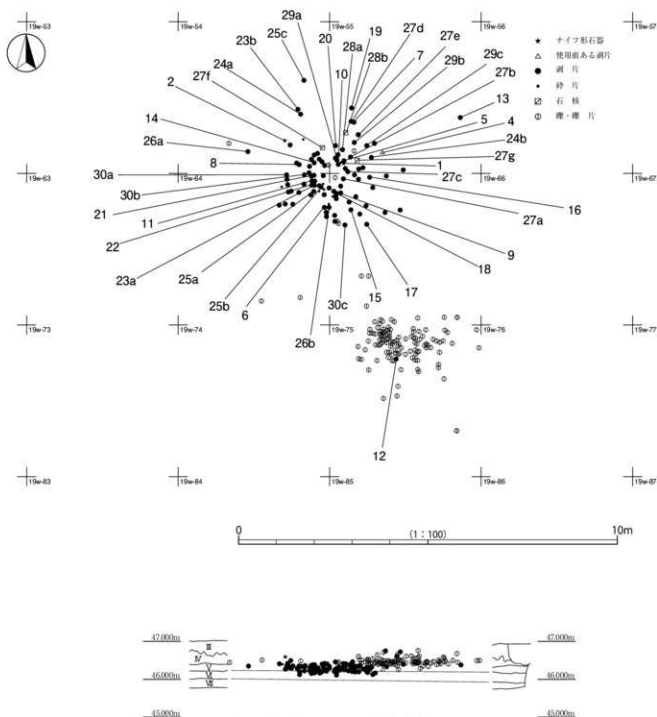


第40図 第5ブロック遺物



第41図 第5ブロック分布

料で石核を含め7点が接合している。剥片は剥片剥離時に打面もしくは中途から2分しているものが多く、節理の混入が著しい個体であることが理解できる。剥片剥離は打面を頻繁に転移しながら行われており、作出された剥片も不定形剥片となる。28は珪質頁岩裂で石核と剥片の接合例である。節理面が大きく存在し、この個体の剥片剥離時に節理面から分割したものと考えられる。打面を頻繁に転移しながら剥片剥離を行っている。29は珪質頁岩裂で剥片剥離時に3分割しているものである。打点から縦方向に分離し、かつ途中で側縁側に亀裂が入り分割している。30は珪質頁岩裂の剥片3点による接合資料である。28の資料と同一個体の可能性が高く、節理面で分離した別個体について剥片剥離を行っているものと考えられる。



第42図 第6ブロック分布(1)

第7ブロック (第50～56図、第14表、図版14・41～43)

南東に向かい延伸する尾根状台地の平坦部、標高48m付近に所在する。第6ブロックの南側に隣接して所在する。

分布範囲は長軸約18m、短軸10mの楕円形状を呈し、この中で19w-83グリッドを中心とした一群と、20w-05グリッド付近を中心とした一群に集中が2分する。両者の規模は8m程である。

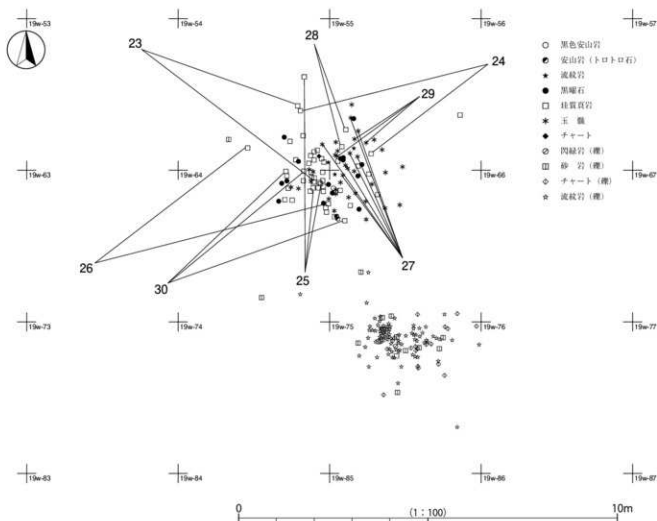
石器の出土層位はIV層からVI層上部にかけてであり、特にV層付近に集中する感がある。

石器は製作途中で分割した削器の他は調整痕ある剥片、剥片類であり、礫石器は敲石の他礫片が組成の大半を占める。剥片石器の分布は20w-05グリッド付近の南側集中区に多く分布し、北側調査区は散漫な分布状況である。石材は剥片石器では黒色安山岩、礫石器ではチャートが主体となる。

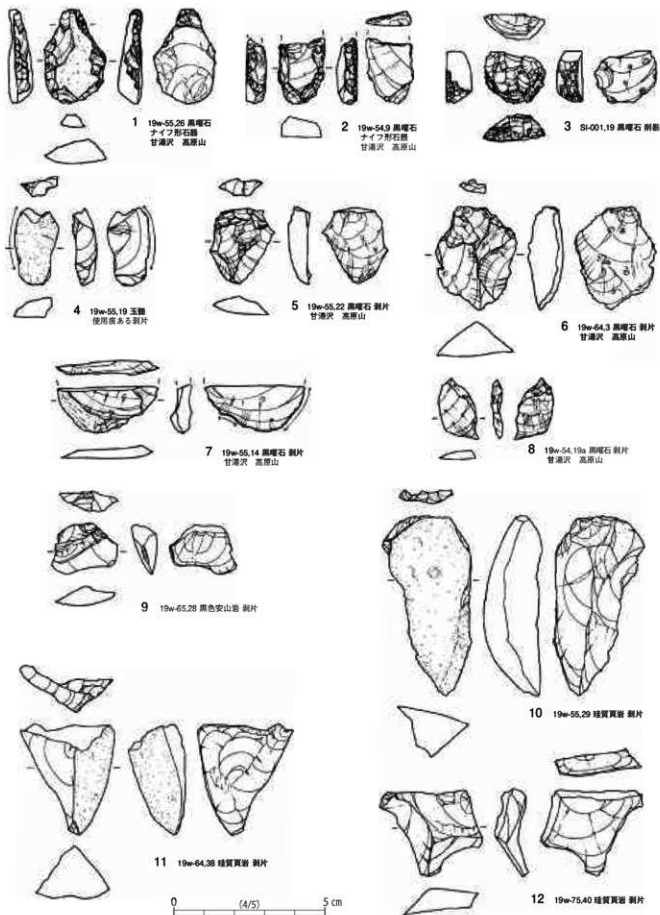
遺物

1・2は珪質頁岩製の調整痕の認められる剥片である。1は大型で部厚な剥片を素材とし、打面を調整により除去する。調整は末端部から片側縁にかけて腹面側からの調整が行われ、末端部付近は急角度の剥離となる。2は小型の不定形剥片の末端部に微細な調整を施す。

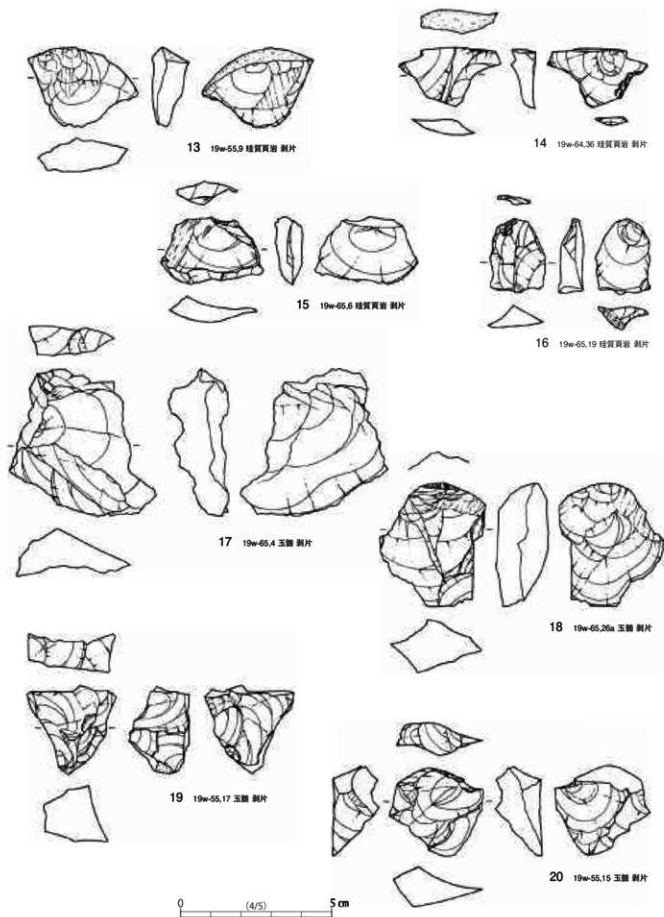
3・4は黒曜石製の剥片である。小型の不定形剥片でいずれも打面は線状打面である。5から9は黒色安山岩製の不定形剥片で概して部厚なものが多く、背面構成は5のような複雑な構成は少なく、単純なも



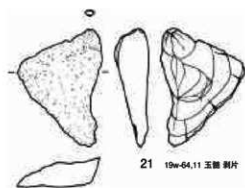
第43図 第6ブロック分布(2)



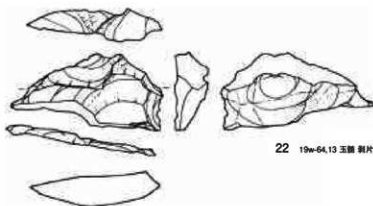
第44図 第6ブロック遺物(1)



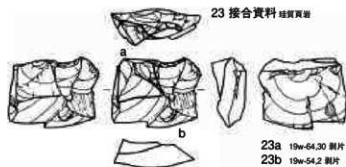
第45図 第6ブロック遺物(2)



21 19w-64.11 玉髄 剥片



22 19w-64.13 玉髄 剥片



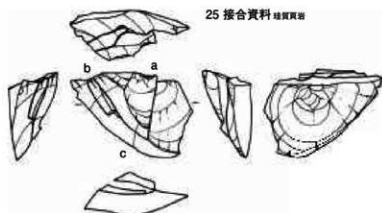
23 接合資料 珪質頁岩

23a 19w-64.30 剥片
23b 19w-54.2 剥片

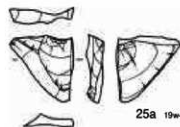


24 接合資料 珪質頁岩

24a 19w-54.3 剥片
24b 19w-55.3 剥片



25 接合資料 珪質頁岩



25a 19w-64.27 剥片

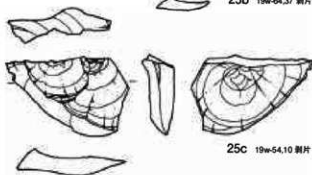


25b 19w-64.37 剥片

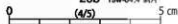


26 接合資料 珪質頁岩

26a 19w-54.11 剥片
26b 19w-64.4 剥片

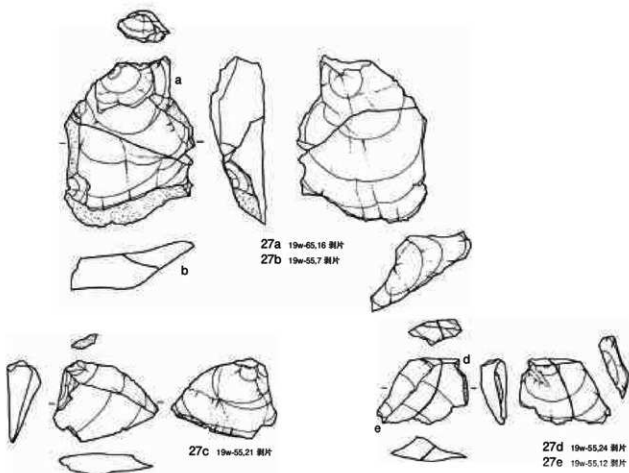
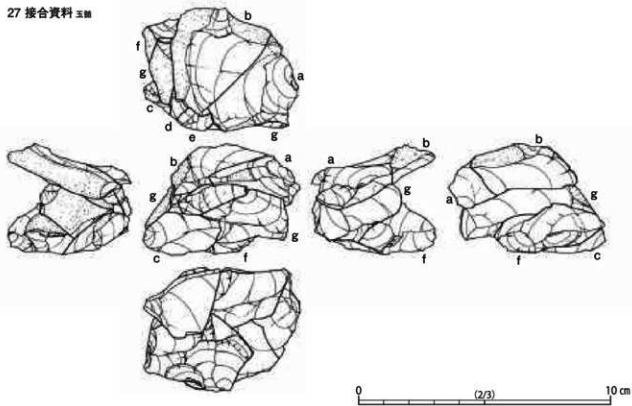


25c 19w-64.10 剥片

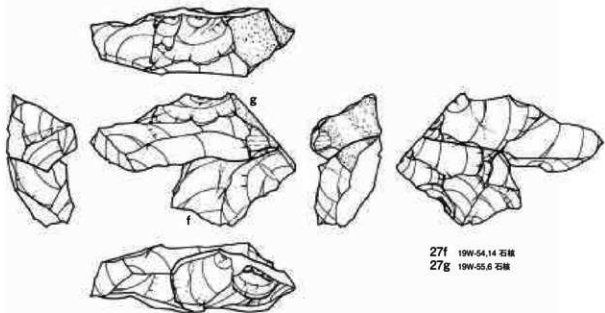


第46図 第6ブロック遺物(3)

27 接合資料 五三

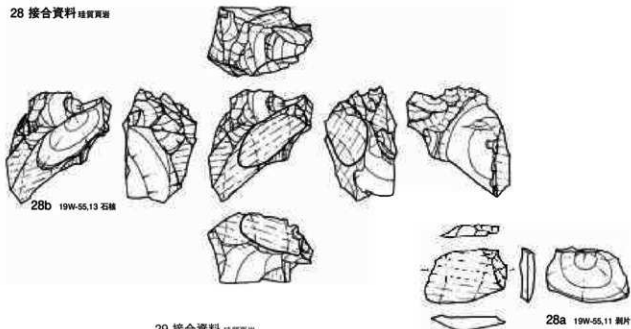


第47図 第6ブロック遺物(4)



27f 19W-54.14 石核
27g 19W-55.6 石核

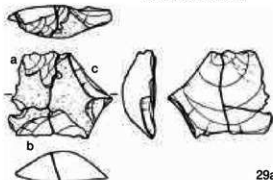
28 接合資料 珪質頁岩



28b 19W-55.13 石核

28a 19W-55.11 製片

29 接合資料 珪質頁岩

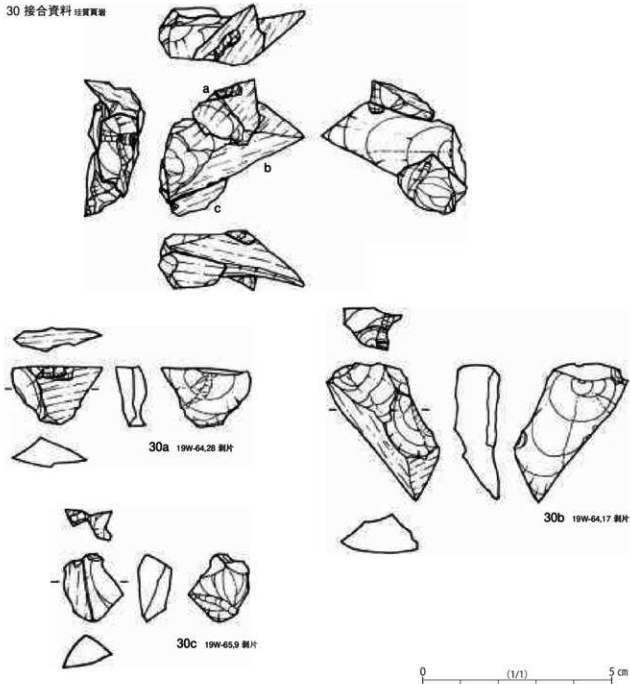


29a 19W-55.23 製片
29b 19W-55.25 製片
29c 19W-55.27 製片



第48図 第6ブロック遺物(5)

30 接合資料 13頁掲載

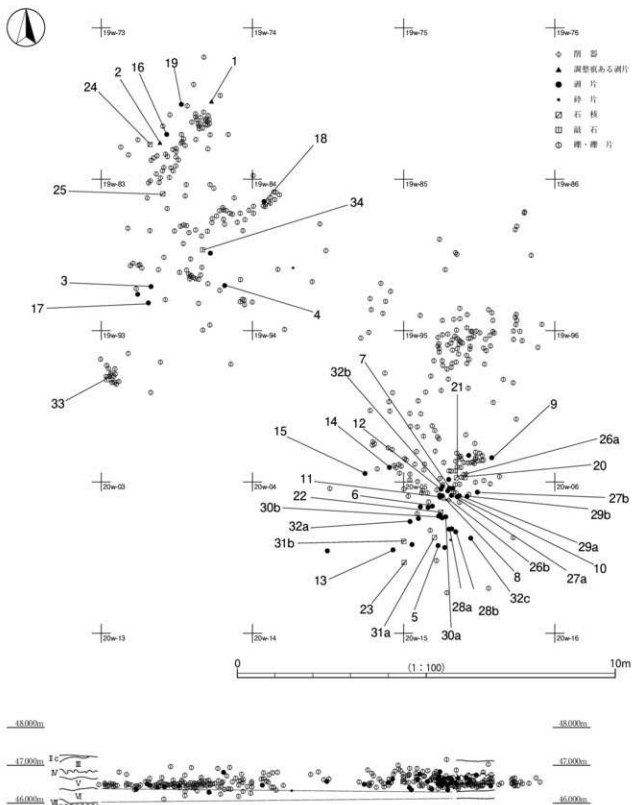


第49図 第6ブロック遺物(6)

第13表 第6ブロック属性表

区画	ブロック	層位	遺物	品名	形状	数量	検出	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	調査	
19W-64	28	1	割片	土	1	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	1	割片	土	1	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	2	割片	土	2	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	3	割片	土	3	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	4	割片	土	4	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	5	割片	土	5	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	6	割片	土	6	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	7	割片	土	7	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	8	割片	土	8	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	9	割片	土	9	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	10	割片	土	10	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	11	割片	土	11	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	12	割片	土	12	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	13	割片	土	13	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	14	割片	土	14	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	15	割片	土	15	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	16	割片	土	16	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	17	割片	土	17	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775
19W-64	27	18	割片	土	18	11	29	29	29	11	4500775	4600775	4700775	4800775	4900775	5000775	5100775	5200775	5300775	5400775	5500775

のが多い。10から13は安山岩（トトロ石）製の剥片である。背面や打面に原礫面を有している個体が多く見受けられる。14から17は珪質頁岩製の剥片である。不定形剥片であるが前述した他の石材と比較すると大型の剥片となる傾向が認められる。18・19は頁岩製の剥片である。珪質頁岩製の剥片と同様に大型で部厚な個体である。いずれも背面には原礫面が認められる。

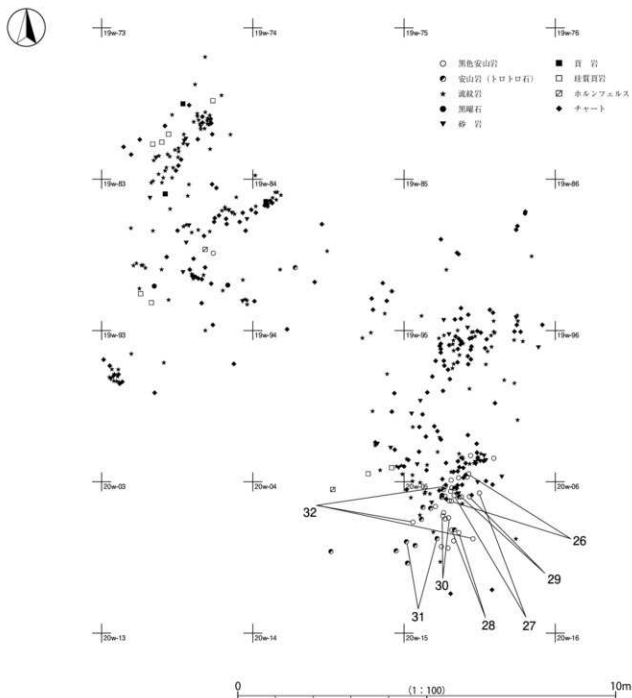


第50図 第7ブロック分布(1)

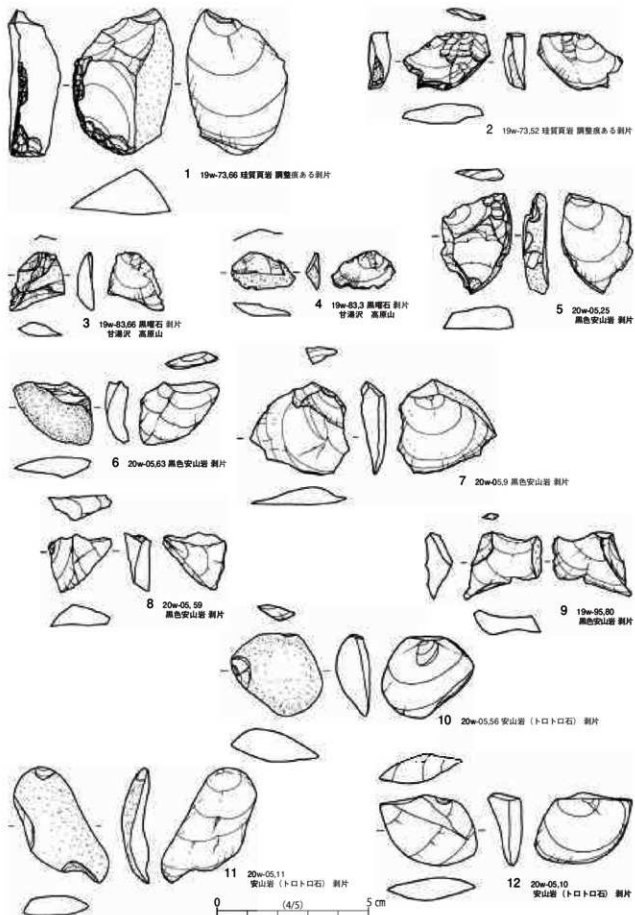
20から22は黒色安山岩製の石核である。いずれも剥片素材と考えられるが、20は素材剥片の腹面を打面として剥片剥離を行った後、これらの剥離面を打面として求芯的に剥片剥離を行っている。これに対し、21・22は腹面からの剥片剥離で終了している。23は安山岩（トロトロ石）製で、黒色安山岩製の石核と同様に剥片の腹面から剥片剥離を行っている。24の珪質頁岩製、25の頁岩製の石核も同様の剥片剥離を行っているが、これら石核にみられる剥離は角錐状石器の調整に類似するものである。

26は調整の過程で2分した削器の接合資料である。厚みの一定した素材剥片の打面部と片側縁部に調整を施す。

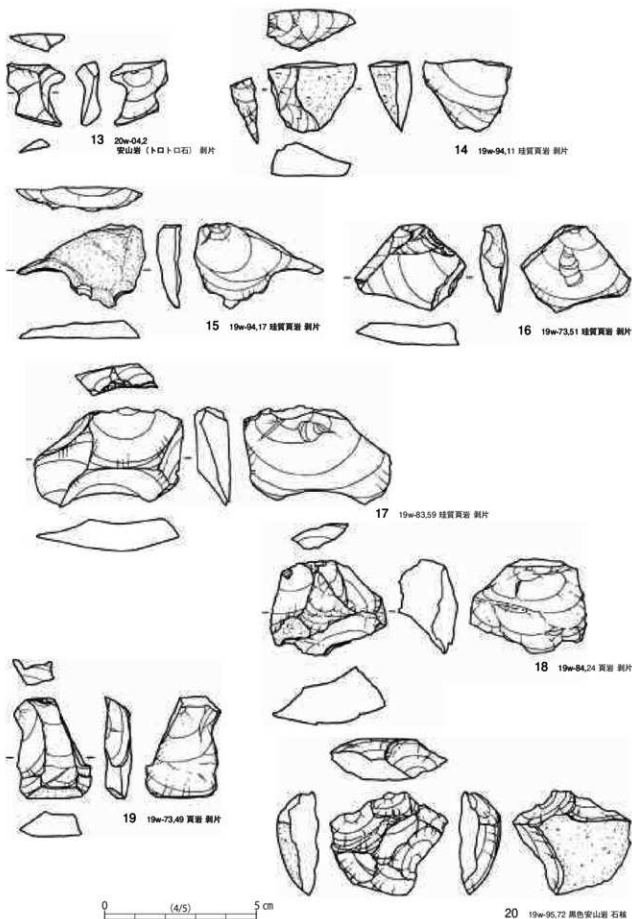
27・28は剥片剥離時に打面から2分、30は中途から2分した接合資料である。いずれも黒色安山岩製



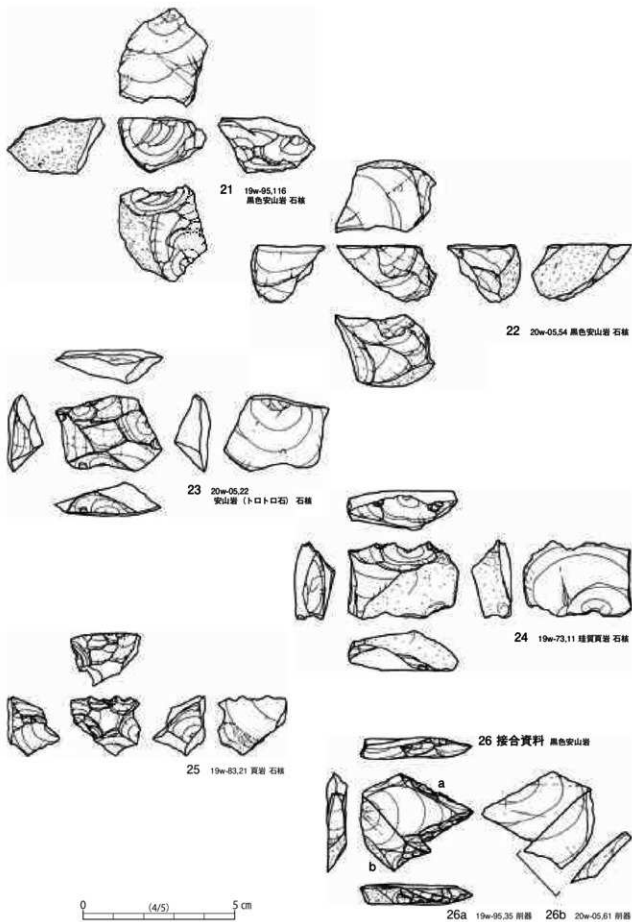
第51図 第7ブロック分布(2)



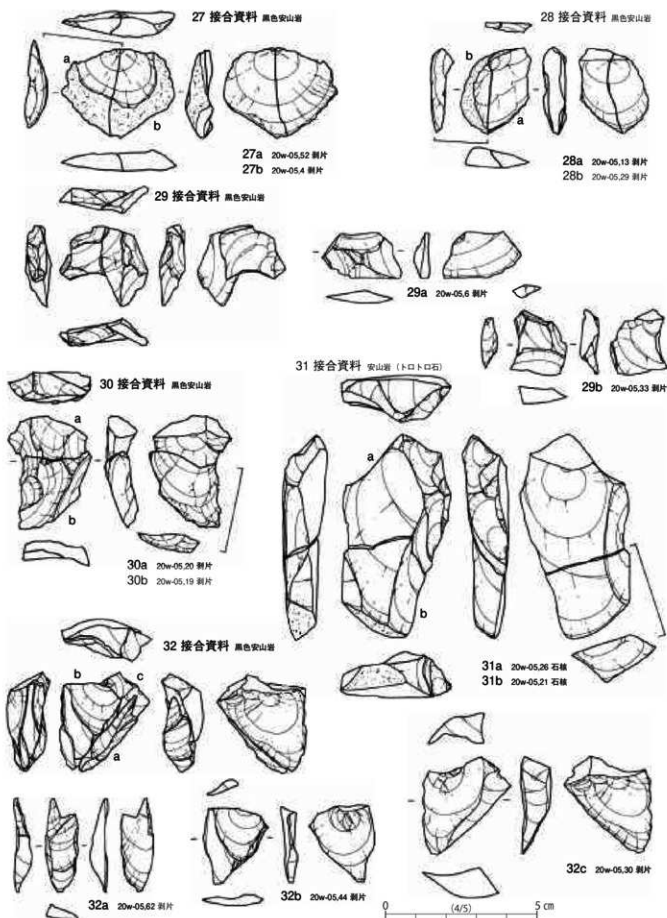
第52図 第7ブロック遺物(1)



第53図 第7ブロック遺物(2)



第54図 第7ブロック遺物(3)



第55図 第7ブロック遺物(4)

で不定形剥片である。30は黒色安山岩製の小型不定形剥片の接合資料である。連続して作出されるが、打面を対縁に変換して作出されている。

31は安山岩(トトロ石)製の大型剥片を転用し、剥片剥離を行った際に2分した接合資料である。剥片剥離は素材剥片の背腹両面から行われている。

32は黒色安山岩製の不定形剥片3点の接合資料である。同一打面から連続して作出されている。

33は砂岩製、34はホルンフェルス製の敲石である。いずれも転石であるが、33は円礫、34は棒状礫を素材としている。33は片端のみに潰れたような敲打痕、34は両端に敲打による剥落痕が認められる。

第8ブロック(第57・58図、第15表、図版14・44)

調査区の東、痩せ尾根状に東に延伸する台地の付け根に所在し、標高は47mを測る。

敲石1点、原石1点、礫11点で構成され、東西方向に8m程の帯状の分布状況を呈する。出土層位はⅣ層からⅤ層にかけてである。

遺物

1は石英斑岩製の敲石である。長さ6cm程の転石を利用しており、上下両端に打撃時の剥落痕が明瞭にみられる。

2は安山岩(トトロ石)製の原石である。小型の転石であり、敲打痕等は認められない。

第9ブロック(第59・60図、第16表、図版14・44)

調査区の東、痩せ尾根状に東に延伸する台地の中間に所在し、標高は47mを測る。

黒曜石製の剥片2点、チャート製の礫1点で構成されるブロックである。出土層位はⅥ層上部である。

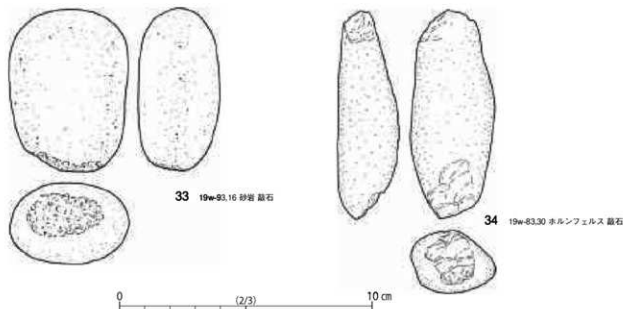
遺物

1・2は黒曜石製の剥片である。1は部厚な不定形剥片であり、末端部付近に最大厚を持つ。2は小型の不定形剥片である。末端部はややヒンジ・フラクチュア気味となる。

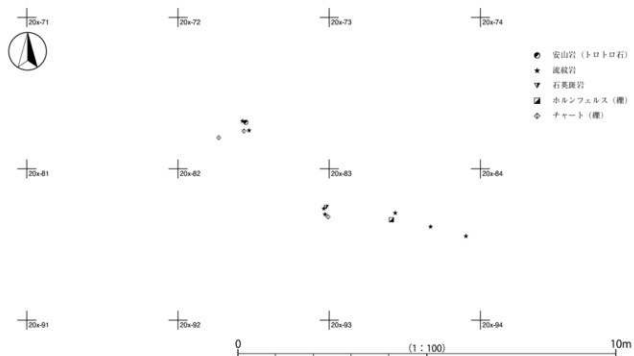
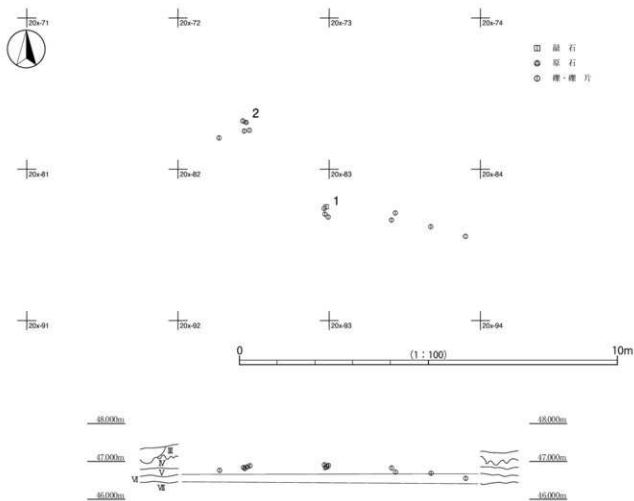
第10ブロック(第61・62図、第17表、図版14・44)

調査区の東、痩せ尾根状に東に延伸する台地の中間に所在し、標高は47mを測る。

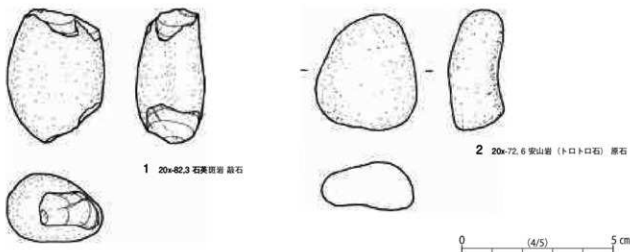
南北に列状に並ぶ分布状況を呈し、2m程間隔を空け礫が出土している。剥片8点、礫1点で構成され、



第56図 第7ブロック遺物(5)



第57図 第8ブロック分布



第58図 第8ブロック遺物

第15表 第8ブロック属性表

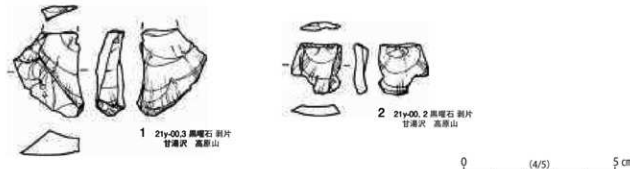
品目	ナ	フ	シ	標	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
品名	ナ	フ	シ	標	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
黒曜石	20a-82.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石英	20a-72.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
...

単独出土遺物 (第63図、第18表、図版44)

1は黒曜石製のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、剥片剥離時の打面を基部側に残す。調整は両側縁に対し施され、先端部は鋭く尖る。

2は黒曜石製の剥片である。打面側と末端部側が欠損するが、背面を構成する剥離の方向と腹面の剥離の方向が一致するため、同一方向の打面から連続的に作出された縦長剥片と考えられる。

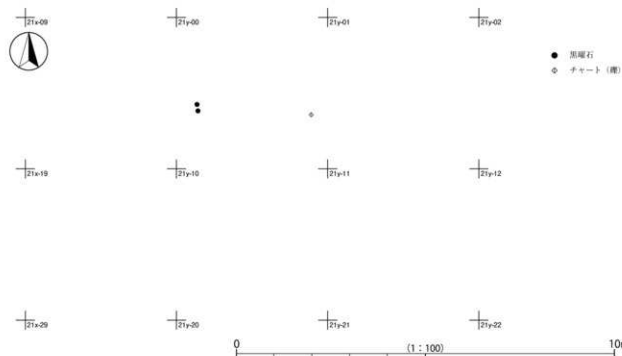
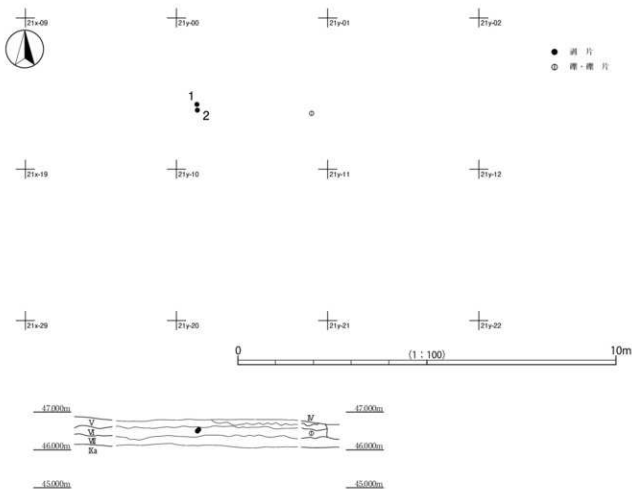
3は珪質頁岩製の石核である。剥片を素材とし剥片剥離を行っており、剥片作出時の打面を利用し正面側と側面側に剥片剥離を行っている。



第59図 第9ブロック遺物

第16表 第9ブロック属性表

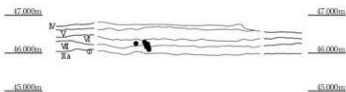
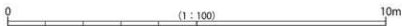
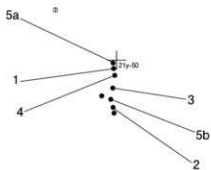
品目	ナ	フ	シ	標	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
品名	ナ	フ	シ	標	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出	出
黒曜石	21y-00.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
石英	21y-00.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
...



第60図 第9ブロック分布



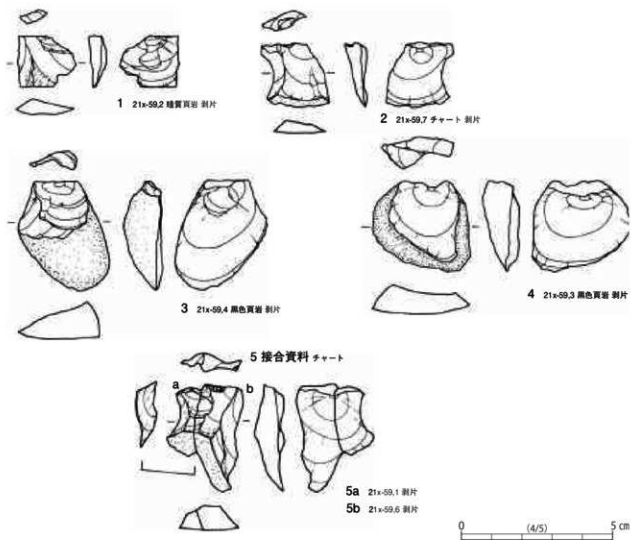
- 洞 片
- ⊙ 礎・礎 片



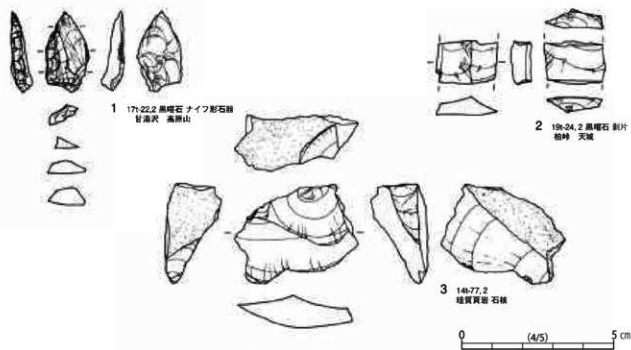
- 経 質 頁 岩
- 黒 色 頁 岩
- ◆ チャート
- ◇ チャート (礎)



第 61 図 第 10 ブロック分布



第62図 第10ブロック遺物



第63図 単独出土遺物

第17表 第10ブロック属性表

土地区画番号	ブロック番号	用途区分	種別	面積	用途	名称	用途区分	種別	面積	用途	名称	用途区分	種別	面積	用途	名称	用途区分	種別	面積	用途	名称
17-001	10-01	1	1	1000	住宅	住宅用地	1	1	1000	住宅	住宅用地	1	1	1000	住宅	住宅用地	1	1	1000	住宅	住宅用地
17-002	10-02	2	2	2000	住宅	住宅用地	2	2	2000	住宅	住宅用地	2	2	2000	住宅	住宅用地	2	2	2000	住宅	住宅用地
17-003	10-03	3	3	3000	住宅	住宅用地	3	3	3000	住宅	住宅用地	3	3	3000	住宅	住宅用地	3	3	3000	住宅	住宅用地
17-004	10-04	4	4	4000	住宅	住宅用地	4	4	4000	住宅	住宅用地	4	4	4000	住宅	住宅用地	4	4	4000	住宅	住宅用地
17-005	10-05	5	5	5000	住宅	住宅用地	5	5	5000	住宅	住宅用地	5	5	5000	住宅	住宅用地	5	5	5000	住宅	住宅用地
17-006	10-06	6	6	6000	住宅	住宅用地	6	6	6000	住宅	住宅用地	6	6	6000	住宅	住宅用地	6	6	6000	住宅	住宅用地
17-007	10-07	7	7	7000	住宅	住宅用地	7	7	7000	住宅	住宅用地	7	7	7000	住宅	住宅用地	7	7	7000	住宅	住宅用地
17-008	10-08	8	8	8000	住宅	住宅用地	8	8	8000	住宅	住宅用地	8	8	8000	住宅	住宅用地	8	8	8000	住宅	住宅用地
17-009	10-09	9	9	9000	住宅	住宅用地	9	9	9000	住宅	住宅用地	9	9	9000	住宅	住宅用地	9	9	9000	住宅	住宅用地
17-010	10-10	10	10	10000	住宅	住宅用地	10	10	10000	住宅	住宅用地	10	10	10000	住宅	住宅用地	10	10	10000	住宅	住宅用地

第18表 単独出土石器属性表

土地区画番号	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別	出土石器種別
18-001	18-01	1	1	1000	出土石器	出土石器	1	1	1000	出土石器	出土石器	1	1	1000	出土石器	出土石器	1	1	1000	出土石器	出土石器
18-002	18-02	2	2	2000	出土石器	出土石器	2	2	2000	出土石器	出土石器	2	2	2000	出土石器	出土石器	2	2	2000	出土石器	出土石器
18-003	18-03	3	3	3000	出土石器	出土石器	3	3	3000	出土石器	出土石器	3	3	3000	出土石器	出土石器	3	3	3000	出土石器	出土石器
18-004	18-04	4	4	4000	出土石器	出土石器	4	4	4000	出土石器	出土石器	4	4	4000	出土石器	出土石器	4	4	4000	出土石器	出土石器

第19表 石器組成表

土地区画番号	用途区分	種別	用途区分		種別		用途区分		種別		用途区分		種別		用途区分		種別		用途区分		種別					
			用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別	用途区分	種別						
19-001	19-01	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1				
			2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2			
			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3		
			4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4		
			5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5		
			6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
			7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	
			8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
			9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
			10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 炉穴

SK-004 (第64図、図版32・45)

17u-72グリッドに位置する。下層確認調査中に検出されたものであり、南東側の壁は確認グリッドによって失われている。平面形は長楕円形に近い不整形形で、主軸方向はN-31°-Wである。規模は長軸1.42m、短軸0.82m、確認面からの深さは0.29mである。また、北西端部と南東端部それぞれにピット状の掘込みが存在し、規模は北西のものが長軸0.28m、短軸0.18m、確認面からの深さは0.60m、南東のものが長軸0.42m、短軸0.38m、確認面からの深さは0.43mである。なお、双方とも炉穴に伴うものかどうかは不明である。覆土の堆積状況は図化されていないが、写真では全体に焼土を多量に含んだ土層が堆積している状況が見られる。底面は中央部が最も高く、ピット状の掘込みがある両端に向かってごくわずかに傾斜している。焼土は中央から南東にかけて多量に堆積している。その下の底面も熱を受けて硬化しており、炉床部と考えられる。

遺物は3点図示したが、うち2点は大形の破片である。同一個体と思われるが接合しない無文の土器片や細片も多く、遺構の規模を考えると出土遺物は多量である。特に、中央の焼土付近からの出土が顕著である。1は深鉢で、底部側はやや強く開き、口縁部に向かって緩やかに立ち上がる器形である。胎土は植物繊維と赤色スコリア粒を多量に含む。外面は板状の工具によるケズリ状の調整が施され、口縁直下は横方向、胴部側は縦方向に施される。調整は比較的丁寧であり、遺存状態は良好である。内面も同様の調整が施されるが、やや摩耗しており剥落も認められる。口唇は指によってつまみ上げられた凹凸が存在するが、図示した1か所のみか、口縁全体に配され単位を構成するかは不明である。2は深鉢で、器形を復元できたものである。推定口径27.8cm、残存器高13.4cmである。胎土は植物繊維と赤色スコリア粒を多量に含む。底部から口縁部に向かって外反するように開く器形である。器壁が厚く、口唇上は平坦に整形される。口縁部に沿って円孔列が配されるが、穿孔は焼成前に行われている。1と同様、外面は板状の工具によるケズリ状の調整が施され、口縁直下は横方向、胴部側は斜め方向に施される。調整は比較的丁寧であり、遺存状態は良好である。内面は焼成が良くないためか摩耗が顕著で剥落も認められ、調整の状況はわかりにくい。3は深鉢の口縁部破片で、1に類似しており同一個体の可能性もある。円孔が認められるが、こちらは焼成後の穿孔で補修孔と考えられる。

以上の土器は早期条痕文期の子母口式と考えられ、遺構も当該時期と判断される。

SK-009 (第64図、図版33)

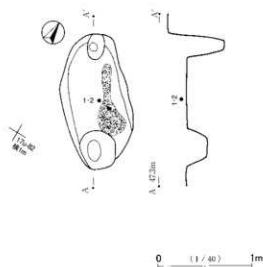
19t-32・33・42グリッドに位置する。平面形は長楕円形に近い不整形形で、主軸方向はN-65°-Eである。規模は長軸2.20m、短軸0.85m、確認面からの深さは0.70mである。底面はほぼ平坦で、北東端部が一段低くなっているが、断面観察から全体で一体の構造であると判断される。明確な炉床は検出されなかったが、覆土に少量ではあるが焼土ブロックが混入していることから、炉穴の可能性があると判断した。

図示できる遺物は出土していない。

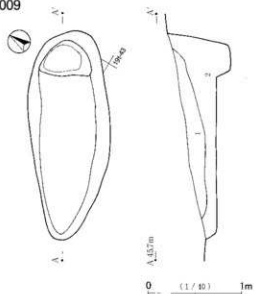
SK-016 (第65図、図版33)

20w-15グリッドに位置する。平面形は長楕円形に近い不整形形で、主軸方向はN-162°-Wである。規模は長軸2.17m、短軸1.11m、確認面からの深さは0.43mである。南側にサブトレンチを入れたため、壁は一部推定復元している。南端部に焼土がしっかりと堆積し、その下の底面は熱により硬化しており、

SK-004

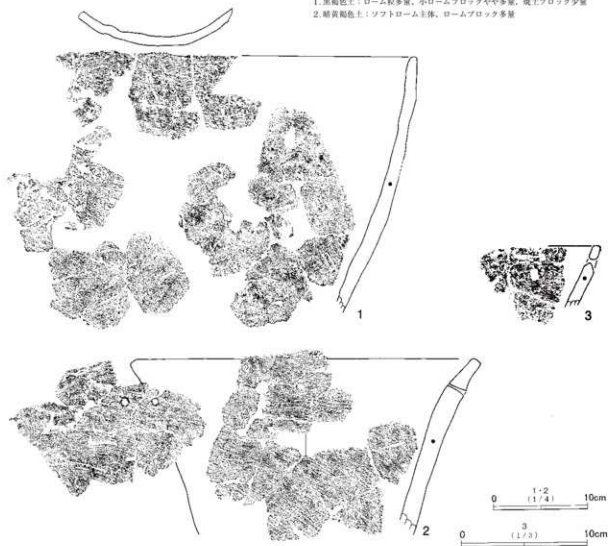


SK-009



SK-009

1. 黒褐色土：ローム粒多量、小ロームブロックやや多量、焼土ブロック少量
2. 暗黄褐色土：ツフトローム主体、ロームブロック多量



第64図 炉穴(1)

炉床部と判断される。この炉床部が最も低く、南側から北側に向かって緩やかに上り傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

SK-017 (第65図、図版33・45)

19w-44グリッドに位置する。西側にSK-018が隣接する。平面形は長楕円形に近い不整形円で、主軸方向はN-139°-Eである。規模は長軸1.62m、短軸0.81m、確認面からの深さは0.20mである。断面形は浅い皿状で、中央部に焼土が堆積している。その下側はやや掘り窪められているが、顕著なものではない。また、底面はあまり熱を受けておらず、硬化面も存在しない。覆土全体に焼土が混入していることや、全体に浅いことから、炉穴の底面付近がかろうじて残存している状況と思われる。

遺物は2点図示したが、いずれも一括資料である。1は深鉢胴部で、胎土は植物繊維と白色砂粒を多量に含む。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施されるが、内面は摩耗しており不明瞭である。2も深鉢胴部で、胎土は植物繊維が比較的少なく、白色砂粒と小礫を多量に含む。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施されるが、内面は指頭押圧によると思われるでこぼこ目立つ。

以上の土器は早期沈線文期の田戸上層式～条痕文期の子母口式と考えられる。出土状況が不明ではあるが、遺構の時期に近いものと思われる。

SK-021A・B (第65図、図版34・45)

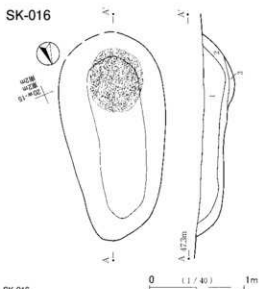
20w-33・34・43・44グリッドに位置する。2基の土坑が重複しており、ここでは焼土が堆積し確実に炉穴と考えられるものをA、もう1基の焼土がないものをBとする。なお、新田関係はAが新しくBが古い。また、Aの西端部上半はSI-029と重複している。Aは、平面形は不整形円で、主軸方向はN-75°-Wである。規模は長軸3.17m、短軸1.65m、確認面からの深さは0.37mである。底面は東側が高く西側が低くなっており、西端部と中央やや東寄りに熱を受けた炉床部が存在する。西端の炉床は熱を強く受けているのに対し、中央部の炉床はあまり熱を受けていない。Bは、平面形は楕円形に近い不整形円で、主軸方向はN-60°Eである。規模は残存長軸1.6m、同短軸約1.1m、確認面からの深さは0.22mである。底面は浅い皿状で、中央付近に浅い皿状の掘込みがある。現存部から炉床部は検出されず、覆土中にも焼土の混入は認められないため、炉穴であるかどうかは不明である。

遺物は2点図示したが、いずれも一括資料である。1は深鉢口縁部で、胎土は植物繊維を含むが量は比較的少なく、白色砂粒を多量に混入する。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施される。2は深鉢胴部で、胎土は植物繊維を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。内・外面ともへら状の幅の狭い工具によるケズリ状の調整が施されるが、器面にかなり強い力をかけており、全体にでこぼこしている。やや雑な印象である。

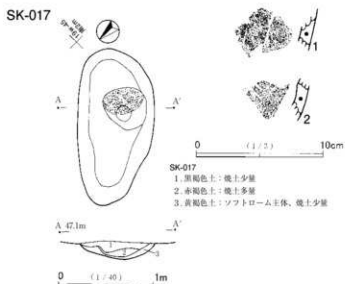
以上の土器は早期沈線文期の田戸上層式～条痕文期の子母口式と考えられる。出土状況が不明ではあるが、遺構の時期に近いものと思われる。

SK-022 (第65図、図版34・45)

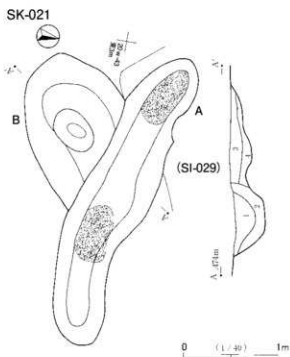
19w-82グリッドに位置する。平面形は楕円形の土坑が3基連結したような形状で、主軸方向はN-4°-Wである。規模は長軸2.58m、短軸0.83m、確認面からの深さは0.44mである。なお、南側1/3程度が幅広く、北側は狭くなっているが、これは重機によるトレンチ掘削の際、北側の上半15cm程度が削平されたことによる。底面はほぼ平坦で、中央部がやや窪んでいる。焼土が北端部と中央部の2か所を中心に堆積しており、その下の底面も熱を受けて硬化している。拡張されたように見えるが、断面観察では判



- SK-016
1. 黒色土
 2. 暗黄褐色土：ソフトローム主体
 3. 赤褐色晩土：よく残っている



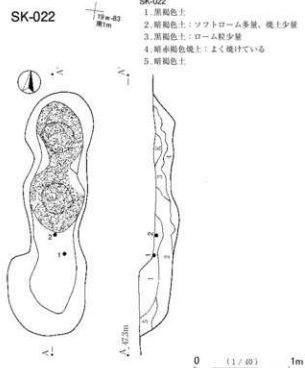
- SK-017
1. 黒褐色土：晩土少量
 2. 赤褐色土：晩土多量
 3. 黄褐色土：ソフトローム主体、晩土少量



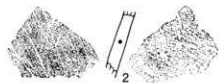
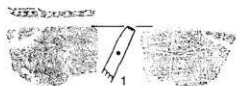
- SK-021
1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土：晩土少量
 3. 黒褐色土：ソフトローム少量
 4. 暗褐色土：ソフトローム主体



0 (1/2) 10cm



- SK-022
1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土：ソフトローム多量、晩土少量
 3. 黒褐色土：ローム粒少量
 4. 暗赤褐色晩土：よく残っている
 5. 暗褐色土



0 (1/3) 10cm

第65図 和穴(2)

断できなかつた。

遺物は2点図示したが、いずれも覆土最上層の黒褐色土から出土した。1は深鉢口縁部で、胎土は植物繊維を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。口唇上に半截竹管による斜め方向からの刺突列が施される。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施されるが、両面とも口唇直下約1.5cmの無調整部分があり、その下側から横方向の調整を施している。2は深鉢胴部で、1と同一個体と思われる。調整も1と同様であるが、外面は縦方向の、内面は横方向の調整を施す。

以上の土器は早期沈線文期の田戸上層式～条痕文期の子母口式と考えられる。出土層位は自然堆積層と考えられる黒褐色土層であり、やや微妙ではあるが、覆土全体としては中間レベルであることから遺構の時期と大きな隔たりはないと思われる。

2 陥穴

SK-003 (第66図、図版32・45)

14u-61・71グリッドに位置する。平面形は不整形で、主軸方向はN-51°-Wである。規模は長軸1.90m、短軸1.48m、確認面からの深さは2.60mである。底面はほぼ平坦である。底面は隅丸方形で、規模は長軸1.44m、短軸0.27mである。覆土は崩落によると思われるロームブロックが多量に混入しており、自然堆積と考えられる。

遺物は9点図示したが、いずれも一括資料で、胎土には植物繊維を含まない。1と2は同一個体と考えられる深鉢胴部で、胎土は小礫をやや多く含むが、焼成は良好で堅緻である。RL単節縄文を地文とし、半截竹管による横位の平行沈線が配される。諸磯a式～b式である。3は深鉢口縁部で、胎土は砂粒を多量に含む。口唇直下に半截竹管による縦位の条線文が配され、胴部側に半截竹管による平行沈線が施される。4も深鉢口縁部で、胎土は砂粒やスコリア粒を多量に含む。口唇直下に半截竹管による縦位の条線文が配される。以上2点は浮島Ⅲ式である。5～7は深鉢胴部で、別個体であるが胎土はいずれも砂粒を多く含む。外面は半截竹管による縦位ないしは斜位の平行沈線を集合させるもので、浮島式に属するものと考えられる。8・9は深鉢胴部で、胎土は砂粒を多量に含む、いずれも器面は熱によって摩耗している。文様は確認できないが、剥落した可能性もある。

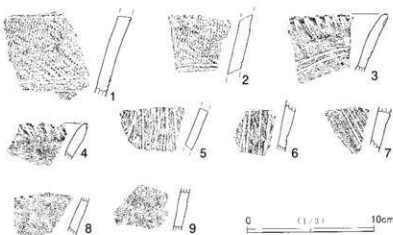
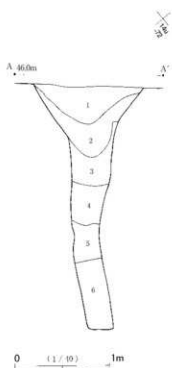
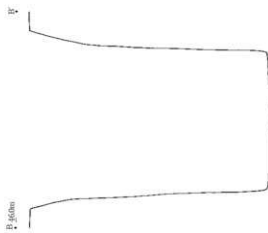
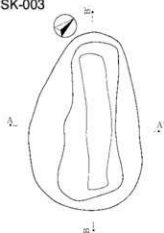
以上の土器は文様が不明瞭なものもあるが、おおむね前期後葉が主体となっている。出土状況が不明で自然堆積により埋没しているため、遺構の構築時期と土器との間にどれほど時間差があるか判断するのは難しいが、土器の点数などから考えて遺構の時期と大きな隔たりはないと思われる。

SK-020 (第66図、図版34・45)

18u-27グリッドに位置する。平面形は不整形で、主軸方向はN-52°-Wである。規模は長軸1.50m、短軸0.75m、確認面からの深さは0.91mである。底面は隅丸方形に近い不整形で、おおむね平坦であるが、中央部に小さな段差があり、南側が高く北側が低くなっている。規模は長軸1.15m、短軸0.28mである。覆土は崩落によると思われるロームブロックが多量に混入しており、自然堆積と考えられる。

遺物は1点図示したが、一括資料である。1は深鉢胴部で、胎土は粒子が細かく、植物繊維を含むが量は比較的少ない。焼成は良好で堅緻である。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施されるが、外面は板目がはっきり観察されるのに対して、内面は不明瞭である。早期沈線文期の田戸上層式～条痕文期の子母口式と考えられる。1点のみで出土位置も不明であるため遺構の時期は判断できない。

SK-003



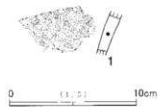
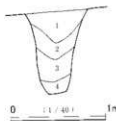
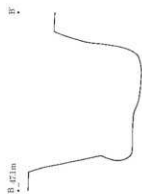
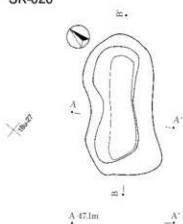
SK-003

1. 黒褐色土：ツフトローム少量
2. 黒褐色土：ツフトロームやや多量
3. 黒褐色土：小ロームブロック・ローム粒少量
4. 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒多量
5. 黒褐色土：ロームブロック・ローム粒少量
6. 暗褐色土：ローム粒多量、帯水

SK-020

1. 暗褐色土：ツフトローム少量
2. 暗褐色土：ツフトロームやや多量
3. 暗褐色土：ツフトローム多量
4. 暗褐色土：ツフトローム多量、小ロームブロック少量

SK-020



第66図 陥穴(1)

SK-007 (第67図、図版32)

17v-42・43グリッドに位置する。平面形は不整形円で、主軸方向はN-99°-Wである。規模は長軸2.70m、短軸1.55mで、確認面からの深さは2.10mである。北西側が大きく膨らんでいるが、崩落によるものと思われる。底面は不整形円で、規模は長軸1.82m、短軸0.32mである。西壁中間付近が崩落により大きくえぐれており、その部分から底面へ滑り落ちるように壁が壊れている。覆土は下半分が崩落によると思われるロームブロックが多量に混入し、上半分は黒色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

SK-010A・B (第67図、図版33)

18s-20・21グリッドに位置する。2基の土坑が重複し、そのうち1基は規模や形状から陥穴と判断されるため、両方併せてここに記載する。なお、陥穴とした土坑をA、もう1基をBとする。新旧関係はBが古く、Aが新しい。Aは、平面形は隅丸方形に近い楕円で、主軸方向はN-66°-Wである。規模は長軸2.07m、短軸1.38m、確認面からの深さは1.01mである。底面は隅丸方形で、北西側がやや高く平坦な南東側に向かって傾斜する。規模は長軸1.48m、短軸0.54mである。Bは、平面形は楕円で、主軸方向はN-75°-Eである。規模は長軸約1.8m、短軸約1.5m、確認面からの深さは0.42mである。底面はほぼ平坦である。覆土はロームブロックが少ないものの、下半分は黒色土を主体とする層がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

SK-008 (第68図、図版33・45)

17w-05グリッドに位置する。平面形は不整形円で、主軸方向はN-12°-Eである。規模は長軸2.25m、短軸1.33m、確認面からの深さは2.63mである。底面は不整形形で、おおむね平坦であるが中央部がやや窪んでいる。規模は長軸1.84m、短軸0.33mである。覆土は、下半分は崩落によると思われるロームブロックが多量に混入し、上半分は黒色土がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

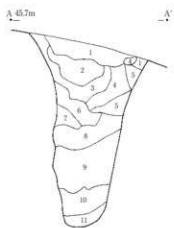
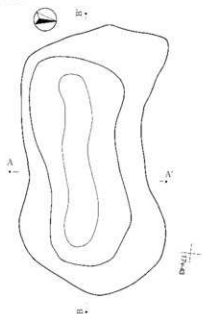
遺物は5点図示したが、3・5は覆土の上半分、4は底面近くから出土し、そのほかは一括資料である。1は深鉢胴部で、胎土は植物繊維のほか、赤色スコリア粒や白色砂粒を多量に含む。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施される。2は深鉢胴部で、胎土はごく少量の植物繊維と多量の白色砂粒を含む。内・外面とも板状の工具によるケズリ状の調整が施されるが、外面は特に顕著である。以上の2点は早期条痕土器であるが、型式名までは特定できない。3は深鉢胴部で、胎土は植物繊維を含まず砂粒を多量に含む。外面に半載竹管による変形爪形文が施されるが、かなり不揃いである。浮島式に属するものである。4・5は同一個体と思われる深鉢胴部で、胎土は植物繊維を含まず白色砂粒・小礫を多量に含むが粒子自体は細かく、焼成は良好で堅緻である。LR単節縄文を地文とし、半載竹管による横位の平行沈線が多段に配される。諸織b式に属するものである。

以上の土器は早期条痕土器と前期後半の土器群の2時期に分かれる。遺構の時期については判断が分かれるところであるが、前期後半の土器が底面の直上に近いレベルから出土していることから、当該時期であると考えられる。

SK-023 (第68図、図版34)

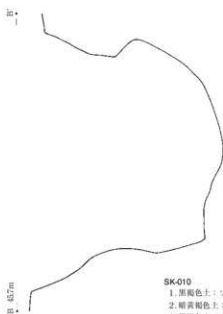
19w-27・28・37・38グリッドに位置する。下層確認調査中に検出されたもので、西側の壁は確認グリ

SK-007



SK-007

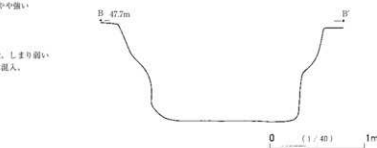
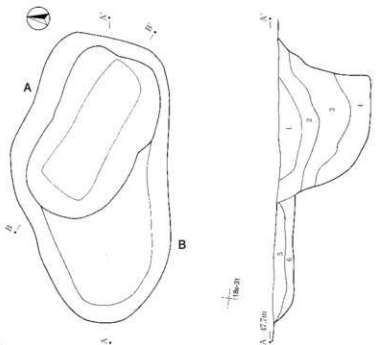
1. 黒色土：しまりやや強い
2. 黒色土：最も黒い、黒褐色土混入、しまりやや強い
3. 黒褐色土：黒色土+暗褐色土、ローム粒少量、しまりやや強い
4. 暗褐色土：径20mm大のハードロームブロック混入、しまりやや強い
5. 黄褐色土：暗褐色土混入、しまり弱い
6. 黒褐色土：暗褐色土混入、しまり弱い
7. 暗褐色土：径5mm大のロームブロック微量、しまり弱い
8. 暗黄褐色土：黒褐色土混入、径5mm大のロームブロック少量、しまり弱い
9. 黄褐色土：径5mm大のロームブロック少量、ローム粒層状に混入、しまりやや強い
10. 黄褐色土：黒色土混入、ローム粒層状に混入、ゴツゴツ
11. 黄褐色土：ローム粒、ロームブロック多量、ゴツゴツ



SK-010

1. 黒褐色土：ソフトロームやや多量
2. 暗黄褐色土：ソフトローム多量、ローム粒やや多量
3. 黒褐色土：ソフトローム、ローム粒少量
4. 暗褐色土：ソフトローム多量、黒色土、ローム粒少量
5. 黒褐色土：ソフトローム多量、ローム粒少量
6. 暗褐色土：ソフトローム、ローム粒多量

SK-010



第 67 図 陥穴 (2)

下により一部失われている。全体形状と規模は残された部分から推定復元している。平面形は長楕円形で、主軸方向はN-88°-Wである。規模は長軸約2.8m、短軸約1.5m、確認面からの深さは1.0mである。底面は隅丸方形で、ほぼ平坦である。規模は長軸1.66m、短軸0.76mである。覆土はロームブロックが少ないものの、下半分は黒色土を主体とする層がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

3 その他の土坑

SK-001 (第69図、図版32)

14u-50・60グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、主軸方向はN-18°-Wである。規模は長軸0.94m、短軸0.82m、確認面からの深さは0.38mである。底面は、平面形は隅丸方形で、断面は逆台形である。規模は長軸0.78m、短軸0.68mである。遺構検出時には、黒褐色土(図中の1層)の平面的な広がりを中心としてセクションベルトを設定したが、結果として遺構本体の中心とはかなりずれてしまった。1層は後世の遺構若しくは撓乱と思われる。2層以下は黒色土を主体とする層が水平堆積しており、自然堆積と考えられる。底面は浅い皿状で、中央に長軸0.32m、短軸0.16m、底面からの深さ0.34mの長楕円形のピットがある。陥穴の逆茂木穴を想起させるが、現状の規模では遺構自体が浅すぎることから、陥穴として機能していたとは考えられない。

図示できる遺物は出土していない。

SK-002 (第69図、図版32)

15t-74・75グリッドに位置する。平面形は不整形円で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は長軸1.97m、短軸1.04m、確認面からの深さは0.55mである。覆土は黒色土を主体とする層がレンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。底面の中央部が浅い皿状に掘り窪められており、端部からそこに向かって段状に傾斜している。

図示できる遺物は出土していない。

SK-005 (第69図、図版32)

15t-35グリッドに位置する。平面形は正円に近い不整形円で、主軸方向はN-8°-Eである。規模は長軸1.37m、短軸1.30m、確認面からの深さは0.60mである。覆土の堆積状況は図化されていないが、観察所見では褐色土の単一層でしまりは弱い。底面は浅い皿状で、南側に長軸0.25m、短軸0.16m、底面からの深さ0.12mのピット状の掘込みがある。

図示できる遺物は出土していない。

SK-006 (第69図、図版32)

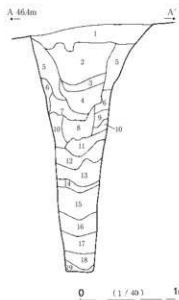
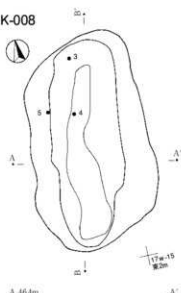
17t-15・25グリッドに位置する。平面形は不整形円で、主軸方向はN-2°-Wである。規模は長軸1.60m、短軸0.82m、確認面からの深さは0.52mである。底面は幅が狭く浅い皿状で、北東部に段状の張出がある。

図示できる遺物は出土していない。

SK-011 (第69図、図版33)

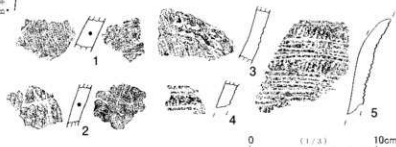
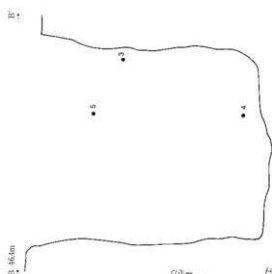
17t-80・81グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、主軸方向はN-105°-Wである。規模は長軸2.18m、短軸1.05m、確認面からの深さは0.30mである。底面はほぼ平坦であるが、南西端部が一段低く掘り窪められており、全体で単一の遺構であるか、別遺構であるかは判断できない。また、規模・形状ともSK-009と類似するが、覆土には焼土が含まれていない。

SK-008

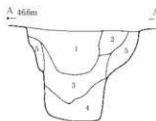
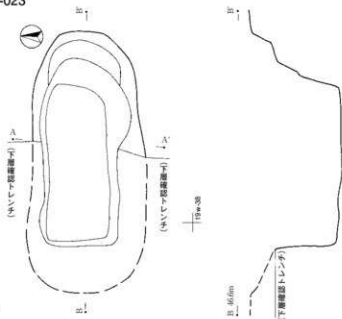


SK-008

1. 暗褐色土：黒色土混入、ローム粒微量
2. 暗褐色土：ローム粒微量
3. 黒褐色土：暗褐色土混入
4. 暗褐色土：ローム粒やや多量
5. 暗褐色土：黄褐色土混入、ローム粒微量
6. 黄褐色土：径30mm大のロームブロック少量、ローム粒やや多量
7. 暗黄褐色土：ローム粒微量
8. 暗褐色土：黒褐色土混入、径5mm大ロームブロックやや多量
9. 暗褐色土：黄褐色土混入、ローム粒やや多量
10. 黄褐色土：径10mm大ロームブロック多量
11. 暗黄褐色土：暗褐色土、黄褐色土混入、径10mm大ロームブロック微量
12. 暗褐色土：径5mm大ロームブロックやや多量
13. 黄褐色土：径10mm大ロームブロックやや多量、しまりやや強い
14. 暗褐色土：黒褐色土混入、径5mm大ロームブロック少量
15. 黄褐色土：径30mm大ロームブロック少量
16. 暗褐色土：黒褐色土混入、径10mm大ロームブロック少量
17. 黒褐色土：ローム粒多量
18. 黒褐色土：ローム粒微量
19. 暗黄褐色土：ローム+暗褐色土、ボソボソ



SK-023



1. 黒褐色土
2. 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒少量
3. 黒褐色土：ローム粒やや多量
4. 黒褐色土：ローム粒少量
5. 暗黄褐色土：ロームブロック主体、ローム多量

第68図 陥穴(3)

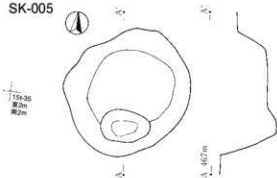
SK-001



SK-001

1. 黒褐色土：ソフトローム少量
2. 暗褐色土：ソフトロームやや多量
3. 暗褐色土：ソフトローム少量
4. 黄褐色土：ソフトローム主体、小ロームブロック少量

SK-005



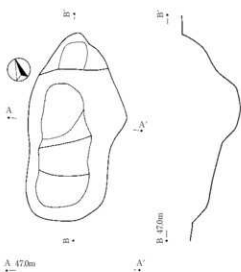
SK-011



SK-011

1. 黒褐色土：ローム粒少量
2. 暗黄褐色土：ソフトローム主体、ローム粒多量

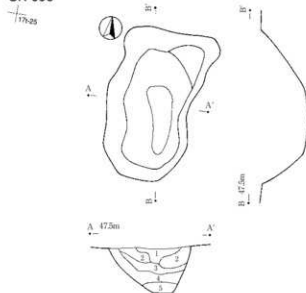
SK-002



SK-002

1. 黒褐色土：ソフトローム少量
2. 黒褐色土：ソフトロームやや多量
3. 暗黄褐色土：ソフトローム多量、黒色土少量

SK-006

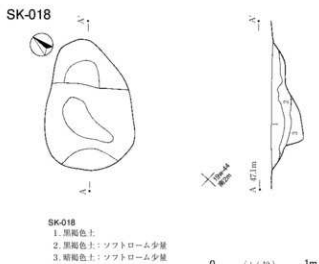
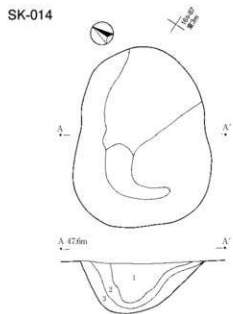
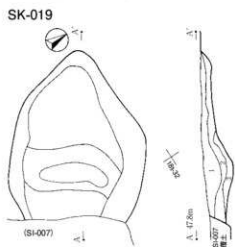
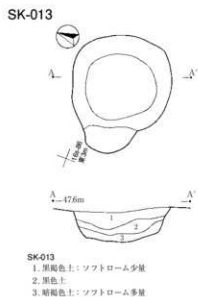
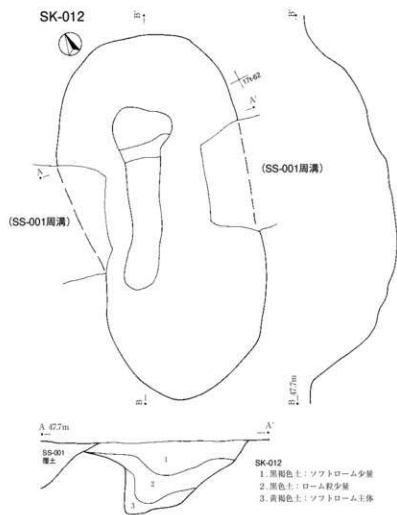


SK-006

1. 黒色土：ローム粒少量
2. 暗黄褐色土：暗黒色と黄褐色土を混状に含む、ハードロームブロック混入
3. 暗黄褐色土：黄褐色土やや多量、ハードロームブロック含まず
4. 黒褐色土：ローム粒多量、黄褐色土少量
5. 黄褐色土：ローム粒多量

0 (1/40) 1m

第69図 その他の土坑(1)



0 (1/20) 1m

第70図 その他の土坑(2)

図示できる遺物は出土していない。

SK-012 (第70図、図版33)

17t-51・61グリッドに位置する。SS-001の周溝と重複している。平面形は長楕円形に近い不整形円で、主軸方向はN-23°-Eである。規模は長軸3.80m、推定短軸約2.00m、確認面からの深さは0.77mである。断面形は、上半分は碗形であるが、下半分は東側の壁がなだらかに立ち上がるのに対し、西側の壁は直立するように立ち上がり、均整がとれていない。底面は中心部が最も深く、南北に向かってせり上がる浅い皿状であるが、北側は段状になる部分がある。

図示できる遺物は出土していない。

SK-013 (第70図、図版33)

16s-76・86グリッドに位置する。東側にSK-014が隣接する。平面形は正門に近い楕円形で、西側に突出部分がある。主軸方向はN-65°-Eである。規模は長軸1.25m、短軸1.05m、確認面からの深さは0.37mである。底面は浅い皿状である。覆土は全体に黒色土が多く、自然堆積と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

SK-014 (第70図、図版33)

16s-77・87グリッドに位置する。西側にSK-013が隣接する。平面形は不整形円で、主軸方向はN-68°-Eである。規模は長軸1.94m、短軸1.45m、確認面からの深さは0.57mである。底面は平坦面がほとんどなく、碗形である。覆土は全体に黒色土が多く、自然堆積と考えられる。

図示できる遺物は出土していない。

SK-018 (第70図、図版34)

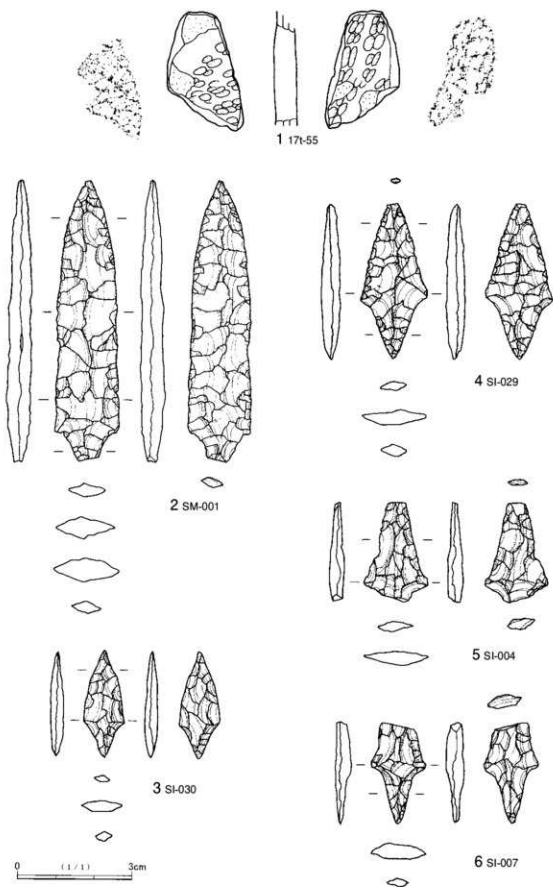
19w-43・44グリッドに位置する。東側にSK-017が隣接する。平面形はやや不整形な楕円形で、主軸方向はN-43°-Eである。規模は長軸1.40m、短軸0.95m、確認面からの深さは0.35mである。底面は全体に浅い皿状で、中央部が更に深く掘り窪められている。浅い部分の深さは0.16m程度である。

図示できる遺物は出土していない。

SK-019 (第70図、図版34)

18t-31・32グリッドに位置する。南東側はSI-007と重複している。平面形は先端がやや尖る楕円形で、長軸方向はN-54°-Wである。規模は長軸1.84m、短軸1.42m、確認面からの深さは0.35mである。底面は北西端部から南東に向かって緩やかに下るように傾斜し、中央部でやや深く掘り窪められている。

図示できる遺物は出土していない。



第71図 草創期遺物

4 草創期遺物 (第71図、図版46)

当該時期の遺構に伴うものではないが、草創期の遺物がまとめて出土している。1の土器と2・5・6の尖頭器は西側調査区内のやや近接した範囲、3と4の尖頭器は東側調査区内のやや近接した範囲から出土している。

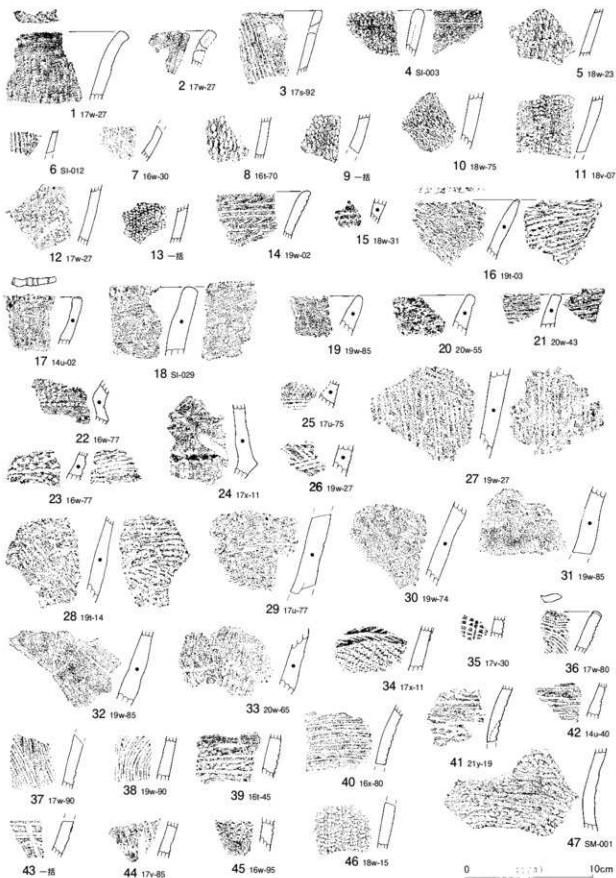
1は表裏縄文土器と考えられる深鉢で、口縁部直下と考えられる。胎土は白色砂粒や赤色スコリア粒をやや多く含むが、焼成は良好である。縄文原体はRLR複節縄文と考えられるが、撚りがありっきりしておらず、節の大きさはかなり不揃いである。なお、この原体は節が細長く、0段多条であると思われる。条の間隔が広いため原体押圧にも見えるが、押圧とすると単節縄文原体と考えざるを得ないが、器面に認められる隣接した2本の条は節が揃わないため、複節縄文の回転施文と判断した。施文方向は外面が縦位、内面は縦に近い斜位であるが、外面は器面の欠損がやや多く不明瞭である。また、施文の重複もあり、かなり乱れているため、実測図は模式的な表現としている。

2～6は有舌尖頭器である。2は安山岩製で、基部が半分ほど欠損している。左側縁中心よりやや下側の、わずかに挟られている部分は後世の欠損(ガジリ)である。残存長74.4mm、幅17.2mm、厚さ6.4mm、重量8.85gである。3は安山岩製で、ほぼ完存している。長さ27.9mm、幅11.0mm、厚さ3.8mm、重量1.02gである。4は頁岩製で、先端がわずかに欠損している。残存長41.0mm、幅17.8mm、厚さ5.0mm、重量2.69gである。5は安山岩製で、基部のほぼ全てと先端を欠損している。残存長26.5mm、幅17.0mm、厚さ4.4mm、重量1.41gである。6は安山岩製で、先端側が大きく欠損している。残存長26.5mm、幅14.6mm、厚さ4.7mm、重量1.32gである。

5 グリッド等出土遺物 (第72・73図、図版45・46)

図示した土器は全て燃糸文期以降の土器である。

1～13は燃糸文土器で、1～4は深鉢口縁部、5～13は深鉢胴部である。1と2は同一個体と考えられるもので、口縁部が緩やかに外反し、口唇は外削ぎ状に整形され、RL単節縄文が施される。胴部は条が縦位になるように、斜め方向にRL単節縄文が施される。胎土は砂粒を多量に含む。内面は器面がやや粗く、摩耗している。2には補修孔が穿たれる。井草Ⅱ式に比定される。3は胎土に赤色スコリア粒や砂粒を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。口縁部はほぼ直立し、縦位にR燃糸文が施される。内面は、口縁下は2cm幅で横方向、その下側は縦方向のケズリ調整が施される。補修孔が穿たれている。夏島式に比定される。4は口縁部がほぼ直立し、口唇が微妙に肥厚する。外面は縦位のL燃糸文が施される。胎土は砂粒を多量に含む。内面は横方向のナデ調整が施されるほか、口縁下約1.5cmの位置に横位の沈線が認められる。焼成後であるが、意図的なものであるとすると、その理由は不明である。稲荷台式に比定される。5は外面にやや間隔が開いた縦位のR燃糸文が施される。胎土は白色砂粒や小礫を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。ただし、内面の調整は粗い。6は外面に節の細かい縦位のR燃糸文が施される。胎土は砂粒をやや多く含む。7は外面に節の細かい縦位のR燃糸文が施される。胎土は全体に細かく、焼成は良好で堅緻である。ただし、内面の調整は粗い。8は外面に縦位のL燃糸文が施される。胎土は砂粒を極めて多量に含む。内面の調整は粗い。9は外面にやや間隔が開いた縦位のR燃糸文が施される。胎土は砂粒を極めて多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。10は外面に縦位のR燃糸文が間隔を密にして施される。胎土は砂粒や赤色スコリア粒を多量に含む。内面の調整は粗い。11は外面にやや間隔が開いた縦位のL燃糸文が施される。胎土は白色砂粒を極めて多量に含む。内面の調整は粗いが、スガ



第72図 グリッド等出土縄文土器

微量付着している。12は外面にRL単節縄文の条が縦位になるように、斜め方向に施文される。胎土は砂粒や小礫を多量に含む。内面の調整は粗く、後世による傷も顕著である。13は外面にRL単節縄文の条が縦位になるように、斜め方向に施文される。胎土は白色砂粒を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。

14・15は沈線文土器である。14は深鉢口縁部で、口縁がやや強く外反する器形で、口縁に沿って、細い丸棒状工具による長さ約1cmの短沈線が斜位に連続して配される。更に、その下に同じ工具による平行沈線が3本廻られ、その下に斜位の短沈線、横位の短沈線、斜位の短沈線と多段に連続して配される。内面は横方向のケズリ調整が施される。胎土は白色砂粒を多量に含む。三戸式に比定される。15は深鉢胴部で、貝殻縁圧痕が施される。胎土は微量の植物繊維を含む。田戸上層式に比定される。

16～33は条痕文土器で、16～21は深鉢口縁部、22～33は深鉢胴部である。16は、外面は板状工具による斜め方向のケズリ状の調整、内面は横方向の貝殻条痕が施される。口唇は角棒状工具によるキザミが施される。胎土は植物繊維や白色砂粒を多量に含む。17は、外面は板状工具によるケズリ状の調整が施されるが、スガが多量に付着しており詳細は不明である。内面は板状工具による横方向のナデ調整が施される。口唇には尖頭状工具によるキザミが施されるほか、部分的に押圧が加えられる。胎土は植物繊維を少量、砂粒を多量に含む。18は内・外面とも板状工具による横方向のケズリ状調整が施される。胎土は植物繊維のほか、砂粒や小礫を多量に含む。19は、外面は板状工具による縦方向のケズリ状調整が施されるが、内面は判然としない。胎土は植物繊維を比較的少量、砂粒を多量に含む。20は内・外面とも横方向のケズリ状調整が施される。胎土は多量の植物繊維と砂粒を含む。21は内・外面とも横方向の貝殻条痕が施される。口唇は角頭状に整形され、幅は狭いが貝殻条痕が施されていると思われる。胎土は植物繊維や砂粒を多量に含むものの、焼成は良好で堅緻である。22は底部から器壁が大きく外傾し、胴部で強く内側に屈曲し、口縁に向かって再び強く開く器形である。屈曲部を外側に張り出させて隆帯として半截竹管によるキザミを施し、上側の内傾した部分に隆帯に平行させて同じ工具による押引文を配する。その上方に同様の押引文による重弧状の意匠を配する。胎土に植物繊維のほか砂粒を多量に含む。焼成はやや不良である。23は丸棒状工具による横位の沈線で上下が区画され、上側は斜めの押引文が充填される。下側ははっきりしないが、中央に沈線による円文が配され、両脇に押引文による重弧線が配されるように見える。胎土は植物繊維を多量に含むが、焼成は良好で堅緻である。24は底部から器壁が大きく外傾し、胴部で強く内側に屈曲し、口縁に向かって直立する器形である。屈曲部を外側に張り出させて隆帯とするのは22と同様であるが、明確なキザミなどは認められない。また、器面も全体に摩耗しており、有文が無文か判然としない。胎土は植物繊維を少量、砂粒や小礫を多量に含む。25～28は貝殻条痕が施されるものである。25・26は外面に貝殻条痕が横位と斜位に施される。小破片のため判断できないが、何らかのモチーフが描かれている可能性がある。内面は板状工具によるケズリ状調整が施されているが、25は摩耗が著しい。胎土はいずれも植物繊維を多量に含む。27は内・外面とも縦方向の貝殻条痕が施される。胎土は植物繊維を比較的少量、砂粒・小礫を多量に含む。28は貝殻条痕が内面のみ施され、外面は板状工具によるケズリ状調整が施される。胎土は極めて多量の植物繊維を含み、器面からの剥落が目立つ。29～33は板状工具によるケズリ状調整が施されるものである。胎土はいずれも植物繊維や砂粒を多量に含む。33は貝殻条痕のように見えるが、胎土は小礫を多量に含んでおり、調整の際に小礫が引きずられた痕跡が器面に残っているものである。以上の条痕文土器はほとんどが貝殻条痕若しくはケズリ状調整のみで、型式を特定するのは難しい。有文土器22と23はいずれも沈線と押引文を構成要素とし、縄が島台式

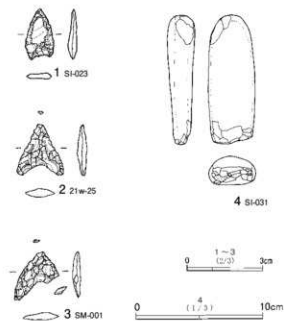
に特徴的な微隆起線若しくは沈線による区画や円形刺突は認められず、単位文的な様相が強いことから茅山下層式に比定されると思われる。無文の24も同時期と思われる。

34～38は前期諸磯式で、36は深鉢口縁部、34・35・37・38は深鉢胴部である。34はRL単節縄文を地文とし、横位の浮線文が2本貼り付けられる。胎土は砂粒を多量に含むものの、焼成は良好で堅緻である。35は半載竹管による押し文で器面が充填される。胎土は粒子が細かく、焼成も極めて良好で堅緻である。36～38は同一個体と考えられるもので、胎土は砂粒を多量に含む。36は口縁に沿って半載竹管による沈線が多段に配され、その下側は同じく半載竹管による沈線が重弧状（同心円状？）に配される。口唇には内側から外側に向かって指頭と思われる押圧が加えられる。37・38も半載竹管による沈線が重弧状に配される。

39～45は浮島式及び興津式で、いずれも深鉢胴部である。39は横位のL燃糸文を地文とし、半載竹管による横位の平行沈線が多段に配される。胎土は砂粒を多量に混入し、焼成もやや不良で、特に内面はやや荒れている。40は外面に半載竹管による横位の平行沈線が多段に配される。胎土は砂粒・小礫を極めて多量に含む。41は外面に半載竹管による横位の平行沈線や変形爪形文が配される。胎土は砂粒や赤色スコリア粒を多量に含む。輪積み部分はうまく癒着しておらず剥落が顕著である。42は半載竹管による横位の短沈線が多段に配される。胎土は粒子が細かく、焼成も極めて良好で堅緻である。43は半載竹管による横位の平行沈線と波状の沈線が配される。胎土は砂粒を多量に含むものの粒子が細かく、焼成も極めて良好で堅緻である。44は横位の波状貝殻文が施される。胎土は砂粒を多量に含む。45は振り幅が小さく、間隔が密な波状貝殻文が施される。興津式に特徴的な磨消貝殻文の施文技法であり、当該時期と考えられる。胎土は砂粒を多量に含むものの粒子が細かく、焼成も極めて良好で堅緻である。

46・47は前期後半と考えられる縄文施文のみの深鉢胴部である。46はRL単節縄文に見えるが節が細長く、0段多条の可能性もある。胎土は砂粒、小礫を極めて多量に含む。47はL燃糸文が横位に施される。胎土は砂粒を多量に含む。

1～4は有舌尖頭器以外の縄文時代の石器である。1～3は石鏃で、いずれもチャート製の凹基鏃である。1は長さ20.0mm、幅11.3mm、厚さ4.1mm、重量0.94gである。2は先端部をわずかに欠損する。残存長20.0mm、幅18.8mm、厚さ3.8mm、重量1.01gである。3は先端部と右脚部を欠損する。残存長18.0mm、残存幅18.0mm、厚さ3.4mm、重量0.79gである。4は砂岩製の敲石である。外縁部全体に敲打痕が認められるが、下部端は特に顕著であり、部分的に擦痕も認められる（挿図にスクリーンで表示）。長さ101.2mm、幅37.0mm、厚さ22.0mm、重量127.53gである。



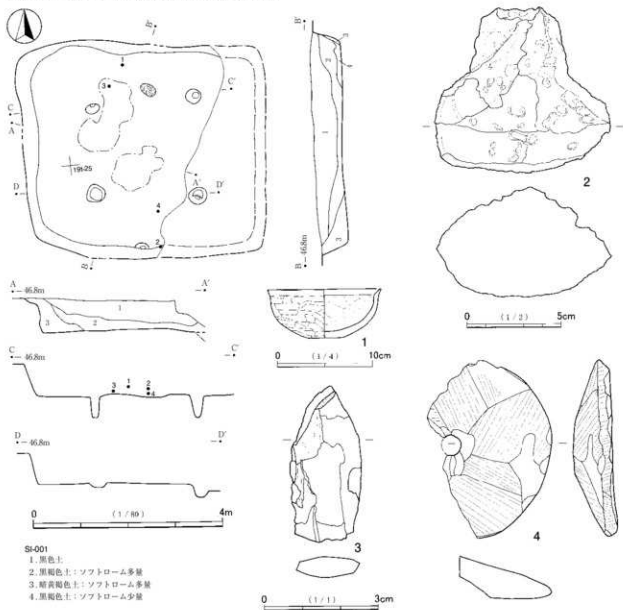
第73図 グリッド等出土縄文時代石器

第4節 古墳時代以降の遺構と遺物

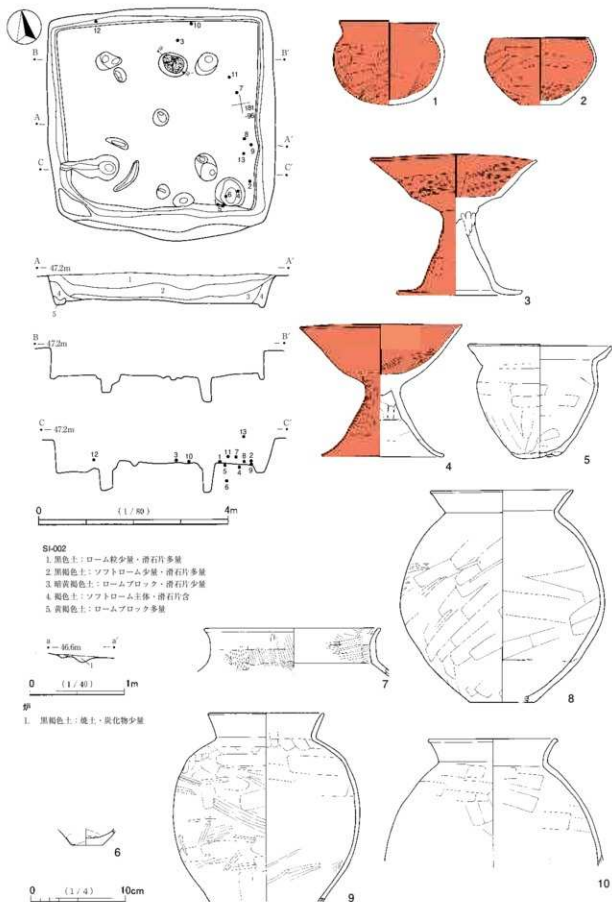
八重門田遺跡の今回の調査範囲で主体となる時期である。遺物単独では弥生時代後期後半とされる資料が含まれるが、古墳時代前期の堅穴住居跡から出土しているため、ここで扱うこととした。なお、土器類と銭貨の一覧表は章末にまとめて掲載した。

SI-001 (第74図、第20表、図版15・47・54)

19t-15グリッド付近、西側本調査範囲のなかで南端に当たる位置で検出された。南東側に緩く傾斜した地点であり、堅穴の東側の壁を捉えられなかったため、柱穴の配置から平面形を復元した。平面形はやや横長の方形で、主軸方向はN-8°-Eである。規模は主軸長416m、推定幅458m、推定床面積は18.81㎡で、最も遺存の良い西側で確認面からの深さ0.72mである。床面は炉周辺がやや低いものの、ほぼ平坦で、炉の西側と堅穴中央部分が顕著に硬化している。主柱穴は対角線上に4本配置され、炉は堅穴北側の主柱穴の間に付設される。堅穴南壁沿いには小規模な出入口ピット(深14cm)がある。壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。覆土は自然堆積と考えられる。



第74図 SI-001

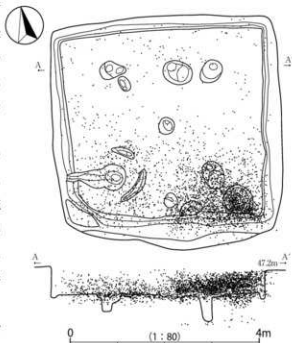


遺物は遺構が深い割に、ごく少量しか出土しなかった。ほとんどが土師器の小破片で、赤彩された破片が目立つ。そのほか滑石製模造品の製作剥片と考えられる小剥片が16点出土したが、分布にまともはなかった。1は土師器碗である。底部はヘラケズリによる平底で、口縁部内面にしっかりとした稜が見られる、いわゆる内斜口縁である。体部外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はヘラナデ調整である。2は茶褐色の軽石である。平坦な面は少ない。重量は65.77gである。3はわずかに研磨痕があり、厚みや形状から剣形の未成品の可能性が考えられる。滑石製で、重量は4.88gである。4は滑石製紡錘車の破片である。上下面・側面とも荒研磨されているが、面が多数あり、穿孔する際に破損した未成品の可能性が高い。

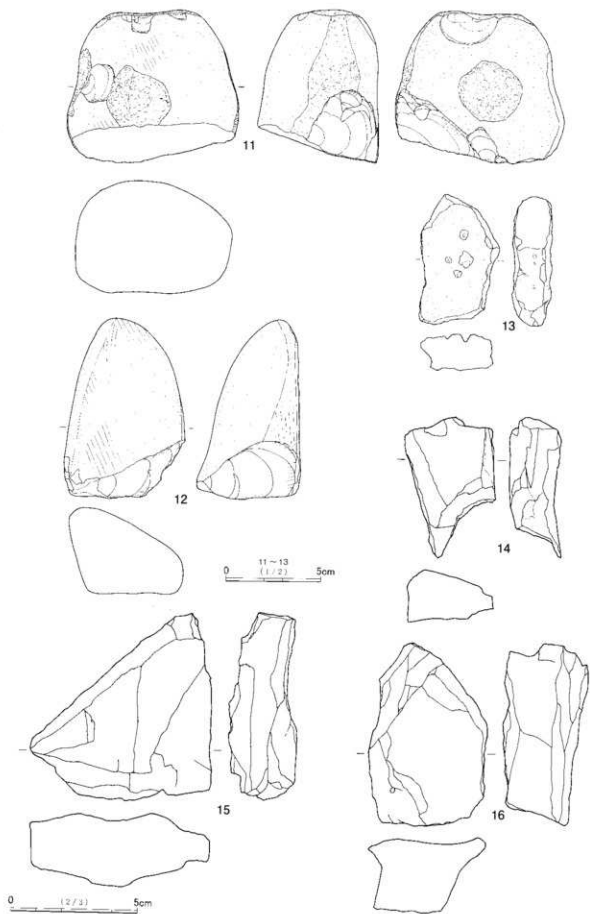
SI-002 (第75～79図、第20表、図版15・47・54)

SI-001の北側、18t95グリッド付近に位置する。平面形は正方形で、主軸方向はN-8°-Eである。規模は主軸長4.20m、幅4.36m、床面積は18.03m²で、確認面からの深さは0.52mである。壁溝は全周している。床面はほぼ平坦で、主柱穴は対角線上に4本配置される。炬は堅穴北側の主柱穴の間に付設され、覆土には焼土と炭化物が少量含まれる。堅穴南西隅に間仕切り状の溝が主柱穴と接して検出された。出入口右側の南東隅に凹形に掘り込まれた貯蔵穴(深さ約40cm)と堅穴中央に小規模なピットがある。

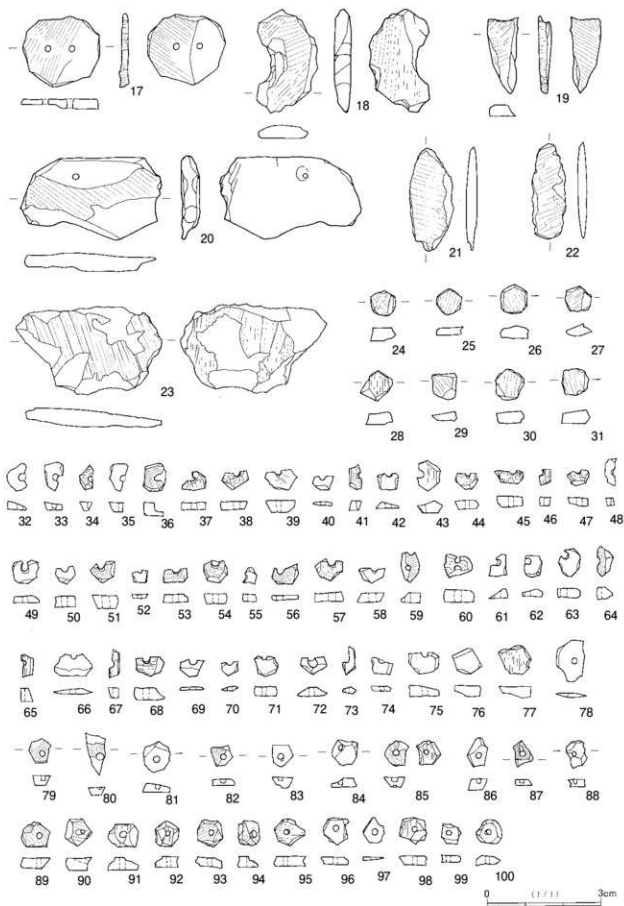
遺物は石製模造品の製作剥片や未成品などの製作関連遺物が多く出土した。遺存の良好な土器類は堅穴東壁際と南東隅の貯蔵穴からの出土が目立つ。図示したもの以外では赤彩された高杯や比較的器壁の薄い甕類の破片が見られる。1・2は土師器碗である。1は丸底で、口縁部は短く外反する。外面はヘラケズリ後ナデ調整、一部にヘラミガキが施される。内面はヘラナデ調整である。頸部内面にしっかりとした稜が見られる。胎土には少量の雲母粒子が含まれる。内外面ともに赤彩される。2は平底で、体部から口縁部は内湾して立ち上がり、口縁は屈曲しない。外面はヘラケズリ後ナデ調整、内面はナデ・ミガキ調整が施される。内外面とも調整は摩滅のため不明瞭である。内外面ともに赤彩を施すが、外面は遺存が不良で、一部のみ確認できる。3・4は土師器高杯である。杯部は口径が大きく、口縁部が緩やかに外反する。杯部外面下位に稜が作り出される。脚部はラッパ状の屈折脚で、裾部は広く扁平である。杯部外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整である。脚部外面は筋状痕を残す強いヘラナデ、裾部には更にナデ・ミガキ調整が施される。杯部内面はナデ・ミガキ調整である。脚部内面は器面の剥落が著しく調整は不明瞭である。内外面ともに赤彩される。4の杯部は口径が大きく、下位の稜線は明瞭でない。脚部はラッパ状に大きく開き、裾部は屈折しない。外面はヘラケズリ後ナデ、脚部下位にはミガキ調整が施される。杯部内面は丁寧なナデ・ミガキ調整である。脚部内面は粘土紐の輪積痕が明瞭で、雑なナデが施される。胎土は黒色砂粒が目立つ。脚部内面を除いた全体が赤彩される。5は土師器の小型甕である。頸部で強く屈折し、口縁部は大きく開く。底面は雑に粘土紐を貼付した高台状である。内外面はナデ調整が施される。内面の一部に



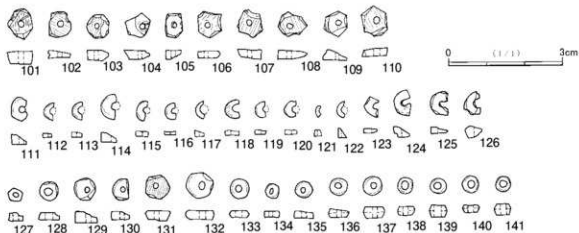
第76図 SI-002 (2)



第77图 SI-002 (3)



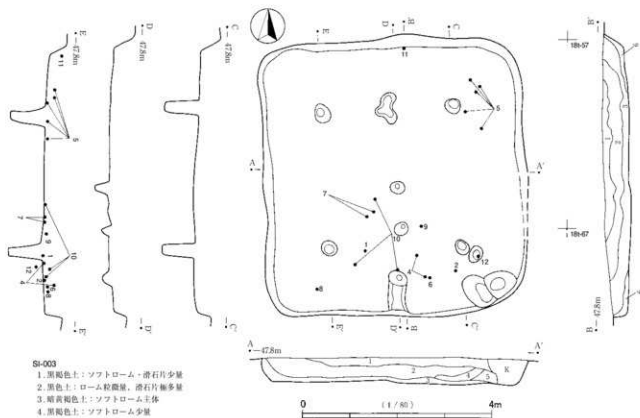
第78圖 SI-002 (4)



第79図 SI-002 (5)

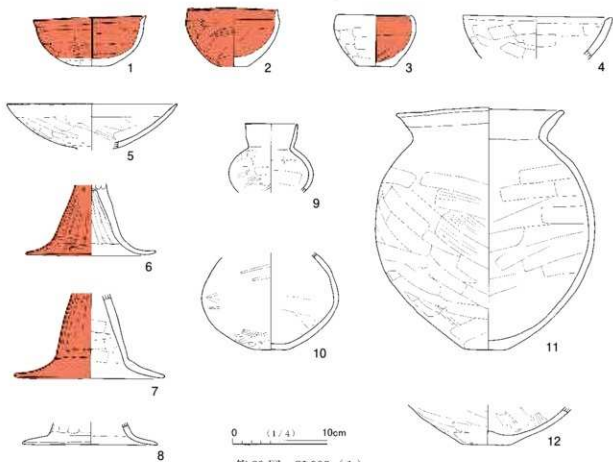
輪積痕が残る。6は土師器埴の底部と考えられる。外面はミガキ状のナデ、内面はナデ調整が施される。外面は赤みを帯びており、赤彩の可能性がある。7～10は土師器甕である。7の口縁部は直立気味に立ち上がった後、弱く外反する。内外面ともハケメ調整である。外面にススの付着が見られる。8は胴部に接点はないが図面上で復元した。頸部は「く」の字状に強く屈曲し、胴部中位に最大径をもつ。外面はヘラケズリ後ナデ調整、一部にはミガキが施される。内面はヘラナデ調整だが、下位はケズリ状に強く施される。胎土に雲母粒子が含まれる。外面にススの付着が見られる。9の頸部は「く」の字状に屈曲し、内面に弱い稜が作られる。胴部中位に最大径をもつが、張りはやや弱い。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整である。内面はヘラケズリ後ヘラナデ、下位にはミガキ調整が施される。胎土に微量の雲母粒子が含まれる。胴部の一部が被熱し、ススの付着が見られる。10の頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は弱く外反しながら立ち上がる。肩部の張りが弱い。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデ調整が施される。

11～141は石製模造品製作関連遺物である。全体で位置・高さを記録した遺物点数は3,000点以上である。出土状況は第76図のとおりで平面的には堅穴の南半分に集中が見られる。出土高さは覆土全体に広がり、上層から下層まで万遍なく出土している。11～13は出土高さが床面から浮いているが、工具として使用された可能性のある石器である。いずれも欠けている。11は安山製の敲石である。各面に強い敲打痕が見られる。重量は664.6gである。12は砂岩製の磨石である。全体的に滑らかで、光沢がある。重量は383.8gである。13は穿孔時の台石としての使用が考えられる。表面に小穴が4か所ある。穴は奥が細くなるため、先端の尖った錐状工具を利用した結果と想定される。石材は安山製で、被熱していると考えられる。重量は66.1gである。14～141は全て滑石製である。14～16は原石又は荒製品である。厚みがあり、断面がやや赤みがあり質感がざらつく。17は有孔円板の未成品である。側面も含めて荒研磨されている。18は勾玉の未成品である。表裏面は研磨され、側面を形削成形している段階で破棄されたものと考えられる。20の表面は研磨され、裏面は割れ面である。偏った位置に穿孔されており、未成品だが種類は不明である。21～23は表裏面が平らに研磨された板状研磨品である。多量の未成品や剥片類が出土しているものの、板状研磨品はこの3点のみである。24～31は白玉の未成品で形削段階のものである。平面形が4角形～6角形で側面が面取りされる。32～110は白玉の未成品で穿孔段階のものである。穿孔途中品・穿孔破損品・穿孔完了品がある。111～141は白玉の側面研磨段階のものである。破損品(111～132)と側面研磨により側面中位に弱い稜を作り出したほぼ成品(133～141)がある。



SI-003

1. 黒褐色土：ソフトローム・滑石片少量
2. 黒色土：ローム粒微量、滑石片極少量
3. 暗黄褐色土：ソフトローム主体
4. 黒褐色土：ソフトローム少量
5. 暗褐色土：ソフトロームやや多量
6. 黒褐色土：ソフトローム・ローム粒少量

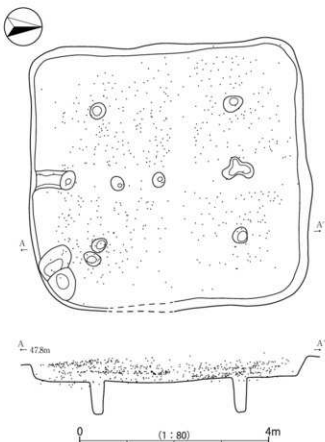


第80図 SI-003 (1)

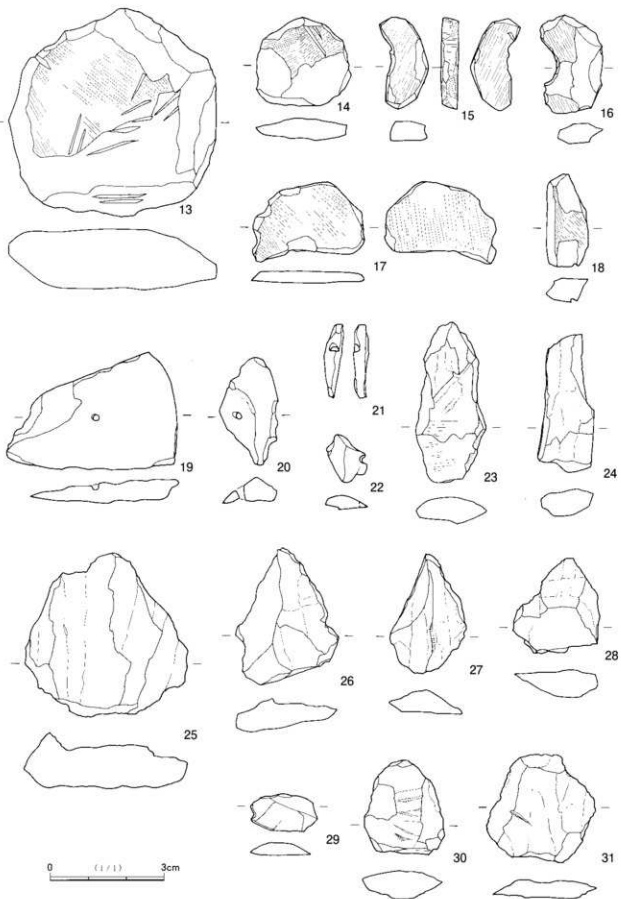
SI-003 (第80～83図、第20表、図版16・47・54・55)

18t-56グリッド付近に位置する。平面形は隅丸の正方形であり、東側壁面の一部が攪乱を受けている。主軸方向はほぼ南北である。規模は主軸長5.52m、幅は5.22m、床面積は28.59㎡、確認面からの深さは0.56mである。壁溝は巡らない。床面はほぼ平坦で、主柱穴が4本対角線上に配置される。炉は堅穴北側の主柱穴の間に付設される。炉の平面形は不整形で、炉床はほとんど焼けていない。堅穴の中心から南の出入口ピットへ向かい、並んで浅いピットが検出された。出入口ピットに接してわずかな高まりが南壁沿いに見られる。出入口右側の南東隅に貯蔵穴(深さ約45cm)がある。

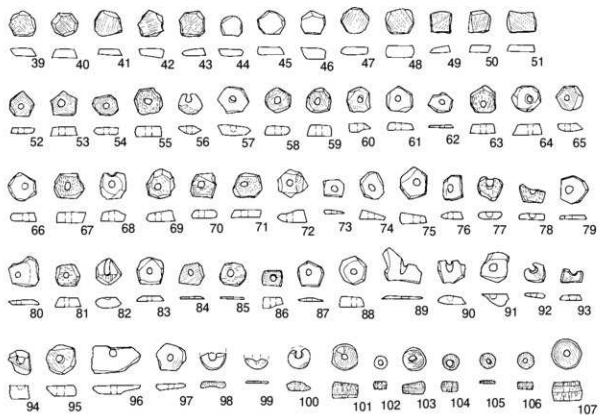
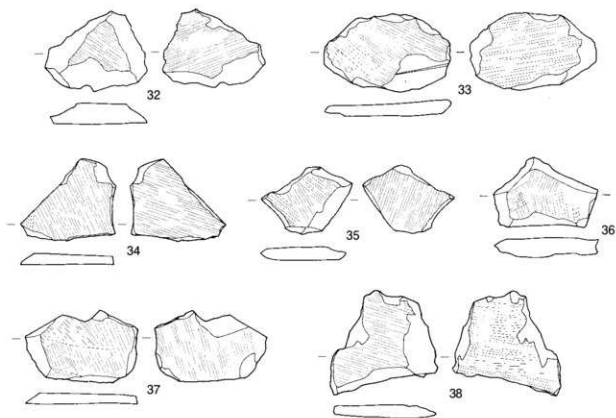
遺物は石製模造品の製作剥片や未成品などの製作関連遺物が多く出土した。土器類の出土は多くはなく、図示したもの以外では高杯・甕類の小破片が出土している。1～4は土師器碗で、1～3はいずれも平底である。1は口縁端部が短く外傾する内斜口縁である。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整、内面はヘラナデ調整が施される。内外面ともに赤彩される。2は口縁端部がわずかに屈曲しながら直立気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はヘラナデ調整が施される。内外面ともに赤彩される。3は体部から口縁部が内湾する形状である。口縁端部の擦れや欠けが著しい。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。底部付近は雑で強いナデが施される。内面に赤彩され、外面は遺存が不良で範囲が不明である。4は口縁部の破片である。口縁端部に粘土紐接合痕が見られる。やや丸みを有するものの内斜口縁を作り出している。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデ調整が施される。5～8は土師器高杯である。5は杯部のみで遺存で、下位に後をもたない浅い碗形である。外面はヘラケズリ後丁寧なナデ、外面はナデ、一部にミガキ調整が施される。胎土自体が赤みを帯びている。6・7は脚部である。ラッパ状に大きく開く形状で、裾部は広く扁平である。外面はミガキ・ナデ調整が施され、内面には絞り痕が見られる。外面と内面裾部の一部に赤彩される。二次的に被熱している。7の脚部はラッパ状に開き、屈曲して裾部は大きく広がる。外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整が施される。内面は粘土紐の輪積痕が明瞭で、外面は赤彩される。8は裾部破片である。裾部は広く扁平である。内外面ともにナデ調整が施される。内外面の一部が黒みを帯び、赤彩後に被熱した可能性がある。9・10は土師器罎である。10は平底の大型罎で、胴部のみで遺存である。胴部中位が大きく張り、ややつぶれた球状である。外面は器面が摩滅し、一部にナデ・ミガキ調整が確認できる。内面はナデ調整が施される。胎土自体が赤みを帯びる。9は小型罎である。胴部中位がやや張り、口縁部は直立気味に立ち上がる。外面はナデ・ミガキ、内面はヘラナデ調整が施される。胎土は白みを帯び、外



第81図 SI-003 (2)



第82圖 SI-003 (3)



第83圖 SI-003 (4)

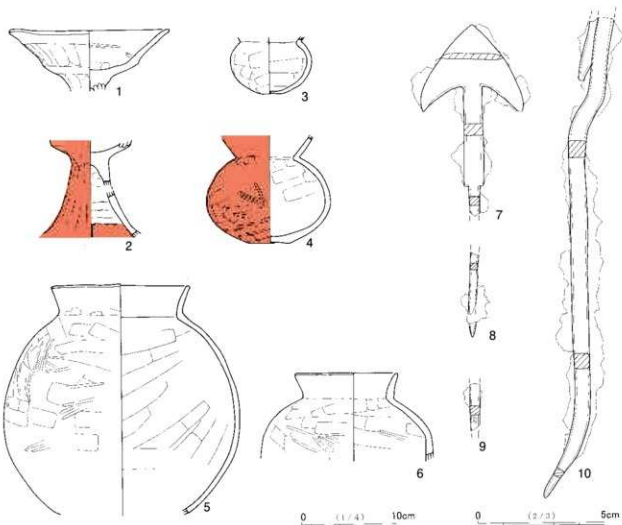
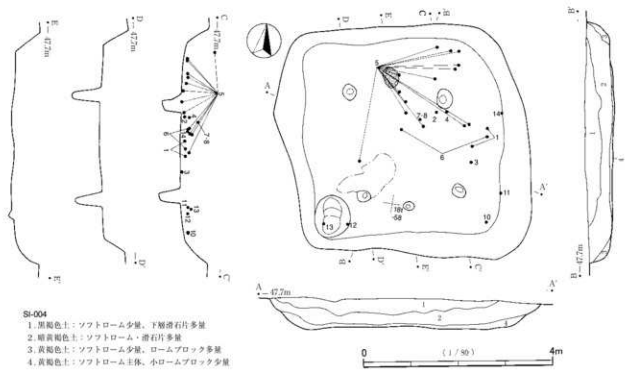
面にススの付着が見られる。11・12は土師器甕である。11は頸部が「く」の字状で、内面に稜がしっかりと作り出される。口縁部中に段をもつ。胴部はラグビーボール状で、胴部中に最大径をもつ。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、上半部は筋の残るハケメ状のナデ調整が施される。内面はヘラナデ調整である。外面一部が被熱により赤みを帯び、また、外面に黒斑やススの付着が見られる。12は底部で、底外面は使用による摩滅が見られる。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ・ミガキ調整が施される。内面はコゲ、外面にはススの付着が見られる。

13～107は石製模造品製作関連遺物である。全て滑石製である。全体で位置・高さを記録した遺物点数は500点以上である。出土状況は第81図のとおりで平面的には壁際を除いて堅穴全体に分布する。出土高さは覆土全体に広がり、顕著な差はないが覆土2層中からの出土がやや多い。13は大形の未成品で厚みがある。紡錘車の形制段階のものと考えられる。14は円板の未成品と考えられる。裏面は割れ面で研磨はない。15・16は勾玉の未成品である。15は表裏面と側面の荒研磨で面を残す。16は表面の一部のみ研磨が残り、ほかは割れ面である。17は円板の未成品の可能性ある。18は表面に鑄状の高まりがあり、剣形の未成品の可能性ある。19～22は穿孔される不明品である。19は貫通していない。裏面は原石面を残し、光沢がある。23～31は荒制品である。23については一部研磨されており、形状から剣形の可能性ある。32～38は両面を平らに研磨した板状研磨品である。36は裏面が割れ面となり、側面に一部面取りが見られる。39～51は白玉の形制段階のものである。平面形が4角～6角形で、側面が面取りされる。52～97は白玉の未成品で穿孔段階のものである。穿孔途中品・穿孔破損品・穿孔完了品がある。92は側面研磨が見られるが、極めて薄い。98～107は白玉の側面研磨段階のものである。研磨により破損したもの(98～100)と側面研磨を終えたもの(101～107)がある。ほぼ成品の厚みのある個体は側面中に弱い稜を作り出している。

SI-004 (第84～89図、第20表、巻頭図版3、図版16・47・58)

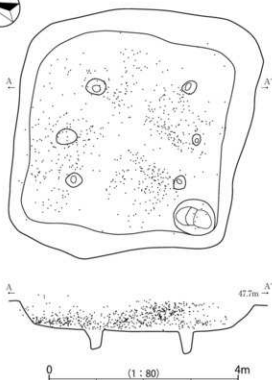
18t-47グリッド周辺に位置する。平面形は隅丸の方形であり、主軸方向はN-14°-Wである。規模は主軸長4.10m、幅4.26m、床面積は16.21㎡で、確認面からの深さは0.64mである。壁溝は巡らない。床面はほぼ平坦であり、南西側の主柱穴の周囲に硬化面が確認できた。主柱穴が4本対角線上に配置される。堅穴北西の主柱穴間の位置に炬が付設されるが、炬床はほとんど赤化していない。出入口ピットは炬の反対側の堅穴南壁面寄りにある。出入口ピットの西側、南西隅に貯蔵穴(深さ約30cm)が検出された。

遺物は石製模造品の製作剥片や未成品などの製作関連遺物が多く出土した。土器類は図示したもの以外では高杯・甕・壺類の破片が出土し、二重口縁壺の口縁部破片も含まれる。1・2は土師器高杯である。1は杯部のみで遺存で、外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ・ミガキ調整が施される。胎土は赤褐色スコリアが含まれる。2は杯部下位から脚部である。杯部下位に明瞭な稜をもち、脚部はラッパ状に開く形状である。外面は強いナデ、杯部内面はナデ調整が施される。脚部内面は輪積痕が明瞭で、ナデ調整が施される。外面と杯部内面、裾部内面も赤彩される。3・4は土師器甕である。胴部は球形ではなく、ややつぶれた形状である。3は小型の平底甕で、器面は摩滅気味である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデ調整が施される。内面が特に赤みを帯びる。4は大型甕で、外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はナデ調整が施される。外面は赤彩される。5・6は土師器甕である。頸部の屈曲は弱く、口縁が直立気味に短く立ち上がる。5は胴部中に最大径を有する。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面は強いヘラナデ調整で、一部にミガキが施される。胎土は白色砂粒が目立つ。外面の一部が被熱により赤みを帯



第84図 SI-004 (1)

びているほか、ススの付着が見られる。6は口縁部から胴部上位にかけての遺存である。肩部が張る形状である。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はナデ・ミガキ調整が施される。胎土自体が赤みを帯びる。7～9は鉄鏝である。7は鏝身形が三角形の短頭鏝で、鏝があり判然としないが断面は平造と考えられる。鍔被部は側面のみ突出する。8は基尻部分に近い部分である。9は木質が付着する。鉄鏝の基部が鉄釘の可能性もある。10は鉄製工具と考えられる。端部で屈曲し、断面はほぼ正方形である。



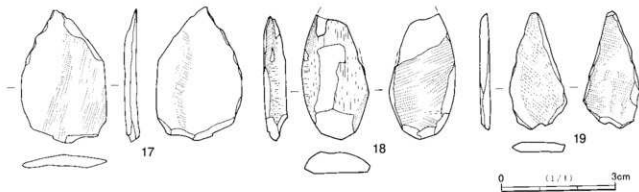
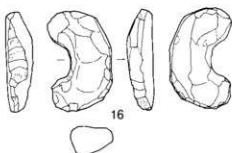
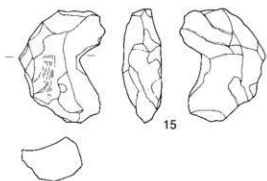
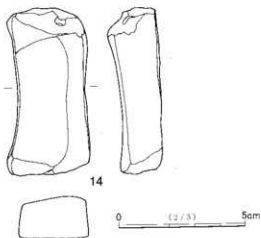
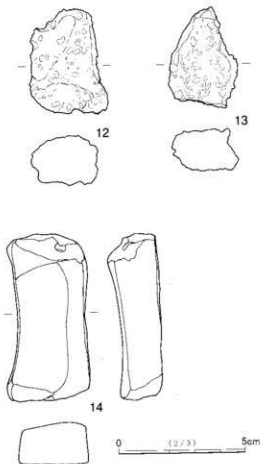
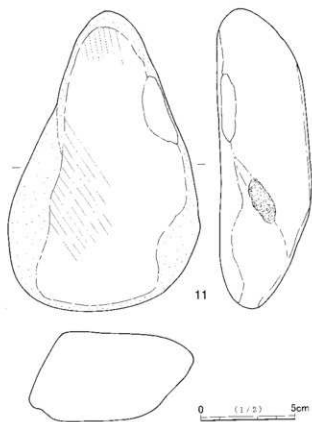
第85図 SI-004 (2)

11～143は石製模造品製作関連遺物である。全体で位置・高さを記録した遺物点数は600点以上である。出土状況は第85図のとおりで平面的には壁際を除いて堅穴全体に分布する。出土高さは最下層を除いて覆土全体に広がる。11～14は床面から浮いて出土したが、工具として使用された可能性のある石器類である。11は安山製の白石である。表面は磨られて光沢を帯びる。非常に滑らかで仕上げに使用した可能性がある。側面はざらつく部分がある。重量は1,026.2gである。12・13は軽石である。色調はどちらも灰黄色である。重量は12が5.7g、13が3.8gである。14は凝灰岩製の砥石である。上部に孔があり、表裏側面は磨られて滑らかである。重量は54.7gである。15～143は全て滑石製である。15・16は勾玉の未成品である。17～22は形状から剣形の未成品の可能性のあるものである。なお、17は薄く剥離しておりやや可能性は低い。22の穴は貫通しない。23～40は原石又は荒制品である。金属製工具での擦痕はいわゆる研磨のように滑らかでなく、白くざらつく。図としては短い細線で示した。37～40はわずかに研磨された面が確認できる。41～50は両面を平らに研磨した板状研磨品である。44は厚みがあり剣形の可能性がある。51～58は白玉の形制段階のものである。平面形が5角形～6角形で、側面が面取りされる。59・60は穿孔されるが白玉ではなく不明未成品である。61～94は白玉の未成品で穿孔段階のものである。穿孔途中品・穿孔破損品・穿孔完了品がある。95～143は白玉の側面研磨段階である。破損したものと側面研磨を終え側面中位に弱い稜を作り出されたほぼ成品とがある。

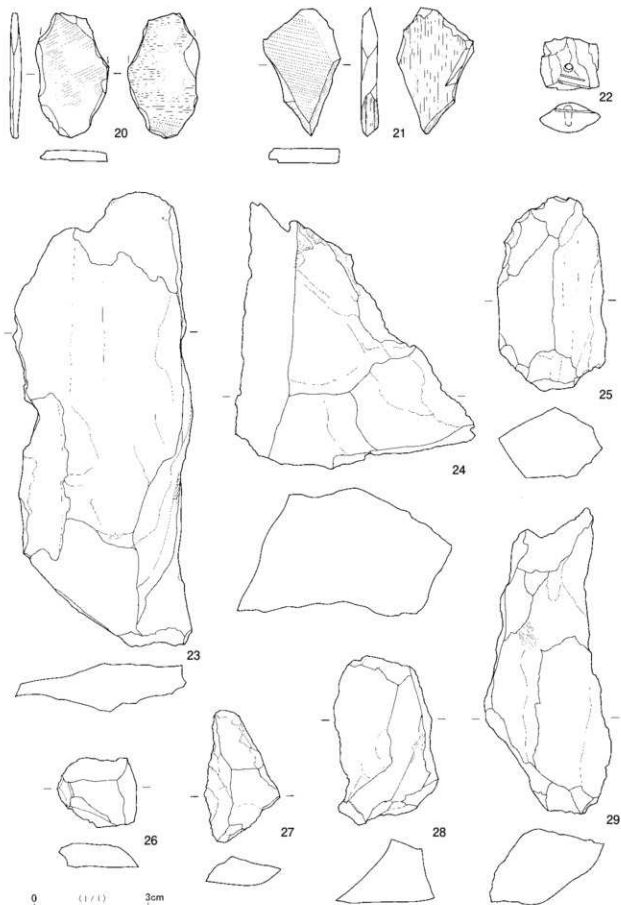
SI-005 (第90～94図、第20表、図版17・47・48・56)

18t-39グリッド周辺に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はN-24°-Eである。規模は主軸長5.00m、幅5.22m、床面積は19.98㎡であり、確認面からの深さは0.12mである。全体的に壁の遺存は不良であるが、直立せずに緩やかに立ち上がる。柱穴は整然とは並ばず、堅穴の中央にも小形のピットが分布する。南壁際のピットは出入口施設に伴うものと考えられる。炉は堅穴北側に付設されており、周囲は赤色に硬化し、炭化材が出土した。壁溝・貯蔵穴は検出されなかった。

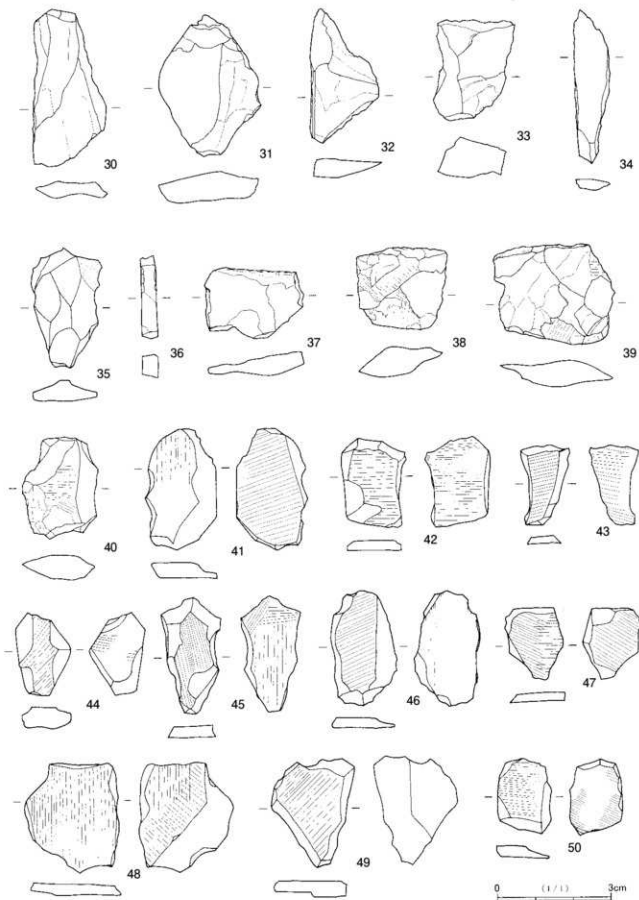
遺物は石製模造品の製作剥片や未成品などの製作関連遺物が多く出土した。土器類は図示したもの以外では甕類の破片が多く出土し、内面にハケメ調整をもつ甕の胴部破片2点、甕底部2点が含まれる。1・



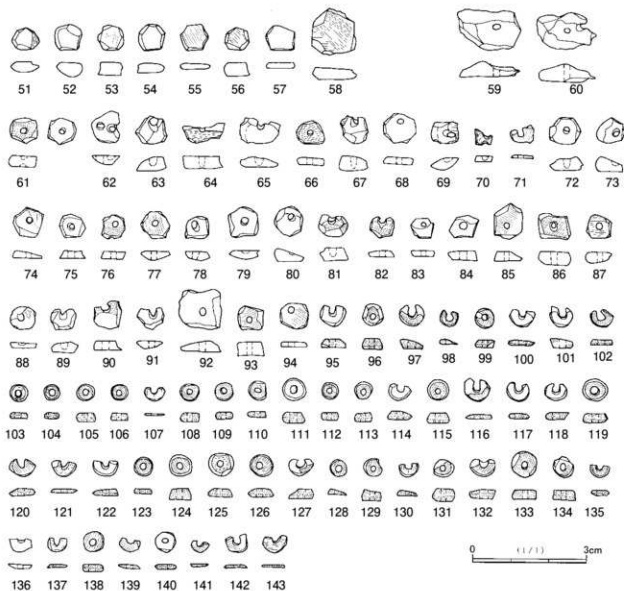
第86圖 SI-004 (3)



第87圖 SI-004 (4)



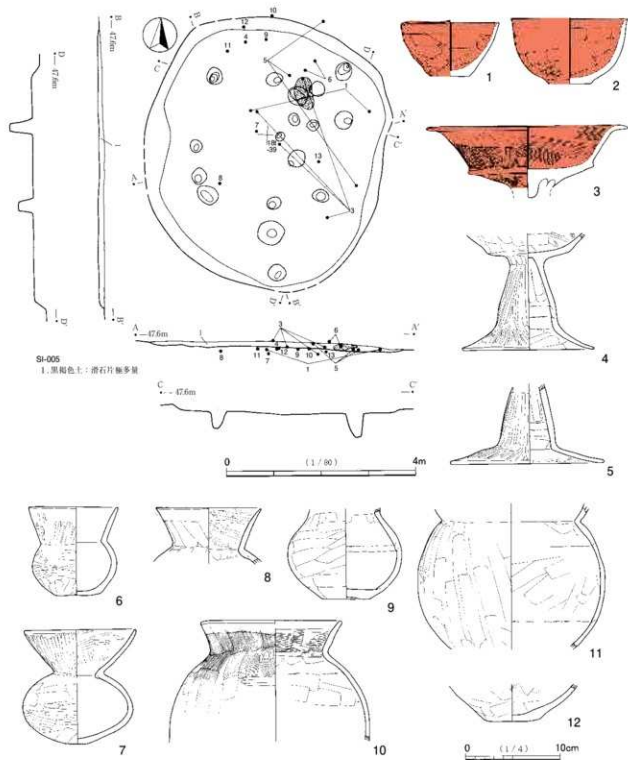
第88圖 SI-004 (5)



第89図 SI-004 (6)

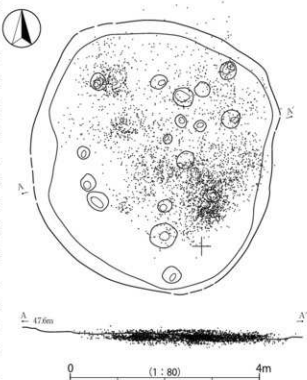
2は平底の土師器碗である。1は体部下位から開きながら口縁まで立ち上がる形状である。内外面ともにヘラケズリ調整で、外面一部にミガキ調整が施される。内外面ともに赤彩されるが、外面の遺存は悪い。2の口縁端部はわずかに外反し、底部は周囲を削り出して成形している。内外面ともにナデ・ミガキ調整が施される。底面を含めた全体が赤彩される。3～5は土師器高杯である。3は杯部のみの遺存であり、口縁部は外反し、杯部下位の稜は突帯状にしっかりと作り出される。口縁端部は強く外反して開く。外面はハケメ・ナデ、内面はハケメ調整が施される。内外面ともに赤彩され、二次的な被熱のため部分的に黒みを帯びる。4は杯部下位から裾部にかけての遺存である。杯部下位の稜ははっきりしている。わずかに中影らみの脚部で、裾部は比較的高い位置で屈曲する。外面及び杯部内面はナデ・ミガキ調整である。脚部内面は輪積痕が明瞭でナデ調整、裾部内面はミガキ状のナデ調整である。5は脚部のみの遺存であり、わずかに中影らみで、裾部は強く屈曲して大きく開く。外面はミガキ調整、内面は粘土紐輪積痕が残り、ヘラケズリ調整が施される。裾部内面はナデ・ミガキ調整である。6～9は大型の土師器甕である。6は底面径が広く、口縁径と胴部の幅がほぼ同じである。外面はヘラケズリ後ミガキ調整、下位はミガキ状の

ケズリで光沢を帯びる。内面はヘラナデ調整である。遺存が悪く不明瞭だが、内外面は赤彩された可能性がある。器面は二次的被熱により黒みを帯びる。7は底面径が小さく、算盤玉状に扁平な胴部の形状である。頸部径は狭く、屈曲は急である。口縁部は弱く内湾気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整である。内面上部はミガキ調整、下部はナデ調整と考えられる。外面に黒斑が見られる。8は肩部から口縁の遺存である。内外面ともにナデ・ミガキ調整が施される。口縁は弱く外反しながら立ち上が



第90図 SI-005 (1)

り、端部は薄く仕上げている。9は胴部から底部である。肩部は張りがなくならからである。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。内面上位は輪積痕が明瞭である。胎土には白色針状物質が含まれる。10～12は土師器甕である。10の頸部はやや弱い「く」の字状に屈曲する。肩部の張りはやや弱く、胴部中位が最大径となる。外面はハケメ、一部にミガキ調整、肩部から下位はナデ調整が主体である。内面は口縁部にハケメ、胴部はヘラナデ調整で、一部に輪積痕が見られる。胎土には白色針状物質が含まれ、外面にススの付着が見られる。11は胴部破片である。頸部は「く」の字状に強く屈曲し、内面にしっかりとした稜が作り出される。胴部は丸みが強い形状である。外面はヘラケズリ、一部にミガキ調整が施される。内面は輪積痕が明瞭で、ヘラナデ調整が施される。外面にススの付着が見られる。12は底部破片である。底面は平らに整形されていない。



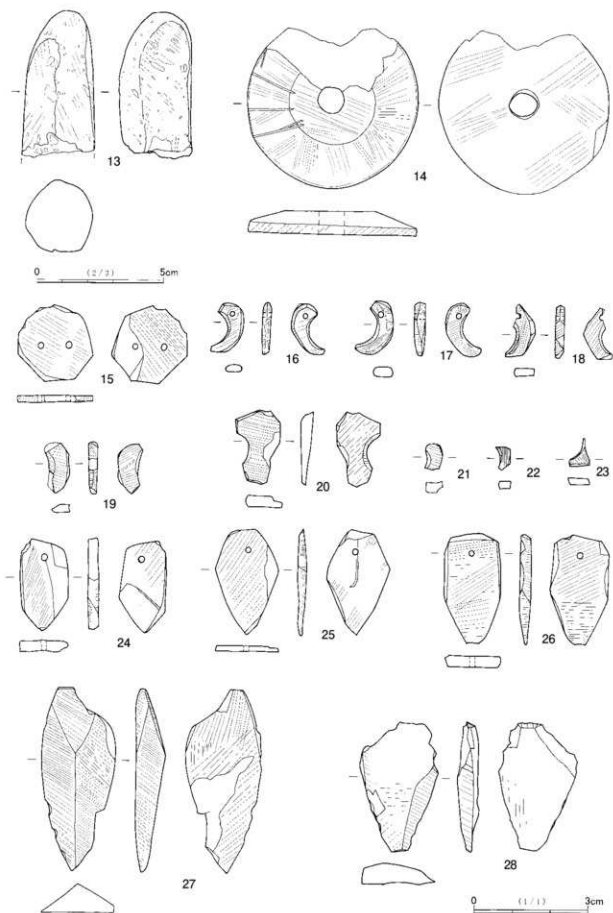
第91図 SI-005 (2)

い。外面はヘラケズリ、内面はナデ、一部ミガキ調整が施される。内外面ともにススの付着が見られる。

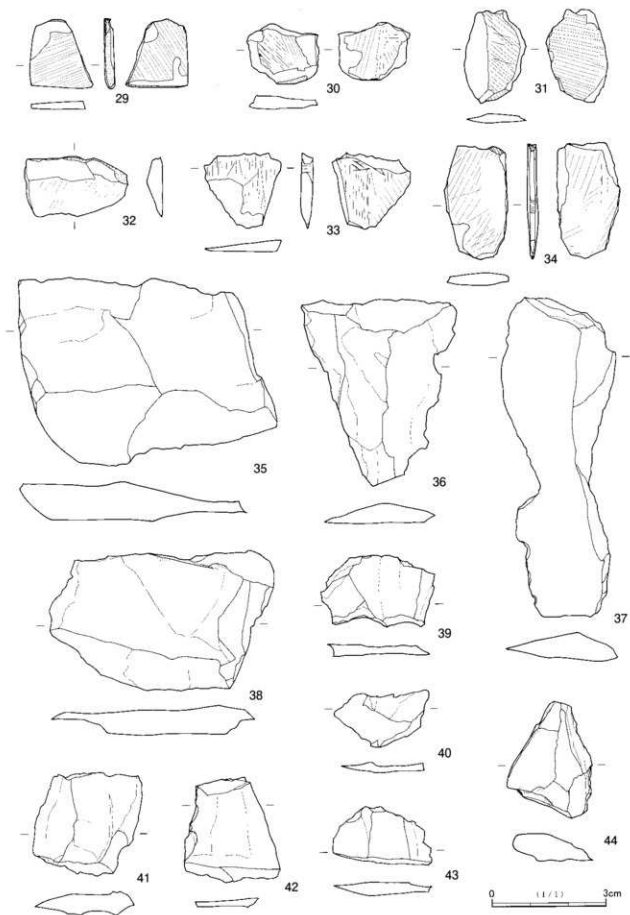
13～124は石製模造品製作関連遺物である。全体で位置・高さを記録した遺物点数は3,200点以上である。出土状況は第91図のとおりで平面的には南西の壁際を除いて堅穴全体に分布し、南東部にやや集中する。出土高さは覆土全体に広がり、低い部分からも出土が見られる。13は軽石で、にぶい黄橙色の色調である。棒状で全面が磨られており、工具として使用された可能性が考えられる。14～124は全て滑石製である。14は紡錘車で、一部欠損する。2方向以上の研磨がなされ、一部線刻が見られる。15は2孔の有孔円板の未成品である。側面研磨も見られるが、面をもち雑である。16～20は小形の勾玉の未成品である。16・17は全体的に側面研磨段階まで終えている。21～23は腹部に当たる曲線が見られるため、勾玉未成品の剥片の可能性がある。24～28は剣形の未成品である。大形の27のみ片面に鑄表現があり、ほかは扁平である。29～34は両面を平らに研磨した板状研磨品である。部分的に側面研磨される個体もあり、剣形の未成品も含まれる可能性がある。32は板状だが、明確な研磨は施されていない。35～44は薄く割取られた荒制品である。45～65は白玉の未成品で、形割段階のものである。平面が4角形～6角形に面取りされる。51～65の形制品は側面の研磨が部分的に見られる。66～103は白玉の未成品で穿孔段階のものである。穿孔途中品・穿孔破損品・穿孔完了品がある。104～124は白玉の側面研磨段階である。破損したものと側面研磨を終え側面中位に弱い稜を作り出したほぼ成品とがある。

SI-006 (第95図、第20表、図版17・18・58)

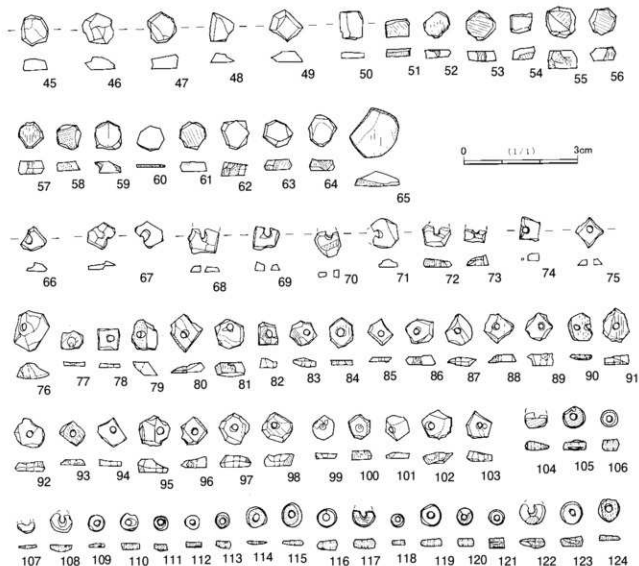
18t-45グリッド周辺に位置する。平面形は方形であり、北側にカマドの煙道が長く延びる。主軸方向はN-18°-Wである。規模は主軸長2.76m、幅2.82m、床面積は8.08㎡で、確認面からの深さは0.2mである。細くて浅い壁溝が巡る。床面はほぼ平坦であるが、顕著な硬化面はない。カマド前面左側に浅いピットがあるのみで、支柱穴や貯蔵穴は検出されなかった。北壁にカマドが付設されるが、火床部はほとんど赤化



第92圖 SI-005 (3)



第93圖 SI-005 (4)



第94図 SI-005 (5)

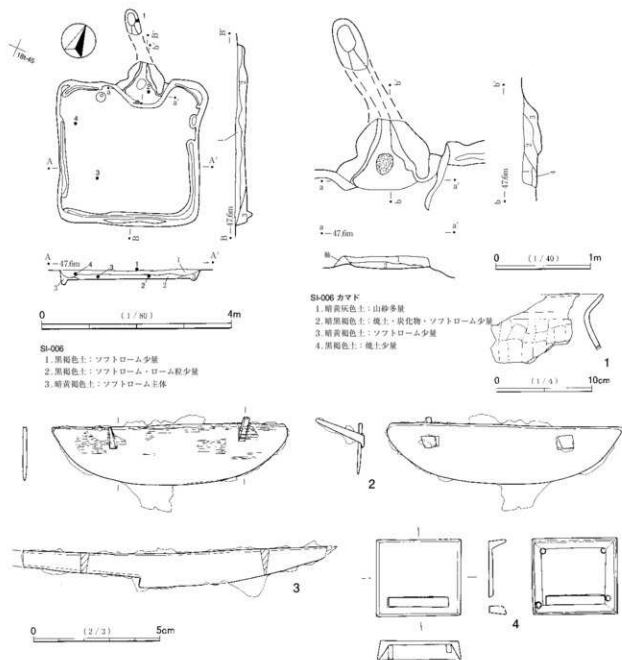
していない。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は微量出土し、ほとんどが土師器甕の小破片である。1は土師器甕の口縁部破片である。外面は縦方向のヘラケズリ痕が明瞭である。2は鉄製の穂摘み具である。上部には握る部分を覆う木質が遺存する。重量は15.81gである。3は鉄製刀子である。端部以外は遺存する。刃は刃側のみである。重量は17.14gである。4は青銅製の鈎帯金具(巡方)である。縦30mm、横34mm、厚み7mm、重量13.85gである。

SI-007 (第96～100図、第20表、図版18・48・56)

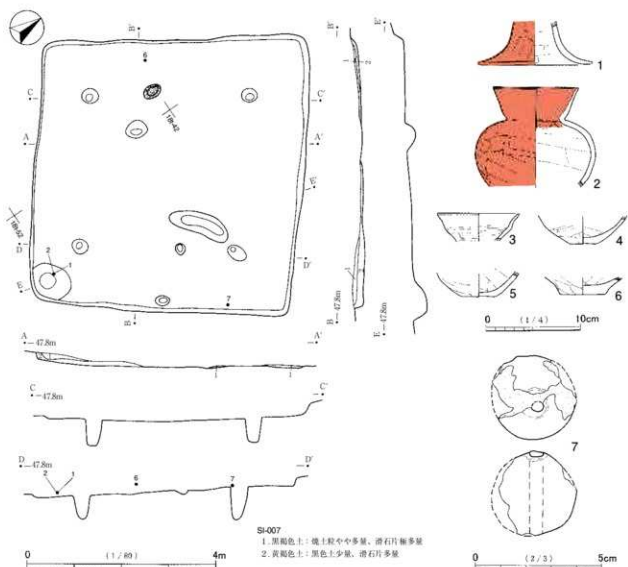
18t-42グリッド周辺に位置する。平面形は正方形、主軸方向はN-55°-Wである。規模は主軸長5.62m、幅5.58m、床面積は30.55㎡で、確認面からの深さは0.2mである。床面はほぼ平坦であるが、竪穴南東部では南西に向かって傾斜する。壁溝は巡らない。主柱穴は対角線上に4本配置され、北西の主柱穴の間に炉が付設される。竪穴南東壁際に入出口ピット、北西隅では壁に接して深さ約30cmの貯蔵穴がある。そのほかには小規模なピット2基と、南東側の主柱穴の付近で深さ約20cmの不整形な細長い掘込みが検出された。

遺物は石製模造品の製作剥片や未成品などの製作関連遺物が多く出土した。土器類は土師器の小破片が



第95図 SI-006

ほとんどである。図示したものの以外では高杯・甕・小型甕の破片が出土しており、非常に薄手の甕破片が含まれる。1は土師器高杯の脚部破片である。裾部は屈折せず緩やかに広がる。脚部径が太く、やや短脚化の傾向が見られる。内外面ともにナデ調整で、外面は赤彩される。2～5は土師器甕である。2は口縁部から胴部にかけて1/2ほど遺存する。胴部は肩部がやや張り、ややつぶれた球形である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。外面と内面口縁部が赤彩される。3は薄手の口縁部破片である。口縁部に段を有しており、須恵器の模倣と見られる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面にミガキ調整が施される。4は底部であり、底部径は小さい。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はナデ調整が施される。5は底部の破片で、平底である。内外面ともにヘラケズリ後ナデ調整が施される。胎土には白



第96図 SI-007 (1)

色針状物質が含まれる。6は土師器甕の底部である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラケズリ調整が施される。7は土玉である。遺存が不良で表面は剥がれた部分が多い。重量は26.5gである。

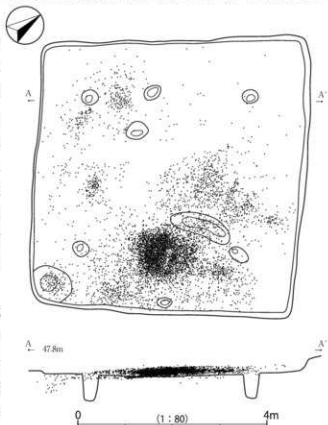
8～151は石製模造品製作関連遺物で、全て滑石製である。全体で位置・高さを記録した遺物点数は5,700点以上で今回の調査で最多の出土量である。出土状況は第97図のとおりで平面的には堅穴の南東に集中して分布し、北側からの出土は極めて少ない。出土高さは覆土全体に広がる。8は紡錘車の未成品である。研磨は見られない。9は曲線の存在から勾玉の未成品の可能性が考えられる。裏面は割れ面である。10～15は研磨面や形状・厚みから剣形の未成品の可能性の高いものである。10と13は研磨により稜線が作られる。16～29は荒制品である。17は厚みがあるが、そのほかは板状に作り出されている。30～38は両面を平らに研磨した板状研磨品である。31・34は研磨によりかすかに稜が作られている。39～66は白玉の未成品で、形割段階のものである。平面が4角形～6角形に面取りされる。側面の研磨が部分的に見られるものもある。67～110は白玉の未成品で穿孔段階のものである。穿孔途中品・穿孔破損品・穿孔完了品がある。111～151は白玉の側面研磨段階である。破損したものと側面研磨を終え側面中位に弱

い稜を作り出したほぼ成品とがある。厚みにばらつきが多く、表裏面が水平になっていないものもある。

SI-008 (第101図、第20表、図版18・48・57)

18t-10グリッド付近に位置する。平面形は正方形であり、主軸方向はN-27°-Wである。規模は主軸長5.73m、幅5.52m、床面積は31.51㎡で、確認面からの深さは0.18mである。壁溝は巡らない。床面は東側の軟弱部分以外はほぼ平坦である。主柱穴は対角線上に4本配置され、やや浅いピットがそれぞれの主柱穴に伴う。炉は堅穴北側の主柱穴の間に付設される。出入口右側に当たる南東隅に平面円形の貯蔵穴(深さ約30cm)がある。床面には焼土や炭化材が分布する。覆土はほとんど遺存していない。

遺物は少量出土し、赤彩された高杯の太い脚部片と甕の小破片が目立つ。1は内外面ともに赤彩された土師器高杯の杯部である。杯部は浅く、やや小型化している。外面はヘラケズリ後ナデ調整である。2は軽石である。色調は黒みを帯びた茶褐色で、重量は51.82gである。3は土玉破片である。復元径は3cm、重量は7.8gである。

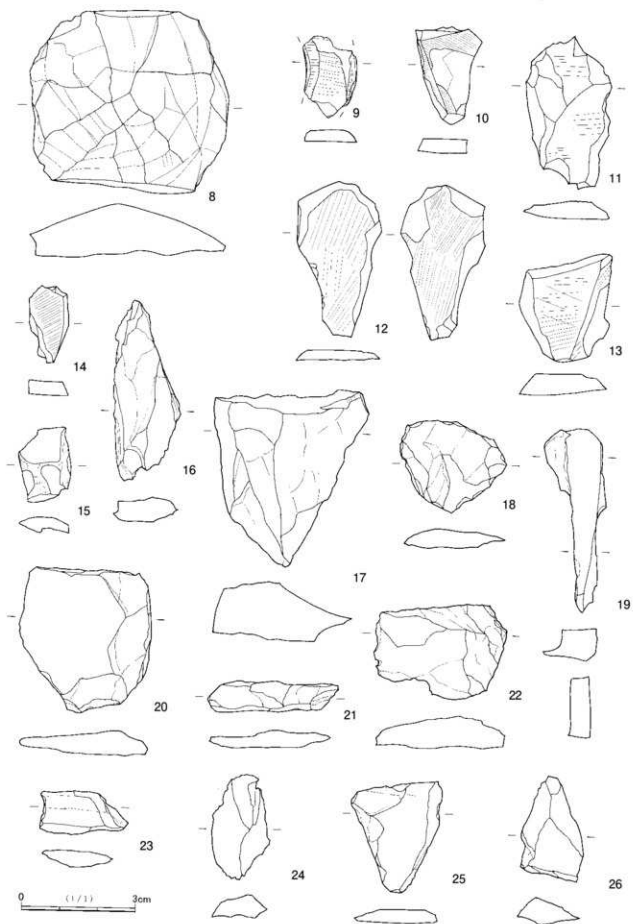


第97図 SI-007 (2)

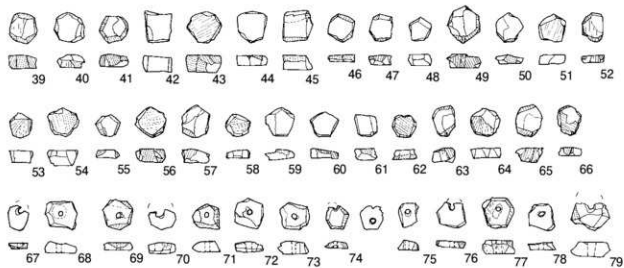
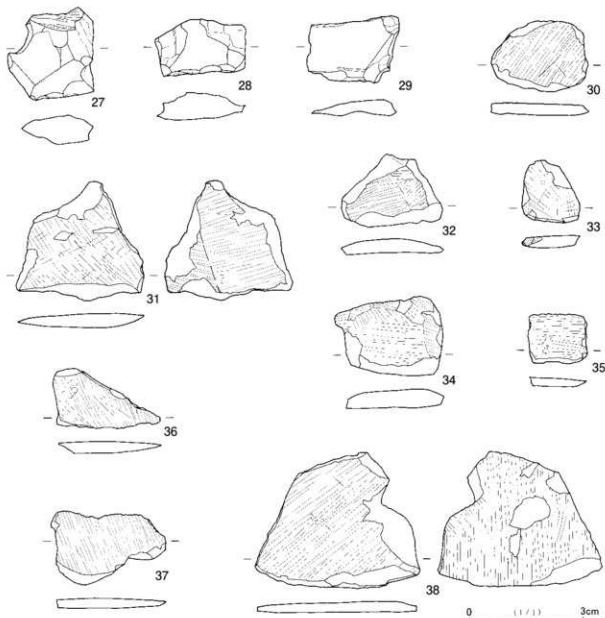
SI-009 (第102・103図、第20表、図版19・48・57・58)

17s-28グリッド付近、台地平坦部中央に位置する。平面形は正方形である。覆土の断面観察により、北側の壁はそのままで北側に1m程度縮小した堅穴と考えられる。主軸方向はN-37°-Eで同じである。当初の規模は主軸長6.28m、幅6.27m、床面積は39.55㎡、確認面からの深さは0.16m、縮小後は主軸長5.16m、幅5.3m、床面積は27.8㎡、確認面からの深さは0.42mである。周溝は縮小後には全周している。床面はほぼ平坦で、主柱穴は対角線上にそれぞれ4本配置され、そのほかにも小規模なピットが見られる。縮小後の炉は建物北側の主柱穴の間に付設され、東から西に作り替えている。北と南隅に円形に掘り込まれたピットは貯蔵穴である想定される。

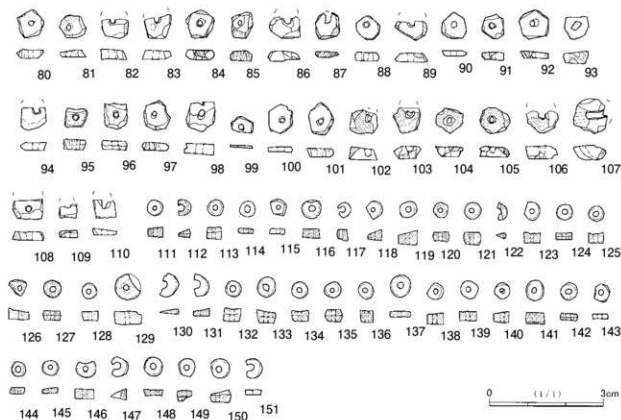
遺物は堅穴規模の割に少ない。土師器の破片がほとんどで、図示したもの以外では赤彩された椀、比較的短い脚部の高杯破片が含まれる。堅穴の新田で遺物の取上げを完全には分離できなかったが、全体の土器様相から大きな時期差は認められない。1はほぼ完形の平底の土師器椀である。内斜口縁で口縁内部に明瞭な稜を作り出している。内外面とも赤彩され、外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。2・3は土師器杯で、内外面は赤彩される。2は平底で大きく広がりながら立ち上がる。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は丁寧なミガキ状のナデ調整である。胎土は白色針状物質が少量含まれる。3は底部付近が欠損するが、平底の可能性が高い。口縁部はやや雑な作りで内湾気味に直立する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。4は高杯の口縁部破片である。杯部は深さがあるものの比較的小形である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面は丁寧なミガキ状のナデ調整である。胎土にはわずかに白色針状物質が含まれ



第98圖 SI-007 (3)



第99圖 SI-007 (4)



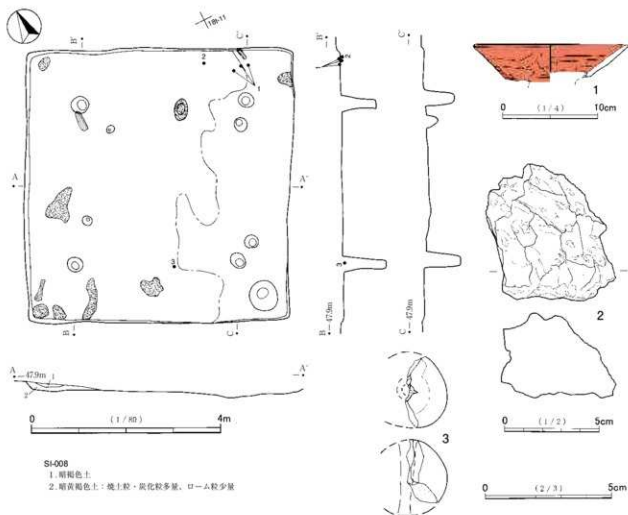
第100図 SI-007(5)

る。5～7は土師器の埴である。全て平底で、外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。6と7は内外面に赤彩が施され、5はやや黒みを帯びる色調である。5の口縁は比較的短く、6の口縁は開きながら直線的に立ち上がり、7の口縁端部は緩く内湾する。8は有茎の柳葉式の鉄鎌である。銚がひどく、鎌身の間の角度と莖被の段の有無も判然としない。重量は12.75gである。9は細い板状の鉄製品で、刃部はない。重量は6.79gである。10は不明土製品である。内実で、表面の調整は雑である。重量は28.50gである。11は滑石製の有孔円板である。部分的に欠損する。研磨は比較的雑で、側面は平滑でなく面がある。孔は片面穿孔による。重量は8.4gである。12・13は滑石製の白玉である。どちらも側面研磨により側面中位にわずかに稜線を作り出している。重量はどちらも0.9gである。14は滑石小片が多く含まれる軽石である。重量は52.23gである。15は白い色調の安山岩製の敲石である。側面は全部磨られ、表裏面の中央は敲打痕が見られる。重量は1,105gである。

SI-010 (第104～107図、第20表、図版19・48・49・57)

17s-15グリッド周辺に位置する。平面形はほぼ正方形であり、主軸方向はN-71°-Wである。規模は主軸長5.64m、幅5.74m、床面積は32.38㎡で、確認面からの深さは0.22mである。床面は中央部がやや窪むが、ほぼ平坦である。壁溝は全周し、主柱穴は対角線上に4本配置される。東壁の中央は直線ではなく屈曲し、出入口部の影響からかそれに合わせて壁溝も屈曲する。北西の主柱穴の間に炉が付設される。竪穴南東隅に深さ76cmの貯蔵穴が検出された。覆土には焼土・炭化物が含まれ、西壁付近に焼土ブロックが堆積が見られた。

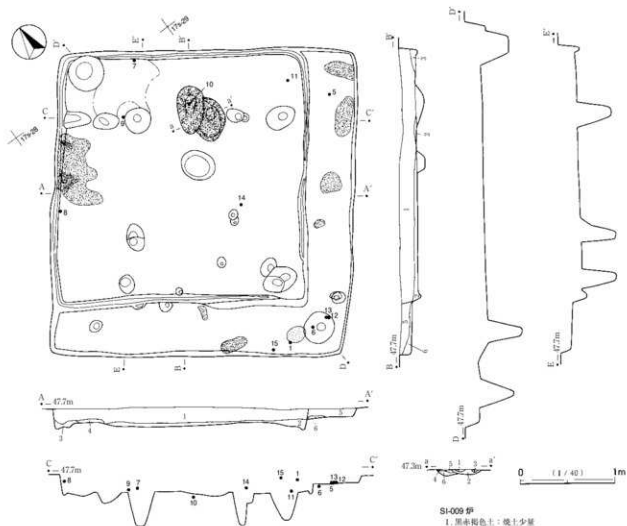
遺物は今回の調査範囲で最も多く出土した。遺物には滑石製模造品の剣形未成品や白玉があり、石片が竪穴東側を中心に比較的多く出土した。発掘時に細かく点上げて記録したが、整理段階で石片を水洗し



第101図 SI-008

たところ礫がほとんどで、滑石剥片は含まれていなかった。土器類は高杯・埴・ミニチュアの壺形が目立つ。甕は遺存が良好な個体は少ないが、二重口縁の名残を有するものなど、古墳時代中期でも古相のものが主体である。図示したものはほとんど床面直上からの出土である。1～22は土師器高杯である。赤彩されたものが多い。杯部は比較的大形であるが3を除き、外面下位の稜は弱いものが主体である。脚部の形状は「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲する個体が主体で、やや短脚傾向である。胎土は4・9・19・22には白色針状物質、15には雲母が含まれる。23～27は土師器の碗・鉢類である。23は丸底に近い平底である。25は内外面ともに赤彩が施される。26の口縁は2重口縁状に厚みがある。27は胴部から口縁へ屈曲なく立ち上がる形状で、特に内面が複雑な整形である。28～41はミニチュア土器である。ほとんどが平底の壺形である。28は甕形と考えられ、口縁に孔が穿たれる。29は頸部に浅い刺突文が巡る。41の口縁は2重口縁状に貼り足している。42～48は土師器埴である。平底で胴部は球形でややつぶれ気味のものも含まれる。口縁は直線的に開くものと弱く内湾するものがある。49～55は土師器の壺・甕類である。口縁部が2重口縁壺を意識し、厚みをもつ個体が多い。頸部の内面には稜をもつ。49・52・55には部分的にハケメ調整が見られる。

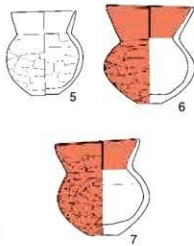
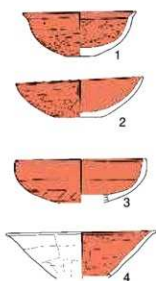
56は滑石製の剣形未成品である。各面とも研磨され、成形されているが部分的に欠けている。裏面は平らである。57～62は滑石製の白玉である。側面研磨された完成品である。側面の中心に稜が見られる。



SI-009

1. 黒褐色土：ローム粒少量
2. 暗黄褐色土：ソフトローム多量
3. 暗黄褐色土：ソフトローム多量
4. 暗赤褐色土：焼土多量
5. 暗褐色土
6. 暗黄褐色土

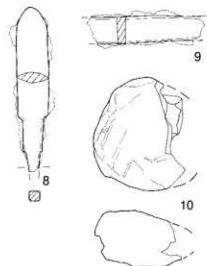
0 (1/80) 4m



0 (1/4) 10cm

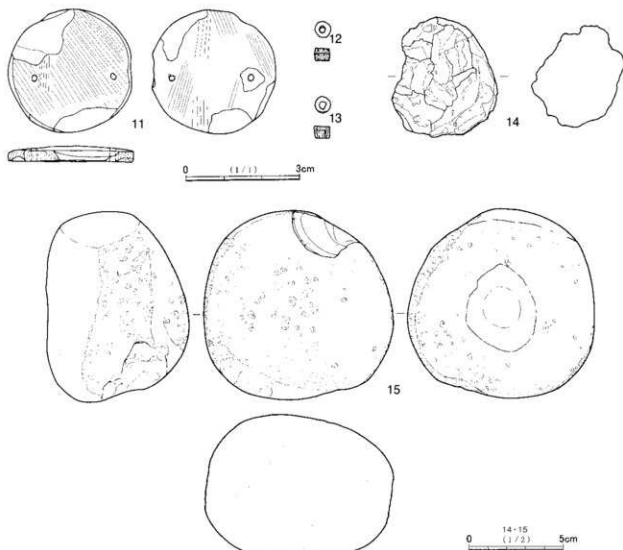
SI-009 炉

1. 黒赤褐色土：焼土少量
2. 暗赤褐色土：ローム粒・焼土粒少量
3. 赤褐色土：焼土多量
4. 暗黄褐色土：ローム、しまりあり
5. 暗褐色土：ローム中量
6. 黒褐色土：焼土粒少量、黒色土中量



0 (2/3) 5cm

第 102 図 SI-009 (1)



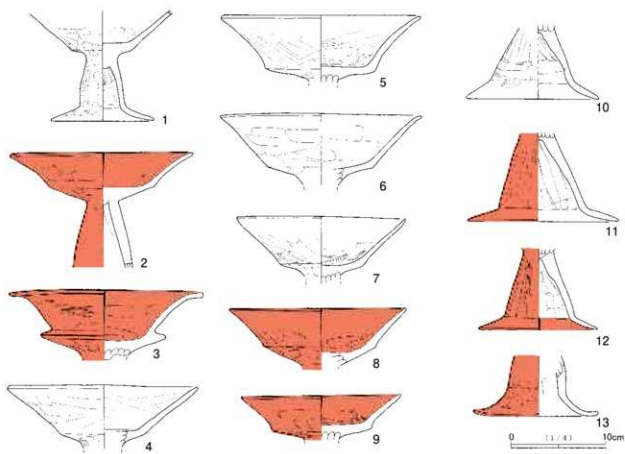
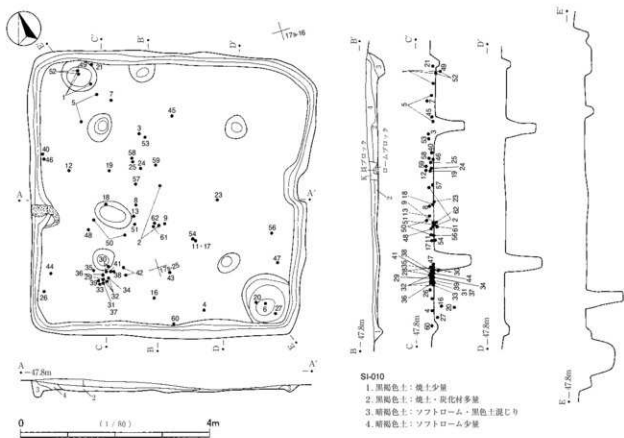
第103図 SI-009 (2)

法量に統一は見られない。59・60は研磨痕が不明瞭であるが光沢がある。

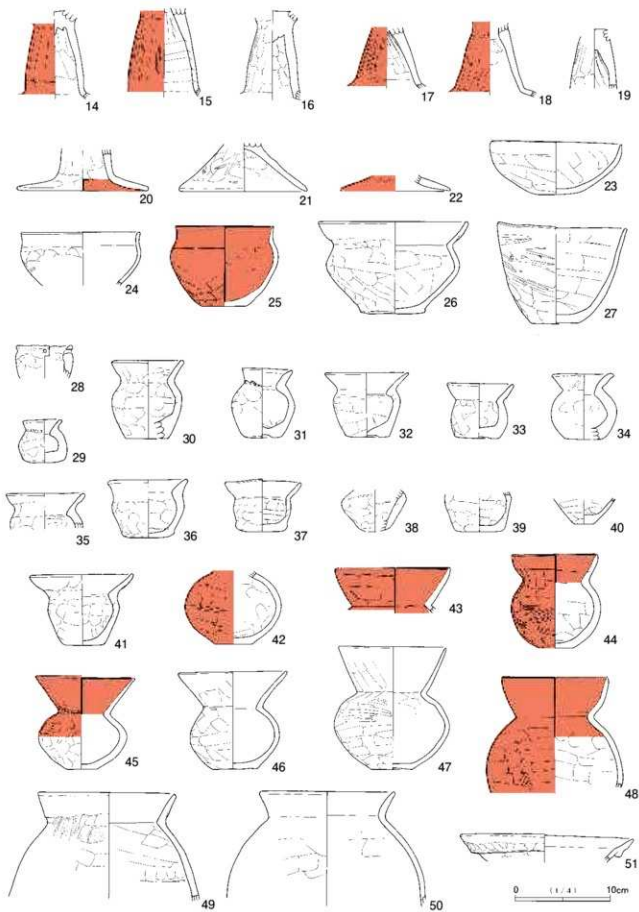
SI-011 (第107図、第20表、図版20・49・57・58)

17s-44グリッド周辺に位置する。北壁は遺存が悪く、平面形は歪な方形である。主軸方向はN-72°-Wである。規模は推定主軸長5.28m、推定幅5.94m、床面積は30.87㎡で、確認面からの深さは0.1mである。床面はほぼ平坦である。壁溝は北東部のみ確認できた。主柱穴は判然としない。小規模なピットが複数検出されるが、整然とは並ばない。西壁に沿ったピットは本堅穴に伴うかは判然としない。炉は堅穴やや北寄りに付設される。貯蔵穴は検出されなかった。覆土には焼土・炭化物が多く含まれる。

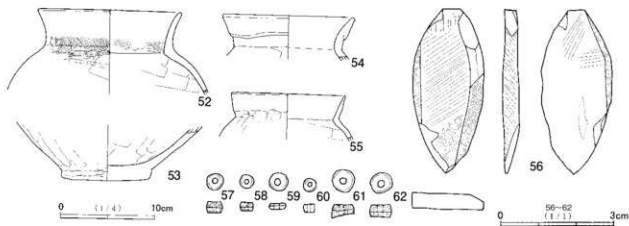
遺物は少量の土師器が出土し、図示したものの以外ではミニチュア土器の口縁部破片、高杯若しくは埴の破片が含まれる。1は小型の土師器碗である。底部から口縁部へほぼ直線的に開きながら立ち上がる。底面は粘土紐を貼り付けて高台状にしている。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。内外面とも底部付近に黒斑が見られ、内面は赤みを帯びる。2は鉄釘の破片と考えられる。3は灰黄褐色の色調の軽石である。擦れて筋状になった部分が白く濁る。重量は22.26gである。4は砂岩製の敲石である。側面は全面磨られ、一部平らになっている。表裏面には筋状に削られ、糸を巻き付けたかのような痕跡が



第104図 SI-010 (1)



第105図 SI-010(2)



第106図 SI-010 (3)

ある。重量は338.12 gである。5は砂岩製の砥石である。重量は111.08 gである。

SI-012 (第108図、第20表、図版20・49)

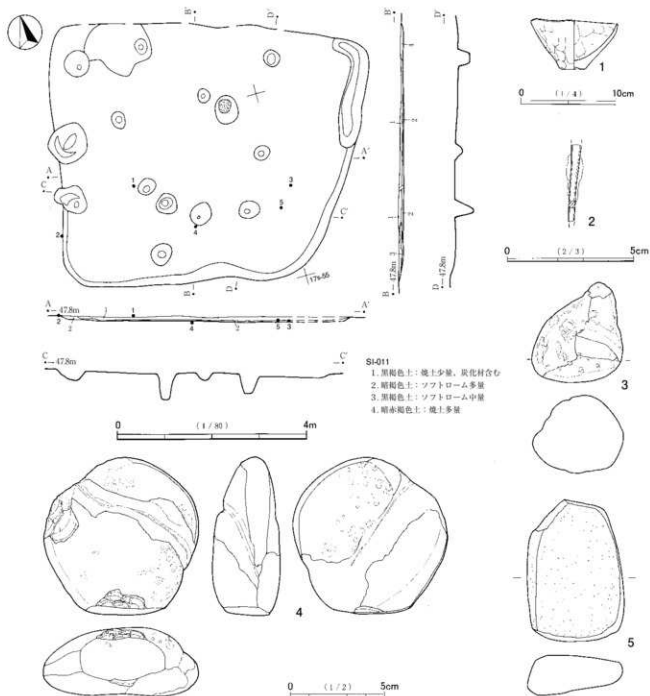
17s-63グリッド付近に位置する。平面形は方形であるが、南側の壁は道路に一部削平されており、規模は不明である。主軸方向はN-10°-Eである。規模は主軸現存長3.20 m、幅4.31 m、確認面からの深さは0.16 mである。壁溝はなく、検出されたピットはいずれも浅い。床面に硬化面は見られず、比較的軟弱である。炬は堅穴中央寄りに付設される。覆土下層には焼土が多量に含まれる。

遺物は土師器甕や壺の胴部小破片が少量出土した。1は土師器の小型壺の口縁破片と考えられる。器厚があり、直立気味に立ち上がる。内外面ともに赤彩され、ミガキ調整が施される。2は複合口縁壺の口縁破片である。縦2列の棒状浮文が3か所配置される。被熱のためか全体的に器面が荒れている。胎土には白色針状物質・赤褐色スコリアが含まれる。内外面ともにナデ調整であるが、丁寧ではない。3・4は土師器甕又は壺の底部破片である。外面はヘラケズリ後ミガキ、内面はミガキ調整である。4の外面は赤彩される。5は頸部の屈曲が弱い。底部と胴部は接合しないが、図面上で合成した。外面は縦方向の強いナデつけ、内面は雑なヘラナデ調整である。底部付近はミガキも施される。

SI-013 (第109図、第20表、巻頭図版3、図版21・49・57・58)

17s-21グリッド周辺に位置する。主軸は方位N-10°-Eである。平面形は小形の正方形である。規模は主軸長3.68 m、幅3.66 m、床面積は12.44 m²で、確認面からの深さは0.24 mである。堅穴北西部に床面より約15cm高い部分がある。主柱穴は、南西側を除いた3本が確認された。炬は堅穴中央部に付設される。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。床面には部分的に焼土が分布する。覆土の2層に焼土が多く含まれる。

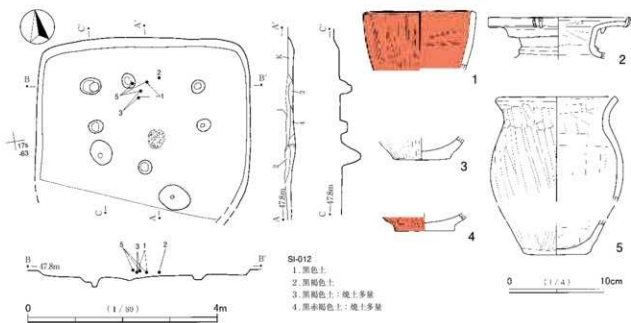
遺物は少量出土し、全体的に小破片のため、接合できた個体も少ない。杯の破片が3点、甕の破片にはハケメのある個体もあるが微量である。弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての土器片も少量見られる。土器類のほかには、緑色凝灰岩製石製品の未成品や剥片が出土している。滑石製の剥片類は1点も含まれない。図示したものを以外は小剥片(13点)である。堅穴の北東部分の床面からやや浮いた2層中からの出土が目立った。1は土師器甕の口縁部から胴部の破片である。頸部は丸みを帯びた「く」の字状で、胴部の張りは弱い。外面は筋のあるヘラナデが横位に施される。内面の調整はやや雑で、でこぼこした指のナデ付けを残す。器面は被熱によりやや変色している。2は土師器椀である。割れているが遺存は良好である。平底で、口縁部は二重口縁状に粘土を貼付する。色調は被熱によるためか、全体的に黒色である。



第107図 SI-011

外面はヘラケズリ後ヘラナデ調整だが、やや光沢を帯びる部分がある。3は砂岩製の磨石の破片である。側面はざらつき、側面以外は平滑である。石製品製作の仕上げ砥に使用した可能性がある。重量は107.4gである。4は鉄釘又は工具の破片と考えられる。頭部は錆が著しく、形状は不明瞭である。重量は8.15gである。

5～14は緑色凝灰岩製の石製品の未成品である。色調は緑灰色で、研磨された部分は白みを帯びる。5・6は勾玉の未成品である。全体を荒研磨により成形している段階のもので、各面ともに稜が残る。6は小型品である。7～14は管玉の未成品である。7は歪な四角柱状に割製られ、1側面に研磨が施される。



第108図 SI-012

8は四角柱状に割取られ、上下面と2側面に研磨を施した段階のものである。9～14は上下・側面に研磨し、多角柱（8角～11角）に成形した段階のものである。13・14は短く、管玉の長さを揃えるために排出されたものか白玉を目的とした形割段階のものの可能性が考えられる。

SI-014（第110図、図版21・58）

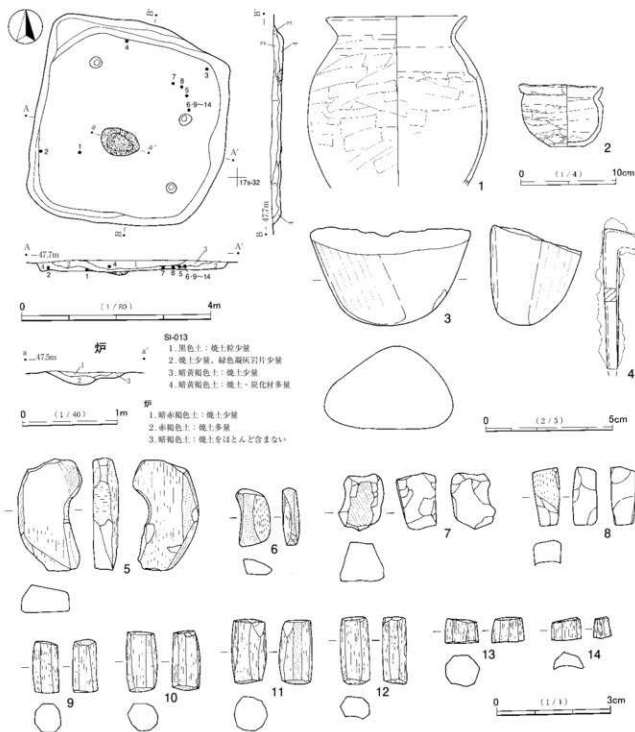
17r-16グリッド付近に位置する。床面の遺存は悪く、南側も削平されているため、平面形は柱穴・炉の配置、床面遺存部からの推定である。主軸方向は推定でN-40°-Eである。壁溝と主柱穴にできる掘込みの深いピットは検出されなかった。炉は竪穴北側に付設される。

遺物はごく少量出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期と考えられる壺と甕の小破片がほとんどである。壺の破片は赤彩された厚みのある個体、甕の破片には横位の刺突文が施された個体や口唇部に交互押捺が施されるものが含まれる。1は鉄釘破片と考えられる。本竪穴に直接伴うものであるか不明である。重量は0.6gである。

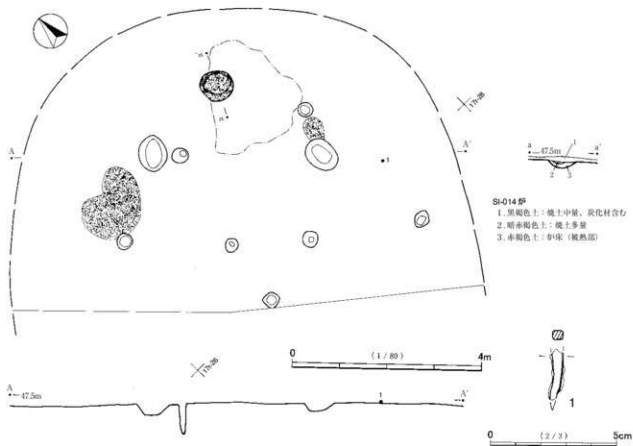
SI-015（第111図、第20表、図版21・22・49・57・58）

16r-99グリッド付近に位置する。平面形は正方形であり、主軸方向はN-75°-Wである。規模は主軸長4.62m、幅4.56m、床面積は20.68㎡で、確認面からの深さは0.28mである。壁溝は全周している。床面はほぼ平坦で、主柱穴は対角線上に4本配置される。小ピットが竪穴中央と主柱穴の周辺に分布する。炉は西側の主柱穴の間に付設され、掘込みは浅い。南東隅に円形に掘り込まれた貯蔵穴（深さ約60cm）がある。覆土には焼土や炭化材が少量含まれる。

遺物は土師器を主体に比較的多く出土した。発掘時には石製模造品のほかに石片が多く出土したため、製作関連遺構の可能性が想定されたが、整理段階で石片を水洗したところ礫がほとんどで、製作関連の滑石剥片は含まれていなかった。図示したものの以外では高杯・埴・甕類の土師器片が出土している。特に、甕類破片の出土が多く、底部破片が4個体分確認される。また、弥生時代後期後半の土器片も数点含まれる。1・2は平底の土師器碗である。1は口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がる鉢状の碗である。外



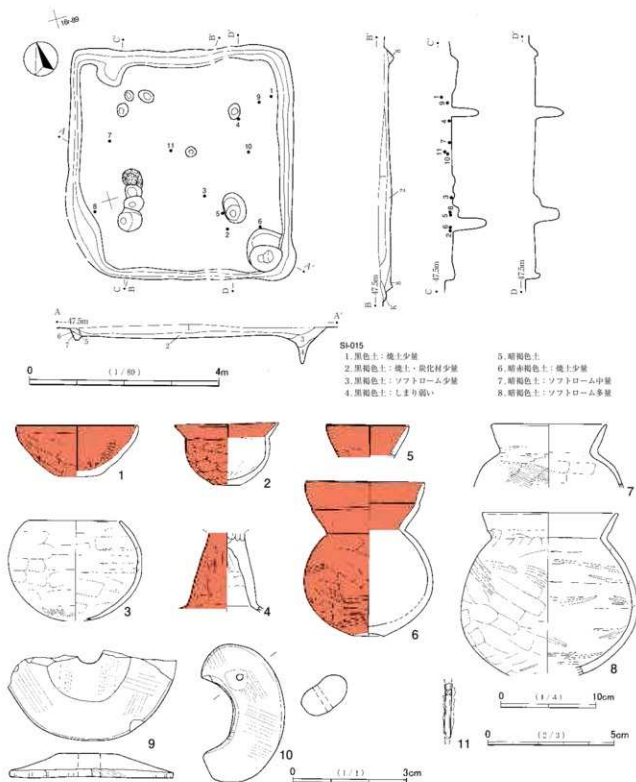
面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ・ミガキ調整が施される。底面を含めた内外面全体が赤彩される。2は頸部に屈折し、口縁部が大きく開く。外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデ調整が施される。内面口縁部と外面は赤彩されるが、外面は明瞭でない。被熱により器面が赤みを帯び、外面にススの付着が見られる。3は土師器鉢である。口縁端部に擦れ・欠けが確認され、甕を2次利用した可能性もある。器面は摩滅気味であるが、外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はヘラナデ調整が施される。また、内面には輪



第110図 SI-014

積痕が明瞭に見られ、暗褐色物質が付着する。4は土師器高杯で、脚部のみの遺存である。ラップ状に開き、裾部で屈曲する。やや短脚化の傾向が見られる。外面はナデ・ミガキ、内面はナデ調整が施される。外面は赤彩される。5・6は土師器埴である。5は口縁部のみの遺存であり、ほぼ直線的に開きながら立ち上がる。内外面ともにヨコナデ調整が施され、赤彩される。胎土には白色針状物質が含まれる。6は口縁部中位に段を有し、須恵器の模倣と見られる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はナデ調整である。外面と内面口縁部は赤彩されるが、外面下位は明瞭ではない。内面に暗褐色物質、外面にススが附着する。7・8は土師器甕である。7は口縁部破片である。頸部は「く」の字状で、肩部がやや張る形状である。外面は強いハケメ・ナデ、内面はヘラナデ調整が施される。8は口縁部から胴部にかけての破片と、同一個体と考えられる底部破片である。頸部は「く」の字状で、内面にしっかりとした縁が作り出される。口縁部は段を有しており、2重口縁の名残と考えられる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面はヘラケズリ後ミガキ調整が施される。内面には輪積痕が明瞭に見られる。外面は赤みを帯び、内外面にススが附着する。9は滑石製の紡錘車の破損品である。上下面ともに平滑であるが、側面の研磨はやや雑で細かく面が残る。重量は8.4gである。10は滑石製の勾玉である。全体的に厚みがあるが、下の先端部は薄い。屈曲部側面の研磨は雑である。片面穿孔と考えられる。重量は7.9gである。11は鉄釘破片と考えられる。錆により断面形は不明瞭である。重量は0.6gである。

SI-016 (第112図、第20表、図版22・49)

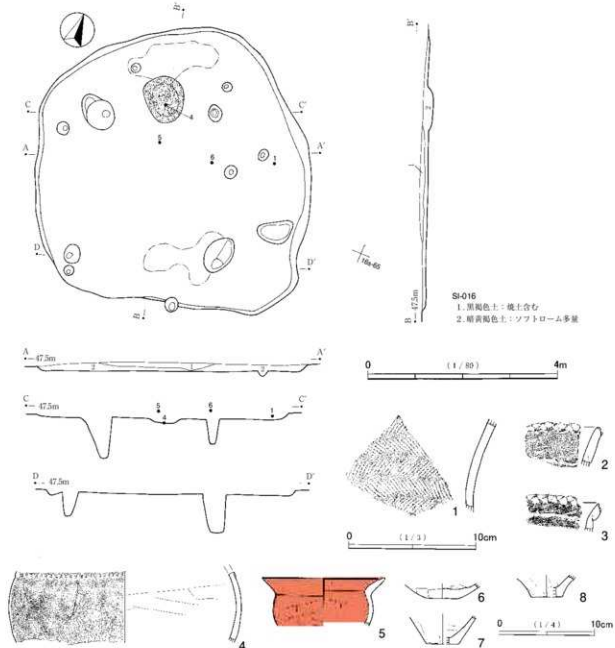


第111図 SI-015

16s-63グリッド付近に位置する。平面形は壁の遺存が不良であり不整形に検出されたが、本来は隅丸方形と考えられる。主軸方向はN-28°-Wである。規模は主軸長5.72m、幅5.62m、床面積は27.42㎡で、確認面からの深さは0.2mである。床面はほぼ平坦で、主柱穴は4本配置される。そのほかに小規模なピットが主柱穴の周辺に分布し、南側の1基は出入口ピットと考えられる。炉は北側の主柱穴の間に付設され、

掘込みは浅いが比較的規模が大きい。炉の北側と南壁寄りには部分的に床面の硬化が見られた。東壁付近の不整形な掘込み（深さ7cm）の底面には硬化面がある。壁溝は巡らず、貯蔵穴も検出されなかった。覆土上層には焼土が含まれる。

遺物はほとんどが土器の小破片で、少量出土した。甕・壺の破片がほとんどであるが、高杯の脚部も含まれる。壺の破片は赤彩される。1は赤彩された壺の頸部破片である。胎土には白色針状物質が含まれる。細かいLR・RL縄文が羽状構成で施文される。2・3は口唇部を交互押捺された甕口縁部破片である。外面には刷毛目状のナデが施される。4は肩部に横位の連続刺突列の施された甕胴部破片である。胎土には白色針状物質が含まれる。5は赤彩された小型の甕である。口縁部が大きく開く。屈曲部分の内面の稜がはっきりと作り出される。6は小型壺の底部破片である。外面は赤彩されていた可能性がある。7・8は小型甕の底部と考えられる。

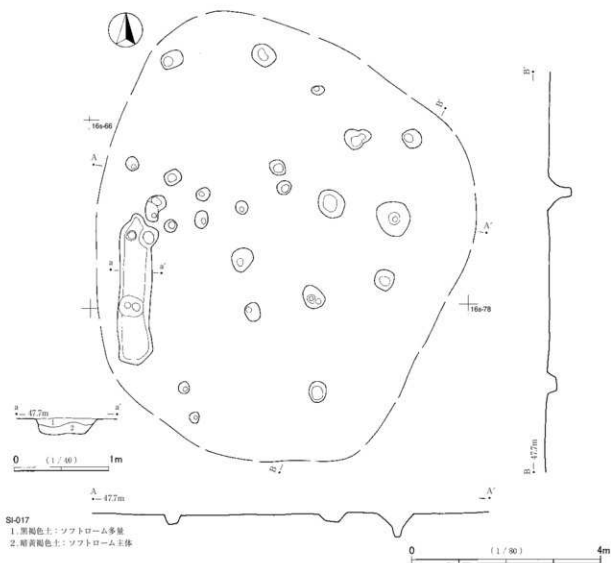


第112図 SI-016

SI-017 (第113図、図版22)

16s-66グリッド付近に位置する。平面形は掘込みを確認することができず、不明である。ピットがまぎって検出された。ピットの範囲からの推定規模は主軸長8.8m、幅8.0mである。床面に硬化面は検出されなかった。ピットは概して浅く、支柱穴としてセットを組むことはできなかった。西側に深さ17cmの南北に細い掘込みが検出された。明確に炉と判断できる部分は確認できなかった。

遺物は小破片が少量出土し、図示できたものはない。赤く発色した壺の破片が含まれる。

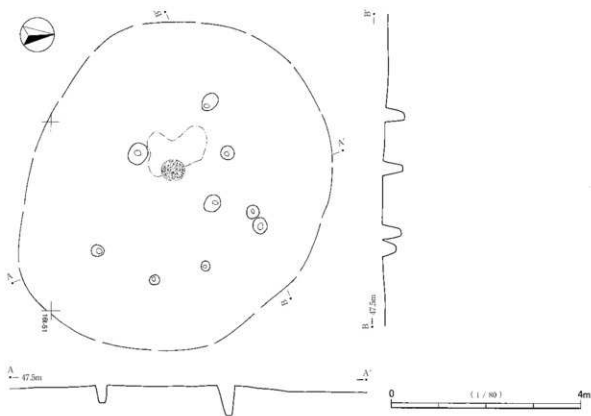


第113図 SI-017

SI-018 (第114図、図版23)

16t-40グリッド付近に位置する。平面形は掘込みを確認することができず、不明である。床面は炉の周囲以外は厳密には遺存が不良で判然としない。ピットは炉を中心に分布するが、整然と深いピットが並ばず、支柱穴は不明である。推定規模は主軸長7.1m、幅6.4mである。

遺物は土器小破片が10点程度出土した。甕は胴部に連続刺突文が施された破片が含まれる。

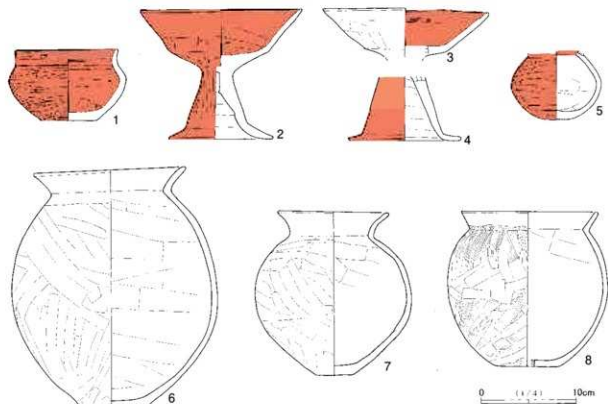
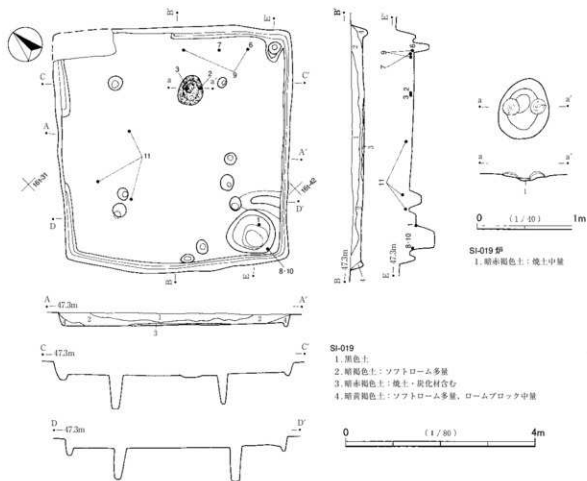


第114図 SI-018

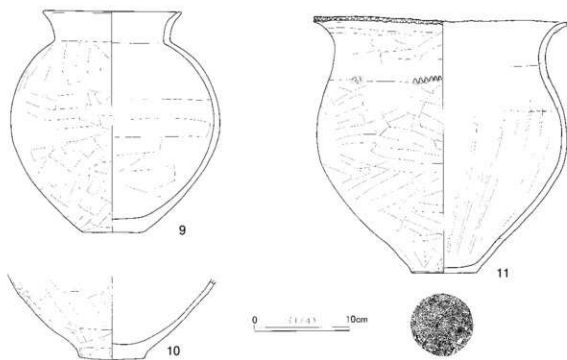
SI-019 (第115・116図、第20表、図版23・49・50)

16t-31グリッド付近の西側本調査範囲の一番北側に位置する。平面形は正方形であり、主軸方向はN-46°-Eである。規模は主軸長4.95m、幅4.88m、推定床面積は20.55㎡で、確認面からの深さは0.28mである。壁溝はほぼ全周する。床面は平坦で、主柱穴は対角線上に4本配置される。小ピットが堅穴南側に複数分布する。炬は北東側の主柱穴間の東寄りに付設される。炬の上面には高杯の杯部が伏せられて出土した。南隅に円形に掘り込まれた貯蔵穴(深さ約40cm)がある。貯蔵穴の東側はわずかな高まりがある。覆土は自然堆積と考えられ、堅穴中央部の最下層には焼土や炭化材が含まれる。

遺物は土師器甕類を主体に多量に出土した。縄文帯をもつ赤彩された壺の破片も含まれる。椀・高杯・小型壺は赤彩された個体が多い。1は完形の土師器椀である。平底で胴部が張り、口縁部が直立する。内外面は全面に赤彩される。外面は口縁部も含めてミガキ調整が施される。内面には黒い吹き出し状の粒子が多数見られる。2～4は赤彩された土師器高杯である。杯部が比較的大きく、杯部下に稜を有し、脚部の裾は短く屈曲する。外面はナデ調整である。5は赤彩された土師器小型壺の胴部から底部である。胴部はややつぶれた球形である。外面は横方向の丁寧なナデ・ミガキ調整である。6～11は土師器甕である。比較的遺存度は高い。基本的に胴部はラグビーボール状で、頸部内面にははっきりとした稜を有する。口縁部は直線的に立ち上がるものと口縁端部が大きく外反するものがある。8は口縁部が短く直線的で、外面はハケメが施される。11は大型の甕で、折り返し口縁の端部に交互押捺による刻み、頸部には横位の連続刺突文が施される。底部には木葉痕が見られ、内面はミガキ調整である。



第115図 SI-019 (1)

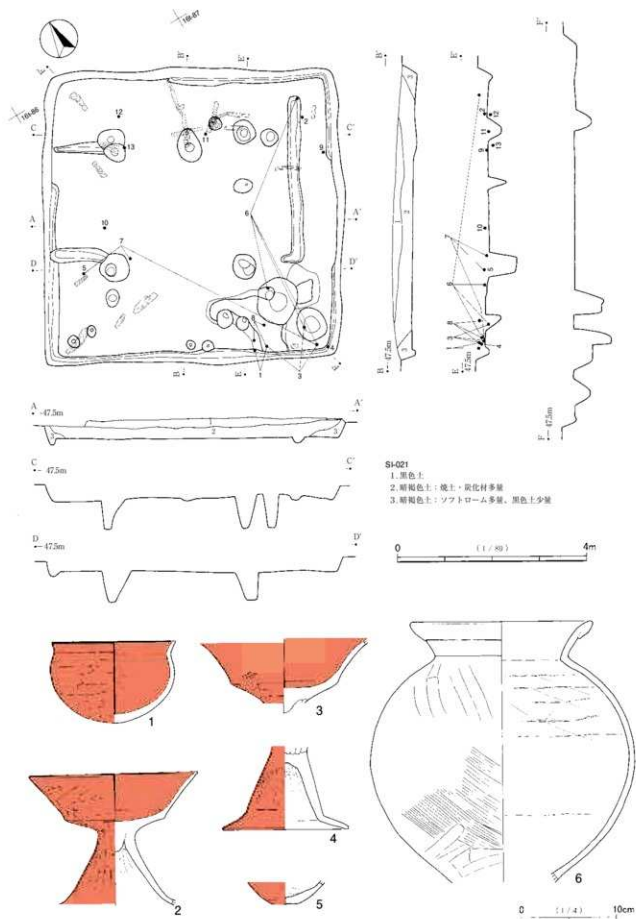


第116図 SI-019(2)

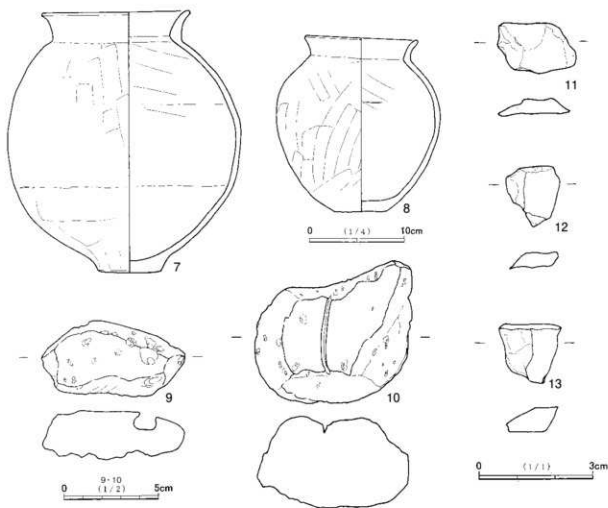
SI-021 (第117・118図、第20表、図版23・24・50・57)

16t-86 グリッド付近に位置する。ビット・周溝の組み合わせから北西と北東壁は変更せず、南側に拡張された堅穴であると考えられる。最終的な平面形は正方形であり、主軸方向はN-30°-Eである。規模は主軸長5.92 m、幅6.12 m、床面積は36.67㎡で、確認面からの深さは0.42 mである。壁溝は部分的に途切れて検出された。内側に部分的に見られる溝状の掘込みは旧堅穴に伴う壁溝と考えられる。床面は平坦で、支柱穴は対角線上に4本配置される。小ビットが堅穴南西側に複数分布する。炉は北側の支柱穴間のやや東寄りに付設される。南隅には新田2基の、円形に掘り込まれた貯蔵穴が検出された。貯蔵穴周辺の床面は、ほかの所よりわずかに高まる。全体に炭化材・焼土が多量に分布し、焼失堅穴であると考えられる。

遺物は土師器を中心に多量に出土した。図示したもの以外にも赤彩された高杯が目立つ。1はほぼ完形の土師器甕で、内外面が赤彩される。丸底でやや摩滅する。体部は丸みをもちながら立ち上がり、口縁部が短く外に開く。外面はヘラケズリ後ナデ調整である。内面の剥落は著しい。2～4は赤彩された土師器高杯である。2・3の杯部は比較的深さがあり、外面下位に稜をもつ。2の脚部は裾がラッパ状に開く。4の脚部裾は屈曲して直線的に開く。内面に稜が確認できる。5は土師器小型壺の底部破片である。外面は赤彩される。6は2重口縁の土師器壺である。胴部外面下位にはハケメが施される。内面は粘土紐接合痕が明瞭に見られる。7・8は土師器甕である。頸部内面にははっきりとした稜をもち、口縁部は端部が強く外反する。9・10は暗い暗褐色の色調の軽石である。9の重量は26.3 gで、特に上側面と上面が磨られ平らになっている。断面に見られる窪みは自然なものである。10の重量は89.0 gで、全体的に磨られているが、中央部に筋状に研いだ痕跡がある。11～13は滑石の剥片である。研磨された部分はなく、荒削段階に作出された剥片と考えられる。



第117図 SI-021 (1)



第118図 SI-021 (2)

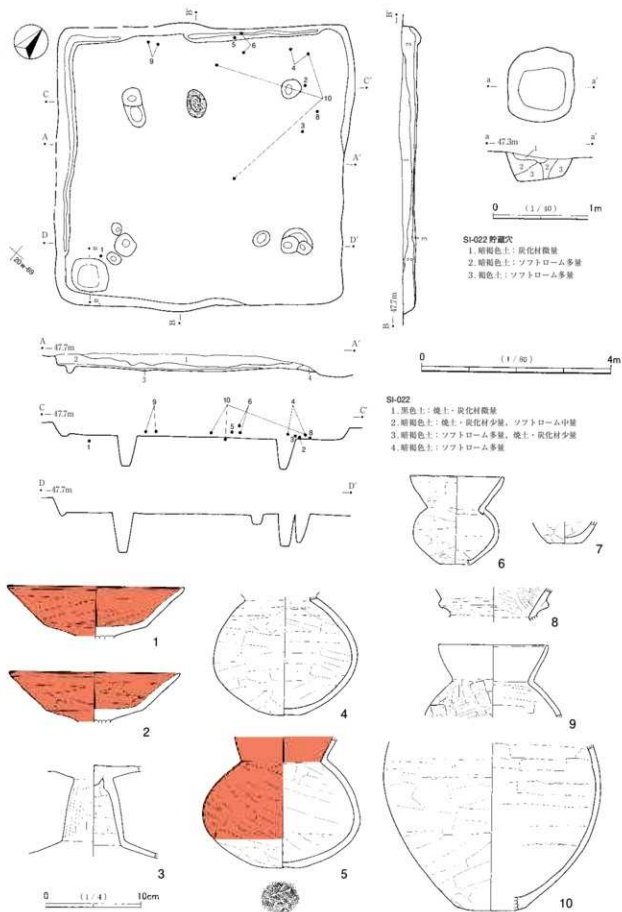
SI-022 (第119図、第20表、図版24・50)

20w-49 グリッド付近に位置する。平面形はやや横長の方形であり、主軸方向はN-43°-Wである。規模は主軸長5.70 m、幅5.96 m、床面積は33.38㎡で、確認面からの深さは0.36 mである。壁溝は壁の遺存の良い部分で検出された。床面はほぼ平坦で、支柱穴は対角線上に4本配置される。小ピットが竪穴南側の支柱穴周辺に分布する。炬は北側の支柱穴間に付設される。南隅に方形に掘り込まれた貯蔵穴がある。覆土は自然堆積と考えられ、少量の炭化材・焼土が含まれる。

遺物は竪穴北側を中心に比較的多く出土した。全体としては赤彩された土師器高杯の破片が目立つ。1～3は土師器高杯である。1・2は内外面赤彩された杯部である。外面下位に稜を有し、比較的大型である。3は太めの脚部で裾部への屈曲は強い。杯部内面は黒色化している。4～9は土師器の壺である。中型と小型品があり、底部は平底である。5の底部には木葉痕が見られる。8は有段の口縁部破片で、ハケメが施される。9の外面はハケメ後ミガキ調整が施される。10は土師器甕の胴部から底部である。底部は平らでない。外面は粗雑なヘラケズリ調整で、粘土紐接合痕も見られる。

SI-023 (第120図、第20表、図版24・51)

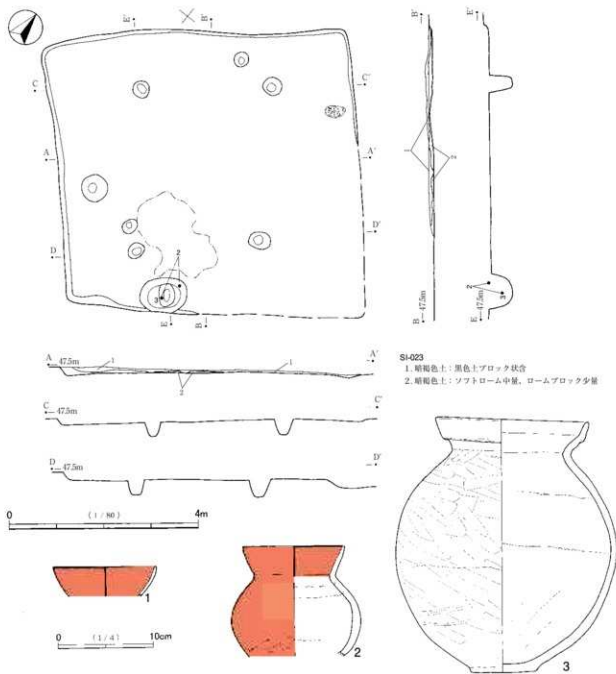
20x-61 グリッド付近に位置する。東側の壁は検出できず、平面形はやや歪な方形と考えられ、主軸方向はN-50°-Eである。推定規模は主軸長6.30 m、幅5.90 m、床面積は36.64㎡で、確認面からの深さは0.16



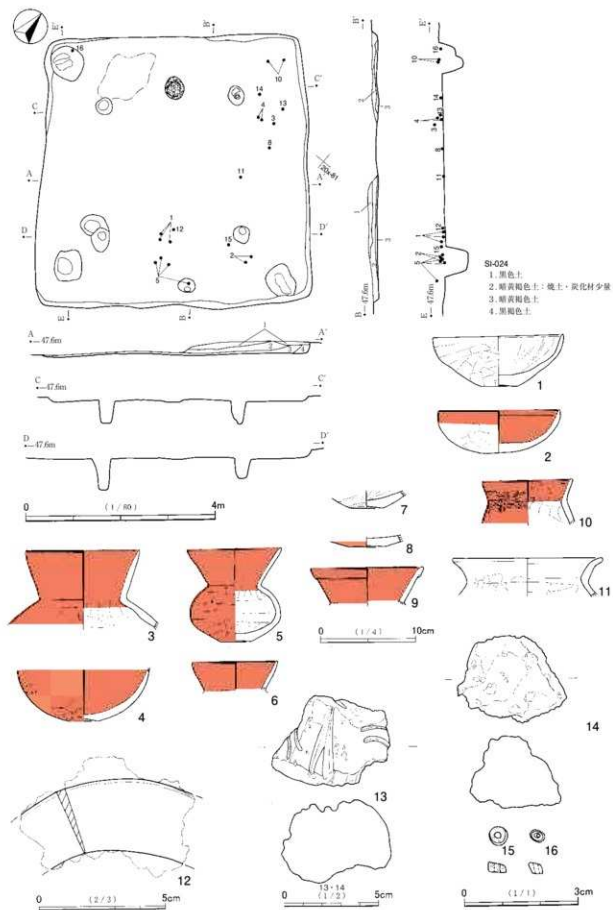
第119図 SI-022

mである。壁溝は巡らない。床面はほぼ平坦である。主柱穴はやや歪んだ配置であるが4本検出された。炬は明確でないが、北東壁近くに焼土が出土した。南東壁沿いには貯蔵穴と考えられる平面形が楕円形の掘込みがあり、その周囲には硬化面が顕著に確認できた。

遺物は土師器破片を主体に中量出土した。赤彩された小型の壺や高杯の破片が目立つ。1は土師器の小型壺の口縁破片である。内外面とも赤彩される。口縁は弱く内湾しながら立ち上がる。2と3は貯蔵穴の覆土中から出土した土師器壺である。2は底部を欠損する。内外面赤彩される。頸部の屈強は弱く、口縁部も比較的短い。胎土は精緻で、調整も丁寧である。3は二重口縁壺である。口縁部は「く」の字状に開き、内面に稜が見られる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整が施される。



第120図 SI-023

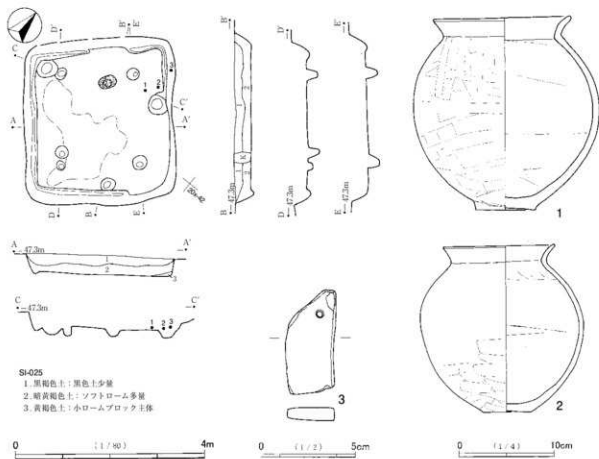


第121図 SI-024

SI-024 (第121図、第20表、図版25・51・57・58)

20x-80グリッド付近に位置する。平面形はやや歪な方形で、主軸方向はN-42°-Wである。規模は主軸長5.60m、幅5.76m、床面積は30.60㎡で、確認面からの深さは0.24mである。壁溝は巡らない。西側の壁は遺存が悪く検出されなかった。主柱穴は対角線上に4本配置される。北隅を除いて貯蔵穴状のピットが掘り込まれる。炬は北側の主柱穴間のラインより壁寄りに付設される。覆土は自然堆積と考えられ、炭化材・焼土が少量含まれる。

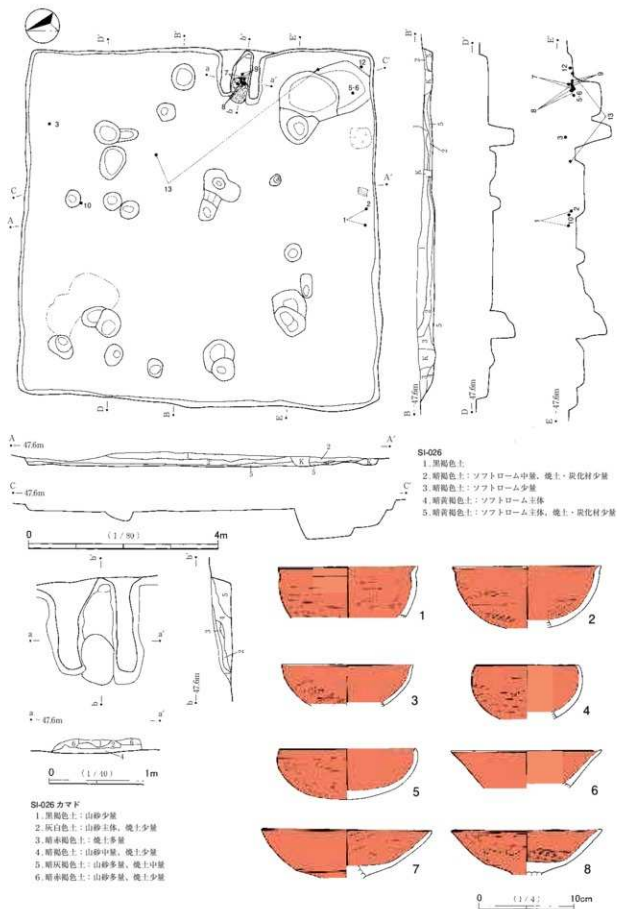
遺物は土師器を主体に中量出土した。1は土師器甕である。平底で体部がやや歪に立ち上がる。内面はヘラミガキ調整である。胎土は多量の砂粒が含まれる。2は丸底の土師器杯である。内面と口縁部の外面は赤彩される。口縁端部は内外面からつまんで薄く整形される。胎土は白色針状物質が含まれる。4は土師器碗である。径の小さな平底で、体部が半球状に丸みをもって立ち上がる。内外面は全面赤彩される。内面は器面が剥落している。3・5～9は土師器の小型壺である。7以外は赤彩される。3は口縁から肩部の破片である。肩部の内面に指頭圧痕が見られる。5は平底で、胴部はややつぶれた算盤形で、口縁部は直線的に開きながら立ち上がる。胴部内面は器面が剥落気味だが、粘土紐接合痕が残る。6は口縁部小破片、7・8は底部破片である。8は底面まで赤彩される。9は二重口縁の壺の口縁破片である。10は内外面にハケメを残す、赤彩された小型の土師器甕である。異質の形状で、頸部の屈曲が弱く、口縁部は短く直線的で、胴部の張りは弱い。11は甕口縁破片である。頸部は「く」の字状に屈曲し、内面にも明瞭に稜が見られ、口縁端部は強く外反する。12は鉄製鎌の破片と考えられる。鏑がひどく背側の厚みは判然としな。重量は26.88gである。13・14は茶褐色の色調の軽石である。13には刃の研ぎ痕が多数



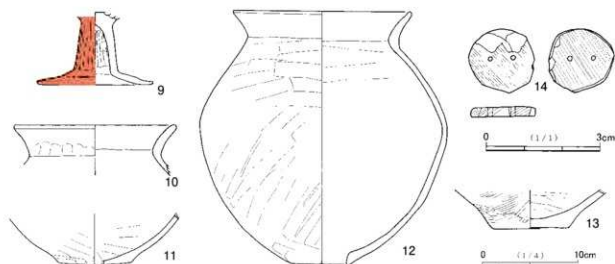
SI-025

1. 黒褐色土；黒色土少量
2. 暗黄褐色土；ソフトローム多量
3. 黄褐色土；小ロームブロック主体

第122図 SI-025



第123図 SI-026 (1)



第124図 SI-026 (2)

見られる。13の重量は31.6 g、14は19.2 gである。15・16は白玉である。15は滑石裂で上下面は平らでない。側面の研磨痕は明瞭であるが、面は滑らかではない。重量は0.04 gである。16は鉄石英装である。やや歪んだ形状で、表面に光沢がある。重量は0.03 gである。

SI-025 (第122図、第20表、図版25・51・57)

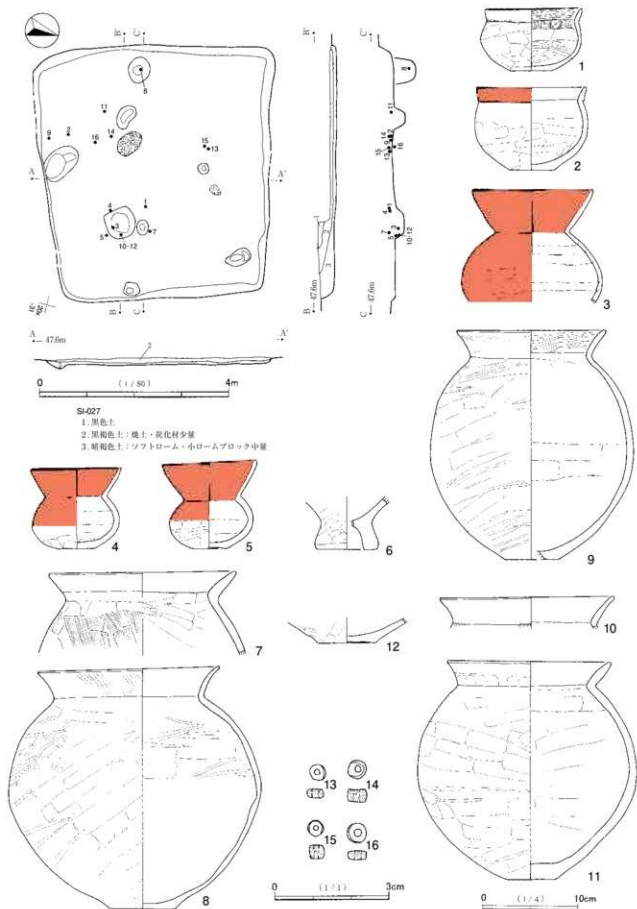
20x-41 グリッド付近に位置する。平面形は小形の方形であり、主軸方向はN-44°-Wである。規模は主軸長3.14 m、幅2.92 m、床面積は8.85㎡で、確認面からの深さは0.4 mである。壁溝は一部途切れて検出されない部分がある。支柱穴は対角線上に4本配置される。壁際にビットが複数配置され、貯蔵穴にしては規模が小さい。南東壁に接したビットは出入口ビットと考えられる。炬は北側の支柱穴間のラインよりやや内側寄りに付設される。堅穴南側を中心に硬化面が検出された。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は図示したものを除くとごく少量出土し、赤彩された小型壺の破片数点と甕の小破片のみである。1・2はほぼ同型の土師器甕で、隣り合って床面から出土した。頸部の屈曲は「く」の字状で、短い口縁は端部が弱く外反する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はヘラナデ調整である。2は外面に多くのススが附着する。3は白色調の凝灰岩製の砥石である。孔が穿たれ、破面部分も磨られている。重量は18.1 gである。

SI-026 (第123・124図、第20表、図版25・26・51・57)

20w-94 グリッド付近に位置する。平面形は大形の正方形であり、主軸方向はN-110°-Eである。規模は一辺7.42 m、床面積は54.00㎡で、確認面からの深さは0.36 mである。壁溝は巡らない。支柱穴は対角線上に4本配置される。小ビットが支柱穴付近に見られるが整然とした配置ではない。西壁際中央のビットは出入口ビット、南東隅のビットが貯蔵穴と考えられる。カマドは東壁のやや南寄りに付設される。カマドの煙道部はほとんど堅穴外部に掘り込まれない。北西隅に近い部分で硬化面が検出されたが、床面は全体に攪乱が多く、本来は広範囲にあったものと考えられる。覆土は自然堆積と考えられ、炭化材と焼土が少量含まれる。

遺物は土師器を主体に比較的多く出土した。1～5は内外面が赤彩された土師器甕である。1～3は口縁端部が短く屈曲して外側に開く、いわゆる内斜口縁である。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ調整であ



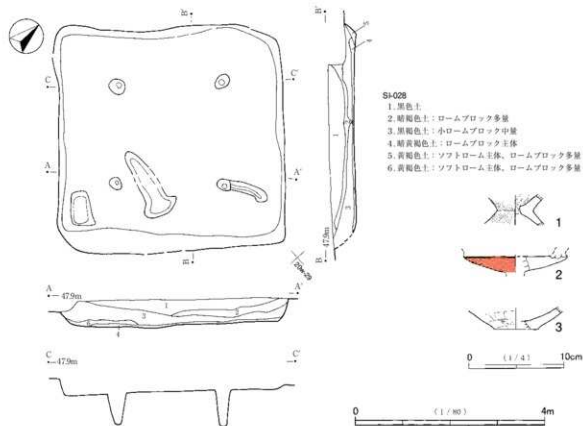
第125図 SI-027

る。1の胎土には白色針状物質が含まれる。4・5は口縁が内湾して立ち上がり、底部は丸底である。6～9は赤彩された土師器高杯である。7～9はカマドの燃焼部からの出土である。7と9は質感が類似し、同一個体の可能性がある。7・8は杯部外面下部に稜が見られるが、特に7はしっかりと段となる。9は脚部から裾部への屈曲が強い。脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面には絞りが見られる。胎土には白色針状物質が含まれる。10・11・13は土師器甕である。11・13の底部破片の胎土には白色針状物質が含まれる。12は単孔の土師器甕である。頸部は「く」の字状に強く屈曲する。外面には全体的にススが附着する。13は全体的に黒い色調で、外面が底面も含めてヘラケズリ後ミガキ調整である。14は滑石製の小型の有孔円板である。片面穿孔と考えられる。側面には研磨による面があり、整形は雑である。重量は1.8gである。

SI-027 (第125図、第20表、図版26・51・57)

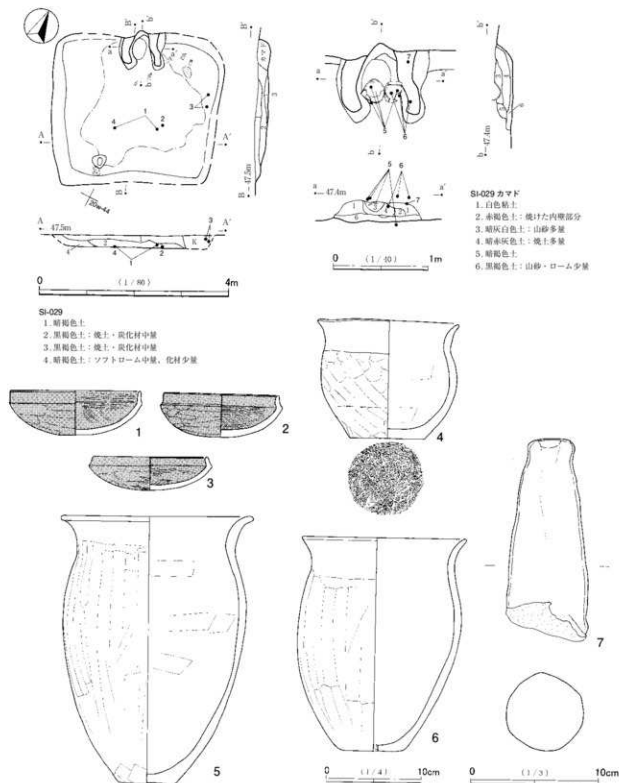
20x20グリッド付近に位置する。平面形は台形に近い方形であり、主軸方向はN-72°-Eである。規模は主軸長5.2m、幅4.82m、床面積は22.78㎡で、確認面からの深さは0.34mである。壁溝は巡らない。主柱穴は整然と並ばず、小ピットが点在する。東壁際中央のピットは出入口ピットと考えられる。西壁際のピットから8の甕がすっぽりと埋まって出土した。炉は竪穴中央やや西寄りに付設される。覆土は自然堆積と考えられ、炭化材と焼土が少量含まれる。

遺物は図示したものを除くと少量出土し、ほとんどが土師器甕の小破片である。1・2は平底の土師器鉢である。口縁部は短く、厚みがある。1は口縁部と頸部内面にハケメを残す。2は口縁部に赤彩が確認できるが遺存は不良である。3～5は赤彩された土師器小型壺である。内面に粘土紐接合痕が見られる。3は底部を欠損する。器壁は薄く、口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。胴部は若干つぶれた球形



第126図 SI-028

である。4・5は口縁部長が異なるもののほぼ同型である。平底で、ややつぶれた胴部である。6は土師器台付甕の台部である。厚みがあり、しっかりとした作りである。底面は使用による摩滅が確認できる。7～12は土師器甕である。頸部の屈曲は強く、内面に稜が作り出される。胴部はラグビーボール状に中位が張るが、8は特に球状に近い。7～10は外面にハケメが残される。10の胎土には白色針状物質が含まれる。13～16は滑石製の白玉である。成品のみで、ほかに剥片は出土していない。上下面はほぼ平らで、



第127図 SI-029

側面は中位が膨らみ、かすかに稜が作り出される。重量は13が0.07 g、14が0.04 g、15が0.1 g、16が0.08 gである。

SI-028 (第126図、第20表、図版26・52)

20w-34 グリッド付近に位置する。平面形はやや歪な正方形であり、主軸方向はN-45°-Eである。規模は主軸長4.50 m、幅4.28 m、床面積は19.11㎡で、確認面からの深さは0.6 mである。床面は軟弱で攪乱が部分的に入っており、断面観察により壁の位置を判断した部分がある。炉・壁溝は検出されなかった。支柱穴は対角線上に4本配置される。床面には不整形な溝状の掘込みが2か所で検出されたが、堅穴に伴うものかは不明である。南隅に方形に掘り込まれた貯蔵穴(深さ18cm)がある。覆土にはロームブロックが多く含まれ、2層以下は人為的に埋められた可能性がある。

遺物は土師器甕の破片を主体に少量出土し、図示したのも破片を復元実測した。粘土紐接合痕を残した口縁をもつ甕の破片も含まれる。1は土師器の器台である。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整が施される。2はやや小型の高杯で、杯部下位の破片と考えられる。内外面ともに赤彩される。3は土師器甕の底部破片である。外面はヘラケズリ後ミガキ調整である。

SI-029 (第127図、第20表、図版27・52・57)

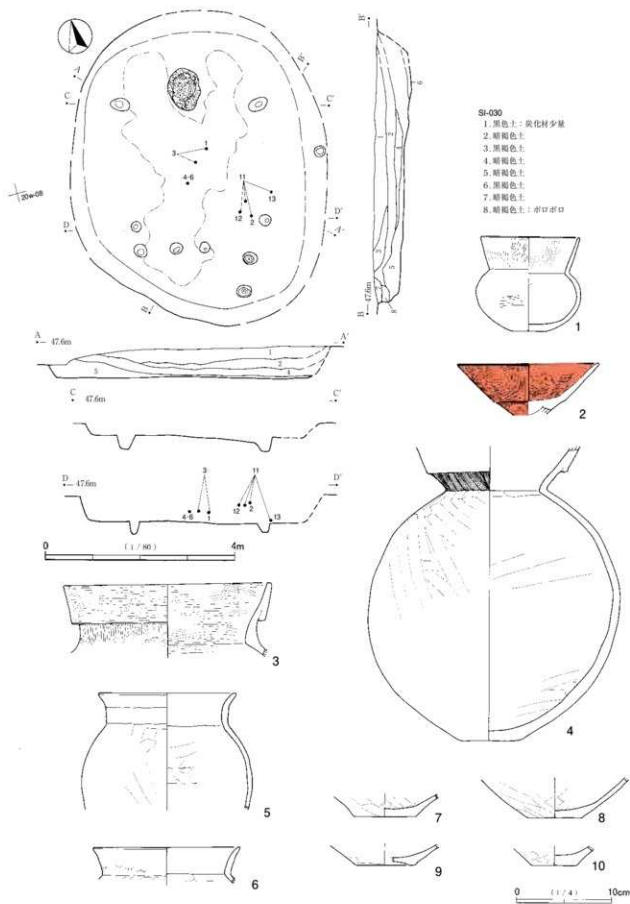
20w-33 グリッド付近に位置する。平面形は歪な横長方形であり、主軸方向はN-25°-Eである。規模は小形で主軸長2.8 m、幅3.3 m、床面積は8.60㎡で、確認面からの深さは0.24 mである。壁溝は巡らない。北壁と南壁は攪乱もあり検出が困難で、断面観察により位置を推定した。堅穴中央の床面には広く硬化面が検出された。支柱穴・貯蔵穴はなく、南壁際に小ピットが1基のみである。覆土中には焼土や炭化材が含まれ、部分的に集中して出土した。カマドは北壁中央に付設される。カマドの掛口からは遺存の比較的良好な長胴甕が並んで出土した。支脚はカマド右袖の上位から出土した。

遺物は図示したものを除くと、ごく少量の土師器片が出土した。1～3は土師器杯である。いずれも内外面全面黒色処理されている。内面はヘラミガキ調整である。2の胎土には白色針状物質、赤褐色スコリア粒が含まれる。2・3は口縁端部に使用による擦れが確認できる。4は底径の大きい平底の小型甕である。底面には木葉痕が見られる。外面はヘラケズリ後ナデ調整である。内面はヘラナデ調整であるが、摩滅している。5・6は土師器の長胴甕である。胎土には大きめの砂粒が目立ち、6には雲母粒も含まれる。外面は縦方向のヘラケズリ後ナデ調整である。7は土製支脚で基部を欠く。ナデ調整であるが、被熱により器面は摩滅している。

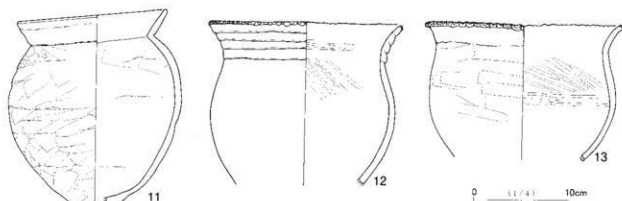
SI-030 (第128・129図、第20表、図版27・28・52)

20w-08 グリッド付近に位置する。南西壁以外は明確に確認できなかったが、平面形は楕円形で、主軸方向はN-8°-Eであると考えられる。規模は推定で主軸長5.82 m、幅4.66 m、床面積は23.23㎡で、確認面からの深さは0.68 mである。支柱穴は4本配置されるが、比較的掘込みは浅い。堅穴南側に小ピットがまとめて検出された。炉は北側の支柱穴間のラインよりやや壁寄りに付設される。炉の周辺と堅穴中央部の床面の硬化が著しい。貯蔵穴・壁溝は検出されなかった。覆土上層は黒色土層で、少量ではあるが炭化材が含まれる。

遺物は土師器甕の破片が主に出土した。ハケメがあり、器壁の薄い土器破片が目立つ。1は土師器小型壺である。ややつぶれた胴部で、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面ともにミガキ調整が施されるが、胴部は摩滅している。2は赤彩された高杯の杯部である。内外面ともにミガキ調整である。外面下位に明



第128図 SI-030 (1)



第129図 SI-030 (2)

瞭な稜が見られる。口縁端部は擦れている。3・4は2重口縁の土師器壺である。3の口縁には歪みがある。内外面ともにミガキ調整である。4は胴部の中位が最大径の球状で、頸部は「く」の字状に強く屈曲する。口縁部は頸部の屈曲のまま直線的に立ち上がる。頸部外面はハケメ、胴部は内外面ともにヘラナデ調整である。5～13は土師器甕である。5の口縁部は直立した後、先端が外反する。6は口縁部破片で、外面にハケメが一部残存する。7～10は底部破片である。9の底面の外周には粘土を雑に貼り付け高台状にしている。11は遺存の良い甕で、頸部は「く」の字状に強く屈曲し、内面にははっきりとした稜が見られる。肩部外面に荒いハケメ、胴部外面には粘土紐接合痕が見られる。12・13は口縁端部を交互押捺した波状口縁の甕である。内面はミガキ調整で、頸部の屈曲は弱い。12は口縁部に4条の輪積痕がある。頸部は緩く外反し、口縁部へとつながる。13の胴部下の破面は磨られているため、割れた後、再利用していた可能性がある。

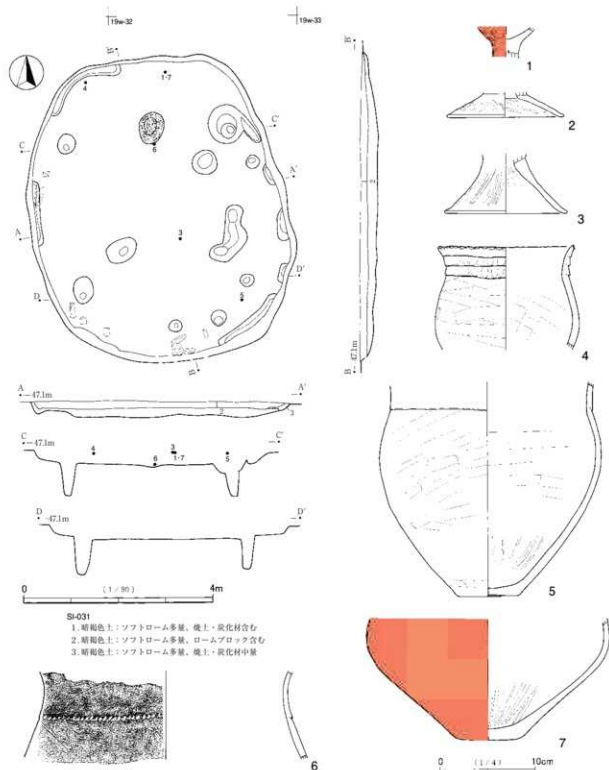
SI-031 (第130図、第20表、図版28・52)

19w-42グリッド付近に位置する。平面形は楕円形で、主軸方向はN-7°-Wである。規模は主軸長6.24m、幅5.20m、床面積は27.81㎡で、確認面からの深さは0.36mである。壁溝は部分的に検出された。支柱穴は4本配置される。そのほかにピットが複数検出されたが規則性はない。炬は北側の支柱穴間に付設される。覆土には炭化材・焼土が含まれ、特に壁際から焼土・炭化材がまとめて出土した。

遺物は土師器甕・壺の破片が多く出土したが、ハケメが施された破片は見られない。細かい羽状縄文が施され赤彩された壺の小破片も含まれる。1～3は土師器高杯の破片である。1の外面はヘラミガキ、杯部内面は丁寧なナデ調整である。外面は赤彩される。胎土は褐灰白色の砂粒が目立つ。2は脚部で、器高が低い。内外面ともヘラミガキ調整で、器台の可能性もある。3は脚部の破片で、外面はヘラミガキ調整である。胎土には白色針状物質が含まれる。4～6は土師器甕である。4は頸部の屈曲の緩やかな小型の甕である。口縁端部は工具による刻み、頸部の3条の輪積痕に弱い指頭圧痕が施される。内面は強いヘラナデ調整である。胎土には白色針状物質が含まれる。5は頸部と胴部の境に小さい段がある。胴部に張りはなく、頸部は無文である。6は頸部と胴部の境に横位の連続刺突文が巡る。外面にはススが多量に付着する。7は壺の胴部下である。胴部中央が大きく張り、底部径は小さい。外面は赤彩される。内外面ともにミガキ調整であるが摩滅している。

SI-032 (第131・132図、第20表、図版28・29・53)

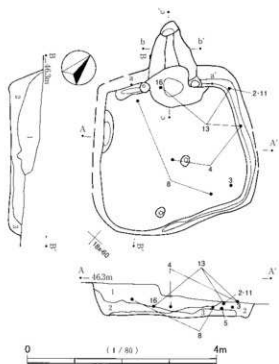
18w-59グリッド付近に位置する。平面形はやや歪な正方形であり、主軸方向はN-50°-Eである。規模は主軸長3.08m、幅3.1m、床面積は8.98㎡で、確認面からの深さは0.8mである。壁溝は全体の1/2程



第130図 SI-031

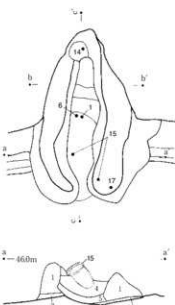
度を検出した。床面はほぼ平坦で、カマドの前面に硬化面が確認できた。カマドは北西壁中央に付設され、袖、煙道も遺存は良好であった。カマド内から土師器長胴甕(15)がほぼ直立した状態で出土した。

遺物は中量出土している。主に土師器で、白みを帯びた須恵器甕の破片も含まれる。土師器甕類の破片が多く、杯類は図示したもの以外では少量で、ロクロ土師器は含まれない。1～8は土師器杯である。1の口縁部はわずかに内湾する。体部外内面はナデ、底部は外面がヘラケズリ、内面はミガキ調整である。



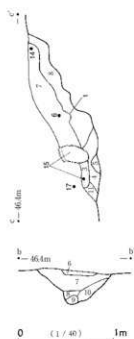
SI-032

1. 黒色土
2. 暗褐色土：ソフトローム多層、ロームブロック中層
3. 暗黄褐色土：ソフトローム主体、ロームブロック多層
4. 黄褐色土：ソフトローム・ロームブロック多層（船庫部）

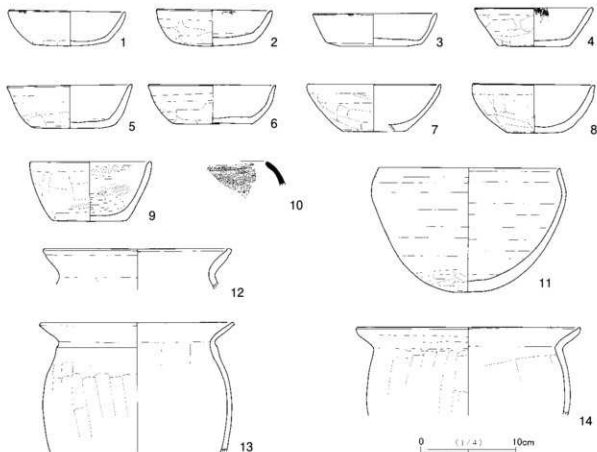


SI-032 カマド

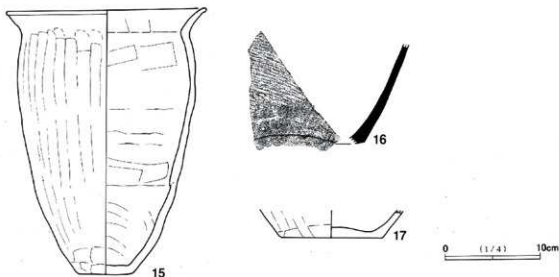
1. 黄褐色土：山砂主体
2. 黄色土：ソフトローム主体
3. 暗褐色土
4. 黒褐色土：黒色土・焼土少量
5. 黄褐色土：黒色土中層、山砂多層
6. 暗褐色土：山砂少量
7. 暗黄褐色土：山砂主体、黒色土少量



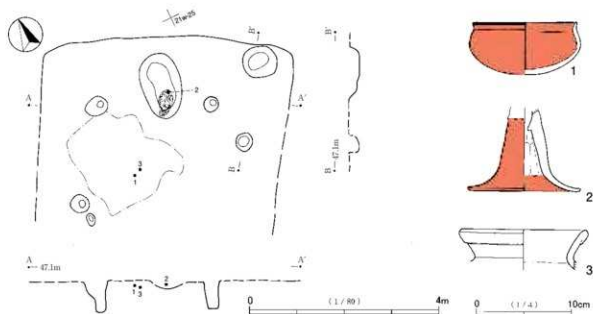
8. 暗黄褐色土：山砂・焼土多層
9. 暗褐色土：黒色土多層（煙道部？）
10. 暗黄褐色土：山砂多層
11. 暗褐色土：山砂多層（天井部？）



第131図 SI-032 (1)



口縁部には油煙が付着する。2は器形がやや歪み、口縁部には油煙が付着し、灯明皿としての使用時の欠けが見られる。底部内面と体部を画する境は明瞭である。体部外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、底部内面はミガキ調整が施される。3は体部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる。口縁部には油煙が付着する。全体が灰色ほっく須恵質である。体部外面下位に回転ヘラケズリによる斜めの面が作り出される。外面はロクロナデで、底部は回転糸切り後ヘラケズリが施される。4は体部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる。口縁部付近に油煙が付着する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。胎土に赤褐色スコリアが含まれる。5は体部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる。底部内面と体部を画する境は明瞭である。外面はヘラケズリ後ナデ、外面底部はヘラケズリ、内面はナデ調整が施される。胎土は白色針状物質が含まれる。6は体部が緩く内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外に開く。底部と体部を画する内面の境が明瞭である。口縁部の欠け部分が被熱しており、油煙の付着はないが灯明皿の可能性はある。外内面はロクロナデ、底面は手持ちヘラケズリ調整である。7は体部から口縁部がやや内湾する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ、内面下位はミガキ状のナデ調整が施される。胎土は赤褐色スコリアが含まれる。8は体部から口縁部へ弱く内湾しながら立ち上がる。口縁端部には使用時の欠けが見られる。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整が施される。9は土師器碗である。体部は直立気味に立ち上がる。外面はヘラケズリ後ナデ・ミガキ、内面は細かくミガキ調整が施される。10は須恵器鉢の口縁部の破片である。鉢鉢形の可能性がある。色調は灰色、胎土は精緻で、焼成は良好である。内外面はロクロナデ調整である。11は土師器の鉢鉢形の鉢である。口縁部に欠けが見られる。内外面ともにロクロナデ、外面底部付近は回転ヘラケズリ調整が施される。胎土は白色微砂粒を多量に含む。12～15・17は土師器甕である。12は口縁部の破片である。外面に輪積痕が見られる。13・14は口縁部から胴部にかけて遺存する。外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施される。15は長胴甕の完形品で、胴部の張りは弱い。外面は縦方向のケズリとヘラナデ、内面は強いヘラナデ調整が施される。外面にススが付着する。17は底部である。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整が施される。内面は器面が剥落気味である。16は須恵器甕の胴部下端の破片である。外面はタタキ、ヘラケズリ、内面はナデ調整が施される。内面に当て具痕が残る。胎土には雲母粒



第133図 SI-033

子が含まれる。

SI-033 (第133図、第20表、図版29・53)

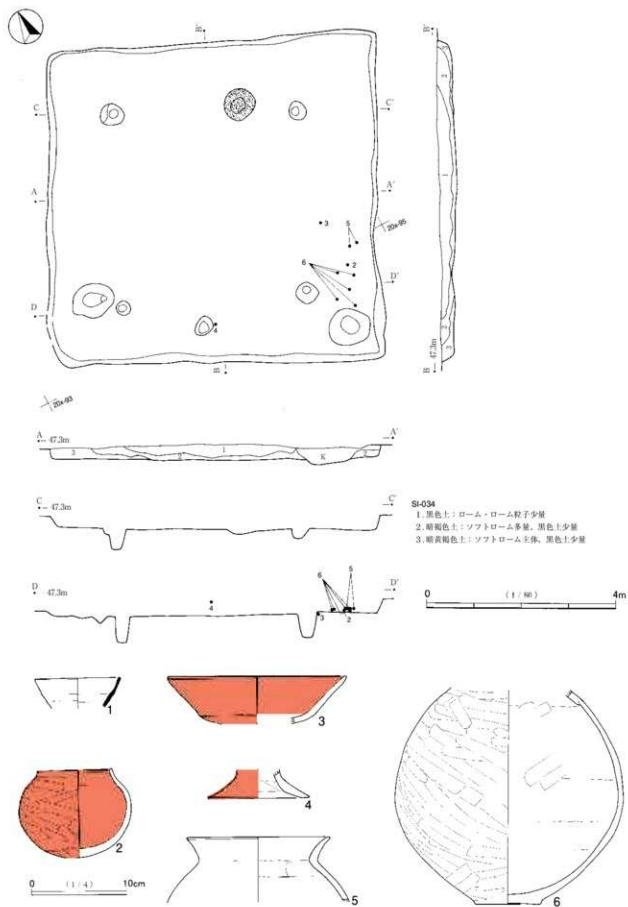
21w-24グリッド付近に位置する。南側の床面の範囲は不明である。平面形は方形で、主軸方向はN-25°-Eである。規模は幅6.82mで、確認面からの深さは0.08mである。壁溝は検出されなかった。堅穴中央北西寄りの床に硬化面が確認できた。主柱穴は3本確認される。炬は北側の主柱穴の間に付設される。北東隅の壁に接して検出されたピット(深さ約20cm)は、貯蔵穴と想定される。

遺物は少量で全て土師器である。図示したものの以外は小片で、杯類は赤彩される個体が目立つ。1は丸底の土師器碗である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く屈曲する。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整である。内外面ともに赤彩される。2は土師器高杯の脚部である。脚部はラッパ状に開く。内外面ともナデ調整が施される。外面全体と裾部内面は赤彩される。外面の器面は荒れている。3は土師器の2重口縁壺の口縁部破片である。

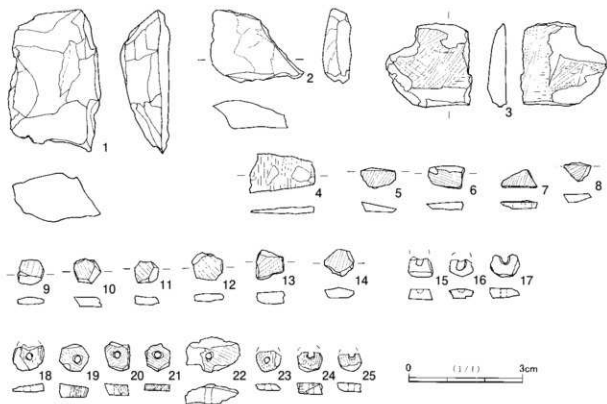
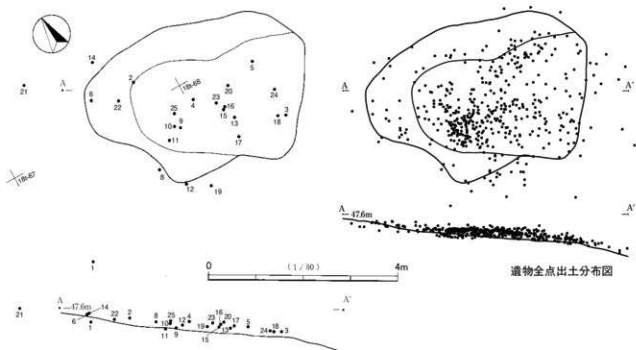
SI-034 (第134図、第20表、図版29・53)

20x-84グリッド付近に位置する。平面形は正方形で、主軸方向はN-24°-Eである。規模は主軸長6.54m、幅6.82m、床面積は44.52m²で、確認面からの深さは0.28mである。壁溝は巡らない。床面はほぼ平坦で、主柱穴は対角線上に4本配置される。炬は建物北側の主柱穴間に付設される。出入口右側の南東隅に壁に接するように貯蔵穴(深さ約50cm)がある。覆土の2層と3層には黒色土が含まれる。

遺物は土師器がほとんどで、須恵器は図示した1点のみである。高杯と考えられる赤彩された破片が目立つ。細かい縄文が施文され赤彩された壺の破片も出土している。1は須恵器壺の口縁部と考えられる。色調は灰色で、胎土は精緻である。内外面ともにロクロナデ調整である。2は丸底の土師器鉢である。口縁部はすぼまる形状である。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ調整が施される。内外面は全体が赤彩される。3・4は土師器高杯である。3は杯部破片である。口縁部は直線的に立ち上がり、外面下位に稜が見られる。内外面は全体が赤彩される。内外面ともにナデ調整である。胎土には白色針状物質が含まれる。4は脚部の破片である。裾部への屈曲は弱い。外面と底面に赤彩される。5・6は土師器甕である。5は口縁部破片である。

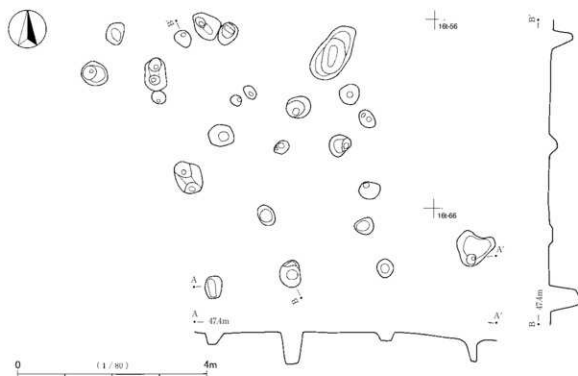


第134図 SI-034



第135図 SZ-001

頸部は「く」の字状で、口縁は弱く外反しながら立ち上がる。外面はナデ、内面はヘラナデ調整が施される。胎土自体赤く発色している。6は肩部から底部にかけて遺存する。胴部中位下寄りに最大径がある。外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ・ヘラナデ調整が施される。外面と内面にスガが付着する。



第136図 SH-001

SZ-001 (第135図、図版57)

東側の谷地形へと緩やかに傾斜していく 16t-55 グリッド付近に位置する。明確な掘込みはなく、周辺より窪んだ南北約 3.3 m、東西 4.7 m の範囲で滑石製の未成品や剥片がまとめて出土した地点である。床面や炉は検出されなかったため、人為的な掘込みではない可能性が高い。発掘時には遺物集中地点と呼称し、遺物はグリッド単位で取り上げている。整理作業に当たり SZ-001 と遺構番号を付した。

石製模造品の製作関連遺物、約 450 点の位置を記録した。出土位置・高さに大きな偏りはなく、窪地全体に約 30cm の比高内で検出された。荒割品と大形の板状研磨品については成品の種類を特定することはできないが、それ以外は白玉の未成品及び剥片であると考えられる。白玉の成品は 1 点も含まれず、土器類も伴わなかった。1・2 は荒割品で研磨は見られない。3・4 は板状研磨品で表裏面とも研磨される。3 は厚みがあるため、白玉製作目的の研磨品ではない。5～8 は研磨された剥片、9～14 は形割品である。15～17 は研磨無しの穿孔品である。18～25 は研磨有りの穿孔品である。

SH-001 (第136図、図版34)

16t-55 グリッド付近に位置する。南北 6.0 m、東西 8.8 m の範囲でピットが集中して検出された。調査時には SI-020 としていた遺構であるが、床面や炉は確認されず、掘込みの深いピットも整然と並ばなかったためピット群と捉えた。ピットは小形のものが多く、平面が長楕円形のものが含まれる。深さは 10cm～70cm と一定しない。

遺物は遺構確認面から土師器破片が数点と、ピット 1 から土師器甕の胴部小片が 1 点出土したのみである。時期を特定することは困難である。

2 方形・円形区画墓

SS-001 (第137図、図版30)

西側の本調査区の台地中央 17x-33 グリッド付近に位置する。平面形はほぼ正方形で、主軸方向は N-13°-E である。規模は全長が 11.6 m、方台部長は 10.0 m、周溝幅は 1.2 m、周溝深さは 0.56 m である。方台部には盛土は検出されなかった。周溝は断面が逆台形状に掘られている。覆土は自然堆積と考えられ、ソフトロームが含まれる。方台部の中心からやや北側にずれた位置で、東西方向に長軸をもつ主体部が作られる。主体部は掘込みのみで棺材・副葬品は出土しなかった。主体部の掘り方は雑で、棺の規模は断面図から長さ 1.84 m、幅 0.88 m である。

遺物は周溝から土師器小片が少量出土した。確実に遺構に伴うものではなく、周辺の古墳時代中期の堅穴住居跡からの流入と考えられるものがほとんどである。

SS-002 (第138図、図版31)

SS-001 の 15 m 北の 17x-33 グリッド付近に位置する。平面形はかなり歪んだ円形、規模は全長が 9.92 m、円台部長は 9.08 m、周溝幅は 0.64 m、周溝深さは 0.28 m である。円台部には盛土、主体部は検出されなかった。周溝の断面は、やや下端の角は丸みを帯びるが、逆台形状に掘られている。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は周溝から土師器小片が少量出土した。確実に遺構に伴うものではなく、周辺の古墳時代中期の堅穴住居跡からの流入と考えられるものがほとんどである。

SS-003 (第138図、図版31)

18s-11 グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は全長が 11.32 m、円台部長は 10.12 m、周溝幅は 0.46 m、周溝深さは 0.4 m である。円台部には盛土、主体部は検出されなかった。周溝の断面は逆台形状で、立ち上がりは急である。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は周溝から須恵器小片が 1 点のみ出土した。薄手で、色調は灰色であるが、器形・時期は判然としない。

SS-004 (第139図、図版31)

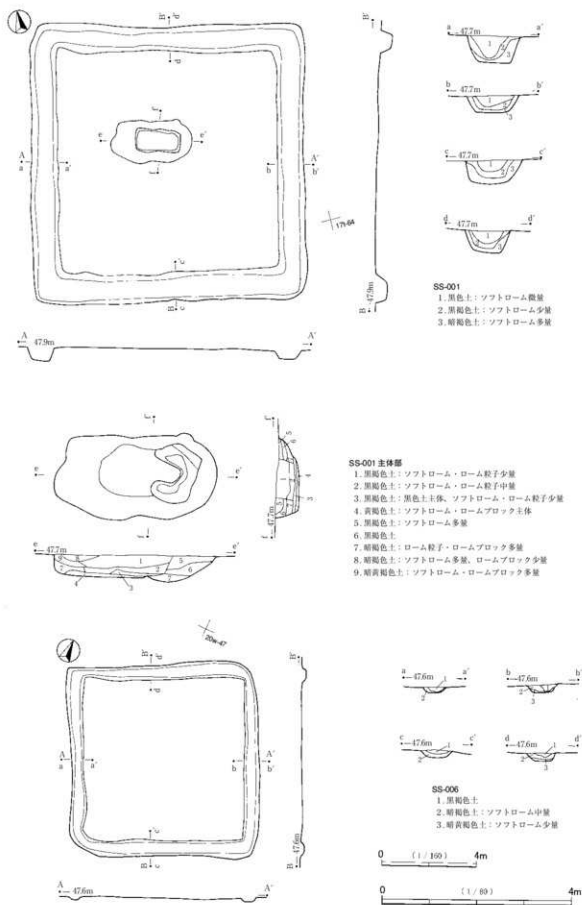
8s-04 グリッド付近に位置する。平面形はやや歪んだ正方形で、主軸方向は N-2°-W である。規模は全長が 6.72 m、方台部長は 5.60 m、周溝幅は 0.80 m、周溝深さは 0.26 m と小規模である。方台部には盛土、主体部は検出されなかった。周溝は浅いが、断面は逆台形状に掘られている。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は周溝から土師器小片が 6 点出土した。壺の小破片で、遺構に伴うものかは判然としない。

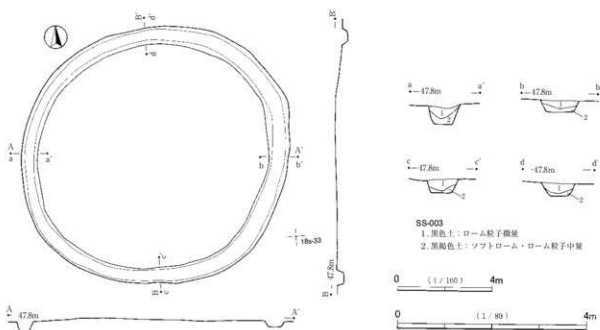
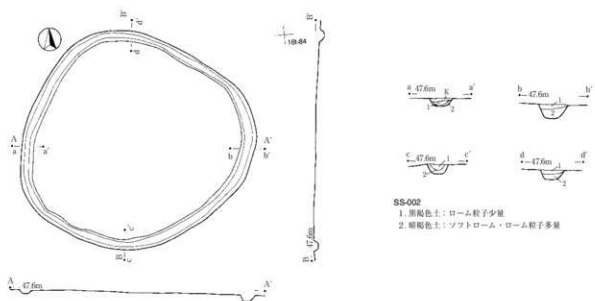
SS-005 (第139図、図版30)

6s-82 グリッド付近に位置する。平面形はほぼ正方形で、主軸方向は N-5°-E である。規模は全長が 8.20 m、方台部長は 7.20 m、周溝幅は 0.64 m、周溝深さは 0.24 m である。方台部には盛土は検出されなかった。周溝は浅いが断面が逆台形状に掘られている。覆土は自然堆積と考えられる。方台部の中心からやや西側にずれた位置で、南北方向に長軸をもつ主体部が作られる。調査時には SK-015 とした土坑である。主体部は掘込みのみで、棺材・副葬品は出土しなかった。主体部の掘り方は方形で、規模は 2.3 m × 2.08 m で、その中心部分を深く掘り込んで埋葬したものと考えられる。中心部分はビット状に深い。

遺物は周溝及び主体部の覆土から少量の土師器小片が出土しているが、確実に遺構に伴うと考えられるものはない。



第137図 方形・円形区画墓(1)

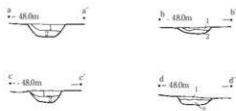
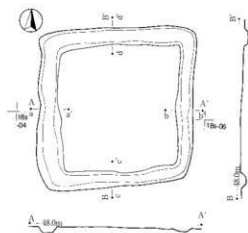


第138図 方形・円形区画墓(2)

SS-006 (第137図)

区画墓としては唯一東側の本調査区にあり、20w-57グリッド付近に位置する。平面形はやや歪な正方形で、主軸方向はN-24°-Wである。規模は全長が9.0m、方台部長は7.04m、周溝幅は0.66m、周溝深さは0.16mである。方台部には盛土、主体部は検出されなかった。周溝は、やや下端の角は丸みを帯びるが、断面は逆台形状に掘られている。覆土は自然堆積と考えられる。

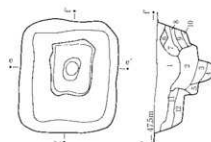
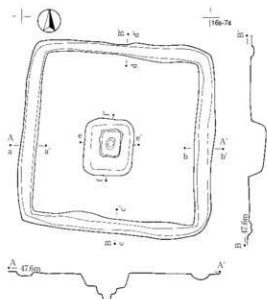
遺物は溝から土師器小片が12点出土したが、確実に遺構に伴うと考えられるものはない。



SS-004
1. 黒褐色土：ソフトローム・ローム粒子少量
2. 暗黄褐色土：ソフトローム・ローム粒子多量

0 (1/100) 4m

0 (1/50) 4m



SS-005 主体部 (図 SK-015)

1. 黒褐色土：ソフトローム少量
2. 黒褐色土：ソフトローム多量
3. 黒褐色土：ソフトローム・ロームブロック多量
4. 暗黄褐色土：ロームブロック主体、ソフトローム多量
5. 黒褐色土：ソフトローム・ロームブロック中量
6. 黒褐色土：ソフトローム・ローム小ブロック少量
7. 暗褐色土：ソフトローム多量、ローム小ブロック中量
8. 黒褐色土：ソフトローム・ロームブロック多量
9. 暗黄褐色土：黒色土少量、ソフトローム多量
10. 黒褐色土：ソフトローム・ロームブロック多量
11. 暗黄褐色土：ソフトローム・ロームブロック多量、黒色土少量
12. 黒褐色土：ソフトローム主体、ロームブロック多量

SS-005

1. 黒褐色土：ソフトローム少量
2. 暗黄褐色土：ソフトローム多量

第 139 図 方形・円形区画墓 (3)

3 塚

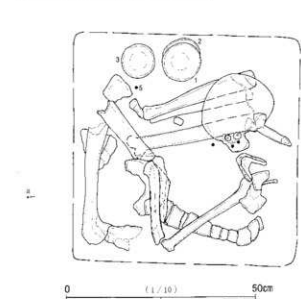
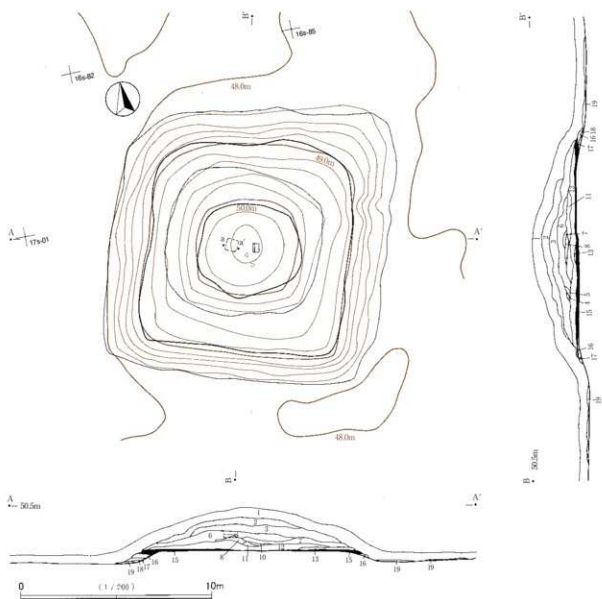
SM-001 (第140・141図、第20・21表、図版35・53・58)

17s-03グリッド付近に位置する。調査前までは古墳時代の方墳(八重門田古墳)とされていた遺構である。調査の結果、遺構に伴う周溝は確認されず、土層、出土遺物などから近世の塚であることが判明した。平面形は方形で、中段にテラス状になだらかな部分が見られる。主軸方向はN-15°Eで、一辺の長さは13.5mである。塚の裾部に当たる部分の旧表土以下を深さ50cm削り出した後、盛土を行っており、高さは2.8m(旧表土からの盛土は高さ2.3m)である。旧表土には宝永火山灰が多く含まれていた。盛土にしまりはなく、丁寧に版築状に積み上げたものではない。第6層でいったん盛土を止め、遺骸を埋葬している。その高さはテラス状部分と一致する。その後、第2・3層を盛土し、塚を完成させている。盛土中に構築された埋葬部は、調査時にはベルト内にすっぽり取まっていたため、確実には掘込み面を確認できなかった。人骨の範囲は50cm～60cm四方に取まっているため、棺の大きさを示すものと考えられる。周辺から鉄釘が出土していることから、方形の木棺に埋葬されていたものと推定できる。

塚に直接関わる遺物は、塚の頂部で供献・信仰用に使用したと考えられる台座石・石仏(図版58-13)と埋葬された人骨・磁器・銭貨及び鉄釘である。台座石・石仏は近代以降のものと考えられる。埋葬人骨については、次節にて形質人類学的見地からの分析結果を掲載した。この分析により1次葬ではなく、改葬されたこと、40歳～50歳の男性であることが明らかとなった。埋葬された頭部の北側に磁器が3個体出土した。いずれも肥前系染付の厚手碗である。1は草木花文、2・3はコンニャク判の5単位の柄文と高台・高台脇に園線が施される。鉄釘4・5は上記したように木棺に使用したもので、木質が付着している。4はほぼ完形で、長さは81cm、重量は5.7gである。5は上部のみの破片で、重量は0.9gである。銭貨8～12は人骨と頭部近くから出土した。12は2枚が銕着しており計6枚が遺骸とともに供えられたと考えられる。なお、銭貨6は塚の西側裾、7は南東テラス部分で採集されたものである。

4 遺構外出土遺物(第142図、第20表、図版53・57)

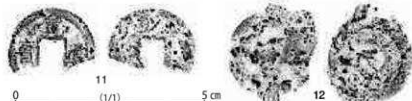
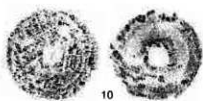
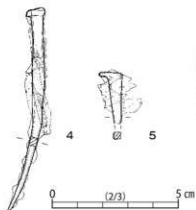
1・3・5・6・10・11は近世塚(SM-001)の盛土中からの出土である。1・2は滑石製の有孔円板である。1は単孔で、片面穿孔であると考えられる。大形であるが研磨はやや粗雑、側面の研磨痕はわずかに確認できる。重量は17.6gである。2は20w-23グリッドからの出土である。双孔であるが、半分を欠損する。側面研磨される面を残す。重量は1.94gである。3・4はミニチュア土器と考えられる。3は高杯形で、ナデ調整である。4は19w-53グリッドからの出土である。内実で外面はナデ調整であるが、部分的で形状は不明である。5は土師器甕の口縁部付近破片である。口縁端部に指頭による交互押捺、頸部には横位の連続刺突文が施される。6は20w-34グリッド出土の平底の土師器碗である。体部上位の張りが強く、口縁部は短く直立する。7は土師器甕の口縁部付近の破片である。ハケメが施される。8・9は杯の破片で古墳時代中期の堅穴住居跡(SI-001)の覆土中からの出土である。8は土師器で体部の立ち上がりが急ないわゆる箱形杯である。9は須恵器の底部破片である。胎土に雲母粒が含まれる。10・11は灰釉陶器で、内湾する三日月形の高台が付く碗の底部破片である。ロクロ成形で、内面には釉が付着する。12は土師器高台付杯の破片である。内面は細かいミガキ調整で、黒色処理が施される。古墳時代前期の堅穴住居跡(SI-031)の覆土中からの出土である。



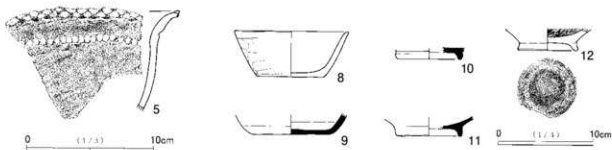
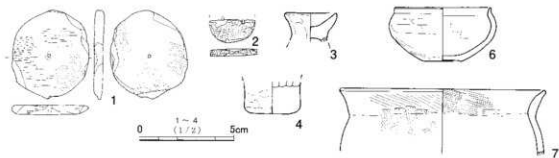
SM-001

1. 褐色土：表土
2. 暗褐色土
3. 明褐色土：ローム粒多量
4. 暗褐色土：ローム粒少量
5. 明褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、火山灰含む
6. 暗褐色土：ローム粒・ブロック含、焼土・火山灰微量
7. 明褐色土：ロームブロック含む
8. 明褐色土：葦子層より明るい色調、ローム粒中量、火山灰含む
9. 明褐色土：葦子層に類似、火山灰含む
10. 暗褐色土：ローム粒微量
11. 暗黄褐色土：ローム主体、火山灰含む
12. 暗褐色土：ローム粒少量、火山灰部分的多量
13. 明褐色土：ローム粒多量、火山灰中量
14. 明褐色土：葦子層に類似、明るい色調
15. 暗褐色土：図表土、特に上面に火山灰多量
16. 明褐色土：ローム粒中量、しまり有
17. 暗褐色土：ローム粒・炭化粒微量
18. 暗褐色土：ローム粒中量
19. 暗黄褐色土：葦層厚層

第140図 SM-001



第 141 図 SM-001 出土遺物



第 142 図 遺構外出土遺物

第5節 SM-001 出土人骨所見

渡辺 新

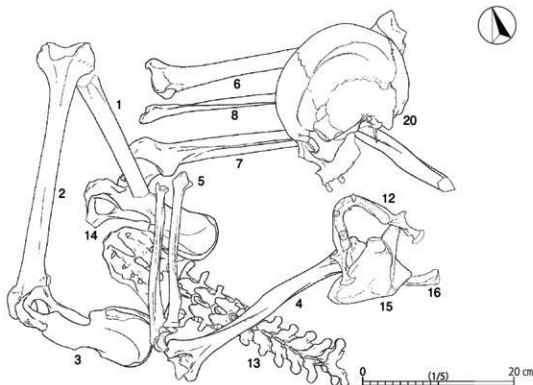
八重門田遺跡ではSM-001から1個体の人骨が検出される。SM-001は宝永火山灰が含まれる旧表土の上に築かれた近世の塚であり、13.5m四方、高さ2.8mの規模を有し、塚の頂上付近には台座石が据えられている。人骨は塚の概ね中央、頂上から深さ150cmほどの盛土中において、およそ50cm～60cm四方の狭い範囲に身体を小さく折り畳むような恰好で出土する。

骨は酸性土壌中に包含されていた影響で表面の滑沢をほとんど失って脆弱な状態にある。発掘調査ではそれに鑑み一部を除いて骨を完全に露出させることなく、周囲に土が付着した状態で採取される。

1 埋葬状態

人骨は各部位が矩形に並んだ状態であり、その間隙から鉄釘が出土していることを勘案するならば、一辺50cm～60cmの正方形の木箱に収容されていたと考えられる。木箱に納められた亡骸は塚の構築途上、基壇部が築かれた時点で安置されたことがSM-001遺構東西断面で確認される。

人骨に付着していた土を除去し部位を同定した後、部位位置関係見取り図ならびに発掘経過記録写真と照合して埋葬状態を復元的に表現したものが第142図である。各部位のおおよその上下関係は、下肢骨と体幹骨が下部にあり、その上に上肢骨が重なり、上肢骨の上に頭蓋骨と下顎骨が載る。以下、第143図を基に各部位ごとの方向と位置関係を下部から順に記す。



第143図 埋葬状態復元図

木箱の北半と目される箇所に右の下肢骨が水平に並ぶ。脛骨R(6)は近位を東に、後面を上に向ける。腓骨R(8)は向きが不明である。ただし脛骨Rと自然位を保つように並列しているので、近位を東に、後面を上に向けていると復元した。大腿骨R(7)は近位を西に、後面を上に向ける。骨頭が寛骨に接するも左右が異なり関節関係にない。

木箱の東辺に沿う箇所にある大腿骨L(2)は近位を南に、前面を上に向ける。骨頭が寛骨に接するも左右が異なり関節関係にない。大腿骨Lは水平でなく近位に向かって傾斜、骨体遠位半の下部には足骨L-踵骨・舟状骨・外楔状骨-が集まっている。また、その東側の脛骨Rの遠位との間には足骨R-距骨・踵骨・外楔状骨・立方骨・舟状骨・中楔状骨・中足骨-が集まっている。

木箱の南西隅と目される箇所には骨盤が水平にある。寛骨R(3)は上方を東に、後面を上に向ける。北側の仙骨とは関節をやや逸脱した位置関係にある。寛骨L・仙骨(14)は関節を保った状態にある。上方を南東に、後面を上に向ける。

木箱の南辺の近くで椎骨(13)が交連した状態で水平に並ぶ。交連する胸椎下位から腰椎は仙骨に関節しているようである。上方を南東に、捻転がないとして後面を上に向けていると復元した。

左の上肢骨が体幹骨の上に乗る。上腕骨L(4)・鎖骨L(16)・肩甲骨L(15)は交連した状態で水平に並ぶ。上方を北東に、後面を上に向ける。橈骨L・尺骨L(5)は自然位を保つように並列し、肘を屈する状態で上腕骨Lとおおむね関節する位置関係にあって近位を南に、外側面を上に向ける。

右の上肢骨は脛骨Rと腓骨Rの近位の上に乗っていた様子が記録写真から窺える。上腕骨R(11)は見取り図に記入があり、その遠位端が大腿骨Rの遠位の上に乗っていた位置関係を把握できる。右の上肢骨は木箱に収容された時点で大きく欠損していた可能性がある。脛骨Rの骨体中央北側で2つ重なる茶碗の周辺には手骨L-中手骨・基節骨・中節骨・末節骨-が集まっている。

頭蓋骨(20)は木箱の北東隅近くにあつて環椎を伴い、左側面を上、顔面を西に向ける。下顎骨(12)は頭蓋骨から遊離してオトガイを北に、咬合面を上に向ける。両者は木箱の東半で最も上部にある。

木箱の西半では脛骨L(1)が最も上部にある。近位を北に、後面を上に向ける。木箱に収容された時点で両端を欠いていたらしい。上に向ける後面には鋭利な刃物による傷が見られる。

人骨は交連する部位はあるものの、関節逸脱が股関節など各所で認められる。木箱に納められた時点で亡骸はおおむね白骨化していたのは明らかである。一切の肋骨、胸椎上位や頸椎が見られないのは、一次葬地に残されたからと考えられる。塚への葬態は二次葬であったと判断される。

2 性別・年齢

前頭骨は斜傾し眉間隆起が発達する。寛骨Rに見る大坐骨切痕は狭く、耳状面前溝の形成はない。したがって男性であると判断する。

主要3縫合は内板で完全に癒合しており、40～50歳以上の熟年であると推定する。採取された歯牙6点-上顎中切歯R・側切歯L・第2小臼歯L、下顎犬歯R・第1小臼歯L・第2大臼歯L-は咬合面のエナメル質が消失して前面的に象牙質が現れており、腸骨耳状面の状態(Lovejoy 1985)も推定に矛盾がない。

3 観察所見

頭蓋前面に高度の成長が観察される。上顎体の前外側面は凹彎することなく扁平であり、眼下下縁から歯槽突起への移行はほぼ直線をなし、上顎骨は高さ幅ともに著明な発達を見る(図版d-1)。眼下下縁は幅が広く深い(図版d-3)。それに伴って眼下下孔の径も大きく右では眼下下縁が堤状に隆起し、その開口は堤状隆起の底面に位置し真下を向く。眉間の膨隆が顕著であり、欠損部からその内部を見ると前頭洞の拡大が確認される(図版d-2)。このような特徴的な高度の成長は acromegaly 末端肥大症の所見に一致する(鈴木・馬場・神谷1986)。腰椎にやや強く後彎が見られるのは、椎弓とくに上関節突起の高度な成長が原因している(図版d-5)。これも acromegaly 末端肥大症に関連しているとみられる(香

原 1963)。

上顎洞内部に変異が観察される(図版 d-4)。左では半球状の膨隆肥大や不規則な骨化が見られ、含気が狭小になっている。右は膨隆肥大がなく含気狭小の程度は弱いながら、不規則な骨化と不整形の板状骨化の形成が見られる。こうした変異は fibrous dysplasia 線維性骨異形成症(内田ほか 2002)ないし osseous dysplasia 骨性異形成の所見と一致するところがある。前頭骨を起点に顔面頭蓋がやや捻転し、左の眼窩の幅径が右に比べて小さいこと(図版 a)も fibrous dysplasia 線維性骨異形成症に関連していると思われる(樋口ほか 1990)。

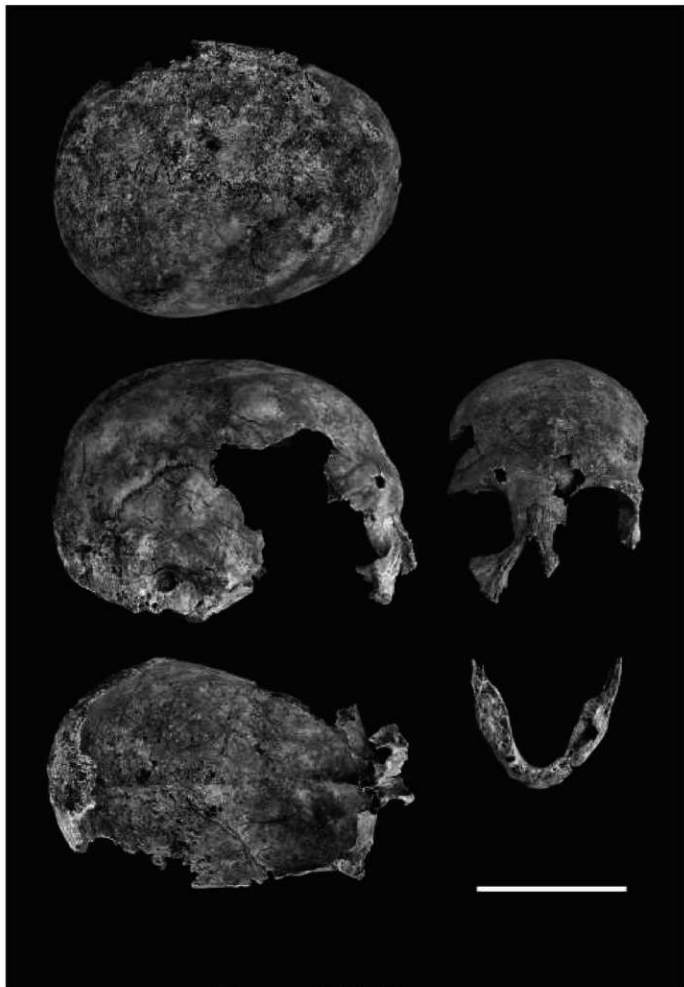
四肢骨に左右非対称が観察される(図版 b・c)。上腕骨では右と比較して左は骨体が細く華奢であり、三角筋粗面や大小結節稜が見られず、内外側縁の鋭さを欠いて遠位骨体の断面が円形を呈する。尺骨は右で後縁の鋭さが見られるものの、左ではその鋭さを欠き栄養孔部の骨体断面は不整形を呈する。また近位関節面は辺縁がやや欠損し確定できないが、鉤状突起と橈骨切痕は欠失しているらしい(図版 e-1)。寛骨では右と比較して左は腸骨ならびに坐骨体が未発達であり大坐骨切痕が鈍角をなす(図版 e-2)。大腿骨は右と比較して左の頸角が大きく見える。これは左の骨頭が未発達であるのにくわえ骨頭が扁平であることに原因し、後面の骨頭外側面は平坦になっている(図版 e-3)。脛骨では骨体の太さに左右差がないものの、左は前縁の鋭さを欠いて骨体断面が楕円形を呈する。四肢骨はいずれも左の未発達によって左右非対称が生じており、paralytic disease 麻痺性疾患による disuse syndrome 廃用萎縮が疑われる(森本・小片 1976)。

大腿骨 R は小転子を欠失する(図版 e-3)。欠失面には海面質が露出し網工の乱れが観察される。その欠失は骨の保存状態劣化による欠損ではなく、osteomyelitis 骨髄炎による sequester 腐骨が疑われる。頭頂骨の矢状縫合前方部分を中心に板間層の骨溶解の瀰漫が内板面で観察される(写真 e-4)。骨溶解は内板を貫通して径 2mm~3mm から 10.5mm ほどの小孔を形成、一部は外板へも貫通している。小孔の辺縁は鋭く治癒傾向を示さない。骨溶解部の周辺を走行する動脈溝は拡大する傾向を見せる。このような骨溶解は multiple myeloma 多発性骨髄腫あるいは metastatic bone tumor 転移性骨腫瘍の所見と一致する(Suzuki 1981・鈴木 1988)。

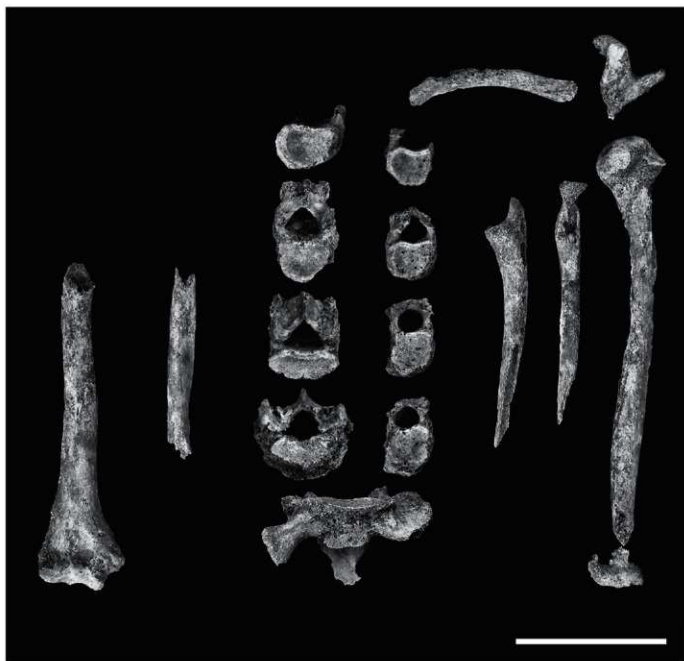
脛骨 L の骨体後面に鋭利な刃物による傷が観察される(写真 e-5)。傷は栄養孔位置から下方 3cm の間の狭い範囲に概ね深さが同じ水平方向の 9 条を数える。治癒傾向は見られない。改葬時に下腿を離断することによって生じたのであれば傷は膝関節の周辺に付かずであり(鈴木 1997)、解体痕とは性状が異なる。例えば近代まで行われていた死者の脛骨を拙挫する習俗(国分 1963)といった観念の反映として把握するのが合理的である。

4 取束

塚の構築と埋葬は一連の営為と考えられる。埋葬は一次葬地から白骨化した亡骸を木箱に移しておこなった二次葬である。被葬者は男性であると判断、死亡年齢は 40~50 歳以上の熟年であると推定される。死因は特定できないが、観察所見のうち multiple myeloma 多発性骨髄腫あるいは metastatic bone tumor 転移性骨腫瘍、また osteomyelitis 骨髄炎は死因となりうる疾患である。



図版 a SM-001 出土人骨 頭骨 スケール 10cm



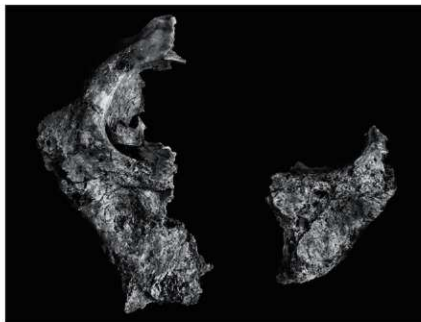
図版 b SM-001 出土人骨 体幹骨・上肢骨 スケール 10cm

参考文献

- 内田 淳・佐久間貴章・松本 学・渡辺高彦・調所廣之 2002 「成長ホルモン高値を合併し顔面骨広範に進展した Fibrous Dysplasia の 1 例」『頭頸部外科』12(1) pp.33-37 日本頭頸部外科学会
- 香原志勢 1963 「巨人症の生体学ならびに骨学的研究の一例」第七十一巻一号 pp.8-17. 日本人類学会
- 国分直一 1963 「日本およびわが南島における葬制上の諸問題」『民族学研究』第二十七巻第三号 pp.441-452. 日本民族学会
- 丸善
- 鈴木隆雄 1988 「古病理学的所見」福島県立博物館編「三貫寺貝塚」福島県立博物館調査報告第 17 集 pp.481-pp.492. 福島県立博物館
- 鈴木 尚・馬場悠男・神谷敏郎 1986 「巨人関脇出羽ヶ嶽骨格の形態学的研究」『人類学雑誌』94(4) pp.403-440. 日本人類学会
- 鈴木 尚 1997 「大浦山洞穴の弥生時代人骨、とくにその人為的損傷について」横須賀考古学会編「大浦山洞穴」pp.117-pp.147. 三浦市教育委員会
- 東原 正明・高野清豪・村瀬敏郎 1982 「Acromegaly を合併した fibrous dysplasia の 1 症例」『日本内科学会雑誌』71(9)



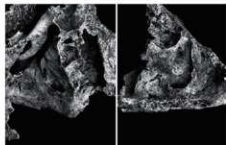
図版c SM-001 出土人骨 下肢骨 スケール 10cm



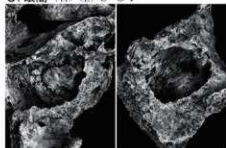
1. 上顎骨前面 (右/左) S=3/4



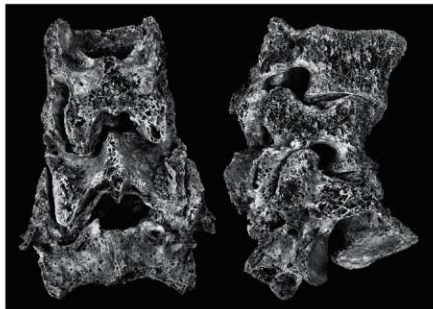
2. 眉間の膨隆状態 S=3/4



3. 眼窩 (右/左) S=3/4



4. 上顎洞内部 (右/左) S=3/4



5. 腰椎 S=3/4

図版 d SM-001 出土人骨 観察所見 (1)

pp.1264 ~ 1270. 日本内科学会

樋口 努・石井友行・竹之下康治・大塚秀一・川野芳春・岡増一郎 1990 「小児の線維性骨異形成症の2例」『日本口腔外科学雑誌』36(3) pp.712-716. 日本口腔外科学会

森本岩太郎・小片丘彦 1976 「非対称な下肢をもつ室町時代人骨」『聖マリアンナ医科大学雑誌』4(3) pp.432-441. 聖マリアンナ医科大学

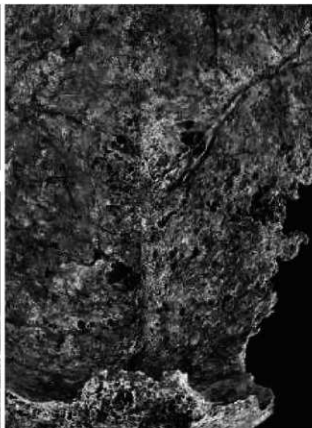
Lovejoy, C. Owen, R. S. Meindl, T. R. Pryzbeck, and Robert Mensforth 1985 Chronological Metamorphosis of the Auricular Surface of the Ilium: A New Method for the Determination of Adult Skeletal Age at Death. *American Journal of Physical Anthropology*, vol.68 pp.15-28.

Suzuki Takao 1981 Palaeopathological Evidence Suggesting Multiple Myeloma in a Skull from the Edo Period of Japan. *J. Anthrop. Soc. Nippon* 89(1) pp.107-114. 日本人類学会

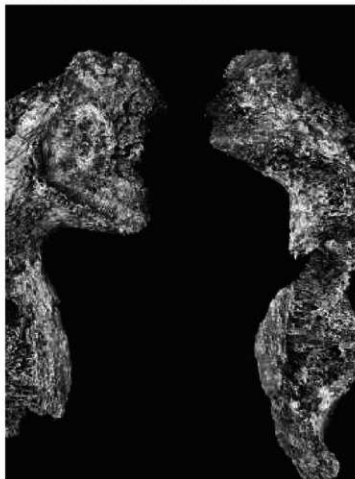
Suzuki Hisashi, Baba Hisao, and Kamiya Toshiro 1986 Morphological Data on the Skeleton of a Giant Sumo Wrestler, the Late Mr. Dewagatake. *J. Anthrop. Soc. Nippon* 94(4) pp.441-468. 日本人類学会



1. 尺骨L近位端 (内面-前面-外面) S=3/4



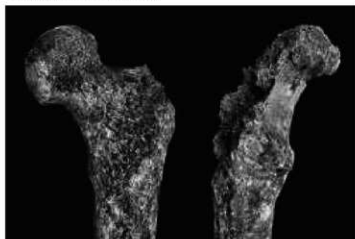
4. 頭蓋内板面 S=3/4



2. 寛骨前面 (右/左) S=3/4



5. 脛骨L後面にみる刃物傷 S=5/4



3. 大腿骨近位端後面 (右/左) S=1/2

第 20 表 土器観察表

() 推定値 < > 現存値

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI001	1	土師器	椀	11径 (12.0)	40%	微砕粒中量 赤褐色 スロリ色	内面 橙 (7.5YR6/6)	内面 ハラナテ	
				底径 3.3			外面 におい黄褐色 (10YR6/4)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 5.1			焼成 良好	底外面 ケズリ	
SI002	1	土師器	椀	11径 10.3	100%	砕粒中量 赤母粒子 少量	内面 橙 (5YR6/6)	内面 ハラナテ	内外面赤彩
				底径 4.3			外面 明赤彩 (5YR5/8)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 9.0			焼成 良好	底外面 ケズリ	
SI002	2	土師器	椀	11径 (10.2)	55%	微砕粒多量	内面 橙 (5YR6/8)	内面 ナテ ミガキ	内外面赤彩
				底径 4.3			外面 明黄褐色 (10YR6/6)	外面 ケズリ後ナテ	
				器高 7.1			焼成 良好	底外面 ケズリ	
SI002	3	土師器	高杯	11径 17.4	70%	砕粒少量	内面 におい赤褐色 (2.5YR5/4)	内面 ナテ ミガキ	内外面赤彩
				底径 13.2			外面 におい赤褐色 (2.5YR5/4)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 15.0			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI002	4	土師器	高杯	11径 17.0	95%	微砕粒多量 黒色砂粒	内面 明赤彩 (5YR5/6)	内面 ナテ ミガキ	内外面赤彩
				底径 7.8			外面 明赤彩 (2.5YR5/6)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 14.0			焼成 良好	底外面 -	
SI002	5	土師器	羹	11径 15.1	90%	微砕粒少量	内面 明黄褐色 (10YR6/6)	内面 ナテ	1層付近赤彩?
				底径 4.7			外面 明黄褐色 (10YR6/6)	外面 ナテ	
				器高 13.0			焼成 良好	底外面 ナテ	
SI002	6	土師器	盃	11径 -	90%	底部少量	内面 明黄褐色 (10YR6/6)	内面 ナテ (艶)	外面赤彩?・スス付着
				底径 3.3			外面 におい赤褐色 (5YR5/4)	外面 (ミガキ状) ナテ	
				器高 <18>			焼成 良好	底外面 ナテ	
SI002	7	土師器	羹	11径 (18.0)	11層部 25%	砕粒微量	内面 明黄褐色 (10YR7/6)	内面 ハケメ ナテ	外面スス付着
				底径 -			外面 明黄褐色 (10YR7/6)	外面 ハケメ	
				器高 <5.1>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI002	8	土師器	羹	11径 (14.9)	40%	砕粒少量	内面 明黄褐色 (10YR7/6)	内面 ハラナテ (ケズリ状)	外面スス付着
				底径 (6.9)			外面 におい黄褐色 (10YR5/4)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 (22.3)			焼成 良好	底外面 -	
SI002	9	土師器	羹	11径 (11.9)	11層部-Ⅱ 脚部 50%	砕粒中量 赤母粒子 微量	内面 灰黄褐色 (10YR4/2)	内面 ケズリ後ハラナテ ミガキ	11層部-Ⅱ脚部スス付着 被熱
				底径 -			外面 明黄褐色 (10YR7/6)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 <20.0>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI002	10	土師器	羹	11径 13.1	11層部-Ⅲ 脚部 40%	砕粒中量	内面 明黄褐色 (10YR7/6)	内面 ハラナテ	内面スス付着
				底径 -			外面 におい黄褐色 (10YR7/4)	外面 ケズリ後ナテ	
				器高 <13.5>			焼成 良好	底外面 -	
SI003	1	土師器	椀	11径 11.9	99%	微砕粒少量	内面 明赤彩 (2.5YR5/6)	内面 ハラナテ	内外面赤彩
				底径 4.0			外面 明黄褐色 (10YR7/6)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 5.3			焼成 良好	底外面 ケズリ	
SI003	2	土師器	椀	11径 (9.4)	80%	微砕粒少量	内面 明赤彩 (2.5YR5/6)	内面 ハラナテ	内外面赤彩
				底径 3.0			外面 明赤彩 (2.5YR5/6)	外面 ケズリ後ナテ ミガキ	
				器高 6.1			焼成 良好	底外面 ナテ	
SI003	3	土師器	椀	11径 7.7	85%	微砕粒微量	内面 浅黄 (2.5Y7/4)	内面 ナテ	内面一部赤彩
				底径 3.7			外面 浅黄 (2.5Y7/4)	外面 ケズリ後ナテ	
				器高 5.4			焼成 良好	底外面 ナテ	
SI003	4	土師器	椀	11径 (15.5)	11層部 25%	砕粒少量	内面 におい黄褐色 (10YR6/3)	内面 ハラナテ	
				底径 -			外面 におい黄褐色 (10YR5/3)	外面 ケズリ後ナテ	
				器高 <15>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI003	5	土師器	高杯	11径 13.1	杯部 95%	微砕粒少量	内面 明赤彩 (2.5YR5/6)	内面 ナテ ミガキ	胎土赤く発色
				底径 -			外面 橙 (2.5YR6/8)	外面 ケズリ後ナテ	
				器高 <5.0>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI003	6	土師器	高杯	11径 -	脚部 95%	微砕粒中量	内面 橙 (5YR7/8)	内面 ナテ	外面・内面裾部赤彩 被熱
				底径 13.8			外面 明黄褐色 (10YR7/6)	外面 ミガキ ナテ	
				器高 <7.0>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI003	7	土師器	高杯	11径 -	脚部 70%	砕粒中量	内面 明黄褐色 (10YR7/6)	内面 ナテ	外面赤彩
				底径 16.0			外面 におい赤褐色 (5YR5/4)	外面 ナテ	
				器高 <9.1>			焼成 良好	底外面 -	
SI003	8	土師器	高杯	11径 -	底部 55%	微砕粒微量	内面 橙 (2.5YR6/6)	内面 ナテ	外面赤彩?
				底径 14.4			外面 橙 (2.5YR6/6)	外面 ナテ	
				器高 <2.5>			焼成 不良	底外面 -	
SI003	9	土師器	埴	11径 (5.5)	40%	微砕粒少量	内面 暗灰黄 (2.5Y5/2)	内面 ハラナテ	胎土白み
				底径 -			外面 浅黄 (2.5Y7/4)	外面 ナテ ミガキ	
				器高 <7.3>			焼成 やや不貞	底外面 -	
SI003	10	土師器	埴	11径 -	脚部-Ⅱ 部 70%	微砕粒中量	内面 明赤彩 (2.5YR5/6)	内面 ナテ	胎土赤く発色
				底径 3.1			外面 橙 (5YR7/8)	外面 ナテ ミガキ	
				器高 <10.2>			焼成 やや不貞	底外面 ナテ ミガキ	
SI003	11	土師器	羹	11径 17.4	95%	砕粒中量	内面 明黄褐色 (2.5Y7/6)	内面 ハラナテ	外面スス付着・黒炭 被熱
				底径 4.5			外面 浅黄 (2.5Y7/4)	外面 ケズリ後ナテ (ハケメ状) ミガキ	
				器高 25.6			焼成 良好	底外面 ケズリ	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI003	12	土師器	羹	11径 - 底径 5.4 器高 <12>	底部 70%	砂粒少量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 にふい焼 (7.5YR5/4) 底外面 やや不具	内面 ナデミガキ ケズリ後ナデ 押滅	内面コゲ・外面スス付着
SI004	1	土師器	高杯	11径 16.7 底径 - 器高 <6.7>	杯部 90%	微砂粒中量 赤色スコリア	内面 橙 (7.5YR6/6) 外面 橙 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデミガキ ケズリ後ナデ	外面スス付着
SI004	2	土師器	高杯	11径 - 底径 - 器高 <10.2>	杯下部 - 脚部 70%	微砂粒少量	内面 にふい焼 (7.5YR5/3) 外面 赤褐 (2.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI004	3	土師器	埴	11径 - 底径 (1.7) 器高 <5.4>	胴部~底部 45%	砂粒多量	内面 橙 (2.5YR6/8) 外面 橙 (7.5YR7/6) 焼成 やや不具	内面 ヘラナデ ケズリ後ナデ 底外面 ナデ	内面特に赤く発色
SI004	4	土師器	埴	11径 - 底径 4.5 器高 11.4	70%	微砂粒中量	内面 にふい赤褐 (5YR5/4) 外面 明赤褐 (2.5YR5/6) 焼成 やや不具	内面 ナデ ケズリ後ナデミガキ ケズリ後ナデミガキ	外面赤彩・スス?付着
SI004	5	土師器	羹	11径 (14.4) 底径 - 器高 <24.4>	70%	砂粒中量 白色砂粒	内面 明黄褐 (2.5YR7/6) 外面 浅黄 (2.5Y7/4) 焼成 やや不具	内面 ヘラナデミガキ ケズリ後ナデミガキ 底外面 -	外面スス付着・ 外面焼熱
SI004	6	土師器	羹	11径 10.7 底径 - 器高 <9.3>	11脚部 - 胴部 80%	砂粒多量	内面 明赤褐 (5YR5/6) 外面 赤褐 (2.5YR4/6) 焼成 やや不具	内面 ナデミガキ ケズリ後ナデミガキ 底外面 -	胎土赤く発色
SI005	1	土師器	觶	11径 10.1 底径 4.2 器高 5.9	95%	砂粒中量	内面 明黄褐 (10YR7/6) 外面 明黄褐 (10YR7/6) 焼成 やや不具	内面 ケズリ ケズリミガキ 底外面 ケズリ	内外面赤彩 外面スス?付着
SI005	2	土師器	觶	11径 (12.3) 底径 (4.6) 器高 6.9	60%	微砂粒中量	内面 明赤褐 (2.5YR5/6) 外面 明赤褐 (2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデミガキ ケズリミガキ 底外面 ケズリ	内外面赤彩 底部磨り出し成形
SI005	3	土師器	高杯	11径 21.2 底径 - 器高 <6.7>	杯部 80%	微砂粒中量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 黄橙 (7.5YR7/8) 焼成 やや不具	内面 ハケメ 外面 ハケメナデ 底外面 -	内外面赤彩 焼熱 (部分的に黒色)
SI005	4	土師器	高杯	11径 - 底径 (13.7) 器高 <12.3>	60%	微砂粒少量	内面 橙 (7.5YR6/6) 外面 にふい焼 (7.5YR5/4) 焼成 やや不具	内面 ナデミガキ 外面 ナデミガキ 底外面 -	内外面赤彩?
SI005	5	土師器	高杯	11径 - 底径 16.1 器高 <8.4>	脚部 95%	微砂粒少量	内面 にふい黄橙 (10YR6/4) 外面 にふい黄橙 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ケズリナデミガキ 外面 ミガキ 底外面 -	内外面赤彩?
SI005	6	土師器	埴	11径 9.1 底径 4.9 器高 9.3	80%	微砂粒中量	内面 橙 (2.5YR6/8) 外面 明赤褐 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ケズリ後ナデミガキ 底外面 ケズリ	内外面赤彩? 焼熱 (部分的に黒色)
SI005	7	土師器	埴	11径 11.7 底径 1.9 器高 12.1	70%	微砂粒少量	内面 橙 (7.5YR6/6) 外面 橙 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデミガキ 底外面 ケズリ	外面黒斑
SI005	8	土師器	埴	11径 11.0 底径 - 器高 <5.9>	11脚部 - 胴部 85%	微砂粒中量	内面 明黄褐 (10YR7/6) 外面 黄橙 (7.5YR7/8) 焼成 良好	内面 ナデミガキ 外面 ナデミガキ 底外面 -	
SI005	9	土師器	埴	11径 - 底径 5.1 器高 <4.4>	胴部~底部 100%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 にふい焼 (7.5YR6/4) 外面 橙 (5YR6/6) 焼成 やや不具	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 ケズリ	外面スス付着
SI005	10	土師器	羹	11径 14.6 底径 - 器高 <12.7>	11脚部 - 胴部 40%	微砂粒微量 白色針状物質	内面 明黄褐 (10YR6/6) 外面 黑褐 (10YR3/1) 焼成 やや不具	内面 ハケメヘラナデ 外面 ハケメミガキナデ 底外面 -	外面スス付着
SI005	11	土師器	羹	11径 - 底径 - 器高 <15.4>	底部 40%	微砂粒中量	内面 明赤褐 (5YR5/6) 外面 赤褐 (5YR4/6) 焼成 やや不具	内面 ヘラナデ 外面 ケズリミガキ 底外面 -	12と同じ個体か 外面スス付着
SI005	12	土師器	羹	11径 - 底径 (5.6) 器高 <3.9>	底部 20%	微砂粒中量	内面 黑褐 (10YR3/1) 外面 黑褐 (10YR3/2) 焼成 やや不具	内面 ナデミガキ 外面 ケズリ 底外面 ケズリ	11と同じ個体か 底部平らでない
SI006	1	土師器	羹	11径 - 底径 - 器高 <7.2>	11脚部破片	微砂粒少量	内面 灰黄 (2.5Y3/2) 外面 灰黄褐 (10YR5/2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデケズリ 底外面 -	内外面スス付着
SI007	1	土師器	高杯	11径 - 底径 (12.2) 器高 <4.6>	底部 20%	微砂粒中量	内面 明黄褐 (10YR7/6) 外面 橙 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	外面赤彩
SI007	2	土師器	埴	11径 8.7 底径 - 器高 <10.5>	11脚部~胴部 40%	微砂粒微量	内面 橙 (2.5YR6/6) 外面 橙 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI007	3	土師器	埴	11径 (8.8) 底径 - 器高 <3.0>	11脚部破片	微砂粒中量	内面 橙 (5YR6/6) 外面 橙 (7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ケズリ後ナデミガキ 底外面 -	
SI007	4	土師器	埴	11径 - 底径 2.7 器高 <2.9>	底部 65%	微砂粒中量	内面 にふい黄橙 (10YR7/4) 外面 明黄褐 (10YR7/6) 焼成 やや不具	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデミガキ 底外面 ケズリ後ナデミガキ	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考		
SI007	5	土師器	埴	11径	- 底部50%	砂粒少量 白色針状物質	内面	黒 (10YR12/1)	内面	ケズリ後ナデ	外面黒塗
				底径 (3.4)			外面	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <2.1>			焼成	やや不貞	底外面	ケズリ後ナデ	
SI007	6	土師器	甕	11径	- 底部90%	砂粒中量	内面	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	内面	ケズリ	
				底径 4.8			外面	黒褐色 (10YR3/2)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <1.8>			焼成	やや不貞	底外面	ケズリ	
SI008	1	土師器	高杯	11径 16.2	杯部80%	微砂粒中量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	-	内外面赤彩
				底径 -			外面	にぶい橙 (2.5YR6/4)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <3.9>			焼成	良好	底外面	-	
SI009	1	土師器	椀	11径 11.8	100%	微砂粒多量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径 3.0			外面	橙 (2.5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 6.7			焼成	良好	底外面	ケズリ後ナデ	
SI009	2	土師器	杯	11径 13.4	70%	微砂粒中量 白色針状物質	内面	にぶい赤黒 (5YR5/4)	内面	ナデ (ミガキ状)	内外面赤彩
				底径 4.6			外面	にぶい橙 (5YR6/4)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 4.2			焼成	良好	底外面	ケズリ後ナデ	
SI009	3	土師器	杯	11径 (13.8)	25%	微砂粒多量	内面	橙 (5YR6/8)	内面	ヘラナデ	内外面赤彩 平底? 跡なつくり
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/8)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <4.6>			焼成	良好	底外面	-	
SI009	4	土師器	高杯	11径 (16.0)	杯部20%	微砂粒中量 白色針状物質	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ナデ (ミガキ状)	内外面赤彩
				底径 -			外面	橙 (5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <4.9>			焼成	良好	底外面	-	
SI009	5	土師器	埴	11径 (6.7)	45%	微砂粒中量	内面	黄灰 (2.5Y4/1)	内面	ヘラナデ	内外面黒色帯びる
				底径 2.8			外面	灰 (5Y4/1)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 4.8			焼成	良好	底外面	ケズリ	
SI009	6	土師器	埴	11径 9.2	100%	微砂粒中量 白色針状物質	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ナデ	外面・内面11脚部赤彩
				底径 2.4			外面	橙 (7.5YR6/6)	外面	ケズリ後ヘラナデ	
				器高 10.4			焼成	良好	底外面	ケズリ	
SI009	7	土師器	埴	11径 8.9	100%	微砂粒少量 白色針状物質	内面	橙 (2.5YR6/6)	内面	ヘラナデ	外面・内面11脚部赤彩
				底径 3.0			外面	橙 (5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 10.2			焼成	良好	底外面	ケズリ	
SI010	1	土師器	高杯	11径 -	- 70%	微砂粒微量	内面	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	内面	強いナデ	内外面黒塗
				底径 10.6			外面	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <11.3>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	2	土師器	高杯	11径 (19.2)	55%	微砂粒微量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ ミガキ	内外面赤彩
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面	ナデ	
				器高 <12.1>			焼成	不貞	底外面	-	
SI010	3	土師器	高杯	11径 20.6	杯部95%	微砂粒多量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 <7.5>			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	4	土師器	高杯	11径 20.1	杯部70%	微砂粒少量 白色針状物質	内面	にぶい赤黒 (2.5YR5/4)	内面	ヘラナデ ミガキ	内外面赤彩? 内外面スス付着
				底径 -			外面	にぶい赤黒 (2.5YR5/4)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 <6.8>			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	5	土師器	高杯	11径 20.9	杯部90%	微砂粒少量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ ミガキ	
				底径 -			外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面	ナデ (光沢あり)	
				器高 <7.1>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	6	土師器	高杯	11径 21.3	杯部60%	微砂粒中量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	
				底径 -			外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面	ナデ	
				器高 <7.6>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	7	土師器	高杯	11径 12.9	杯部70%	微砂粒微量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ナデ ミガキ	内外面赤彩?
				底径 -			外面	橙 (5YR6/6)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 <7.0>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	8	土師器	高杯	11径 (18.5)	杯部70%	微砂粒微量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 <6.0>			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	9	土師器	高杯	11径 (16.8)	杯部50%	微砂粒少量 白色針状物質	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ ミガキ	内外面赤彩
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 <4.7>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	10	土師器	高杯	11径 -	脚部75%	砂粒少量	内面	橙 (2.5YR6/8)	内面	ナデ	外面赤彩?
				底径 (14.0)			外面	橙 (2.5YR6/8)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <7.7>			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	11	土師器	高杯	11径 -	脚部60%	微砂粒微量	内面	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	内面	ナデ	外面赤彩
				底径 (15.9)			外面	にぶい赤黒 (2.5YR5/4)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <9.3>			焼成	良好	底外面	-	
SI010	12	土師器	高杯	11径 -	脚部 100%	微砂粒多量	内面	橙 (2.5YR6/8)	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径 12.6			外面	橙 (2.5YR6/8)	外面	ナデ ミガキ	
				器高 8.6			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	13	土師器	高杯	11径 -	脚部- 部60%	砂粒中量	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ケズリ ナデ	外面赤彩・スス付着
				底径 (13.2)			外面	にぶい赤黒 (5YR5/4)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <6.4>			焼成	やや不貞	底外面	-	
SI010	14	土師器	高杯	11径 -	脚部80%	砂粒少量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデケズリ	内外面赤彩
				底径 -			外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 <9.2>			焼成	良好	底外面	-	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考				
SI010	15	土師器	高杯	11径	- 脚部 90%	砂粒多量	内面	橙 (5YR6/8)	内面	ナデ	外面赤彩 胎土赤く発色		
				底径			-	外面	明赤釉 (2.5YR5/8)	外面		ケズリ後ナデミガキ	
				器高 <9.4>			-	底外面	良好	底外面		-	
SI010	16	土師器	高杯	11径	- 脚部	微砂粒微量	内面	にぶい黄釉 (10YR5/3)	内面	強いナデ	外面赤彩? 内外面スス付着		
				底径			- 100%	外面	にぶい黄釉 (10YR6/4)	外面		ケズリ後ナデミガキ	
				器高 <9.7>			-	底外面	やや不貞	底外面		-	
SI010	17	土師器	高杯	11径	- 脚部 80%	砂粒多量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ナデ	外面赤彩		
				底径			-	外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面		ケズリ後ナデミガキ	
				器高 <6.4>			-	底外面	良好	底外面		-	
SI010	18	土師器	高杯	11径	- 脚部 70%	微砂粒少量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	外面赤彩		
				底径			-	外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面		ケズリ後ナデ	
				器高 <7.9>			-	底外面	良好	底外面		-	
SI010	19	土師器	高杯	11径	- 脚部	微砂粒少量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	胎土赤く発色		
				底径			-	外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面		ケズリ後ナデミガキ	
				器高 <6.9>			- 100%	底外面	良好	底外面		-	
SI010	20	土師器	高杯	11径	- 脚部~胴部 80%	微砂粒多量	内面	にぶい黄釉 (10YR6/4)	内面	ナデ	内面赤彩 外面黒灰		
				底径			13.6	外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面		ナデ	
				器高 <4.5>			-	底外面	良好	底外面		-	
SI010	21	土師器	高杯	11径	- 胴部	砂粒少量	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ケズリナデ	内外面スス付着 一部焼熟		
				底径			13.6	外面	橙 (7.5YR6/6)	外面		ケズリ後ミガキ	
				器高 <5.1>			- 100%	底外面	良好	底外面		-	
SI010	22	土師器	高杯	11径	- 胴部 20%	微砂粒微量	内面	にぶい黄釉 (10YR5/3)	内面	ナデ	外面赤彩		
				底径			(11.7)	外面	にぶい赤釉 (2.5YR5/4)	外面		ナデ	
				器高 <1.6>			-	底外面	良好	底外面		-	
SI010	23	土師器	碗	11径	13.7	60%	微砂粒少量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ヘラナデ	内外面黒灰	
				底径				-	外面	明黄釉 (10YR6/6)	外面		ケズリ後ナデ
				器高 6.6				-	底外面	ケズリ後ナデ	底外面		-
SI010	24	土師器	碗	11径	(12.1)	11脚部~ 胴部 40%	微砂粒中量	内面	にぶい黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	外面黒灰	
				底径				-	外面	にぶい黄釉 (10YR6/6)	外面		ケズリ後ナデミガキ
				器高 <5.7>				-	底外面	良好	底外面		-
SI010	25	土師器	鉢	11径	(10.1)	70%	微砂粒少量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤彩 スス付着	
				底径				(4.6)	外面	にぶい赤釉 (5YR5/4)	外面		ケズリ後ナデ
				器高 8.4				-	底外面	良好	底外面		ケズリ
SI010	26	土師器	鉢	11径	(15.6)	45%	微砂粒微量 赤色スコリア	内面	にぶい黄釉 (10YR5/4)	内面	ヘラナデ		
				底径				6.7	外面	にぶい黄釉 (10YR5/4)	外面		ケズリ後ナデ
				器高 9.6				-	底外面	やや不貞	底外面		無調整
SI010	27	土師器	鉢	11径	13.6	80%	微砂粒少量	内面	明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデヘラナデ	内外面スス付着	
				底径				5.1	外面	明赤釉 (2.5YR5/6)	外面		ケズリ後ナデミガキ
				器高 10.7				-	底外面	良好	底外面		ケズリ後ナデ
SI010	28	ミニチュア土器 壺?	11径	(5.8)	11脚部~ 胴部 70%	砂粒少量	内面	にぶい黄釉 (10YR6/4)	内面	ナデ			
							底径	-	外面	にぶい黄釉 (10YR6/4)		外面	ナデ
							器高 3.7	-	底外面	やや不貞		底外面	-
SI010	29	ミニチュア土器 壺	11径	4.1	95%	微砂粒少量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	底部高台?		
							底径	4.3	外面	明黄釉 (10YR6/6)		外面	銅突文 ナデ
							器高 4.5	-	底外面	良好		底外面	ナデ
SI010	30	ミニチュア土器 壺	11径	(7.7)	50%	砂粒中量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ			
							底径	-	外面	明黄釉 (10YR6/6)		外面	ケズリ後ナデ
							器高 8.3	-	底外面	良好		底外面	-
SI010	31	ミニチュア土器 壺	11径	15.4	50%	微砂粒中量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	外面黒灰		
							底径	(3.6)	外面	明黄釉 (10YR6/6)		外面	赤サミナデ
							器高 7.3	-	底外面	良好		底外面	ナデ
SI010	32	ミニチュア土器 壺	11径	(8.9)	60%	砂粒微量	内面	明黄釉 (10YR6/6)	内面	ナデ	外面黒灰 底部高台		
							底径	4.7	外面	にぶい黄釉 (10YR5/4)		外面	ナデ
							器高 6.8	-	底外面	やや不貞		底外面	ナデ
SI010	33	ミニチュア土器 壺	11径	(6.9)	70%	砂粒少量	内面	にぶい黄釉 (10YR5/4)	内面	ナデ	内外面黒灰 底部高台?		
							底径	4.6	外面	にぶい黄釉 (10YR5/4)		外面	ナデ
							器高 5.7	-	底外面	良好		底外面	ナデ
SI010	34	ミニチュア土器 壺	11径	(6.5)	70%	精緻 微砂粒少量	内面	にぶい黄釉 (10YR6/4)	内面	ナデ			
							底径	(3.9)	外面	にぶい黄釉 (10YR6/4)		外面	ナデ
							器高 6.9	-	底外面	やや不貞		底外面	無調整
SI010	35	ミニチュア土器 壺	11径	(8.2)	11脚部~ 胴部 60%	砂粒微量	内面	にぶい黄釉 (10YR5/4)	内面	ナデ	内外面黒灰		
							底径	-	外面	にぶい黄釉 (10YR5/4)		外面	ナデ
							器高 <3.9>	-	底外面	やや不貞		底外面	-
SI010	36	ミニチュア土器 壺	11径	8.3	90%	砂粒少量	内面	にぶい黄釉 (10YR6/4)	内面	ナデ	外面黒灰		
							底径	5.2	外面	にぶい黄釉 (10YR6/4)		外面	ナデ
							器高 6.1	-	底外面	良好		底外面	ナデ
SI010	37	ミニチュア土器 壺	11径	(8.0)	60%	微砂粒少量	内面	にぶい黄釉 (10YR5/4)	内面	ナデ	外面黒灰		
							底径	5.1	外面	にぶい黄釉 (10YR5/4)		外面	ナデ
							器高 5.5	-	底外面	やや不貞		底外面	無調整
SI010	38	ミニチュア土器 壺	11径	-	胴部 50%	微砂粒少量	内面	灰黄釉 (10YR5/2)	内面	ナデ			
							底径	-	外面	灰黄釉 (10YR5/2)		外面	ナデ
							器高 <4.3>	-	底外面	やや不貞		底外面	-

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	埋存度	胎土	色調・焼成	技法	備考		
SI000	39	ミニチュア土器・壺?	口径	—	—	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	ナデ	
			底径	5.1			外面	にふい黄澄 (10YR6/4)	外面	ナデ	
			器高	<1.1>			焼成	やや不良	底外面	ナデ	
SI000	40	ミニチュア土器・壺?	口径	—	—	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	強いヘラナデ	外面ス? 付着
			底径	2.1			外面	にふい黄澄 (10YR5/4)	外面	ケズリ後ナデ	
			器高	<2.7>			焼成	良好	底外面	ケズリ後ナデ	
SI000	41	ミニチュア土器・壺	口径	(10.9)	80%	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	強いナデ	内外面黒炭 二重口縁の模倣?
			底径	4.3			外面	にふい黄澄 (10YR6/4)	外面	ナデ	
			器高	7.6			焼成	良好	底外面	ナデ	
SI000	42	土師器	埋	—	—	—	内面	明黄褐色 (10YR6/6)	内面	ナデ	外面赤影・黒炭
			口径	—			外面	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外面	ナデ ミガキ	
			底径	4.1			焼成	良好	底外面	ナデ	
SI000	43	土師器	埋	—	—	—	内面	明赤褐色 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤影
			口径	12.0			外面	橙 (2.5YR6/6)	外面	ナデ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI000	44	土師器	埋	—	—	—	内面	にふい赤褐色 (2.5YR5/4)	内面	ナデ	内面 (一部) 外面赤影 内外面ス? 付着?
			口径	9.1			外面	橙 (2.5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
			底径	3.6			焼成	やや不良	底外面	ナデ	
SI000	45	土師器	埋	—	—	—	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ナデ	内外面赤影
			口径	10.3			外面	明黄褐色 (10YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
			底径	3.2			焼成	良好	底外面	ナデ	
SI000	46	土師器	埋	—	—	—	内面	にふい黄褐色 (10YR5/4)	内面	ナデ	
			口径	11.3			外面	にふい黄澄 (10YR6/4)	外面	ケズリ後ナデ	
			底径	4.8			焼成	やや不良	底外面	ナデ	
SI000	47	土師器	埋	—	—	—	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ナデ	胴部打き?
			口径	11.3			外面	明褐色 (7.5YR5/6)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
			底径	4.3			焼成	やや不良	底外面	ケズリ	
SI000	48	土師器	埋	—	—	—	内面	明黄褐色 (10YR6/6)	内面	ナデ	内外面赤影 内外面ス? 付着
			口径	(11.1)			外面	橙 (2.5YR6/8)	外面	ケズリ後ナデ ミガキ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI000	49	土師器	甕	—	—	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	ケズリ	内外面黒炭
			口径	(13.8)			外面	にふい黄澄 (10YR6/4)	外面	ハケメ ケズリ ナデ	
			底径	—			焼成	やや不良	底外面	—	
SI000	50	土師器	甕	—	—	—	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ヘラナデ	内外面ス? 付着
			口径	(24.0)			外面	橙 (7.5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
			底径	—			焼成	やや不良	底外面	—	
SI000	51	土師器	壺	—	—	—	内面	明黄褐色 (10YR6/6)	内面	ナデ	二重口縁 内外面黒炭
			口径	18.3			外面	明黄褐色 (10YR6/6)	外面	ナデ 筋痕	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI000	52	土師器	甕	—	—	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	ハケメ ケズリ	
			口径	14.8			外面	にふい黄澄 (10YR6/4)	外面	ハケメ ヘラナデ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI000	53	土師器	甕	—	—	—	内面	にふい黄褐色 (10YR5/4)	内面	ナデ	内外面ス? 付着 被熱して赤化
			口径	9.1			外面	橙 (7.5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
			底径	—			焼成	やや不良	底外面	ナデ	
SI000	54	土師器	壺	—	—	—	内面	陶灰 (10YR4/1)	内面	ナデ	内外面黒炭?
			口径	(13.6)			外面	陶灰 (10YR4/1)	外面	ナデ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI000	55	土師器	甕	—	—	—	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ヘラナデ	
			口径	(12.0)			外面	明赤褐色 (2.5YR5/6)	外面	弱いハケメ	
			底径	—			焼成	やや不良	底外面	—	
SI011	1	土師器	椀	—	—	—	内面	明赤褐色 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	底部台状 内外面黒炭
			口径	9.2			外面	にふい黄褐色 (10YR5/4)	外面	ケズリ後ナデ	
			底径	2.7			焼成	やや不良	底外面	ナデ	
SI012	1	土師器	壺	—	—	—	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ココナデ ミガキ	内外面赤影
			口径	(11.2)			外面	にふい橙 (7.5YR5/4)	外面	ミガキ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI012	2	土師器	壺	—	—	—	内面	にふい黄澄 (10YR6/4)	内面	ナデ	棒状浮文 右段口縁 被熱?
			口径	(14.8)			外面	にふい橙 (7.5YR5/4)	外面	ナデ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	—	
SI012	3	土師器	壺	—	—	—	内面	にふい橙 (7.5YR6/4)	内面	ナデ	
			口径	6.0			外面	黒褐色 (10YR3/1)	外面	ケズリ後ミガキ	
			底径	—			焼成	良好	底外面	ケズリ後ミガキ	
SI012	4	土師器	壺	—	—	—	内面	黄褐色 (2.5Y4/19)	内面	ミガキ	外面赤影
			口径	6.2			外面	にふい橙 (7.5YR5/3)	外面	ミガキ	
			底径	—			焼成	やや不良	底外面	ミガキ	
SI012	5	土師器	甕	—	—	—	内面	にふい赤褐色 (5YR5/4)	内面	ヘラナデ	
			口径	(12.3)			外面	にふい赤褐色 (5YR5/4)	外面	強いナデ	
			底径	6.0			焼成	良好	底外面	ナデ ミガキ	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-013	1	土師器	甕	口径 (15.0)	1層部 25%	砂粒少量	内面 灰青帯 (10YR5/4)	内面 ナデ	外面ハナテは筋有り 焼熱
				底径 -			外面 帯 (7.5YR6/6)	外面 ナズリ後ナデ	
				器高 <18.0>			焼成 良好	底外面 -	
SI-013	2	土師器	椀	口径 9.0	90%	精緻	内面 靑灰 (10YR4/1)	内面 ナデ	外面やや光沢あり
				底径 3.6			外面 オリーブ黒 (5Y3/1)	外面 ナズリナデ	
				器高 6.6			焼成 やや不具	底外面 ナズリ	
SI-015	1	土師器	椀	口径 (12.7)	40%	微砂粒微量	内面 灰青帯 (2.5YR5/4)	内面 ナデ ミガキ	内外面赤彩
				底径 4.4			外面 灰青帯 (2.5YR5/4)	外面 ナズリ後ナデ	
				器高 5.6			焼成 やや不具	底外面 ナズリ後ナデ	
SI-015	2	土師器	椀	口径 11.0	100%	砂粒多量	内面 灰青帯 (10YR6/4)	内面 ナデ	焼熱
				底径 2.9			外面 明黄帯 (10YR7/6)	外面 ナズリ	
				器高 6.5			焼成 良好	底外面 ナデ	
SI-015	3	土師器	鉢	口径 9.7	70%	砂粒中量	内面 帯 (2.5YR6/8)	内面 ハラナデ	内面暗褐色物質付着
				底径 -			外面 灰青帯 (10YR6/4)	外面 ナズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <10.5>			焼成 やや不具	底外面 -	
SI-015	4	土師器	高杯	口径 -	脚部 20%	微砂粒微量	内面 明黄帯 (10YR7/6)	内面 ナデ	外面赤彩
				底径 -			外面 明赤帯 (2.5YR5/6)	外面 ナデ ミガキ	
				器高 <8.2>			焼成 良好	底外面 -	
SI-015	5	土師器	埴	口径 (8.7)	1層部 40%	微砂粒中量 白色針状物質	内面 明赤帯 (2.5YR5/6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 明赤帯 (2.5YR5/6)	外面 ナデ	
				器高 <3.5>			焼成 良好	底外面 -	
SI-015	6	土師器	埴	口径 12.6	95%	砂粒中量	内面 灰青帯 (10YR6/4)	内面 ナデ	内外面赤彩 内面暗褐色物質付着 外面スス付着
				底径 3.3			外面 灰青帯 (10YR6/4)	外面 ナズリ後ナデ ミガキ	
				器高 16.3			焼成 良好	底外面 ナズリ	
SI-015	7	土師器	甕	口径 (12.3)	1層部 20%	砂粒中量	内面 灰青帯 (10YR4/2)	内面 ハラナデ	強いハナメナデ
				底径 -			外面 灰青帯 (10YR4/2)	外面 強いハナメナデ	
				器高 <6.7>			焼成 やや不具	底外面 -	
SI-015	8	土師器	甕	口径 (14.3)	1層部 60%	砂粒少量	内面 灰青帯 (10YR6/4)	内面 ナズリ後ミガキ	内外面スス付着
				底径 -			外面 灰青帯 (10YR6/4)	外面 ナズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <12.3>			焼成 やや不具	底外面 -	
SI-016	1	土師器	壺	口径 -	脚部破片	微砂粒少量 白色針状物質	内面 赤 (10R5/6)	内面 滑沢肌文	内面赤彩
				底径 -			外面 帯 (5YR6/6)	外面 ミガキ	
				器高 <7.6>			焼成 良好	底外面 -	
SI-016	2	土師器	甕	口径 -	1層部破片	白色粒子	内面 灰青帯 (10YR6/4)	内面 ココナデ	突入押捺 外面スス付着
				底径 -			外面 灰青帯 (7.5YR5/4)	外面 ハラナデ	
				器高 <3.2>			焼成 良好	底外面 -	
SI-016	3	土師器	甕	口径 -	1層部破片	砂粒少量	内面 明黄帯 (10YR7/6)	内面 ココナデ	突入押捺 外面スス付着
				底径 -			外面 灰青帯 (10YR6/3)	外面 ナデ (ハナメ状)	
				器高 <2.3>			焼成 やや不具	底外面 -	
SI-016	4	土師器	甕	口径 -	脚部 40%	砂粒少量 白色針状物質	内面 明赤帯 (2.5YR4/6)	内面 ハラナデ	連続刺突列
				底径 -			外面 明赤帯 (2.5YR4/6)	外面 ハラナデ	
				器高 <7.5>			焼成 良好	底外面 -	
SI-016	5	土師器	小甕	口径 -	1層部 20%	砂粒少量	内面 赤帯 (2.5YR4/6)	内面 ハラナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 赤帯 (2.5YR4/6)	外面 ナズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <5.1>			焼成 良好	底外面 -	
SI-016	6	土師器	壺	口径 -	100%	砂粒中量	内面 明黄帯 (10YR7/6)	内面 ナデ	外面赤彩？ 外面黒肌
				底径 3.2			外面 帯 (5YR6/6)	外面 ナズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <1.7>			焼成 良好	底外面 ナズリ後ナデ	
SI-016	7	ミニチュア土師	器	口径 -	底部 50%	砂粒少量	内面 明黄帯 (2.5YR5/2)	内面 ナデ	内面焼熱？
				底径 (3.6)			外面 灰青帯 (10YR6/4)	外面 ナデ	
				器高 <3.1>			焼成 良好	底外面 ナデ？	
SI-016	8	ミニチュア土師	器	口径 -	底部 35%	砂粒少量	内面 明黄帯 (10YR7/6)	内面 ナデ	ナデ
				底径 (3.4)			外面 明黄帯 (10YR7/6)	外面 ハラナデ	
				器高 <2.2>			焼成 良好	底外面 ナデ	
SI-019	1	土師器	壺	口径 10.9	100%	微砂粒少量	内面 明赤帯 (2.5YR5/6)	内面 強いハラナデ	内外面赤彩 内面黒色粒子多数
				底径 6.0			外面 明赤帯 (2.5YR5/6)	外面 ナズリ後ミガキ	
				器高 7.5			焼成 良好	底外面 ハラナデ	
SI-019	2	土師器	高杯	口径 17.1	70%	白色微粒	内面 赤帯 (10R6/8)	内面 ハラナデ	内外面赤彩
				底径 (10.9)			外面 赤帯 (10R5/4)	外面 ナズリ後ナデ	
				器高 13.6			焼成 良好	底外面 -	
SI-019	3	土師器	高杯	口径 17.5	杯部 90%	砂粒中量	内面 明赤帯 (2.5YR5/6)	内面 ナデ ミガキ	内外面赤彩、外面？ 焼熱
				底径 -			外面 灰青帯 (7.5YR5/4)	外面 ナズリ後ナデ	
				器高 <5.1>			焼成 やや不具	底外面 -	
SI-019	4	土師器	高杯	口径 -	脚部 60%	微砂粒少量	内面 灰青帯 (7.5YR6/4)	内面 ナデ	外面赤彩
				底径 (11.7)			外面 灰青帯 (5YR5/4)	外面 ナデ	
				器高 <6.7>			焼成 良好	底外面 -	
SI-019	5	土師器	壺	口径 -	40%	微砂粒少量	内面 帯 (7.5YR6/6)	内面 ナデ	1層部外面赤彩
				底径 2.6			外面 明赤帯 (2.5YR5/6)	外面 ナデ ミガキ	
				器高 <6.9>			焼成 良好	底外面 ナデ	
SI-019	6	土師器	甕	口径 (16.0)	80%	微砂粒中量	内面 灰青帯 (10YR6/3)	内面 ハラナデ	外面スス付着
				底径 6.4			外面 灰青帯 (2.5Y6/2)	外面 ナズリ後ナデ	
				器高 25.7			焼成 良好	底外面 ナズリ	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-019	7	土師器	甕	11径 11.6	70%	微砕粒中量	内面 灰黄肌 (10YR5-2)	内面 -	外面 スス付着 被熱
				底径 4.0			外面 灰肌 (7.5YR4-1)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 17.4			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-019	8	土師器	甕	11径 14.2	70%	微砕粒中量	内面 橙 (5YR6-6)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 -			外面 にふい橙 (7.5YR6/4)	外面 ハケメ	
				器高 <16.4>			内面 良好	底外面 ナデ	
SI-019	9	土師器	甕	11径 (14.4)	60%	微砕粒中量	内面 にふい橙 (7.5YR6/4)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 6.4			外面 灰肌 (7.5YR5-2)	外面 ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 23.4			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-019	10	土師器	甕	11径 -	底部 90%	微砕粒微量	内面 にふい橙 (7.5YR5/4)	内面 ナデ	外面 スス付着
				底径 7.0			外面 灰肌 (7.5YR4-2)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <8.5>			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-019	11	土師器	甕	11径 -	60%	微砕粒中量	内面 にふい橙 (7.5YR6/4)	内面 ハラナデ ミガキ	11線部交互押捺キザミ 胴部連続刺突
				底径 6.6			外面 にふい黄橙 (10YR7/4)	外面 ナデ	
				器高 27.1			内面 良好	底外面 木炭痕	
SI-021	1	土師器	椀	11径 13.1	95%	砕粒少量	内面 赤 (10YR5-6)	内面 ハラナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 赤 (10YR5-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 8.6			内面 良好	底外面 磨滅	
SI-021	2	土師器	高杯	11径 (17.2)	90%	砕粒少量	内面 赤肌 (2.5YR4-6)	内面 ナデ・ハラナデ	内外面赤彩・摩滅
				底径 -			外面 明赤肌 (2.5YR5-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <13.9>			内面 白色砂粒	底外面 -	
SI-021	3	土師器	高杯	11径 -	杯部 40%	微砕粒少量	内面 橙 (2.5YR6-6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 橙 (2.5YR6-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <7.7>			内面 良好	底外面 -	
SI-021	4	土師器	高杯	11径 -	脚部 100%	微砕粒少量	内面 橙 (7.5YR6-6)	内面 ハラナデ	外面赤彩
				底径 13.2			外面 赤肌 (2.5YR4-6)	外面 ハラナデ ミガキ	
				器高 <8.9>			内面 良好	底外面 -	
SI-021	5	土師器	埴	11径 -	杯部 100%	砕粒少量	内面 灰黄 (2.5Y6-2)	内面 ハラナデ	外面赤彩
				底径 2.6			外面 明赤肌 (2.5YR5-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <2.3>			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-021	6	土師器	壺	11径 19.0	60%	砕粒中量	内面 橙 (2.5YR6-6)	内面 ナデ・ハラナデ	外面 スス付着
				底径 -			外面 明赤肌 (2.5YR5-6)	外面 ハラナデ ハケメ	
				器高 <27.5>			内面 良好	底外面 -	
SI-021	7	土師器	甕	11径 15.5	60%	微砕粒中量	内面 灰肌 (7.5YR5-2)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 6.6			外面 明赤肌 (2.5YR5-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 27.5			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-021	8	土師器	甕	11径 11.9	70%	微砕粒中量	内面 橙 (5YR7-6)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 (5.6)			外面 明赤肌 (5YR5-6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 18.3			内面 良好	底外面 ナデ	
SI-022	1	土師器	高杯	11径 (18.7)	杯部 55%	微砕粒少量	内面 明赤肌 (5YR5-6)	内面 ナデ ミガキ	内外面赤彩
				底径 -			外面 にふい黄橙 (2.5YR5/4)	外面 ナデ	
				器高 <5.4>			内面 良好	底外面 -	
SI-022	2	土師器	高杯	11径 (18.0)	杯部 70%	微砕粒中量	内面 明赤肌 (2.5YR5-6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 赤肌 (10B6-8)	外面 ハラナデ	
				器高 <5.3>			内面 良好	底外面 -	
SI-022	3	土師器	高杯	11径 -	脚部 60%	微砕粒少量	内面 短灰黄 (2.5Y5-2)	内面 ハラナデ	内面黒色地埋?
				底径 -			外面 にふい橙 (7.5YR6/4)	外面 ミガキ	
				器高 <9.6>			内面 良好	底外面 -	
SI-022	4	土師器	甕	11径 -	胴部 95%	微砕粒少量	内面 灰黄肌 (10YR5-2)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 3.2			外面 灰肌 (7.5YR5-4)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <12.4>			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-022	5	土師器	壺	11径 -	65%	微砕粒微量	内面 にふい黄橙 (10YR7/4)	内面 ハラナデ	内外面赤彩
				底径 3.6			外面 赤肌 (10B6/6)	外面 ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 <13.8>			内面 良好	底外面 木炭痕	
SI-022	6	土師器	甕	11径 (10.6)	45%	微砕粒中量	内面 にふい黄橙 (10YR7/4)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 (2.4)			外面 橙 (7.5YR6-6)	外面 ケズリ後ハラナデ ミガキ	
				器高 9.3			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-022	7	土師器	壺	11径 -	底部 50%	微砕粒少量	内面 にふい黄橙 (10YR7/4)	内面 強いハラナデ	外面 磨滅
				底径 (3.4)			外面 にふい黄橙 (10YR7/4)	外面 ケズリ	
				器高 <2.3>			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-022	8	土師器	甕	11径 -	胴部破片	微砕粒少量	内面 明灰黄 (2.5Y5-2)	内面 ハケメ後ナデ	外面 スス付着
				底径 -			外面 明灰黄 (2.5Y5-2)	外面 ハケメ後ナデ ミガキ	
				器高 <3.6>			内面 良好	底外面 -	
SI-022	9	土師器	壺	11径 (11.6)	11線部 - 胴部 25%	精緻	内面 明黄肌 (10YR7-6)	内面 ナデ	外面 スス付着
				底径 -			外面 明黄肌 (10YR7-6)	外面 ハラナデ後 ミガキ	
				器高 <7.6>			内面 良好	底外面 -	
SI-022	10	土師器	甕	11径 -	胴部 80%	微砕粒少量	内面 明肌 (7.5YR5-6)	内面 ハラナデ	外面 スス付着
				底径 (7.6)			外面 短灰 (7.5YR4-1)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <17.6>			内面 良好	底外面 ケズリ	
SI-023	1	土師器	壺	11径 (11.0)	11線部 25%	微砕粒少量	内面 明赤肌 (2.5YR5-6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 明赤肌 (2.5YR5-6)	外面 口コナデ	
				器高 <3.2>			内面 良好	底外面 -	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-023	2	土師器	壺	11径 10.8 底径 - 器高 <11.7>	11縁部 - 胴部 90%	精緻	内面 黒 (10YR4/4) 外面 赤黒 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 丁寧なナデ 底外面 -	外面・11縁内面赤彩
SI-023	3	土師器	壺	11径 16.05 底径 6.85 器高 26.6	90%	砂粒中量	内面 黒 (10YR4/4) 外面 赤黒 (2.5YR4/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 ナデ	外面黒褐色物質 跡みあり
SI-021	1	土師器	甗	11径 13.8 底径 3.6 器高 5.3	70%	砂粒多量	内面 濃い赤 (5YR7/4) 外面 灰黄赤 (10YR6/2) 焼成 良好	内面 ハウミガキ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 ナデ	
SI-021	2	土師器	杯	11径 (12.8) 底径 - 器高 4.5	50%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 赤黒 (10R6/6) 外面 濃い黄緑 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内面・11縁外面に赤彩
SI-021	3	土師器	壺	11径 (12.0) 底径 - 器高 <8.4>	11縁部 5% 胴部 25%	微砂粒微量	内面 濃い赤 (7.5YR6/4) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 顔面肌ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	外面・11縁内面赤彩
SI-021	4	土師器	甗	11径 - 底径 (3.0) 器高 <5.5>	胴部 20%	微砂粒少量	内面 濃い赤 (7.5YR6/4) 外面 赤 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI-021	5	土師器	壺	11径 10.0 底径 3.2 器高 9.8	60%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 濃い黄緑 (10YR6/3) 外面 赤 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 ナデ	外面・11縁内面赤彩
SI-021	6	土師器	壺	11径 (9.0) 底径 - 器高 <3.1>	11縁部 25%	微砂粒少量	内面 濃い赤黒 (2.5YR5/4) 外面 濃い赤黒 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI-021	7	土師器	壺	11径 - 底径 3.6 器高 <1.9>	底部	微砂粒中量	内面 濃い黄緑 (10YR7/4) 外面 濃い黄緑 (10YR6/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 ケズリ	
SI-021	8	土師器	壺	11径 - 底径 3.6 器高 <1.2>	底基 100%	微砂粒少量	内面 濃い赤 (7.5YR6/4) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 ナデ	外面赤彩
SI-021	9	土師器	壺	11径 (11.8) 底径 - 器高 <4.1>	11縁部 25%	微砂粒中量	内面 明赤黒 (2.5YR5/6) 外面 黒灰 (7.5YR4/1) 焼成 良好	内面 ココナデ 外面 ココナデ 底外面 -	内外面赤彩 外面スス?付着
SI-021	10	土師器	甗	11径 (9.5) 底径 - 器高 <4.8>	11縁部 30%	微砂粒微量	内面 濃い赤黒 (2.5YR5/4) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 やや不良	内面 ハウメナデ 外面 ハウメ 底外面 -	外面・11縁内面赤彩
SI-021	11	土師器	甗	11径 (16.0) 底径 - 器高 <2.2>	11縁部 30%	精緻	内面 濃い黄緑 (10YR7/4) 外面 濃い赤 (7.5YR6/4) 焼成 良好	内面 ケズリ 外面 顔面肌後ココナデ 底外面 -	
SI-025	1	土師器	甗	11径 14.6 底径 6.3 器高 20.4	95%	微砂粒微量 赤黒色スコリア粒	内面 濃い赤黒 (10YR5/4) 外面 濃い黄緑 (10YR5/4) 焼成 やや不良	内面 強いハウナデ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 -	外面スス付着
SI-025	2	土師器	甗	11径 11.8 底径 5.0 器高 17.6	95%	微砂粒中量	内面 黒 (2.5Y3/2) 外面 明黄赤 (2.5Y6/6) 焼成 良好	内面 ハウナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 ケズリ後ナデ	外面スス多量付着 内面黒褐色物質付着
SI-026	1	土師器	甗	11径 (14.6) 底径 - 器高 <5.4>	11縁部 - 胴部 35%	微砂粒多量 白色針状物質	内面 明赤黒 (2.5YR5/6) 外面 赤 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	2	土師器	杯	11径 (15.6) 底径 - 器高 <6.6>	25%	微砂粒少量	内面 明赤黒 (2.5YR5/6) 外面 明赤黒 (2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ナデ ミガキ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	3	土師器	甗	11径 (14.0) 底径 - 器高 <4.4>	11縁部 - 胴部 30%	微砂粒中量	内面 赤 (10R5/6) 外面 濃い赤黒 (5YR5/3) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	4	土師器	甗	11径 (18.0) 底径 - 器高 <5.7>	11縁部 - 胴部 25%	微砂粒微量	内面 赤 (10R5/8) 外面 赤 (10R5/8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	5	土師器	甗	11径 14.4 底径 - 器高 5.3	85%	微砂粒少量 赤黒色スコリア粒	内面 濃い赤黒 (2.5YR5/4) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 ケズリ後ナデ ミガキ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	6	土師器	壺	11径 (16.0) 底径 - 器高 <4.0>	11縁部 25%	砂粒少量	内面 濃い赤黒 (2.5YR5/4) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	7	土師器	高杯	11径 18.0 底径 - 器高 <5.1>	杯部 90%	微砂粒多量	内面 赤 (10R5/6) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	9と同一個体?
SI-026	8	土師器	高杯	11径 15.8 底径 - 器高 <4.3>	杯部 100%	微砂粒中量	内面 赤 (10R5/6) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ ミガキ 外面 強いナデ 底外面 -	内外面赤彩
SI-026	9	土師器	高杯	11径 - 底径 12.2 器高 <7.8>	脚部 100%	微砂粒多量 白色針状物質	内面 赤 (2.5YR6/8) 外面 赤 (10R5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ミガキ 底外面 -	外面赤彩 11と同一個体?

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考	
SI-026	10	土師器	甕	11径 (17.0)	11縁部	微砕粒少量	内面 橙 (7.5YR7/6)	内面 ナテ	外面スス?付着	
				底径 -			25%	外面 橙 (7.5YR7/6)		外面 ナテ
				器高 <5.3>			底径 18.7	外面 良好		底外面 -
SI-026	11	土師器	甕	11径 -	底部 35%	微砕粒少量 白色針状物質	内面 橙 (5YR7/8)	内面 ハラナテ	外面スス付着	
				底径 (7.8)			外面 にふい粉 (7.5YR7/4)	外面 ケズリ残ナテ		
				器高 <5.4>			底径 6.0	外面 良好		底外面 ハラナテ
SI-026	12	土師器	瓶	11径 18.7	80%	微砕粒少量	内面 にふい粉 (7.5YR5/3)	内面 強いハラナテ ミガキ	外面スス付着	
				底径 6.0			外面 灰濁 (7.5YR4/2)	外面 ケズリ残ナテ ミガキ		
				器高 26.7			底径 26.7	外面 良好		底外面 -
SI-026	13	土師器	甕	11径 -	底部	精細 白色針状物質	内面 にふい黄橙 (10YR7/4)	内面 ハラナテ	外面スス付着	
				底径 (8.0)			外面 にふい黄橙 (10YR5/3)	外面 ケズリ残ミガキ		
				器高 <4.2>			底径 4.4	外面 良好		底外面 ミガキ
SI-027	1	土師器	鉢	11径 10.4	85%	微砕粒多量	内面 灰灰 (10YR5/1)	内面 ハケメハラナテ ミガキ	外面スス付着	
				底径 4.4			外面 にふい粉 (7.5YR6/4)	外面 ケズリ残ナテ		
				器高 6.6			底径 6.6	外面 良好		底外面 ケズリ残ナテ
SI-027	2	土師器	鉢	11径 (11.6)	50%	微砕粒多量	内面 灰濁 (5YR4/1)	内面 強いハラナテ	外面赤彩	
				底径 4.8			外面 灰濁 (5YR5/2)	外面 ケズリ		
				器高 8.7			底径 8.7	外面 良好		底外面 ケズリ
SI-027	3	土師器	壺	11径 12.6	11縁+体 部 70%	微砕粒少量	内面 赤 (10R5/6)	内面 ナテ	外面・11縁内面赤彩	
				底径 -			70%	外面 にふい赤濁 (2.5YR5/4)		外面 ケズリ残ナテ
				器高 <12.0>			底径 9.5	外面 良好		底外面 -
SI-027	4	土師器	壺	11径 9.5	75%	微砕粒中量	内面 橙 (7.5YR6/6)	内面 ナテ	外面・11縁内面赤彩	
				底径 3.8			外面 にふい粉 (7.5YR5/4)	外面 ナテ		
				器高 4.5			底径 4.5	外面 良好		底外面 ケズリ
SI-027	5	土師器	壺	11径 10.0	100%	微砕粒微量	内面 橙 (2.5YR6/6)	内面 ナテ	外面・11縁内面赤彩	
				底径 3.8			外面 暗灰黄 (2.5Y5/2)	外面 ケズリ残ナテ ミガキ		
				器高 9.3			底径 9.3	外面 良好		底外面 ケズリ
SI-027	6	土師器	白付甕	11径 -	台部 50%	微砕粒多量	内面 灰濁 (10YR4/1)	内面 ナテ	底部磨滅	
				底径 (6.4)			外面 にふい黄橙 (10YR6/4)	外面 ケズリ残ナテ		
				器高 <5.6>			底径 16.4	外面 良好		底外面 -
SI-027	7	土師器	甕	11径 19.8	11縁部	微砕粒少量	内面 にふい黄橙 (10YR6/4)	内面 ハラナテハケメ	外面スス付着	
				底径 -			90%	外面 灰黄濁 (10YR5/2)		外面 ハケメナテ
				器高 <8.8>			底径 6.9	外面 良好		底外面 -
SI-027	8	土師器	甕	11径 19.0	60%	微砕粒多量	内面 明黄濁 (10YR6/6)	内面 ハラナテ後ミガキ	外面スス付着	
				底径 6.9			外面 明黄濁 (10YR6/6)	外面 ハケ残ナテ ミガキ		
				器高 25.6			底径 25.6	外面 良好		底外面 ケズリ残ミガキ
SI-027	9	土師器	甕	11径 (15.6)	40%	微砕粒多量	内面 明黄濁 (10YR6/6)	内面 ハラナテ	内外面スス付着	
				底径 (5.6)			外面 橙 (7.5YR6/6)	外面 ナテ ミガキハケメ		
				器高 24.2			底径 24.2	外面 良好		底外面 ナテ ミガキハケメ
SI-027	10	土師器	甕	11径 18.5	11縁部	微砕粒中量 白色針状物質	内面 にふい黄橙 (10YR6/4)	内面 ヨコナテ	内外面スス付着	
				底径 -			70%	外面 灰黄 (2.5Y6/2)		外面 ハケメナテ
				器高 <3.4>			底径 17.0	外面 良好		底外面 -
SI-027	11	土師器	甕	11径 17.0	90%	微砕粒中量	内面 にふい黄橙 (10YR5/3)	内面 強いハラナテ (ケズリ状)	外面スス付着	
				底径 5.0			外面 明黄濁 (10YR6/6)	外面 ケズリ残ナテ ミガキ		
				器高 23.2			底径 23.2	外面 良好		底外面 ケズリ残ナテ ミガキ
SI-027	12	土師器	甕	11径 -	底部	微砕粒多量	内面 黒濁 (7.5YR3/1)	内面 ナテ	内面スス付着	
				底径 6.0			100%	外面 にふい粉 (7.5YR6/4)		外面 ケズリ残ナテ ミガキ
				器高 <2.6>			底径 6.0	外面 良好		底外面 ケズリ
SI-028	1	土師器	器台	11径 -	胴部 50%	微砕粒中量	内面 にふい粉 (7.5YR6/3)	内面 ミガキハラナテ	外面スス付着	
				底径 -			50%	外面 にふい粉 (7.5YR6/4)		外面 ミガキ
				器高 <3.3>			底径 19.9	外面 良好		底外面 -
SI-028	2	土師器	高杯	11径 -	杯部破片	微砕粒微量	内面 明赤濁 (2.5YR5/6)	内面 ミガキ	内外面赤彩	
				底径 -			杯部破片	外面 明赤濁 (2.5YR5/6)		外面 ナテ
				器高 <1.9>			底径 19.9	外面 良好		底外面 -
SI-028	3	土師器	甕	11径 -	底部 30%	微砕粒少量	内面 にふい黄橙 (10YR6/4)	内面 ハラナテ	外面スス付着	
				底径 (4.6)			外面 にふい黄橙 (10YR6/2)	外面 ケズリ残ミガキ		
				器高 <2.3>			底径 4.7	外面 良好		底外面 ケズリ残ミガキ
SI-029	1	土師器	杯	11径 (13.8)	50%	微砕粒微量	内面 にふい粉 (7.5YR5/4)	内面 ミガキ	内外面黒色処理	
				底径 -			50%	外面 橙 (7.5YR6/6)		外面 ケズリ (ナテ状)
				器高 4.7			底径 4.7	外面 良好		底外面 ケズリ (ナテ状)
SI-029	2	土師器	杯	11径 12.2	100%	微砕粒少量 白色針状物質・赤褐色ス コリア粒	内面 にふい粉 (7.5YR5/3)	内面 ミガキ	内外面黒色処理	
				底径 -			100%	外面 明濁 (7.5YR5/6)		外面 ケズリ (ナテ状)
				器高 4.6			底径 4.6	外面 良好		底外面 ケズリ (ナテ状)
SI-029	3	土師器	杯	11径 (12.0)	50%	微砕粒微量	内面 にふい黄橙 (10YR6/4)	内面 ミガキ	内外面黒色処理	
				底径 -			50%	外面 明黄濁 (10YR6/6)		外面 ケズリ残ナテ ミガキ
				器高 3.6			底径 3.6	外面 良好		底外面 ケズリ残ナテ ミガキ
SI-029	4	土師器	甕	11径 14.9	100%	砕粒多量	内面 にふい粉 (7.5YR6/4)	内面 ハラナテ	内面スス付着	
				底径 7.8			外面 暗濁 (7.5YR3/3)	外面 ケズリ残ナテ		
				器高 12.5			底径 12.5	外面 良好		底外面 本黄橙 ナテ

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-029	5	土師器	甕	1口径 (20.4) 底径 6.0 器高 28.2	11縁部～ 底部60%	砂粒多量 小石	内面 濃い黄褐色 (10YR5-3) 外面 濃い黄褐色 (10YR4-3) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 カズリナテ 底外面 ナテ	外面黒底
SI-029	6	土師器	甕	1口径 (17.4) 底径 6.6 器高 22.6	70%	砂粒多量 小石 雲母粒	内面 濃い黄褐色 (10YR5-4) 外面 赤褐色 (5YR4/8) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 カズリ裁ナテ 底外面 ナテ	外面黒底
SI-030	1	土師器	甕	1口径 (10.4) 底径 3.5 器高 10.2	70%	微砂粒多量	内面 濃い靑 (7.5YR5/4) 外面 濃い靑 (7.5YR5/4) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ハケ後ミガキ 底外面 -	外面黒底
SI-030	2	土師器	高杯	1口径 14.9 底径 - 器高 <15.4>	杯部85%	精緻	内面 濃い赤褐色 (2.5Y4/4) 外面 赤 (10R1/8) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ミガキ 底外面 -	内外面赤彩
SI-030	3	土師器	甕	1口径 22.0 底径 - 器高 <15.4>	11縁部～ 底部85%	砂粒多量	内面 濃い靑 (7.5YR6/4) 外面 濃い靑 (7.5YR5/5) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ミガキ 底外面 -	1縁赤み
SI-030	4	土師器	甕	1口径 - 底径 6.0 器高 <13.2>	80%	砂粒多量	内面 濃い黄褐色 (10YR6-4) 外面 靑 (7.5YR7/6) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 ハケメナテ 底外面 ナテ	内面黒褐色物質付着 外面黒底
SI-030	5	土師器	甕	1口径 (14.4) 底径 - 器高 <12.3>	11縁部～ 杯部30%	微砂粒中量	内面 靑 (5YR6-6) 外面 濃い靑 (5YR6-4) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 カズリ裁ナテ 底外面 -	外面スス付着
SI-030	6	土師器	甕	1口径 (15.6) 底径 - 器高 <13.8>	11縁部 40%	微砂粒中量	内面 靑 (7.5YR6-6) 外面 靑 (5YR6-6) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 ハケ後ヨコナテ 底外面 -	
SI-030	7	土師器	甕	1口径 - 底径 6.6 器高 <2.4>	底面80%	微砂粒多量	内面 黄灰 (2.5Y4/1) 外面 濃い赤褐色 (5YR5-4) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 カズリ裁ナテ 底外面 -	
SI-030	8	土師器	甕	1口径 - 底径 5.8 器高 <4.3>	底面 100%	微砂粒中量	内面 靑 (7.5YR4-3) 外面 赤褐色 (5YR4-6) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 カズリ裁ナテ 底外面 ハウナテ	
SI-030	9	土師器	甕	1口径 - 底径 (6.6) 器高 <2.3>	底面50%	微砂粒少量	内面 暗黄灰 (2.5Y4-2) 外面 灰黄 (2.5Y6-2) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 ナテ 底外面 ナテ	外面黒底
SI-030	10	土師器	甕	1口径 - 底径 4.8 器高 <2.1>	底面 100%	微砂粒多量	内面 黒靑 (5YR2-1) 外面 赤褐色 (5YR4-6) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 カズリ裁ナテ 底外面 カズリ	
SI-030	11	土師器	甕	1口径 (15.6) 底径 5.4 器高 20.5	90%	微砂粒多量	内面 濃い黄褐色 (10YR6-4) 外面 黄褐色 (10YR5-6) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 カズリ 底外面 カズリ	内面黒褐色物質付着 外面黒底
SI-030	12	土師器	甕	1口径 20.4 底径 - 器高 <17.2>	11縁部～ 底部90%	微砂粒少量	内面 濃い黄褐色 (10YR5-4) 外面 濃い黄褐色 (10YR6-4) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ナテ 底外面 -	11縁部文舞捺 外面スス付着
SI-030	13	土師器	甕	1口径 20.2 底径 - 器高 <14.3>	11縁部～ 底部90%	微砂粒多量	内面 明黄褐色 (10YR6-6) 外面 濃い黄褐色 (10YR5-5) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ナテ 底外面 -	内外面スス付着
SI-031	1	土師器	高杯	1口径 - 底径 - 器高 <3.3>	杯部～ 底部片	砂粒多量 褐色片 褐色砂	内面 黒靑 (10YR2-2) 外面 赤 (2.5YR4-6) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 ミガキ 底外面 -	外面赤彩
SI-031	2	土師器	高杯	1口径 - 底径 (12.4) 器高 <27.7>	杯部60%	微砂粒微量	内面 明黄褐色 (10YR6-6) 外面 濃い黄褐色 (10YR6-4) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ミガキ 底外面 -	外面黒底
SI-031	3	土師器	高杯	1口径 - 底径 13.0 器高 <6.2>	杯部90%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 濃い黄褐色 (10YR6-2) 外面 濃い黄褐色 (10YR7-4) 焼成 良好	内面 ハウナテ 外面 ミガキ 底外面 -	内外面黒底
SI-031	4	土師器	甕	1口径 14.6 底径 - 器高 <11.0>	底部～ 底部90%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 明赤褐色 (2.5YR3-6) 外面 明赤褐色 (2.5YR5-6) 焼成 良好	内面 濃いハウナテ 外面 ナテ 微細文 底外面 ナテ	11縁部キザミ 内面白色物質付着
SI-031	5	土師器	甕	1口径 - 底径 6.6 器高 <22.7>	底部～ 底部80%	微砂粒多量	内面 靑 (7.5YR6-6) 外面 靑 (7.5YR6-6) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 ナテ 底外面 カズリ	
SI-031	6	土師器	甕	1口径 - 底径 - 器高 <9.3>	杯部40%	微砂粒中量	内面 明靑 (7.5YR5-6) 外面 靑 (7.5YR6-6) 焼成 良好	内面 ナテ 外面 ナテ 底外面 -	外面スス付着 刺突文
SI-031	7	土師器	甕	1口径 - 底径 7.0 器高 <12.7>	底部～ 底部70%	微砂粒少量	内面 明赤褐色 (2.5YR3-6) 外面 明赤褐色 (5YR5-6) 焼成 良好	内面 ナテ ミガキ 外面 ナテ ミガキ 底外面 ナテ	内面黒底 外面赤彩 脱熱
SI-032	1	土師器	杯	1口径 12.4 底径 7.4 器高 3.7	100%	微砂粒少量	内面 濃い黄褐色 (10YR6-4) 外面 靑 (7.5YR5-6) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 ナテ 底外面 カズリ	内外面油煙付着
SI-032	2	土師器	杯	1口径 12.4 底径 8.4 器高 3.8	90%	微砂粒少量	内面 靑 (7.5YR6-6) 外面 靑 (7.5YR6-6) 焼成 良好	内面 ミガキ 外面 カズリ裁ナテ ミガキ 底外面 カズリ	内面油煙付着 11縁部欠けあり

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成	技法	備考
SI-032	3	土師器	杯	11径 13.2	100%	微砂粒微量	内面 にふい貴 (25Y6/3)	内面 ロクロナデ	内外面油焼付着
				底径 10.1			外面 にふい貴 (25Y6/3)	外面 ロクロナデ 回転ケズリ	
				器高 3.1			底面 良好	底外面 回転糸切り後ケズリ	
SI-032	4	土師器	杯	11径 12.6	80%	微砂粒中量 赤褐色スコリア	内面 橙 (5YR6/6)	内面 ナデ	内外面油焼付着
				底径 7.6			外面 橙 (5YR6/6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 4.1			底面 良好	底外面 ケズリ後ナデ	
SI-032	5	土師器	杯	11径 13.4	100%	微砂粒中量 白色針状物質	内面 橙 (5YR6/6)	内面 ココナデ	
				底径 8.8			外面 橙 (7.5YR6/6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 4.5			底面 良好	底外面 ケズリ	
SI-032	6	土師器	杯	11径 13.6	100%	微砂粒中量	内面 明赤陶 (5YR5/6)	内面 ロクロナデ	11線部欠けあり
				底径 8.6			外面 明赤陶 (5YR5/6)	外面 ロクロナデ	
				器高 4.1			底面 良好	底外面 ケズリ	
SI-032	7	土師器	杯	11径 (14.2)	45%	微砂粒微量 赤褐色スコリア	内面 灰黄陶 (10YR4/2)	内面 ナデ (ミガキ状)	
				底径 (6.6)			外面 にふい貴 (7.5YR5/4)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 5.0			底面 良好	底外面 -	
SI-032	8	土師器	杯	11径 13.0	90%	微砂粒中量	内面 明黄陶 (10YR6/6)	内面 ナデ	
				底径 6.0			外面 明黄陶 (10YR6/6)	外面 ケズリ	
				器高 5.1			底面 良好	底外面 ケズリ	
SI-032	9	土師器	碗	11径 12.9	70%	微砂粒少量	内面 にふい貴陶 (10YR6/4)	内面 ミガキ	
				底径 7.8			外面 にふい貴陶 (10YR5/3)	外面 ケズリ後ナデ ミガキ	
				器高 6.8			底面 良好	底外面 ナデ	
SI-032	10	須恵器	鉢	11径 -	11線部破片	精緻	内面 灰 (5Y5/1)	内面 ロクロナデ	鉄線彫か
				底径 -			外面 灰 (5Y5/1)	外面 ロクロナデ	
				器高 <27>			底面 良好	底外面 -	
SI-032	11	土師器	鉢	11径 19.2	95%	白色微砂粒多量	内面 黒陶 (10YR3/1)	内面 ロクロナデ	鉄線彫
				底径 -			外面 黒陶 (10YR3/1)	外面 ロクロナデ	
				器高 3.1			底面 良好	底外面 回転ケズリ	
SI-032	12	土師器	羹	11径 (20.0)	11線部 50%	微砂粒少量	内面 にふい貴陶 (10YR5/3)	内面 ナデ	外面黒度
				底径 -			外面 にふい貴陶 (10YR5/3)	外面 ナデ	
				器高 <43>			底面 良好	底外面 -	
SI-032	13	土師器	羹	11径 20.8	11線部～ 脚部60%	微砂粒多量	内面 にふい貴陶 (10YR3/4)	内面 ヘラナデ	外面黒度
				底径 -			外面 にふい貴陶 (10YR5/4)	外面 ケズリ	
				器高 <138>			底面 良好	底外面 -	
SI-032	14	土師器	羹	11径 24.0	11線部 50%	微砂粒少量	内面 にふい貴 (7.5YR5/4)	内面 ヘラナデ	
				底径 -			外面 にふい貴 (7.5YR5/4)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <93>			底面 良好	底外面 -	
SI-032	15	土師器	羹	11径 21.4	100%	砂粒・小石少量	内面 にふい貴陶 (10YR6/4)	内面 強いヘラナデ	外面ス付着
				底径 6.0			外面 にふい貴陶 (10YR5/3)	外面 ヘラナデケズリ	
				器高 27.7			底面 良好	底外面 ケズリ	
SI-032	16	須恵器	羹	11径 -	胴部破片	微砂粒少量	内面 浅黄 (2.5Y7/3)	内面 ナデ 当て具	
				底径 -			外面 にふい貴陶 (10YR6/4)	外面 タタキ ケズリ	
				器高 <10.4>			底面 良好	底外面 -	
SI-032	17	土師器	羹	11径 -	底部90%	微砂粒中量	内面 黒陶 (10YR3/1)	内面 ナデ	
				底径 10.8			外面 にふい貴陶 (10YR5/4)	外面 ケズリ	
				器高 <29>			底面 良好	底外面 ケズリ	
SI-033	1	土師器	碗	11径 (11.1)	80%	微砂粒中量	内面 赤 (10R4/6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 赤陶 (10R4/4)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 5.45			底面 良好	底外面 ケズリ後ナデ	
SI-033	2	土師器	高杯	11径 -	脚部80%	微砂粒少量	内面 明黄陶 (10YR6/6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 12.0			外面 にふい貴陶 (2.5YR5/4)	外面 ナデ	
				器高 <90>			底面 良好	底外面 -	
SI-033	3	土師器	盃	11径 (13.4)	11線部 20%	微砂粒中量	内面 にふい貴陶 (10YR5/3)	内面 ナデ	
				底径 -			外面 明黄陶 (10YR6/6)	外面 ナデ	
				器高 <43>			底面 良好	底外面 -	
SI-034	1	須恵器	盃?	11径 (9.0)	11線部 10%	精緻	内面 龍灰黄 (2.5Y5/2)	内面 ロクロナデ	
				底径 -			外面 灰オリーブ (5Y4/2)	外面 ロクロナデ	
				器高 <32>			底面 良好	底外面 -	
SI-034	2	土師器	鉢	11径 8.1	100%	微砂粒中量	内面 赤陶 (2.5YR4/6)	内面 ヘラナデ ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 赤陶 (2.5YR4/6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 9.3			底面 良好	底外面 ケズリ後ナデ	
SI-034	3	土師器	高杯	11径 (18.8)	杯部25%	微砂粒少量 白色針状物質	内面 赤 (10R5/6)	内面 ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 明赤陶 (2.5YR5/6)	外面 ナデ	
				器高 <51>			底面 良好	底外面 -	
SI-034	4	土師器	高杯	11径 (10.6)	脚部20%	微砂粒少量	内面 黄陶 (10YR5/6)	内面 ケズリ ヘラナデ	外面底面赤彩
				底径 (10.6)			外面 にふい貴陶 (2.5YR4/4)	外面 ココナデ	
				器高 -			底面 良好	底外面 -	
SI-034	5	土師器	羹	11径 15.2	11線部 20%	微砂粒中量	内面 赤陶 (5YR4/6)	内面 ヘラナデ	器面赤く発色
				底径 -			外面 赤陶 (2.5YR4/6)	外面 ナデ	
				器高 <6.8>			底面 良好	底外面 -	
SI-034	6	土師器	羹	11径 -	胴部～底 部75%	微砂粒中量	内面 赤陶 (2.5YR4/6)	内面 ヘラナデ	内外面赤ス付着
				底径 7.0			外面 赤陶 (7.5YR6/6)	外面 ケズリ後ナデ	
				器高 <25.5>			底面 良好	底外面 ヘラナデ	

遺構No	No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	色調・焼成		技法		備考
							内面	外面	内面	外面	
SM001	1	磁器	碗	口径 10.0	100%	精製	内面	明緑灰 (7.5GY8/1)	内面	ロクロ	肥前系染付 草木文
				底径 4.2			外面	明緑灰 (7.5GY8/1)	外面	ロクロ	
				器高 5.9			焼成	良好	底外面	ロクロ	
SM001	2	磁器	碗	口径 10.0	100%	精製	内面	明緑灰 (7.5GY8/1)	内面	ロクロ	肥前系染付 樹文 高白質磁器
				底径 4.2			外面	明緑灰 (7.5GY8/1)	外面	ロクロ	
				器高 5.0			焼成	良好	底外面	ロクロ	
SM001	3	磁器	碗	口径 9.8	95%	精製	内面	灰白 (2.5GY8/1)	内面	ロクロ	肥前系染付 樹文 高白質磁器
				底径 4.1			外面	灰白 (2.5GY8/1)	外面	ロクロ	
				器高 5.1			焼成	良好	底外面	ロクロ	
遺構外 (SM001)	2	ミニチュア土器	底破片	口径 2.8	底部50%	微砂粒中量	内面	橙 (7.5YR6/6)	内面	ナデ	
				底径 -			外面	橙 (7.5YR6/6)	外面	ナデ	
				器高 <1.5>			焼成	良好	底外面	-	
遺構外 (19W-53)	3	ミニチュア土器	底破片	口径 -	底部50%	砂粒中量	内面	-	内面	-	
				底径 (2.9)			外面	明黄褐 (10YR6/6)	外面	ナデ	
				器高 <1.7>			焼成	良好	底外面	ナデ	
遺構外 (SM001)	4	土師器	甕	口径 -	口縁部破片	砂粒多量	内面	にふい黄橙 (10YR6/4)	内面	ナデ	口縁部指文互押捺 透刺斜文
				底径 -			外面	にふい黄橙 (10YR6/4)	外面	ナデ	
				器高 <7.7>			焼成	やや不良	底外面	-	
遺構外 (20W-34)	5	土師器	杯	口径 (10.0)	30%	微砂粒中量 白色針状物質	内面	赤褐 (5YR4/6)	内面	ヘラナデ	外面黒染
				底径 (4.0)			外面	赤褐 (5YR4/6)	外面	ケズリ後ナデミガキ	
				器高 5.7			焼成	良好	底外面	ケズリ	
遺構外 (SM001)	6	土師器	甕	口径 (21.8)	口縁部破片	微砂粒中量	内面	にふい黄橙 (10YR6/4)	内面	ナデ	外面黒染
				底径 -			外面	にふい黄橙 (10YR6/4)	外面	ハケメ	
				器高 <6.7>			焼成	良好	底外面	-	
遺構外 (SI001)	7	土師器	杯	口径 (12.1)	15%	微砂粒少量	内面	橙 (5YR6/6)	内面	ヘラナデ	
				底径 (7.0)			外面	橙 (5YR6/6)	外面	ケズリ後ナデ	
				器高 4.8			焼成	良好	底外面	ケズリ	
遺構外 (SI001)	8	須恵器	杯	口径 -	体部一底部25%	雲母粒少量	内面	灰黄 (2.5Y7/2)	内面	ロクロナデ	器面全体磨減
				底径 (8.0)			外面	灰黄 (2.5Y7/2)	外面	ロクロナデ	
				器高 <2.1>			焼成	良好 やや軟質	底外面	-	
遺構外 (SM001)	9	灰輪陶器	碗	口径 -	底破片	精製	内面	灰オリーブ (5Y5/2)	内面	ロクロナデ 灰輪	磁付高台 (三日月形)
				底径 (6.8)			外面	灰白 (7.5Y8/1)	外面	ロクロナデ	
				器高 <1.2>			焼成	良好	底外面	回転ケズリ?	
遺構外 (SM001)	10	灰輪陶器	碗	口径 -	底破片	精製	内面	灰オリーブ (5Y5/2)	内面	ロクロナデ 灰輪	磁付高台 (三日月形)
				底径 (7.0)			外面	灰白 (7.5Y8/1)	外面	ロクロナデ	
				器高 <2.0>			焼成	良好	底外面	回転ケズリ?	
遺構外 (SI031)	11	土師器	高台仕杯	口径 -	底部90%	白色微砂粒微量 白色針状物質	内面	黒 (N2/0)	内面	ミガキ	外面黒染 内面黒色処理
				底径 6.5			外面	にふい黄橙 (10YR6/4)	外面	ロクロナデ	
				器高 <2.3>			焼成	良好	底外面	回転糸切りナデ	

第 21 表 錢貨一覽表

No	遺構No	遺物No	銭貨名	計測値 (mm)					重量 (g)	備考
				縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚		
6	SM-001	006	寛永通寶	25.0	19.3	7.3	5.8	1.1	3.8	新寛永
7	SM-001	004	寛永通寶	24.6	19.4	6.9	5.8	1.3	3.3	古寛永
8	SM-001	14	寛永通寶	23.5	18.3	7.3	6.2	1.5	2.5	新寛永
9	SM-001	14	寛永通寶	23.6	19.7	7.3	6.4	1.5	2.5	新寛永
10	SM-001	14	寛永通寶	24.3	19.7	6.7	4.9	1.8	2.8	勝野杓
11	SM-001	14	寛永通寶	23.1	19.3	8.0	6.6	1.1	1.5	新寛永
12	SM-001	14	寛永通寶	23.1	18.1	8.5	-	1.5	3.8	2枚勝着

第4章 清水川台遺跡(2)

第1節 調査の概要(第144・145図、第22表、図版59)

清水川台遺跡については、昭和57年に工業団地造成事業区域に隣接する袖ヶ浦町(現 袖ヶ浦市)の町道建設に伴って財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を行い、昭和58年に報告書が刊行されている^[1]。工業団地造成事業区域内については、平成7年度に財団法人千葉県文化財センター(現 公益財団法人千葉県教育振興財団)が17,000㎡の範囲を発掘調査し、整理作業は財団法人君津都市文化財センターが行い、平成16年度に報告書が刊行されている^[2]。

今回報告する発掘調査は、平成26年6月2日～平成27年3月18日の期間に実施したもので、平成7年度に実施した発掘調査と区別するために、遺跡名を清水川台遺跡(2)とした。上層確認調査は、調査対象面積50,270㎡に対して、幅2mのトレンチを台地の傾斜に合わせて設定し、拡張部分も含めて調査対象面積の約12%に当たる6,132㎡の発掘を行った。その結果、古墳や方形周溝、竪穴住居跡を検出したことから、それらを中心とした4,500㎡について本調査を実施した。下層確認調査は、調査対象面積の2%を目安に2m×2mのグリッドを設定して行った。石器が複数出土したグリッドの周辺について、合計面

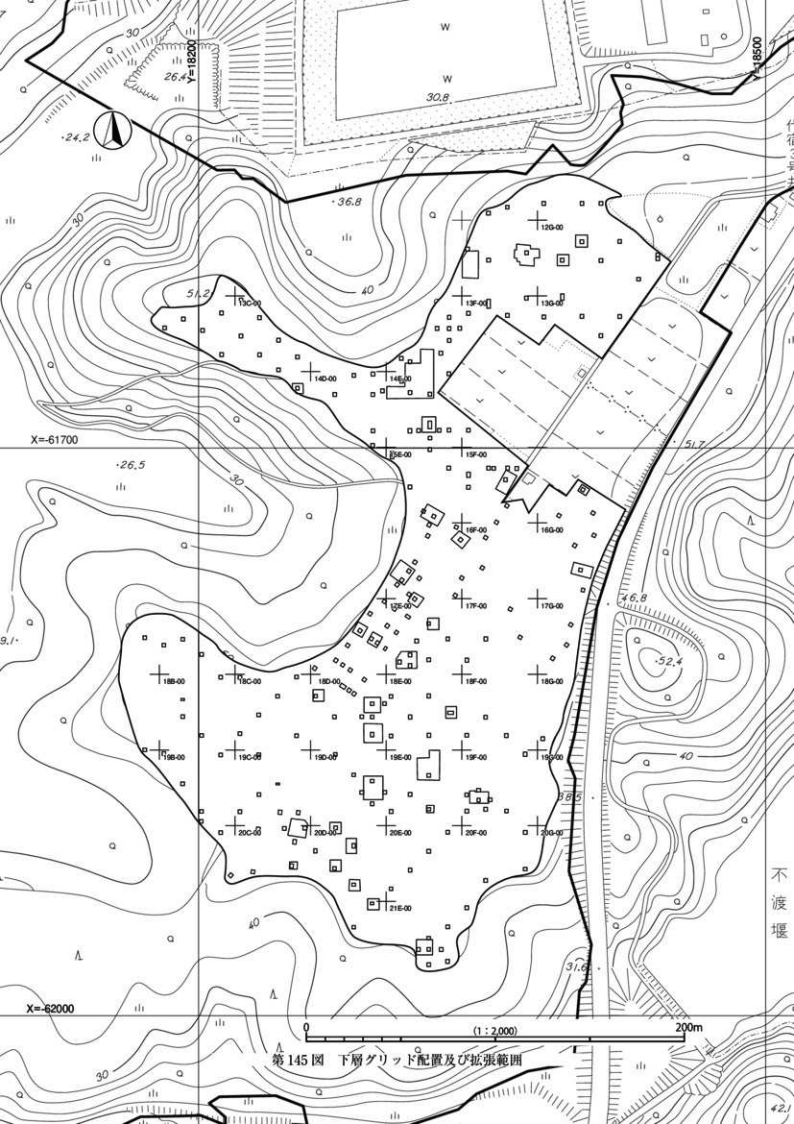
第22表 遺構一覧表

() 測定値 < > 現存値

遺構	種類	位置	主軸方向	主軸長 (m)	幅 (m)	床面積 (㎡)	炉・カマド 位置	貯蔵穴 位置	壁溝	時期	備考
SI-001	竪穴住居	19E-49	N-75°-W	3.68	4.12	14.00			無	古墳時代中期	
SI-002	竪穴住居	19E-98	N-34.5°-W	4.76	4.84	20.40	西寄り	北東角	無	古墳時代中期	
SI-003	竪穴住居	13B-35	N-12.5°-E	(3.10)	3.00	5.46	北壁	無	ほぼ全周	奈良時代	
SI-004	竪穴住居	14D-66	N-60°-W	4.40	4.32	15.84	西壁	無	ほぼ全周	奈良時代	
SI-005	竪穴住居	19F-10								古墳時代中期	かのみ検出
遺構	種類	位置	主軸方向	主軸長 (m)	幅 (m)	深さ (m)	時期	備考			
SM-001	円墳	20D-22		20.50	2.0	3.5	0.25～0.49	古墳時代中期	主体部未検出		
SS-001	方形区画溝	17F-46	N-42°-E	15.5～16.9	2.50	0.60～1.00	奈良時代	主体部未検出			
SS-002	方形区画溝	19F-60	N-3°-E	8.89	1.0～1.3	0.20～0.50	奈良時代	主体部未検出			
SS-003	方形区画溝	19F-83	N-34°-W	7.0～7.9	0.9～1.3	0.05～0.23	奈良時代	主体部未検出			
SK-001									欠番		
SK-002	土坑	18B-38	N-41°-E	1.36	1.00	0.46	古代以降				
SK-003	陥穴	19B-68	N-47.5°-W	1.60	1.22	0.95	縄文時代				
SK-004	土坑	18B-56	N-5°-E	2.06	1.58	0.55	古代以降				
SK-005a	陥穴	18B-10	N-37°-E	2.06	(1.10)	0.33	縄文時代				
SK-005b	陥穴	18B-10	N-40°-W	<1.74>	0.90	0.75	縄文時代				
SK-006	土坑	18D-40	N-68°-E	1.40	1.15	0.24	縄文時代				
SK-007	陥穴	18D-00	N-38°-E	1.50	1.24	2.25	縄文時代				
SK-008a	陥穴	14E-05	N-35°-E	2.90	<1.77>	1.62	縄文時代				
SK-008b	土坑	14E-05	N-68°-E	<1.10>	<0.32>	0.08	中世以降				
SK-008c	土坑	14E-05		(0.92)	(0.92)	0.16	中世以降				
SK-009	陥穴	18E-75	N-63°-E	<2.64>	<0.34>	0.87	縄文時代				
SK-010	土坑	20C-32		0.87	0.74	0.30	古代				
SK-011	土坑	20C-32		0.92	0.88	0.44	古代以降				
SK-012	土坑	20C-32		1.20	1.08	0.56	古代				
SK-013	土坑	20C-27	N-21.5°-W	1.46	1.23	0.33	古代以降				
SK-014	土坑	19F-83	N-41°-W	1.00	0.80	0.72	古代以降				
SK-015～17								欠番			
SK-018	陥穴	13D-90	N-39°-W	(2.30)	(0.67)	0.83	縄文時代				
SK-019	陥穴	12F-51	N-21°-E	1.90	1.34	2.58	縄文時代				
SK-020	土坑	19F-28		1.25	1.25	0.28	古代以降				
SK-021	土坑	14E-33	N-39°-W	1.43	0.87	0.42	古代以降				
SD-001	溝	18A～20C	N-52°-W	94.30	0.50～1.00	0.20～0.35	中・近世				



第144図 上層トレンチ配置・本調査範囲及び遺構分布



第145図 下層グリッド配置及び拡張範囲

積 1,930m³の本調査を実施した。

石器集中出土地点は台地の縁辺部に多く分布し、Ⅲ層～Ⅴ層を中心とする文化層とⅦ層～Ⅸ層を中心とする文化層に大別できる。その中でも第2黒色帯については下部のⅨa層とⅨc層、上部ではⅦ層の3文化層に、第1黒色帯以上ではⅤ層、Ⅳ層、Ⅲ層の3文化層に細分できる。

検出した上層遺構は、堅穴住居跡5軒、円墳1基、方形区画墓3基、土坑・陥穴・炉穴20基、溝1条である。全体としては、台地上に広く分散しているが、堅穴住居跡は、古墳時代中期の3軒が南東部分にまとまり、奈良時代の2軒が北西部に小さく伸びる舌状台地の基部と先端部に所在している。円墳と方形区画墓は南東から南側斜面に臨む位置に所在している。土坑などの多くは、西側の斜面に臨む台地縁辺部にある。

注1) 1983「清水川台遺跡発掘調査報告書」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第2集

2) 2005「千葉県袖ヶ浦市 袖ヶ浦椎の森工業団地埋蔵文化財調査報告書（第一分冊）清水川台遺跡Ⅱ（第二分冊）上大城遺跡Ⅱ（第三分冊）八重門田遺跡」財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第188集

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

第1ブロック（第147・148図、第23表、図版60・75）

調査区南側、台地平坦部に所在し、標高50mを測る。

石器の出土点数は合計13点を数え、分布範囲は南北4m、東西5mの範囲で収束する。分布密度は全体的に疎であるが、18D-37グリッド付近にやや集中区が認められる。石器の出土層位はⅦ層からⅨa層にかけてであり、特にⅨa層上面付近に偏差が認められる。

出土した石器13点の内容は、チャート製の礫1点の他は剥片石器である。流紋岩製の削器1点、黒色頁岩製、ホルンフェルス製の調整痕の認められる剥片がそれぞれ1点出土している。

使用される石材は、出土点数の割に多種であり、嶺岡産珪質頁岩を主体とし、黒色安山岩、流紋岩、黒色頁岩、ホルンフェルスが使用される。

遺物

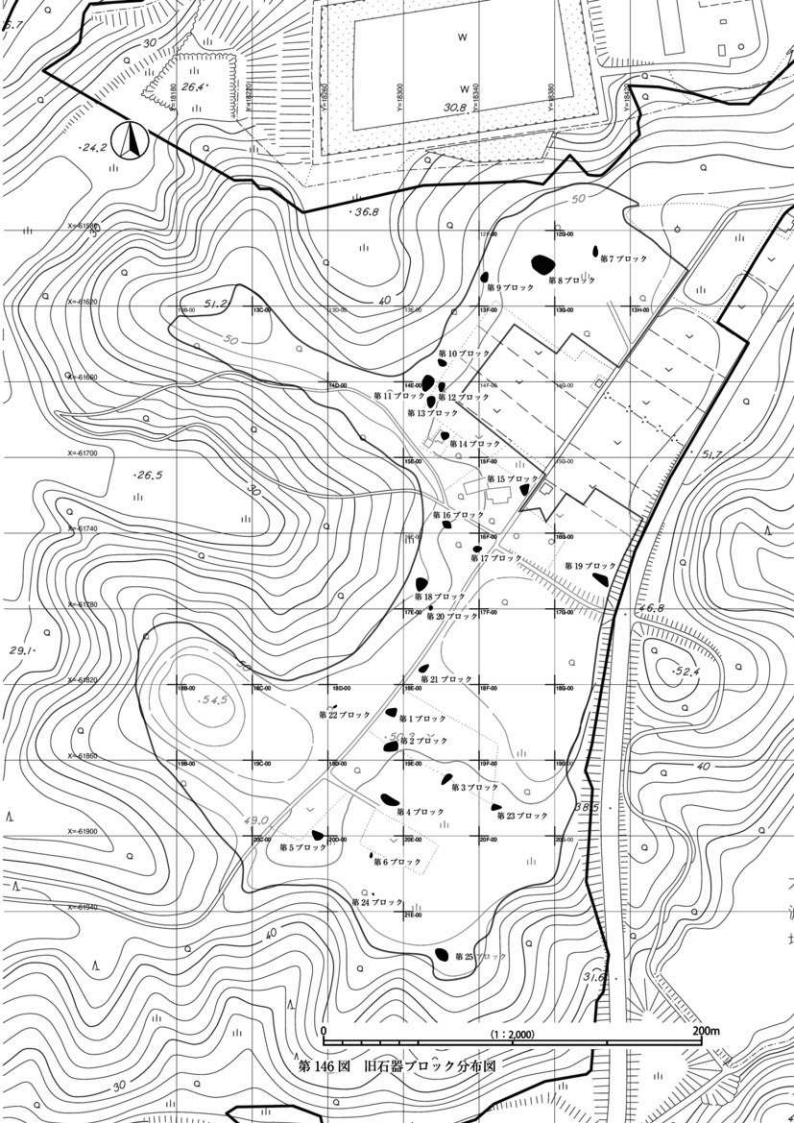
1は流紋岩製の削器である。部厚な横長剥片を素材とし、末端部と片側縁に対し背腹両面への調整が認められる。

2・3は調整痕の認められる剥片である。2は黒色頁岩製の大型剥片の打面を調整により除去し、さらに末端部付近に背面側からの調整が認められる。3はホルンフェルス製で、背面は原礫面で構成される。調整は左側縁の末端部付近及び末端部の背腹両面側に部分的ではあるが認められる。

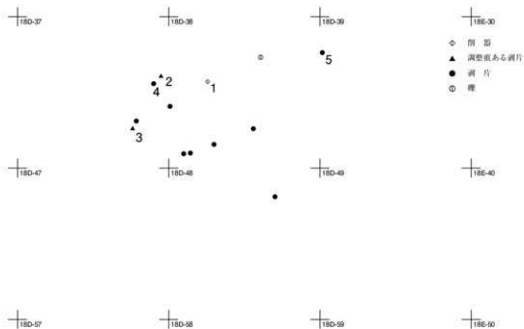
4は嶺岡産珪質頁岩製、5はホルンフェルス製の剥片である。両者とも不定形剥片で、背面は多方向からの剝離で構成される。

第23表 第1ブロック属性表

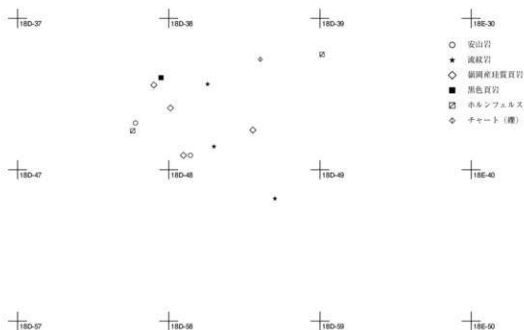
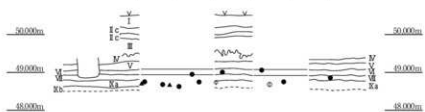
石種	層位	年代	遺物	属性	片	厚	長さ	幅	重量	最大径	最小径	厚さ	重量	年代	石種	属性
頁岩	18D-37	古	調整痕	調整痕	片	1.0	30.1	20.2	11.1	22.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	調整痕
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	22.1	21.7	7.7	22.7	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	20.0	23.0	14.0	4.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	調整痕	調整痕	片	1.0	44.0	41.0	14.0	21.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	調整痕
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	18.0	16.0	5.0	1.7	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	20.0	22.0	7.0	2.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	18.0	21.0	6.0	1.5	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	26.0	17.0	4.0	2.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	20.0	11.0	5.0	1.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	20.0	22.0	2.0	4.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	21.0	22.0	8.0	2.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器
頁岩	18D-37	古	削器	削器	片	1.0	4.0	2.0	1.0	6.0	4.0	0.02	0.02	18D-37	黒色頁岩	削器



第146図 旧石器ブロック分布図

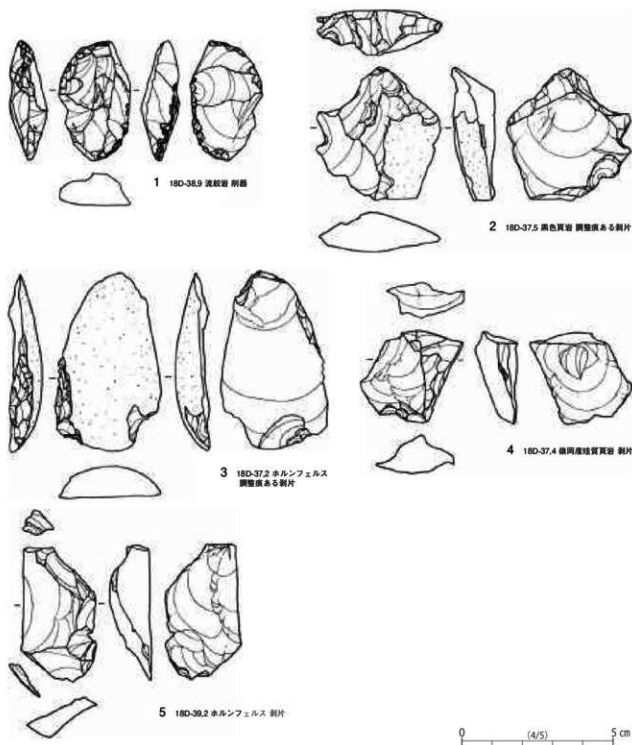


0 (1:100) 10m



0 (1:100) 10m

第147図 第1ブロック分布



第148図 第1ブロック遺物

第2ブロック（第149～151図、第24表、図版60・75・76）

調査区南側、台地平坦部に所在し、標高 50 m を測る。

出土した石器は剥片石器 26 点、礫石器 2 点の合計 28 点を数え、18 D-88 グリッドを中心に南北 4 m、東西 8 m の楕円形状に分布する。石器の出土層位はⅥ層下部からⅩ a 層にかけてであり、特にⅩ a 層上部に偏差が認められる。

石器組成は頁岩製、嶺岡産珪質頁岩製の礫それぞれ 1 点のほか、黒曜石製のナイフ形石器 2 点、嶺岡産珪質頁岩製の調整痕の認められる剥片 1 点を組成に含む。

使用される石材は嶺岡産珪質頁岩、黒曜石が主体となり、他の安山岩（トトロ石）、流紋岩、珪質頁岩、チャートは点数的に客体的である。第 2 ブロック内出土の黒曜石については透明度の高い石質であり、分析の結果全て信州和田峠産の黒曜石であることが判明した。

遺物

1・2 はナイフ形石器である。1 は大型の縦長剥片を素材とし、調整は両側縁に対し施される。腹面側からの調整が主体であるが、一部先端部に近い部位は腹面の稜から調整される。打面は無調整である。2 は小型の縦長剥片を素材とし、調整は片側縁のみに止まる。1 と同様に打面は無調整である。

3 から 7 は黒曜石製の剥片である。概して小型の縦長剥片であり、背面は上下両端からの剥離で構成される。特に 5・6 については六面体に近い形状であり、側面にも上下両端からの剥離が認められる。8 は安山岩（トトロ石）製の縦長剥片である。打面を広く設定して作出される。9・10 は嶺岡産珪質頁岩製であり、9 は打面側と末端部側が欠損している。10 は全体に薄い作りの剥片であり、原礫面を打面とし作出される。

11・12 は珪質頁岩製の接合資料である。両者とも剥片 2 点の接合である。11 は薄い作りの横長剥片で、同一打面から連続して作出される。12 も同様に同一打面から作出される。

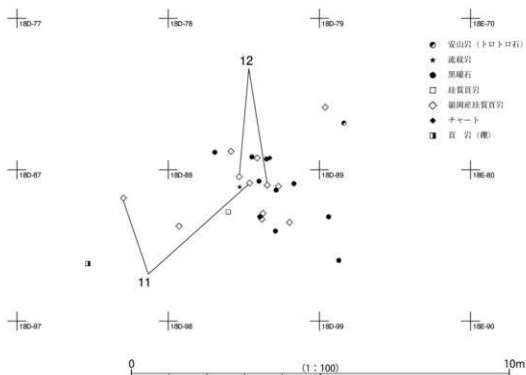
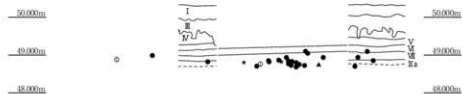
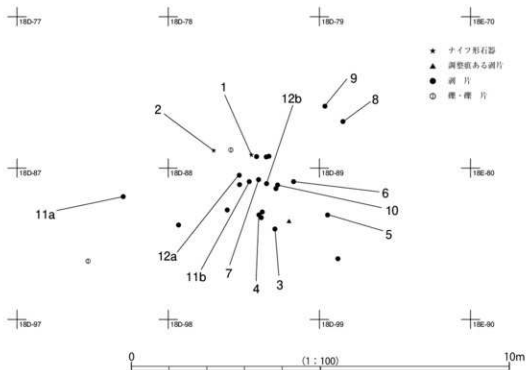
第3ブロック（第152～154図、第25表、図版60・76・77）

調査区南側、台地平坦部に所在し、標高 50 m を測る。

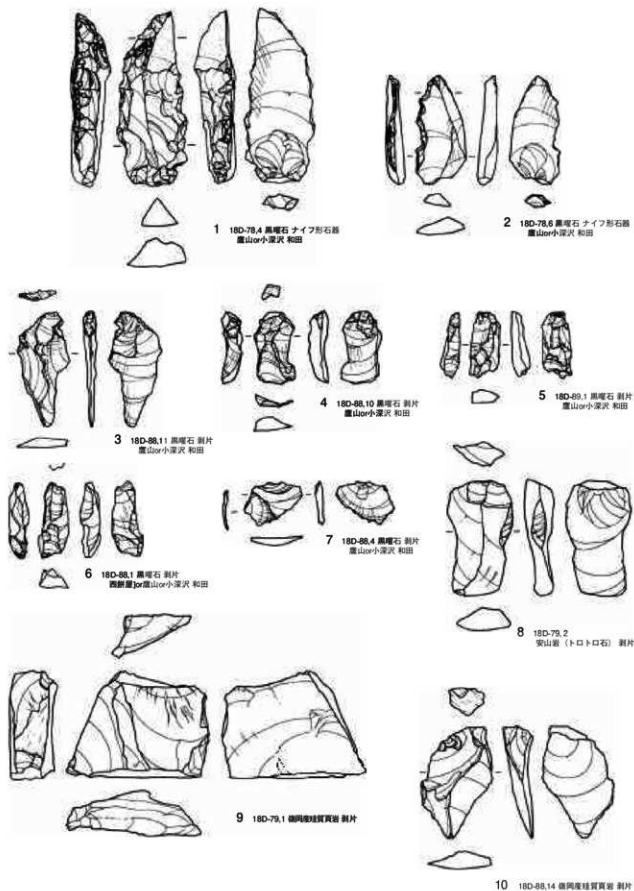
石器の出土点数は合計 27 点を数え、19E-26 グリッド杭付近の集中区から南西に 5 m の列状に分布する。石器の出土層位はⅩ a 層からⅩ層にかけてであり、特にⅩ c 層上面付近に偏差が認められる。

第24表 第2ブロック属性表

出土層	アソシエーション	プロトタイプ	産地	形状	材質	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途									
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1								
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2							
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3						
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4						
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5						
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6					
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7				
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8			
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9			
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10			
11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	
12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12

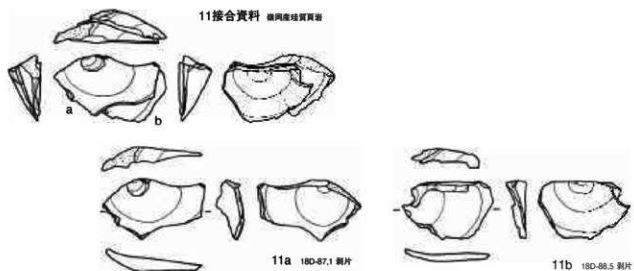


第149図 第2ブロック分布

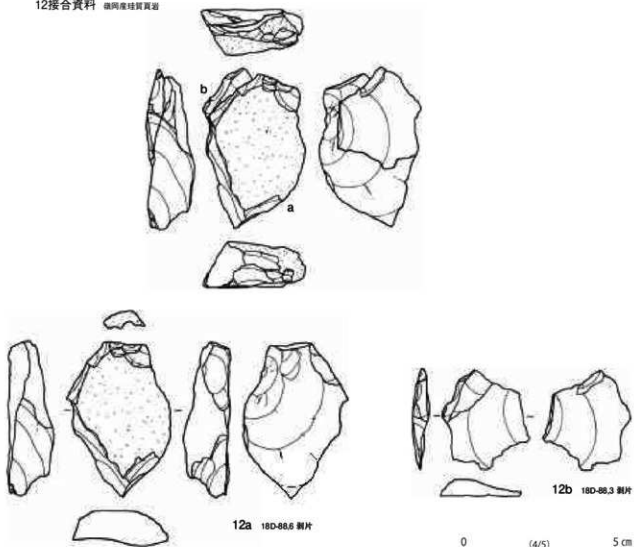


0 (4/5) 5 cm

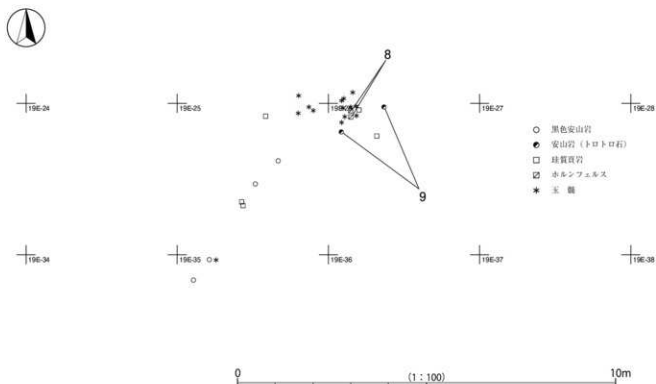
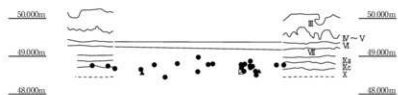
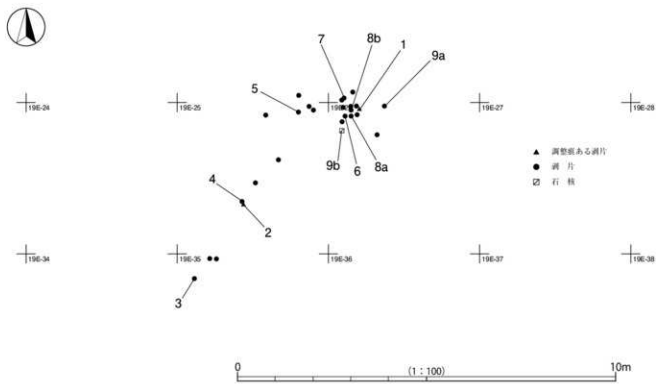
第150図 第2ブロック遺物(1)



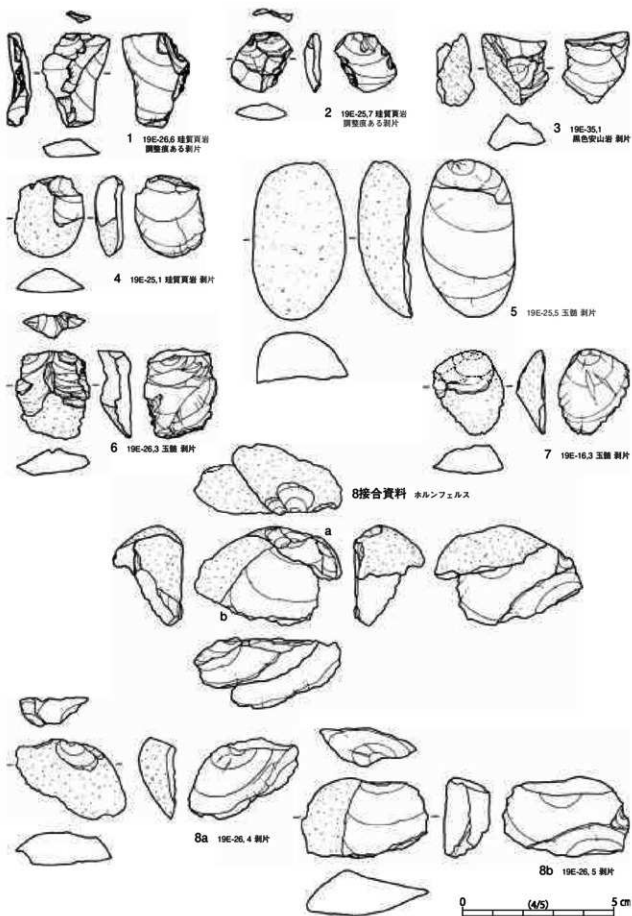
12接合資料 磯岡産珪質頁岩



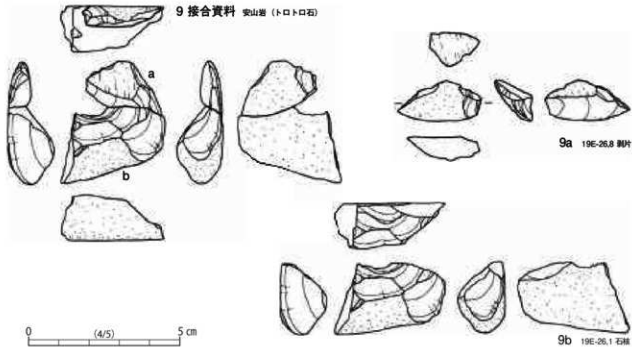
第151図 第2ブロック遺物(2)



第152図 第3ブロック分布



第153図 第3ブロック遺物(1)



第154図 第3ブロック遺物 (2)

3は黒色安山岩製の調整痕の認められる剥片である。不定形剥片の打面を調整により除去する。

4から10は剥片である。大きさの違いはあるが概して縦長剥片である。特に5・6の黒色安山岩製の剥片、9・10の黒色頁岩製の剥片については、第4ブロック内でのこれら石材の明瞭な剥片剥離の痕跡が認められないことから、素材剥片としての搬入と考えられる。

11は黒色安山岩製の石核である。部厚な大型剥片を転用して剥片剥離を行っている。剥片剥離は素材の末端部及び打面側の打割面の上下から行われている。

12は緑色凝灰岩製の接合資料である。部厚な大型剥片を中位で分割し、打割面を打面として12bの小型横長剥片を作成している。

第5ブロック (第158・159図、第27表、図版60・78)

調査区南の台地平坦部から緩斜面部に移行する地点に所在し、標高50mを測る。

石器の出土点数は合計10点を数え、分布は20C-08グリッドを中心に南北5m、東西5mの範囲で取束する。分布密度は全体的に疎である。石器の出土層位はⅨA層からⅨC層にかけてであり、特にⅨC層上面付近に偏差が認められる。

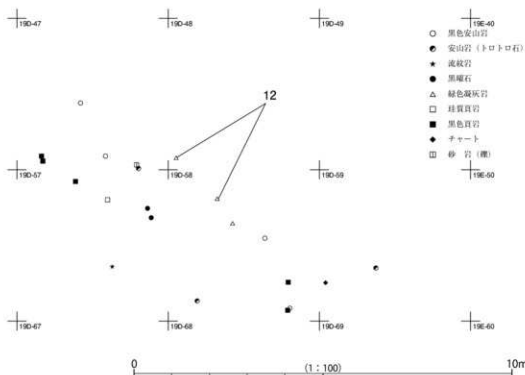
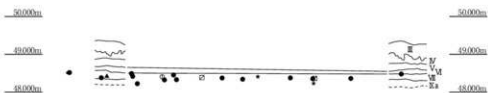
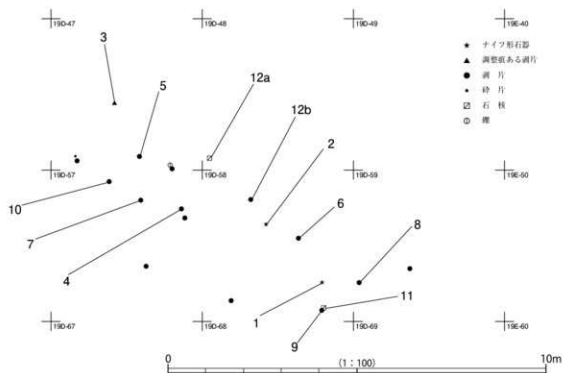
出土した石器10点の内容は、安山岩等の礫4点の他6点は剥片石器である。黒曜石製の調整痕の認められる剥片2点の他は全て剥片である。

使用される石材は、剥片石器では黒曜石、安山岩 (トトロ石)、珪質頁岩が、礫石器では安山岩、流紋岩、凝灰岩、チャートが使用される。黒曜石については高原山産の分析結果が出ている。

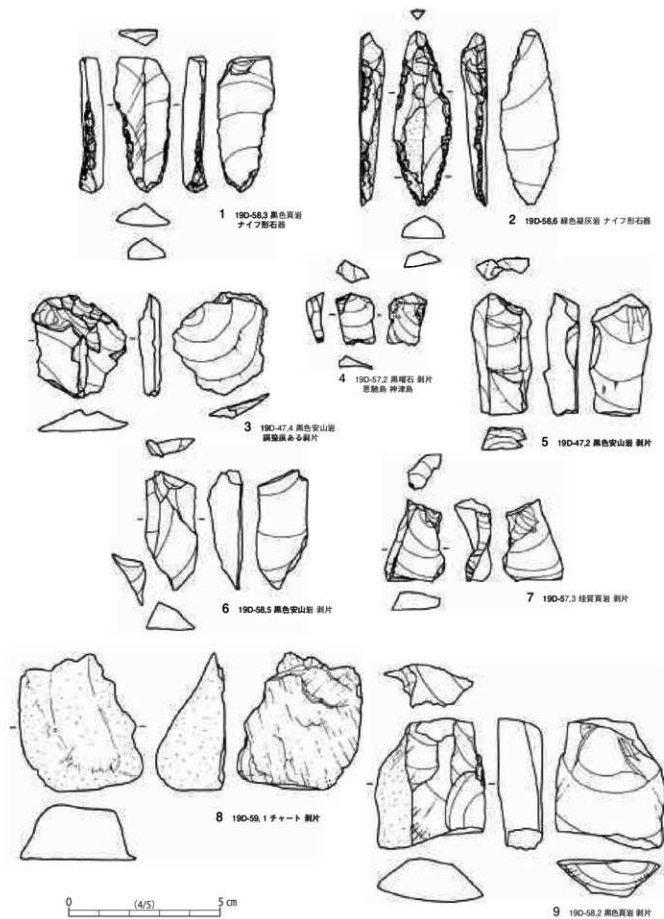
遺物

1から4は剥片である。いずれも縦長剥片で、背面は同一方向からの剥離により構成される。1・2は珪質頁岩製、3・4は安山岩 (トトロ石) 製である。

5は黒曜石製の調整痕の認められる剥片の接合資料である。大型剥片を打割しそれぞれの個体について



第155図 第4ブロック分布



第156図 第4ブロック遺物(1)

第27表 第5ブロック属性表

土層	ブロック	グリッド	調査 番号	目 録	器 種	石 材	使用 状況	調査 状況	調査 時期	調査 者	調査 面積 (㎡)	調査 体積 (m ³)	調査 量 (kg)	土量	土量	土量	備 考
第1土層	156-08	156-08	1	調査	磁器(コトコト)	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	2	調査	磁器(コトコト)	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	3	調査										4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	4	調査										4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	5	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	6	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	7	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	8	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	9	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	10	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	11	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	12	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	13	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	14	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	15	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	16	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	17	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	18	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	19	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	
第1土層	156-08	156-08	20	調査	磁器	河原石	使用	調査	2011	調査員	100	100	100	4000000	4000000	4000000	

第28表 第6ブロック属性表

土層	ブロック	グリッド	調査 番号	目 録	器 種	石 材	使用 状況	調査 状況	調査 時期	調査 者	調査 面積 (㎡)	調査 体積 (m ³)	調査 量 (kg)	土量	土量	土量	備 考
第1土層	161-02	161-02	1	調査										4000000	4000000	4000000	
第1土層	161-02	161-02	2	調査										4000000	4000000	4000000	
第1土層	161-02	161-02	3	調査										4000000	4000000	4000000	
第1土層	161-02	161-02	4	調査										4000000	4000000	4000000	

調整が施される。5 a の調整は末端部に近い側縁にのみ認められるのに対し、5 b の調整は分割面及び分割面からの調整が密に施される。

第6ブロック (第160・161図、第28表、図版61・78)

調査区の南側、標高49 mの台地平坦部に所在する。

石器の出土点数は合計3点を数え、南北3 mの帯状に分布する。石器の出土層位はⅨ a層からⅨ c層にかけてである。

黒色安山岩製の調整痕の認められる剥片1点の他は珪質頁岩製の剥片1点である。他に流紋岩製の礫1点が出土している。

遺物

1は黒色安山岩製の使用痕の認められる剥片である。縦長剥片を素材とし、片側縁の背腹両面に微細な剥落痕が認められる。

2は珪質頁岩製の剥片である。打面付近に最大幅を持つ縦長剥片であり、背面は末端部の一部を除き打面側からの剥離により構成される。

第7ブロック (第162・163図、第29表、図版61・78)

調査区北側、舌状台地の先端部に近い標高50 mの台地平坦部に所在する。

石器の出土点数は合計24点を数え、分布範囲は南北5 m、東西3 mの範囲で収束する。12G-35グリッド付近にやや集中区が認められる。石器の出土層位はⅣ層からⅥ層にかけてであり、特にⅤ層上面付近に偏差が認められる。

出土した石器は全て黒曜石製であり、箱根産の分析結果が出ている。調整痕の認められる剥片1点の他は剥片、破片で構成される。

遺物

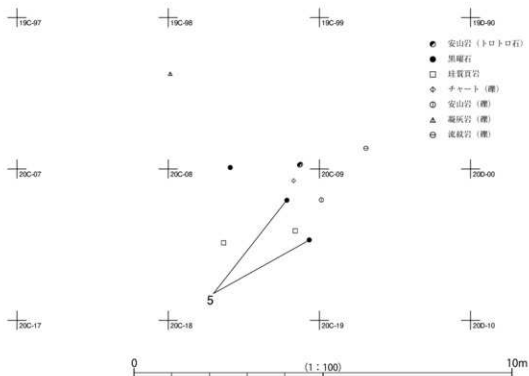
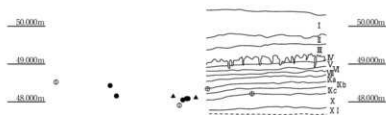
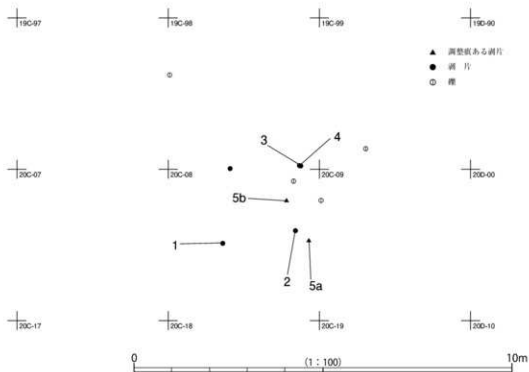
1は調整痕の認められる剥片である。末端部に腹面側からの調整が施される。

2から9は不定形剥片である。概して小型であるが、第7ブロックからは定型的な石器の出土は認められず、前述した調整痕の認められる剥片1点のみが組成に加わるため、素材剥片等の目的剥片であるかどうかは判断できない。背面構成は多方向からの剥離による個体が多い。

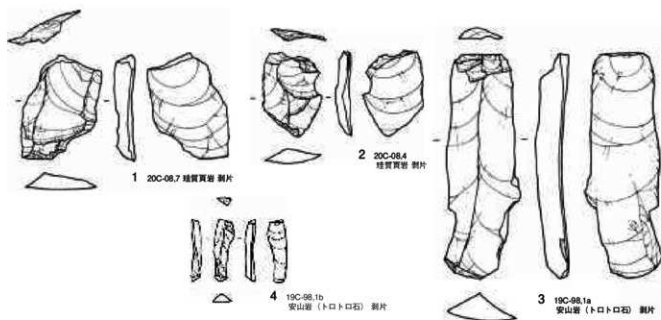
第8ブロック (第164～169図、第30表、図版79～81)

調査区北側、舌状台地の先端部に近い標高50 mの台地平坦部に所在する。

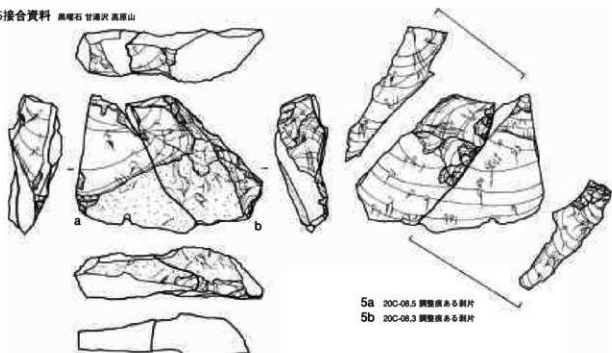
石器の出土点数は剥片石器25点、礫石器354点の合計379点を数える。分布範囲は直径10 mの円形範



第158図 第5ブロック分布



5接合資料 高塚石 甘溝沢 高塚山



0 (4/5) 5 cm

第159図 第5ブロック遺物

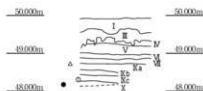
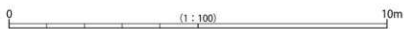


- △ 使用済ある洞片
- 洞片
- 標・標片

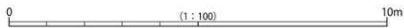
A 1



● 2



- 黒色安山岩
- 柱貫頁岩
- ◎ 流紋岩 (標)



第 160 図 第 6 ブロック分布



第161図 第6ブロック遺物

囲で取束する。分布の東側 12F-49 グリッド付近に集中区が認められる。石器の出土層位はⅢ層中である。

定型的な石器の出土はなく、珧質頁岩製の調整痕の認められる剥片1点、黒曜石製の使用痕の認められる剥片1点の他は剥片類である。流紋岩製の礫が点数的・重量的にも他の石材を圧倒する。黒曜石については信州諏訪産の分析結果が出ている。

遺物

1は珧質頁岩製の調整痕の認められる剥片である。背面は原礫面により構成される。調整は片側縁の打面付近のみに施され、背面から腹面側に微細な調整が認められる。

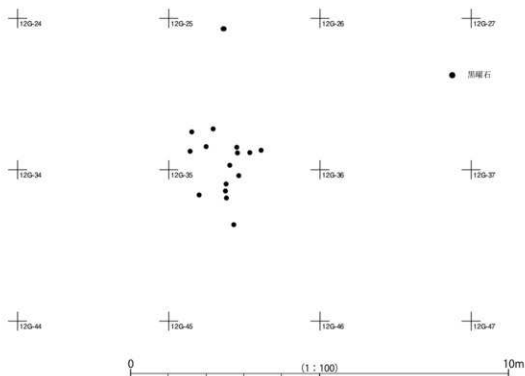
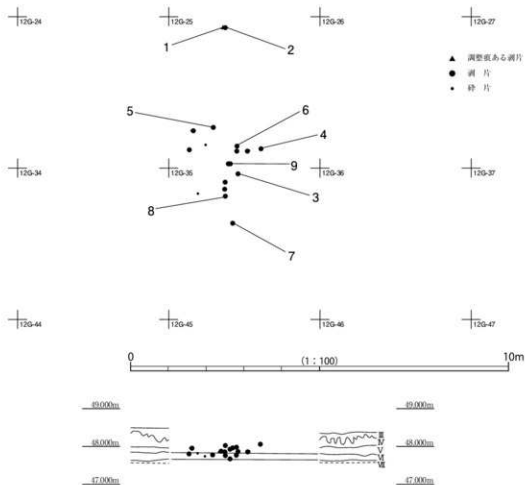
2は黒曜石製の使用痕の認められる剥片である。薄い作りの剥片で、片側縁から末端部にかけて欠損している。素材剥片の側縁を保つ部位に微細な剥落痕が認められる。

3・4は黒曜石製の小型縦長剥片である。背面は打面側からの一方向の剥離により構成される。

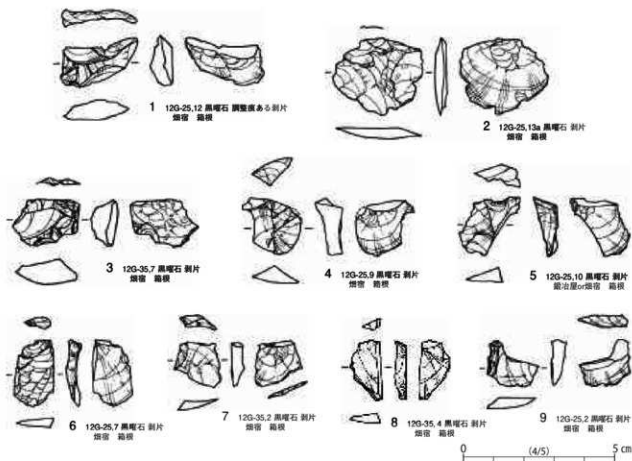
5から9は珧質頁岩製の剥片である。5から7は背面に原礫面を有する大型で部厚な剥片である。製品の素材剥片よりも石核転用の性格が強く感じられる。8は立方体に近い形状であり、腹面には剥片が作出された剥離とは異なる方向からのリングが認められる。打面再生か石核整形剥片の可能性が考えられる。9は小型の不定形剥片で、背面は多方向からの剥離により構成される。

第29表 第7ブロック属性表

土庫	層位	グリッド	遺物	品名	材質	用途	形状	長さ	幅	厚さ	重量	備考			
1層	Ⅲ	12F-29	1	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	18	13.1	0.7	3.0	4130.273	1984.204	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	2	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.0	0.8	3.0	4130.267	1984.210	0.013	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	3	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	12.8	0.8	3.1	4130.270	1984.212	0.013	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	4	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.0	0.8	3.1	4130.273	1984.208	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	5	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.0	0.8	3.1	4130.273	1984.209	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	6	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	12.7	0.7	3.1	4130.269	1984.204	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	7	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	18	13.2	0.7	3.0	4130.268	1984.204	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	8	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	9	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	10	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	11	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	12	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	13	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	14	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	15	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	16	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	17	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	18	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	19	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	20	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	21	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	22	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	23	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	24	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	25	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	26	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用
1層	Ⅲ	12F-29	27	剥片	珧質頁岩	調整	片側縁	17	13.1	0.7	3.0	4130.269	1984.210	0.014	調整・使用



第162図 第7ブロック分布



第163図 第7ブロック遺物

10は安山岩(トトロ石)製の剥片である。背面は全て原礫面で構成される。部厚な大型剥片で石核転用を目的とした剥片と考えられる。

11・12は黒色頁岩製の剥片である。11は大型剥片で背面は原礫面と腹面側からの一枚の剥離により構成される。前述した他の石材の大型剥片と同様に石核転用の性格が考えられる。12の背面には同一打面から連続して作出された剥離がみられる。打面は作出されず原礫面を打面として剥片剥離を行っている。

13は頁岩製の剥片である。15と同一母岩と考えられ、頁岩製石器の剥片剥離行程が窺える資料である。

14は珪質頁岩製の石核である。原礫面を大きく残し、上方にみられる打面から連続して縦長剥片を作出していることが理解できる。

15は頁岩製の石核である。原礫面を大きく残し、最終剥離面は打面調整と考えられる。

16は珪質頁岩製の剥片3点の接合資料である。同一打面から連続して作出された縦長剥片であり、右側縁に原礫面を残すように作出される。15の石核の形状と剥片剥離に類似した資料である。

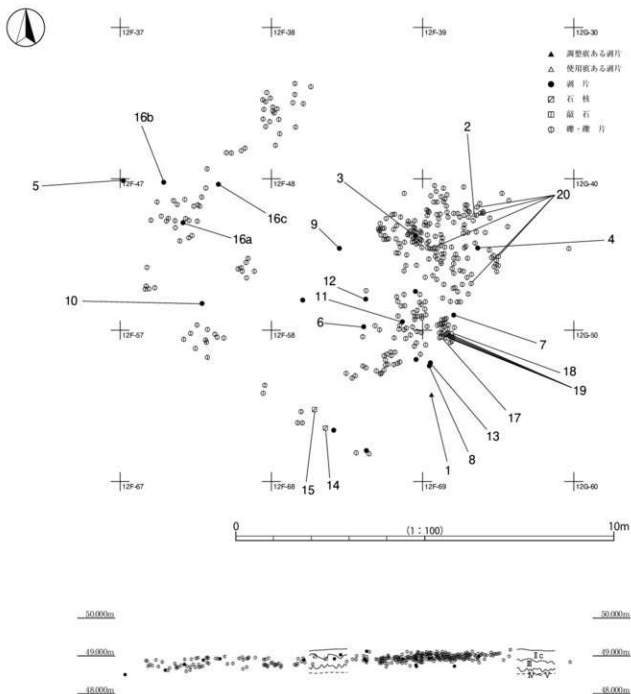
17・18は共に砂岩製の敲石である。転石を利用し敲打点から剥落痕が明瞭に観察できる。17は原礫の形状を大きく変えているが、敲打の際の形状変化ではない。

19はホルンフェルス製、20は頁岩製の礫である。両者とも被熱し器表面は脆くなっている。

第9ブロック (第170・171図、第31表、図版81)

調査区北側、台地緩斜面部の標高49m付近に所在する。

石器の出土点数は剥片石器12点、礫石器219点の合計231点を数え、分布範囲は南北5m、東西4m

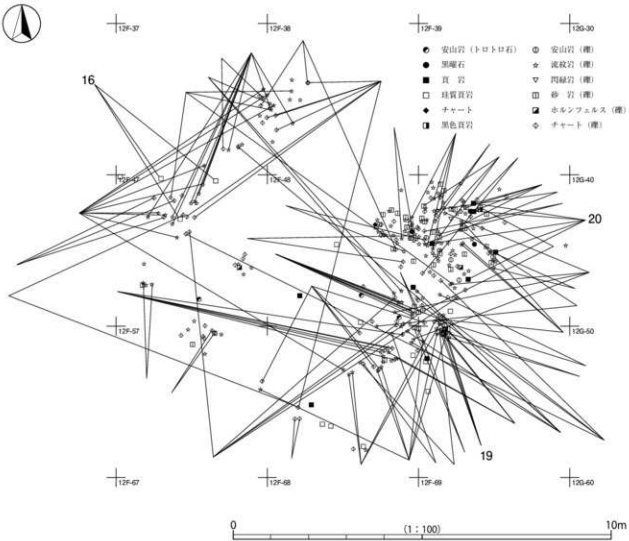


第164図 第8ブロック分布(1)

の範囲で取束する。分布密度は全体的に均一であり、剥片石器については範囲の北側に集中する感がある。石器の出土層位はⅢ層からⅥ層にかけてであり、特にⅤ層付近に偏差が認められる。

定型的な石器はなく、黒曜石製の調整痕の認められる剥片1点の他は剥片、石核である。

石器石材は剥片石器では黒曜石が主体となり、流紋岩、黑色頁岩、ホルンフェルスが使用される。礫石器は流紋岩、砂岩、チャート等で構成される。黒曜石については信州諏訪産と和田峠産の分析結果が出ている。



第165図 第8ブロック分布 (2)

遺物

1は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。小型の不定形剥片で、調整は末端部にに対し版面側からの剥離により行われている。

2から4は黒曜石製の剥片である。いずれも小型の不定形剥片で、背面は多方向からの剥離により構成される。

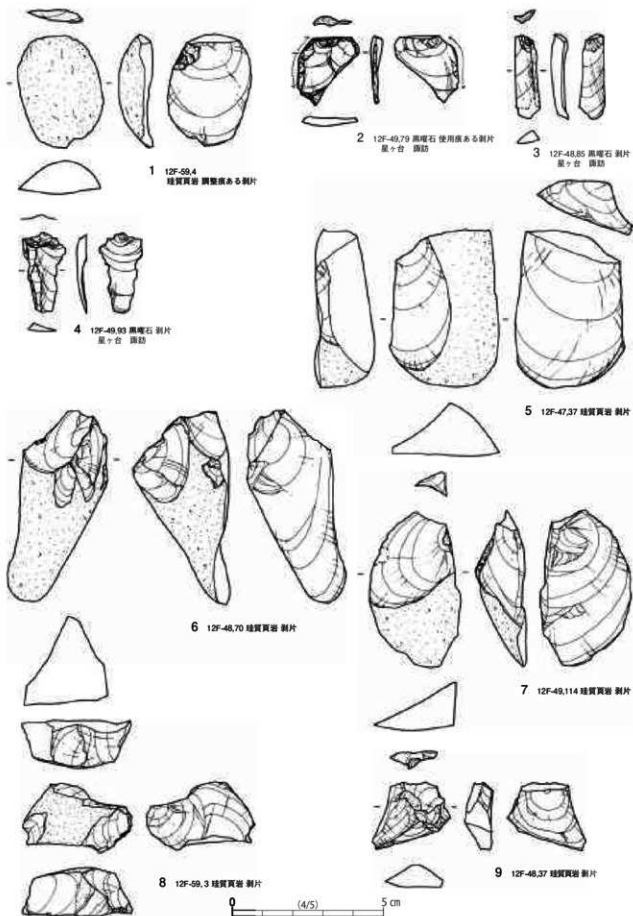
5はホルンフェルス製の礫である。被熱し器表面は脆くなっている。

第10ブロック (第172～174図、第32表、図版81・82)

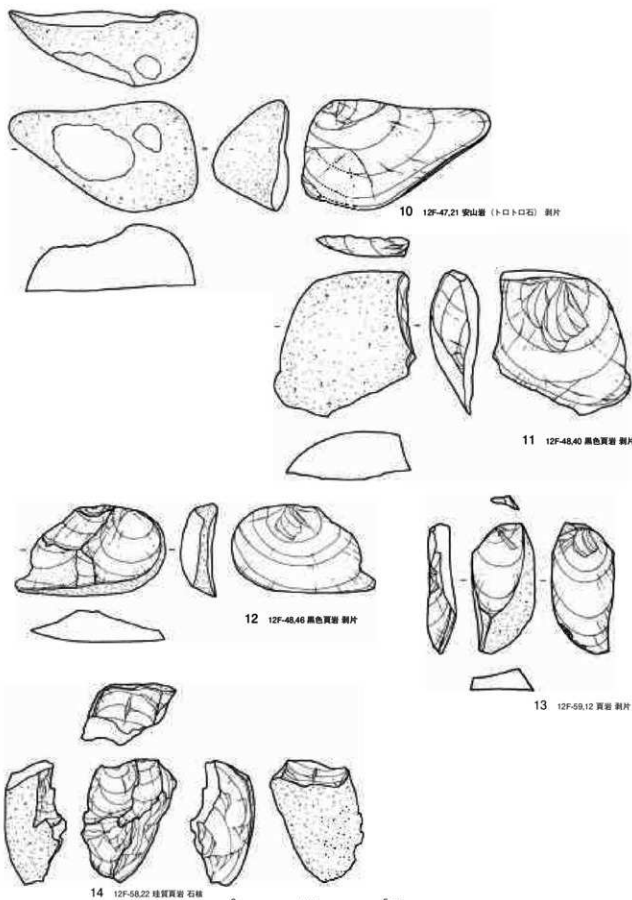
調査区の北西、西に向かい延伸する痩せ尾根状台地の付け根に所在し、標高49mを測る。

石器の出土点数は剥片石器14点、礫石器43点の合計57点を数え、分布範囲は直径4mの範囲で収束する。石器の出土層位はⅢ層からⅤ層にかけてである。

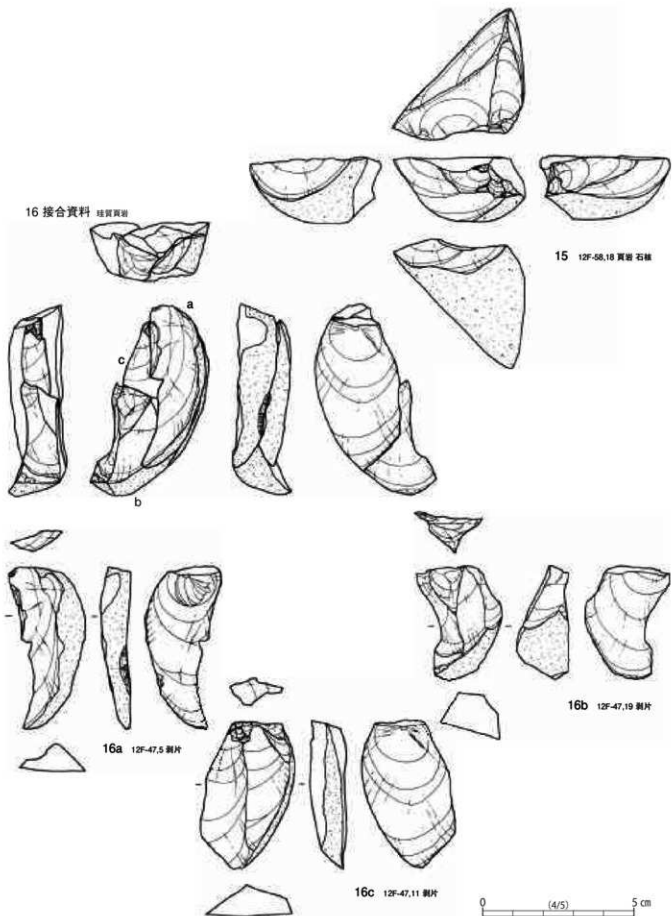
定型的な石器の出土はみられず、剥片、石核、礫で構成される。使用される石材は、剥片石器では安山岩(トトロ石)、流紋岩、黒色頁岩、珧質頁岩、凝灰岩、ホルンフェルスであり、1点のみ出土する石核は珧質頁岩製である。礫石器では流紋岩、砂岩、チャートが使用される。



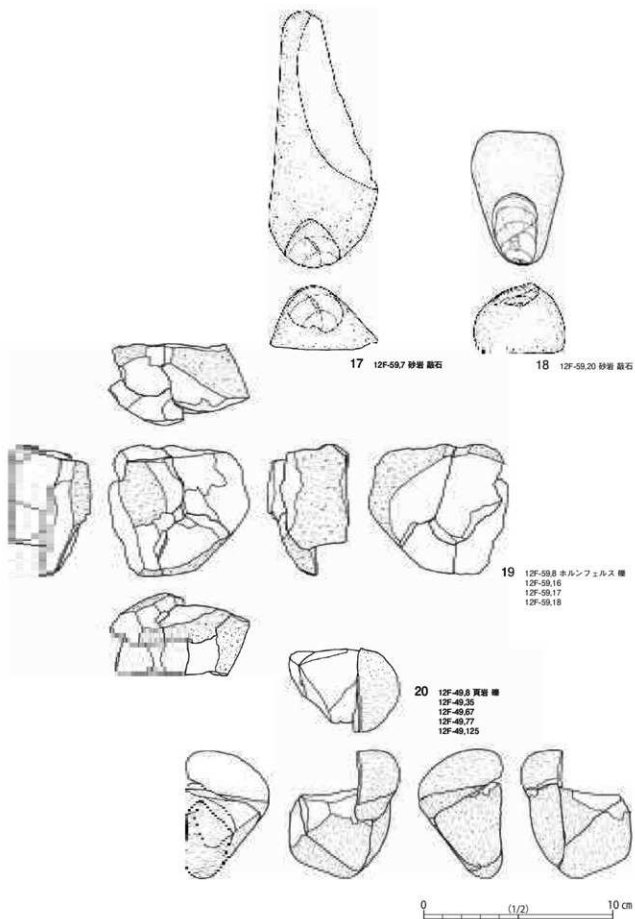
第166図 第8ブロック遺物(1)



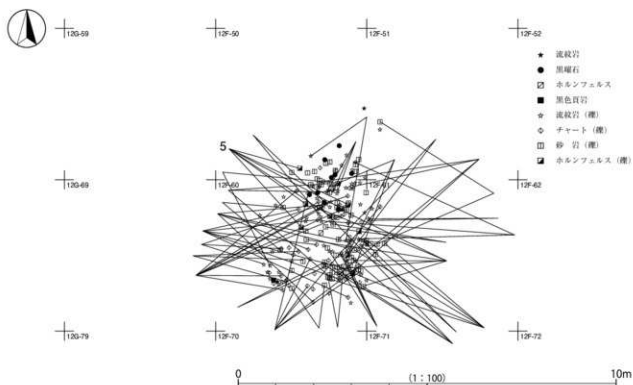
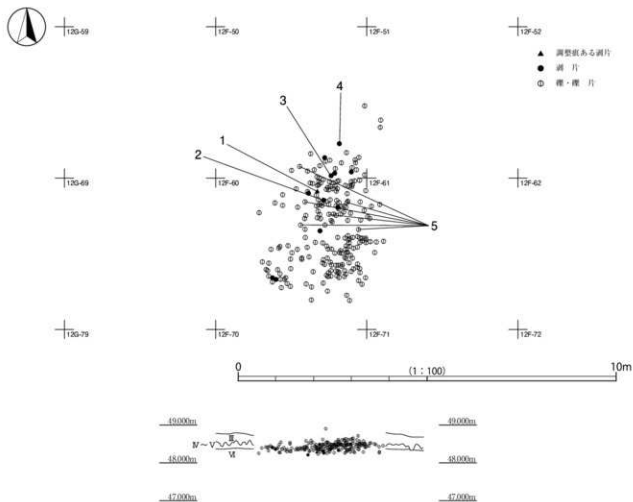
第167図 第8ブロック遺物 (2)



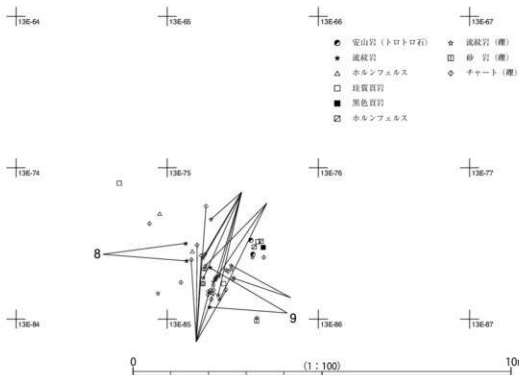
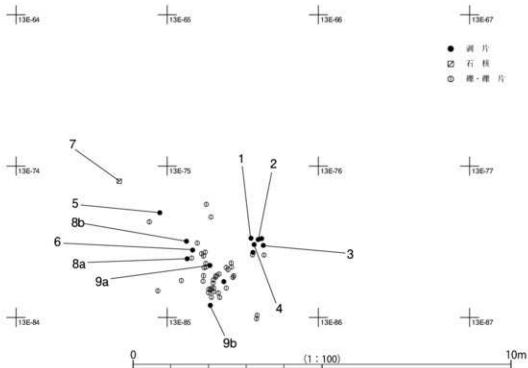
第168図 第8ブロック遺物(3)



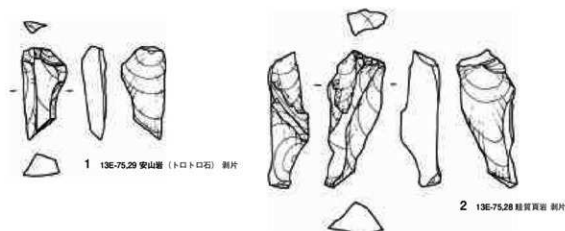
第169図 第8ブロック遺物(4)



第171図 第9ブロック分布

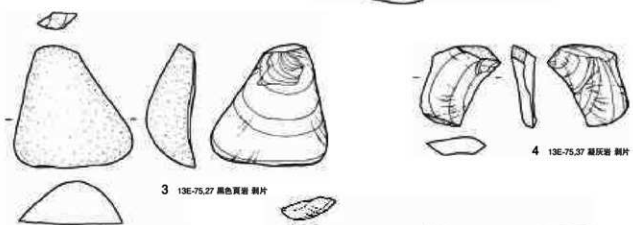


第172図 第10ブロック分布



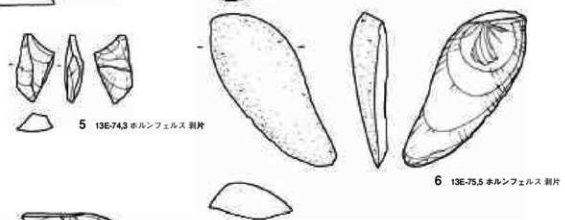
1 13E-75.29 安山岩 (トトロ石) 剥片

2 13E-75.28 緑頁頁岩 剥片



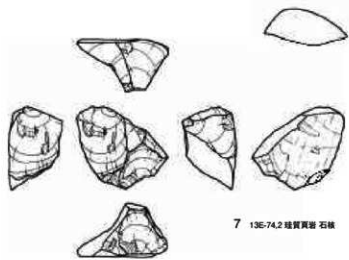
3 13E-75.27 褐色頁岩 剥片

4 13E-75.27 凝灰岩 剥片



5 13E-74.3 ホルンフェルス 剥片

6 13E-75.5 ホルンフェルス 剥片

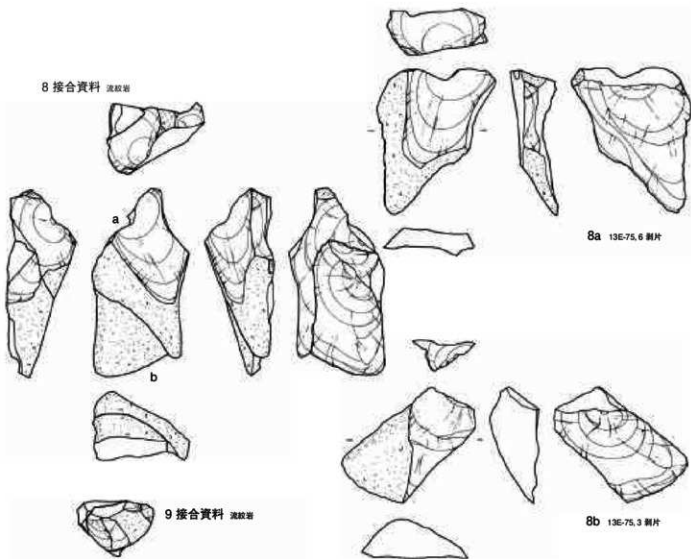


7 13E-74.2 緑頁頁岩 石核



第173図 第10ブロック遺物 (1)

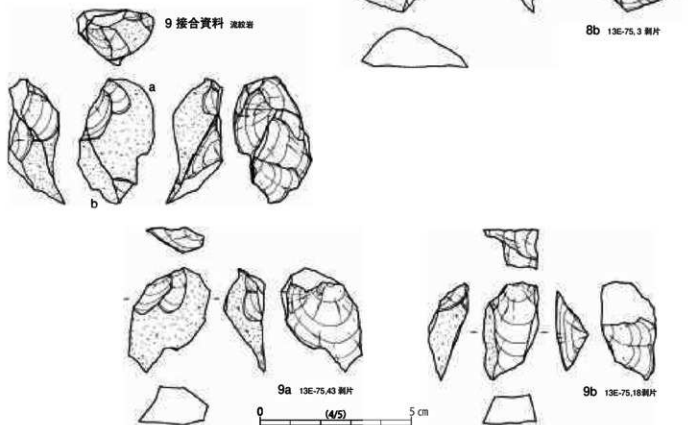
8 接合資料 透視図



8a 13E-75.6 割片

8b 13E-75.3 割片

9 接合資料 透視図



9a 13E-75.43 割片

9b 13E-75.18 割片

0 (4/5) 5 cm

第174図 第10ブロック遺物(2)

第11ブロック (第175～206図、第33表、図版82～99)

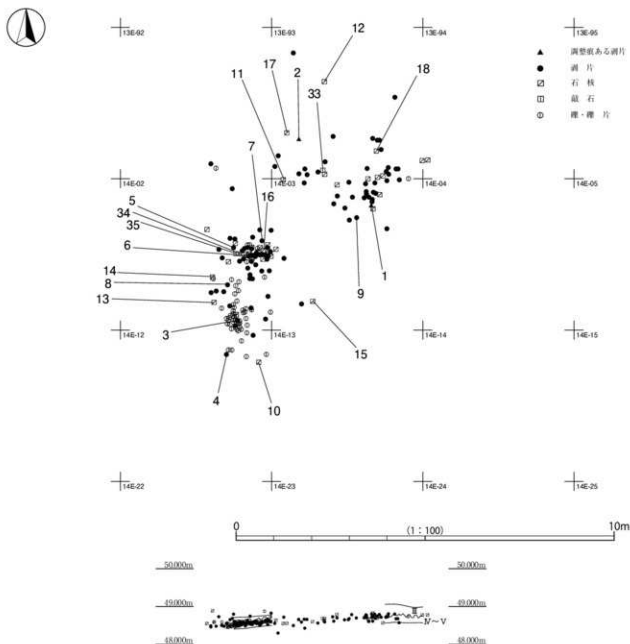
調査区の北西、西に向かい延伸する痩せ尾根状台地の付け根に所在し、標高49mを測る。

石器の出土点数は剥片石器10点、礫石器57点の合計67点を数え、分布範囲は南北8m、東西6mの範囲で収束する。14E-02グリッドと14E-03グリッドに集中区が認められる。石器の出土層位はⅢ層からⅤ層にかけてであり、特にⅤ層上部に偏差が認められる。

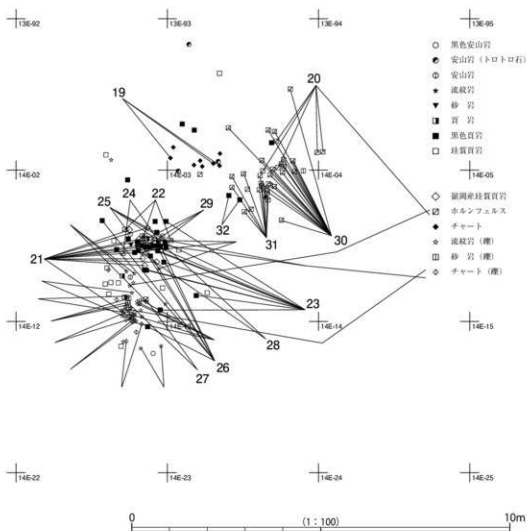
出土した石器は、調整痕の認められる剥片2点の他、剥片、石核であり、定型的な石器はみられない。敲石が3点出土する。

使用される石材は、剥片石器ではホルンフェルスを主体に黒色頁岩等、礫石器では流紋岩が主体となる。

第12ブロックとの剥片石器、礫石器の接合関係が認められる。



第175図 第11ブロック分布 (1)



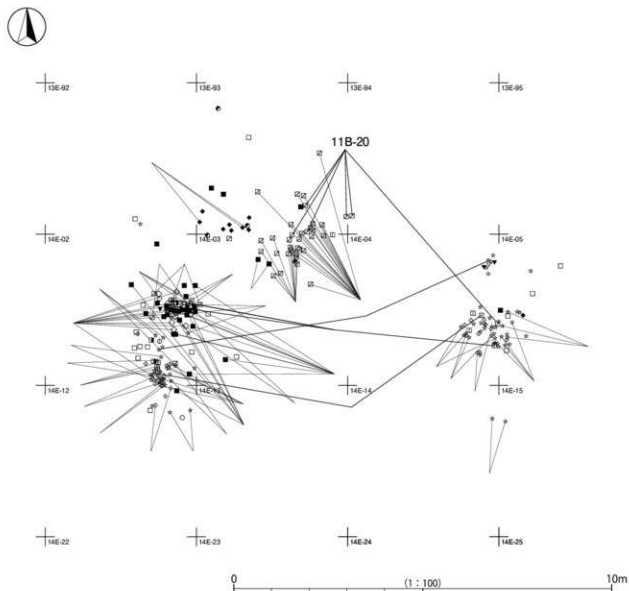
第176図 第11ブロック分布(2)

遺 物

1は安山岩(トトロ石)製、2は黒色頁岩製の調整痕の認められる剥片である。1は大型の縦長剥片で部厚な作りである。左側縁に対し腹面側からの荒い調整が施される。2は小型の縦長剥片を素材とし、調整は末端部から側縁の一部にかけて施される。

3から9は剥片である。3は安山岩(トトロ石)製の横長剥片で、背面の大部分は原礫面で構成される。形状に反し部厚さはない。4は珪質頁岩製の縦長剥片で、部厚な作りである。5は黒色頁岩製で厚みのある縦長剥片である。背面の剥離の方向は右側面側からであり、90°打面を転移して作出された剥片であることが理解できる。6は黒色頁岩製の縦長剥片であり、5と同様に打面転移を行ったのち作出された剥片である。7の末端部は鋭く尖り背面中央部には明瞭な稜がみられる。8は頁岩製の縦長剥片で、側縁の断面形状は鋭く尖る。打点直下にふくらみを持つ形状である。9はホルンフェルス製の菱形の形状を呈す横長剥片である。打面から急激に厚みを増す器形である。

10から18は石核である。10は黒色安山岩製で、原石の一端に数回の剥離で打面を作成し、このネガティブ面から剥片を作出している。11は安山岩(トトロ石)製で、剥片の作出は原礫面を打面とし周縁

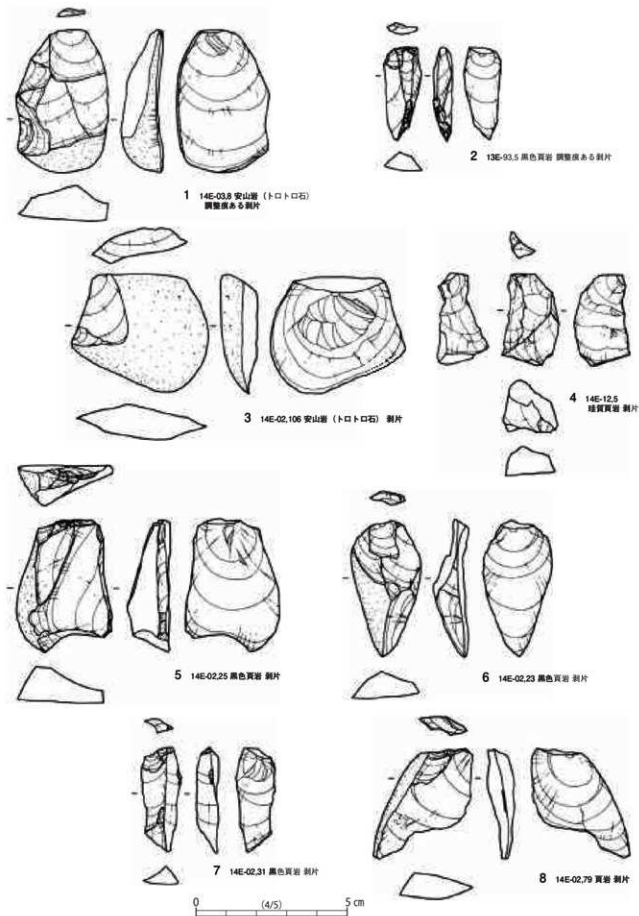


第177図 第11ブロック分布 (3)

部を廻るように行われている。12から15は珪質頁岩製で、12は大型の転石を利用し、原礫面を削ぐように剥片剥離を行い大型の剥片を作出している。13・14は多面体を維持するように頻繁に打面を転移し剥片を作出している。15は大型剥片を石核に転用したものと考えられ、剥片の腹面を打面とし背面側に向かい剥片を作出している。16はチャート製で、小型の転石を素材としている。転石の一端を打撃し打面を作成した後、数回の剥片剥離を行っている。17は大型の黒色頁岩製の転石を打割し、打割面を打面とし剥片剥離を行っている。18は黒色頁岩製で、17と同様に打割後に打割面から剥片剥離を行っている。

19はチャート製の接合資料である。転石を素材とし、剥片剥離作業は上部に位置する打面から行われる。19 aの剥片の作出後、打面調整を行い19 bの剥片を作出している。

20はホルンフェルス製の剥片2点と石核の接合資料である。層状に節理が混入する石材のため石核は4分している。20 aと20 bは同一打面から連続して作出されており、両者の作出後に打面再生を行い数

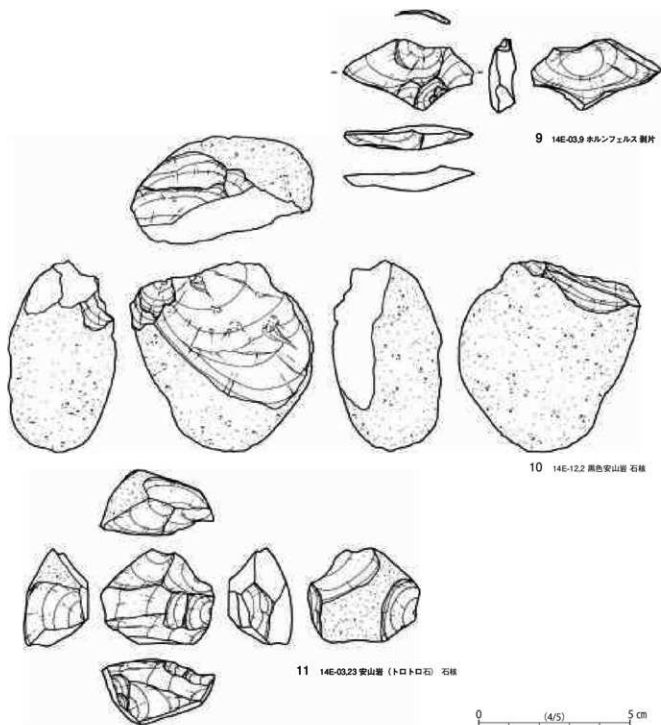


第178図 第11ブロック遺物(1)

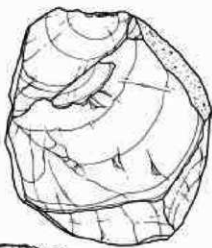
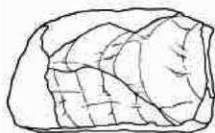
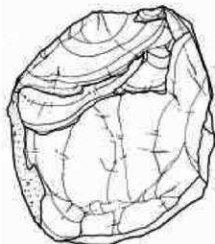
回の剥片剥離で作業を終了している。

21 は嶺岡産珪質頁岩製の接合資料である。節理の混入が著しいため剥片、石核とも分割している。12 cm を越える転石を素材とし、原礫の一端を削ぐように剥片剥離を行っている。最初の工程で作出された剥片は 21 a・21 b である。この後打面を転移し、21 b のネガティブ面を打面とし 21 c を作出している。21 d の作出はさらに打面を転移し、21 c の打面と対になる部位の原礫面から行われている。

22 はホルンフェルス製の剥片 2 点と石核 1 点の接合資料である。棒状の転石を素材とし、22 a・22 b



第179図 第11ブロック遺物 (2)



12 13E-00.3 珪質頁岩 石核



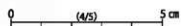
13 14E-02.6 珪質頁岩 石核



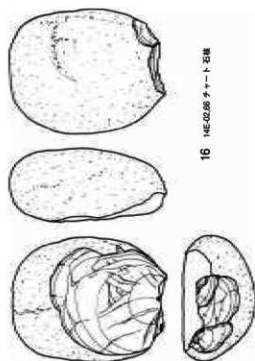
14 14E-02.20 珪質頁岩 石核



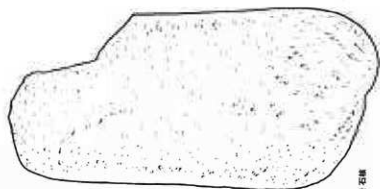
15 14E-03.3 珪質頁岩 石核



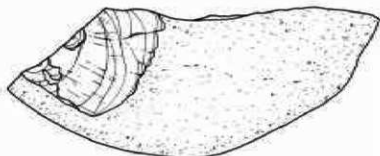
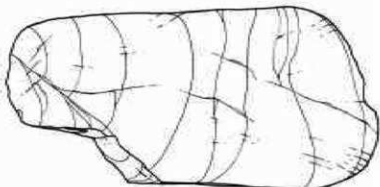
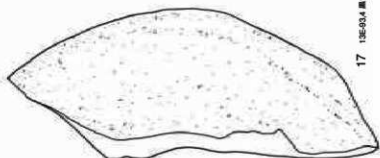
第180図 第11ブロック遺物(3)



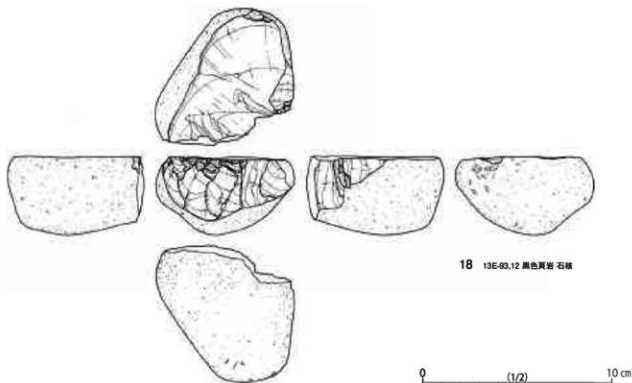
16 14E-02.06 チャート石類



17 13E-03.4 黒色頁岩石類



第181図 第11ブロック遺物(4)



第182図 第11ブロック遺物(5)

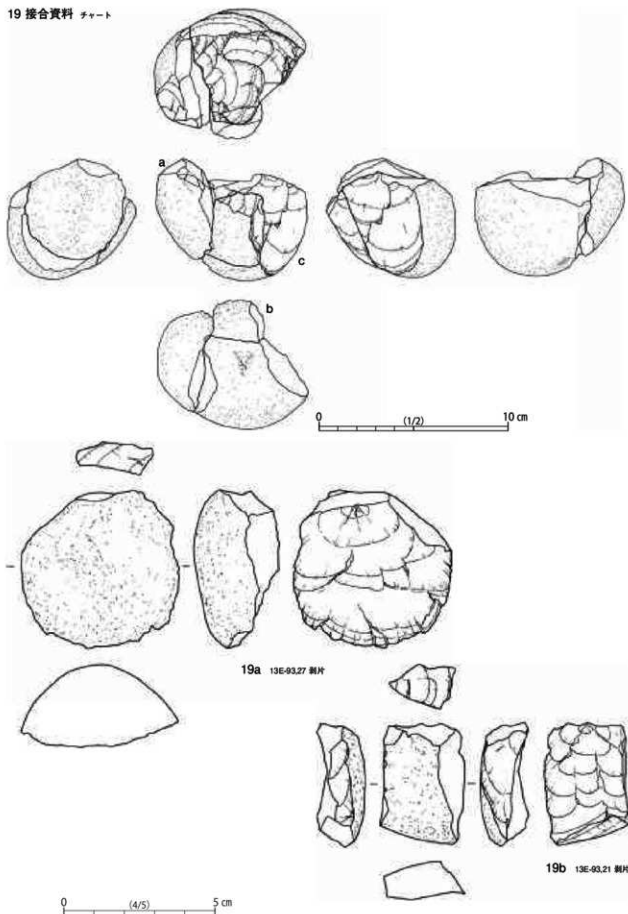
回の剥片を作出している。両者は部厚な剥片であり、素材剥片より石核を作出するための目的的剥片である可能性が高い。22 c の石核は六面体に近い形状を呈し、剥片剥離は 22 b のネガティブ面を打面とし行われている。

23 は黒色頁岩製の接合資料である。剥片 10 点と石核 2 点の接合であるが、剥片剥離工程の途中から石核が 2 分し、それぞれについて作業を行っている。長軸 10cm 程の転石を利用しており、剥片剥離の最初は裏面にみられる平坦な礫面を打面とし、長軸に直行するように打撃を加えている。このネガティブ面を打面とし 23 a が作出される。23 b の作出は打面転移を行い 2 回目の打撃によるものであり、これまでの剥片剥離は打面の作出および石核整形の意図が強く感じられる。23 c・24 d の作出は 23 b のネガティブ面を打面として行われ、この後に作出された大型剥片を石核とし 23 e から 23 g の剥片を作出している。23 e・23 f は大型剥片の打面を活用して作出されるが、23 g はこの後打面再生を行った際の打面再生剥片である。打面再生後数回の剥片剥離が行われ、23 h の残核の状態となっている。23 i は前述した一連の剥片剥離工程内の剥片であり、それまで活用されていた打面と上下対となる部位に対して剥片剥離を行い作出され、打面作出の性格が強い剥片といえる。23 i の作出後、ネガティブ面を打面とした一連の剥片剥離のなかで 23 j が作出される。最終的に 23 k の石核となるが、23 b のネガティブ面を打面として行われた剥片剥離と、23 i のネガティブ面を打面として行われた剥片剥離の痕跡がみられるため、上下両端に打面を有する石核となっている。

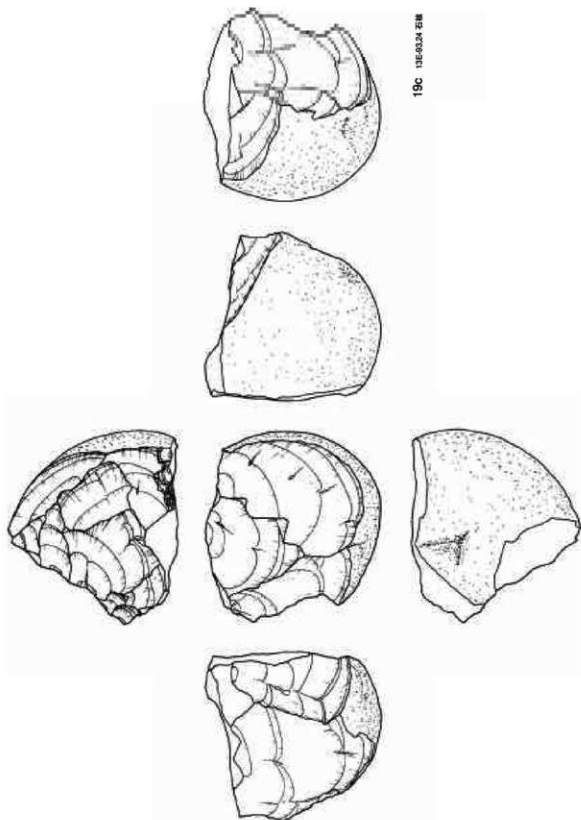
24 はホルンフェルス製の接合資料である。剥片 1 点と石核の接合である。24 a の作出後、ネガティブ面を打面とし剥片剥離を行っている。この間打面再生は行わず 24 b の状態で剥片剥離を終了している。

25 は黒色安山岩製の接合資料である。扁平な転石を素材とし、最初の打撃は実測図下面から行われている。剥片剥離により作出された剥片を利用した石核 2 点のほか、工程で最終的に残った石核 1 点が存在

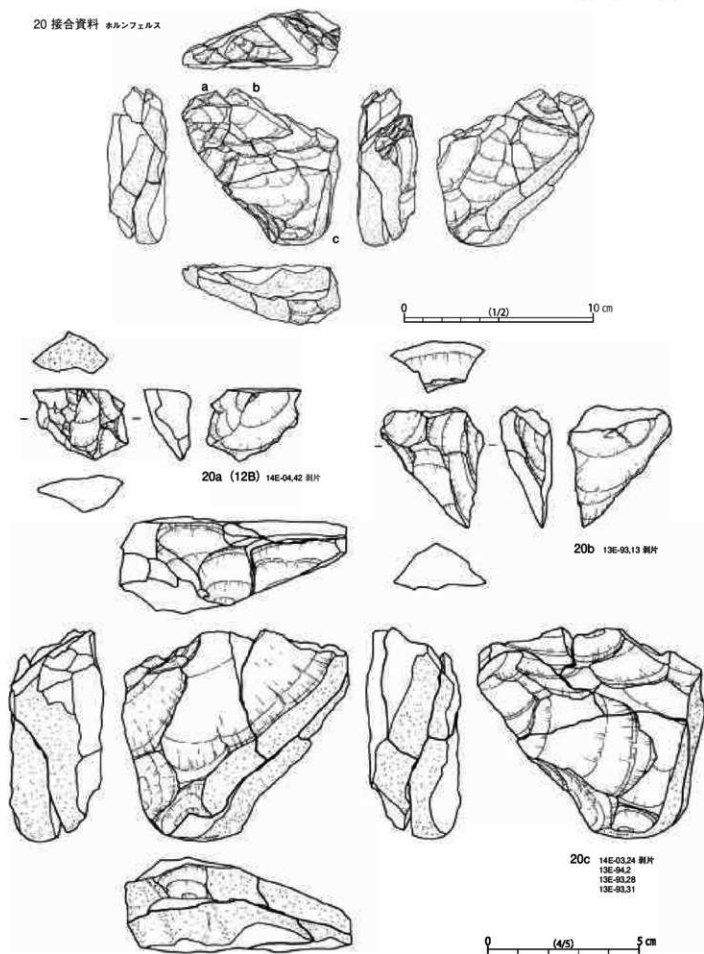
19 接合資料 チャート



第183図 第11ブロック遺物 (6)

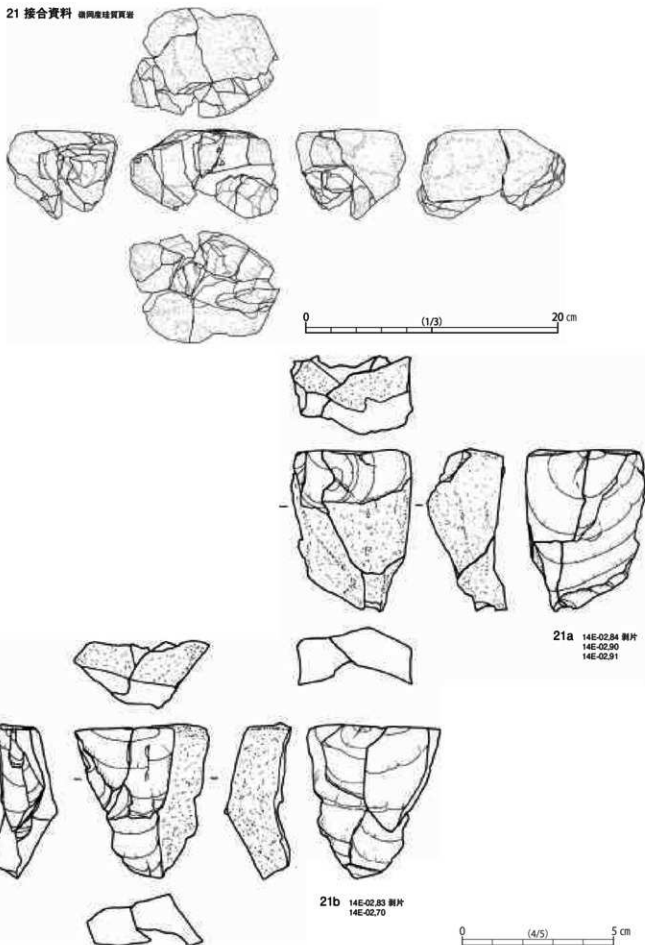


第184図 第11ブロック遺物(7)

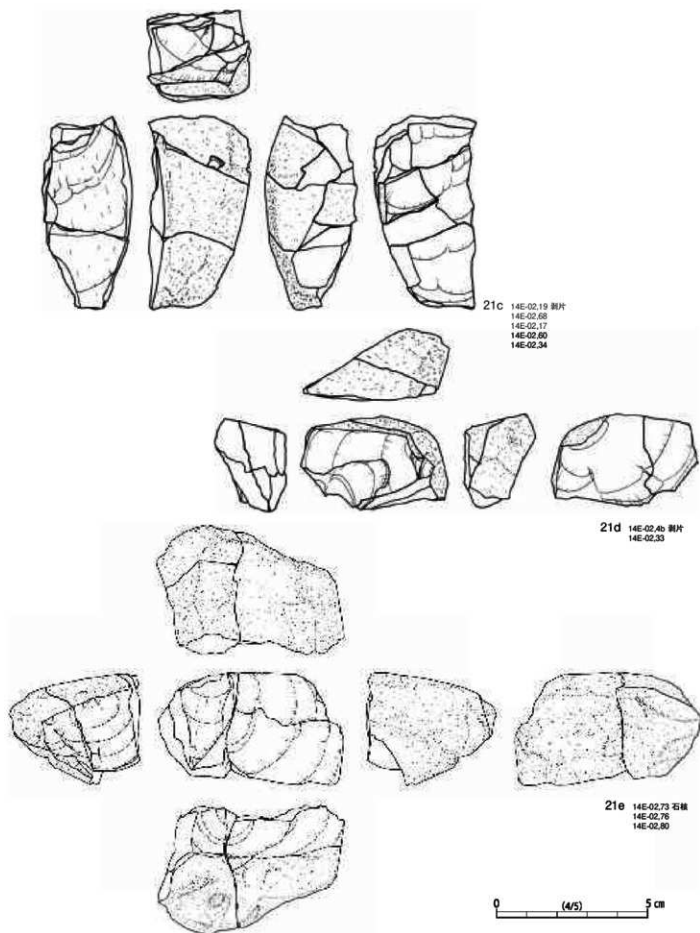
20 接合資料 ホルンフェルス

第185図 第11ブロック遺物(8)

21 接合資料 藤岡産縄文瓦片



第186図 第11ブロック遺物(9)

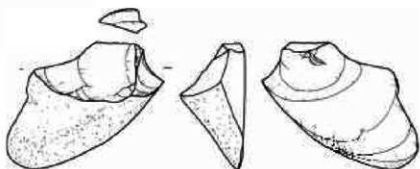


第187図 第11ブロック遺物 (10)

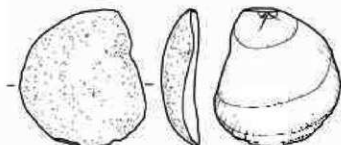
22 接合資料 ホルンフェルス



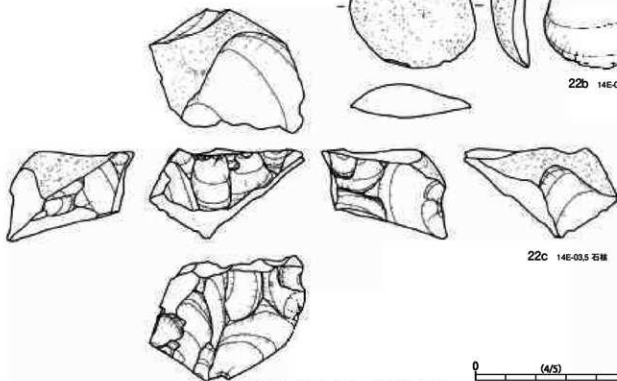
0 (1/2) 10 cm



22a 14E-02.26 割片



22b 14E-02.28 割片

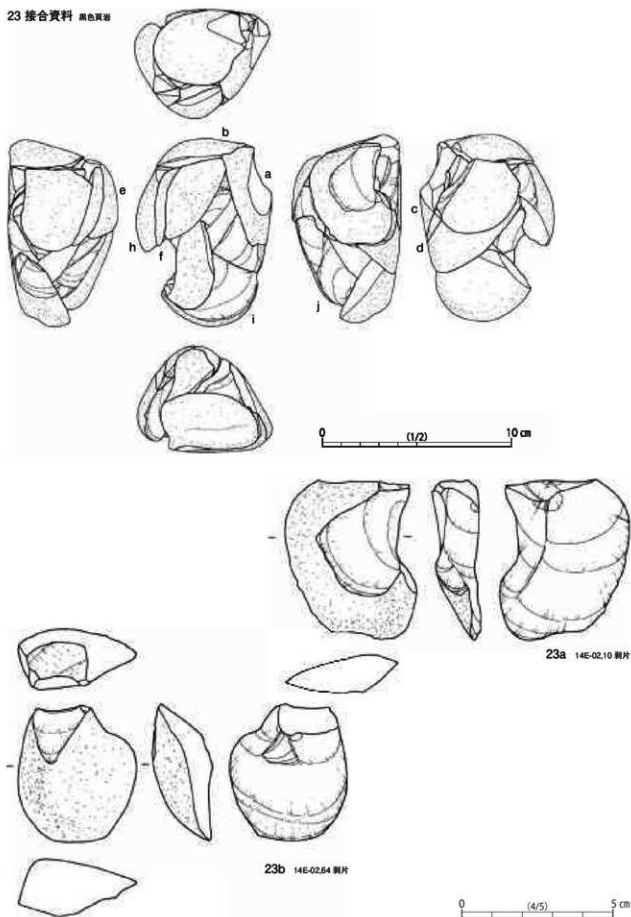


22c 14E-03.5 石核

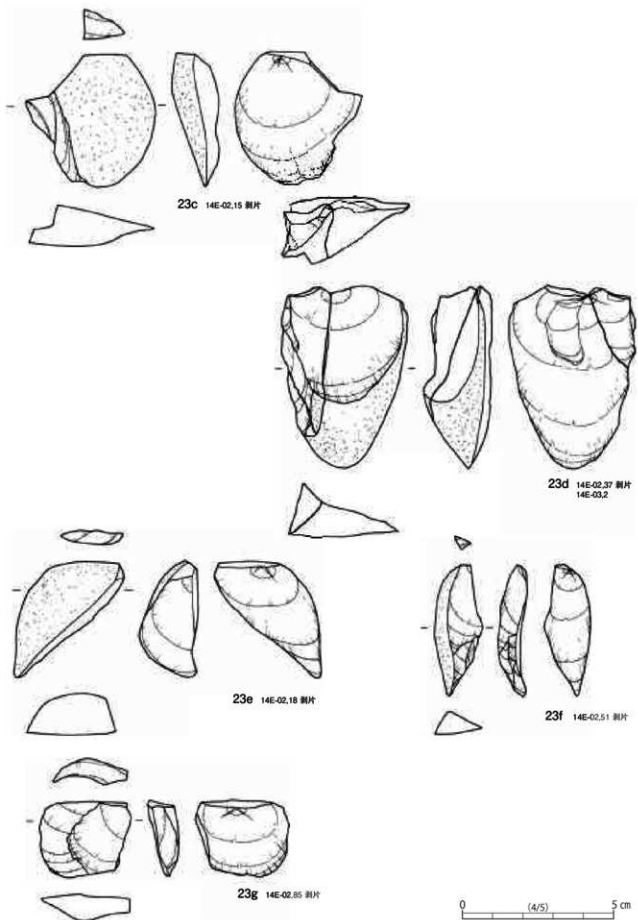
0 (4/5) 5 cm

第188図 第11ブロック遺物(11)

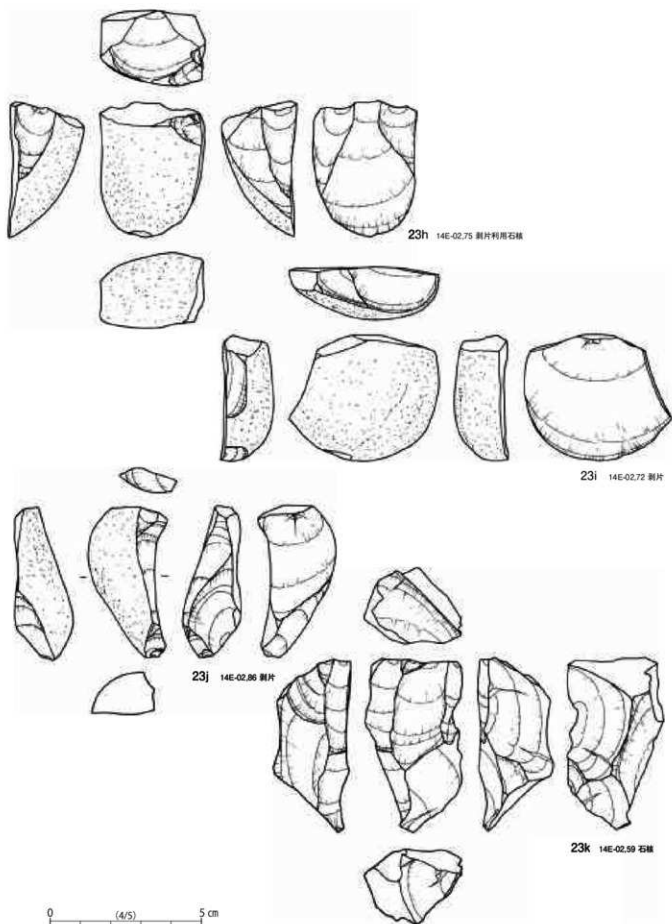
23 接合資料 褐色頁岩



第189図 第11ブロック遺物 (12)

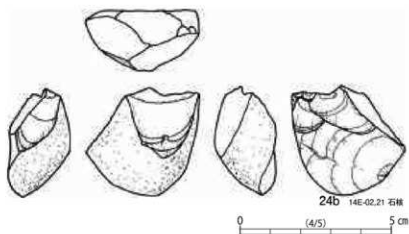
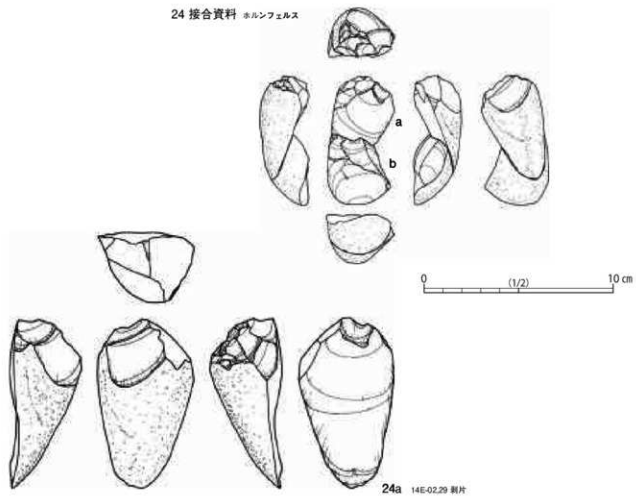


第190図 第11ブロック遺物 (13)



第191図 第11ブロック遺物 (14)

24 接合資料 ホルンフェルス

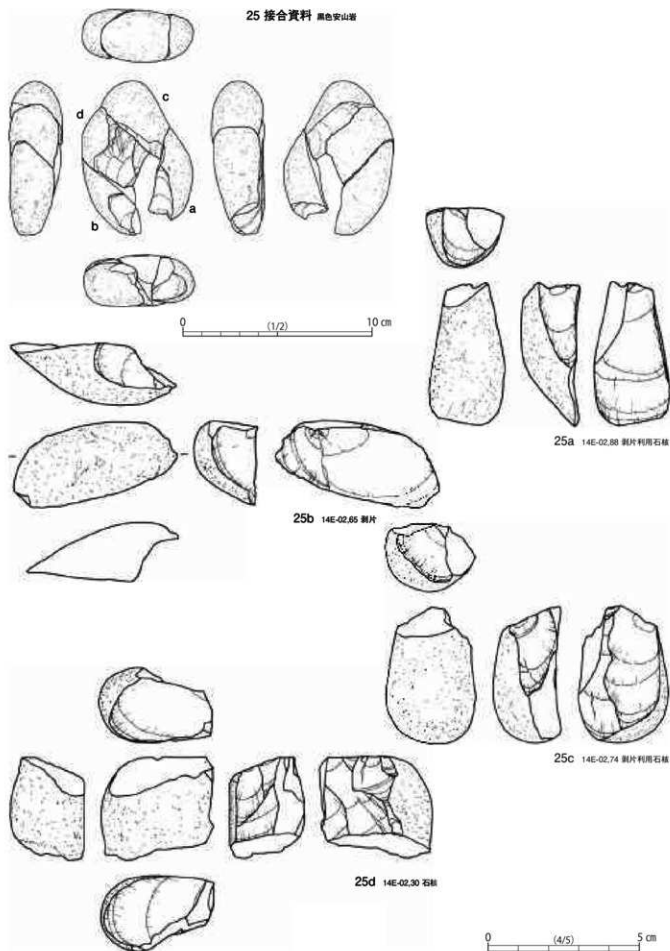


第192図 第11ブロック遺物(15)

し、素材剥片の作出より素材剥片作出のための石核の作出を意図した接合資料である。

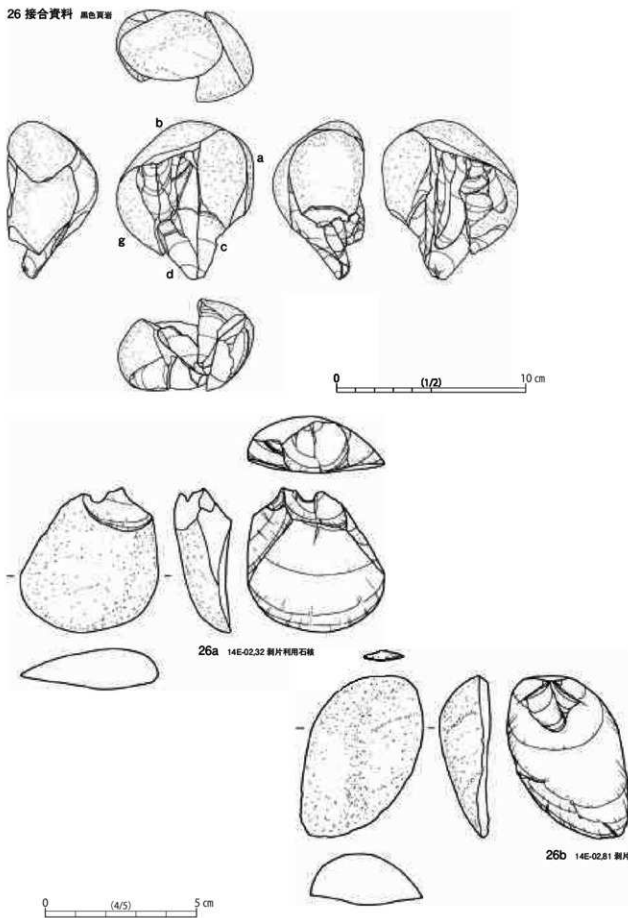
26は黒色頁岩製の接合資料である。剥片5点のほか剥片利用石核と石核が1点ずつ接合している。10cm程の転石を素材とし、下端から剥片剥離を開始している。26aはこの最初の工程で作出された剥片であり、作出後に打面を除去するように背面側から剥片剥離が行われている。26aの作出後、打面を素材

25 接合資料 黒色安山岩

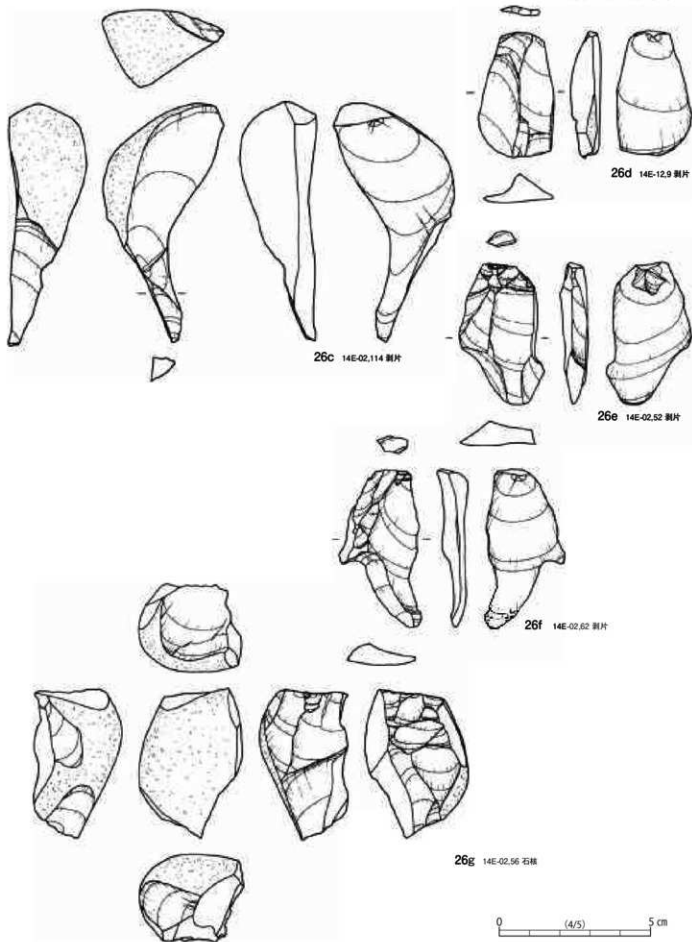


第193図 第11ブロック遺物 (16)

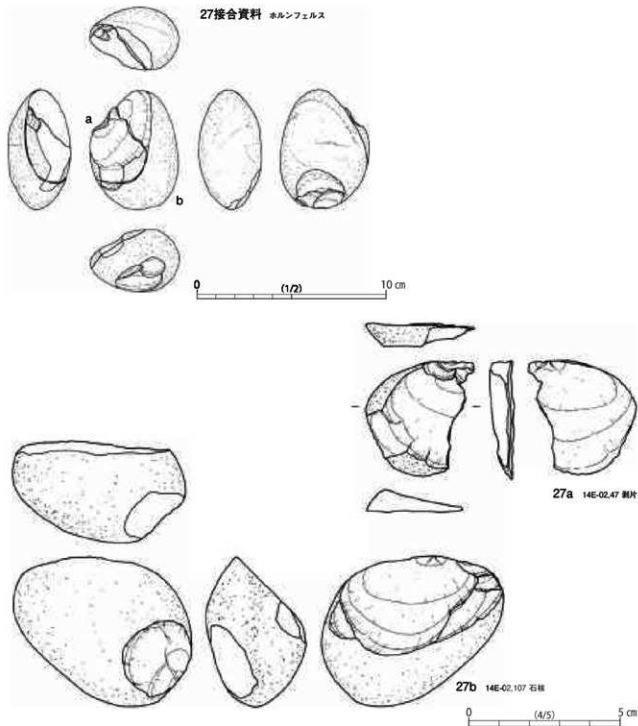
26 接合資料 褐色頁岩



第194図 第11ブロック遺物 (17)



第195図 第11ブロック遺物 (18)

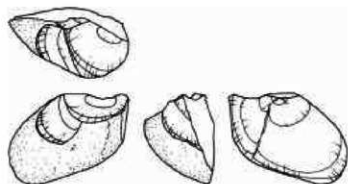
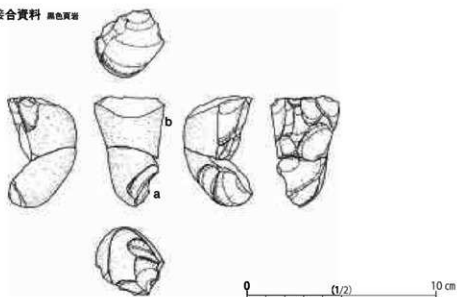


第196図 第11ブロック遺物(19)

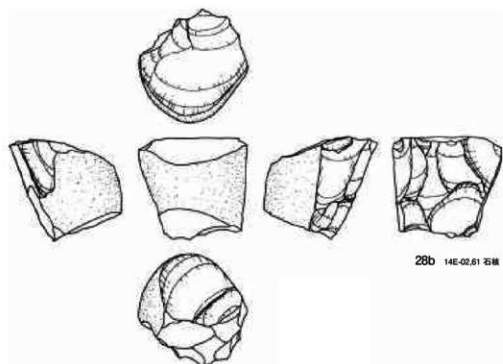
の上方に転移し 26 b が作出される。26 b は打面を作出する目的要素が強く窺え、ネガティブ面を打面とし 26 c が作出される。26 d は再度打面を下端に転移し作出される。26 c と同一打面からの連続的な剥片剥離も可能である形状であるが、この打面転移の意図は全く理解できない。さらに 26 e・26 f の作出は打面を上端に再度転移し打面再生後に行われる。同一打面からの連続的な剥片剥離で作出された剥片である。

27 はホルンフェルス製の接合資料である。小型の転石を素材としたもので、石核に剥片1点が接合し

28 接合資料 黒色頁岩



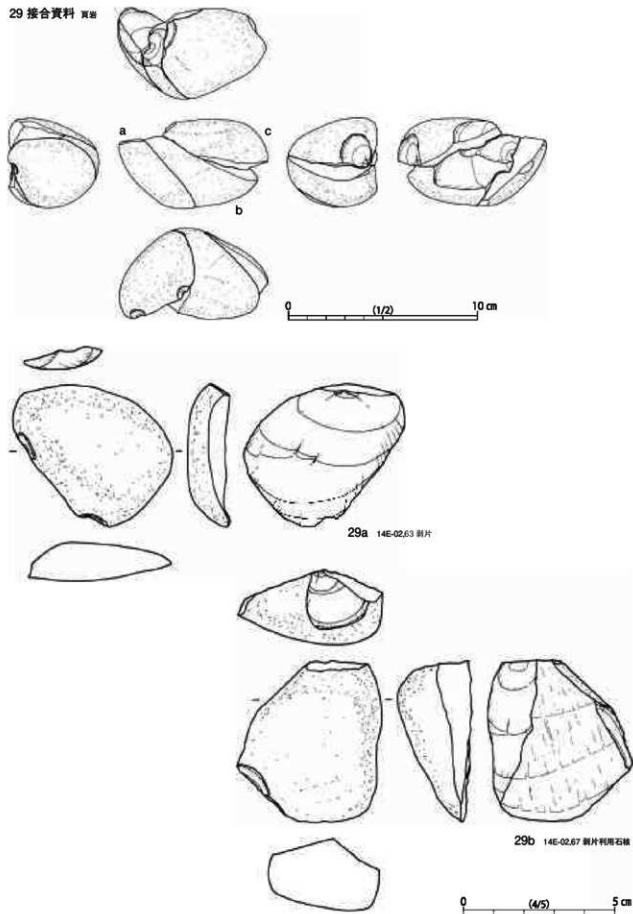
28a 14E-02.57 割片



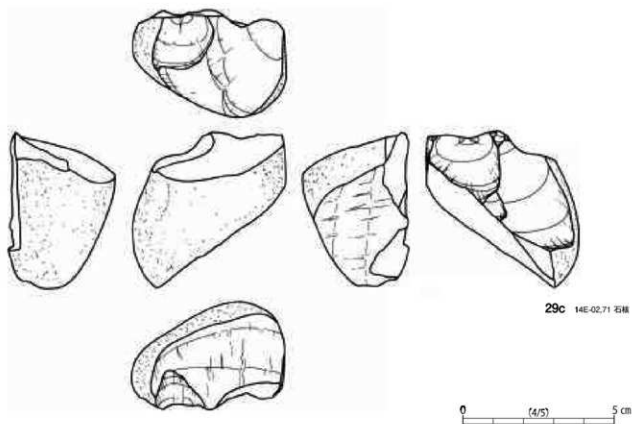
28b 14E-02.61 石核



第197図 第11ブロック遺物 (20)



第198図 第11ブロック遺物(21)



第199図 第11ブロック遺物 (22)

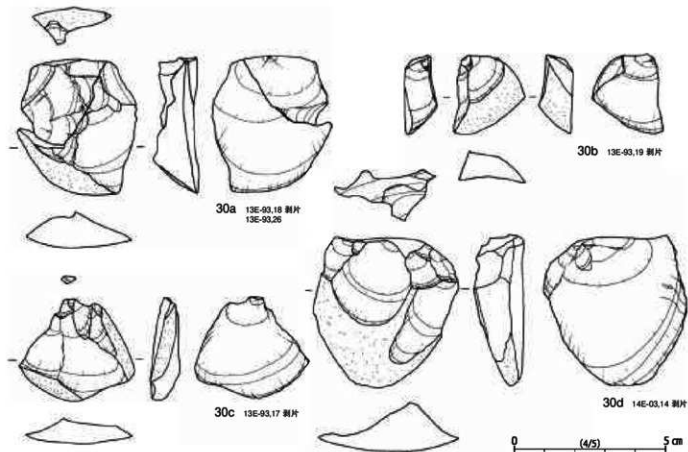
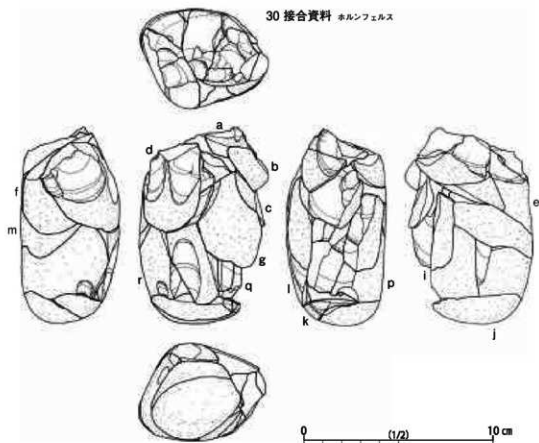
ている。剥片剥離は転石の下端から開始されているが3回の打撃に止め、打点を左上方に転移し剥片剥離を行うなかで27 aを作出した後、作業を終了している。

28は黒色頁岩製の接合資料である。剥片と石核の接合であり、28 bの石核の最終剥離面の向きからみると28 aの剥片が接合する位置は石核の下端に該当する。部厚な器体である点からも28 aは石核整形および打面作出を目的として作出された剥片と考えられる。

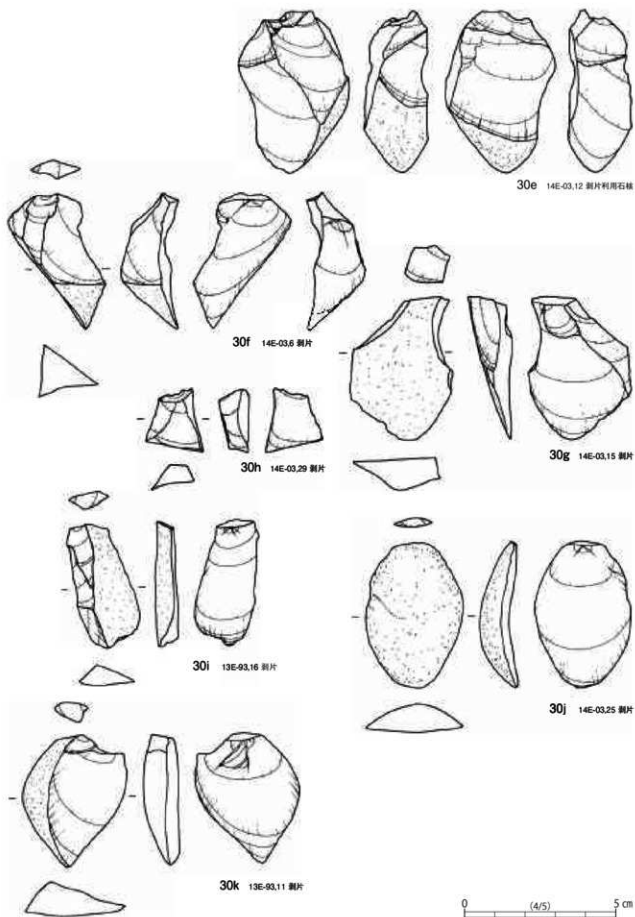
29は頁岩製の接合資料である。拳大の転石を素材とし、一端に打面作出の剥離を行い、この面を打面とし後輪切り状に29 aを作出する。29 bは29 aの作出時に節理面から分離したものであるため明確な打点は存在しない。29 bは作出後、上端の剥離面を打面として2回の剥片剥離が行われている。部厚な剥片を素材とした剥片利用石核である。29 cの石核に対する剥片剥離は29 aのネガティブ面を打面として行われている。

30はホルンフェルス製の接合資料である。長軸10cmを越える転石を利用し、棒状礫の一端に打面を設定することで剥片剥離作業を開始している。この工程で作出された剥片は30 aの打面再生剥片である。打面再生後に30 bから30 eが長軸方向に作出される。これらの形状は一定ではなく、素材剥片よりも石核整形を目的として作出された剥片である可能性が高い。特に30 eについては、部厚な剥片作出後に腹面を打面とし30 fの剥片が作出される。この後の工程で30 gから30 iが30 eのネガティブ面を打面として作出される。30 g・30 hは連続して作出され、30 hと30 iの作出は不連続であるため、この3点以上の企画性を持った剥片が作出されていたことが理解できる。この工程の後、打面を転移し初期に打面としていた面に正対する下部部に作業面を移動している。下部部に対しての打面の作出は30 j・30 kの

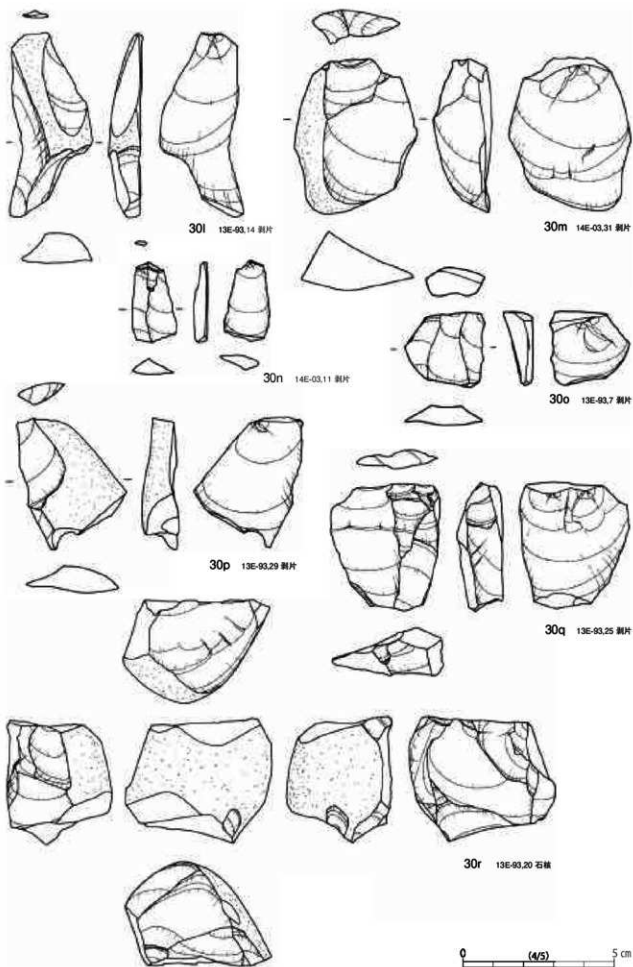
30 接合資料 ホルンフェルス



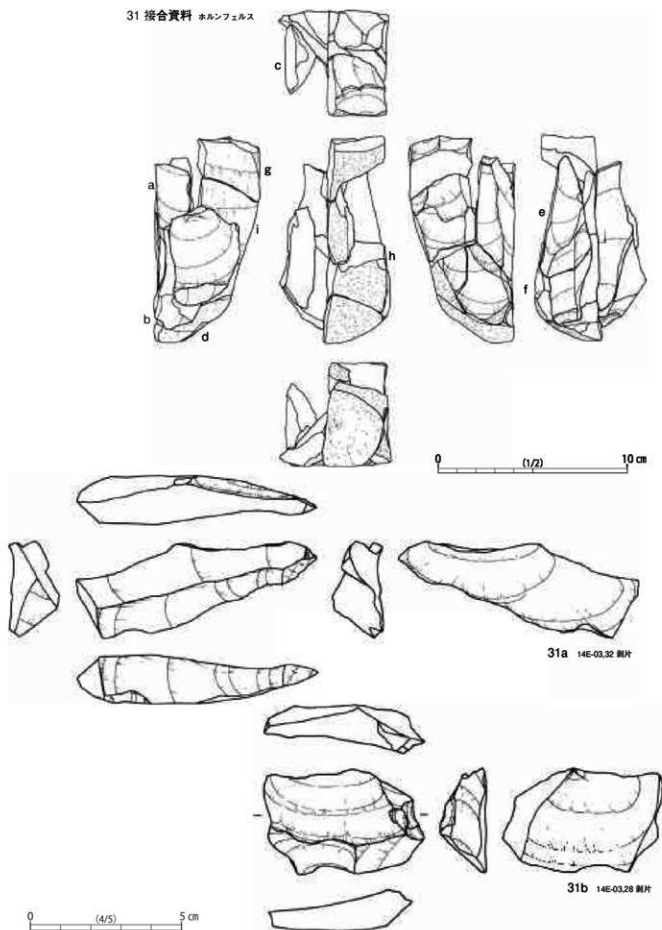
第200図 第11ブロック遺物(23)



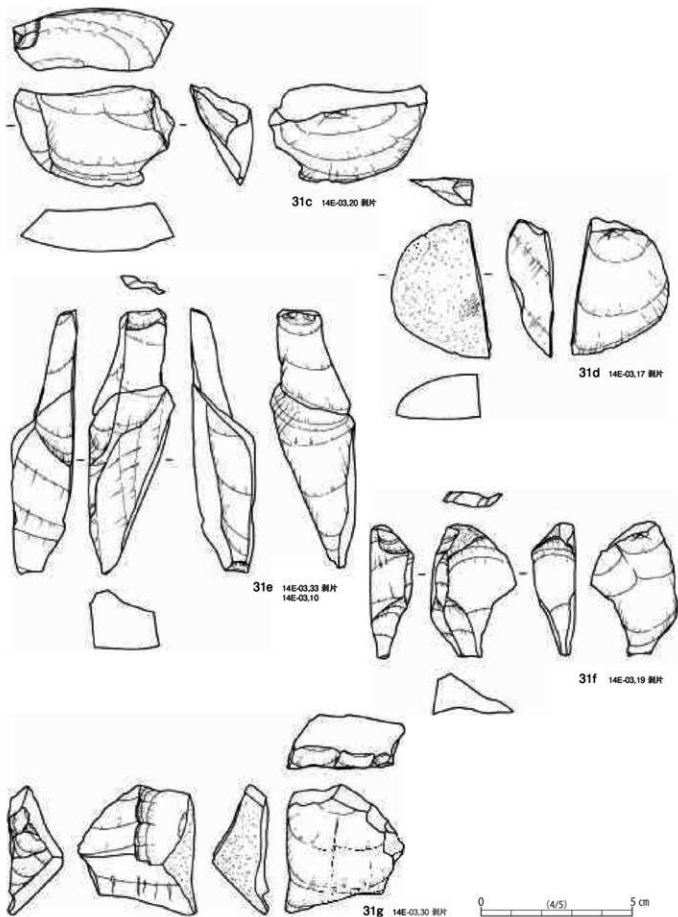
第201図 第11ブロック遺物 (24)



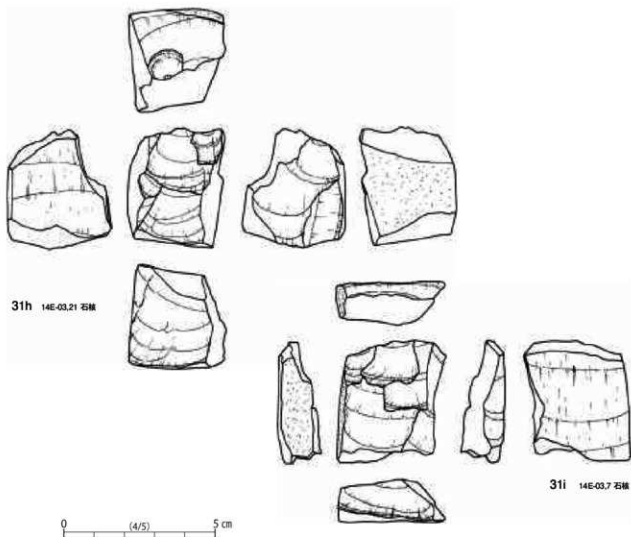
31 接合資料 ホルンフェルス



第203図 第11ブロック遺物 (26)



第204図 第11ブロック遺物(27)

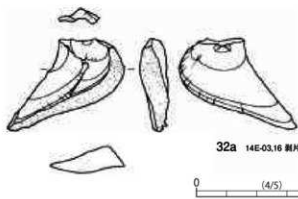
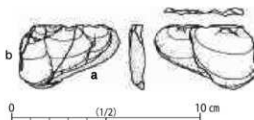


第205図 第11ブロック遺物 (28)

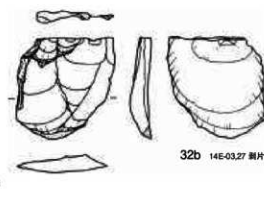
2点で行われ、この打面作出により上下両端に打面を有する石核となっている。下部に設定された打面から作出された剥片は30 iであるが、30 iの作出後、再び打面を上端側に設定し、30 mの打面再生剥片を作出することにより打面を上端側へ転移している。30 mのネガティブ面から作出された剥片は30 nから30 qであり、不連続ではあるが同一打面から剥片剥離を行っている。最終形態として30 rの石核となり、結果的に六面体に近い形状の石核といえる。上面の打面は30 mの剥片のネガティブ面、下面の打面は30 jと30 kの剥片のネガティブ面の複合面である。

31はホルンフェルス製の接合資料である。剥片剥離工程の途中で2分し、それぞれの石核に対し剥片剥離を行っている資料である。棒状の転石を素材としたものと考えられ、剥片剥離工程の初期段階で原礫の長軸方向に貫入する節理面で分離している。31 aから31 cは分離した一方の接合体であり、31 a・31 bは裏面方向に存在していた打面を共有し連続して作出されている。31 cは90°打面転移を行い作出される。31 dから31 iはもう一方の接合体を構成している。現状での最初の剥片剥離は末端部に対し行われており、31 dの作出がこれに該当する。31 dの作出後、ネガティブ面を打面とし31 e・31 fが作出されているため、31 dは打面作出を目的とした剥片と考えられる。31 gの作出は、前工程の作業後、打面

32 接合資料 黒色頁岩



32a 14E-03.16 鱗片



32b 14E-03.27 鱗片



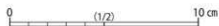
33 13E-03.9
雲山層 (トトロ石) 鱗石



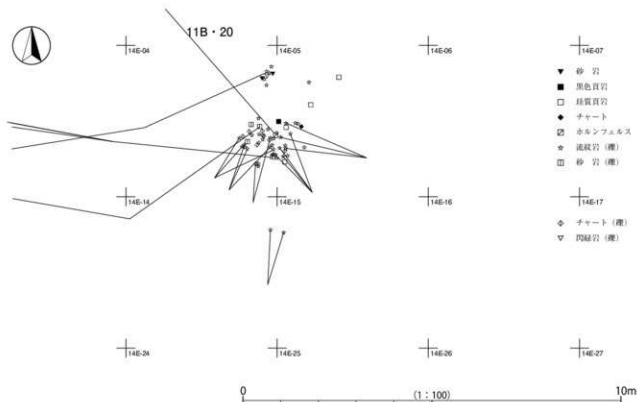
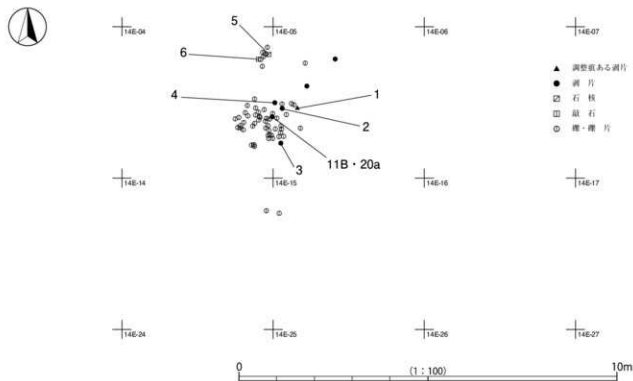
35 14E-02.58 砂岩 鱗石



34 14E-02.22
流紋岩 鱗石



第206図 第11ブロック遺物 (29)



第207図 第12ブロック分布



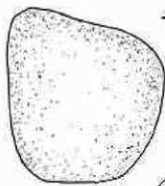
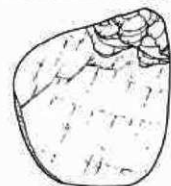
1 14E-05.7 チャート 調整痕ある割片

2 14E-05.6 埴貫貫通 割片

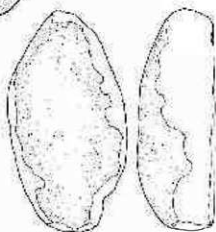


3 14E-05.20 埴貫貫通 割片

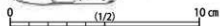
4 14E-05.5 黒色貫通 割片



5 14E-04A 砂岩 石楯



6 14E-04.23 砂岩 磁石



第208図 第12ブロック遺物

33から35は敲石である。33は安山岩(トトロ石)製の転石を利用したもので、礫の上下両端に剥落痕が顕著に認められる。石材の観点からは原石の可能性も考えられるが、上下両端に微細な剥落痕が密に認められることから敲石とした。34は流紋岩製の転石を利用しており、上下両端に敲打痕、特に下端には敲打痕に加え器体の中位にまで達する剥落痕が認められる。35は砂岩製の転石を利用し、下端および側面に微細な敲打痕が認められる。

第12ブロック(第207・208図、第34表、図版99)

調査区の北西、西に向かい延伸する瘦せ尾根状台地の付け根に所在し、標高50mを測る。

石器の出土点数は剥片石器9点、礫石器58の合計67点を数え、分布範囲は3mの範囲で収束する。石器の出土層位はⅢ層からⅤ層にかけてである。

定型的な石器は出土せず、調整痕の認められる剥片1点の他は剥片、石核である。砂岩製の敲石1点が出土する。

使用される石材は、珪質頁岩、黒色頁岩等であり、礫石器では流紋岩が大半を占める。

表34表 第12ブロック属性表

種別	層位	試片番号	器体番号	用途	形状	用途	用途	用途	用途	用途	用途		用途	用途	用途	用途	
											用途	用途					
剥片	Ⅴ	184-01	1	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-02	2	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-03	3	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-04	4	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-05	5	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-06	6	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-07	7	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-08	8	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-09	9	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-10	10	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-11	11	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-12	12	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-13	13	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-14	14	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-15	15	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-16	16	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-17	17	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-18	18	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-19	19	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-20	20	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-21	21	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-22	22	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-23	23	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-24	24	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-25	25	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-26	26	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-27	27	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-28	28	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-29	29	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-30	30	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-31	31	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-32	32	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-33	33	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-34	34	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断
剥片	Ⅴ	184-35	35	剥片	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断	片断

遺物

1はチャート製の調整痕の認められる剥片である。部厚な小型剥片を素材とし、背面の原礫面から腹面側に密な調整が施される。

2から4は剥片である。2・3は珪質頁岩製で、2の背面は打割面と思われる一枚の剥離で占められ、また腹面側には原礫面がみられる。打面再生剥片か石核整形剥片と考えられる。3は扁平な作りで、背面は打点と逆方向からの剥離で構成される。打面を180°転移した後最初に作出された剥片と考えられる。4は黒色頁岩製で薄い作りである。打面側が欠損する。

5は砂岩製の石核である。転石を利用し節理面から打割している。剥片剥離作業は打面を作出せず原礫面を打面とし、節理面に沿うように行われている。

6は砂岩製の敲石である。転石の全周に敲打による潰れがみられ、特に片端部の敲打痕は著しく部分的に平坦となる。

第13ブロック（第209～212図、第35表、図版100・101）

調査区の北西、西に向かい延伸する痩せ尾根状台地の付け根に所在し、標高50mを測る。

石器の出土点数は合計32点を数え、分布範囲は南北6m、東西4mの範囲で収束する。分布密度は全体的に疎である。石器の出土層位はⅣ層からⅥ層にかけてであり、特にⅥ層上面付近に偏差が認められる。

定型的な石器は玉髄製の削器、黒曜石製の搔器があげられる。使用痕の認められる剥片は嶺岡産珪質頁岩製等8点を数える。

使用される石材は、玉髄、黒曜石を主体とし、嶺岡産珪質頁岩、珪質頁岩、安山岩等多様である。黒曜石については信州和田峠産の分析結果が出ている。

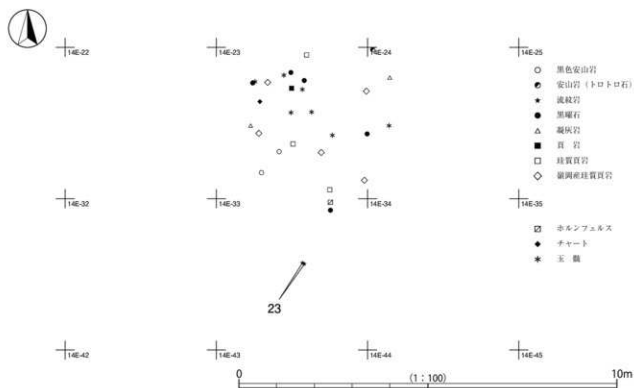
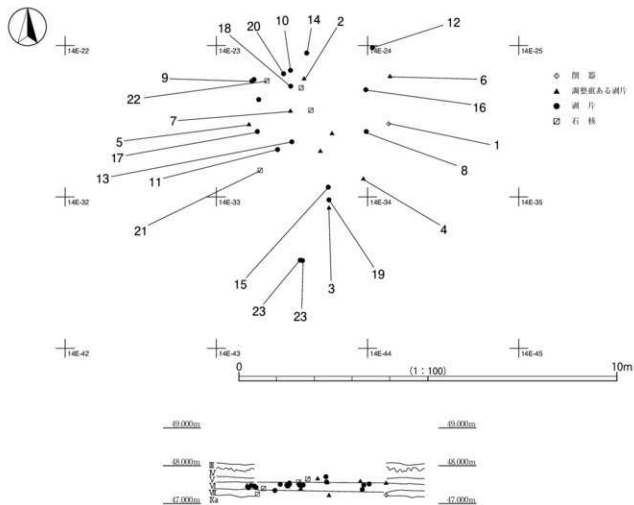
遺物

1は玉髄製の削器である。部厚な縦長剥片を素材とし、刃部の作出は主に左側縁に対し腹面側からのみ行われている。

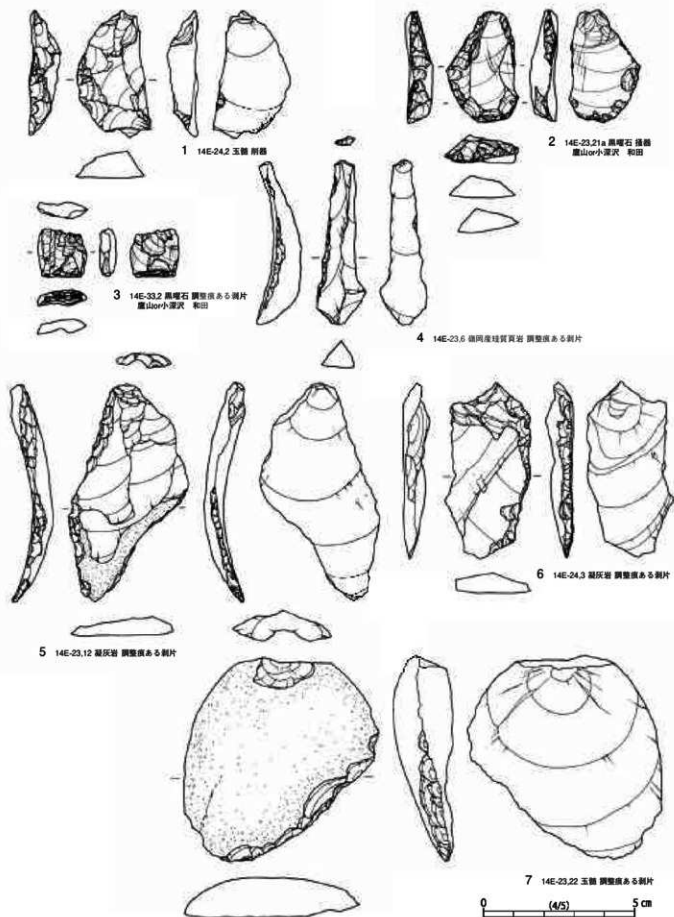
2は黒曜石製の搔器である。縦長剥片を素材とし、末端部に腹面側からの急角度の調整により刃部を作

第35表 第13ブロック属性表

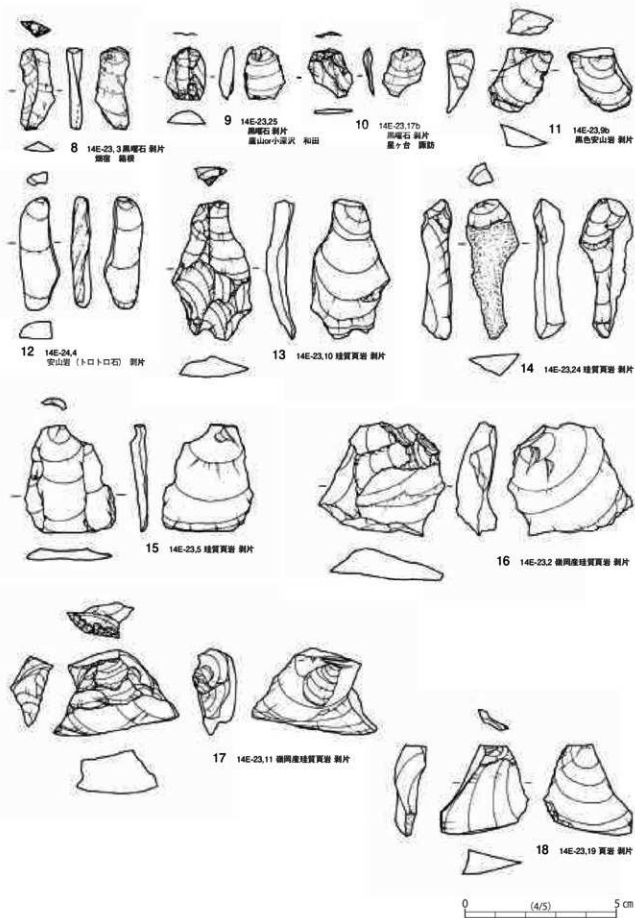
図版 番号	層位	層位 番号	遺物 番号	種類	材料	用途	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
Y.10	14.02.01	1	1	調整痕のある剥片	チャート	剥片	2	15.0	9.0	0.1	0.075(28)	103.150
Y.10	14.02.01	1	2	剥片	チャート	剥片	19	27.0	15.0	0.7	0.075(29)	103.150
Y.10	14.02.01	1	3	剥片	黒曜石	剥片	20	20.0	26.7	0.7	0.075(30)	103.150
Y.10	14.02.01	1	4	剥片	黒曜石	剥片	23	20.0	17.0	0.6	0.075(31)	103.150
Y.10	14.02.01	2	5	剥片	土曜	剥片	3	41.0	24.0	0.1	0.075(32)	103.150
Y.10	14.02.01	2	6	調整痕のある剥片	黒曜石	剥片	4	30.0	20.0	0.9	0.075(33)	103.150
Y.10	14.02.01	2	7	剥片	黒曜石(和田峠産)	剥片	10	20.0	12.0	0.3	0.075(34)	103.150
Y.10	14.02.01	2	8	剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	19	27.0	14.0	0.3	0.075(35)	103.150
Y.10	14.02.01	2	9	剥片	玉髄	削器	8	27.0	11.0	0.9	0.075(36)	103.150
Y.10	14.02.01	2	10	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	16	18.0	12.0	0.8	0.075(37)	103.150
Y.10	14.02.01	2	11	剥片	珪質頁岩	剥片	22	25.0	20.0	0.5	0.075(38)	103.150
Y.10	14.02.01	2	12	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	4	14.0	12.0	0.3	0.075(39)	103.150
Y.10	14.02.01	2	13	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	7	26.0	20.0	0.3	0.075(40)	103.150
Y.10	14.02.01	2	14	剥片	珪質頁岩	剥片	11	21.0	21.0	0.9	0.075(41)	103.150
Y.10	14.02.01	2	15	剥片	珪質頁岩	剥片	10	19.0	26.0	0.2	0.075(42)	103.150
Y.10	14.02.01	2	16	剥片	珪質頁岩	剥片	15	19.0	26.0	0.2	0.075(43)	103.150
Y.10	14.02.01	2	17	剥片	黒曜石	剥片	17	26.0	19.0	0.3	0.075(44)	103.150
Y.10	14.02.01	2	18	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	5	7.0	26.0	0.3	0.075(45)	103.150
Y.10	14.02.01	2	19	剥片	チャート	剥片	7	27.0	22.0	0.3	0.075(46)	103.150
Y.10	14.02.01	2	20	剥片	土曜	剥片	1	18.0	21.0	0.3	0.075(47)	103.150
Y.10	14.02.01	2	21	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	23	26.0	22.0	0.3	0.075(48)	103.150
Y.10	14.02.01	2	22	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	20	26.0	20.0	0.3	0.075(49)	103.150
Y.10	14.02.01	2	23	剥片	土曜	剥片	7	26.0	27.0	0.8	0.075(50)	103.150
Y.10	14.02.01	2	24	剥片	土曜	剥片	10	18.0	14.0	0.9	0.075(51)	103.150
Y.10	14.02.01	2	25	剥片	珪質頁岩	剥片	21	24.0	20.0	0.9	0.075(52)	103.150
Y.10	14.02.01	2	26	剥片	珪質頁岩	剥片	18	20.0	20.0	0.1	0.075(53)	103.150
Y.10	14.02.01	2	27	剥片	土曜	剥片	7	18.0	19.0	0.1	0.075(54)	103.150
Y.10	14.02.01	2	28	調整痕のある剥片	嶺岡産珪質頁岩	剥片	5	10.0	19.0	0.1	0.075(55)	103.150
Y.10	14.02.01	2	29	調整痕のある剥片	土曜	剥片	11	11.0	21.0	0.3	0.075(56)	103.150
Y.10	14.02.01	2	30	調整痕のある剥片	土曜	剥片	7	47.0	46.0	1.0	0.075(57)	103.150
Y.10	14.02.01	2	31	調整痕のある剥片	土曜	剥片	21	46.0	27.0	0.3	0.075(58)	103.150
Y.10	14.02.01	2	32	調整痕のある剥片	土曜	剥片	14	46.0	27.0	0.1	0.075(59)	103.150
Y.10	14.02.01	2	33	調整痕のある剥片	土曜	剥片	8	18.0	13.0	0.3	0.075(60)	103.150



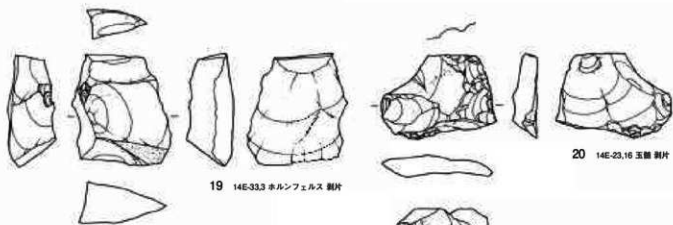
第209図 第13ブロック分布



第210図 第13ブロック遺物(1)

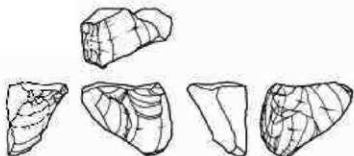


第211図 第13ブロック遺物 (2)

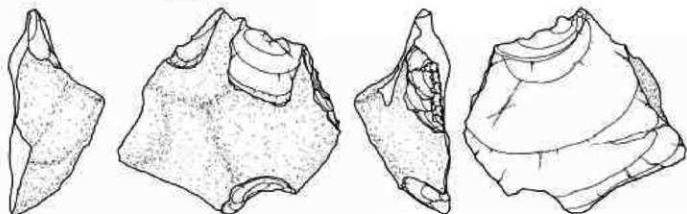


19 14E-33.3 ホルンフェルス 割片

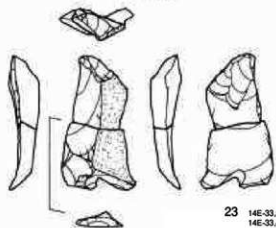
20 14E-23.16 玉髄 割片



21 14E-23.18 黒色安山岩 石核



22 14E-23.15 噴火産地質頁岩 石核



23 14E-33.5 流紋岩 割片
14E-33.4



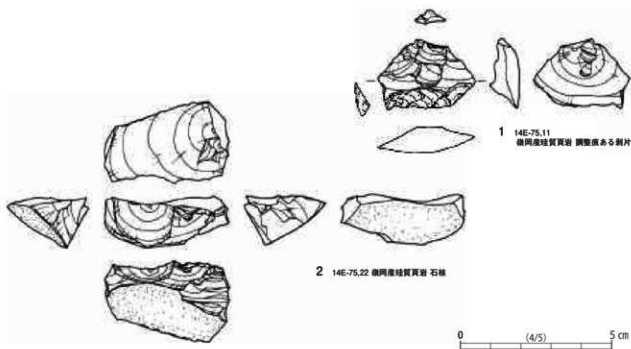
第212図 第13ブロック遺物(3)

成している。また左側縁及び右側縁の打面付近にも調整が施されるが、末端部とは異なる浅い角度の調整となる。

3から7は調整痕の認められる剥片である。3は黒曜石製の小型剥片の打面及び末端部から調整を施し、楔形石器状の形状となる。4は嶺岡産珪質頁岩製の縦長剥片の左側縁に、腹面側からの調整が施される。5・6は凝灰岩製の大型縦長剥片の側縁に対し調整が施される。7は玉髄製的大型剥片を素材とし、右側縁から末端部にかけて調整が施される。

8から20及び23は剥片である。8から10は黒曜石製の小型剥片で、結果として縦長剥片となるものの、背面構成は多方向からの剥離によるため企画性は感じられない。11は黑色安山岩製で、打面に対し長軸が斜行する縦長剥片である。12は安山岩(トトロ石)製の縦長剥片である。器表面の風化が著しいため剥離の方向の確認に難があるが、背面は単純で一枚の剥離のみで構成される。13から15は珪質頁岩製の大型剥片である。概して縦長の形状であるが、背面構成は13が多方向からの剥離、14が原礫面、15が打面方向からの剥離となる。16・17は嶺岡産珪質頁岩製である。大型の不定形剥片であり、背面構成は多方向からの剥離で構成される。18は頁岩製で、末端部付近に最大幅を持つ形状である。末端部の形状は僅かにヒンジ・フラクチュアとなる。19はホルンフェルス製で部厚な不定形剥片である。左側縁を打面とし剥片剥離を行った痕跡が明瞭に観察できる。20は玉髄製で末端部付近に最大幅を持つ形状である。背面の剥離方向は両側縁側からと腹面側からである。23は流紋岩製で、剥片剥離の際に中途から2分している。形状は縦長であり、背面末端部には腹面側からの剥離が認められる。

21は黑色安山岩製、22は嶺岡産珪質頁岩製の石核である。21は逆円錐形に近い形状を呈し、裏面にみられる一枚の剥離から剥片素材の石核と考えられる。22は大型剥片を素材とし、腹面を打面とし連続的に小型剥片を作出している。



第213図 第14ブロック遺物



+14E64

+14E65

+14E66

+14E67

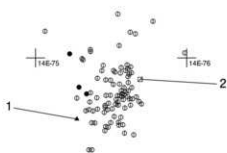
- ▲ 調整池ある洞片
- 洞片
- 石杭
- 樫・樫片

+14E74

+14E75

+14E76

+14E77



+14E84

+14E85

+14E86

+14E87

0 (1:100) 10m



+14E64

+14E65

+14E66

+14E67

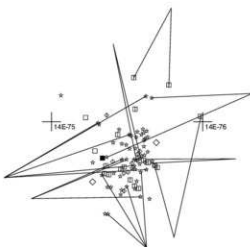
- 柱貫貫岩
- ◇ 銅貫貫岩
- 黒色貫岩
- * 流紋岩 (埋)
- 砂岩 (埋)
- ◇ チャート (埋)

+14E74

+14E75

+14E76

+14E77



+14E84

+14E85

+14E86

+14E87

0 (1:100) 10m

第214図 第14ブロック分布

第15ブロック (第215・216図、第37表、図版61・101)

南北に長い調査区のほぼ中央付近、標高50mの台地平坦部に所在する。

石器の出土点数は剥片石器2点、礫石器59点の合計61点を数え、分布範囲は直径5mの範囲で取束する。分布範囲の北側に2か所密集箇所が認められる。出土層位はⅢ層からⅥ層にかけてであり、特にⅣ層下部付近に偏差が認められる。

定型的な石器はなく、チャート製の剥片、黒色安山岩製の石核が出土する。礫石器については流紋岩、砂岩を主体とし、チャート、安山岩、玉髄が使用される。

遺物

- 1はチャート製の小型不定形剥片である。薄い作りで打面部分が欠損している。
- 2は黒色安山岩製の石核である。転石を利用し打面を作成せず一回のみの剥片剥離を行っている。

第16ブロック (第217～219図、第38表、図版61・102)

南北に長い調査区のほぼ中央付近、標高50mの台地緩斜面部に所在する。

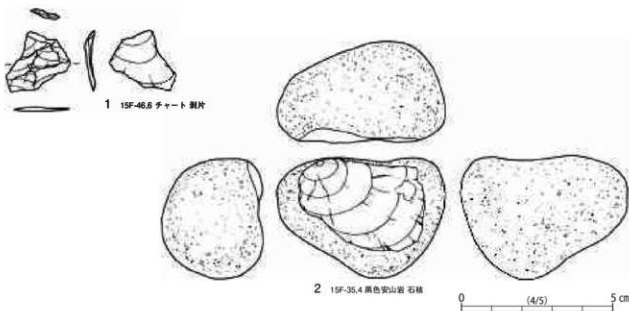
石器の出土点数は剥片石器4点、礫石器153点の合計157点を数え、分布は直径4mの範囲で取束する。分布密度は全体的に均一である。石器の出土層位はⅢ層からⅥ層にかけてであり、特にⅣ層上面付近に偏差が認められる。

定型的な石器はなく、チャート製の調整痕の認められる剥片1点の他は黒色安山岩製、ホルンフェルス製の剥片である。礫石器に使用される石材は流紋岩、チャートを主体に砂岩、玉髄、ホルンフェルスであり、第17ブロックと接合関係が認められる。

遺物

1はチャート製の調整痕の認められる剥片である。小型の不定形剥片を素材とし、打面を除去するように調整が施される。

2は黒色安山岩製の接合資料である。連続して作出された剥片2点の接合であるが、同一打面からではなく打面転移を行い作出されたものである。



第215図 第15ブロック遺物



15F-34

15F-35

15F-36

15F-37

- 酒 丹
- ☒ 石 杭
- 樫・櫻 片

15F-44

15F-45

15F-46

15F-47

15F-54

15F-55

15F-56

15F-57

0 (1:100) 10m

51,000m

50,000m

49,000m



51,000m

50,000m

49,000m

M N-V



15F-34

15F-35

15F-36

15F-37

- 黒色安山岩
- チャート
- * 流紋岩 (層)
- 安山岩 (層)
- ◇ チャート (層)
- 砂 岩 (層)
- ⊙ 玉 肌 (層)

15F-44

15F-45

15F-46

15F-47

15F-54

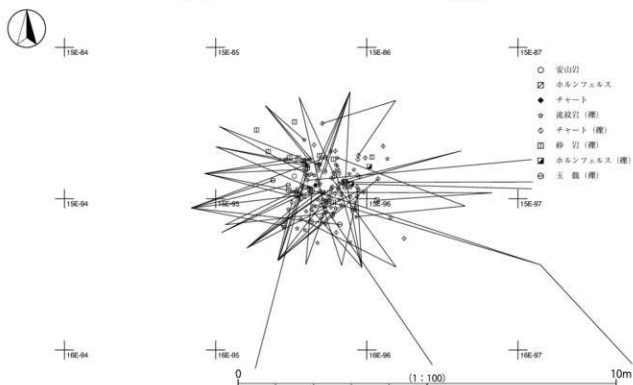
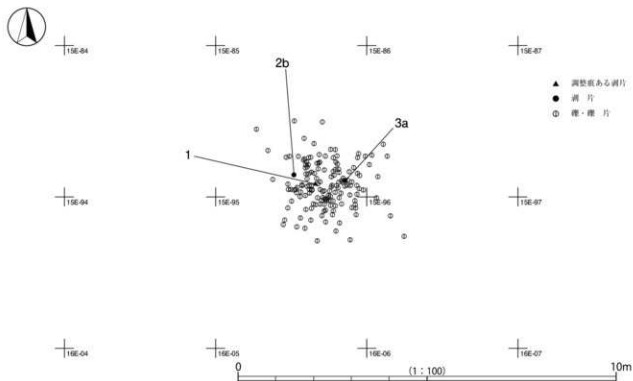
15F-55

15F-56

15F-57

0 (1:100) 10m

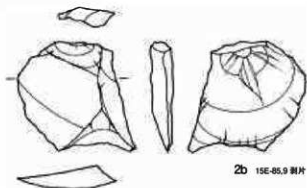
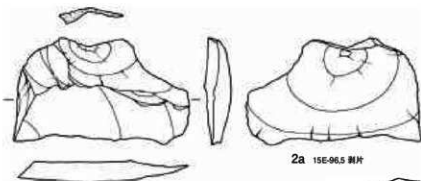
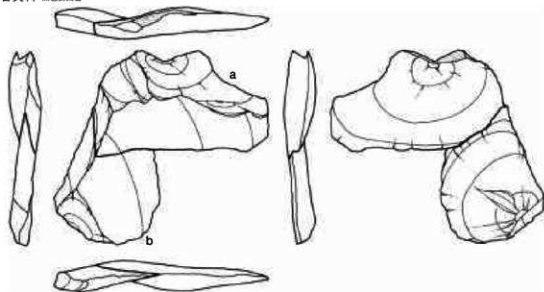
第216図 第15ブロック分布



第218図 第16ブロック分布 (2)

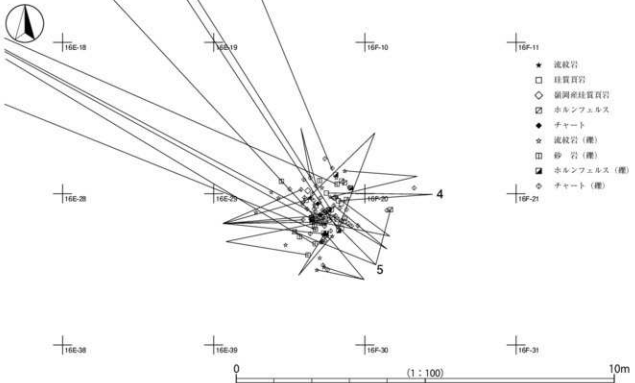
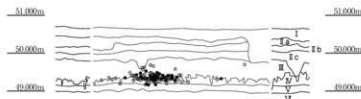
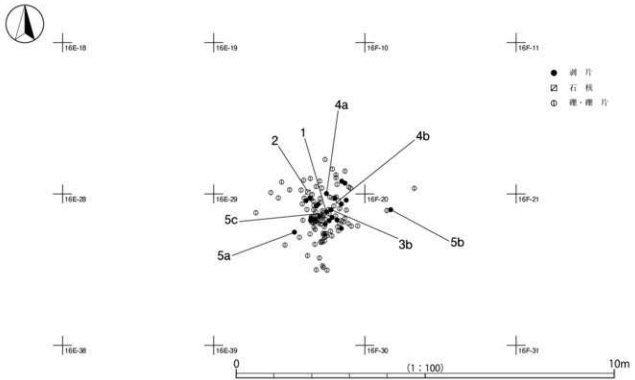


2 接合資料 黒色安山岩

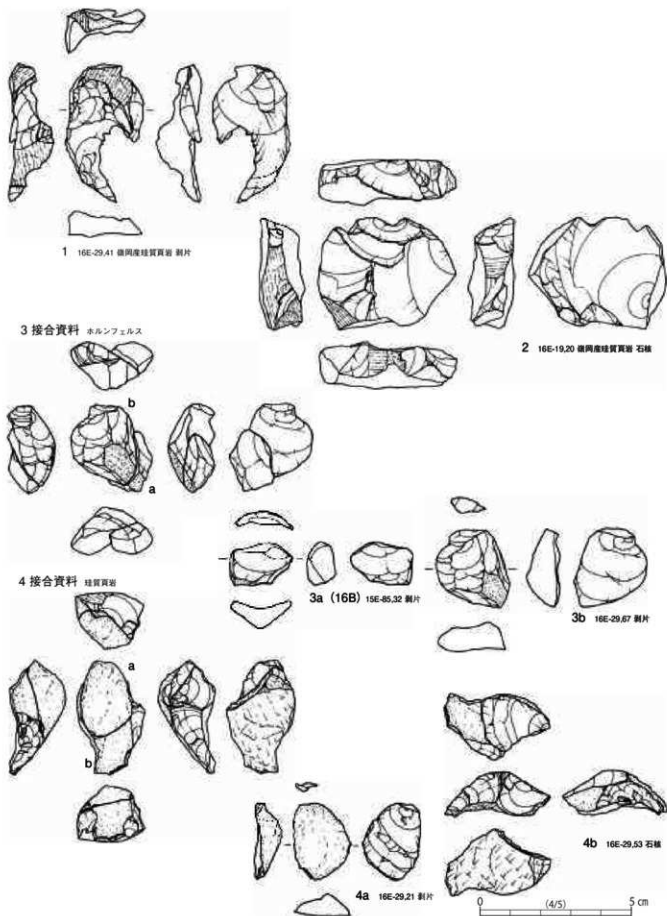


0 (4/5) 5 cm

第219図 第16ブロック遺物

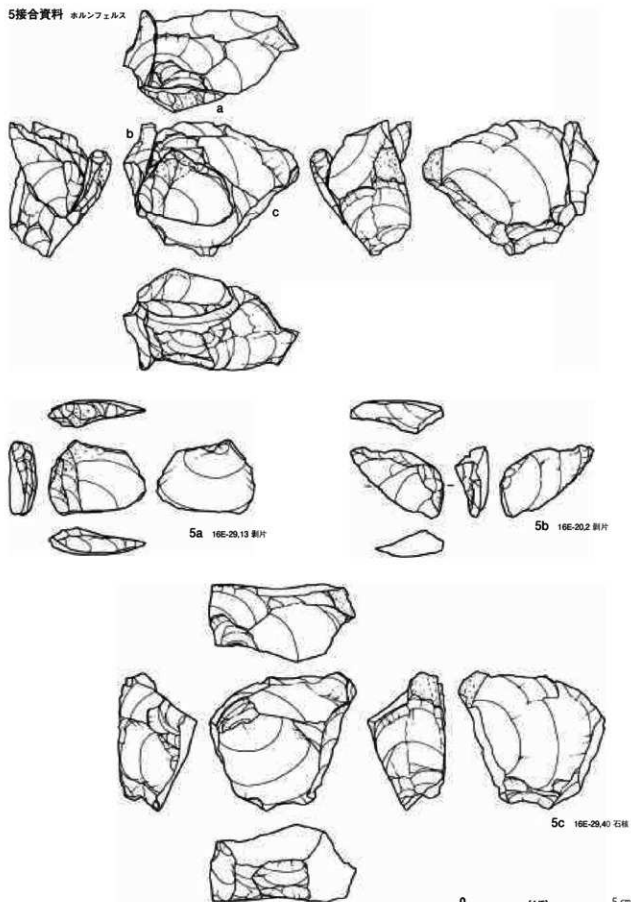


第220図 第17ブロック分布



第221図 第17ブロック遺物(1)

5接合資料 ホルンフェルス



第222図 第17ブロック遺物(2)

土器名	バウ ヤム	グロ ムロ	遺物 番号	出土 位置	名称	石種	形状 量数	長さ 量数	幅 量数	最大径 mm	最大径 mm	最大径 mm	厚さ mm	重量 g	土層別 出土	土層別 出土	土層別 出土	備 考
卑土器	181-01	181-01	181	掘削	磁器									36	41770-01	41770-01	41770-01	
卑土器	181-02	181-02	182	掘削	磁器									20	41770-02	41770-02	41770-02	
卑土器	181-03	181-03	183	掘削	磁器									112	41770-03	41770-03	41770-03	
卑土器	181-04	181-04	184	掘削	磁器									23	41770-04	41770-04	41770-04	
卑土器	181-05	181-05	185	掘削	磁器									263	41770-05	41770-05	41770-05	
卑土器	181-06	181-06	186	掘削	磁器									263	41770-06	41770-06	41770-06	
卑土器	181-07	181-07	187	掘削	磁器									63	41770-07	41770-07	41770-07	
卑土器	181-08	181-08	188	掘削	磁器									163	41770-08	41770-08	41770-08	
卑土器	181-09	181-09	189	掘削	磁器									73	41770-09	41770-09	41770-09	
卑土器	181-10	181-10	190	掘削	磁器									224	41770-10	41770-10	41770-10	
卑土器	181-11	181-11	191	掘削	磁器									113	41770-11	41770-11	41770-11	
卑土器	181-12	181-12	192	掘削	磁器									20	41770-12	41770-12	41770-12	
卑土器	181-13	181-13	193	掘削	磁器									143	41770-13	41770-13	41770-13	
卑土器	181-14	181-14	194	掘削	磁器									46	41770-14	41770-14	41770-14	
卑土器	181-15	181-15	195	掘削	磁器									60	41770-15	41770-15	41770-15	
卑土器	181-16	181-16	196	掘削	磁器									103	41770-16	41770-16	41770-16	
卑土器	181-17	181-17	197	掘削	磁器									30	41770-17	41770-17	41770-17	
卑土器	181-18	181-18	198	掘削	磁器									30	41770-18	41770-18	41770-18	
卑土器	181-19	181-19	199	掘削	磁器									144	41770-19	41770-19	41770-19	
卑土器	181-20	181-20	200	掘削	磁器									10	41770-20	41770-20	41770-20	

第17ブロック(第220～222図、第39表、図版61・102・103)

南北に長い調査区のほぼ中央付近、標高50mの台地平坦部に所在する。

石器の出土点数は剥片石器26点、礫石器95点の合計111点を数え、分布範囲は直径4mの範囲で取戻す。石器の出土層位はⅢ層からⅤ層にかけてであり、特にⅣ層下部付近に偏差が認められる。

定型的な石器はなく、剥片、石核、礫で構成される。使用される石材は、剥片石器がホルンフェルスを主体とし、珪質頁岩、流紋岩等が使用される。礫石器ではチャートが半数を占め、流紋岩、砂岩等が使用される。

遺物

1は嶺岡産珪質頁岩製の剥片である。不定形剥片で、背面には側面からの剥片剥離の痕跡が明瞭に観察できる。

2は嶺岡産珪質頁岩製の石核である。部厚な剥片を素材とし、側縁に対し腹面側からの打撃により剥片剥離を行っている。

3はホルンフェルス製の接合資料である。部厚な小型不定形剥片2点の接合であり、3aの作出後打面転移を行い3bが作出されている。

4は珪質頁岩製の接合資料である。4aの作出後、ネガティブ面を打面として剥片剥離作業を行っている。頻繁に打面を転移する剥片剥離のなかで節理面から分離していることが理解できる。

5はホルンフェルス製の接合資料である。5a・5bは同一打面から作出されており、2点の剥片の作出後に打面再生が行われている。

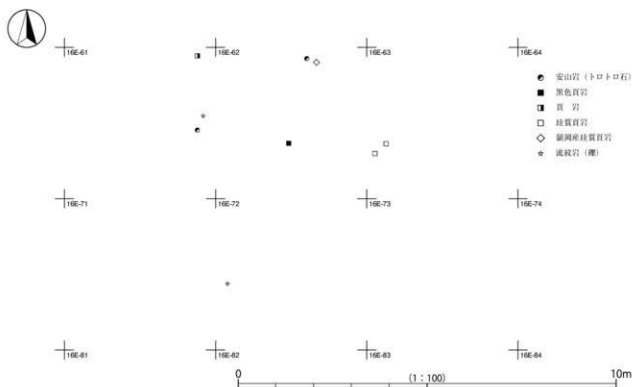
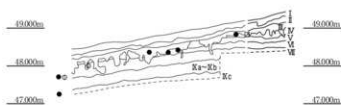
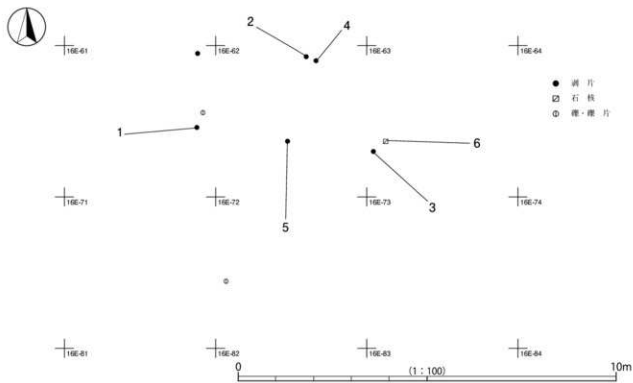
第18ブロック(第223～225図、第40表、図版61・103・104)

南北に長い調査区のほぼ中央付近、標高50mの台地緩斜面部に所在する。

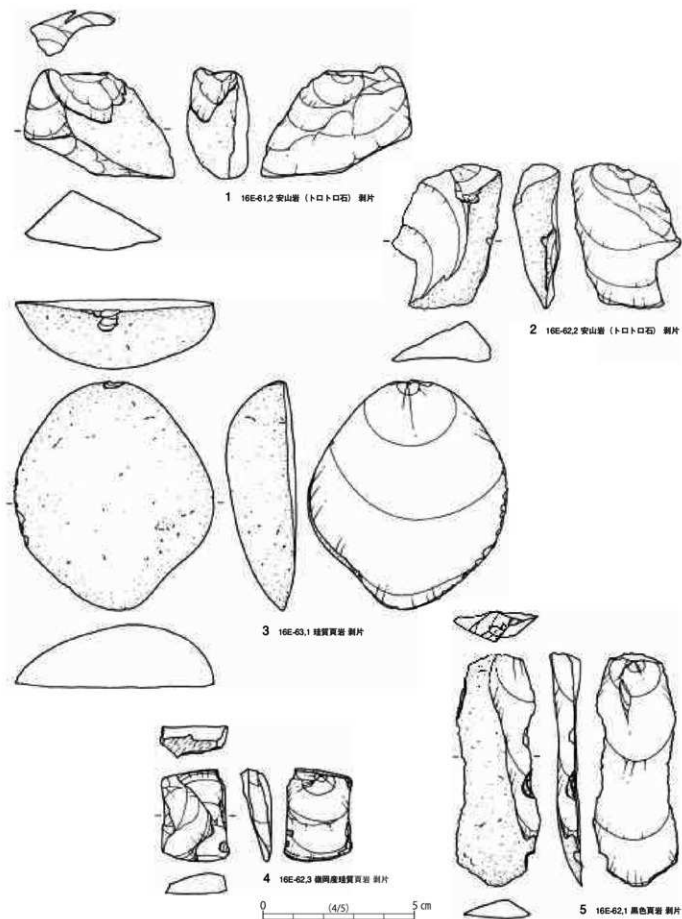
石器の出土層位は剥片石器7、礫石器2点の合計9点を数え、分布範囲は南北6m、東西5mの範囲に散漫に出土する。緩斜面に所在するため明確ではないが、Ⅲ層からⅥ層にかけて出土している。

第40表 第18ブロック属性表

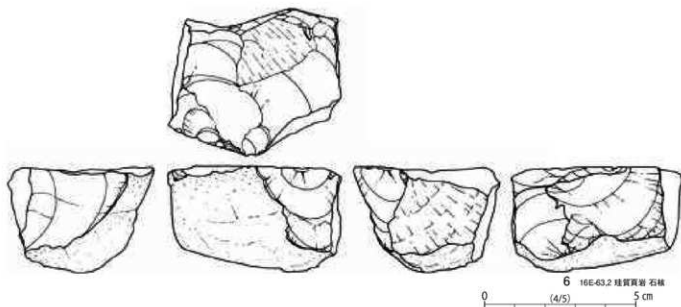
土器名	バウ ヤム	グロ ムロ	遺物 番号	出土 位置	名称	石種	形状 量数	長さ 量数	幅 量数	最大径 mm	最大径 mm	最大径 mm	厚さ mm	重量 g	土層別 出土	土層別 出土	土層別 出土	備 考
卑土器	181-21	181-21	201	掘削	磁器									71	41770-21	41770-21	41770-21	
卑土器	181-22	181-22	202	掘削	磁器									124	41770-22	41770-22	41770-22	
卑土器	181-23	181-23	203	掘削	磁器									18	41770-23	41770-23	41770-23	
卑土器	181-24	181-24	204	掘削	磁器									27	41770-24	41770-24	41770-24	
卑土器	181-25	181-25	205	掘削	磁器									47	41770-25	41770-25	41770-25	
卑土器	181-26	181-26	206	掘削	磁器									10	41770-26	41770-26	41770-26	
卑土器	181-27	181-27	207	掘削	磁器									10	41770-27	41770-27	41770-27	
卑土器	181-28	181-28	208	掘削	磁器									10	41770-28	41770-28	41770-28	
卑土器	181-29	181-29	209	掘削	磁器									11	41770-29	41770-29	41770-29	



第223図 第18ブロック分布



第224図 第18ブロック遺物 (1)



第 225 図 第 18 ブロック遺物 (2)

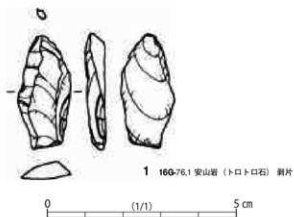
剥片、石核、礫で構成され、使用される石材は多種であり、安山岩（トトロ石）、頁岩、黒色頁岩、珪質頁岩、嶺岡産珪質頁岩である。礫石器では流紋岩のみ使用される。

遺物

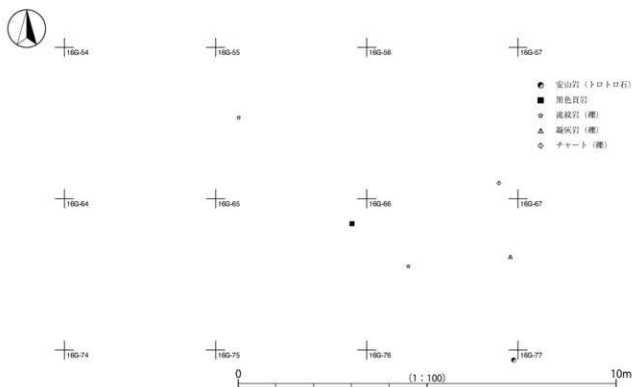
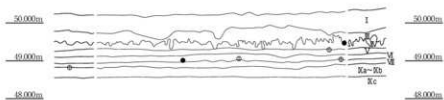
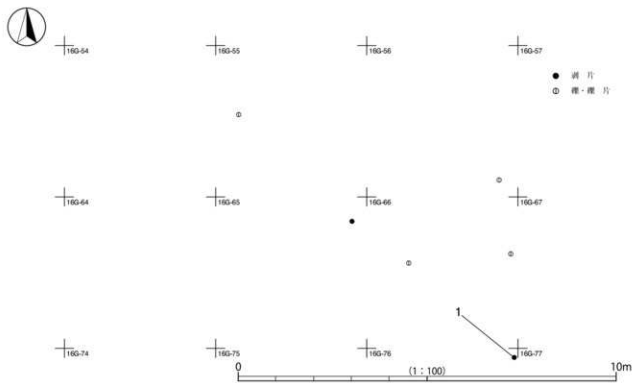
1から5は剥片である。1・2は安山岩（トトロ石）製で、大型で部厚な不定形剥片である。共に背面に原礫面を有する。2の打面は剥片剥離時に欠損するが、1にみられる打面は単一打面で広く設定して剥片剥離を行っている。3は珪質頁岩製の大型剥片である。背面にはほぼ原礫面で占められ、背面の打面付近にみられる剥離は剥片作出時の剥落によるものである。4は嶺岡産珪質頁岩製で、節理面を打面に設定して作出されている。背面は多方向からの剥離で構成される。5は黒色頁岩製の縦長剥片である。背面には原礫面が大きくみられ、打面には剥片剥離の際の頭部調整痕が認められる。

第 41 表 第 19 ブロック属性表

石種	片	コア	核	礫	石核	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片	石片
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
Y形	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100



第 226 図 第 19 ブロック遺物



第227図 第19ブロック分布

6は珪質頁岩製の石核である。転石を利用し、底面及び正面に原礫面を残すように剥片剥離を行っており、このため直方体に近い六面体の形状を呈する。

第19ブロック（第226・227図、第41表、図版62・104）

南北に長い調査区のほぼ中央付近、標高51mの台地平坦部に所在する。

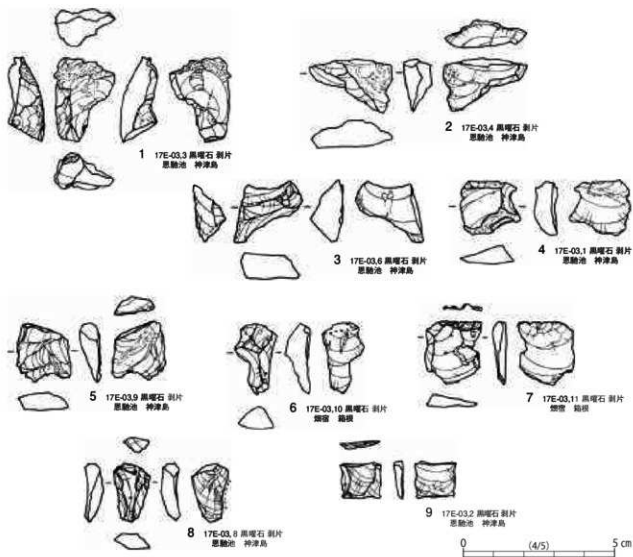
石器の出土点数は剥片石器2点、礫石器4点の合計6点を数え、分布範囲は8mの範囲で収束する。分布密度は非常に疎である。石器の出土層位はⅣ層からⅦ層にかけてである。

出土した石器1は、安山岩（トトロ石）製、黒色頁岩製の剥片各1点のみである。

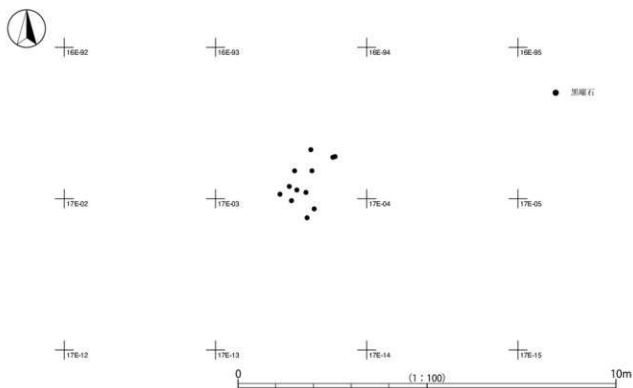
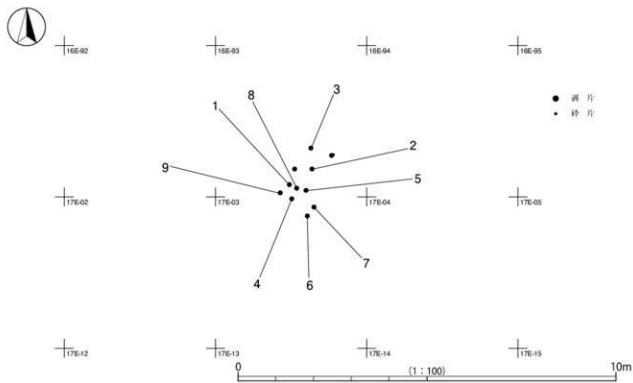
礫石器は流紋岩、凝灰岩、チャートが使用される。

遺物

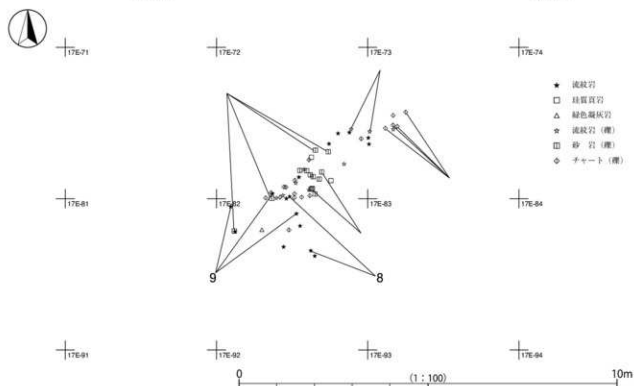
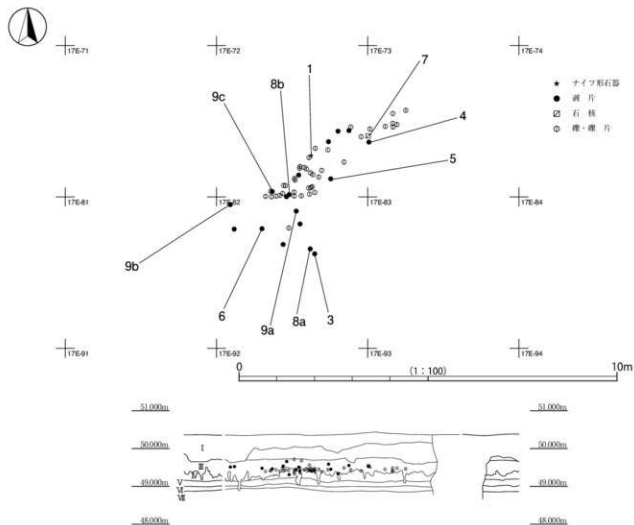
1は安山岩（トトロ石）製の縦長剥片である。背面は打面方向からの連続した剥離と共に末端部側からの剥離がみられ、上下両端に打面を有する石核から連続的に作出された剥片と考えられる。



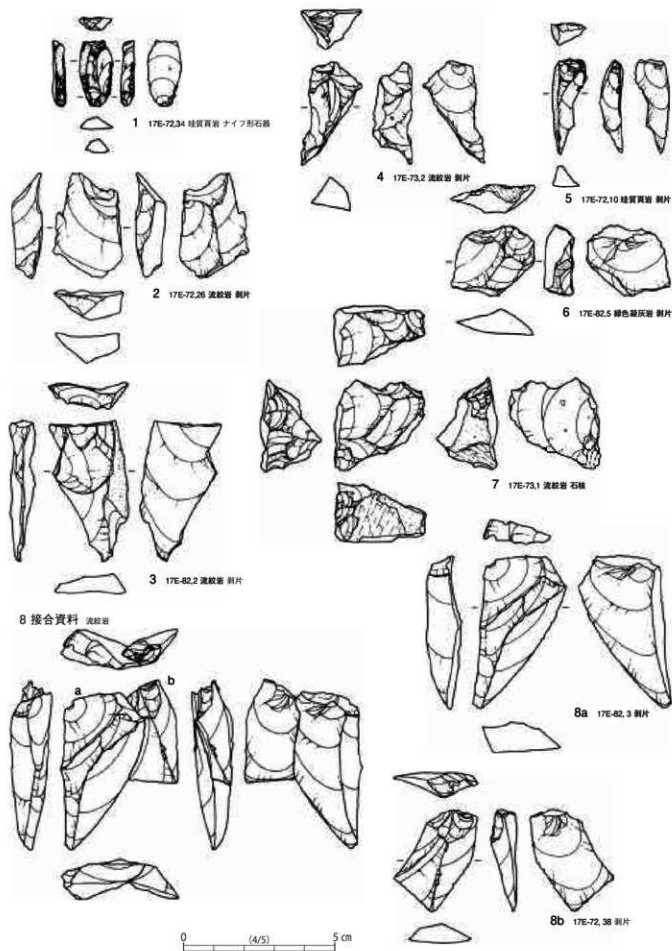
第228図 第20ブロック遺物



第229図 第20ブロック分布

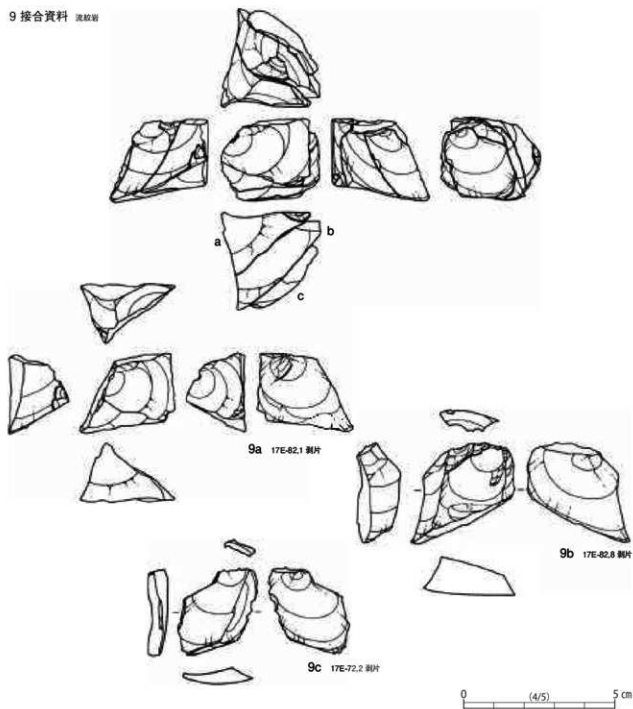


第230図 第21ブロック分布



第 231 図 第 21 ブロック遺物 (1)

9 接合資料 剥片類



第232図 第21ブロック遺物(2)

遺物

1から9は全て黒曜石製の剥片である。小型の不定形剥片であり、背面構成も多方向の剥離により構成される。石材の質によるものか打面が依存しない個体が多く、剥片剥離の際に打面直下もしくは途中で分割したものと考えられる。

第21ブロック(第230～232図、第43表、図版62・104・105)

調査区の南側、標高51mの台地平坦部に所在する。

石器の出土点数は剥片石器19点、礫石器41点の合計60点を数え、分布範囲は北東から南西に長軸6m、

短軸4mの範囲で収束する。石器の出土層位はⅢ層である。

剥片石器19点の石器組成はナイフ形石器1点の他剥片、石核で構成される。ナイフ形石器は珪質頁岩製であるが、主体となる石材は流紋岩である。礫石器はチャートを主体に砂岩、流紋岩が使用される。

遺物

1は珪質頁岩製のナイフ形石器である。小型の縦長剥片を素材とし、剥片末端部を先端部に設定して製品化している。調整は両側縁に対し微細な剥離が素材剥片の腹面側から施される。

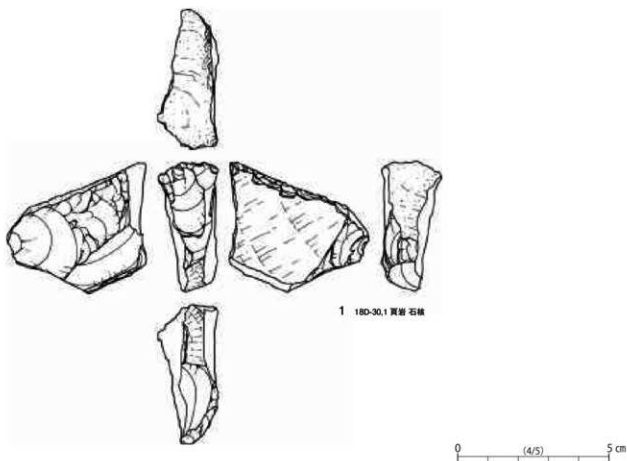
2から6は剥片である。2から4は流紋岩製の部厚な剥片で概して部厚である。特に4については明瞭な稜が背面に認められる。5は珪質頁岩製で末端部が鋭く尖る。背面に明瞭な稜がみられ、断面形状は正三角形に近い。6は緑色凝灰岩製で、長軸短軸が同寸の部厚な剥片である。

7は流紋岩製の石核である。部厚な剥片を素材とし、剥片剥離は素材剥片の腹面から背面に向かい行われている。

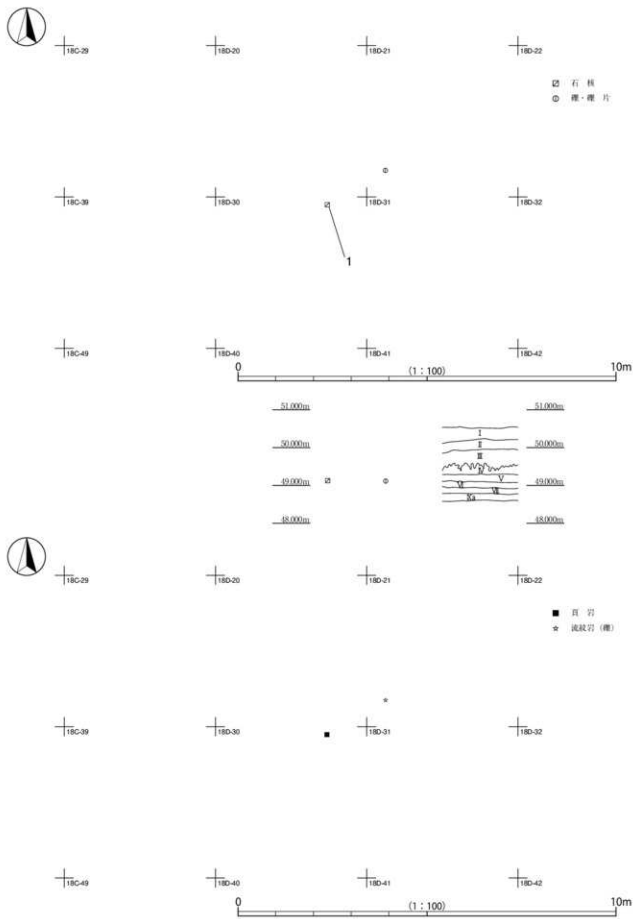
8・9は流紋岩製の接合資料である。両者とも同一打面から連続して作出されており、8は2点、9は3点の接合資料である。8の剥片の末端部は平坦剥離であり、この工程内では同一もしくは同一方向にある打面から連続して作出された様相のみ窺えるが、9の剥片の末端部背面側には多面体を呈する石核から作出されていることが窺え、打面を転移して剥片剥離を行っているものと考えられる。

第44表 第22ブロック属性表

層位	調査 年次	調査 地点	遺物 種別	数量	石核	剥片	ナイフ 形石器	礫石器	接合資料	その他	計	出土 層位	出土 位置	出土 状況	備考
Ⅲ層	1981	100-30	石器	19	1	12	1	0	2	0	16	Ⅲ層	100-30	100-30	
Ⅳ層	1981	100-30	石器	1	0	0	0	0	0	0	1	Ⅳ層	100-30	100-30	
Ⅴ層	1981	100-30	石器	0	0	0	0	0	0	0	0	Ⅴ層	100-30	100-30	



第233図 第22ブロック遺物



第234図 第22ブロック分布

第22ブロック (第233・234図、第44表、図版62・105)

調査区南側、台地平坦部の西側に所在する。標高50mを測る。

頁岩製の石核1点、流紋岩製の礫1点で構成される。出土層位はⅥ層上面である。

遺物

1は頁岩製の石核である。板状の器形を呈し、原礫面もしくは節理面が多く認められる。剥片剥離は主に実測図正面にみられるように原礫面を打面とし、面積の小さい面に対し行われている。

第23ブロック (第235～238図、第45表、図版62・105・106)

調査区南側、台地平坦部の南東に所在し、標高49mを測る。

石器の出土点数は剥片石器15点、礫石器3点の合計18点を数え、分布範囲は直径4.5mの範囲で取戻す。分布密度は全体的に疎である。石器の出土層位はⅢ層からである。

剥片石器は黒曜石製の使用痕の認められる剥片以外は剥片、石核である。ホルンフェルス製の石器が点数的に主体となる。黒曜石は信州諏訪産と和田峠産の2種が混在する。礫に使用される石材は流紋岩、チャートである。

遺物

1は黒曜石製の使用痕の認められる剥片である。縦長剥片で末端部には打面に対し90°右方向からの剥離が認められる。右側縁の打面付近に微細な剥落痕が認められる。

2から6は剥片である。2から4は黒曜石製で作りの薄い縦長剥片である。両側縁および末端部は鋭いが使用痕等は認められない。5・6はホルンフェルス製の大型剥片である。共に縦長の形状を呈するが、5の背面構成は原礫面とともに打面側からの単一方向の剥離のみに対し、6の背面は多方向からの剥離により構成される。

7は黒曜石製の石核である。剥片素材と考えられ、多面体を形成するように背面側から腹面側に対し剥片剥離が行われている。

8・9はホルンフェルス製の接合資料である。8は異なる打面から作出された剥片が末端部で接合したものであり、両者の打面は90°回転した位置に比定できる。9は同一打面から連続して作出された剥片の接合である。

第24ブロック (第239・240図、第46表、図版107)

調査区南側、台地平坦部から緩斜面部へ移行する標高49m付近に所在する。頁岩製の石核及び原石それぞれ1点で構成される出土層位はⅥ層からⅦ層である。

第45表 第23ブロック属性表

石核	打面	素材	用途	属性	石核	用途	属性	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	
石核	打面	素材	用途	属性	石核	用途	属性	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	
石核	109	頁岩	剥離	石核				4	200	141	41	687	4180(24)	1007(17)										
剥片	109	頁岩	剥離					2	24	261	61	254	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					14	294	411	27	444	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					1	—	—	—	—	—	—	—									
剥片	109	頁岩	剥離					—	—	—	—	—	—	—	—	—								
剥片	109	頁岩	剥離					—	—	—	—	—	—	—	—	—								
剥片	109	頁岩	剥離					7	144	261	61	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					9	26	311	41	291	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					2	26	261	41	124	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					—	—	—	—	—	—	—	—									
剥片	109	頁岩	剥離					2	261	271	124	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					7	111	111	111	111	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					14	411	211	141	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					1	111	211	211	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					11	141	141	141	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					3	211	141	141	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					1	261	111	41	111	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					1	441	61	111	61	4180(24)	1007(17)	1007(17)									
剥片	109	頁岩	剥離					1	111	141	61	141	4180(24)	1007(17)	1007(17)									



19F-50

19F-51

19F-52

19F-53

- △ 使用痕ある測片
- 測片
- 石核
- 標・標片

19F-60

19F-61

19F-62

19F-63

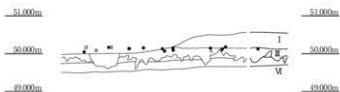
19F-70

19F-71

19F-72

19F-73

0 (1:100) 10m



19F-50

19F-51

19F-52

19F-53

- 黒曜石
- 変成岩
- ※ 説段石 (標)
- ◇ チャート (標)

19F-60

19F-61

19F-62

19F-63

19F-70

19F-71

19F-72

19F-73

0 (1:100) 10m

第235図 第23ブロック分布

遺物

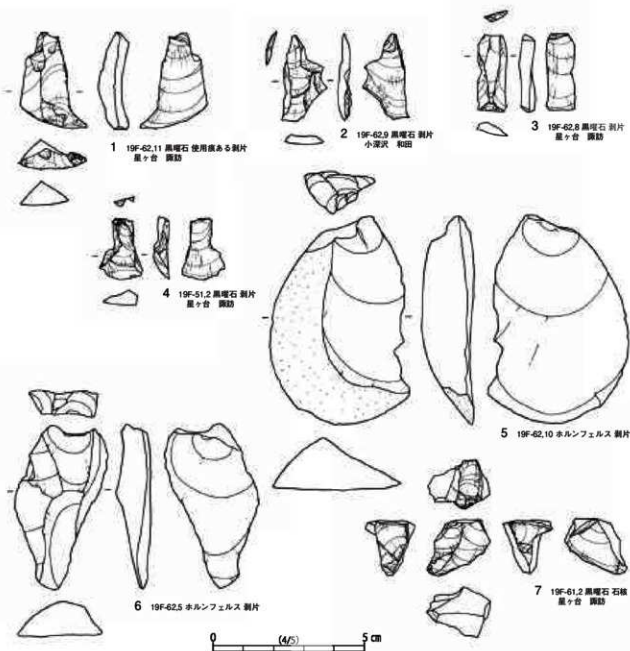
1は頁岩製の石核である。剥片素材であり、素材剥片の末端部に対し腹面を打面として剥片剥離を行っている

2は頁岩製の原石である。転石であり、平面は長方形を呈するが断面形状は三角形に近い。敲打痕等は認められない。

第25ブロック（第241～243図、第47表、図版62・107）

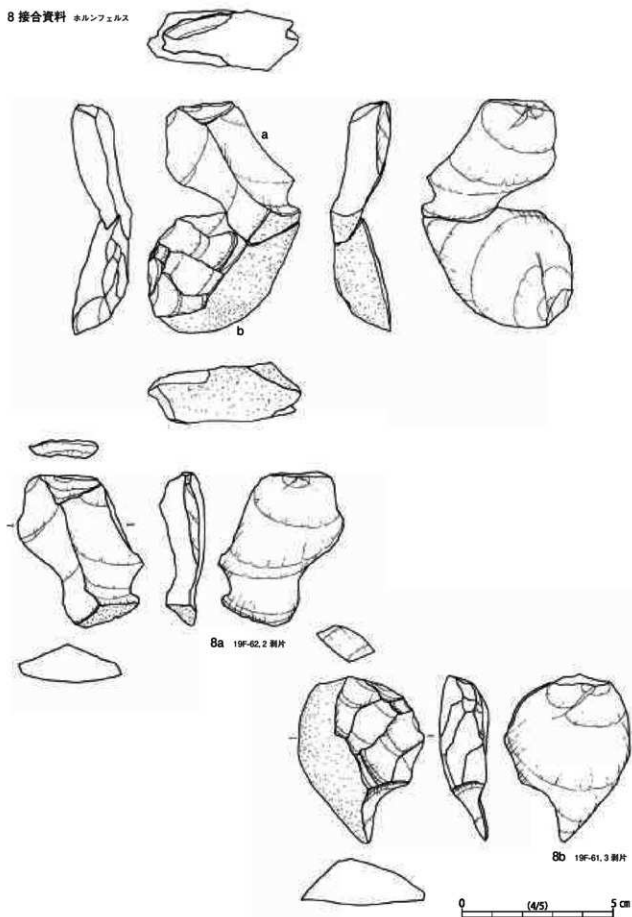
調査区の最も南側、標高48mの台地緩斜面部に所在する。

石器の出土点数は剥片石器が18点、礫石器が57点の合計75点を数え、分布範囲は直径6mの範囲で収束する。21E-65グリッド付近に3mほどの集中区が認められるが、それ以外の分布密度は疎である。



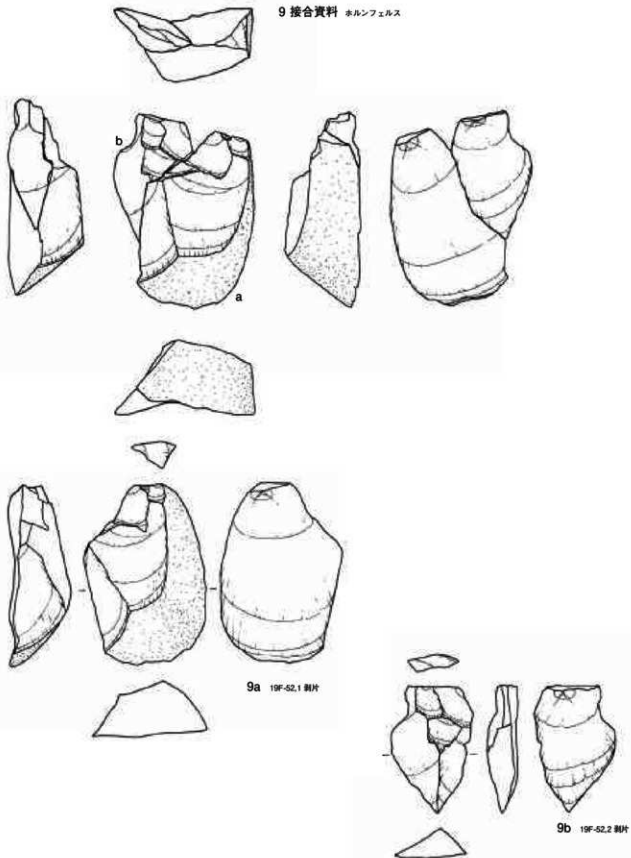
第236図 第23ブロック遺物（1）

8 接合資料 ホルンフェルス

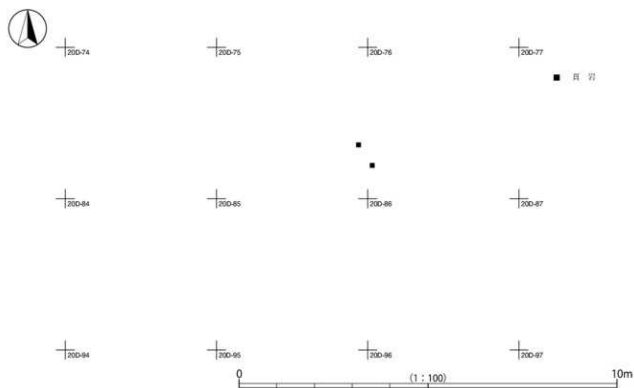
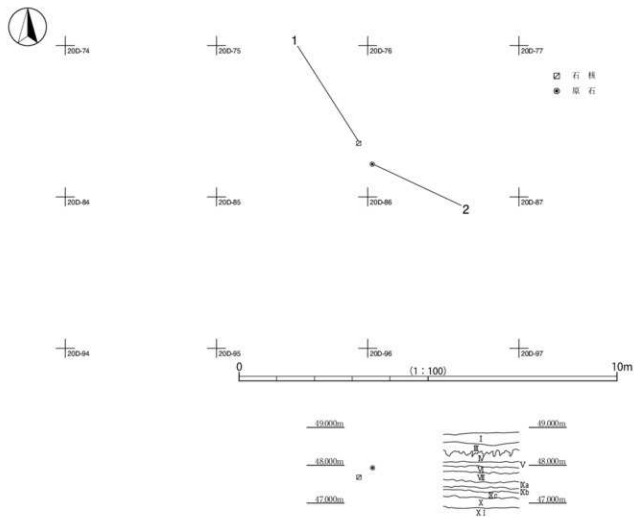


第 237 図 第 23 ブロック遺物 (2)

9 接合資料 ホルンフェルス



第238図 第23ブロック遺物(3)



第239図 第24ブロック分布

石器の出土層位はⅢ層からⅨ層にかけてであり比高差が著しい。Ⅵ層上面付近に偏差が認められる。

出土した剥片石器 18 点の内容は、剥片、石核で占められ、定型的な石器の出土はみられない。使用される石材は黒色安山岩が主体であり、ホルンフェルス、頁岩、珩質頁岩、玉髓が混在する。玉髓は原石 1 点のみの出土である。黒曜石製の剥片 1 点のみであるが、分析の結果信州諏訪産と判明した。

礫石器は流紋岩が点数的、重量的にも大半を占め、他には砂岩、ホルンフェルス、チャートで構成される。砂岩製の敲石が 1 点集中区から出土している。

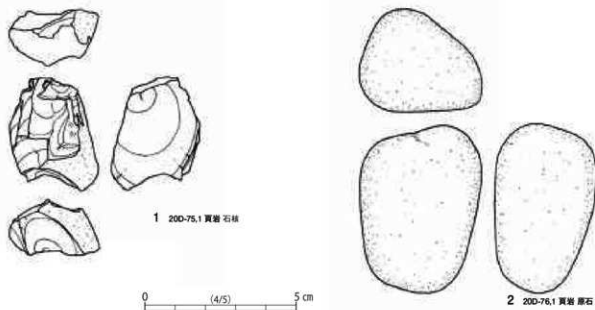
遺物

1 から 8 は剥片である。1 は黒曜石製の縦長剥片で、打面と末端部が窄まる菱形に近い形状を呈する。背面は打面方向からと末端部側からの剥離により構成される。2 から 5 は黒色安山岩製で、概して部厚な形状である。背面の剥離の方向はほぼ腹面の剥離の方向と同一であるが、剥片作出の企画性は感じられない。6・7 は珩質頁岩製である。節理の混入が著しいため剥離方向の観察に難がある。企画性は感じられず、概して横長の形状となる。8 は頁岩製で、剥片剥離の際に中途から分離している。末端部側の遺存であるが縦長剥片である。

9 は黒色安山岩製の石核である。形状は表裏面と四辺からなる面を構成する立方体に近い。表裏面と下面にみられるように六面の中でも剥片剥離が頻繁に行われている部位が認められる。

10 は玉髓製の原石である。小型の転石であり、敲打痕等は特に認められない。

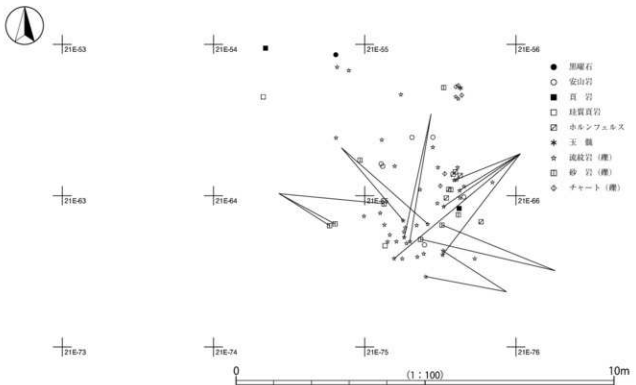
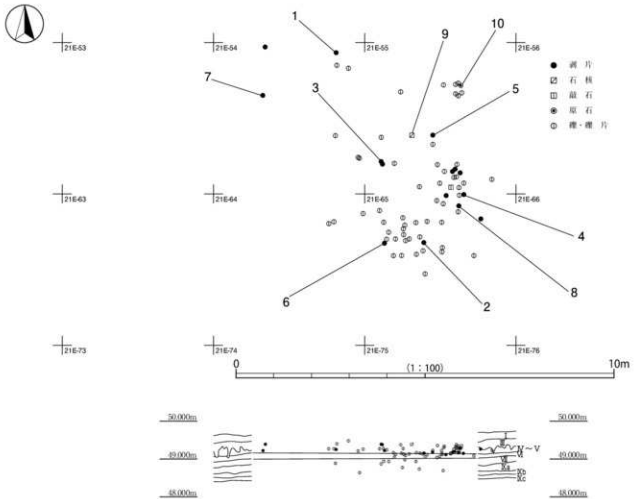
11 は砂岩製の敲石である。やや扁平な転石を利用し、上下両端に敲打痕が認められる。



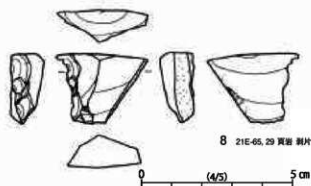
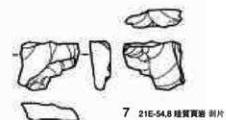
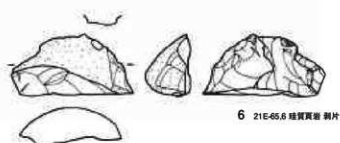
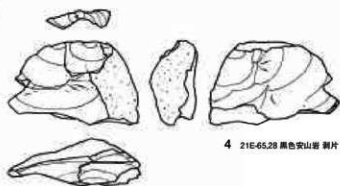
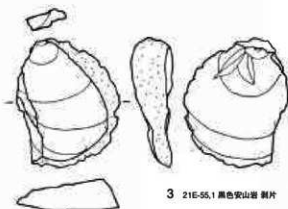
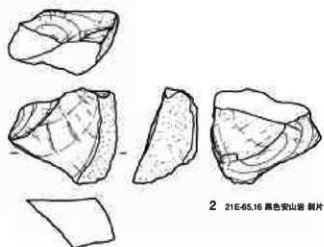
第 240 図 第 24 ブロック遺物

第 46 表 第 24 ブロック属性表

区別	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
種類	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
産地	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75	200-75
重量	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1

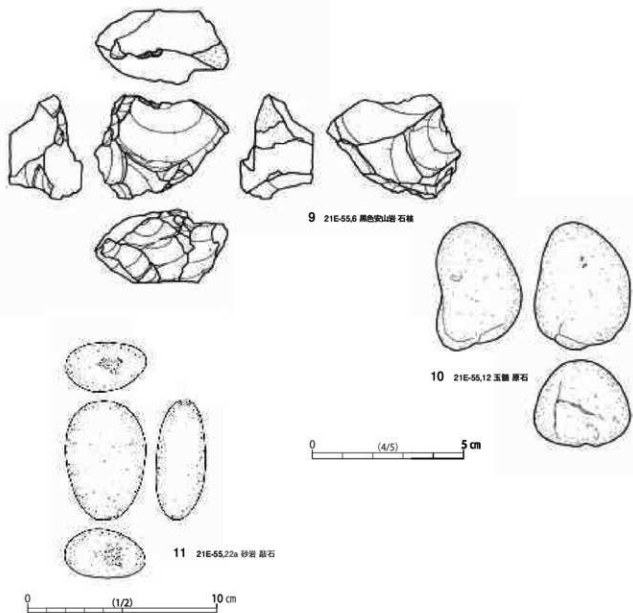


第241図 第25ブロック分布



0 (4/5) 5 cm

第242図 第25ブロック遺物(1)

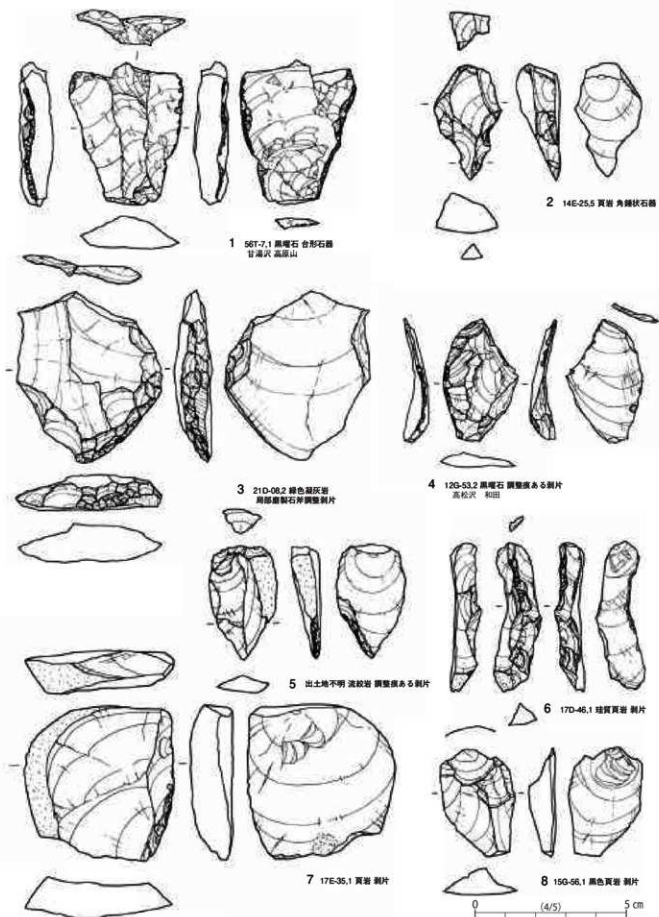


第243図 第25ブロック遺物(2)

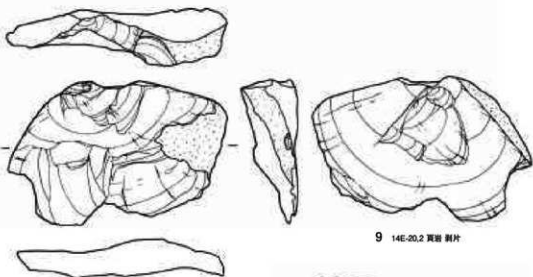
6から10は剥片である。6は珪質頁岩製の縦長剥片で、背面中央部には明瞭な稜が認められる。稜から右側縁に向かう剥離がみられ、稜整形の剥片と考えられる。7は頁岩製の大型剥片である。背面の剥離の方向は右側縁側からの剥離で占められ、打面を90°転移して作出された剥片であることが理解できる。8は黒色頁岩製の縦長剥片である。部厚な剥片であるが、両側縁は鋭いエッジを形成している。9は頁岩

第48表 単独出土石器属性表

図号	年代	出土	層位	産地	片数	用途	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ	重量	長さ	幅	厚さ
9	21E-55.6	黒色火山燧石	剥片	11	29.3	86.0	297	25.0	45.0	4.0	45.0	11.0	11.0	4.0	45.0	11.0	11.0	4.0	45.0	11.0	11.0	4.0
10	21E-55.12	玉髓燧石	剥片	3	34.0	46.0	140	14.0	47.0	4.0	47.0	14.0	14.0	4.0	47.0	14.0	14.0	4.0	47.0	14.0	14.0	4.0
11	21E-55.22a	砂岩燧石	剥片	3	47.7	74.2	163	43.0	43.0	4.0	43.0	16.0	16.0	4.0	43.0	16.0	16.0	4.0	43.0	16.0	16.0	4.0

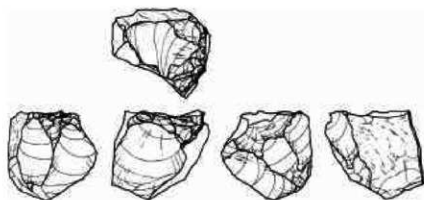


第 244 図 単独出土遺物 (1)



9 14E-20,2 頁岩 割片

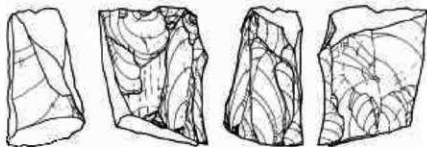
10 14C-28,2 燧石頁岩 割片



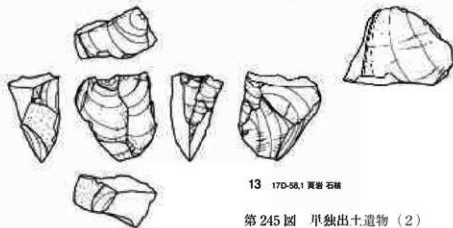
11 18C-58,2 燧石石核
臺+台 燧石



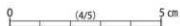
12 20D-03,1 燧石燧石頁岩 石核



13 17D-58,1 頁岩 石核



第 245 圖 单独出土遺物 (2)



製の大型の横長剥片である。末端部は一部がヒンジ・フラクチュアとなる。10は珪質頁岩製の小型剥片である。打面を広く設定し作出されており、打面直下が最も厚みをもつ形状である。

11から13は石核である。11は黒信州系諏訪・星ヶ台産の黒曜石製である。六面体を意識した形状で1面は原稜面である。頭部調整痕が顕著に認められる。12は嶺岡産珪質頁岩製で、縦長の六面体を呈する。剥片剥離は上下に設定された打面から行われている。13は頁岩製で、剥片素材と考えられる。下端が尖る楔形を呈し、剥片剥離は主に上面に位置する打面から行われている。

第49表 石器組成表

品名	数量	合計		使用		廃棄		調査		修理		他		不明		不明		不明		不明		不明	
		数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量	数量	重量
P101-F	原形	1	51.1																				
	剥片																						
	原形																						
	剥片																						
	原形																						
P101-F	原形	1	51.1																				
	剥片																						
	原形																						
	剥片																						
	原形																						
P101-F	原形	1	51.1																				
	剥片																						
	原形																						
	剥片																						
	原形																						

第3節 縄文時代以降の遺構と遺物

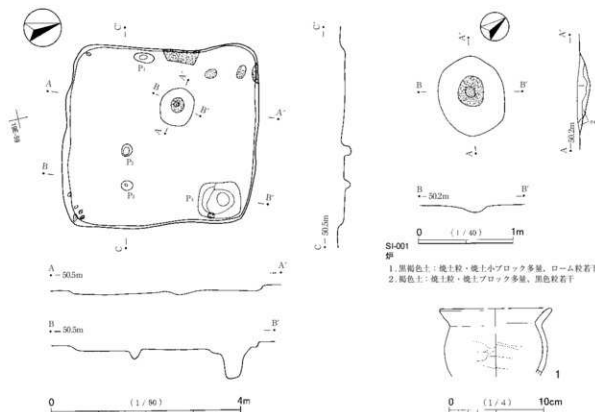
1 竪穴住居跡

SI-001 (第246図、第50表、図版64・111)

19E-38・39・48・49グリッドの位置にある。ほかの遺構との重複はない。平面形は長方形で、主軸方向はN-75°-Wである。規模は主軸長3.68m、横幅4.12mで、床面積は14.00m²である。確認面からの深さは北側と西側が9cm前後、東側と南側が7cm前後である。床面は平坦であり、壁溝はない。炉は西側壁に寄った位置にある。形状は浅い楕円状の楕円形で、規模は長軸80cm、短軸70cm、深さ8cm～9cmである。底部周辺は被熱し、赤化している。主柱穴はないが、小ピット3本(P1～P3)と貯蔵穴がある。貯蔵穴は北東角にあり、長辺90cm、短辺76cmの長方形で、深さは64cmである。P1は楕円形で、長軸42cm、短軸20cm、深さ26cmである。P2は径24cmの円形で、深さは17cmである。P3は径40cmの円形で、深さは17cmである。覆土はローム粒を含む暗褐色土や褐色土で、壁近くには焼土ブロックが見られる。

遺物は少量出土し、全て破片資料で、図示できたものは1点だけである。

1は土師器鉢で、一括資料である。最大径は口縁部にあり、頸部は「く」の字状に外反する。口縁部内外面はナデで、体部内面はヘラナデ、体部外面はヘラ削りの後ヘラナデ調整が施される。



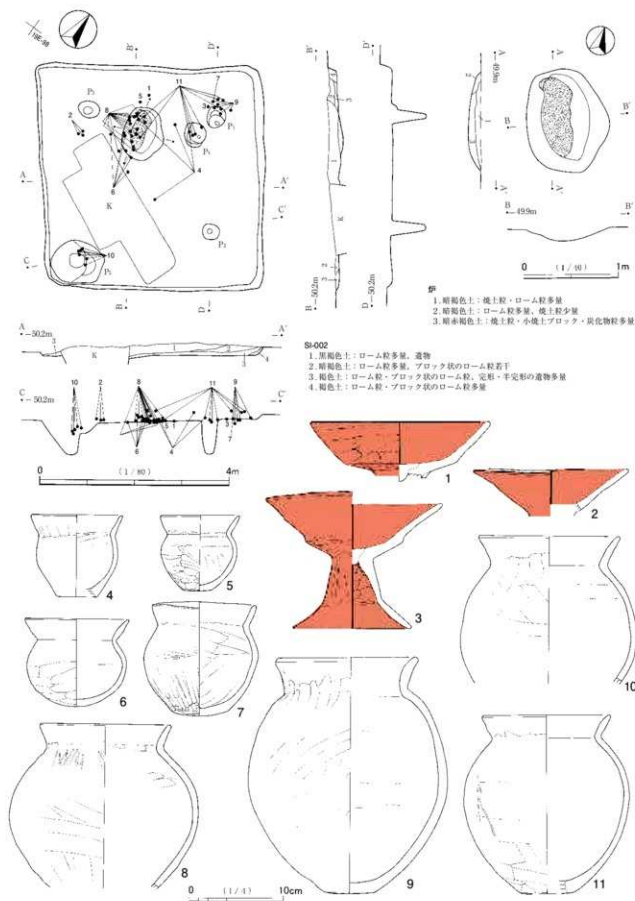
第246図 SI-001

SI-002 (第247図、第50表、図版64～66・111)

19E-88・89・98・99グリッドの位置にある。平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN-34.5°-Wである。規模は主軸長4.76m、幅4.84mで、床面積は20.40㎡である。確認面からの深さは、北西側が21cm、北東側が17cm、南東側と南西側が7cmである。床面は平坦で、壁溝はない。南側の床面は大きく攪乱を受けている。炉は北西の壁に寄った位置にある。平面形は楕円形で、規模は長軸1.12m、短軸0.87m、深さ0.13mである。底部は被熱し、赤化している。主柱穴は3本で、南角部分の柱穴は攪乱により壊されたとと思われる。P1は長軸46cm、短軸38cm、深さ77cmである。P2は径33cm、深さ70cmである。P3は長軸48cm、短軸36cm、深さ60cmである。P1の内側にP4があり、長軸55cm、短軸44cm、深さ77cmである。貯蔵穴は南角にある。長軸1.12m、短軸0.90m、深さ0.69mで、深さ0.20mのところにテラス状の平坦面がある。

遺物は比較的多く出土し、全体の形を復元できたものも多い。図示したものは11点である。出土状況は、北西壁寄りの炉とP1・P3・P4周辺に集中している。比較的床面近くから出土しているが、割れた状態で出土しているものが多いことや、貯蔵穴の上部から出土している土師器甕10があることなどから、堅穴住居内に投棄されたものと思われる。

1～3は土師器高杯である。1は口径が大きく、口縁部は直線的に立ち上がる。杯部外面下端に稜が作り出される。脚部は3に類似すると思われる。杯部内外面ともにヘラナデ調整が施され、赤彩される。2は口径が大きく、脚部から口縁部が漏斗状に直線的に立ち上がる。杯部内外面ともにナデ調整が施され、赤彩されるが、遺存状態は悪い。3は脚部径よりも口径が大きく、口縁部は緩やかに外反する。体部外面下端に段が作り出される。脚部はラッパ状に外反する屈折脚で、裾部は緩やかに広がる。口縁部内外面はナデ調整で、杯部下半には一部ヘラ削り痕が残る。脚柱部外面は筋状痕を残す強いヘラナデ、脚柱部内面はヘラ削りの後ヘラナデ、裾部内外面はナデ調整が施される。内外面ともに赤彩される。4～6は土師器鉢である。5は完形で出土している。4・5はともに平底で、最大径は口縁部にある。頸部は「く」の字状で、内面に稜を作り出し、口縁部は外反する。体部の最大径は上位にある。4は、口縁部内外面はナデ、体部内外面はヘラナデ調整が施される。5は、口縁部内外面はナデ、体部内外面はヘラナデ調整が施されるが、ヘラナデ痕が残る。6は丸底で、体部は球形である。最大径は口縁部にあるが、体部径は口縁部径とはほぼ等しい。頸部は「く」の字状で、内面に稜を作り出し、口縁部は外反する。内外面ともにナデ・ヘラナデ調整が施されるが、調整が粗く、砂粒も目立ち、器面が平滑ではない。内面に輪積痕が残る。7は土師器小型甕で、ほぼ完形で復元できた。底部はやや突出した不安定な平底で、最大径は体部にある。頸部は「く」の字状で、内面に稜を作り出し、口縁部は緩やかに立ち上がる。外面にはスズ状の付着物が見られる。口縁部内外面はナデ調整が施されるが、内面は外面に比べてより丁寧なナデ調整が施され、平滑に仕上げられている。体部内面は粗いヘラナデ、体部外面は筋状痕を残す強いヘラナデ調整が施される。底部外面はヘラナデ調整が施される。8～11は土師器甕である。8は、頸部は「く」の字状に屈折し、内面に稜を作り出し、口縁部は直線的に立ち上がる。底部が欠失しているが、最大径は胴部上位で、やや肩を張る。口縁部内外面はナデ調整が施されるが、外面の一部に輪積痕が残る。胴部内外面はヘラナデ調整で、外面肩部には筋状痕を残す強いヘラ磨き調整が施される。9はほぼ完形で復元できた。底部はわずかに突出し、やや不安定である。頸部は「く」の字状に屈折し、内面に稜を作り出す。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。最大径は胴部中位にあり、肩の張りは弱い。口縁部内外面はナデ、胴部内外面はヘラナデ調整が施される。口縁部外面下半から肩部にかけて、屈折部を意識したように強いヘラナデ痕



第247図 SI-002

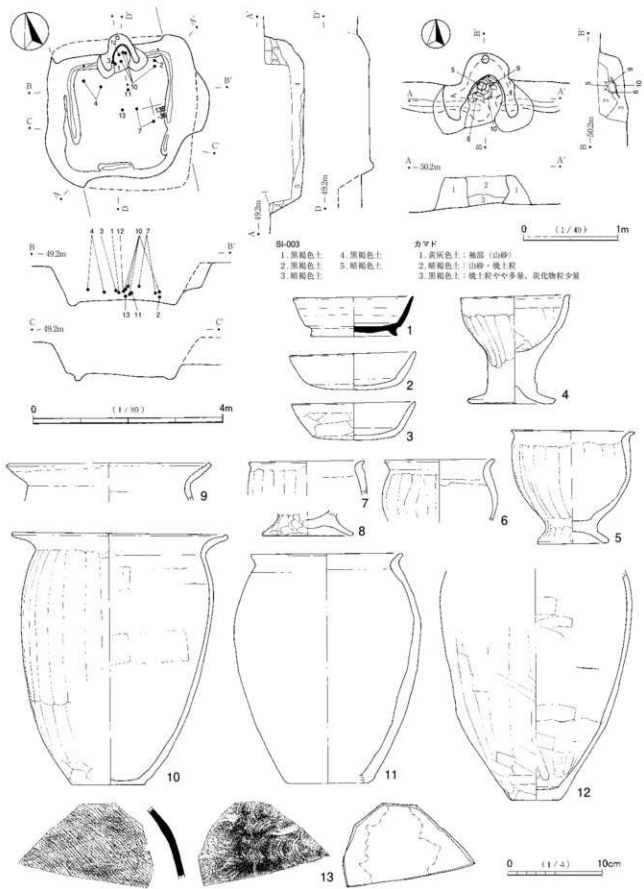
を残している。胴部内外面にはスズ状の付着物が見られる。10は、頸部は「く」の字状に緩やかに屈折し、内面に稜を作り出す。口縁部は直線的に立ち上がる。最大径は胴部中位にあり、肩の張りは弱い。口縁部内外面はナデで、胴部内外面はやや粗いヘラナデ調整が施される。口縁部外面下半から肩部の一部には、口縁部外面のナデの後にヘラナデ調整が施している。胴部内外面には輪積痕が残り、スズ状の付着物も見られる。11は、頸部は「く」の字状に屈折し、内面に稜を作り出す。最大径は胴部のやや上位にあり、やや肩を張る。口縁部内外面はナデ調整が施されるが、内面に比べて外面の調整は全体的にやや粗く、口縁部は若干波打つように立ち上がる。胴部内外面はヘラナデ調整が施され、外面には部分的に筋状痕を残すヘラ磨きが施される。胴部外面中位から口縁部にかけてスズ状の付着物が見られる。

SI-003 (第248図、第50表、図版66・111)

13B-25・26・35・36グリッドの位置にある。確認面はⅡb層であるが、確認調査時にソフトローム上面まで掘削したため、北側と東側・南側の壁の一部を掘り過ぎている。平面形はほぼ正方形で、主軸方向はN-12.5°-Eである。規模は推定主軸長3.1m、幅3.0mで、床面積は5.46m²である。確認面からの深さは60cm～80cmである。床面はほぼ平坦である。壁溝は南側壁などで部分的に途切れ、深さは6cm～7cmである。カマドの下にも壁溝が巡るが、火床部で途切れている。主柱穴・貯蔵穴はない。カマドは北側壁のほぼ中央部に作られている。袖の構築材は黄灰色の山砂で、両袖ともに壁から50cmほど遺存している。煙道部は壁を30cmほど掘り込み、奥壁は火床面から65°の角度で立ち上がる。火床部及び袖内壁部の赤化はさほど著しくない。

遺物は少量出土し、出土状況はカマド周辺の北東側に偏っている。図示したものは13点である。1・3・5・6・9・10・12の7点がカマド内から出土している。それ以外の遺物は、いずれも床面より高い位置から出土している。1・3はカマド左袖の上から出土している。カマド火床部からは、横倒しになった10を一番下にして、その胴部の上に5が台部を上にして倒立し、更に、その上から12がほぼ正立した状態で出土している。

1は須恵器高台付杯である。体部外面下端に稜をもつ杯部に、端部が外反する高台が付く。口径と底径の差が少なく、口縁部は直線的に立ち上がるが、口唇部は内側の器厚を薄くしている。体部は右回転口口成形で、内外面に弱い口口目が残る。底部外面は回転ヘラ削りの後、高台部周辺とともにナデ調整が施される。高台径は9.1cmで、高さは1cmほどである。2・3は土師器杯である。いずれも底部は平底で、底部径は口径径の2/3ほどである。2は体部外面下端の稜は弱い。内面の体部と底部の境に段を作り出す。器表面は二次的の被熱により軟化し、調整は不明瞭である。底部外面は一定方向のヘラ削りの後、周縁部にヘラナデ調整が施される。3は体部外面下端に稜を作り出す。体部外面は、口縁部外面のナデ調整の後、ヘラナデ調整が施される。底部は一定方向のヘラ削りが施される。器表面は二次的の被熱により赤化している部分が見られる。4は土師器高杯である。杯部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。脚部はやや太い円筒状の脚柱部が付き、裾部は強く屈折して、大きく開く。口縁部内外面はナデで、口唇部は内面に稜を作り、短く外反する。体部内外面はヘラナデ調整を施す。脚柱部・裾部内外面はナデ調整を施す。5～8は土師器小型台付甕である。5はほぼ定形に復元できた。最大径は口縁部にある。頸部周辺の器壁は厚く、口縁部は短く外反する。胴部は最大径が上半から中位にあり、肩をほとんど張らずに底部に続く。底部径は台部との接合部分で5.5cmである。台部径は7.4cmで、高さは2cmほどで「ハ」の字状に開く。口縁部内外はナデで、胴部外面は横方向のヘラ削りの後、縦方向に筋状痕が残るヘラナデ調整が施さ



第248図 SI-003

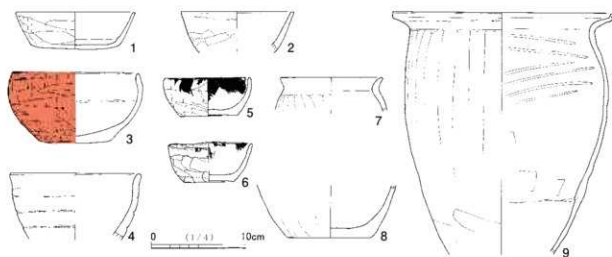
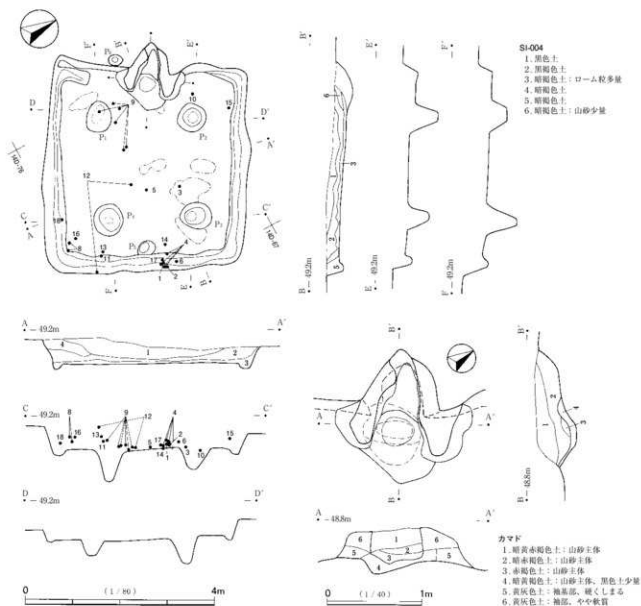
れる。胴部内面はヘラナデ調整が施される。台部は指頭による押さえの後、ナデ調整が施される。器表面は二次的被熱により赤化している部分が見られる。6は頸部が「く」の字状で、口縁部は緩やかに外反する。頸部付近の器壁は厚い。口縁部内外面はナデ、胴部内外面はヘラナデ調整が施されるが、外面には縦方向の筋状痕が残る。7は5に類した器形になると思われる。口縁部内外面はナデで、胴部内外面はヘラナデ調整が施される。8は台部で、台部径9.6cm、高さ2cmほどで「ハ」の字状に開く。接合部での径は6.3cmである。内外面はナデ調整が施されるが、外面には指頭による押さえ痕が残る。9～12は土師器甕である。9は頸部が「く」の字状に屈折し、口縁部は外反する。口唇部は逆「く」の字状に屈折し、短くつまみ上がる。端部は調整を施していないため、わずかに窪んでいるようになっている。口縁部内外面はナデ調整が施されるが、外面には輪積痕が残る。10は最大径が口縁部にある。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は強く外反する。口唇部は逆「く」の字状に屈折し短くつまみ上がる。端部は丸く仕上げられている。肩は張らず、あまりすばまらなまま大きめの底部に続く。口縁部内外面はナデで、胴部内外面はヘラナデ調整が施される。胴部内面には輪積痕が残る。器表面の一部は二次的被熱による赤化が見られる。11は最大径が胴部上位で、19.8cmである。頸部は「く」の字状で、口縁部は緩やかに外反する。胴部は肩をわずかに張って底部に続く。胴部上位以下の器壁は厚く、10より遺存度は低いが、ずっしりとした重さを感じる。口縁部内外面はナデ調整が施される。胴部外面はヘラ削りの後、縦方向に筋状痕が残るヘラ磨き調整が施される。胴部内面はヘラナデ調整が施されているが、下半部は器表面の剥落が著しく、調整は不明瞭である。12は胴部最大径が20.4cmで、あまり胴を張らずに胴部下位からすばまって小さい底部へ続く。胴部外面はヘラ削りで、部分的に斜め方向の筋状ヘラナデ痕が残る。内面はヘラナデで、輪積痕が残る。13は須恵器甕の胴部破片で、転用硯である。外面には平行タキが施され、内面は同心円文当て具痕が見られる。湾曲した胴部破片の内面を利用して硯として使用したもので、同心円文当て具痕が摩滅し、器表面が平滑になっている。また、わずかであるが墨痕が見られる。

SI-004 (第249・250図、第50表、図版67・68・112)

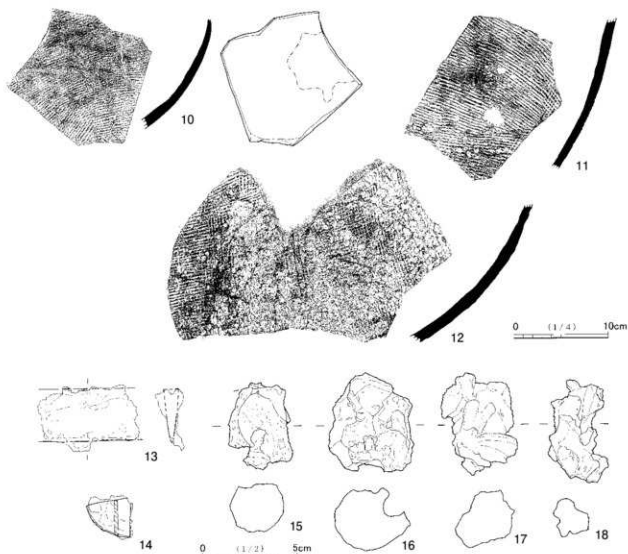
14D-56・65～67・76グリッドの位置にある。平面形は台形で、主軸方向はN-60°-Wである。規模は主軸長が4.4mで、北辺4.16m、南辺4.52m、幅4.32mで、床面積は15.84㎡である。確認面からの深さは35cm～54cmである。床面はほぼ平坦で、P1とP3の周辺に硬化面が残る。壁溝はカマドのある北西側壁で途切れ、深さは7cm～11cmである。カマドは北西壁の中央部に作られている。袖の構築材は黄灰色の山砂で、袖は壁から40cm～46cmほど遺存している。煙道部は壁を60cmほど掘り込み、奥壁は煙道部から40°の角度で立ち上がる。火床部及び袖内壁部の赤化はさほど著しくない。主柱穴は4本でP1は長軸66cm、短軸51cm、深さ36cmである。P2は径60cm、深さ58cmである。P3は長軸67cm、短軸56cm、深さ46cmである。P4は長軸67cm、短軸63cm、深さ34cmである。カマド対壁の壁溝に接した位置に出入口ピット(P5)がある。長軸40cm、短軸30cm、深さ15cmである。また、カマド左側の壁外にP6がある。長軸30cm、短軸23cm、深さ74cmである。貯蔵穴はない。

遺物の出土数量は少ないが、図示したものは18点である。図示したもの以外に鉄洋が40点ほど覆土中から出土しているが、堅穴住居内には製鉄に関する施設・遺物などはなく、投棄されたものと思われる。

1・2は土師器杯である。1は平底で、体部外面は口唇部までヘラ削り調整が施される。内面は細い筋状痕が残るヘラ磨き調整が施され、底部と体部との境に明瞭な段を作る。底部外面は不定方向のヘラナデ調整が施される。2は体部がやや深いものである。口縁部外面から体部内面はナデで、体部外面は口縁部



第249図 SI-004 (1)



第250図 SI-004(2)

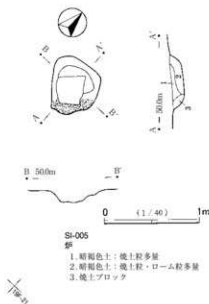
のナデ調整の後、ヘラ削り調整が施される。口縁部外面には輪積痕が残る。3～6は土師器鉢である。3は平底で、ほぼ完形に復元できた。底部は不定方向のヘラ削り調整が施される。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は更に内湾し、口唇部は若干つまみ上がる。口縁部内面はナデ、体部内面はヘラナデ調整が施される。体部外面は縦方向の後、横方向のヘラナデ調整が施される。体部外面には部分的に赤彩が残る。4は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。体部外面は縦方向のヘラナデ調整が施されるが、輪積痕が明瞭に残る。口縁部内外面はナデで、体部内面はヘラナデ調整が施され、スス状の付着物が見られる。5・6は小型の鉢で、割れることなく完形で出土した。体部から口縁部にかけて油煙状の付着物が複数見られることから、灯明具として使用されたものと思われる。5は口唇部の一部がわずかに欠失しているが、断面にも油煙状の付着物が見られる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は更に内湾する。口縁部内外面はナデで、体部外面は粗いヘラナデが施される。内面はヘラナデ調整が施され、平滑に仕上げられている。底部はヘラナデ調整が施される。6は体部がわずかに内湾し、口縁部はそのまま立

ち上がる。口縁部内外面はナデで、体部外面はヘラナデ調整が施されるが、輪積痕が残る。体部内面はヘラナデ調整が施され、細い筋状痕が残る。底部はヘラナデ調整が施される。7は土師器小型甕である。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反する。口縁部内外面はナデで、胴部は内外面ともにヘラナデ調整が施される。8・9は土師器甕である。8は底部で、胴部外面はヘラ削りが施され、内面はヘラナデ調整が施される。9は最大径が口縁部にある。頸部は「く」の字状で、口縁部は強く外反し、口唇部がほぼ垂直につまみ上がる。肩はほとんど張らない。口縁部内外面はナデで、胴部外面はヘラナデ調整が施される。胴部内面はヘラナデ調整が施され、細い筋状痕が残る。口縁部外面と胴部内面の下位には輪積痕が残る。肩部外面は被熱し、器表面が荒れている。内外面には部分的にスズ状の付着物が見られる。10～12は須恵器甕の胴部破片である。10は転用硯である。外面は平行タタキの後、ナデが施される。内面はヘラナデあるいはナデ調整が施されるが、わずかに同心円文当て具痕が見られる。湾曲した胴部破片の内面を利用して硯として使用したもので、同心円文当て具痕及びナデ調整痕が摩滅し、器表面が平滑になっている。また、墨痕が見られる。図の右側の縁は鋭利で、内面は端部まで摩擦が認められることから、右側は欠失したものであると思われる。11・12は同一個体と思われる。外面は平行タタキが施される。内面は器表面の剥落が著しく調整は不明である。13は鎌刃部と思われる。現存長53.5mm、推定幅28mm、推定背幅8mm、重さ20.1gである。14は用途不明の鉄製品である。現存長25mm、現存幅23.5mm、厚さ1.7mm、重さ3.21gである。15～18は鉄滓である。15は全て割れ口で、図示した上と下の突出部分に鉄分が付着している。最大値で縦46mm、横34mm、厚さ31.5mm、重さ41.32gである。16は図示した裏側に曲面が残り、椀型滓の一部と思われる。図示した面に木炭痕が見られる。最大値で縦53.8mm、横45.5mm、厚さ41.1mm、重さ81.36gである。17は流動滓と思われる。最大値で縦54.0mm、横40.5mm、厚さ29.3mm、重さ64.46gである。18は小さな板状のものや小塊・粒状物が融着しているような状態である。最大値で縦49.5mm、横31.0mm、厚さ23.2mm、重さ26.64gである。

SI-005 (第251図、図版68)

19F-10グリッドの位置にある。炉だけを検出した。規模は長軸長62cm、短軸長50cm、深さ14cmである。南東側の壁は被熱し、赤化している。

遺物は周辺から出土しているが、いずれも小破片であり、図示できるものはない。



第251図 SI-005

2 古墳

SM-001 (第252図、第50表、図版68・69・112)

調査区南部の20Dグリッド西側に位置する円墳である。久保田川によって開析される支谷に臨む場所にある。当初は古墳の存在は知られておらず、確認調査により検出された。基底部での墳丘径は20.5mである。支谷に臨む南西側は、この付近から大きく谷へ傾斜しており、東側から延びる周溝は10cmほど立ち上がって途切れ、西側から延びる周溝は立ち上がりが検出されなかった。このことから、この付近には、当初から周溝が作られなかった可能性がある。周溝の幅・深さは南東部の上端2.1m、下端1.3m、深さ0.26m、北東部の上端3.0m、下端1.9m、深さ0.43m、北西部の上端3.4m、下端2.3m、深さ0.48mである。

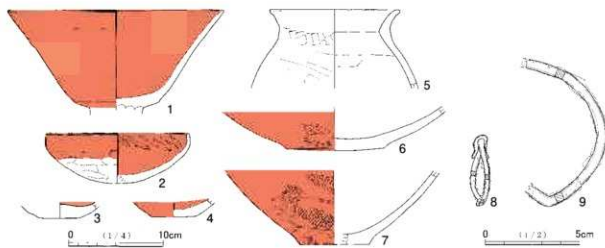
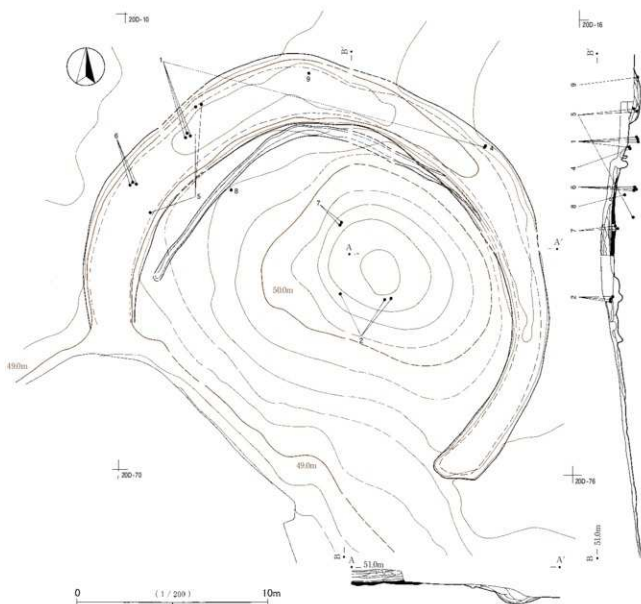
墳丘の盛土はすでに多くが削平されているが、墳丘内部に旧表土が遺存しており、褐色や暗褐色土を中心とした盛土を最大で厚さ65cm検出できた。周溝内の覆土は自然堆積である。

埋葬施設は検出されなかった。

盛土を除去した段階で、北西から北東の墳丘裾部に隅丸の「L」字形の溝を検出した。北西辺11.5m、北東辺11.0mで、幅0.30m～0.50m、深さ0.11m～0.18mである。北西の端部は墳丘内で立ち上がるが、北東の端部は周溝の中に続いている。

遺物は少量出土し、全て破片資料である。1・3～6・9は周溝内、それ以外は盛土内から出土している。

1は土師器高杯である。口径は大きく、杯部は深い逆台形である。杯部外面下端に稜が作り出され、口縁部は外反気味に立ち上がる。口唇部は細く尖り気味である。口縁部内外面はナデ、体部内外面はヘラナデ調整が施される。内外面ともに赤彩される。体部外面に輪積痕が残り、輪積みの粘土紐単位で細長く割れた状態で出土した。2は土師器杯である。やや尖り気味の丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で更に内湾する。口縁部内外面はナデ、それ以外はヘラナデ調整が施される。内面の全てと外面上位は赤彩される。3・4は土師器鉢である。いずれも平底である。3は底部の器壁が厚く、内外面ともにヘラナデ調整が施され、内面は赤彩される。4は内面ともにヘラナデ調整が施され、底部外面を除いて赤彩される。5は土師器甕である。最大径は胴部にあり、頸部は緩やかに外反し、内部に稜を作り出す。口縁部は緩やかに外反し、口唇部で更に屈曲する。口縁部内外面はナデ、胴部内外面はヘラナデ調整が施される。胴部内面には輪積痕が残る。6・7は土師器壺の底部である。6は円盤状に突出した底部で、球形の胴部になるものと思われる。内面はヘラナデ、胴部外面は筋状痕を残すヘラ磨き調整が施される。内面器表面はやや荒れており、部分的に剥落している。胴部外面は赤彩される。7はやや突出気味の底部で、胴部は内湾気味に立ち上がる。内面はヘラナデ、胴部外面は筋状痕を残すヘラ磨き調整が施される。胴部外面は赤彩される。8・9は棒状の鉄製品である。8は2本の細い棒を握りつなぎ合わせているような形状で、いずれも端部は欠失している。現状での最大長37.3mm、最大幅11.0mm、重さ2.93gで、1本の厚さは2.5mmほどである。9は両端部ともに欠失し、図示した下端部が強く曲がっている。現状での最大長75.3mm、最大幅51.0mm、厚さ9.2mm、重さ12.33gである。



第252図 SM-001

3 方形区画墓

SS-001 (第253図、第50表、図版69・70・112)

調査区のほぼ中央部の17Fグリッドに位置する。周辺にほかの遺構はない。方台部からは盛土は検出されなかった。基底部での規模は北西辺16.5m、北東辺15.5m、南東辺16.9m、南西辺16.2mで、平面形は南東辺が長い歪んだ方形である。周溝上端部での規模は北西辺18.8m、北東辺18.4m、南東辺19.2m、南西辺19.0mである。周溝の幅・深さは北西部の上端1.5m、下端0.8m、深さ0.76m、北東部の上端1.6m、下端0.8m、深さ0.83m、南東部の上端1.6m、下端0.8m、深さ0.90m、南西部の上端1.6m、下端1.0m、深さ0.70mである。ほぼ均一に逆台形状に掘られているが、底面はやや凹凸が見られる。主軸方向は南北軸をとるとN-42°-Eである。南角の内側は底面から30cmほど上がったところが階段状になっている。周溝の覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。セクションA A'の北西側の周溝内から、骨片が直径80cmほどの狭い範囲で出土したが、出土層位は全て3層～8層の中に収まることから、本遺構に伴うものではないと思われる。また、骨片は極めて微細なものであり、性格などは不明である。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は少量出土し、全て破片資料である。1は周溝の底面付近から出土しているが、破片が広範囲にわたっている。2・3は周溝の上面付近から出土している。

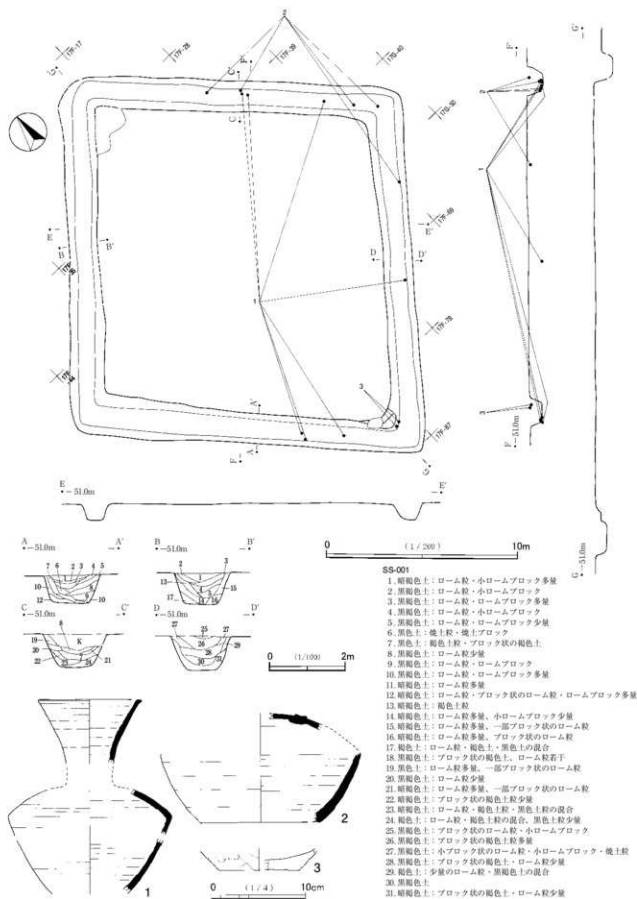
1は須臾器長頸壺である。口縁部から頸部と胴部上半・胴部下半の3つの部位は接合しなかったが、色調・成形技法などの特徴から同一個体と考えられる。頸部は大きく開きながら立ち上がり、口縁部は短く外反する。胴部上半は肩を張り、外面に稜を作り出し、強く逆「く」の字状に屈曲して、胴部下半に続く。右回転ロクロ成形で、胴部下半は回転ヘラ削り調整が施される。肩部外面と頸部から口縁部の内外面は自然釉が付着する。2は平底である。平底で、肩を張り、外面に稜を作り出す。肩に径12mm～14mm、厚さ2mm～3mmの円形浮文が2つ貼り付けられている。円形浮文は中央部が窪んでいることから、強く押し付けて貼り付けたものと思われる。内外面ともにロクロ成形であるが、体部下端は回転ヘラ削り調整が施されているが、一部に平行タキ目工具痕が残っている。体部外面には緑灰色の自然釉が付着する。3は土師器甕である。内外面ともにヘラナデ調整が施される。

SS-002 (第254図、図版64・70・71・112)

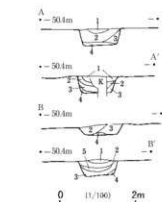
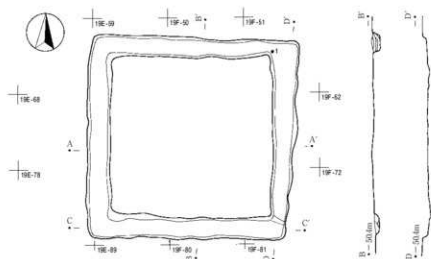
調査区南部の19Eと19Fグリッドの南寄りに位置する。南東側3mでSS-003と隣接する。また、北側でSI-001、南側でSI-002と隣接する。方台部からは盛土は検出されなかった。基底部での規模は北辺8.8m、東辺8.9m、南辺8.8m、西辺8.9mで、平面形はほぼ方形である。周溝上端部での規模は北辺11.0m、東辺10.5m、南辺10.5m、西辺10.8mである。周溝の幅は1.0m～1.3mで、深さは0.40m～0.50mであるが、南辺は0.20m～0.30mと浅く、南東角には0.15mほどの段差ができています。底面はおおむね平坦であるが、緩やかな凹凸が見られる。主軸方向はN-3°-Eである。周溝の覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とした土層で、自然堆積である。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は主に土師器破片が出土したが、図示できたのは1の鉄製品だけである。土師器はSI-002出土のものに類似するが、杯部下端により明瞭な段を作り出す高杯や、頸部内側に稜を作り、口縁部が「く」の字状に外反する甕などであり、本遺構の時期に伴うものとは考え難い。

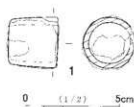
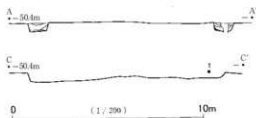


第253図 SS-001

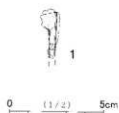
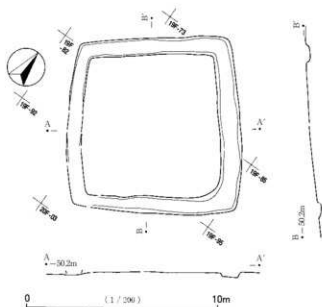


SS-002

1. 黒褐色土：ローム粒多量
2. 黒褐色土：ローム粒・ブロック状のローム粒
3. 黒褐色土：ローム粒・ブロック状のローム粒多量
4. 褐色土：ローム粒多量
5. 暗褐色土：ロームブロック・ローム粒多量、粗い



第254図 SS-002



第255図 SS-003

1は銅と思われる。長さ26mm、径は図の左側24mm、同右側は推定で27mm、重さ18.99g、厚さ3mmほどである。

SS-003 (第255図、図版64・71・112)

調査区南部の19Fグリッドの南端に位置する。北西側3mでSS-002、同15mほどでSI-001と隣接する。また、西側10mほどでSI-002と隣接する。方台部からは盛土は検出されなかった。遺構が所在する地点は、北側から南側にかけて傾斜していることから、南側角から西側辺の一部は周溝の立ち上がりを検出できなかった。基底部での規模は北西辺7.0m、北東辺7.9m、南東辺は推定7.3m、南西辺は推定7.4mで、北東辺が長い不整形な方形である。周溝上端部での規模は北西辺8.0m、北東辺9.2m、南東辺は推定8.8m、南西辺は推定8.6mである。周溝の幅は0.9m～1.3mで、深さは北東辺が0.25m前後で、そのほかは0.10m以下である。主軸方向はN-34°-Wである。

埋葬施設は検出されなかった。

遺物は少量出土し、土器は全て土師器破片資料であるが、図示できたのは1の鉄製品だけである。土師器は杯・甕の小破片で、本遺構の時期を明確に判断できるものはない。

1は鉄釘と思われる。長さ26.3mm、頭部の長さ10mmほどで、棒部の厚さ3mmほど、重さ1.27gである。

4 土坑

SK-002 (第256図、図版71)

調査区西部の西側に小さく張り出す台地基部の18B-38グリッドに位置する。南西側16mにSK-004がある。重複する遺構はない。平面形は楕円形で、長軸方向はN-41°-Eである。規模は長軸1.36m、短軸1.0m、確認面からの深さは0.25mで、底面南西側には深さ0.20mほどのピットがある。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-003 (第256図、図版72)

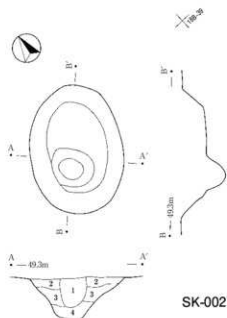
調査区南部の小支谷を臨む台地縁辺部の19B-68・78グリッドに位置する。北東側10mにSD-001、南東側27mほどにSK-010～012がある。重複する遺構はない。平面形は隅丸の長方形で、長軸方向はN-47.5°-Wである。規模は長軸1.6m、短軸1.22m、確認面からの深さは0.75mで、底面中央部には深さ0.20mほどのピットがある。遺物は出土していないが、形状や覆土の状態などから縄文時代の陥穴と思われる。

SK-004 (第256図、図版72)

調査区西部の西側に小さく張り出す台地基部の18B-55・56・65・66グリッドに位置する。北東側16mにSK-002、南西側23mほどにSD-001がある。重複する遺構はない。平面形は不整形円形で、長軸方向はN-5°-Eである。規模は長軸2.06m、短軸1.58m、確認面からの深さは0.24mで、底面南西側は更に0.30mほど掘り込まれている。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-005a・b (第256図、図版72)

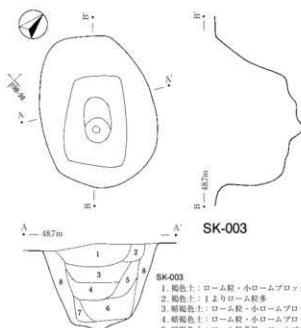
調査区西部の西側に小さく張り出す台地先端部の18B-00・10グリッドに位置する。北側10mほどに縄文時代前期遺物包含層がある。2つの遺構が直交する形で重複し、005bが005aを壊している。東側は木の根の攪乱を受ける。005aは、平面形は楕円形で、長軸方向はN-37°-Eである。規模は長軸2.06m、推定短軸1.1m、確認面からの深さは0.33mである。005bは、平面形は楕円形で、長軸方向はN-40°-Wである。規模は現存長軸1.74m、短軸0.9m、確認面からの深さは0.75mである。火床部底面はいずれも強く被熱し、赤化している。遺物は出土していないが、形状や覆土の状況などから縄文時代の竈穴と思



SK-002

SK-002

1. 黒褐色土：ブロック状のローム粒・ローム粒多量、しまる
2. 暗褐色土：ローム粒・黒色土粒、しまる
3. にがい黄褐色土：ローム粒・黒色土粒の混合
4. 暗褐色土：ブロック状のローム粒・黒色土粒の混合



SK-003

SK-003

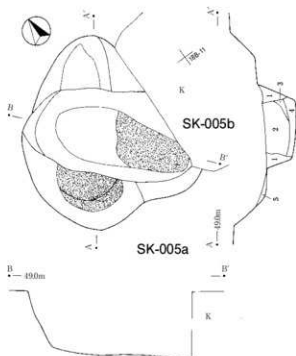
1. 褐色土：ローム粒・小ロームブロック、やや軟質
2. 褐色土：1よりローム粒多
3. 暗褐色土：ローム粒・小ロームブロック、しまる
4. 暗褐色土：ローム粒多量、ロームブロック少量
5. 暗褐色土：ローム粒・小ロームブロック多量、しまる
6. 黒褐色土：6よりローム粒多
7. 黒褐色土：6よりローム粒多
8. にがい黄褐色土：ローム粒主体、小ロームブロック・黒色土粒



SK-004

SK-004

1. にがい黄褐色土：黒色土粒・ローム粒
2. 黒色土：ロームブロック、硬質
3. 黄褐色土：ローム粒主体、黒色土粒
4. 褐色土：3より黒色土粒多
5. 暗褐色土：黒色土粒・ブロック状のローム粒の混合
6. 褐色土：ブロック状のローム粒主体、黒色土粒
7. 黄褐色土：ローム粒・ロームブロック主体



SK-005a

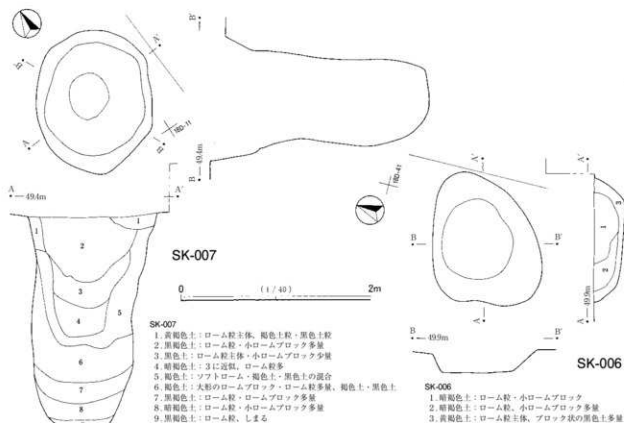
SK-005b

SK-005

1. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒少量
2. 暗赤褐色土：ローム粒・焼土粒・ロームブロック多量、しまる
3. 暗赤褐色土：2よりローム粒・焼土粒・ロームブロック少ない、しまる
4. 暗褐色土：ブロック状のローム粒多量、しまる
5. 焼土

0 (1/40) 2m

第 256 図 SK-002 ~ 005a・b



第 257 図 SK-006・007

われる。

SK-006 (第 257 図、図版 72)

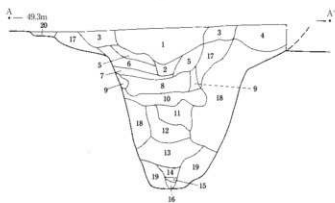
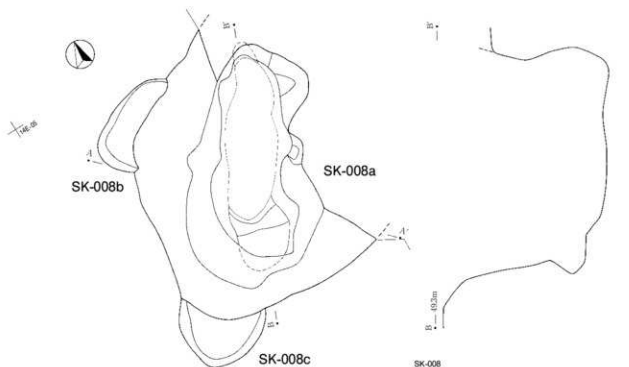
調査区西部の 18D-40・41 グリッドに位置する。北側 14 m ほどに SK-007 がある。重複する遺構はない。平面形は不整形で、長軸方向は N-68°-E である。規模は長軸 1.4 m、短軸 1.15 m、確認面からの深さは 0.24 m である。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していないが、形状や覆土の状態などから縄文時代の土坑と思われる。

SK-007 (第 257 図、図版 72)

調査区西部の小支谷を臨む縁辺部の 18D-00 グリッドに位置する。南側 14 m ほどに SK-006 がある。重複する遺構はない。平面形は楕円形で、長軸方向は N-38°-E である。規模は長軸 1.5 m、短軸 1.24 m、確認面からの深さは 2.25 m である。遺物は出土していないが、形状や覆土の状態などから縄文時代の陥穴と思われる。

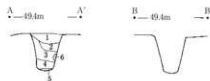
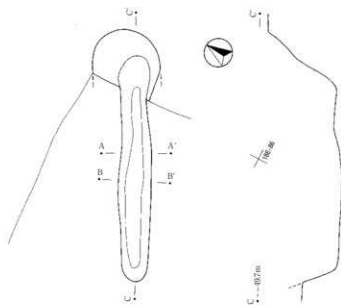
SK-008a～c (第 258 図、図版 73)

調査区北部の小支谷を臨む縁辺部の 14E-05 グリッドに位置する。南西側 10 m ほどに SK-021 がある。下層確認調査中に検出されたものである。008a は、平面形は長楕円形で、長軸方向は N-35°-E である。規模は現存長軸 2.9 m、現存短軸 1.77 m、確認面からの深さは 1.62 m である。長軸の両側には幅 50 cm ほどのテラス状の段があり、幅 50 cm 前後の底面へ続く。遺物は出土していないが、形状や覆土の状況から縄文時代の陥穴と思われる。008b は、規模は現存長軸 1.1 m、現存短軸 0.32 m、確認面からの深さ 0.08 m



SK-008

1. 明褐色土：ローム粒少量
2. 暗褐色土：ローム粒多量
3. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
4. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、軟質
5. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、しまる
6. 褐色土：暗褐色土粒多量
7. 暗褐色土：ローム粒多量、しまる
8. 褐色土：ロームブロック多量、しまる
9. 暗褐色土：ロームブロックを混合
10. 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、しまる
11. 褐色土：黒褐色土粒少量、しまる
12. 褐色土：ロームブロック多量、暗褐色土粒少量、しまる
13. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロックやや多量、しまる
14. 暗褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、しまる
15. 黒褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
16. 褐色土：しまる
17. 褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
18. 褐色土：ロームブロック主体、しまる
19. 暗褐色土：褐色土を混合、しまる
20. 褐色土(008bの埋土)



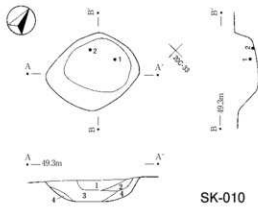
SK-009

1. 明褐色土：ローム粒・ロームブロック多量
2. 明褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、黒褐色土粒少量
3. 明褐色土：ローム粒・ロームブロック多量、黒褐色土粒やや多量
4. 明褐色土：ロームブロック多量、暗褐色土粒少量
5. 黒褐色土：ロームブロック多量
6. ロームブロック

SK-009



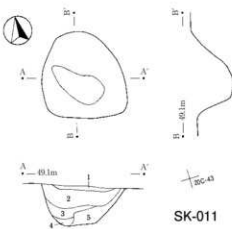
第258図 SK-008a～c・009



SK-010

SK-010

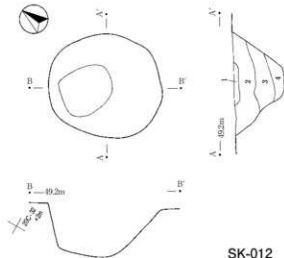
1. 黒色土：ローム粒、根茎部片多量
2. 黒褐色土：ローム粒多量
3. 褐色土：ローム粒、ロームブロック、黒褐色土粒の混合
4. 褐色土：ローム粒、小ロームブロック主体、黒色土粒多量



SK-011

SK-011

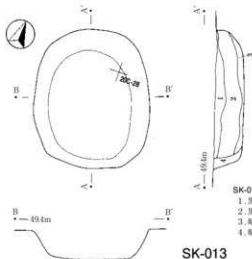
1. に近い黄褐色土：ローム粒、小ロームブロック
2. 暗褐色土：ローム粒、小ロームブロック、黒色土粒
3. 黒褐色土：ローム粒多量
4. 褐色土：ローム粒、小ロームブロック主体、黒色土粒多量
5. 黄褐色土：ロームブロック主体、黒色土粒、ローム粒多量



SK-012

SK-012

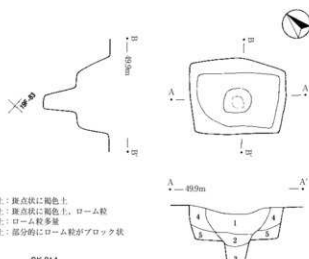
1. に近い黄褐色土：ローム粒、小ロームブロック
2. 暗褐色土：ローム粒、小ロームブロック、黒色土粒
3. 黒褐色土：ローム粒多量
4. 褐色土：ローム粒、小ロームブロック主体、黒色土粒多量



SK-013

SK-013

1. 黒褐色土：床点状に褐色土
2. 暗褐色土：床点状に褐色土、ローム粒
3. 暗褐色土：ローム粒多量
4. 暗褐色土：部分的にローム粒がブロック状



SK-014

SK-014

1. 暗褐色土：ローム粒、小ロームブロック多量
2. 暗褐色土：ローム粒、黒色土粒多量
3. 褐色土：ローム粒、小ロームブロック主体、黒色土粒多量
4. 褐色土：ローム粒、暗褐色土の混合
5. オリーブ褐色土：4に類似、ローム粒多

である。008c は、規模は推定径 0.92 m、確認面からの深さ 0.16 m である。いずれも遺物は出土していないが、覆土の状況などから中世以降の土坑と思われる。

SK-009 (第 258 図、図版 73)

調査区中央部南寄りの 18E-75・76 グリッドに位置する。南東側 25 m ほどに SI-001 がある。下層確認調査中に検出されたものである。平面形は長楕円形で、長軸方向は N-63°-E である。規模は現存長軸 2.64 m、現存短軸 0.34 m、確認面からの深さは 0.87 m である。底面の幅は 10cm～18cm である。遺物は出土していないが、形状や覆土の状況などから縄文時代の陥穴と思われる。

SK-010 (第 259 図、第 50 表、図版 73・112)

調査区南部の 20C-32 グリッドに位置する。本遺構を含め SK-011・012 の 3 基の土坑が、4 m の小グリッドの範囲内に存在する。平面形は隅丸の長方形である。規模は長軸 0.87 m、短軸 0.74 m、確認面からの深さは 0.30 m である。底面は凹凸が著しい。遺物は全て須恵器・土師器の小破片である。1・2 は須恵器である。1 は頸部で、頸部外面はナデ、肩部は回転ヘラ削り調整が施される。内面は同心円文押え具痕が残る。2 は胴部下半で、外面は平行タタキ具痕、内面は同心円文押え具痕が残る。出土遺物から古代の土坑と思われる。

SK-011 (第 259 図、図版 73)

調査区南部の 20C-32 グリッドに位置する。北側 1 m で SK-010 と隣接する。平面形は不整形である。規模は長軸 0.92 m、短軸 0.88 m、確認面からの深さは 0.44 m である。底面は不整形である。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-012 (第 259 図、図版 73)

調査区南部の 20C-32 グリッドに位置する。西側 50cm で SK-011 と隣接する。平面形は円形である。規模は長軸 1.2 m、短軸 1.08 m、確認面からの深さは 0.56 m である。底面は北側に寄っている。遺物は須恵器の破片が 1 点だけ出土し、図示できなかったが SK-010 の周辺から出土した須恵器の破片と接合した。これは色調・器壁の厚さ・調整痕などから SK-010 の 2 と同一個体と思われるものである。出土遺物から古代の土坑と思われる。

SK-013 (第 259 図、図版 73)

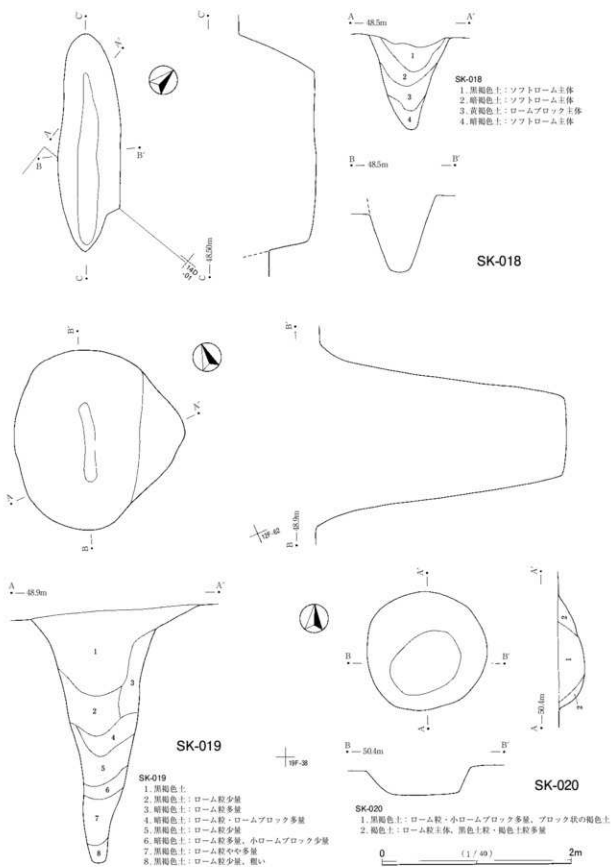
調査区南部の 20C-17・18・27・28 グリッドに位置する。東側 10 m ほどで SM-001 がある。平面形は楕円形である。規模は長軸 1.46 m、短軸 1.23 m、確認面からの深さは 0.33 m である。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-014 (第 259 図、図版 64・73・74)

調査区南部の 19F-83 グリッドに位置する。SS-003 の方台部の中にある。平面形は長方形で、長軸方向は N-41°-W である。規模は長軸 1.0 m、短軸 0.80 m、確認面からの深さは 0.37 m である。底部中央部に径 28cm、深さ 35cm の円形のビットがある。本遺構の長軸方向が SS-003 の主軸方向 N-34°-W に近似していることから、SS-003 に関連する土坑の可能性も考えられる。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-018 (第 260 図、図版 74)

調査区北部の西側に張り出す台地基部の 13D-90 と 14D-00 グリッドに位置する。南東側 30 m ほどに SI-004 がある。下層確認調査中に検出されたものである。平面形は長楕円形で、長軸方向は N-39°-W である。



第260図 SK-018～020

規模は現存長軸 2.3 m、現存短軸 0.67 m、確認面からの深さは 0.83 m である。底面は長軸 1.8 m、短軸 0.22 m である。遺物は出土していないが、形状や覆土の状況などから縄文時代の陥穴と思われる。

SK-019 (第 260 図、図版 74)

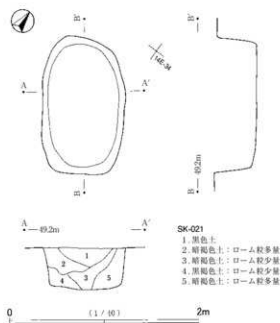
調査区北部の谷を臨む台地縁辺部の 12F-51 グリッドに位置する。南西側 65 m ほどに SK-008 があり、本遺構より北側の台地上には遺構は検出されていない。平面形は楕円形で、長軸方向は N-21°-E である。規模は長軸 1.9 m、短軸 1.34 m、確認面からの深さは 2.58 m である。底面は長軸 0.85 m、短軸 0.10 m である。東側には幅 50cm ほどのテラス状の段がある。遺物は出土していないが、形状や覆土の状況などから縄文時代の陥穴と思われる。

SK-020 (第 260 図、図版 74)

調査区南部の東側の谷を臨む台地縁辺部の 19F-28 グリッドに位置する。南西側 25 m ほどに SS-003 がある。平面形は円形である。規模は径 1.25 m、確認面からの深さは 0.28 m である。底面はやや南側に寄っており、長軸 0.78 m、短軸 0.58 m である。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

SK-021 (第 261 図、図版 74)

調査区北部の小支谷を臨む縁辺部の 14E-33・34 グリッドに位置する。北東側 10 m ほどに SK-008 がある。平面形は楕円形で、長軸方向は N-39°-W である。規模は長軸 1.43 m、短軸 0.87 m、確認面からの深さは 0.42 m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していないが、古代以降の土坑と思われる。

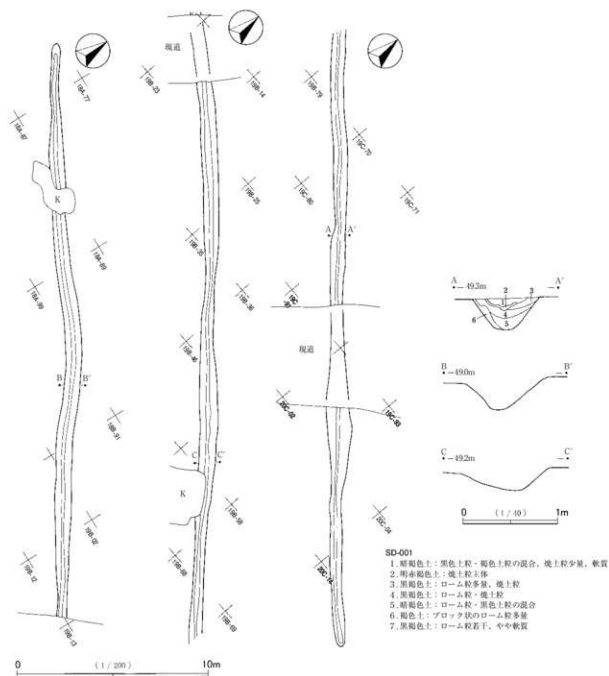


第 261 図 SK-021

5 溝

SD-001 (第262図、図版74)

調査区南部の小支谷を臨む台地縁部に沿った18A、18B、19B、19C、20Cグリッドに位置する。現状での長さは94.3mで、走行方向はN-52°-Wである。上端幅は0.50m～1m、確認面からの深さは0.20m～0.35mであるが、溝端部は、徐々に深さが浅くなっている。断面形は底面の幅が狭い逆台形又は「V」字形である。全体的な傾向として、覆土の中位以上に焼土が多く含まれている。遺物は出土していない。



第262図 SD-001

6 グリッド等出土遺物

縄文土器 (第 263～266 図、図版 109・110)

清水川台遺跡(2)では、縄文時代の土坑・陥穴・炉穴9基が検出されたが、いずれも遺物は出土していない。遺物包含層が調査区南西部の台地先端に形成されており、また、調査区南端部に構築されている円墳(SM-001)の墳丘中から縄文土器がまとめて出土している。時期としては早期～前期がほとんど全てで、特に前期後半が量も多い。

第1群 早期(1～29)

第1類 燃糸文(1～3)

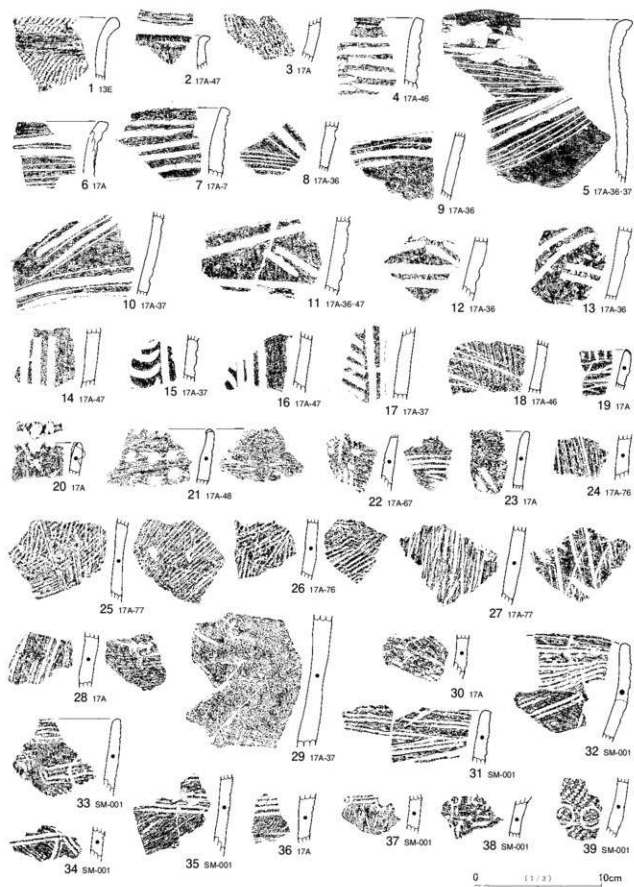
燃糸文土器はごく少ない。1・2は口縁部破片である。1は口唇部が外反し、口端の上面と全面にLR単節縄文が横位に施文される。口縁直下は横ナデにより無文帯が形成され、以下胴部はLR単節縄文が横位に施文される。井草式に比定される。2は口唇部が外反し、口端上面はR燃糸文が横位に施文される。器面側は口唇直下から胴部にかけて、同じくR燃糸文が縦位に施文される。夏島式に比定される。3は胴部破片で、LR単節縄文が横位に施文される。胎土や焼成が1に類似することから同時期のものと判断した。

第2類 沈線文(4～19)

沈線文土器は、早期の中では最もまとめて出土している。4～7は口縁部破片で、いずれも緩やかに外反する器形である。口唇は平坦に整形され、胴部側は横位の平行沈線が配される。4・7は幅5mm程度で断面が円形の棒状工具による太沈線が多段に配される。5・6は同一個体で、口唇直下に太沈線を2本横走させ、幅1.5mm程度で断面が円形の棒状工具による細沈線を多段に配する。更に、斜位の太沈線を2本配し、両脇間に細沈線を配する。なお、口縁付近は内・外面とも剥落が顕著である。8～17は胴部破片である。8～10は文様が太沈線と細沈線を組み合わせで構成されるもの、11～17は太沈線のみで構成されるものである。18は断面が方形の棒状工具による平行沈線により構成され、ほかの資料とはやや異質であるが、器面の縦方向のケズリ調整などから当該時期と判断した。以上の土器は田戸下層式に比定される。19は細い尖頭状工具によって口唇にキザミが施され、胴部側に同じ工具により横位の平行沈線が配される。胎土には微量な植物繊維の混入が認められ、田戸上層式に比定される。

第3類 条痕文(20～29)

条痕文土器は少量の出土であり、型式名が特定できる資料は極めて少ない。20～22は有文土器で、20・21は口縁部破片である。20は植物繊維の含有量が少なく、胎土は田戸上層式の19に近い。棒状工具により口唇にキザミが施され、外面に垂直方向若しくは斜め方向の刺突が加えられるが、配置に規則性はほとんど認められず、器面処理もかなり雑である。21は植物繊維の含有量が多くなり、砂粒の混入が顕著で胎土は粗い。器面は板状工具による調整が行われており、擦痕が目立つ。表面側は幅6mm程度の板状工具による押引文が2条横位に配され、口唇にもキザミが施される。22は押引沈線が縦位に配され、拓影図左側は斜め方向の刺突により充填される。内面は貝殻条痕が施される。20は判断が難しいが田戸下層式～子母口式と推測され、21・22は鶴ガ島台式～茅山下層式と判断される。23～28は擦痕ないしは条痕のみが施されるもので、23・24以外は表裏施文である。23は口縁部破片で、植物繊維の含有量は増えるものの、器面は擦痕が目立つ。外面の沈線に見える線は人為的なものかはっきりしない。27は一見条痕文に見えるが、条は方向が揃っておらず単位も不明瞭である。1本の細い板状工具を何度もなでつけて



第 263 図 グリッド等出土縄文土器(1)

調整したものと考えられる。29は無文のもので、植物繊維の含有量は多いが、表面側の器面調整はかなり丁寧である。早期末に相当する可能性がある。

第2群 前期 (30～161)

第1類 黒浜式 (30～39)

黒浜式土器は全重量が少なく、そのほとんどはSM-001の墳丘中から出土している。30は植物繊維の含有量が比較的少なく、やや分りにくいが貝殻文と思われる。31～36は水平方向ないしは斜方向に平行沈線が配され区画文が構成されるもので、36は棒状工具、ほかは半截竹管を使用する。31～33は口縁部で、いずれも口唇は外面側にめくれるように整形される。31は小波状である。37・38は円形刺突が半截竹管による平行沈線で連結される。39はLR縄文を地文とし、沈線による円文が組み合わされる。36は判断が難しいが、それ以外は黒浜式の中でも後出的な様相を示している。

第2類 諸磯式 (40～70)

諸磯式は比較的まとまった量が出土している。40～44は縄文地文に半截竹管の端部による連続刺突が施されるもので、40は口縁部、ほかは胴部破片である。40は口端付近が強く屈曲し、その上下に半截竹管端部の刺突列が2列ずつ配される。45は半截竹管による横位の平行沈線と円形刺突列の組合せである。46～50・52～55・57～60は縄文地文に半截竹管による平行沈線が配される。46～50・52は口縁部及び口縁直下で、底部から胴部に向かって器壁が大きく外傾し、口縁部直下で内側へ強く屈曲する。屈曲部分に沿って半截竹管による平行沈線が配される。53～55・57～60は胴部である。51・56は縄文地文がなく、半截竹管による平行沈線が配されるもので、51は上下の平行沈線の間に円文が配される。62・63は縄文地文にキザミが施された浮線文が貼り付けられるものである。以上の土器は諸磯b式に比定されるが、縄文地文のない51・56は浮島式の可能性もある。

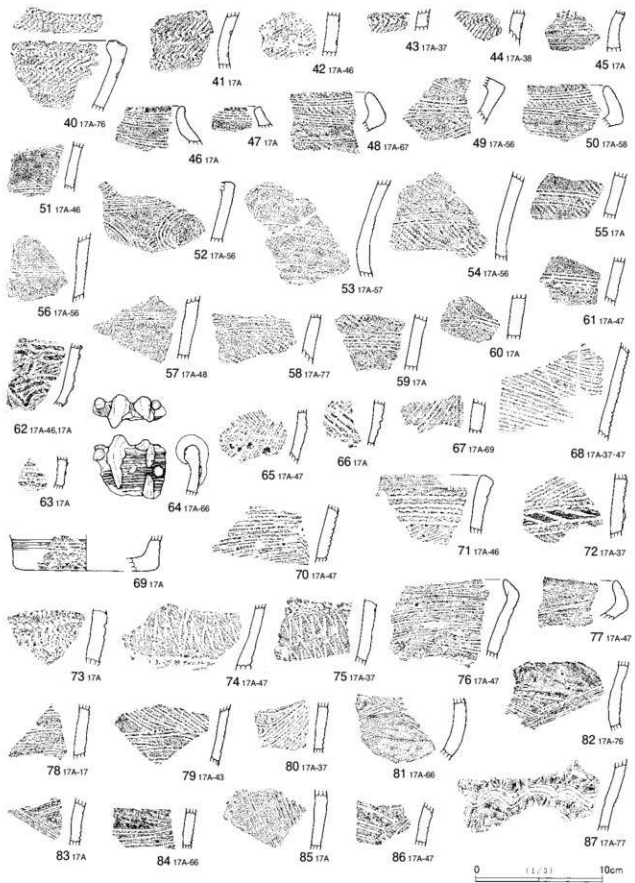
64～70は半截竹管による平行沈線を密に施し地文とするもので、平行沈線を深く削るように彫り込むため、沈線間の器面は蒲針状になる。64は口縁部で、集合平行沈線が横位に施され、貝殻状貼付文やボタン状貼付文、棒状貼付文が配される。肥厚させた口唇の内面は矢羽根状に平行沈線が施され、貼付文が外面から回り込む。65・66の平行沈線は矢羽根状で、65にはボタン状貼付文が配される。67はほかの資料に比べ沈線は浅くやや不揃いで、時期が異なる可能性もある。68・70は半截竹管による平行沈線が斜位に配されており、三角形区画が構成されると思われる。69は底部で、遺存度は約20%、推定底径13.4cm、残存器高2.8cmである。胎土は粗く、熱による剥落もやや目立つ。半截竹管による平行沈線が4本配される。以上の土器は諸磯c式に比定される。

第3類 浮島式・興津式 (71～149)

当遺跡の縄文土器で主体的な位置を占めるのは、浮島式～興津式にかけての資料である。文様要素も多様なため、主体となる技法ごとに説明する。

a種 変形爪形文 (71～75)

71～75は変形爪形文を主体として、平行沈線文あるいは羽状貝殻文が組み合わされるものである。71と72は同一個体である。71は口縁部で、口唇がやや肥厚し外反する。口縁に沿って2条の変形爪形文を横走させ、下側を斜位の平行沈線で充填する。72は胴部で、斜めのキザミをもつ隆起線を横位に貼り付け、その両側に変形爪形文を沿わせて、斜位の平行沈線で上下を充填する。73～75は変形爪形文と波状貝殻文が組み合わされるもので、貝殻の原体は放射筋がないものである。73は変形爪形文が施された上に波



第264図 グリッド等出土縄文土器 (2)

状貝殻文が施されている。以上の土器は浮島Ⅱ式に比定される。

b種 平行沈線文 (76～90)

76～90は地文がなく、半截竹管による平行沈線を集合させるものである。76・77は口縁部で、底部から胴部へ器壁が大きく外傾し、口縁直下で強く屈曲する。器形は諸磯b式に類似する。78～90は胴部破片で、横位若しくは斜位の集合沈線や幾何学的なモチーフなどが配される。87は3本一組の沈線が波状に施文されるもので、上側には縦位の細沈線が数本配される。以上の土器は器形とモチーフから諸磯b式とする考え方もあると思うが、縄文地文が欠落することを特徴としており、単体ではなくまとまった一群をなしていること、そして、遺跡の地域性を考慮すると浮島Ⅱ式とするのが妥当と考える。ただし、87の細沈線は次項c種で扱う条線文に類するものである可能性がある。

c種 口縁部条線文 (91～94)

91～94は口唇直下に条線文を施すものである。91は凹凸文と平行沈線が組み合わせられるものであるが、条線文は、先の尖った棒状工具による細沈線と太い棒状工具による刺突の2種が用いられる。92は断面三角形の横位隆起線が貼り付けられた上に凹凸文が施されており、輪積痕に凹凸文が施される通常的手法とは異なっている。93は列点文と有節平行線文、押引文が横位に配され、下側は三角文が施される。94の条線文は間隔がやや粗で、口唇の連続刺突は棒状工具側面の押圧によるものである。

d種 三角文 (95～101)

95～101は胴部破片で、横位の三角文を主体とする。97-99は間に押引文、101は押引文と有節平行線文、100は両者に加え貝殻文が組み合わせられる。

以上のc種とd種は浮島Ⅲ式に比定される。

e種 波状貝殻文 (102～122)

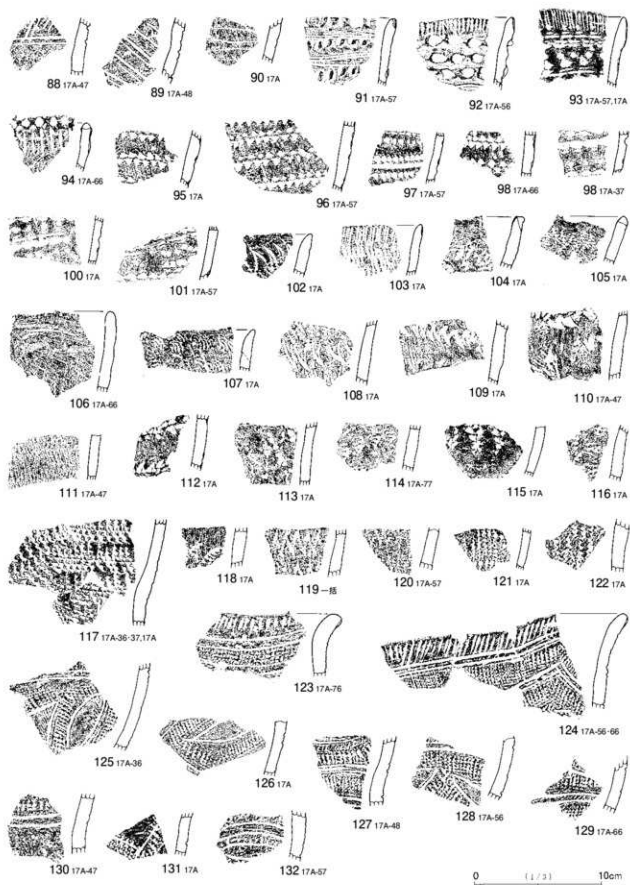
102～122は波状貝殻文が施されるものである。102～107は口縁部破片で、103は条線文が施される。104・105は口唇に指頭大の押圧が加えられるもので、104は外面から内面に向かって押している。105は波状口縁で、波頂部を作り出すように押圧が加えられる。106は分かりにくいのが、口縁に沿って平行沈線が巡らされる。107は貝殻背圧痕が連続して加えられるもので、内面には輪積痕跡が残る。108～122は胴部である。108～110・112～116・118～122は貝殻の振り幅が大きく、波状の文様もつ装飾的な効果を狙っていると考えられる。111・117は振り幅が小さく密であり、器面を充填することを目的としていると考えられる。前者は浮島Ⅱ～Ⅲ式に、後者と口縁部103は浮島Ⅲ式～興津式に属すると推測される。

f種 磨消貝殻文 (123～132)

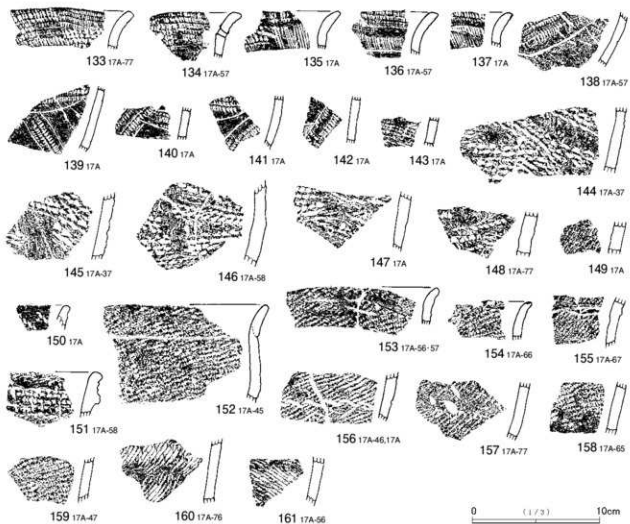
123～132は磨消貝殻文である。123・124は口縁部で、口縁に沿って条線文を配し、胴部は2本の平行沈線で区画した中に貝殻押引文を施すが、123の区画沈線は単沈線を2本平行させて描いているのに対し、124は半截竹管で描いている。施文順序も123は先に貝殻文を施し、後から沈線を描いて沈線間の貝殻文を磨り消しているのに対し、124は口縁から下に向かって沈線→貝殻文→沈線→貝殻文と繰り返して描いている。125～132は胴部破片である。いずれも貝殻押引文を地文とし、沈線で帯状あるいは幾何学的モチーフで区画されて磨り消されている。127の平行沈線は半截竹管が使用されているが、ほかの平行沈線は棒状工具による単沈線を2本平行させることにより描かれている。

g種 押引文 (133～143)

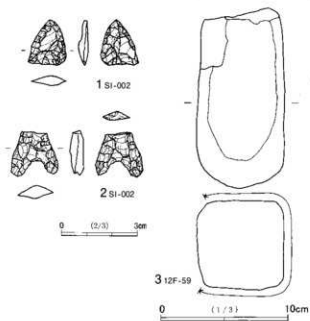
133～142は板状工具による押引文によるもので、貝殻押引文の原体を置換したものと理解される。ほ



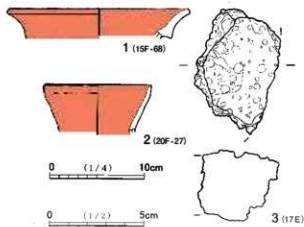
第 265 図 グリッド等出土縄文土器 (3)



第 266 図 グリッド等出土縄文土器 (4)



第 267 図 グリッド等出土縄文時代石器



第 268 図 グリッド出土土師器・鉄滓

とんどの資料で複数種類の原体が使用されている。133～142は口縁部で、器壁は強く外反し、口縁に沿って押引文が横位多段に配される。133は三角文も併用されている。134の左端の穿孔は焼成前に行われている。135～137は口縁に沿って幅の狭い押引文を配し、その下側に幅の広い押引文を配する。138～142は胴部破片である。沈線で帯状あるいは幾何学的モチーフで区画された中に押引文が施されるが、貝殻押引文とは異なり、沈線が先で後から充填されるものがほとんどと思われる。143は櫛歯状工具によると思われる押引文である。以上のf種とg種は興津式に比定される。

h種 燃糸文あるいは附加条縄文 (144～149)

144～149は当該時期と思われる燃糸文あるいは附加条縄文の土器である。148は爪形文も併用される。

第4類 前期末ほか (150～161)

興津式以降の前期に属すると考えられる一群と、縄文施文のみの土器を一括する。150～154は口縁部破片である。150はL燃糸文の原体が押圧されるものである。151は口縁に沿って2条の隆起線が貼り付けられ、間には縦位の細沈線と2条の押引文で充填される。口唇にはL燃糸文が施文される。一見、浮島Ⅲ式～興津式の口縁部条線文を想起させるが、細沈線を押引文で消す手法は異例である。152～154は縄文施文の口縁部である。152は折返し口縁を形成し、外面に輪積痕跡を残す。153は口唇にLR単節縄文が施される。154は口唇上に刺突をもつ。155～161は胴部破片である。155は横位の微隆起線が貼り付けられる。諸磯b式の可能性もある。156は結節文が横位に施される。

縄文時代石器 (第267図、図版110)

1・2は石鏃である。1はメノウ製で、長さ180mm、幅150mm、厚さ40mm、重量0.9gである。平基で正面側に加工途中の主要剥離面が残る。2は黒曜石製で、現存長17.1mm、幅18.0mm、厚さ5.0mm、重量1.3gである。凹基で先端側は欠損している。3は凝灰岩製の砥石である。長さ141.0mm、幅69.5mm、厚さ69.0mm、重量1,328.4gである。平面形は長方形、断面形は正方形であり、正面、右側面、背面に顕著な研磨痕が観察される。

その他の遺物 (第268図、第50表、図版112)

1は土師器有段口縁壺である。15F-68グリッドから出土している。口縁部内外面はナデ調整が施され、赤彩される。2は土師器甕である。20C-27グリッドから出土している。周辺からはこのほかに土師器高杯や土師器甕の小破片が出土しているが、遺構とすべし明確な掘込みは検出できなかった。口縁部内面はナデ調整が施されるが、外面は器表面の剥落が著しく、調整は不明である。口縁部内外面ともに赤彩される。3は鉄滓である。13Eグリッドからの出土している。全て割れ口で、全面に大きな気孔が見られる。最大値で縦66.1mm、横45.8mm、厚さ37.0mm、重さ24.68gである。手に持った感覚では重量感がなく、非常に軽い。

第50表 土器観察表

() 推定値 < > 現存値

遺構	採回番号	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	調・焼成	技法	備考	
SI001	1	土師器	鉢	1径 (11.6)	20%	砂粒	内面 明赤釉 (25YR5/6)	内面	ヘラナデ	
				底径 -			外面 明赤釉 (5YR5/8)	外面	ヘラナデ	
				器高 <7.1>			焼成 良好	底外面	-	
SI002	1	土師器	高杯	1径 18.8	杯部90%	砂粒	内面 赤釉 (25YR4/8)	内面	ヘラナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 明赤釉 (25YR5/6)	外面	ヘラナデ	
				器高 <6.4>			焼成 良好	底外面	-	
SI002	2	土師器	高杯	1径 16.4	杯部90%	砂粒	内面 明赤釉 (2.5YR5/6)	内面	ナデ	内外面赤彩
				底径 -			外面 橙 (2.5YR6/6)	外面	ナデ	
				器高 <4.5>			2mm程の石小	焼成 良好	底外面	

道橋	構種	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	調・焼成	技法	備考
SI002	3	土師器	高杯	1径 184 底径 125 器高 14(4)	90%	砂粒	内面 明赤釉 (2.5YR5-8) 外面 赤 (10YR5.6) 焼成 良好	内面 ナデ ヘラナデ 外面 ナデ ヘラナデ 底外面 -	内外面赤彩 (遺存状態悪)
SI002	4	土師器	鉢	1径 (98) 底径 (42) 器高 8.6	45%	砂粒 1mm-2mm の小石	内面 橙 (7.5YR6.6) 外面 赤い黄橙 (10YR6.4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 ヘラナデ	
SI002	5	土師器	鉢	1径 8.5 底径 3.0 器高 8.0	100%	砂粒	内面 赤い黄橙 (10YR6.4) 外面 橙 (2.5Y6.6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 ヘラナデ	内外面の一部 輪軸痕
SI002	6	土師器	鉢	1径 (110) 底径 - 器高 (9.2)	70%	砂粒 1mm-2mm の小石多量	内面 赤い黄橙 (10YR6.4) 外面 赤い黄橙 (10YR6.4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内面輪軸痕
SI002	7	土師器	小型甕	1径 10.8 底径 5.8 器高 12.1	98%	砂粒 白砂子	内面 赤い黄橙 (7.5YR6.4) 外面 赤い黄橙 (10YR6.4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ケズリ後ヘラナデ 底外面 ケズリ後ヘラナデ	外面スス付着
SI002	8	土師器	甕	1径 13.5 底径 - 器高 <17.4>	30%	砂粒 白砂子 1mmの小石	内面 黒 (Value13.0) 外面 赤い黄橙 (7.5YR5.4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ケズリ後ヘラナデミガキ 底外面 -	内外面焼熱
SI002	9	土師器	甕	1径 11.6 底径 5.4 器高 25.0	90%	砂粒 1mm-3mm の小石多量	内面 橙 (7.5YR6.6) 外面 橙 (7.5YR6.6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ヘラナデ ナデ 底外面 ヘラナデ	内外面焼熱
SI002	10	土師器	甕	1径 (11.8) 底径 - 器高 <15.6>	66%	砂粒	内面 赤い黄 (7.5YR5.4) 外面 明赤釉 (2.5YR3.6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ 底外面 -	内面輪軸痕
SI002	11	土師器	甕	1径 (12.6) 底径 (5.8) 器高 (18.8)	60%	砂粒	内面 赤い黄橙 (10YR6.4) 外面 赤い黄橙 (10YR6.4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ケズリ後ナデ・ミガキ 底外面 -	1線部~胴部中位 外面スス付着
SI003	1	須恵器	高台付 杯	1径 12.7 底径 10.1 器高 4.1	35%	精緻	内面 灰白 (5Y7.2) 外面 灰白 (5Y7.1) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 細輪ヘラケズリ後ナデ	外面に次アズキ 高台径 9.1 高さ 0.9
SI003	2	土師器	杯	1径 13.5 底径 9.6 器高 4.0	98%	砂粒	内面 明赤釉 (5YR5.6) 外面 橙 (5YR6.6) 焼成 不十分	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 ヘラケズリ	内外面焼熱により器 面が軟化
SI003	3	土師器	杯	1径 13.1 底径 8.6 器高 4.0	80%	砂粒	内面 橙 (5YR6.6) 外面 橙 (5YR6.8) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ 底外面 ヘラケズリ	焼熱により赤化
SI003	4	土師器	高杯	1径 11.5 底径 9.5 器高 11.4	70%	砂粒	内面 橙 (7.5YR6.8) 外面 橙 (7.5YR6.8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	
SI003	5	土師器	小型 台付甕	1径 13.1 底径 5.5 器高 12.1	90%	砂粒	内面 黒釉 (5YR2.1) 外面 赤い赤釉 (5YR4.4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	台部径7.4 内外面スス付着 台部外面指痕押捺
SI003	6	土師器	小型 台付甕	1径 (11.8) 底径 - 器高 <6.5>	5%	砂粒	内面 暗赤釉 (5YR3.4) 外面 暗赤釉 (5YR3.4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ 底外面 -	
SI003	7	土師器	小型 台付甕	1径 (12.2) 底径 - 器高 <3.5>	1線部 20%	砂粒	内面 橙 (7.5YR6.6) 外面 赤い黄 (7.5YR5.4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ 底外面 -	8と同一個体
SI003	8	土師器	小型 台付甕	1径 - 底径 6.3 器高 <2.7>	台部25%	砂粒	内面 明赤釉 (5YR5.6) 外面 灰黒 (7.5YR4.2) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	台部径 9.6・高さ 2.0 台部外面指痕押捺 7と同一個体
SI003	9	土師器	甕	1径 (21.6) 底径 - 器高 <4.0>	1線部 20%	砂粒	内面 明釉 (7.5YR5.6) 外面 明黄釉 (10YR6.6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	1線部外面輪軸痕
SI003	10	土師器	甕	1径 22.9 底径 7.7 器高 26.8	73%	砂粒	内面 赤釉 (5YR4.8) 外面 赤釉 (5YR4.8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラケズリ後ナデ 底外面 -	内面輪軸痕 一部焼熱による赤化
SI003	11	土師器	甕	1径 (16.2) 底径 8.2 器高 24.2	50%	砂粒	内面 明釉 (7.5YR5.6) 外面 赤釉 (5YR4.8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラケズリ後ヘラ磨き 底外面 -	胴部内面の 断面赤黒着
SI003	12	土師器	甕	1径 - 底径 3.25 器高 <21.3>	胴部以下 30%	砂粒	内面 明釉 (7.5YR5.8) 外面 黒 (10YR2.1) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ケズリ後ヘラナデ 底外面 -	胴部内面輪軸痕
SI003	13	須恵器	甕	1径 - 底径 - 器高 -	-	砂粒	内面 灰 (5Y6.1) 外面 灰 (5Y6.1) 焼成 良好	内面 同心円文当て具痕 外面 平行タタキ 底外面 -	転用観 (内面使用)
SI004	1	土師器	杯	1径 (12.6) 底径 (9.4) 器高 3.9	70%	砂粒	内面 赤い赤釉 (5YR4.3) 外面 橙 (5YR6.6) 焼成 良好	内面 ヘラ磨き 外面 ヘラケズリ 底外面 ヘラケズリ	
SI004	2	土師器	杯	1径 (12.0) 底径 - 器高 <4.4>	1線部 25%	砂粒	内面 橙 (7.5YR6.6) 外面 橙 (7.5YR6.6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ヘラケズリ ナデ 底外面 -	1線部外面輪軸痕

遺構	押垣 番号	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎土	調・焼成	技 法	備 考
SI-001	3	土師器	鉢	口径 135 底径 75 器高 7.6	95%	砂粒	内面 橙 (7.5YR6/6) 外面 明赤釉 (5YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナズリ	外部外面 部分的に赤彩
SI-001	4	土師器	鉢	口径 (114.0) 底径 - 器高 <7.0	60%	1層部 砂粒	内面 明赤釉 (5YR5/6) 外面 赤釉 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ナデ 底外面 -	外面輪襷痕
SI-001	5	土師器	鉢	口径 91 底径 62 器高 40	95%	砂粒	内面 にぶい橙 (7.5YR5/4) 外面 橙 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 ヘラナデ	1層部内外面 油煙状の付着物
SI-001	6	土師器	鉢	口径 89 底径 52 器高 42	100%	砂粒	内面 にぶい橙 (7.5YR5/4) 外面 橙 (7.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナズリ後ヘラナデ 底外面 ヘラナデ	1層部外面輪襷痕 1層部内外面 油煙状の付着物
SI-001	7	土師器	小型甕	口径 (10.8) 底径 - 器高 <3.4	30%	1層部 砂粒	内面 明赤釉 (5YR5/6) 外面 赤釉 (5YR4/6) 焼成 良好	内面 ヘラナズリ ナデ 外面 ヘラナズリ ナデ 底外面 -	
SI-001	8	土師器	甕	口径 - 底径 8.8 器高 <5.6	100%	底部 砂粒	内面 黒 (7.5YR2/1) 外面 黄褐色 (10YR5/8) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナズリ 底外面 ヘラナズリ	
SI-001	9	土師器	甕	口径 23.3 底径 - 器高 <5.7	3%	砂粒	内面 明赤釉 (5YR5/6) 外面 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナズリ ナデ 底外面 -	1層部外面輪襷痕 外部外面被熱により 器表面変色
SI-001	10	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	-	砂粒	内面 灰黄 (2.5Y6/2) 外面 黄灰 (2.5Y6/1) 焼成 良好	内面 同心円文当て具痕 ナデ 外面 平行タタキ後ナデ 底外面 -	転用甕 (内面使用)
SI-001	11	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	-	長石 雲母	内面 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 外面 黄灰 (2.5YR5/2) 焼成 良好	内面 - 外面 平行タタキ 底外面 -	内面器面 赤く見える 12と同一個体
SI-001	12	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	-	長石 雲母 砂粒	内面 明褐色 (7.5YR5/6) 外面 灰褐色 (7.5YR4/1) 焼成 良好	内面 - 外面 平行タタキ 底外面 -	内面器面 赤く見える 11と同一個体
SM-001	1	土師器	高杯	口径 (23.0) 底径 - 器高 <10.3	杯部 40%	砂粒	内面 赤 (10R4/6) 外面 赤釉 (10R4/4) 焼成 不良	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 -	内外面赤彩 杯部外面輪襷痕
SM-001	2	土師器	杯	口径 (15.2) 底径 - 器高 <10.3	20%	砂粒	内面 赤 (10R4/6) 外面 明赤釉 (2.5YR5/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナズリ後ナデ 底外面 ヘラナズリ後ヘラナデ	内面から外面体部上 半赤彩
SM-001	3	土師器	鉢	口径 - 底径 (4.4) 器高 <1.2	底部 60%	砂粒	内面 にぶい赤釉 (5YR5/3) 外面 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナズリ後ナデ	内面赤彩 皿溝内一筋
SM-001	4	土師器	鉢	口径 - 底径 4.8 器高 <1.9	底部 70%	砂粒	内面 にぶい橙 (2.5YR6/4) 外面 橙 (2.5YR6/6) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナズリ後ナデ	内外面赤彩
SM-001	5	土師器	甕	口径 (13.8) 底径 - 器高 <8.2	1層部 - 胴部 20%	砂粒 赤スクリア	内面 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 外面 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 焼成 良好	内面 ヘラナデ ナデ 外面 ヘラナデ ナデ 底外面 -	胴部内面輪襷痕
SM-001	6	土師器	壺	口径 - 底径 10.6 器高 <4.5	胴部下平 - 底部 85%	砂粒 石英 小石	内面 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 外面 にぶい赤釉 (5YR5/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナズリ 底外面 -	胴部外面赤彩 内面器面変色
SM-001	7	土師器	壺	口径 - 底径 (7.4) 器高 <7.8	胴部下平 - 底部 50%	砂粒	内面 明赤釉 (2.5YR5/6) 外面 明赤釉 (2.5YR3/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナズリ 底外面 -	胴部外面赤彩
SS-001	1	須恵器	長頸壺	口径 (10.8) 底径 - 器高 -	1層部 - 胴部破片	精緻 砂粒	内面 灰白 (2.5Y8/1) 外面 灰白 (2.5Y7/1) 焼成 良好	内面 ロクロ成形 外面 ロクロ成形 回転ヘラナズリ 底外面 -	右回転ロクロ
SS-001	2	須恵器	平瓶	口径 - 底径 (12.6) 器高 -	体部破片	黒 白粒子	内面 灰 (N6-0) 外面 灰 (N6-0) 焼成 良好	内面 ロクロ成形 外面 ロクロ成形 平行タタキ後 回転ヘラナズリ	外部外面 内面浮文2つ
SS-001	3	土師器	甕	口径 - 底径 (8.6) 器高 <2.3	底部 50%	砂粒 赤スクリア	内面 橙 (7.5YR4/4) 外面 橙 (7.5YR4/4) 焼成 良好	内面 ヘラナデ 外面 ヘラナデ 底外面 ヘラナズリ	
SK-010	1	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	-	白粒子	内面 灰 (N5-0) 外面 灰 (5Y5/1) 焼成 良好	内面 同心円文当て具痕 外面 回転ヘラナズリ ナデ 底外面 -	
SK-010	2	須恵器	甕	口径 - 底径 - 器高 -	-	長石 白粒子	内面 灰 (5Y5/1) 外面 灰 (5Y5/1) 焼成 良好	内面 同心円文当て具痕 外面 平行タタキ 底外面 -	
15F-68	1	土師器	壺	口径 (19.4) 底径 - 器高 <3.1	1層部 13%	砂粒 6mmの小石	内面 赤釉 (5YR4/6) 外面 明赤釉 (5YR5/6) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 ナデ 底外面 -	内外面赤彩
20C-27	2	土師器	埴	口径 (11.2) 底径 - 器高 <5.2	1層部 40%	砂粒 赤スクリア	内面 赤釉 (10R4/4) 外面 赤釉 (10R4/4) 焼成 良好	内面 ナデ 外面 - 底外面 -	内外面赤彩 外面器面剥落顯著、 調整不明

第5章 総括

椎の森工業団地建設に当たり、広大な面積を対象に発掘調査が実施された。旧石器時代から近世まで長い期間の生活の痕跡が明らかとなった。ここでは、今回の2期地区の発成果を中心に、旧石器時代・縄文時代・古墳時代以降と大きく3時期に分けて発掘成果をまとめることとする。

第1節 旧石器時代

旧石器時代では、定使山遺跡で3地点、八重門田遺跡で10地点、清水川台遺跡で25地点の、計38地点の石器集中地点が検出された。それぞれの遺跡について便宜的にブロック名称を付け、名称順に記述を行ったが、ここではこれらのブロックを3遺跡統合して出土層位に基づき文化層に分類し、編年的な考察を行いたいと思う。なお、本遺跡群での各文化層の特徴を明らかにするには、ブロックを構成する石器点数の少なさ、定型的な石器が少ないことなどから難しい。よって本遺跡群における旧石器時代の統合的な特徴として述べておきたい。また、本遺跡群で出土した黒曜石製の石器について、可能な限り蛍光X線による原産地同定を行った。その同定結果も加味して記述しておきたい。

第1文化層

Ⅲ層に属する文化層で、八重門田遺跡第1・2・5ブロック、清水川台遺跡第8～12・21・23ブロックの計10ブロックが該当する。定型的な石器は出土していない。部厚な縦長剥片が多く見受けられるが、黒曜石等の遠隔地産の石材については概して小型である。使用される石材は珪質頁岩・ホルンフェルス・黑色安山岩が多用される。黒曜石については信州産のみである。

第2文化層

Ⅳ層に属する文化層で、八重門田遺跡第6・8・9ブロック、清水川台遺跡第14～18ブロックの計8ブロックが該当する。文化層を代表する定型的な石器は、大型の不定形剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器であり、八重門田遺跡第6ブロックから複数出土している。嶺岡産珪質頁岩・黑色安山岩・珪質頁岩が石材として多用され、特に嶺岡産珪質頁岩については他の文化層と比較して使用頻度が圧倒的に高い。黒曜石については高原山産のみである。

第3文化層

Ⅴ層に属する文化層で、八重門田遺跡第3・7・10ブロック、清水川台遺跡第7・13・19・20・22・25ブロックの計9ブロックが該当する。文化層を代表する定型的な石器は、角錐状石器が第3ブロックから出土する。使用される石材は黑色安山岩が主体であり、黒曜石、チャートなどが混在し、使用される石材の種類は他の文化層と比較して多種であるといえる。黒曜石については高原山産、信州産、神津島産、箱根産の近隣産地ほぼ全ての原産地を網羅する。特に清水川台遺跡第7ブロックでは箱根産黒曜石のみで構成されており、小型の不定形剥片が主体となるため、第3文化層に属するブロックの中でも異質であるといえる。また、清水川台遺跡第20ブロックでも黒曜石の石器が主体となるが、このブロックでは神津島産が主体となり、箱根産が客体的に混在する。

第4文化層

Ⅵ層に属する文化層で、定使山遺跡第1～3ブロック、清水川台遺跡第2・4・24ブロックの計6ブ

ロックが該当する。文化層を代表する定型的な石器は、縦長剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器であり、定使山遺跡第1ブロック、清水川台遺跡第2・4ブロックから複数点出土している。この他に定使山遺跡のブロックからは、縦長剥片を素材とした楔形石器や石刃が出土しており、清水川台遺跡と比較するとより大型縦長剥片の作出意図が明瞭に窺える。使用される石材については、嶺岡産珪質頁岩、安山岩（トトロ石）、黒色安山岩、珪質頁岩等、石材の種類は多種である。黒曜石については信州産と神津島産の両者が認められるが、清水川台遺跡第4ブロックから出土した神津島産の個体はこの一点のみであり、極めて客体的である。

第5文化層

Ⅸa層に属する文化層で、八重門田遺跡第4ブロック、清水川台遺跡第1ブロックの計2ブロックが該当する。文化層を代表する定型的な石器は、不定形剥片を素材としたナイフ形石器であり、八重門田遺跡第4ブロックから出土している。流紋岩、珪質頁岩、黒色頁岩製の不定形剥片が主体であり、黒曜石については高原山産のみである。

第6文化層

Ⅸc層に属する文化層で、清水川台遺跡第3・5・6ブロックの計3ブロックが該当する。文化層を代表する定型的な石器は出土していない。剥片は小型の不定形剥片が主体であるが、清水川台遺跡第5・6ブロックでは縦長剥片が認められ、両者が混在する特徴が認められる。珪質頁岩、玉髓が主体的に使用される。黒曜石については高原山産のみである。

本遺跡群では、第1文化層Ⅲ層に属するブロックが多く、おそらくこの中でも細分は可能であろう。しかし比較資料となる定型的な石器の出土点数が少ないため、細分は行わなかった。また下総台地では検出に難がある第1黒色帯が明瞭に検出されているため、特にⅣ層とⅤ層について文化層を分け考察したが、文化層を象徴づける定型的な石器が少ないため、両者の特徴を明示するには至らなかった。

各文化層と黒曜石の原産地との関係は、高原山を起点とした北関東系、和田峠・諏訪を起点とした信州系、箱根・天城峠の南関東系および神津島に大別すると、第2黒色帯下部の第5・6文化層とⅣ層の第2文化層において高原山産の黒曜石が、Ⅲ層の第1文化層では信州系の黒曜石が他を凌駕している。南関東系と神津島産の黒曜石が使用されるのは、Ⅴ層第3文化層とⅦ層第4文化層であり、同文化層で使用される信州系、北関東系の黒曜石を含め、この時期に石材の移動ルートが多岐に及ぶことが理解できる。下総台地において普遍的にみられる北関東系黒曜石と、南関東系・神津島と比較して石材の移動ルートが推測容易な信州系に混在し、これら南関東系・神津島産の黒曜石が搬入されているのは、当期の地形的要因が大きく関わっていると推測される。

第2節 縄文時代（第51表）

袖ヶ浦椎の森工業団地事業地内では、これまで主に財団法人君津郡市文化財センターによって発掘調査が行われている。その成果と今回の成果を踏まえて縄文時代の遺構数をまとめると、次のとおりとなる（土坑には陥穴を含む）。

第51表 縄文時代遺構一覧表

遺跡名	定使山遺跡	八重門田遺跡			清水川台遺跡		
		約 98,500			約 72,000		
調査対象面積 (㎡)	6,000						
調査次	今回	1次 ⁽¹⁾	2次 ⁽²⁾	今回	1次	2次	今回
炉穴基数	0	9	44	6	0	0	1
土坑基数	4	2	41	16	0	5	7

以上の成果を基に、縄文時代の状況について時期を追って俯瞰する。

まず草創期であるが、遺構は検出されなかったが八重門田遺跡から表裏縄文土器と有舌尖頭器が出土した。有舌尖頭器は2次調査でも出土しており、全部で6点である。それ以外の石器は極めて少なく早期以降の可能性が強い。ここではひとまず除外する。内房地区における草創期の出土事例として、富津市の前三舟台遺跡や市原市の南原遺跡などが知られており、両者とも隆起線土器を主体として有舌尖頭器、木葉形尖頭器、石鏃、削器、搔器、石斧などを伴っている。県内におけるほかの隆起線土器出土遺跡においても、おおむね器種構成は同様である。一方で、表裏縄文土器をはじめとする多縄文系土器を出土する香取市山倉大山遺跡や我孫子市布佐余間戸遺跡などでは、典型的な有舌尖頭器や木葉形尖頭器は姿を消し、石鏃を中心としたより縄文時代らしい器種構成となっている。その点から考えると八重門田遺跡の石器構成は、多縄文系土器の時期としてはやや異質である。遺物は残されていないが、隆起線土器の時期から活動の場となっていた可能性が考えられる。

熱糸文期は3遺跡とも遺構はなく、遺物も少なく活動は低調であると言わざるを得ないが、沈線文期になると遺構は検出されないものの遺物の出土量が増える。過去の調査では田戸下層系は八重門田遺跡でまとめて出土していたが、今回清水川台遺跡でも良好な資料がまとめて出土し、当該時期は両遺跡で活動が展開されていたことが明らかとなった。

遺構の数は糸痕文期がピークである。遺構数の集計を通して特徴的なのは八重門田遺跡の炉穴で、3次にわたる調査で子母口式を中心とする炉穴が56基検出されており、炉穴がほとんど検出されていないほかの2遺跡とは様相が大きく異なっている。1次調査においては包蔵地南西部の谷に面した台地平坦面上に9基の炉穴が、2次調査では包蔵地北端部の同じく谷に面した台地平坦面上に炉穴がまとめて検出されており、特に北端部は80m四方の範囲に40基以上の炉穴が集中する。また、範囲が重なるように早期糸痕文期の良好な包含層が検出されているほか、土坑のうち陥穴ではないと判断される13基についても、多くが炉穴群と近接した場所から検出されている。そして今回の調査では、炉穴4基が包蔵地東端部の谷に面した台地平坦面上からある程度まとめて検出されている。こうした点から、早期後半においては八重門田遺跡の谷に面した平坦面には、炉穴を主体とした居住域が広がっていたと想定される。

出土遺物は子母口式土器が多数を占め、特に、八重門田遺跡では包含層も含め多量の遺物が出土している。1次調査では炉穴から貝殻文、無文などが主に出土している。2次調査の出土土器は緒条体圧痕文、貝殻圧痕文、貝殻文、列点文、沈線文、円孔文などバラエティに富んでいる。炉穴出土のものは列点文、無文が目立ち、包含層出土ではそれらに加えて緒条体圧痕文が豊富である。今回、出土土器は貝殻文と円

孔文が認められる程度であるが、SK-004 炉穴からは円孔文の良好な資料が出土しており、炉穴出土の円孔文土器はこれが唯一である。各地点で主体となる土器の様相が異なっているが、おむね子母口式古段階に位置づけられる点では一致する¹⁾。新段階に特徴的な細隆起線文は包含層から出土しているものの少量で、遺構からの出土はない。そして、野島式以降は遺物自体が激減し、おそらく遺構も構築されなくなる。東側に隣接する豆作台遺跡や南側の久保田川を隔てた台地上に位置する美生遺跡群からは、糸痕文期後半に至るまでの炉穴が検出され遺物も多量に出土しており、居住域が移ったものと推測される。

前期は、中葉までは清水川台遺跡で少量の黒浜式が認められる程度であるが、後葉になると遺構は検出されないものの、まとまった量の遺物が出土するようになる。これまでは八重門田遺跡での出土事例が知られていたが、今回の調査で清水川台遺跡でも良好な資料が認められた。時期としては浮島式Ⅱ式～興津式と諸磯Ⅰ式～Ⅱ式が中心である。主体となっているのは浮島系土器で諸磯系土器に対し量で上回っており、清水川台遺跡ではその傾向が特に顕著である。八重門田遺跡 2 次調査では数量は明示されていないが、報告書の掲載点数はやはり浮島系土器が大きく上回っており、同様の状況であると推測される。西関東三浦半島周辺を分布の中心とする諸磯系土器は、東関東の古鬼怒湾周辺を分布の中心とする浮島系土器に対し、上総地方では主体的な存在であることが多いが、当遺跡群では逆の傾向を示している。ちなみに隣接する豆作台遺跡では同時期の堅穴住居跡が 10 軒検出されているが、出土土器はほぼ全ての堅穴住居跡で諸磯系土器が浮島系土器を上回っている。当該時期に居住域であったであろう豆作台遺跡に対し、清水川台遺跡、八重門田遺跡がどのような性格の場であったのか、出土土器の傾向の相違が何を意味するのか、課題である。

中期以降は生活の痕跡が全く見当たらなくなり、定使山遺跡で加曾利 B 式土器が少量出土するのみとなる。同時期には小櫃川沿いの広大な台地上に山野貝塚などの大規模な集落が出現する。集団の大形化や海退などの環境の変化により当地は生業活動に適さなくなり、人々が去って行ったものと考えられる。

最後に陥穴についてであるが、定使山遺跡の土坑 4 基はいずれも陥穴である。清水川台遺跡では土坑 12 基のうち 11 基が陥穴、八重門田遺跡では土坑 59 基のうち 32 基が陥穴である。いずれの遺跡でも台地全体に散在しており、群としてのまとまりは認められない。遺物もほとんど出土していないため時期については不明な点が多いが、いくつかの陥穴からは早期後半若しくは前期後半の遺物が出土している。当地が居住域とされたのは早期後半に限られるが、前期においても引き続き狩猟域として利用されたと思われる。

注 1) 1994「千葉県袖ヶ浦市上大城遺跡発掘調査報告書」財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 100 集

この調査は道路建設に伴うもので、事業地内全域が上大城遺跡として調査されたが、南側約 3 分の 1 は八重門田遺跡の範囲内である。ここではその部分から検出された遺構をカウントした。

2) 2005「千葉県袖ヶ浦市袖ヶ浦権の森工業団地内埋蔵文化財調査報告書 清水川台遺跡Ⅱ 八重門田遺跡 上大城遺跡Ⅱ」財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 188 集

八重門田遺跡の名称で調査されたのはこの時が初めてで、通常はこの調査を 1 次調査とするとところであるが、注 1 で述べた経緯により本項では 2 次調査として扱う。

3) 1983「千葉県君津郡袖ヶ浦町清水川台遺跡発掘調査報告書」財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 2 集

4) 子母口式の編年の位置づけについては、毒島正明 2016「西上総の子母口式古段階—中六遺跡出土土器を中心として—」『千葉縄文研究 6』を参考にした。

第3節 古墳時代以降

1 集落の変遷（第269・270図）

古墳時代以降の遺構・遺物について、今回報告した3遺跡で検出されたが、いずれも該期の拠点的な集落となりうるものではない。ここでは椎の森工業団地の1期地区分の成果も含めてまとめることとする。

定使山遺跡はこれまでに調査例がなく、北側に張り出す台地という地形上の問題からか近世以降の土手1条が検出されたのみで、遺物の出土も少量であり、人々の生活した痕跡が乏しい。

八重門田遺跡では今回の調査区の台地中央部から南側で古墳時代前半期の竪穴住居を主体とする集落跡が検出された。前期の竪穴住居跡からは弥生時代後期後半の要素をもつ土器も土師器とともに出土しており、前期でも前半の時期が想定される^[11]。古墳時代中期になり竪穴住居は20軒を超え、集落として最盛期を迎える。中期²⁾前葉の竪穴住居はSI-011・013の2軒で、その後の中期中葉の竪穴住居がほとんどを占め、中期後葉の竪穴住居はSI-026の1軒のみである。

中期前葉と考えられるSI-013からは緑色凝灰岩製の勾玉・管玉の未成品が出土した。未成品等は床面からはやや浮いて出土し、出土数も限られていることから出土遺構が工房である可能性は低いが、滑石製模造品を生産する前段階から同地域で玉造りが行われていたことは重要である。西側本調査範囲の南東緩斜面部にまとまって分布するSI-002～SI-005、SI-007、SZ-001の遺構覆土からは石製模造品製作関連遺物が多量に出土した。同じ分布域にあるSI-001についても滑石製の剥片が20点ほど出土している³⁾。

その後、集落として拡大することはなく、竪穴住居跡は古墳時代後期（6世紀末～7世紀初頭）では1軒、奈良時代（8世紀後半）2軒と極めて少ない⁴⁾。奈良・平安時代と見られる方形・円形区画墓が比較的まとまって検出されていることから、墓域としての性格が考えられる。その後、中世の遺構はなく、近世になり一辺13.5m、高さ2.8mの塚が築造されることとなる。塚の築造時期は、出土遺物と旧表土に含まれる宝永火山灰の降下時期から考えて、18世紀の中頃と想定される。人骨分析によって、熟年男性で疾病を患っていたことやおおむね白骨化した段階で改葬されたことも明らかとなった。

今回の八重門田遺跡の調査区西側には1期地区の調査と道路建設に伴って上大城遺跡として調査した成果がある。今回調査区の西に隣接する台地南側では弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が重複することなく分布し、隣接部には古墳時代中期と考えられる円墳（墳丘径約15m）が2基検出された。奈良・平安時代の遺構は隣接部には分布せず、約200m離れて北側に張り出した台地平坦部に掘立柱建物跡や鍛冶工房跡を含む集落跡が検出された。これらから、八重門田遺跡は北西部が奈良・平安時代の集落、西側から中央部が弥生時代後期から古墳時代前期を主体とした集落、中央部から西側が古墳時代中期を主体とする集落と時期毎に居住域が異なっていたことが判明した。

清水川台遺跡（2）では古墳時代中期の竪穴住居跡3軒、円墳（墳丘径20.5m）1基、奈良時代の方形区画墓3基、竪穴住居跡2軒と土坑20基、溝1条が検出されたが、対象面積に対して極めて散漫な遺構分布である。北東部に隣接する1期地区分と道路建設に伴う調査での成果では、遺構は古墳時代末から奈良時代初めと考えられる方形の墳墓（墳丘一辺17.5m）と奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出された。遺物では鉄滓や鑄口などの鍛冶関連遺物が出土している。このように清水川台遺跡は八重門田遺跡寄りの西部では古墳時代中期の集落の一部が見られ、古墳時代終末期～奈良時代では台地の北寄りに集落の中心が移り、台地中央から南側は方形区画墓がまばらに展開する墓域となっていたことが判明した。



第269図 事業地内上層遺構の分布

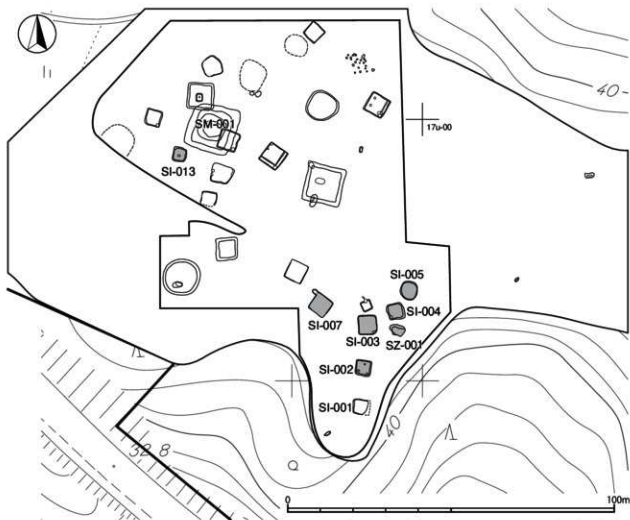
今回の2期事業地内の調査範囲からは外れるが、八重門田遺跡の西側に隣接する上大城遺跡では1期地区の調査と道路建設に伴う調査が実施された。古墳時代前期の竪穴住居跡 100 軒以上、前期の方墳 8 基、中期前半の円墳（径 12 m）、奈良・平安時代の竪穴住居跡 60 軒以上、掘立柱建物跡 20 棟以上と椎の森工業団地関連遺跡群の中で最も発掘成果が充実している。古墳時代の集落は前期に限定され、分布は台地の北側に集中する。奈良・平安時代の集落は 8 世紀後半から 10 世紀前半まで存続し、瓦塔や香炉蓋などの仏教関連遺物や人面墨書土器や多文字墨書土器などが多数出土した。前半期の集落は遺跡北側と南側から東方向に延びる支尾根部の南東緩斜面部に集中し、後半期の集落は台地中央と北側の平坦部に分布する。

このように椎の森工業団地関連遺跡群の立地する台地自体は細尾根でつながっているものの、遺跡の時期や様相は一様ではなく、大きく地形的に久保田川に面する台地南側と浜宿川水系となる北側とで、集落の時期毎の分布傾向が見られ、土地利用の違いが明らかとなった。

2 石製模造品製作関連遺物の出土状況の検討（第 271～273 図、第 52 表）

ここでは古墳時代中期中葉の遺構（SI-002・003・004・005・007、SZ-001）から多量に出土した石製模造品の製作関連遺物について、検討することにした。

石製模造品の製作剥片や未成品の出土点数は第 52 表のとおりで、ほとんどが白玉製作に関わるものと考えられ、石材はすべて滑石である。遺物の観察から大きく次のような製作工程⁵⁾が想定される。



第270 図 石製模造品製作関連遺物出土遺構等の分布

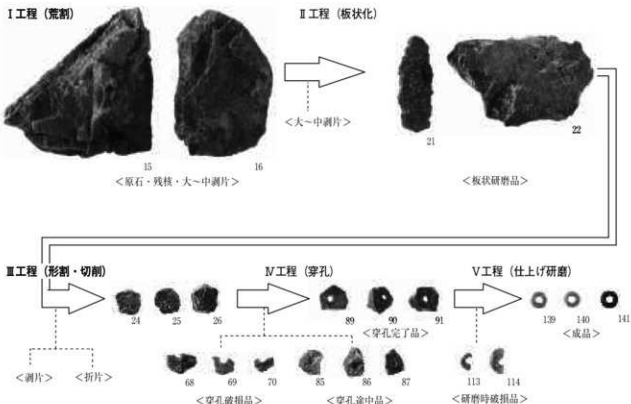
I工程（荒割） 全体的にこの段階の個体は少なく、原石から大きく剥片を剥離する工程と中・小型剥片を作出する工程を分離することは難しく、連続または同時に行われた可能性があるため1段階にまとめた。この段階の遺物としては原石・残核、大～中剥片が挙げられる。工具痕の見られるものと工具痕のないものがある。工具痕は白く筋状の痕跡で、調査時についた可能性もあるが、比較的厚めの剥片・残核に多く見られる。

II工程（板状化⁶⁾） 荒割段階で方形・長方形を意識して割り出された剥片の上下面を平滑な面に研磨した板状研磨品を作る工程である。片面を研磨した中剥片もこの段階に含めた。基本的に前段階と同様に、成品に直結する形状ではないため、失敗・廃棄される総量自体が少ないと考えられ、出土量も少ない。また、厚みのある板状研磨品には剣形の未成品も含まれている可能性が高い。

III工程（形割・切削） 板状研磨品を白玉の大きさにしていく工程である。板状研磨品を1cm×2cm程度の長方形に折り取ったと思われる個体も見られる。形割段階で平面を方形に作出し、切削段階でそれを多角形にしていくものと考えられる。本遺跡では穿孔完了品にも平面方形の個体もあることから、段階としては1つにまとめた。研磨中の剥片・細片はこの段階で排出されたものが主体であろう。

IV工程（穿孔） 孔を開ける工程である。この段階の遺物としては穿孔破損品、穿孔途中品、穿孔完了品がある。穿孔破損品が最も多く、穿孔部の半分で欠損したものがほとんどである。穿孔途中品には明らかに中心ではない位置に穿孔されるものや、ずれた位置に両側穿孔されたものがあり、小林が指摘した複数個体を重ねて同時に穿孔する（複数穿孔b）方法で、両側穿孔作業が行われていたものと想定される（1995小林）。また、穿孔完了品も一定数出土しているが、穿孔位置が中心とずれていたり、縁辺が剥離したものが多く、一部には穿孔後の切削・側面加工時に破損した個体も含まれるかもしれない。

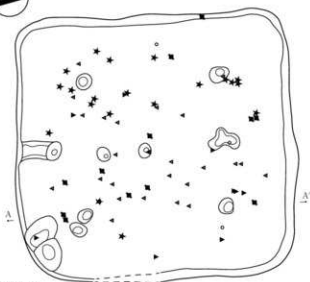
モデルケース SI-002



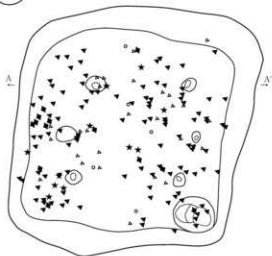
第 271 図 白玉製作工程（復元案）



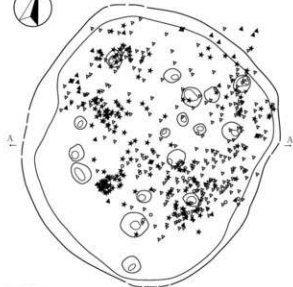
SI-002



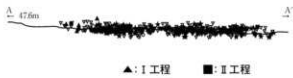
SI-003



SI-004



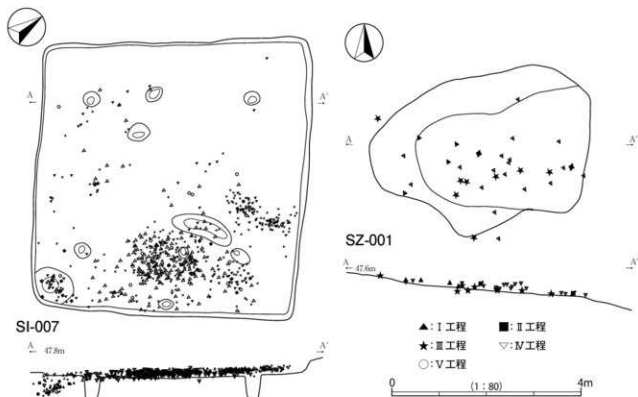
SI-005



- | | |
|----------|---------|
| ▲: I工程 | ■: II工程 |
| ★: III工程 | ▽: IV工程 |
| ○: V工程 | |

0 (1:80) 4m

第 272 图 工程别出土位置 (1)



第273図 工程別出土位置(2)

V工程(仕上研磨)最後に側面研磨され完成品となる。この段階の遺物には側面研磨破損品と成品(仮)がある。ほぼ成品と考えられる個体はそれぞれの遺構で一定数出土している。この段階の遺物を見る限り、遺構毎に差はほとんどなく、成品としては側面にわずかに稜をもち、直径4~8mm、厚み2~5mmの白玉を作出していたことが分かる。

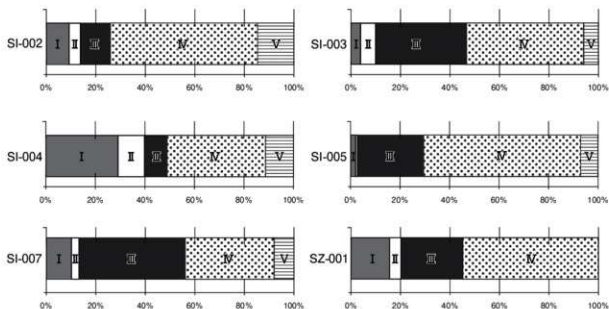
白玉製作関連遺物以外では、勾玉・剣形・有孔円板・紡錘車の未成品が出土している。多量に出土した剥片・細片にはこれらの製作段階の剥片も含まれているが分類は困難である。製作工具の可能性のあるものとして、SI-002・004・005から台石、敲石、砥石、軽石、鉄製の棒状工具が出土しており、製作方法を復元する貴重な遺物として留意する必要がある。

剥片・細片を除いて工程を想定することのでき、位置の判明している遺物の出土状況は第272・273図のとおりである。SI-002では全体として堅穴南半分に出土が多く、南東隅の貯蔵穴周辺に集中するが、工程毎の分布傾向は見られない。SI-003では全体的に出土し、III工程の遺物が西側にやや多い。SI-004では全体的にI工程の遺物が多いが、出土層位に集中は見られない。SI-005では南壁周辺にはほとんど出土していない。III・IV工程の遺物が広く分布するが、出土層位に集中は見られない。SI-007では堅穴北側の出土は少ない。特に南壁寄りの中央部に遺物の集中が見られるが、出土層位は全体にわたる。SZ-001は緩斜面部のやや窪んだ部分で、人為的な掘込みかは判然とせず、特に工程毎の分布傾向は見られない。

SZ-001を除いて、遺構にはピットが多く、工具と考えられる遺物も出土していることから、石製模造品の製作工房であった可能性は高い。遺物の平面的な集中が見られる遺構はあるものの、出土層位はほぼ全体にわたっており、製作工房として作業位置等を復元することは難しい。遺構の形状や出土土器から遺構の時期を考えるとSI-005→SI-003→SI-002・004→SI-007と変遷する。工房を順次廃絶しながら、隣接地に新たな工房をつくり、旧工房に製作剥片等を廃棄していったと想定される。

第52表 石製製造品関連遺物点数と割合

		SI-002	SI-003	SI-004	SI-005	SI-007	SZ-001
Ⅰ工程（原石・荒製品）		25	16	169	29	104	7
Ⅱ工程（板状研磨品）		12	24	60	6	28	2
Ⅲ工程（形割品）		34	139	54	286	391	10
Ⅳ工程（穿孔品）		154	172	227	666	321	20
内 訳	穿孔完了品	24	76	69	236	88	6
	穿孔途中品	11	9	19	24	41	0
	穿孔破損品	119	87	139	406	192	14
Ⅴ工程（側面研磨品・成品）		33	14	51	56	42	0
剥片・細片	研磨無	3,467	4,494	1,703	9,095	10,186	417
	研磨有	481	114	262	172	245	44
その他未成品	勾玉	1	3	4	8	1	0
	剣形	1	1	12	6	5	0
	円板	1	1	0	1	0	0
	紡錘車	0	1	0	1	1	0
	その他	1	4	4	0	0	1
合計（点）		4,364	5,155	2,773	10,992	11,645	521



Ⅰ:Ⅰ工程 Ⅱ:Ⅱ工程 Ⅲ:Ⅲ工程 Ⅳ:Ⅳ工程 Ⅴ:Ⅴ工程

- 注1) 古墳時代前期と捉えた遺構はSI012・(014)・016・(017)・(018)・028・030・031であるが、該期の遺構は遺存が不良ものが多く、遺物量が少なく、時期を判断するのが困難である。中には弥生時代とするべき堅穴住居も含まれている可能性もある。
- 2) 古墳時代中期の土器編年については下記文献を参考とした。
- 1998 小沢 洋「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の諸相」『研究紀要Ⅱ』財団法人君津都市文化財センター
1999 小沢 洋「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
2012 白井久美子ほか「古墳時代中期の房総」『研究紀要27』財団法人千葉県教育振興財団
- 3) 本来はSI022などと同様に覆土をより詳細に精査すれば、剥片の検出数は増加していたものと考えられる。
- 4) 古墳時代後期の堅穴住居跡はSI029で、また器高が低くならない黒色処理された杯と長胴化して張りのない胴部の特徴をもつ甕が出土している。奈良時代とした堅穴住居跡はSI006とSI022である。SI006は土器類の出土が微量で時期の判断が困難であるが、周辺堅穴住居跡の形状比較、甕の口縁特徴、巡方の類別から判断した。SI022は土器類の出土が豊富で、非ロクロ土師器杯が主体で、やや器高のある杯が含まれる特徴をもつ。
- 5) 白玉の製作工程については下記文献を参考とした。
- 1991 山本哲也「西上総における古墳時代中期の玉作—文協遺跡の例を中心として—」『研究紀要V—君津都市文化財センター設立10周年記念論集—』財団法人君津都市文化財センター
1995 藤原祐一「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
1996 小林清隆「房総の石製模造品製作—白玉の製作について—」『研究紀要16—20周年記念論集—』財団法人千葉県文化財センター
- 2004 『千葉県八千代市川崎山遺跡h地点—店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—』八千代市遺跡調査会
2004 『千葉県船橋市辺田台遺跡(1・2)』船橋市教育委員会
2016 『八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡』千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第15集
- 6) 先行研究ではこの段階を「荒削Ⅱ」と表記される例が多いが、この作業の最終形態が上下面を研磨された板状研磨品であることから「板状化」とした。

第 4 章 八重門田遺跡および清水川台遺跡 (2) 出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (バレー・ラボ)

1 はじめに

袖ヶ浦市代宿に所在する八重門田遺跡および清水川台遺跡 (2) から出土した旧石器時代の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

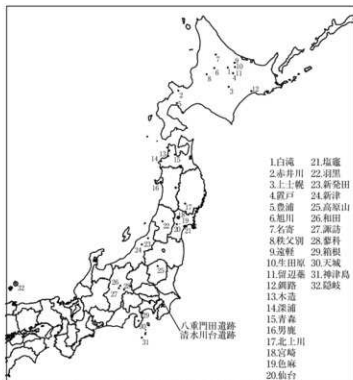
分析対象は、八重門田遺跡より出土した黒曜石製石器 14 点と、清水川台遺跡 (2) より出土した黒曜石製石器 49 点の、計 63 点である (第 53 表)。いずれも旧石器時代の石器とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジと精製水を用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8mm、電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999 など)。本方法では、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb 分率 = $Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) Sr 分率 = $Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図 (横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度 \times 100 / Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率 - 縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図) を作成し、各地の原石データと遺跡出土物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光 X 線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の値が減少する点に注意が必要である (望月, 1999)。



第 274 図 黒曜石産地分布図 (東日本)

第53表 分析対象となる黒曜石製石器

分析 番号	遺跡	文化層	ブロック	仮ブロック	グリッド	遺物 番号	枝記	器種	重量 (g)	仮種別 番号	組合 番号
1	八重門田遺跡			1	17r-22	2		KN	2.0	2	
2				4	18V-20	2		KN	2.9	2	
3				5	18w-33	2		FL	2.3	2	
4				6	19r-24	2		FL	2.4	2	
5				6	19w-54	9		KN	2.4	9	
6				6	19w-54	19	a	FL	1.0	19	
7				6	19w-55	14		FL	2.5	14	
8				6	19w-55	22		FL	2.8	22	
9				6	19w-55	26		KN	4.5	26	
10				6	19w-64	3		FL	7.1	3	
11				7	19w-83	3		RF	0.8	3	
12				7	19w-83	66		FL	1.4	66	
13				9	21y-00	2		FL	1.1	2	
14				9	21y-00	3		FL	4.5	3	
15	清水川台遺跡	1	2	R	18D-78	4		KN	14.3	1	
16		1	2	R	18D-78	6		KN	2.7	1	
17		1	2	R	18D-88	1		CO	1.2	1	
18		1	2	R	18D-88	4		FL	0.5		
19		1	2	R	18D-88	10		FL	1.4		
20		1	2	R	18D-88	11		FL	1.4		
21		1	2	R	18D-89	1		RF	1.2	1	
22		1	4	U	19D-57	2		FL	0.7	1	
23		1	5	T	20C-08	3		RF	24.2	1	35
24		1	5	T	20C-08	5		RF	16.0	1	35
25		1	単独	単独	18E-58	2		CO	25.9	1	
26		1	単独	単独	56T-7	1		TP	18.3	1	
27		2	7	C	12C-25	2		FL	0.6		
28		2	7	C	12C-25	7		FL	1.2		
29		2	7	C	12C-25	9		FL	1.7	1	
30		2	7	C	12C-25	10		FL	1.4	1	
31		2	7	C	12C-25	12		RF	2.1	1	
32		2	7	C	12C-25	13	a	FL	2.9	1	
33		2	7	C	12C-35	2		FL	0.8		
34		2	7	C	12C-35	4		FL	0.7	1	
35		2	7	C	12C-35	7		FL	2.9	1	
36		2	8	A	12F-48	85		FL	1.0	1	
37		2	8	A	12F-49	79		FL	1.3	1	
38		2	8	A	12F-49	93		FL	0.7	1	
39		2	9	B	12F-50	5		FL	0.8	1	
40		2	9	B	12F-50	24		FL	0.9		
41		2	9	B	12F-60	103		FL	1.1	1	
42		2	9	B	12F-60	121		FL	1.1	1	
43		2	13	G	14E-33	2		RF	1.4	1	
44		2	13	G	14E-23	3		FL	1.2	1	
45		2	13	G	14E-23	17	b	FL	0.4	1	
46		2	13	G	14E-23	21	a	RF	6.5	1	
47		2	13	G	14E-23	25		FL	0.9	1	
48		2	20	N	17E-03	1		FL	2.1	1	
49		2	20	N	17E-03	2		FL	0.4		
50		2	20	N	17E-03	3		CO	3.8	1	
51		2	20	N	17E-03	4		FL	2.8		
52		2	20	N	17E-03	6		FL	2.5	1	
53		2	20	N	17E-03	8		FL	1.0		
54		2	20	N	17E-03	9		FL	1.8	1	
55		2	20	N	17E-03	10		FL	1.4	1	
56		2	20	N	17E-03	11		FL	1.3	1	
57		2	23	W	19F-51	2		FL	0.9	1	
58	2	23	W	19F-61	2		CO	3.9	1		
59	2	23	W	19F-62	8		FL	1.0	1		
60	2	23	W	19F-62	9		FL	1.1	1		
61	2	23	W	19F-62	11		MF	3.2	1		
62	2	25		21E-54	6		FL	2.1			
63	2	単独	単独	12G-53	2		RF	4.2	1		

試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第54表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第274図に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

第55表に石器の測定値および算出した指標値を、第275・276図の黒曜石原石の判別群に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、15点が甘湯沢群（栃木県、高原山エリア）、1点が西餅屋群（長野県、和田エリア）、1点が鷹山群（長野県、和田エリア）、1点が小深沢群（長野県、和田エリア）、1点が西餅屋群と鷹山群と小深沢群の重複域、9点が鷹山群と小深沢群の重複域、1点が高松沢群（長野県、和田エリア）、13点が星ヶ台群（長野県、諏訪エリア）、11点が畑宿群（神奈川県、箱根エリア）、1点が鍛冶屋群（神奈川県、箱根エリア）、8点が恩馳島群（東京都、神津島エリア）の範囲にプロットされた。ただし、鍛冶屋群の範囲にプロットされた分析番号30については、図2では畑宿群と鍛冶屋群の重複域にプロットされ、第276図では鍛冶屋群の範囲であると同時に畑宿群の下方にあたる位置にプロットされている。これは、先述したように遺物の風化による影響で（望月、1999）、本来は畑宿群である可能性も考えられる。第55表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

第56表に出土位置と器種別の黒曜石の産地を示す。八重門田遺跡出土の石器は、14点のうち、12点が高原山エリア、1点が和田エリア、1点が天城エリアであった。高原山産が多く、信州産、箱根・天城産が各1点ある一方、神津島産の石器はみられなかった。

清水川台遺跡（2）第1文化層出土の石器では、12点のうち、3点が高原山エリア、7点が和田エリア、1点が諏訪エリア、1点が神津島エリアであった。高原山、信州、神津島産が確認された一方、箱根・天

第54表 東日本黒曜石産地の判別群

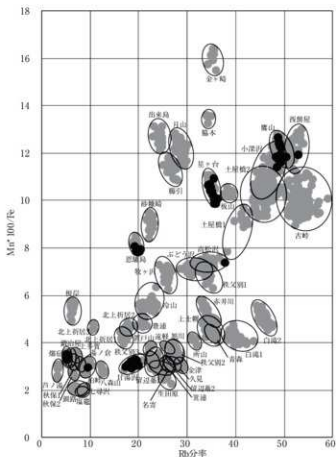
都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2)、JK露頭(10)、 十勝石沢露頭下河床(11)、 アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	備用・土本川(24)
	上上峯	上上峯	十勝三登(4)、タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ上(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊島(10)
	旭川	旭川	近文台(8)、南輪台(2)
	名寄	名寄	忠西布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(65)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマツ川河床(9)	
	留辺蘂2		
網走	網走	網走市栄スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15)、鶴ヶ取(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		船本	船本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9)、真城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮城	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根厚	根厚(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
	塩竈	塩竈	塩竈(10)
山形	羽黒	月山	月山荘前(24)、大崎洞(10)
		藤引	たらのさ代(19)
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)
	新津	金津	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
長野	和田	西餅屋	天香パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14)、東餅屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(11)
		古時	和田時トンネル上(28)、古時(38)、和田時スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
		星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ崎(20)
		豊科	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)
神奈川県	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)
		畑宿	畑宿(51)
静岡県	鍛冶屋	鍛冶屋	鍛冶屋(20)
	上多賀	上多賀	上多賀(20)
東京都	天城	柏峠	柏峠(20)
	神津島	恩馳島	恩馳島(27)
高知県	砂輪崎	砂輪崎	砂輪崎(20)
	久見	久見パーライト中(6)、久見榎畑場(5)	
	箕浦	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)	

第55表 測定値および産地推定結果

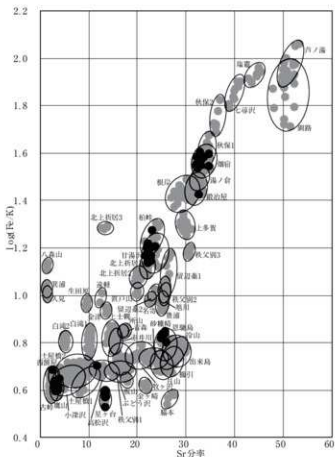
分析番号	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn ¹⁰⁰ Fe	Sr 分率	log Fe/K	判別群	エリア	分析番号
1	202.9	99.9	3254.8	506.5	645.2	380.7	1317.5	17.72	3.07	22.57	1.21	甘露沢	高塚山	1
2	218.8	106.6	3532.8	529.3	725.8	411.0	1412.9	17.19	3.02	23.57	1.21	甘露沢	高塚山	2
3	205.8	140.5	1186.6	1400.8	104.9	580.6	803.3	48.33	11.84	3.62	0.62	葛山 or 小深沢	相田	3
4	26.6	14.8	502.7	36.8	88.1	51.3	207.8	9.58	2.94	22.95	1.28	船越	天城	4
5	228.5	113.0	3626.7	593.1	687.8	450.0	1409.9	18.88	3.11	21.90	1.20	甘露沢	高塚山	5
6	197.4	90.4	2952.6	483.0	537.5	348.9	1041.4	20.04	3.00	22.39	1.27	甘露沢	高塚山	6
7	187.3	91.3	3113.0	496.9	592.9	377.9	1203.3	18.60	2.93	22.30	1.22	甘露沢	高塚山	7
8	234.4	105.3	3261.9	571.7	668.8	423.0	1280.1	19.42	3.23	22.72	1.15	甘露沢	高塚山	8
9	213.6	100.6	3142.8	563.0	638.1	423.2	1350.9	18.92	3.20	21.45	1.17	甘露沢	高塚山	9
10	223.1	100.6	3066.9	549.2	621.8	413.6	1232.7	19.49	3.28	22.07	1.14	甘露沢	高塚山	10
11	210.9	96.2	3144.1	538.7	628.5	409.8	1266.7	19.51	3.06	21.95	1.17	甘露沢	高塚山	11
12	223.6	116.2	3504.6	586.0	673.4	436.2	1361.5	19.17	3.32	22.03	1.20	甘露沢	高塚山	12
13	199.5	96.9	3035.7	532.7	638.8	408.5	1318.1	18.38	3.19	22.94	1.18	甘露沢	高塚山	13
14	217.9	108.3	3478.3	548.6	689.8	417.3	1384.0	18.05	3.11	22.49	1.20	甘露沢	高塚山	14
15	292.5	142.8	1157.4	1417.4	92.0	597.2	781.9	49.07	12.34	3.18	0.60	葛山 or 小深沢	相田	15
16	258.9	121.4	1033.8	1148.7	87.4	475.2	647.2	48.71	11.74	3.70	0.60	葛山 or 小深沢	相田	16
17	138.9	70.4	593.7	693.7	40.9	283.9	360.2	50.32	11.86	2.97	0.63	西新屋 or 葛山 or 小深沢	相田	17
18	271.6	136.7	1144.1	1345.5	87.4	558.6	748.1	49.11	11.95	3.19	0.62	葛山 or 小深沢	相田	18
19	229.0	115.8	934.9	1154.9	77.2	491.4	640.6	48.85	12.39	3.26	0.61	葛山 or 小深沢	相田	19
20	345.3	125.2	1006.7	1272.1	81.9	541.9	706.9	48.87	12.43	3.15	0.61	葛山 or 小深沢	相田	20
21	242.4	117.8	960.7	1126.9	71.4	468.7	622.8	49.21	12.26	3.12	0.60	葛山 or 小深沢	相田	21
22	219.3	122.6	1549.4	393.1	507.3	309.7	769.5	19.86	7.91	25.63	0.85	恩賜島	神津島	22
23	227.7	104.2	3204.3	552.0	622.5	465.5	1238.0	19.59	3.25	22.09	1.15	甘露沢	高塚山	23
24	232.1	105.7	3187.3	591.8	680.0	445.1	1365.2	19.20	3.32	22.06	1.14	甘露沢	高塚山	24
25	226.5	94.9	888.2	564.5	214.9	286.1	559.3	34.74	10.68	13.23	0.59	尾ヶ台	諏訪	25
26	223.8	104.0	3310.6	555.9	659.1	420.1	1271.8	19.12	3.14	22.68	1.17	甘露沢	高塚山	26
27	121.4	159.5	4686.0	137.2	836.0	347.6	1238.1	5.36	3.40	32.67	1.59	船越	新根	27
28	133.1	175.2	5099.3	150.6	902.4	386.7	1369.0	5.36	3.44	32.13	1.58	船越	新根	28
29	90.9	117.2	3406.4	92.8	578.5	234.5	830.9	5.34	3.33	33.31	1.57	船越	新根	29
30	139.7	125.3	3740.4	116.6	717.5	302.0	1066.2	5.30	3.35	32.58	1.43	船越 or 船越?	新根	30
31	95.3	116.4	3390.0	105.6	665.8	275.2	985.3	5.20	3.43	32.77	1.53	船越	新根	31
32	123.1	152.3	4391.4	137.6	825.5	357.3	1256.1	5.34	3.37	32.04	1.53	船越	新根	32
33	118.6	132.3	4573.2	133.5	863.4	346.8	1233.7	5.18	3.33	33.55	1.59	船越	新根	33
34	79.0	105.1	3192.1	90.9	548.2	226.2	809.8	5.37	3.29	32.74	1.61	船越	新根	34
35	143.9	178.9	5079.8	154.7	1033.7	391.4	1400.0	5.19	3.32	34.69	1.53	船越	新根	35
36	295.8	118.9	1170.6	752.5	287.9	374.8	709.0	25.44	10.16	13.56	0.60	尾ヶ台	諏訪	36
37	273.3	108.8	1045.1	721.1	273.5	365.0	721.5	34.63	10.41	13.14	0.58	尾ヶ台	諏訪	37
38	283.3	111.2	1128.1	708.9	262.4	340.8	662.5	35.90	9.86	13.29	0.60	尾ヶ台	諏訪	38
39	280.3	162.8	1364.7	1718.1	82.6	683.2	766.1	52.86	11.93	2.54	0.69	西新屋	相田	39
40	150.9	60.8	570.7	391.4	154.1	203.0	394.5	34.24	10.66	13.49	0.58	尾ヶ台	諏訪	40
41	307.8	122.5	1179.9	803.4	302.8	400.4	777.4	33.18	10.38	13.36	0.58	尾ヶ台	諏訪	41
42	223.6	88.6	880.6	536.9	198.3	264.0	509.7	35.38	10.06	13.14	0.60	尾ヶ台	諏訪	42
43	249.6	136.2	1033.3	1259.7	77.6	522.8	693.7	49.33	12.22	3.01	0.62	葛山 or 小深沢	相田	43
44	80.6	96.4	2784.3	88.7	555.2	236.9	833.4	5.18	3.46	32.39	1.54	船越	新根	44
45	245.7	97.8	969.1	618.4	226.6	293.9	565.2	36.29	10.09	13.30	0.60	尾ヶ台	諏訪	45
46	252.1	127.8	1008.8	1232.6	79.3	520.9	696.9	48.72	12.67	3.14	0.60	葛山	相田	46
47	297.7	150.7	1293.6	1485.7	93.2	619.6	807.1	49.43	11.65	3.10	0.64	葛山 or 小深沢	相田	47
48	225.5	118.7	1512.4	377.3	478.2	294.4	751.8	19.84	7.85	25.14	0.83	恩賜島	神津島	48
49	115.0	62.9	792.0	191.5	235.8	149.2	361.1	20.42	7.94	25.15	0.84	恩賜島	神津島	49
50	189.2	98.3	1250.6	293.5	360.5	225.2	568.7	20.27	7.86	24.90	0.80	恩賜島	神津島	50
51	178.9	92.1	1140.3	299.8	404.5	237.8	617.9	19.22	8.08	25.93	0.82	恩賜島	神津島	51
52	292.4	106.8	1342.7	331.0	415.6	261.8	650.9	19.95	7.95	25.06	0.82	恩賜島	神津島	52
53	180.9	96.8	1233.1	366.4	389.4	243.5	605.6	19.83	7.85	25.02	0.83	恩賜島	神津島	53
54	187.3	101.9	1301.3	326.3	428.7	260.0	659.6	19.49	7.83	25.60	0.84	恩賜島	神津島	54
55	118.3	142.8	4182.5	1290.8	890.8	332.0	1183.3	5.25	3.41	32.94	1.53	船越	新根	55
56	112.3	147.4	4455.8	130.1	864.8	333.2	1173.3	5.20	3.31	34.57	1.60	船越	新根	56
57	160.7	62.7	635.8	395.1	149.0	194.1	375.6	35.47	9.86	13.38	0.60	尾ヶ台	諏訪	57
58	221.8	81.8	746.6	524.2	195.1	254.8	497.7	35.62	10.95	13.26	0.53	尾ヶ台	諏訪	58
59	241.7	96.0	964.1	586.7	212.2	287.7	549.2	35.76	9.96	13.24	0.60	尾ヶ台	諏訪	59
60	103.4	52.3	458.6	517.8	42.8	210.3	296.2	48.52	11.40	4.01	0.65	小深沢	相田	60
61	249.3	98.4	930.7	631.7	240.2	318.7	615.7	34.97	10.58	13.30	0.67	尾ヶ台	諏訪	61
62	306.1	121.4	1189.6	768.1	287.3	381.7	735.8	35.35	10.21	13.22	0.59	尾ヶ台	諏訪	62
63	151.4	56.8	769.3	463.6	141.9	193.8	425.9	37.81	7.38	11.59	0.71	高沢	相田	63

第56表 出土位置・器種別の黒曜石産地

遺跡	文化層	ブロック	器種	高原山	和田	諏訪	船根	天城	神津島	計		
八家門田遺跡		1	KN	1						1		
			小計	1	0	0	0	0	0	1		
		4	KN	1							1	
			小計	1	0	0	0	0	0	0	1	
		5	FL		1						1	
			小計	0	1	0	0	0	0	0	1	
		6	KN	2							2	
			FL	4					1		5	
			小計	6	0	0	0	1	0	0	7	
		7	RF	1							1	
			FL	1							1	
			小計	2	0	0	0	0	0	0	2	
		9	FL	2							2	
			小計	2	0	0	0	0	0	0	2	
		計		12	1	0	0	1	0	14		
清水川台遺跡	1	2	KN		2					2		
			RF		1					1		
			FL		3					3		
			CO		1					1		
		小計	0	7	0	0	0	0	0	7		
		4	FL						1		1	
			小計	0	0	0	0	0	1	0	1	
		5	RF	2							2	
			小計	2	0	0	0	0	0	0	2	
		単独	TP	1							1	
			CO				1				1	
			小計	1	0	1	0	0	0	0	2	
				計		3	7	1	0	0	1	12
		2	7	RF					1			1
	FL							8			8	
	小計			0	0	0	0	9	0	0	9	
	8		FL			3					3	
			小計	0	0	3	0	0	0	0	3	
	9		FL		1	3					4	
			小計	0	1	3	0	0	0	0	4	
	13		RF	2							2	
			FL	1	1	1					3	
			小計	0	3	1	1	0	0	0	5	
	20		FL					2		6	8	
			CO							1	1	
			小計	0	0	0	2	0	7	0	9	
	23		MF				1				1	
			FL		1	2					3	
			CO			1					1	
			小計	0	1	4	0	0	0	0	5	
	25		FL			1					1	
			小計	0	0	1	0	0	0	0	1	
	単独	RF		1						1		
小計		0	1	0	0	0	0	0	1			
		計		0	6	12	12	0	7	37		
		計	3	13	13	12	12	0	8	49		
		計	15	14	13	12	12	1	8	63		



第 275 図 黒曜石産地推定判別図 (1)



第 276 図 黒曜石産地推定判別図 (2)

城産の石器はみられなかった。

清水川台遺跡 (2) 第 2 文化層出土の石器では、37 点のうち、6 点が和田エリア産、12 点が諏訪エリア産、12 点が箱根エリア産、7 点が神津島エリア産であった。信州、箱根、神津島産が確認された一方、高原山産の石器はみられなかった。

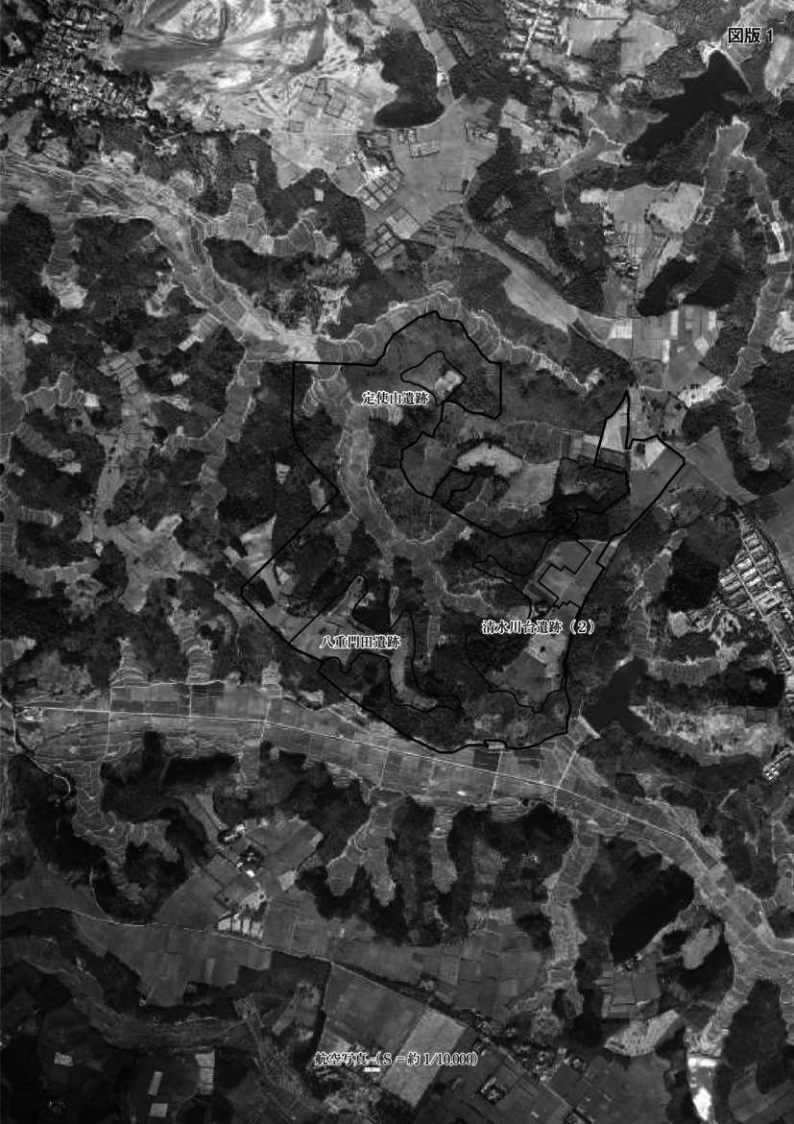
4 おわりに

八重門台遺跡および清水川台遺跡より出土した旧石器時代の黒曜石製石器 63 点について、蛍光 X 線分析による産地推定を行った結果、15 点が高原山エリア、14 点が和田エリア、13 点が諏訪エリア、12 点が箱根エリア、1 点が天城エリア、8 点が神津島エリア産の黒曜石と推定された。

引用文献

望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179。大和市教育委員会。

写 真 图 版



定徳山遺跡

八重門田遺跡

檜木川台遺跡 (2)

航空写真 (S = 約 1/10,000)



調査前、第1ブロック

定使山遺跡



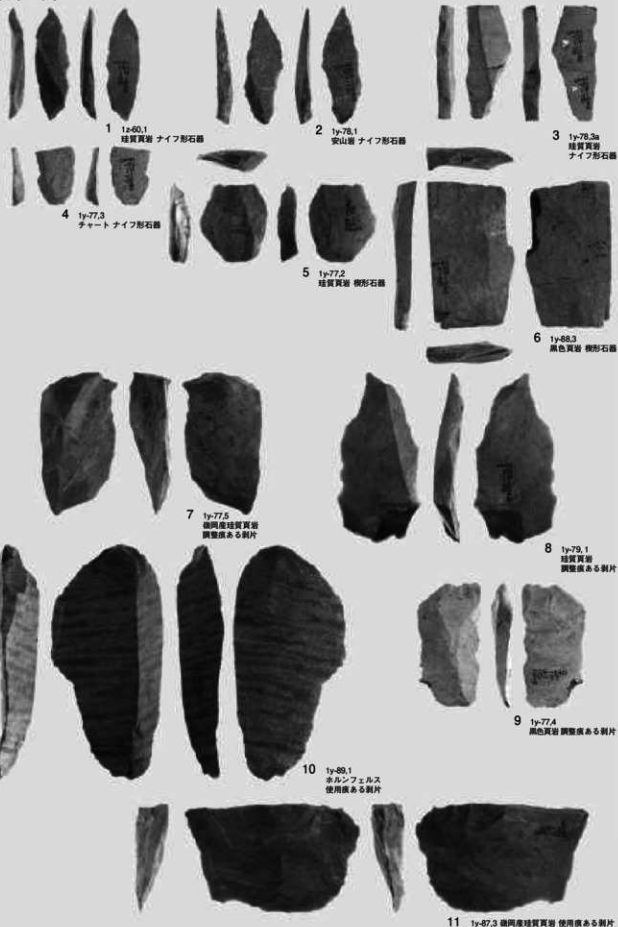
第2・3ブロック



定使山遺跡

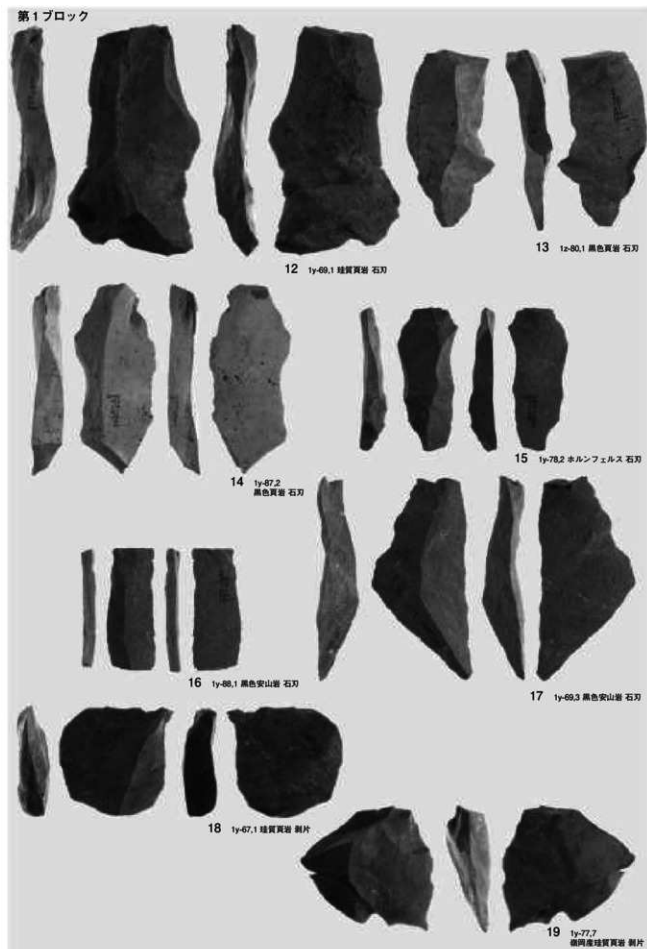


第1ブロック



旧石器時代出土遺物（1）

定使山遺跡

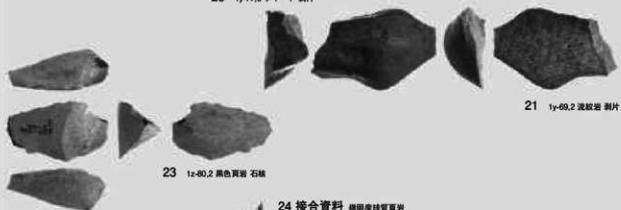


第1ブロック



20 1y-77.6 チャート 剥片

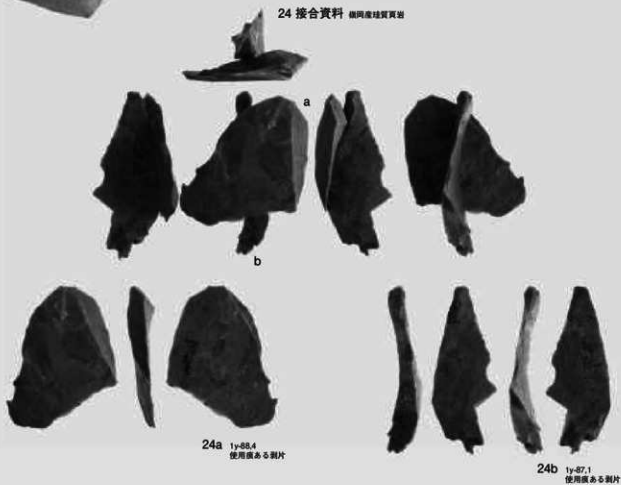
22 1y-89.3 玉髓 剥片



21 1y-89.2 流紋岩 剥片

23 1z-80.2 黒色頁岩 石核

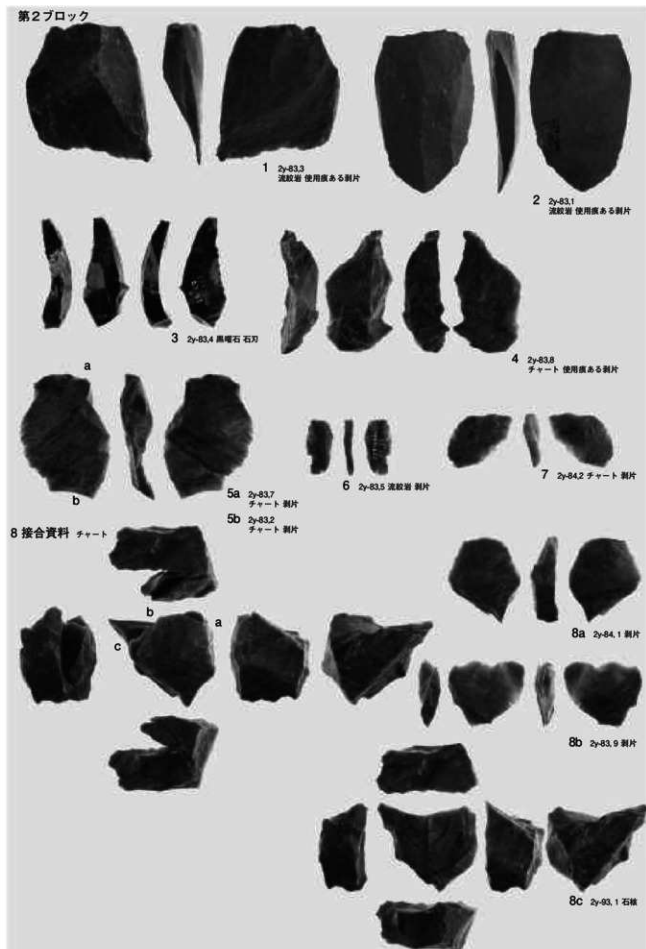
24 接合資料 畿岡産地質頁岩



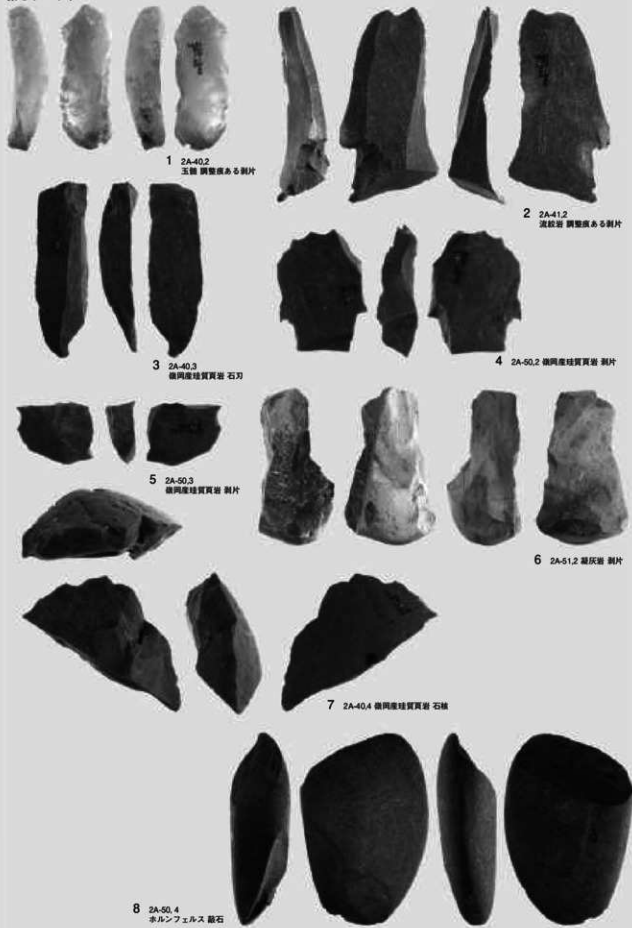
24a 1y-88.4
使用痕ある剥片

24b 1y-87.1
使用痕ある剥片

定使山遺跡

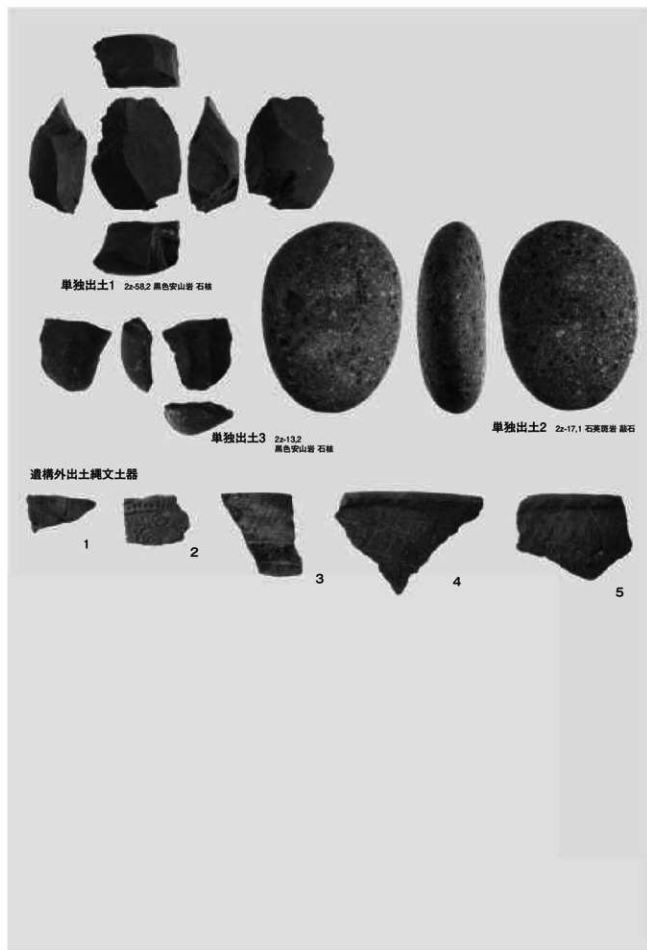


第3ブロック



旧石器時代出土遺物 (5)

定使山遺跡





遺跡遠景、調査前、確認調査

八重門田遺跡





第6～10ブロック、14t-87・21y-00

八重門田遺跡



SI-001 (南から)



SI-001 遺物出土 (南から)



SI-002 遺物出土 (南東から)



SI-002 (南から)



八重門田遺跡



SI-005 (西から)



SI-005 掃石出土 (北から)



SI-006 カマド (南から)



SI-006 (南西から)

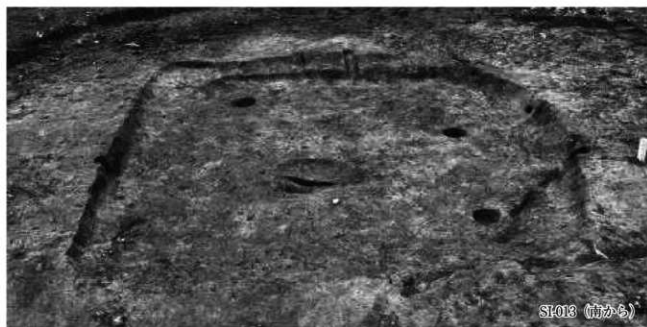


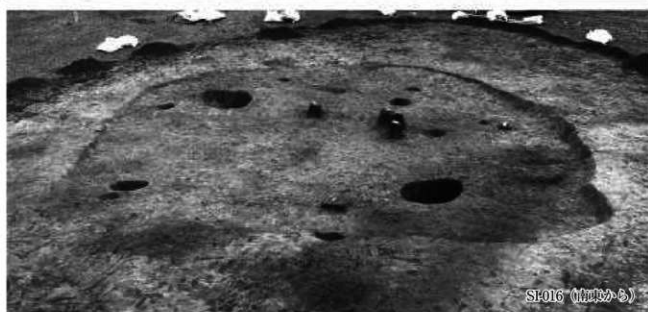
八重門田遺跡



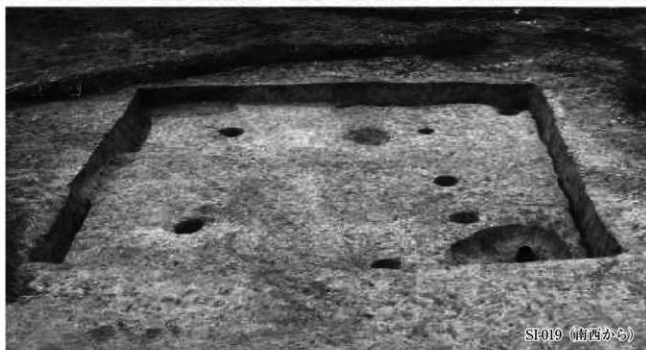


八重門田遺跡





八重門田遺跡





八重門田遺跡



SI-024 (南東から)



SI-024 遺物出土 (南東から)



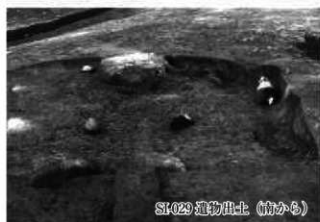
SI-025 遺物出土 (南東から)



SI-026 (北から)



八重門田遺跡





八重門田遺跡



SI-032 カマド (南東から)



SI-032 遺物出土 (南東から)



SI-033 (北から)



SI-034 遺物出土 (南西から)

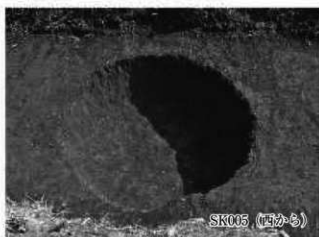
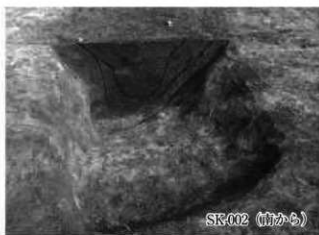


SI-034 (南東から)

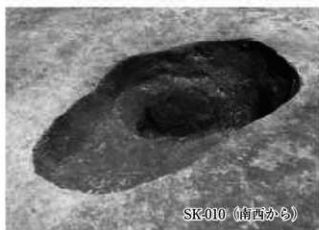


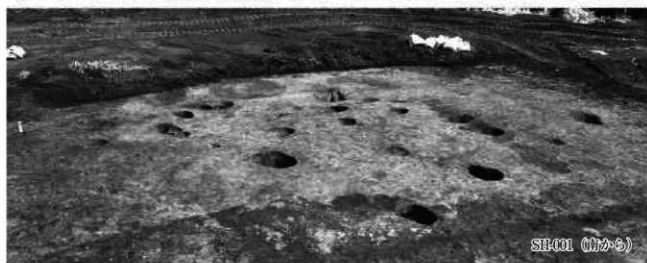
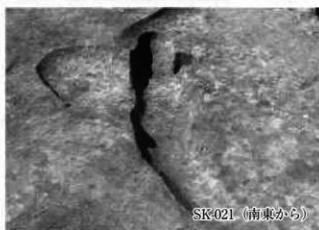
八重門田遺跡





八重門田遺跡





八重門田遺跡



SM-001 調査前 (南西から)



SM-001 調査風景

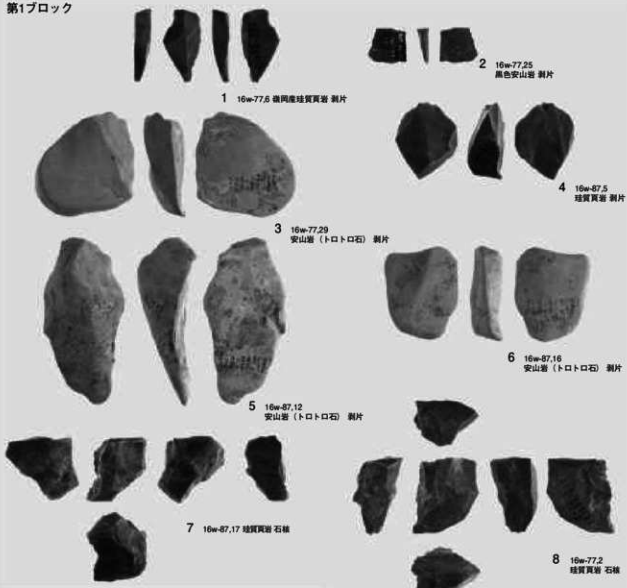


SM-001 東西断面西側

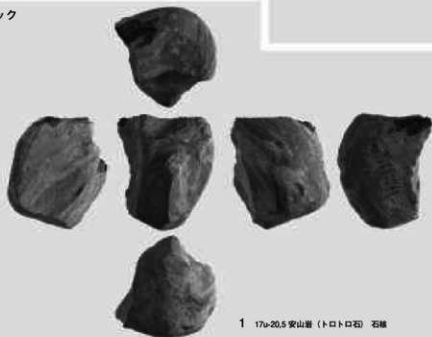


SM-001 人骨出土 (南から)

第1ブロック



第2ブロック

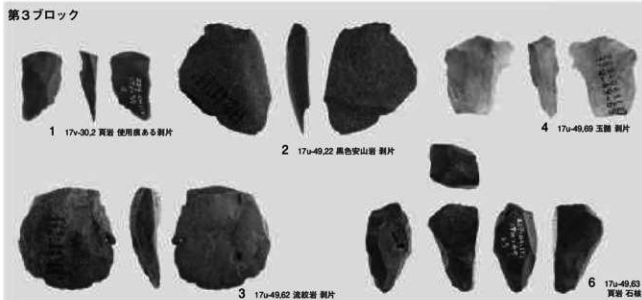


八重門田遺跡

第2ブロック



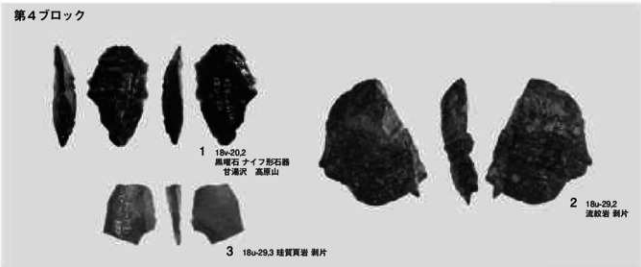
第3ブロック



第3ブロック

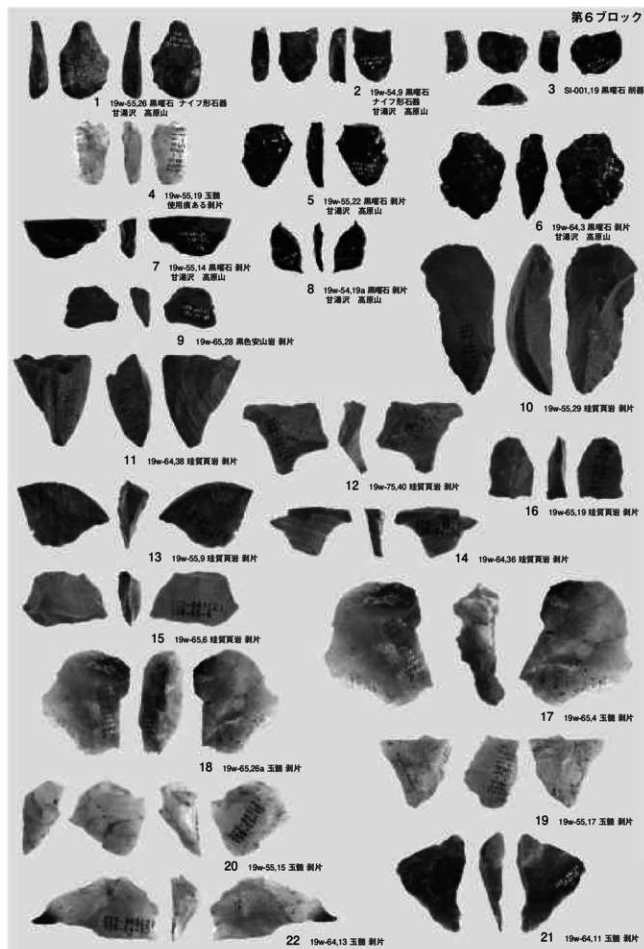


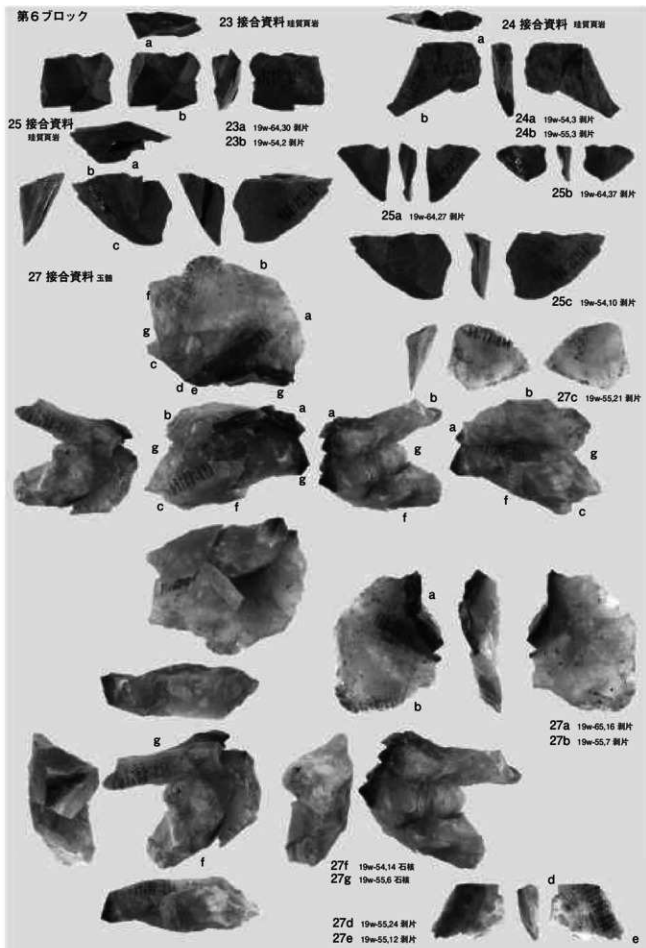
第4ブロック



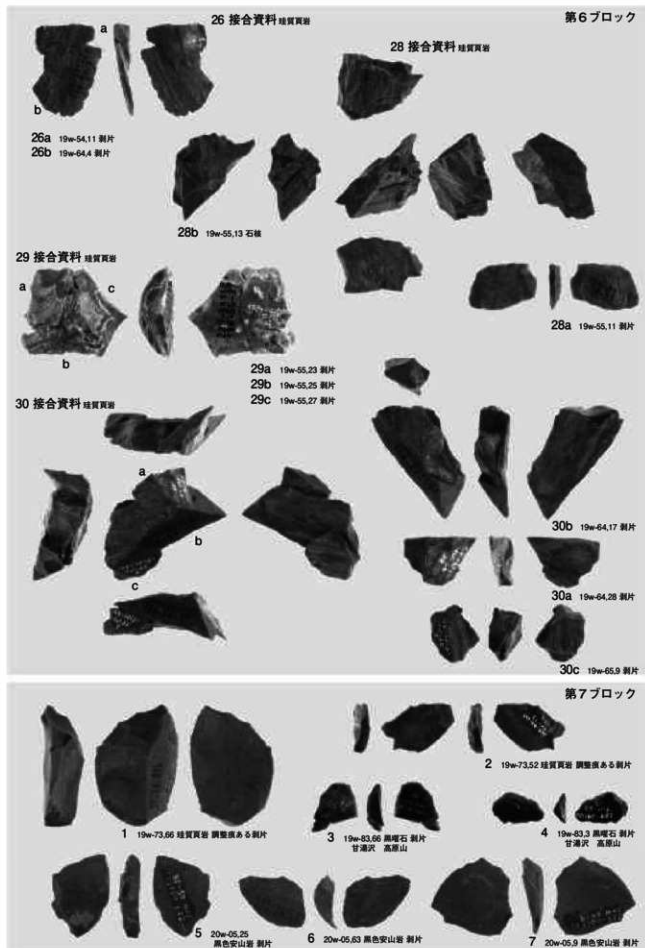
第5ブロック



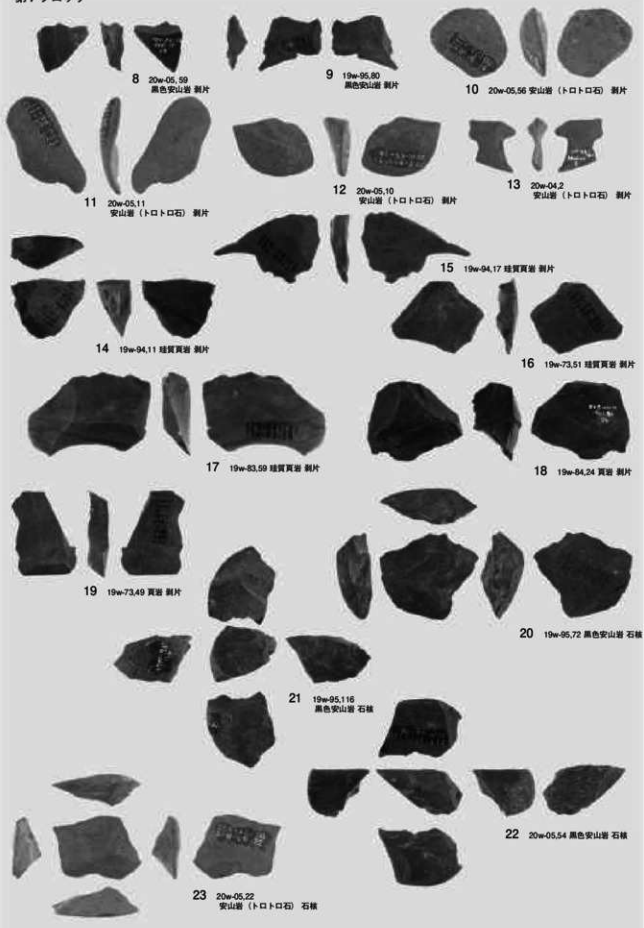


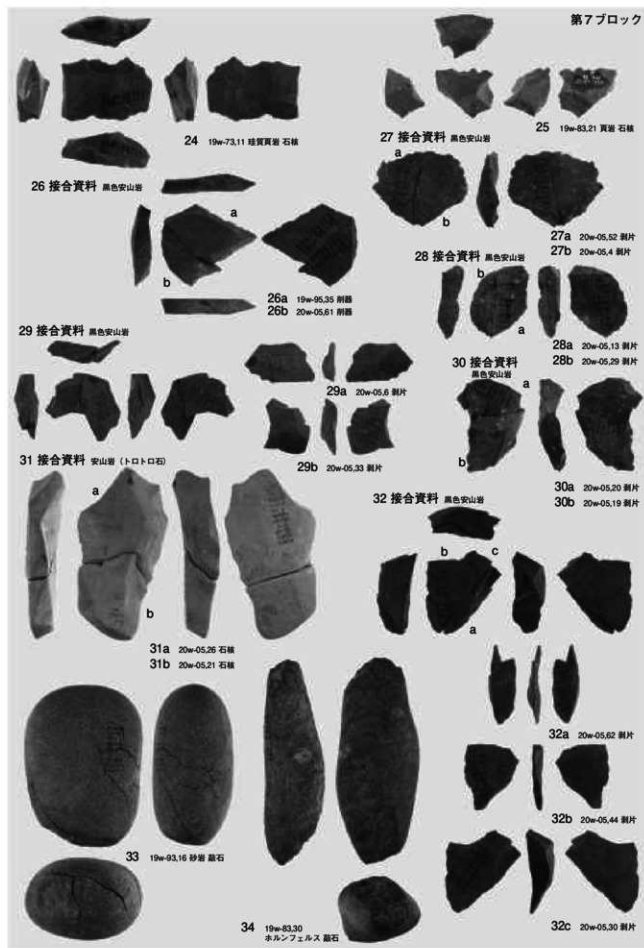


旧石器時代出土遺物（5）



第7ブロック





第8ブロック



1 20x-82.3 石英斑岩 磨石

2 20x-72.6 安山岩 (トロトロ石) 磨石

第9ブロック



1 21y-00.3 黒曜石 剥片
甘滝沢 高原山

2 21y-00.2 黒曜石 剥片
甘滝沢 高原山

第10ブロック



1 21x-59.2 珪質頁岩 剥片

2 21x-59.7 チャート 剥片

3 21x-59.4 黒色頁岩 剥片

5 接合資料 チャート

4 21x-59.3 黒色頁岩 剥片



5a 21x-59.1 剥片

5b 21x-59.6 剥片

単独出土

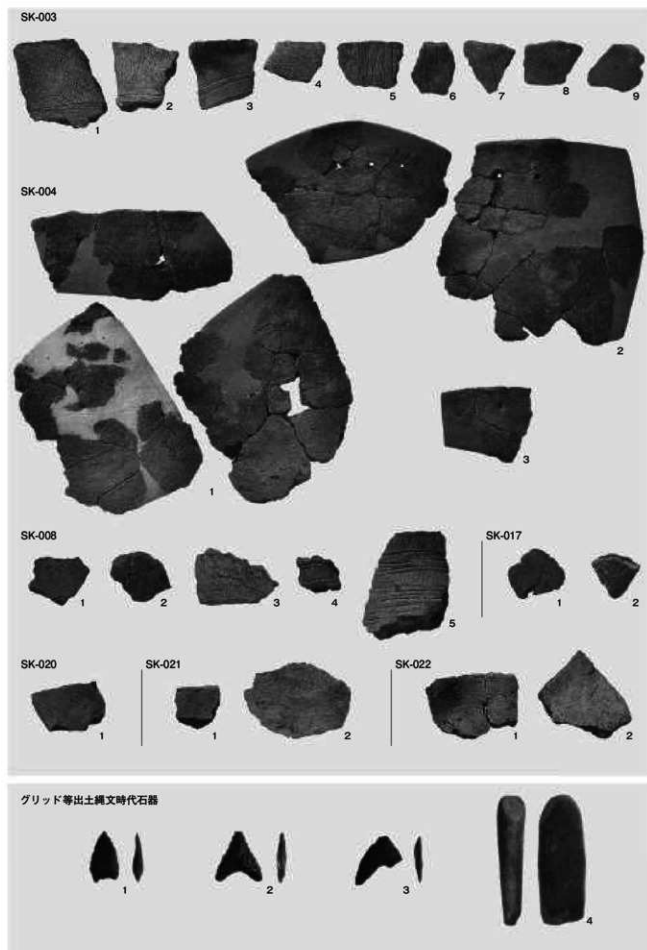


1 17x-22.2 黒曜石 ナイフ形石器
甘滝沢 高原山

2 19x-24.2 黒曜石 剥片
船峠 天城

3 14x-77.2
珪質頁岩 石器

八重門田遺跡

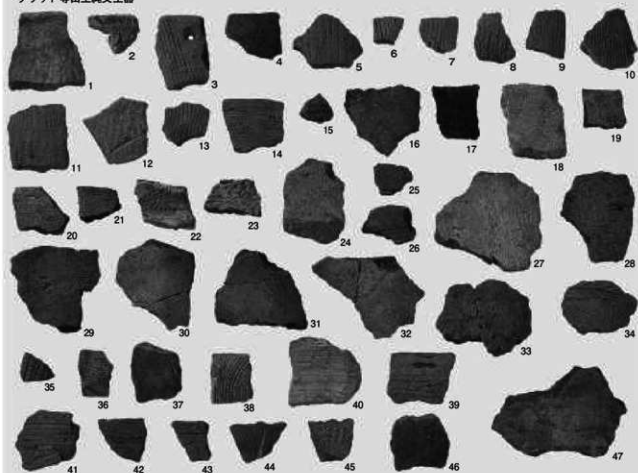


縄文時代出土遺物 (1)

縄文時代草創期遺物



グリッド等出土縄文土器



八重門田遺跡

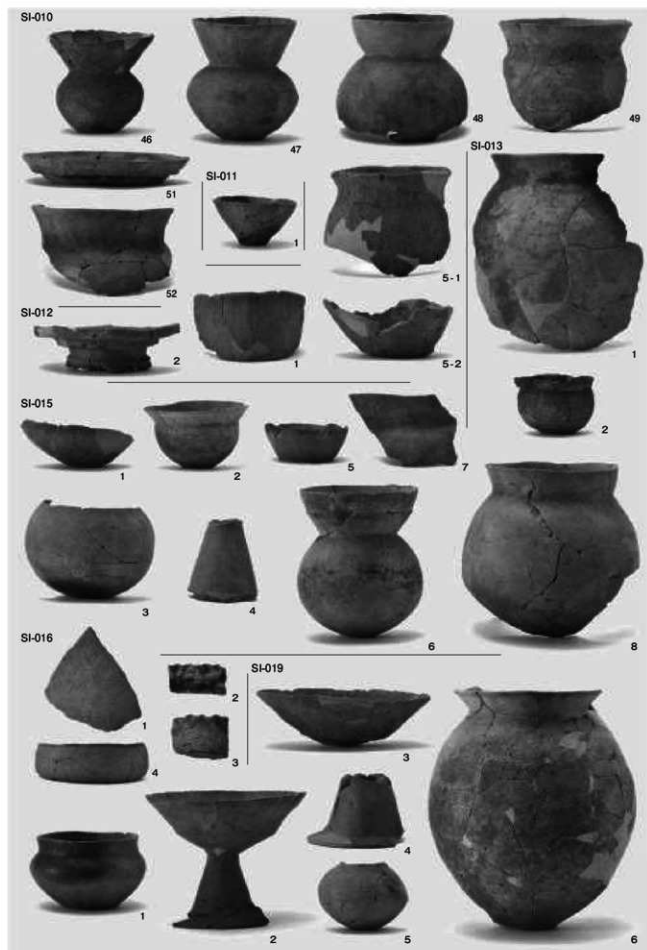


古墳時代以降出土土器（1）

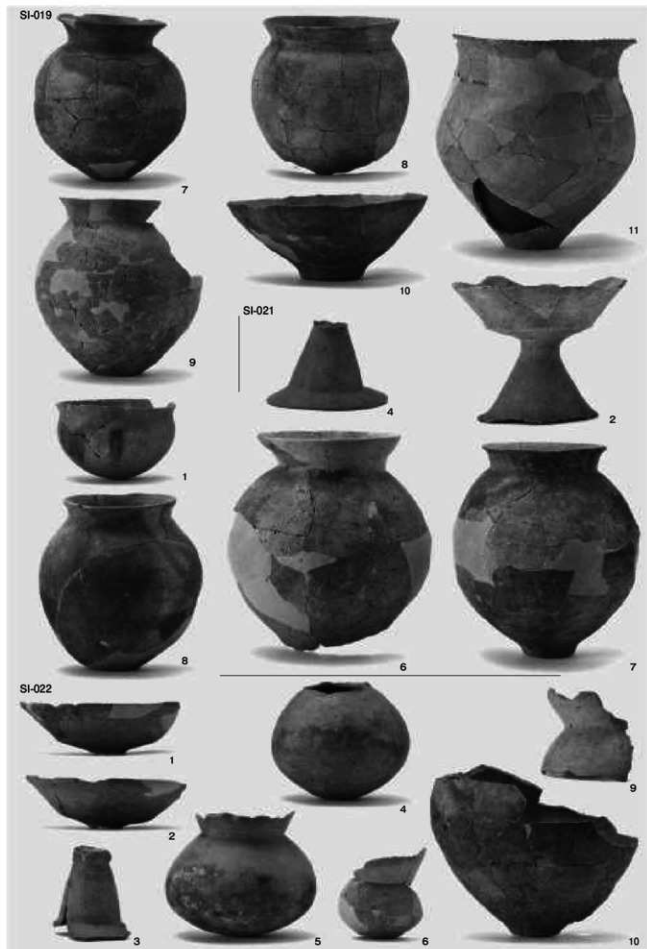


古墳時代以降出土土器（2）

八重門田遺跡

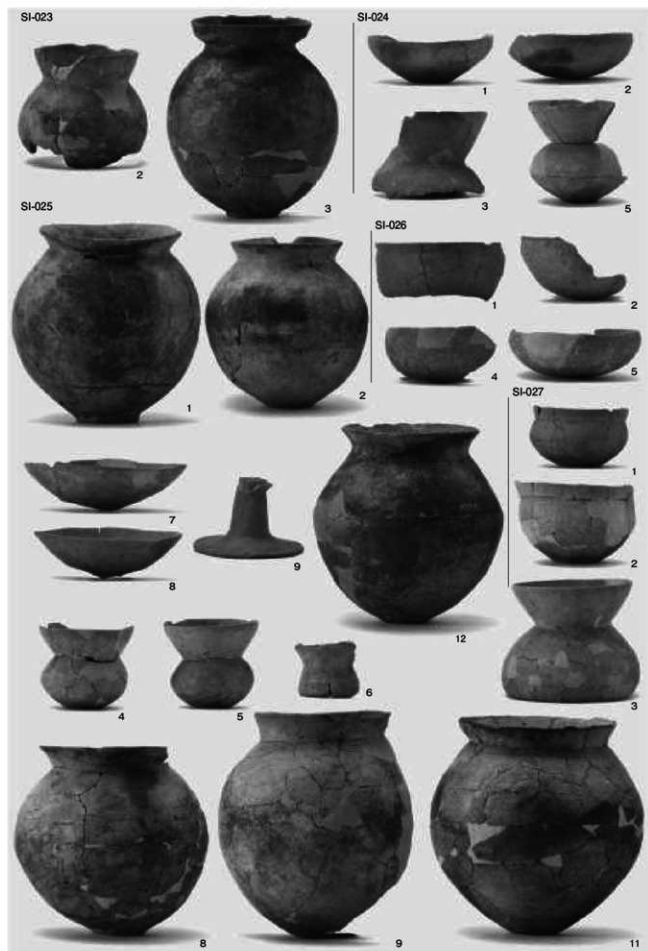


古墳時代以降出土土器（3）

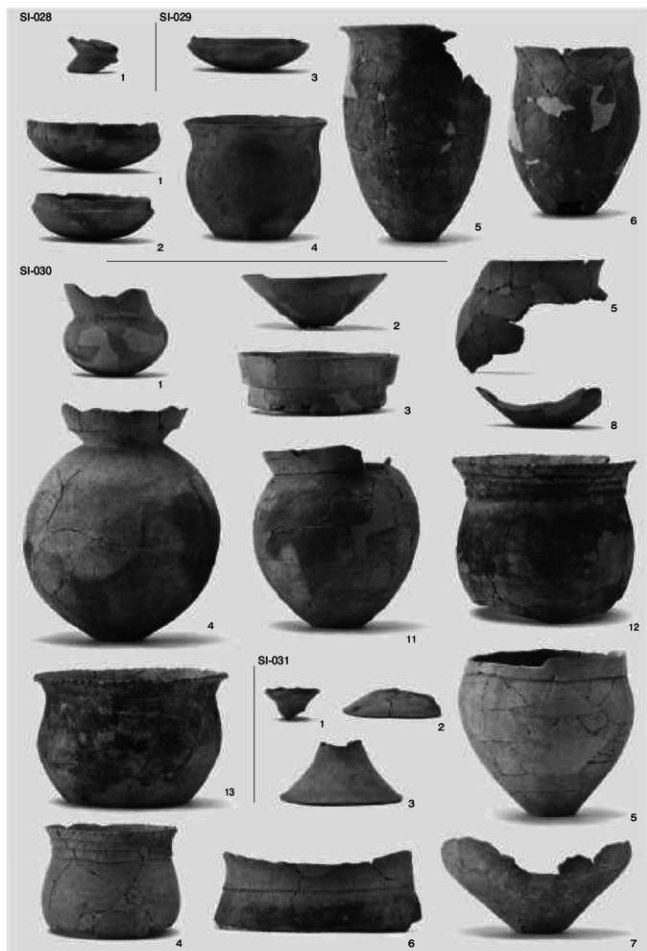


古墳時代以降出土土器（4）

八重門田遺跡

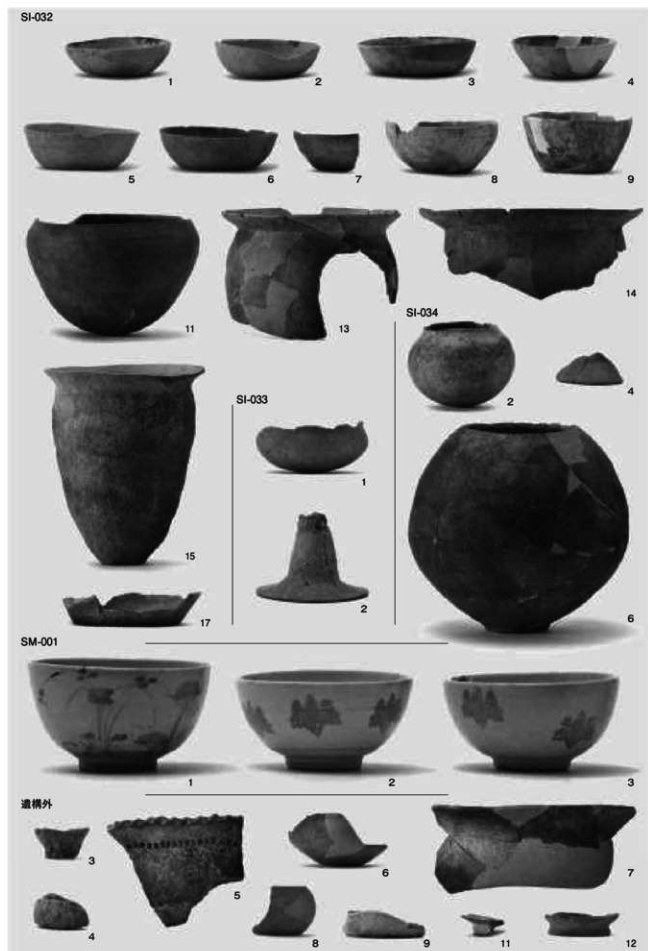


古墳時代以降出土土器 (5)

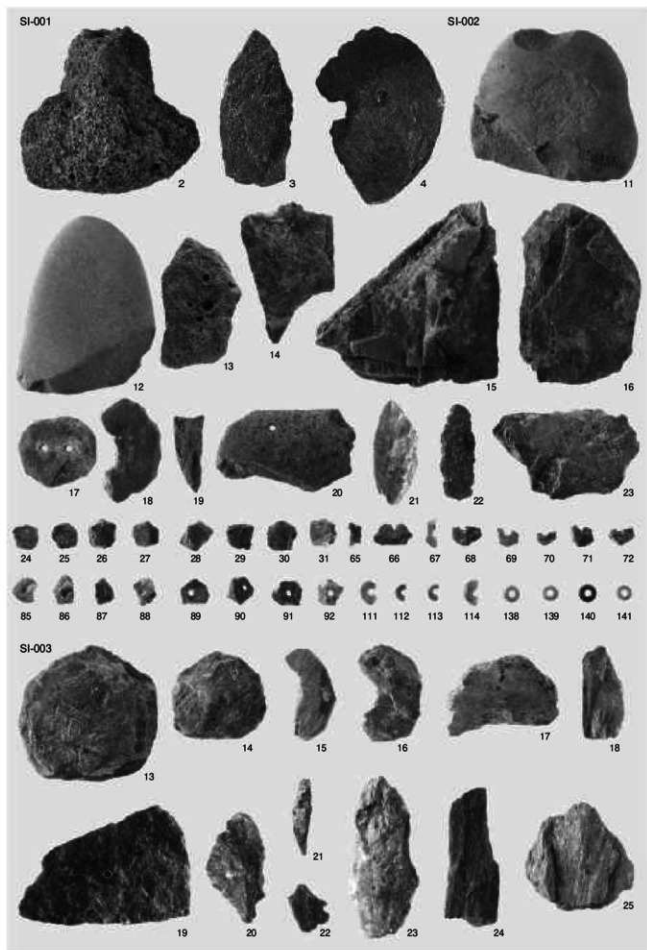


古墳時代以降出土土器 (6)

八重門田遺跡

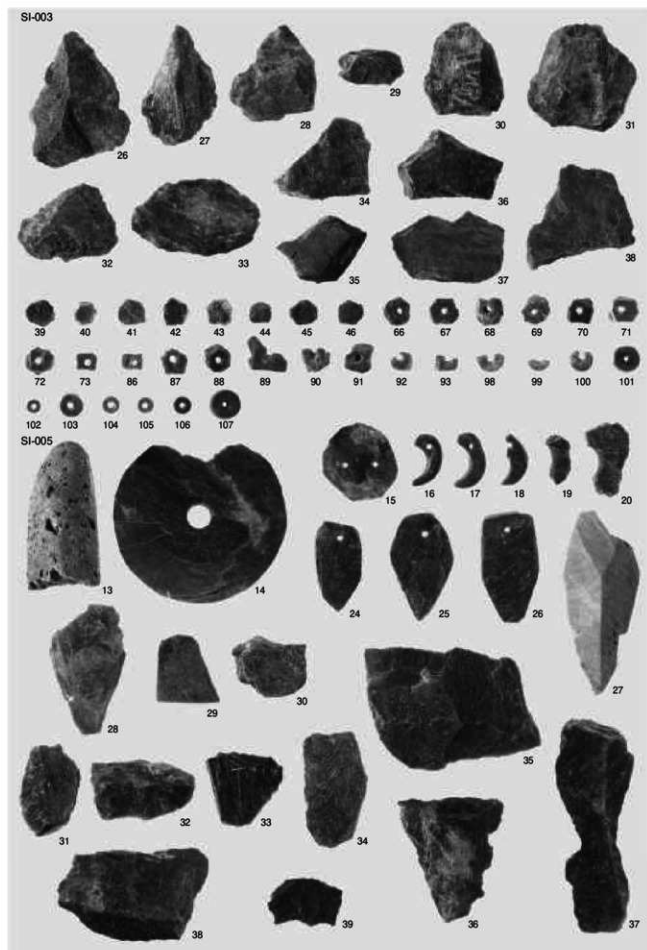


古墳時代以降出土土器（7）

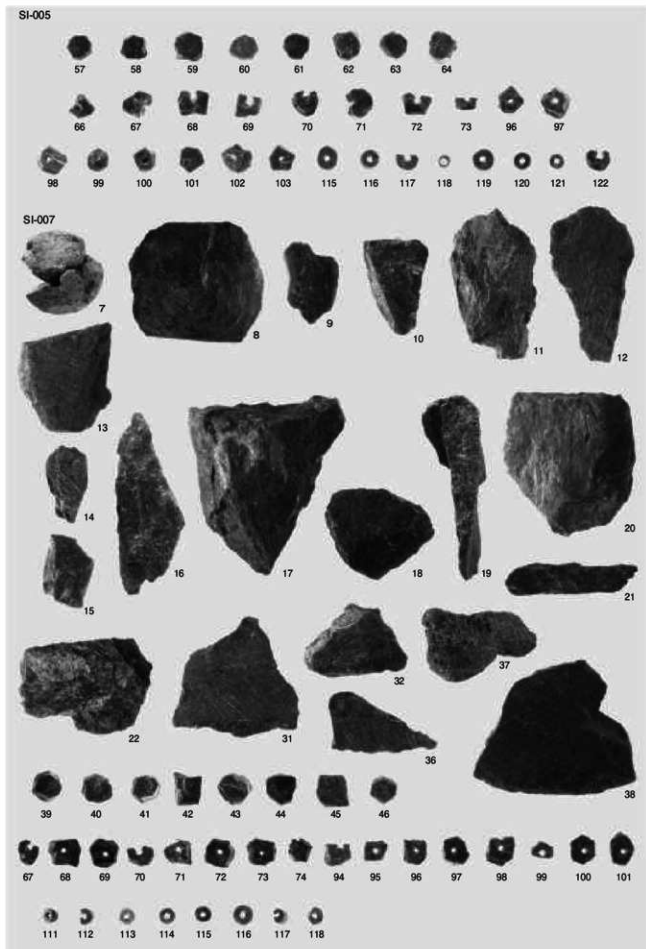


古墳時代以降出土土製品・石製品 (1)

八重門田遺跡

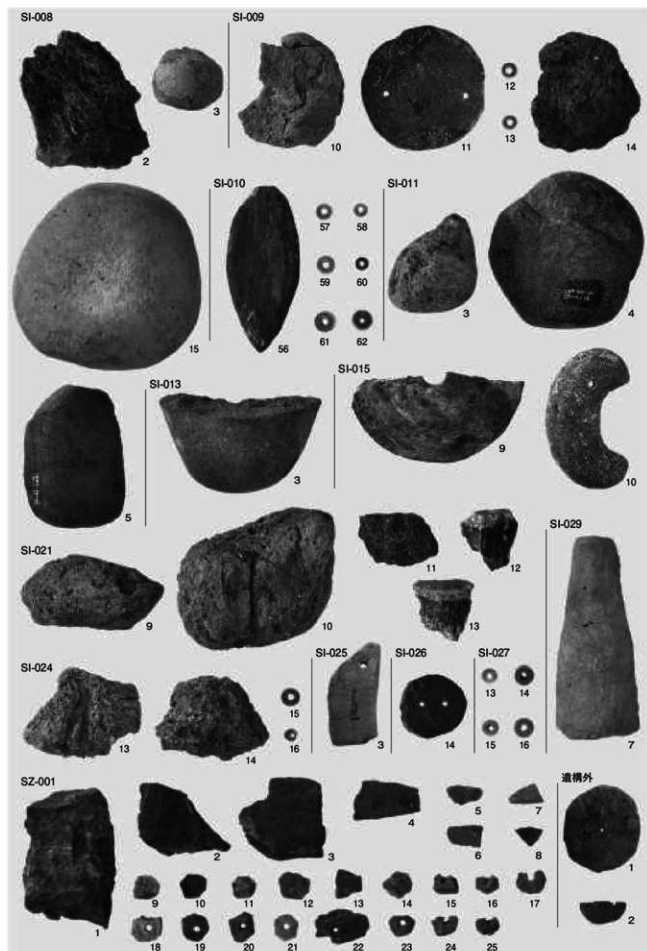


古墳時代出土以降土製品・石製品（2）

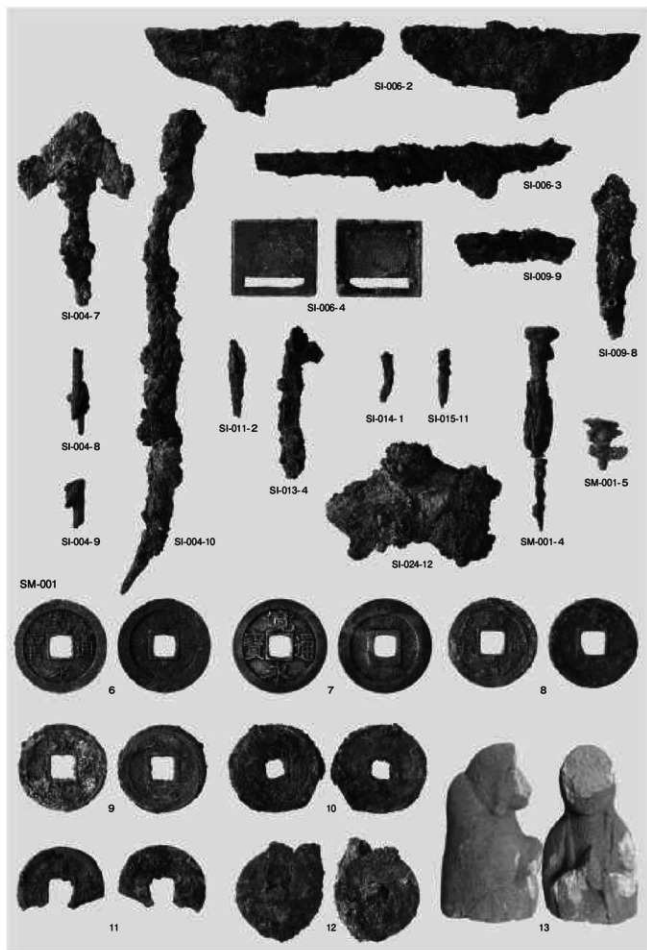


古墳時代以降出土土製品・石製品（3）

八重門田遺跡



古墳時代以降出土土製品・石製品（4）



古墳時代以降出土金属製品他

清水川台遺跡(2)



調査前



第1～5ブロック

清水川台遺跡(2)





第19ブロック遺物出土状況(北西から)



第20ブロック遺物出土状況(南から)



第21ブロック遺物出土状況(北から)



第21ブロックセクション(西壁)



第23ブロック遺物出土状況(南西から)



第23ブロックセクション(北東壁)

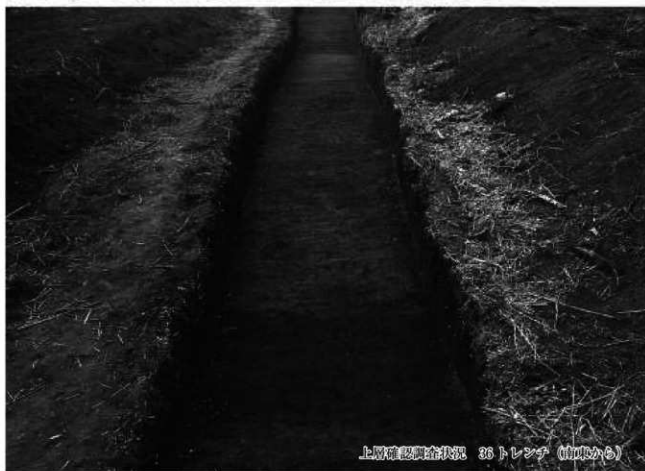


第22ブロック遺物出土状況(西から)



第25ブロック遺物出土状況(北から)

清水川台遺跡(2)



上層確認調査状況



清水川台遺跡(2)





SI-002 遺物出土状況拡大



SI-002 遺物出土状況詳細



SI-003 全景 (俯みから)



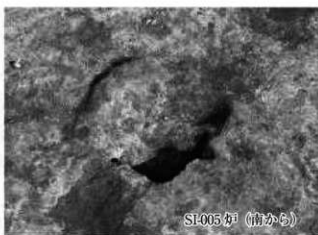
SI-003 カマド遺物出土状況



SI-003 カマド全景

清水川台遺跡(2)





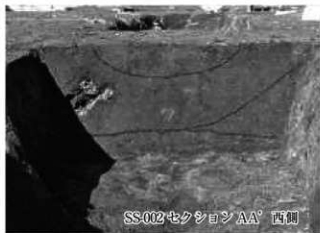
清水川台遺跡 (2)

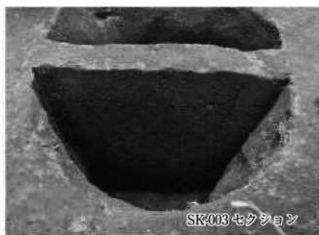


SM-001、SS-001

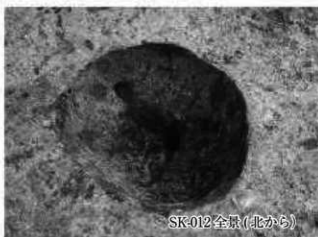
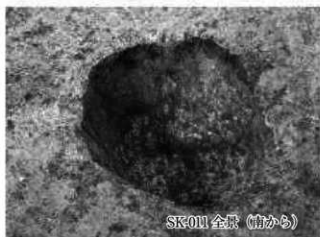
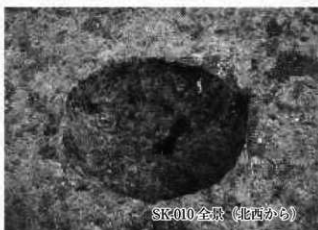


清水川台遺跡(2)





清水川台遺跡 (2)





SK-014 セクション



SK-013 セクション



SK-019 全景 (北から)



SK-020 全景 (西から)



SK-021 全景 (南東から)



SK-021 セクション



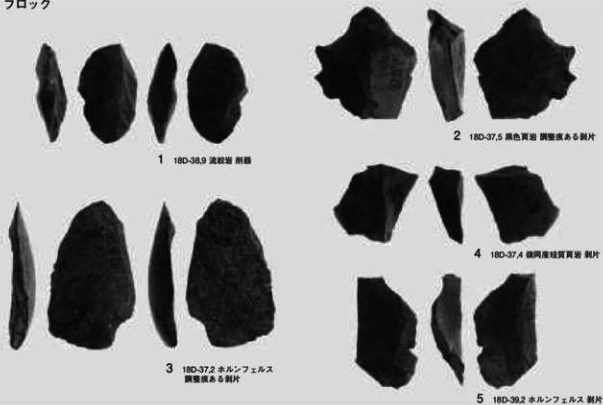
SD-001 東端部周辺 (南東から)



SD-001 19B グリッド周辺 (南東から)

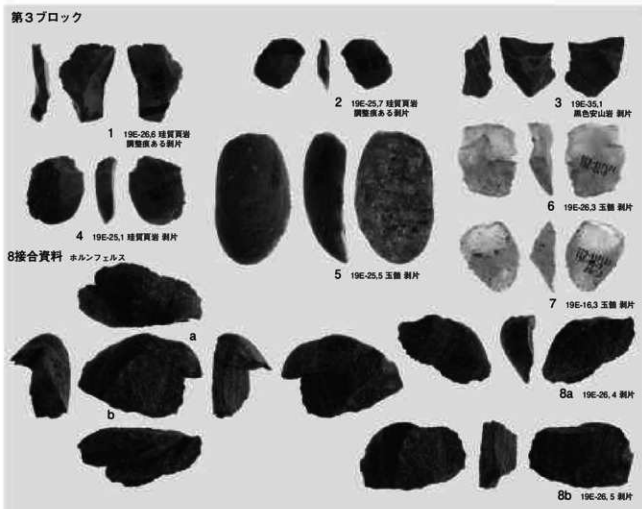
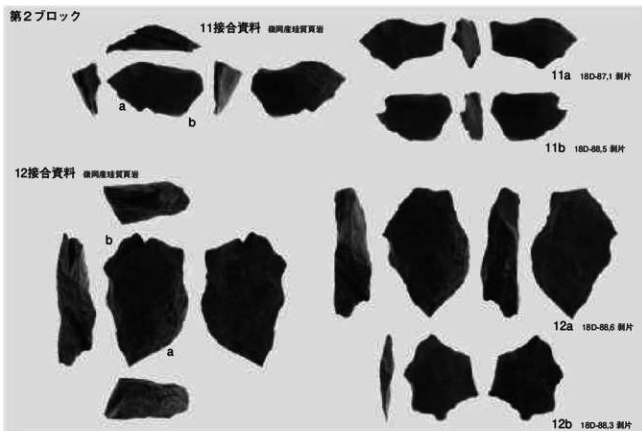
清水川台遺跡(2)

第1ブロック

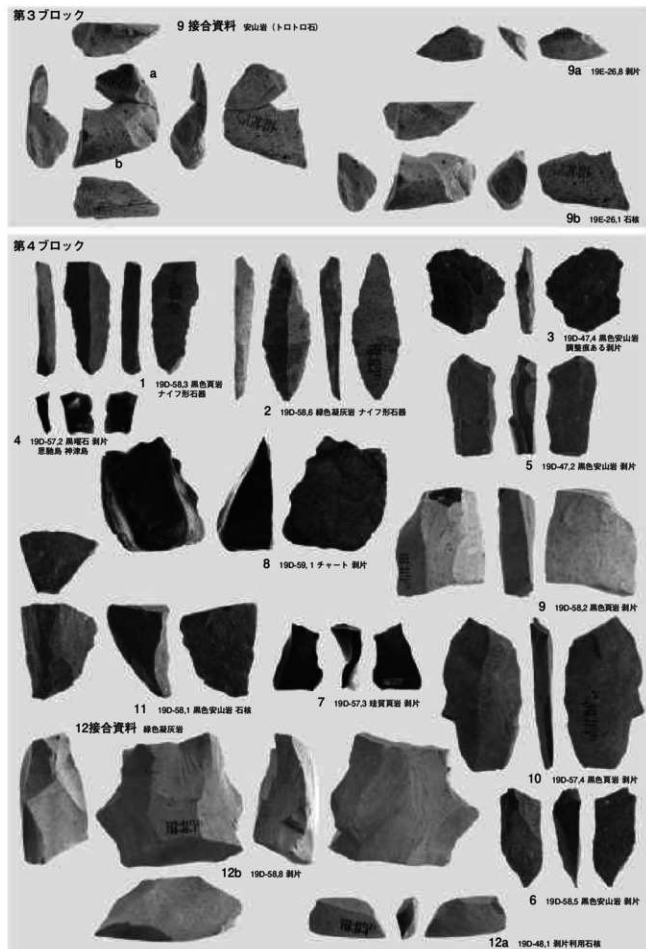


第2ブロック

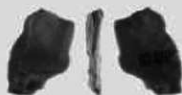




清水川台遺跡(2)



第5ブロック



1 20C-08.7 珪質頁岩 剥片



2 20C-08.4 珪質頁岩 剥片



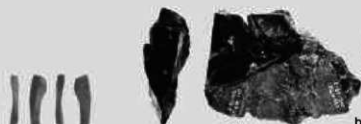
3 19C-08.1a 安山岩 (トロトロ石) 剥片



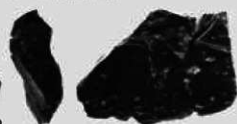
5 接合資料 黒曜石 甘澤沢 高原山

5a 20C-08.5 調整痕ある剥片

5b 20C-08.3 調整痕ある剥片



4 19C-08.1b 安山岩 (トロトロ石) 剥片



第6ブロック



1 20D-25.1 黒色安山岩 使用痕ある剥片



2 20D-25.4 珪質頁岩 剥片

第7ブロック



1 12G-25.12 黒曜石 調整痕ある剥片
燧石 燧石



2 12G-25.13a 黒曜石 剥片
燧石 燧石



3 12G-35.7 黒曜石 剥片
燧石 燧石



4 12G-25.9 黒曜石 剥片
燧石 燧石



5 12G-25.10 黒曜石 剥片
燧石 or 燧石 燧石



6 12G-25.7 黒曜石 剥片
燧石 燧石



7 12G-35.2 黒曜石 剥片
燧石 燧石

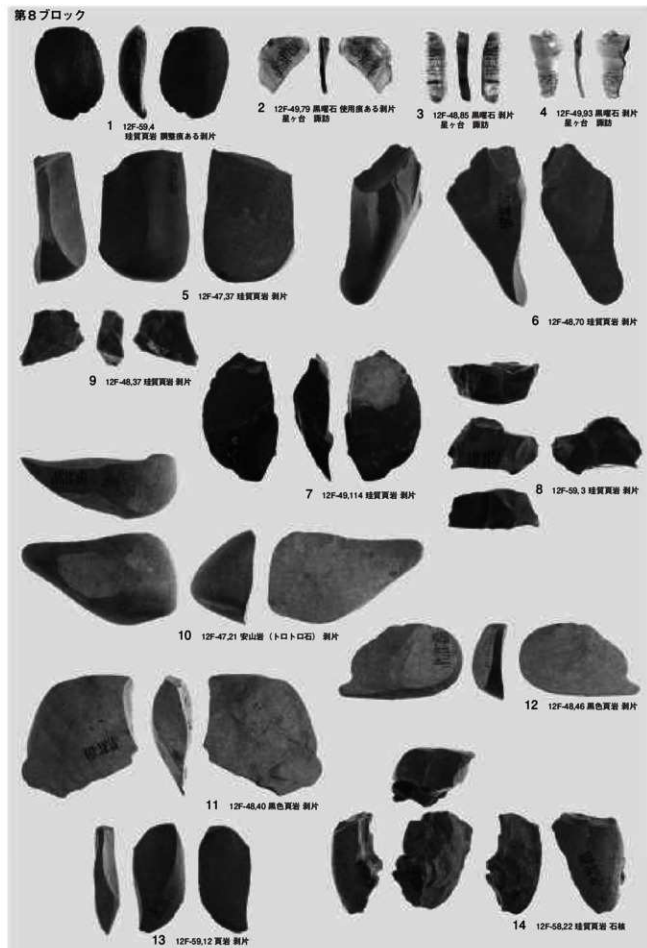


8 12G-35.4 黒曜石 剥片
燧石 燧石

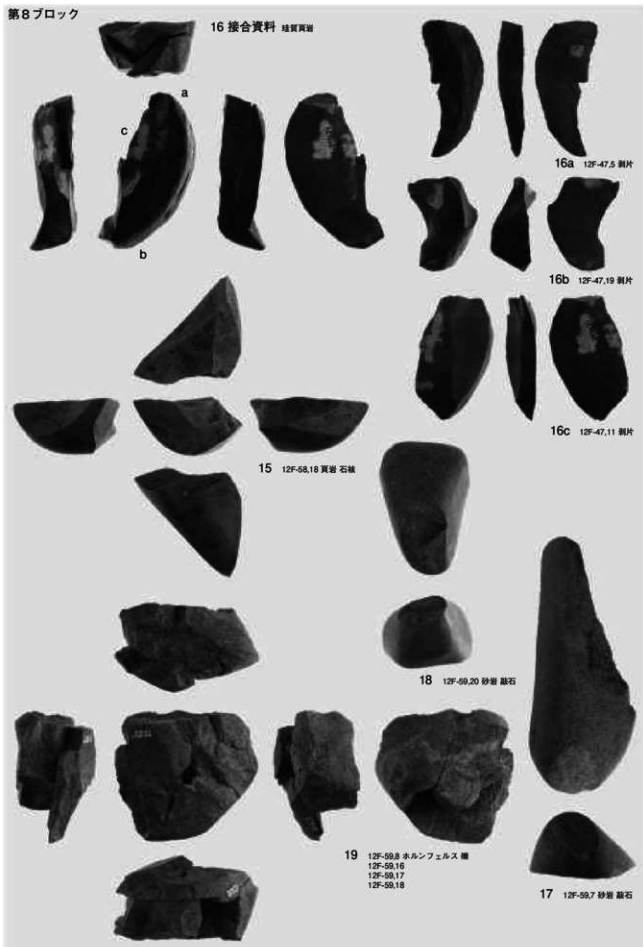


9 12G-25.2 黒曜石 剥片
燧石 燧石

清水川台遺跡(2)



第8ブロック



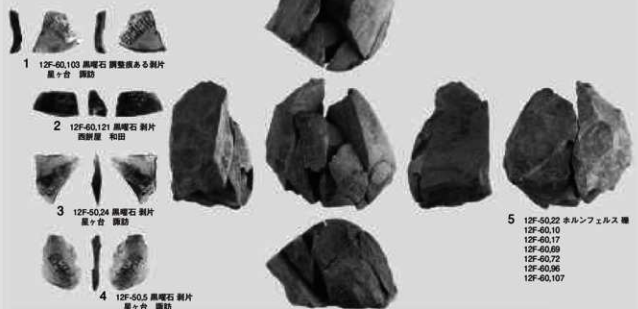
清水川台遺跡(2)

第8ブロック



20 12F-49.8 頁岩 礫
12F-49.35
12F-49.67
12F-49.77
12F-49.125

第9ブロック



1 12F-60.103 黒曜石 調整痕ある剥片
黒ヶ台 諏訪

2 12F-60.121 黒曜石 剥片
西原屋 和田

3 12F-60.24 黒曜石 剥片
黒ヶ台 諏訪

4 12F-60.5 黒曜石 剥片
黒ヶ台 諏訪

5 12F-60.22 ホルンフェルス 礫
12F-60.10
12F-60.17
12F-60.69
12F-60.72
12F-60.96
12F-60.107

第10ブロック



1 13E-75.29
安山岩 (トロトロ石) 剥片

2 13E-75.28 珪質頁岩 剥片

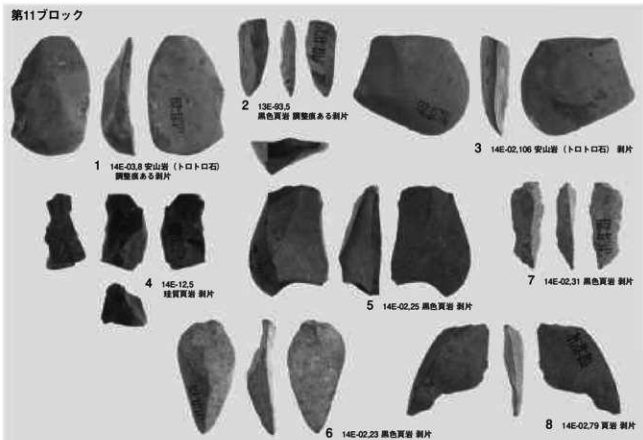
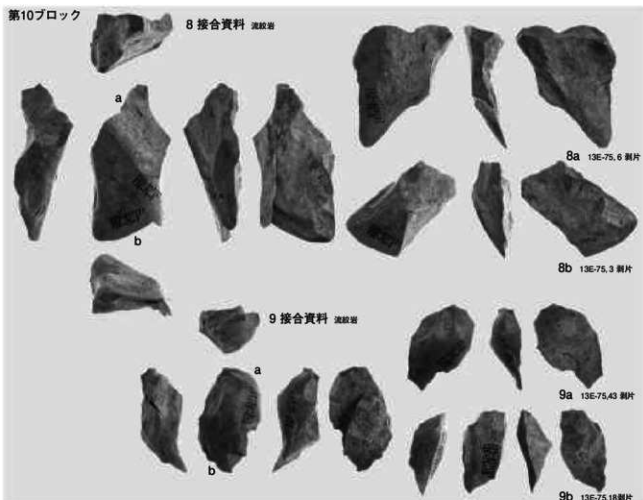
3 13E-75.27 黒色頁岩 剥片

4 13E-75.37 凝灰岩 剥片

7 13E-74.2 珪質頁岩 石核

5 13E-74.3
ホルンフェルス 剥片

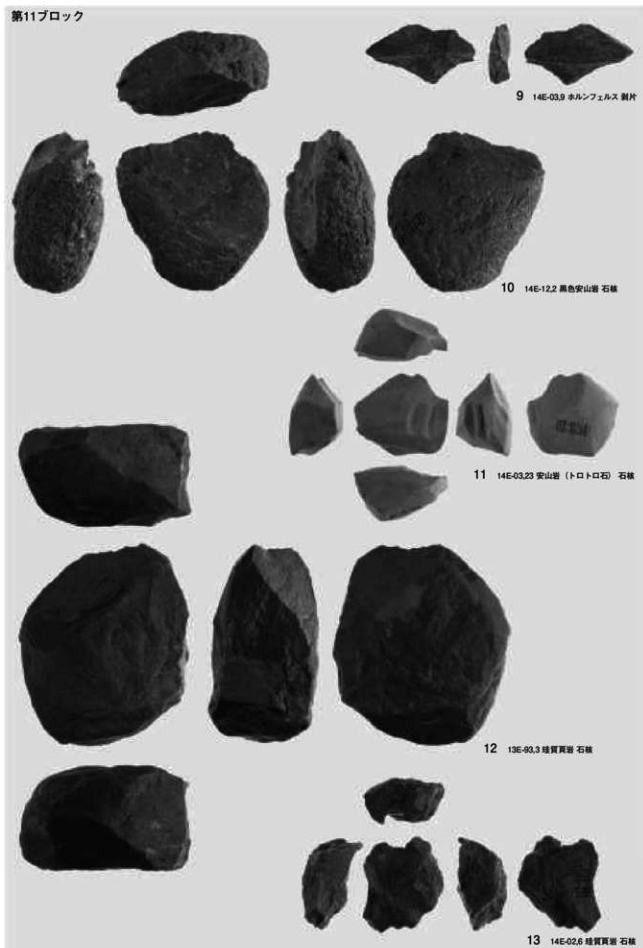
6 13E-75.5
ホルン
フェルス
剥片



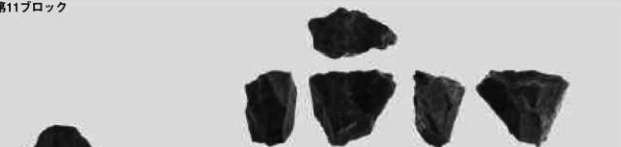
旧石器時代出土遺物(8)

清水川台遺跡(2)

第11ブロック



第11ブロック



14 14E-02.20 緑質頁岩 石核



15 14E-03.3 緑質頁岩 石核

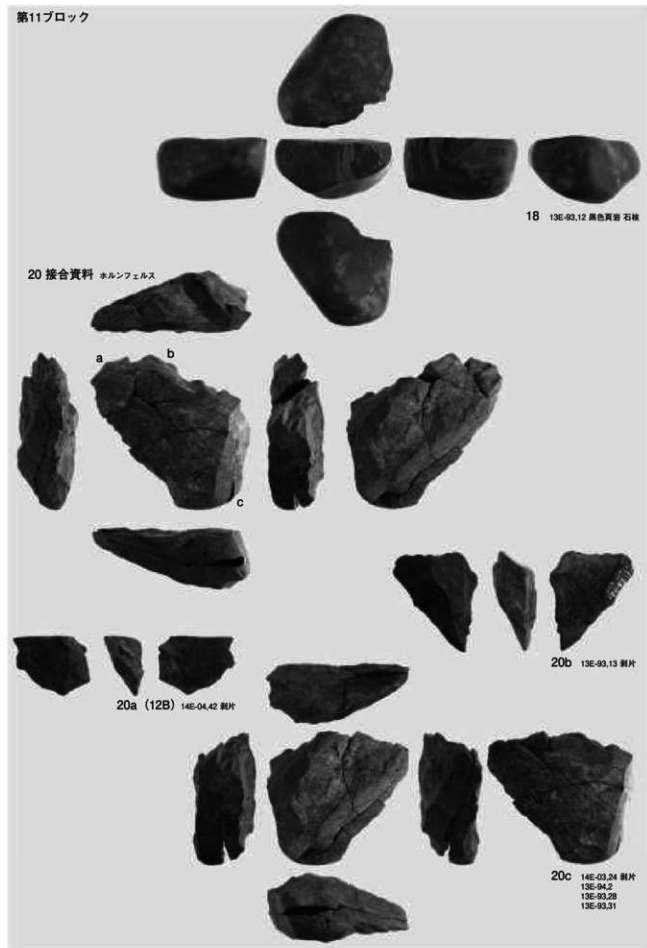


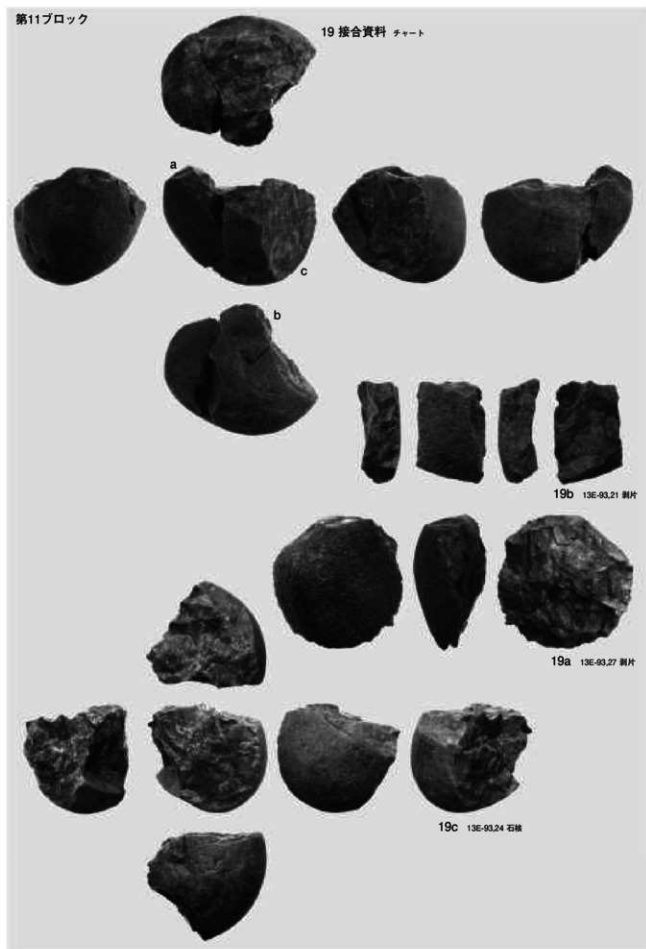
16 14E-02.66 チャート 石核



17 13E-93.4 黒色頁岩 石核

清水川台遺跡 (2)

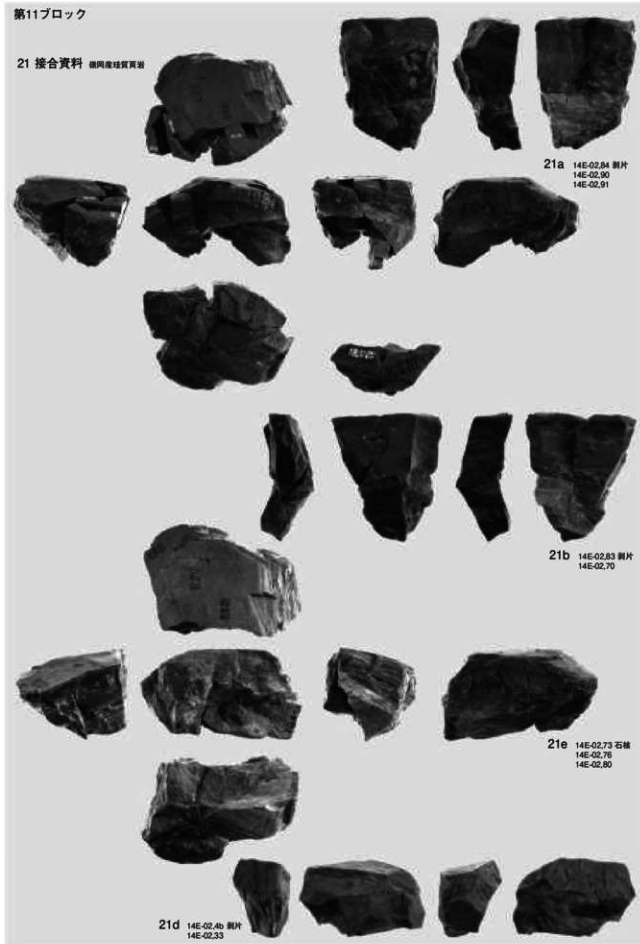


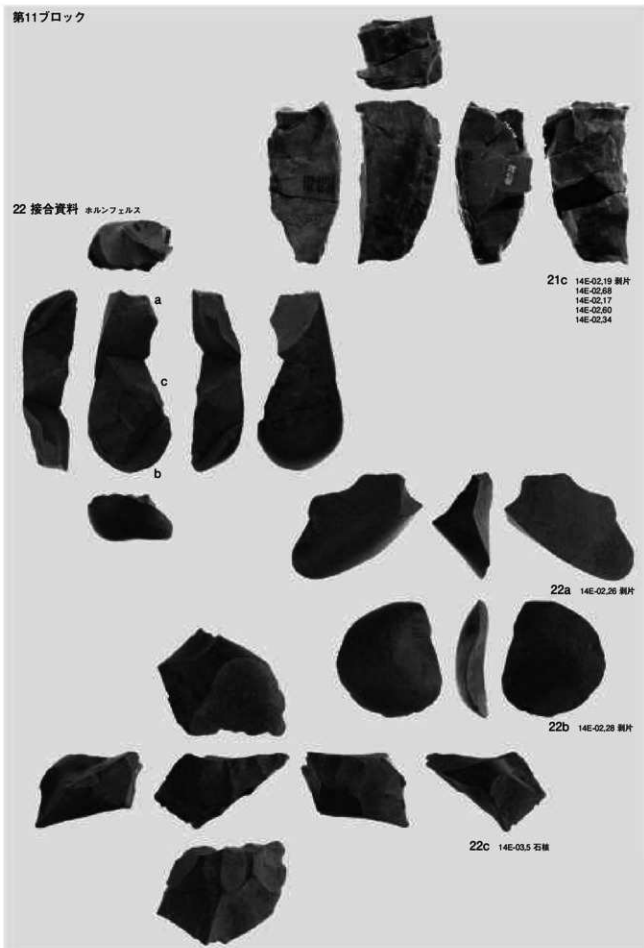


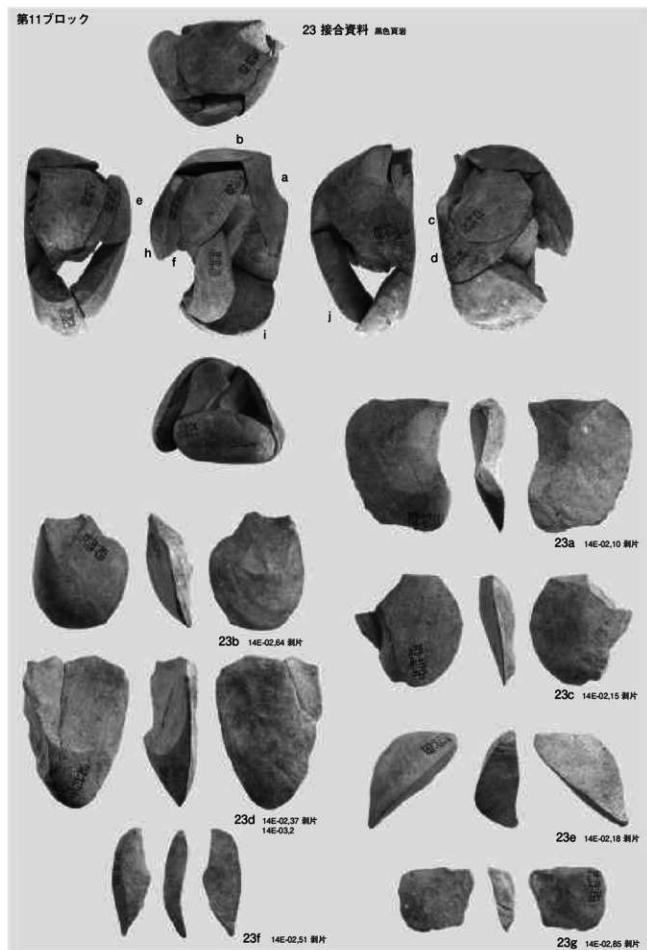
清水川台遺跡(2)

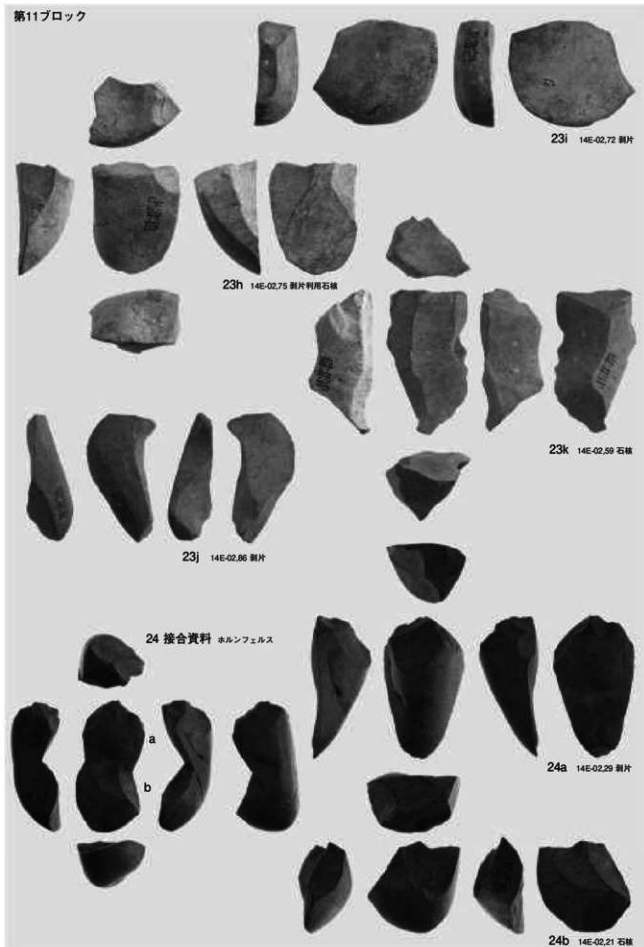
第11ブロック

21 接合資料 燧石(燧石質頁岩)



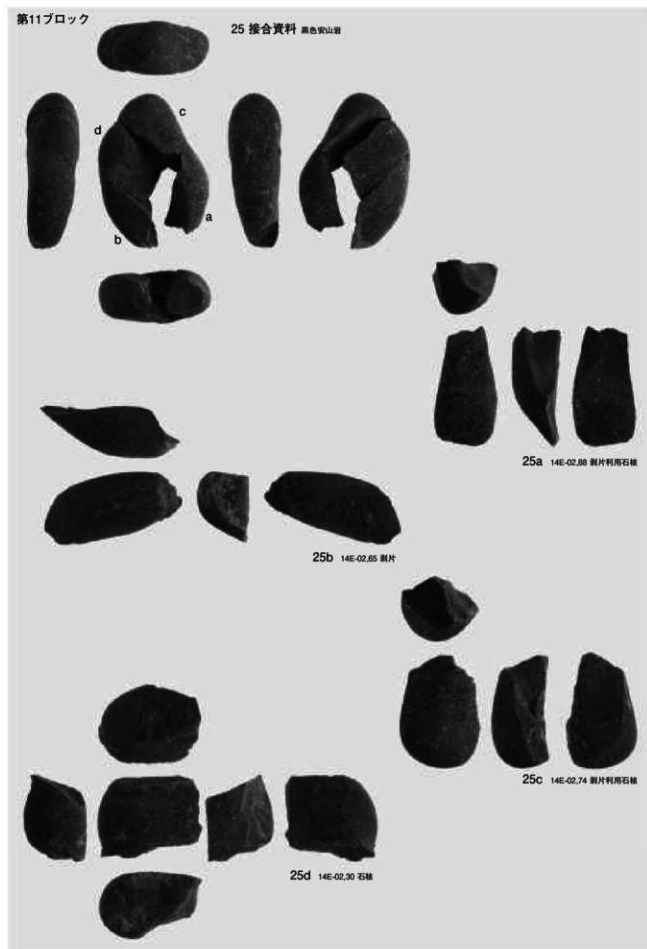






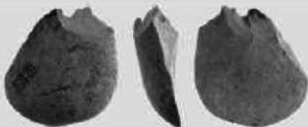
旧石器時代出土遺物 (16)

清水川台遺跡 (2)

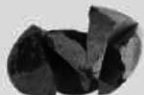


第11ブロック

26 接合資料 黒色頁岩



26a 14E-02.32 製片利用石核



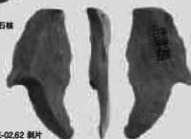
26b 14E-02.81 製片



26d 14E-12.9 製片

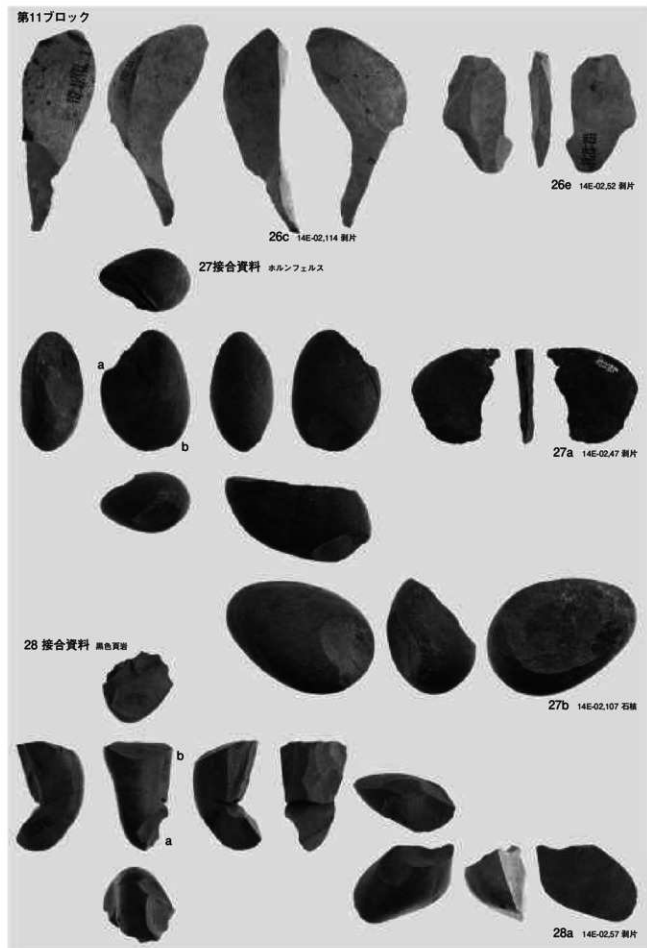


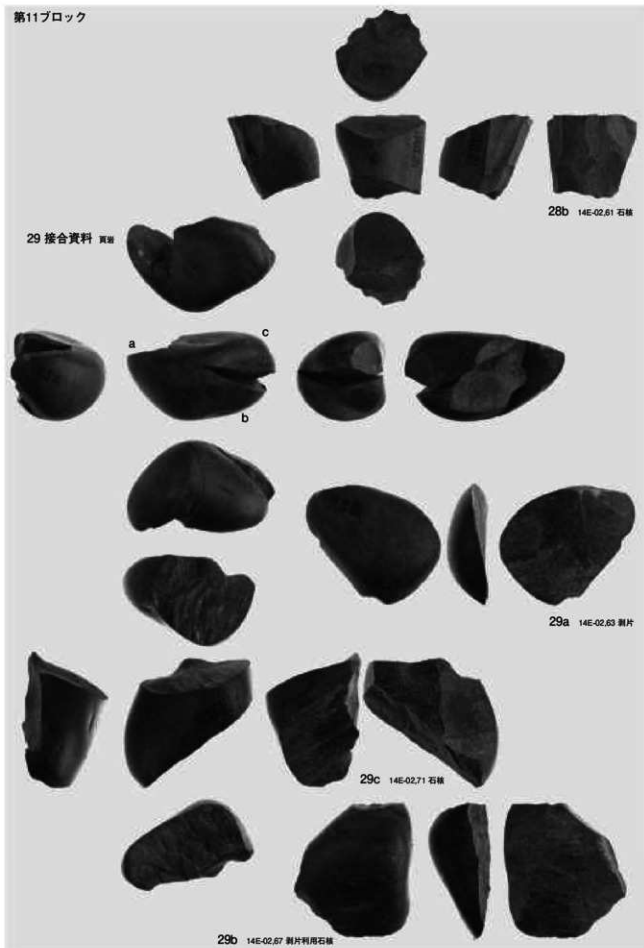
26g 14E-02.56 石核



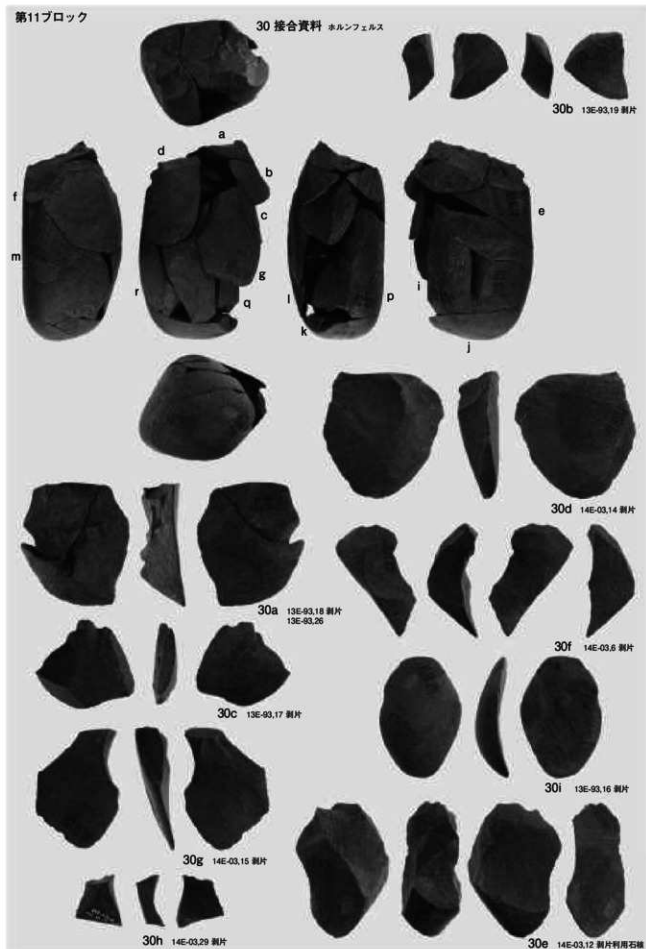
26f 14E-02.62 製片

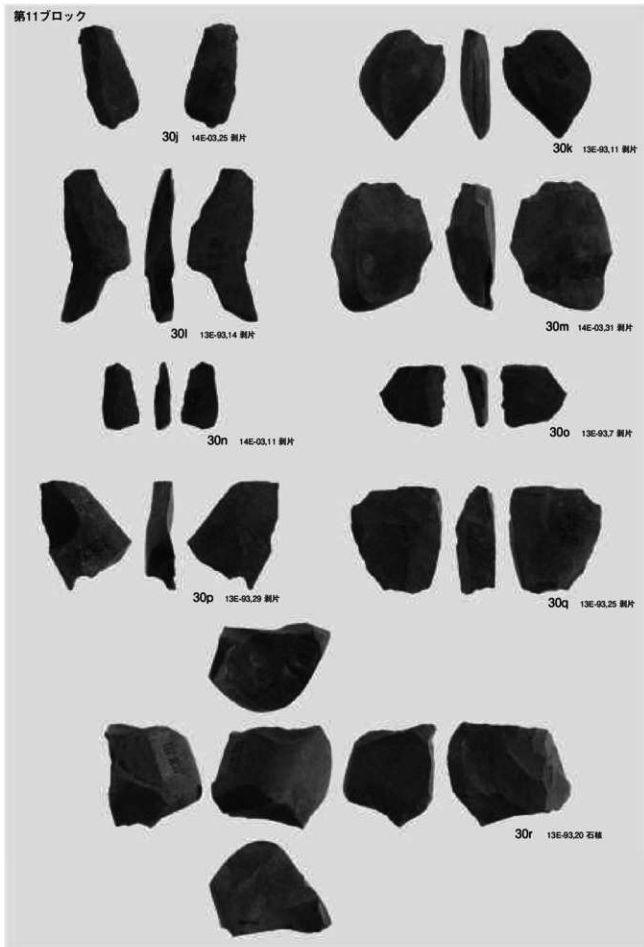
清水川台遺跡(2)



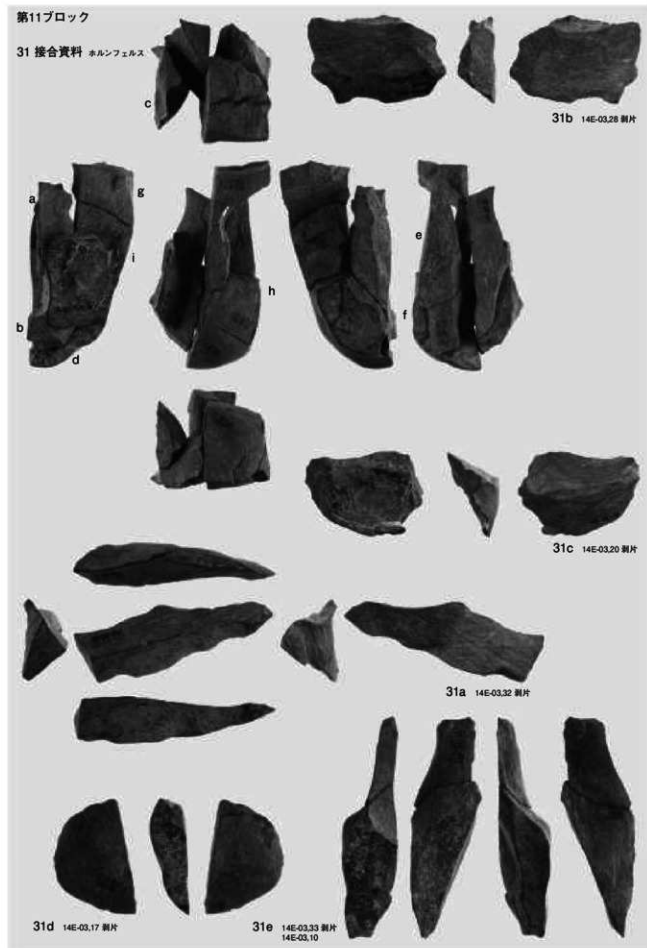


清水川台遺跡(2)





清水川台遺跡(2)



第11ブロック



31g 14E-03.30 割片

31h 14E-03.21 石核

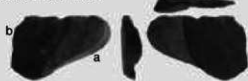


31i 14E-03.7 石核



31f 14E-03.19 割片

32 接合資料 黒色頁岩



32a 14E-03.16 割片



32b 14E-03.27 割片



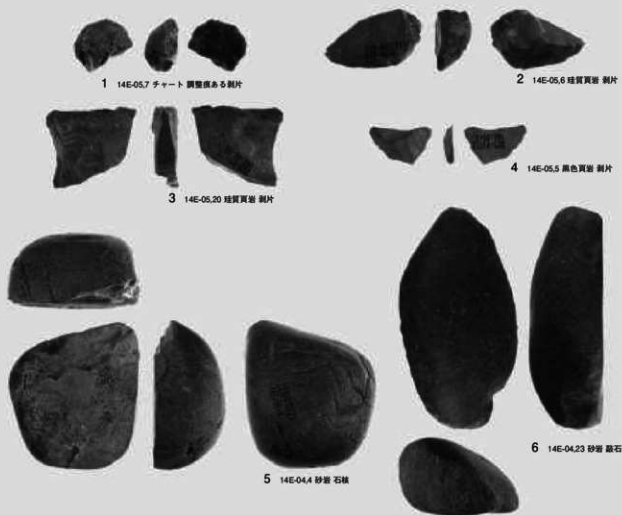
33 13E-03.9
安山岩(トコトコ石) 磨石

清水川台遺跡(2)

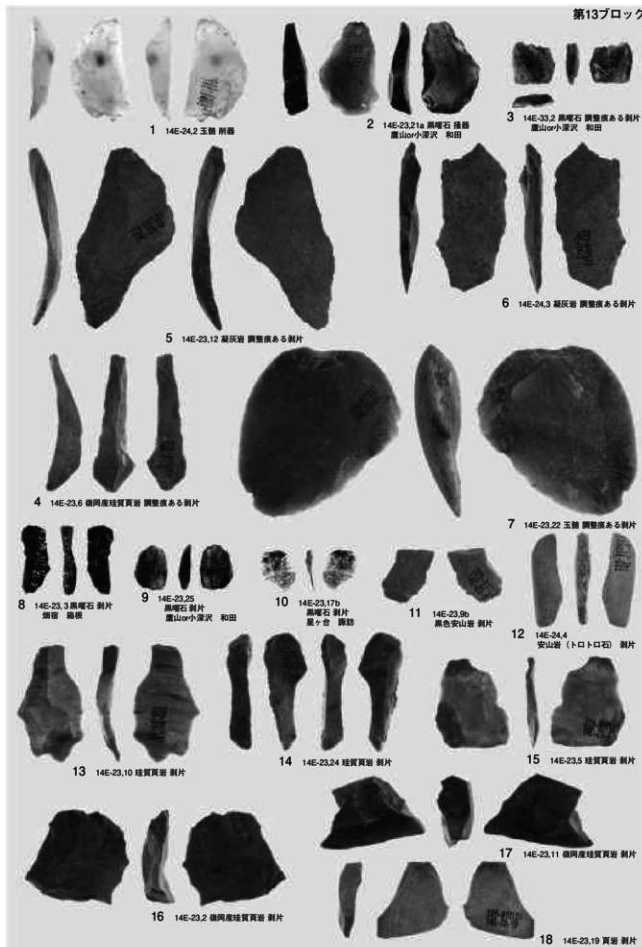
第11ブロック



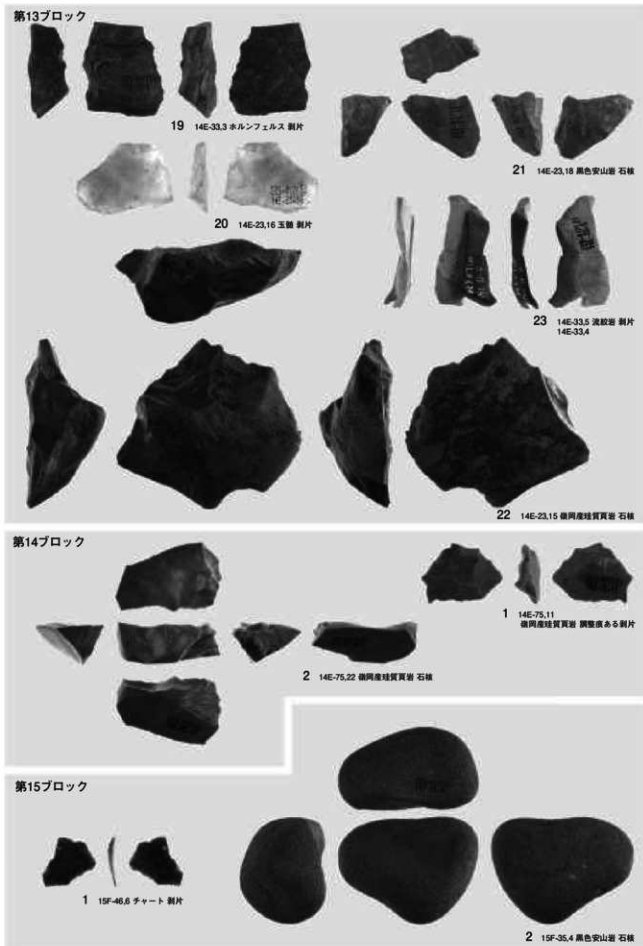
第12ブロック

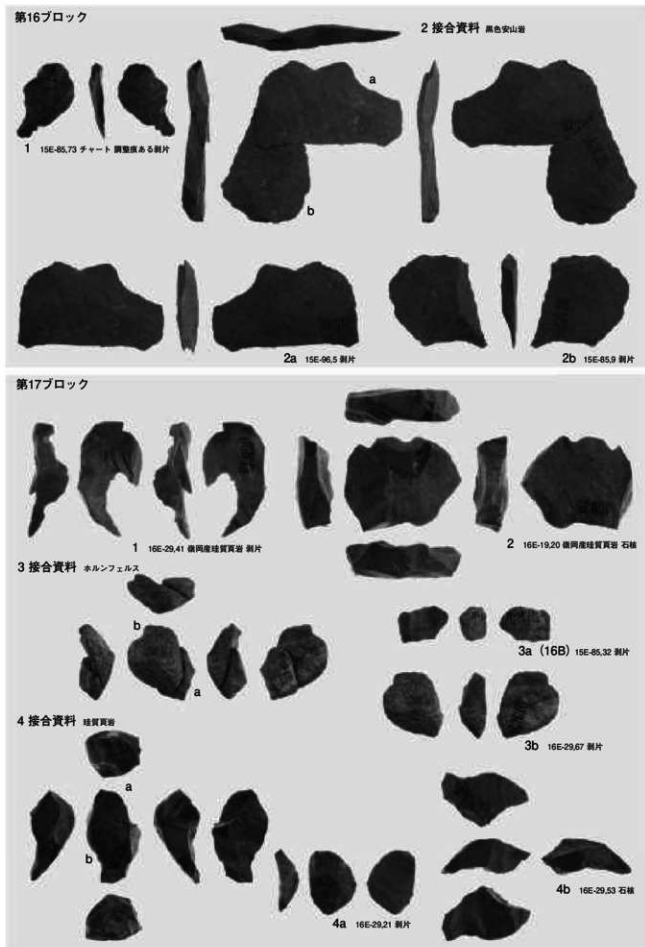


第13ブロック

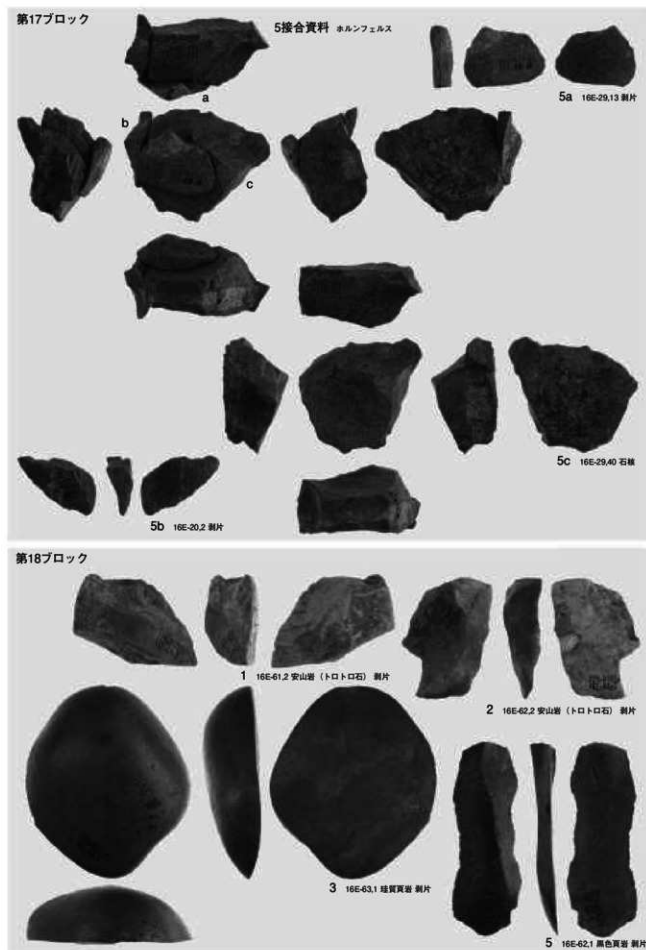


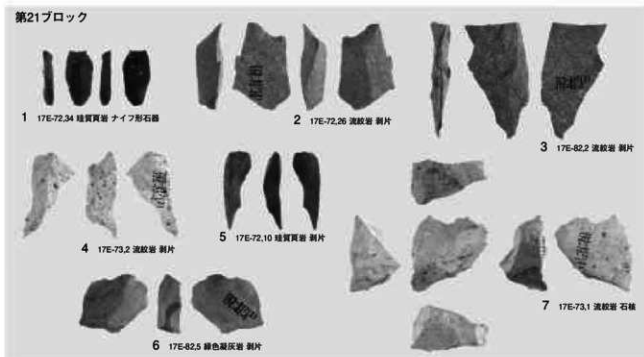
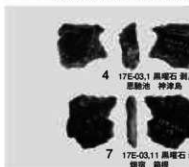
清水川台遺跡(2)



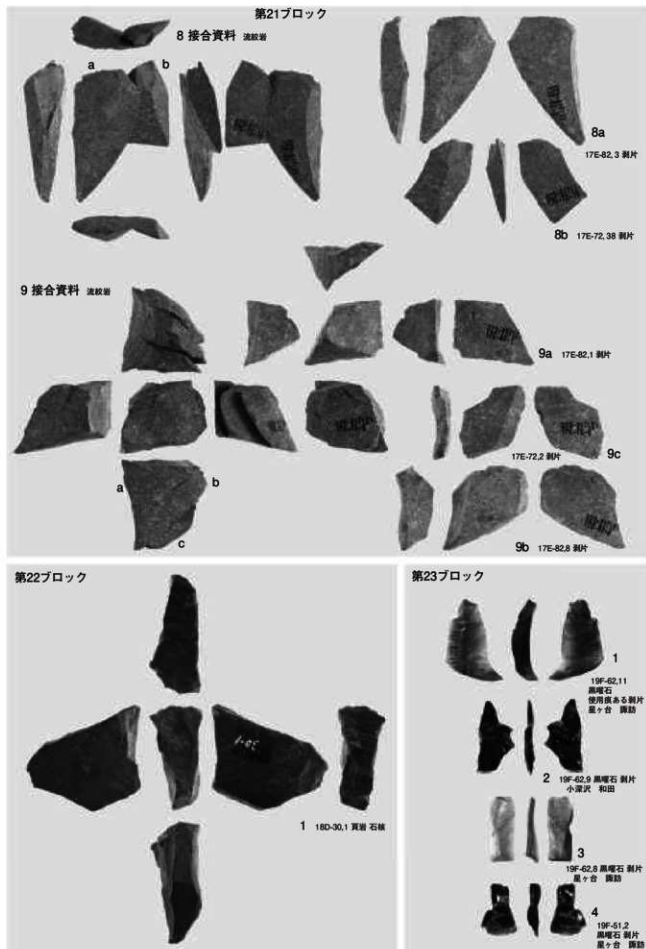


清水川台遺跡(2)





清水川台遺跡(2)

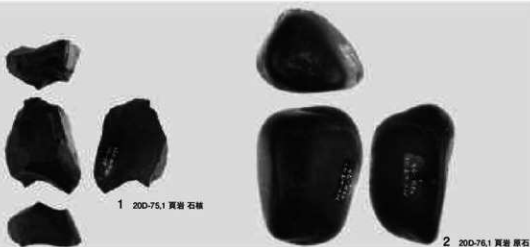


旧石器時代出土遺物(31)



清水川台遺跡(2)

第24ブロック



第25ブロック



単独出土



1 56T-7.1 黒曜石 台形石器
甘溝沢 高原山

3 21D-08.2 緑色凝灰岩
局部産黒石層調整製片



2 14E-25.5 頁岩 舟楫状石器

4 12D-53.2 黒曜石 調整済み5割片
高松沢 和田

5 出土地不明 流紋岩 調整済み5割片



6 17D-48.1 珸質頁岩 割片

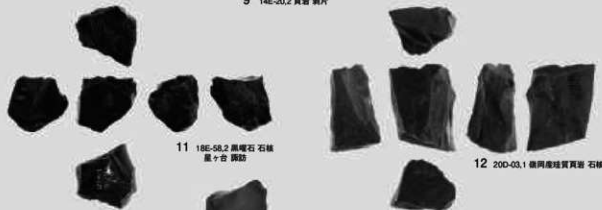
7 17E-35.1 頁岩 割片

8 15G-56.1 黒色頁岩 割片



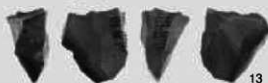
9 14E-20.2 頁岩 割片

10 14C-28.2 珸質頁岩 割片



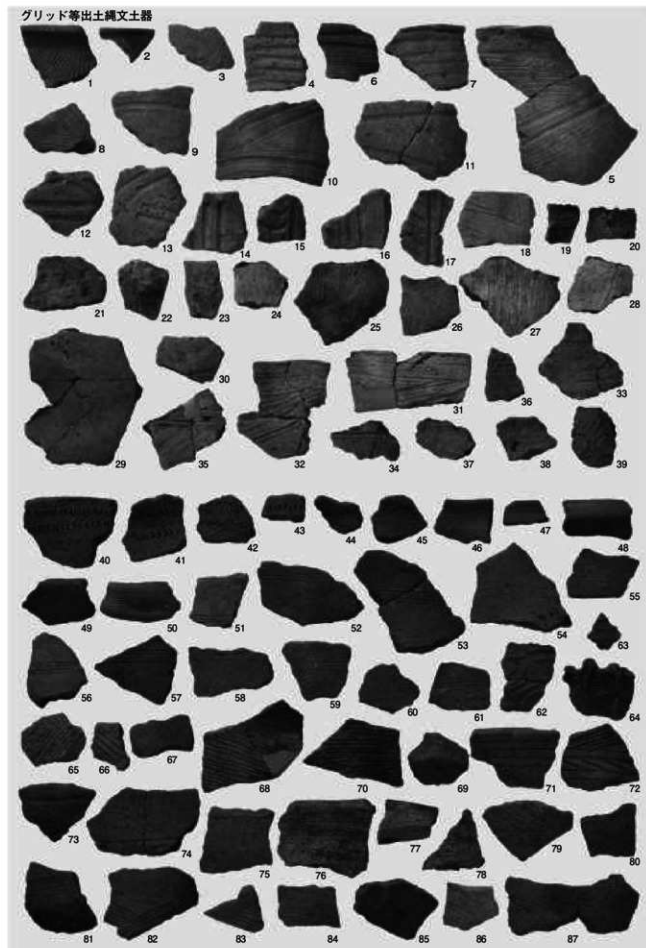
11 18E-58.2 黒曜石 石核
嵐ヶ台 諏訪

12 20D-03.1 珸質頁岩 石核

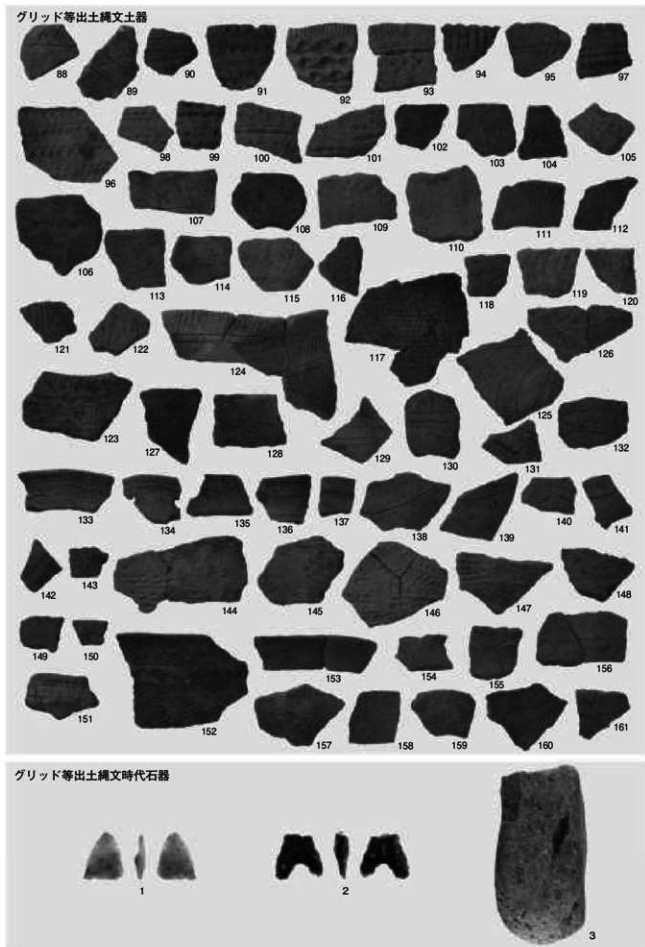


13 17D-58.1 頁岩 石核

清水川台遺跡(2)

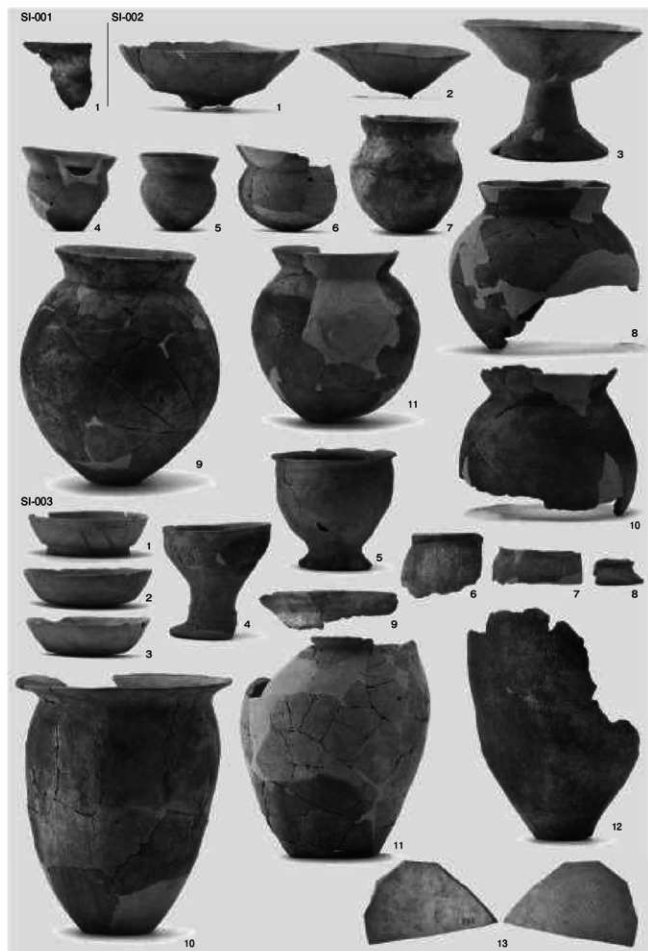


縄文時代出土遺物(1)

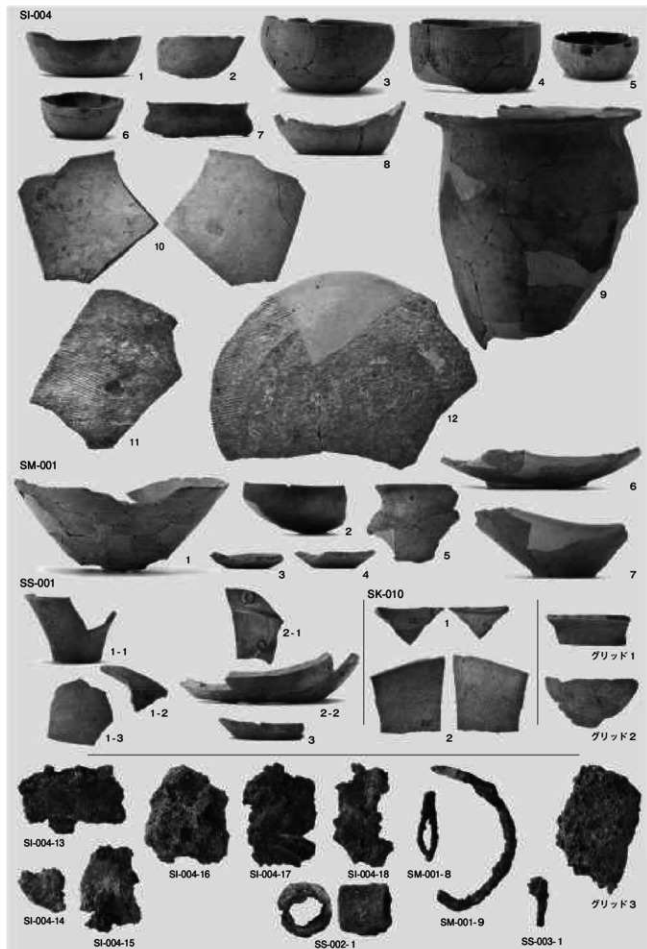


縄文時代出土遺物(2)

清水川台遺跡 (2)



古墳時代以降出土遺物 (1)



古墳時代以降出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしじょうづけやまいせき・やえむたいせき・しみずがわだいいせき（2）							
書名	袖ヶ浦市定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡（2）							
副書名	袖ヶ浦市の森工業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	金丸 誠・落合章雄・安井健一・黒沢 崇・牧 武尊							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2018年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
定使山遺跡	袖ヶ浦市代宿字 定使山463ほか	12229	040	35度 27分 5秒	140度 1分 46秒	20131003 ～ 20131225	6,000㎡	工業団地造成
八重門田遺跡	袖ヶ浦市久保田 代宿入会地字木ノ 根坂代11-1-5ほか	12229	041	35度 26分 45秒	140度 1分 39秒	20131202 ～ 20130324 ほか	35,870㎡	工業団地造成
清水川台遺跡 (2)	袖ヶ浦市久保田 代宿入会地字 二ツ池台9-1ほか	12229	017	35度 26分 45秒	140度 1分 55秒	20140602 ～ 20150318	50,270㎡	工業団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
定使山遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	旧石器時代遺物集中地点 土坑 土手		旧石器時代石器 縄文土器・石器			
八重門田遺跡	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 奈良・平安時代 近世	旧石器時代遺物集中地点 土坑 竪穴住居跡 方形・円形区画墓 塚		旧石器時代石器 縄文土器・石器 土師器・須恵器 石製品・土製品 金属製品・磁器		古墳時代中期の5軒 の竪穴住居跡から滑 石製模造品の製作関 連遺物が多量に出土。	
清水川台遺跡 (2)	包蔵地 集落跡	旧石器時代 縄文時代 古墳時代 奈良時代	旧石器時代遺物集中地点 土坑 竪穴住居跡・円墳		旧石器時代石器 縄文土器・石器 土師器・須恵器 金属製品			
要 約	<p>2期目の袖ヶ浦市の森工業団地の造成事業に伴い実施された発掘調査である。</p> <p>定使山遺跡は縄文時代の陥穴4基、近世以降と考えられる土手1条が検出されたが、遺構の広がりには認められず、確認調査で終了した。遺構外から縄文土器や土師器、近世銭貨が出土したが、遺構と遺物の数量は周辺の遺跡と比較して極めて少ない。</p> <p>八重門田遺跡は旧石器時代では10か所の石器集中地点が検出された。上層では縄文時代の竪穴を含む土坑や古墳時代前半期を中心とする集落跡、奈良時代の竪穴住居跡と墳墓群が少数検出された。古墳時代中期の竪穴住居跡から白玉を主体とする滑石製模造品の製作関連遺物が多量に出土した。</p> <p>清水川台遺跡（2）は旧石器時代では、石器集中出土地点は台地の縁辺部に多く分布し、Ⅲ層～Ⅴ層を中心とする文化層とⅣ層～Ⅵ層を中心とする文化層に大別できた。上層では遺構の集中は見られなかったが縄文時代の土坑、古墳時代中期の集落と円墳、奈良時代の集落と方形区画墓などを検出した。</p> <p>なお、八重門田遺跡と清水川台遺跡（2）出土の黒曜石製石器については蛍光X線分析による産地推定を実施した。</p>							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第26集

袖ヶ浦市定使山遺跡・八重門田遺跡・清水川台遺跡（2）

— 袖ヶ浦権の森工業団地整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成30年3月28日発行

編集・発行	千葉県教育委員会
	千葉県中央区市場町1-1
印刷	株式会社白樺写真工芸
	千葉県稲毛区山王町102-5
